愛媛大学埋蔵文化財調査報告　XXVI-3

文京遺跡 Ⅶ-3

― 文京遺跡16次調査Ａ区 ―

愛媛大学埋蔵文化財調査室

２０１４

序　　文

愛媛大学は，松山市および愛媛県内各所に大小のキャンパスをもち，敷地総面積は464ヘクタールに及び，本部事務局と４つの学部が所在する城北団地には文京遺跡，農学部と附属高等学校がある樽味団地には樽味遺跡，国際交流会館がある鷹子団地では鷹子遺跡，教職員宿舎のある北吉井団地では桑原西稲葉遺跡，学生寮のある御幸団地では御幸遺跡等，数多くの遺跡をかかえている。愛媛大学では，1987年に愛媛大学埋蔵文化財調査委員会の基に埋蔵文化財調査室を設置し，校舎建設で埋蔵文化財が破壊される場合には発掘調査を実施し記録保存するとともに，基幹整備等の諸工事に伴っては埋蔵文化財に影響が及ばない設計・計画を施設基盤部等と協議する等，埋蔵文化財の保護に努めてきた。

そうした発掘調査の記録は調査報告書として刊行してきたが，1994・1996・1997年度に実施した工学部校舎（Ⅰ～Ⅲ期）工事に伴う文京遺跡12・14・16次調査については，膨大な量の出土遺物と，その後も継続された校舎建設等に伴う発掘調査のため，出土した遺構と遺物が相対的に少ない文京遺跡13・18・20・23・25次調査，樽味遺跡4～8次調査，桑原西稲葉遺跡3～5次調査の報告書の刊行を先行させ，調査報告書の刊行は先送りすることとしていた。

しかし，2011年以降，グリーンゾーンの整備計画が本格化するに伴い，基礎資料である12・14・16次調査成果を調査報告書として刊行する必要が生じてきた。そこで，『文京遺跡Ⅶ』として一括し，第１分冊で12次調査，第２分冊で14次調査，第３分冊として16次調査A区，第４分冊として同B区の調査記録を報告し，第５分冊で自然科学的分析と調査成果を総括する中期計画をたて，調査報告書の刊行に向けた整理作業を再開した。

本書は，その中の第３分冊となる文京遺跡16次調査A区の記録である。文京遺跡は，これまでの51次にわたる全面調査で，弥生時代における西日本屈指の大規模集落であることが判明してきているが，16次調査A区は，その中心部分の密集居住域の一角に当たり，数多くの竪穴建物群が発見されている。また，多くの弥生土器に混じり，東南部九州系の土器や朝鮮系無文土器があり，ガラス小玉，碧玉製管玉，瑪瑙製の大型管玉，滑石製指輪，鉄器，分銅形土製品が出土している。中でも，数多くの東南部九州系の土器の出土や，朝鮮系無文土器，滑石製指輪，全国でも３例目となる瑪瑙製の大型管玉は，大規模密集型集落である文京遺跡が国内外の交流の拠点であったことを示す重要な資料である。

引き続き他の分冊を刊行していく計画であるが，発掘調査から記録・遺物類の整理，そして本書の刊行にいたるまでには，多くの方々の協力を得た。それらの方々に深く感謝するとともに，本書および報告資料が多くの人々に活用され，文京遺跡がさらに広く理解され活用されることを祈念する。

2013年９月１日

愛媛大学埋蔵文化財調査室長
室長　田　崎　博　之

例　　言

1．本書は，愛媛大学埋蔵文化財調査室が1997（平成9）年度に実施した愛媛県松山市文京町３番の愛媛大学工学部校舎新営第Ⅲ期工事（その1）に伴う文京遺跡16次調査A区の正式調査報告書である。
2．愛媛大学工学部校舎新営工事に伴う発掘調査は，1994年度のⅠ期工事に伴う12次調査，1996年度のⅡ期工事に伴う14次調査，1997年度のⅢ期工事に伴う16次調査に分けて実施した。これらの調査区は隣接し一連の遺跡の広がりとして捉えることができる。そこで，工学部校舎新営工事に伴う発掘調査の正式報告を『文京遺跡Ⅶ』とし，12次調査をⅦ-1分冊，14次調査をⅦ-2分冊，16次調査A区をⅦ-3分冊，同B区をⅦ-4分冊，自然科学的分析の報告と調査の総括をまとめるⅦ-5分冊として報告することとした。本書は，そのⅦ-3分冊であり，愛媛大学埋蔵文化財調査報告ＸＸⅥ-3に当たる。
3．本書で示した方位・標高値は，日本測地系平面直角座標Ⅳ系にしたがっている。
4．土色と遺物の色調は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1976）に準拠したが，本文中ではマンセル記号は省略した。
5．本書に使用した遺構実測図は，田崎博之・宮崎直栄・佐川殉・平塚景子・松田ちづる・田中久美子・坂元恒太が作成し，宮崎・田中いづみ・矢野宜子が浄写を行った。
6．遺物実測は，田崎・田中・下山貴生が作成し，田中が浄写を行った。また，本書巻末の遺構観察表（表3）と遺物観察（表4～8）は，田崎・田中が共同して作成した。
7．本書で使用した遺構・遺物写真は，田崎・田中が撮影した。
8．本書の執筆は，Ⅱ章8節を田中が，他は田崎が執筆した。
9．本書の編集は，田崎が行った。
10．本書に報告した文京遺跡16次調査A区にかかわる記録類・出土遺物は，愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管されている。

本 文 目 次

序　説

1　調査にいたる経緯と経過 …… 1
2　整理作業・報告書刊行の経過 …… 2
3　調査区割りの設定と出土遺構・遺物の記録方法 …… 2
（1）基本層序及び調査区の設定
（2）出土遺構・遺物の記録の方法と保管

Ⅰ　層序と遺構・遺物の概要 …… 5
1　層序の概要 …… 5
2　出土遺構と遺物の概要 …… 8
（1）出土遺構の概要
（2）出土遺物の概要

Ⅱ　出土遺構と遺物の記録
1　竪穴建物 ……11
4号竪穴建物(SC-4) …… (11)　5号竪穴建物(SC-5)……(13)　6号竪穴建物(SC-6)……(15)
8号竪穴建物(SC-8) …… (16)　9号竪穴建物(SC-9)……(17)　12号竪穴建物(SC-12)……(19)
25号竪穴建物(SC-25) …… (20)　26号竪穴建物(SC-26)……(27)　32号竪穴建物(SC-32)……(28)
33号竪穴建物(SC-33) …… (33)　37号竪穴建物(SC-37)……(51)　39号竪穴建物(SC-39)……(52)
41号竪穴建物(SC-41) …… (58)　42号竪穴建物(SC-42)……(58)　43号竪穴建物(SC-43)……(60)
44号竪穴建物(SC-44) …… (62)　47号竪穴建物(SC-47)……(63)　69号竪穴建物(SC-69)……(66)
71号竪穴建物(SC-71) …… (69)　78号竪穴建物(SC-78)……(71)　84号竪穴建物(SC-84)……(73)
92号竪穴建物(SC-92) …… (79)　97号竪穴建物(SC-97)……(81)　98号竪穴建物(SC-98)……(82)
99号竪穴建物(SC-99) …… (84)　100号竪穴建物(SC-100)…(85)　495号竪穴建物(SC-495)…(87)
506号竪穴建物(SC-506) … (87)　516号竪穴建物(SC-516)…(90)　517号竪穴建物(SC-517)…(92)
519号竪穴建物(SC-519) … (96)　536号竪穴建物(SC-536)…(97)　544号竪穴建物(SC-544)…(98)
546号竪穴建物(SC-546)…(103)
2　掘立柱建物 ……105
74号掘立柱建物(SB-74)……(105)　548号掘立柱建物(SB-548)…(107)
549号掘立柱建物(SB-549)…(109)　551号掘立柱建物(SB-551)…(111)
3　柵列 ……113
552号柵列(SA-552)…(113)
4　溝 ……115
10号溝(SD-10)……(115)　14号溝(SD-14)……(120)　15号溝(SD-15)……(122)
16号溝(SD-16)……(123)　20号溝(SD-20)……(123)　21号溝(SD-21)……(126)
29号溝(SD-29)……(126)　36号溝(SD-36)……(135)　45号溝(SD-45)……(139)
55号溝(SD-55)……(140)　62号溝(SD-62)……(141)　72号溝(SD-72)……(142)
73号溝(SD-73)……(143)　79号溝(SD-79)……(144)　91号溝(SD-91)……(144)
505号溝(SD-505)…(144)　508号溝(SD-508)…(146)　509号溝(SD-509)…(146)
512号溝(SD-512)…(149)　520号溝(SD-520)…(150)　557号溝(SD-557)…(151)

5　土壙 ……152
1号土壙(SK-1)……(152)　2号土壙(SK-2)……(157)　3号土壙(SK-3)……(160)
7号土壙(SK-7)……(160)　11号土壙(SK-11)……(161)　13号土壙(SK-13)……(163)
17号土壙(SK-17)……(164)　18号土壙(SK-18)……(164)　19号土壙(SK-19)……(166)
23号土壙(SK-23)……(166)　24号土壙(SK-24)……(168)　27号土壙(SK-27)……(168)
28号土壙(SK-28)……(169)　30号土壙(SK-30)……(169)　31号土壙(SK-31)……(169)
34号土壙(SK-34)……(170)　35号土壙(SK-35)……(170)　38号土壙(SK-38)……(170)
46号土壙(SK-46)……(172)　48号土壙(SK-48)……(173)　49号土壙(SK-49)……(173)
50号土壙(SK-50)……(176)　51号土壙(SK-51)……(177)　52号土壙(SK-52)……(177)
53号土壙(SK-53)……(177)　54号土壙(SK-54)……(179)　56号土壙(SK-56)……(179)
59号土壙(SK-59)……(179)　60号土壙(SK-60)……(181)　61号土壙(SK-61)……(181)
63号土壙(SK-63)……(182)　64号土壙(SK-64)……(182)　65号土壙(SK-65)……(182)
66号土壙(SK-66)……(183)　67号土壙(SK-67)……(183)　68号土壙(SK-68)……(184)
70号土壙(SK-70)……(186)　76号土壙(SK-76)……(189)　77号土壙(SK-77)……(189)
80号土壙(SK-80)……(191)　81号土壙(SK-81)……(191)　82号土壙(SK-82)……(191)
83号土壙(SK-83)……(193)　85号土壙(SK-85)……(194)　86号土壙(SK-86)……(194)
87号土壙(SK-87)……(195)　88号土壙(SK-88)……(195)　90号土壙(SK-90)……(196)
93号土壙(SK-93)……(196)　94号土壙(SK-94)……(196)　95号土壙(SK-95)……(196)
96号土壙(SK-96)……(197)　324号土壙(SK-324)…(197)　409号土壙(SK-409)…(197)
410号土壙(SK-410)…(198)　411号土壙(SK-411)…(198)　413号土壙(SK-413)…(198)
414号土壙(SK-414)…(198)　427号土壙(SK-427)…(198)　435号土壙(SK-435)…(199)
439号土壙(SK-439)…(199)　443号土壙(SK-443)…(199)　444号土壙(SK-444)…(200)
477号土壙(SK-477)…(200)　494号土壙(SK-494)…(200)　496号土壙(SK-496)…(200)
501号土壙(SK-501)…(202)　503号土壙(SK-503)…(202)　504号土壙(SK-504)…(202)
507号土壙(SK-507)…(203)　510号土壙(SK-510)…(203)　511号土壙(SK-511)…(203)
514号土壙(SK-514)…(207)　515号土壙(SK-515)…(207)　518号土壙(SK-518)…(208)
521号土壙(SK-521)…(208)　529号土壙(SK-529)…(208)　530号土壙(SK-530)…(209)
531号土壙(SK-531)…(209)　535号土壙(SK-535)…(209)　540号土壙(SK-540)…(210)
541号土壙(SK-541)…(210)　543号土壙(SK-543)…(215)　545号土壙(SK-545)…(216)
547号土壙(SK-547)…(216)　553号土壙(SK-553)…(216)　558号土壙(SK-558)…(218)
6　土器溜まり ……219
40号土器溜まり(SX-40)……(219)　57号土器溜まり(SX-57)……(219)
58号土器溜まり(SX-58)……(220)　498号土器溜まり(SX-498)…(220)
500号土器溜まり(SX-500)…(221)
7　柱穴・小穴 ……222
SP-106…(222)　SP-108…(222)　SP-109…(222)　SP-116…(222)
SP-119…(222)　SP-120…(222)　SP-129…(222)　SP-130…(225)
SP-135…(225)　SP-148…(225)　SP-151…(225)　SP-154…(225)
SP-155…(225)　SP-157…(225)　SP-163…(226)　SP-164…(226)
SP-166…(227)　SP-167…(227)　SP-169…(227)　SP-174…(227)
SP-176…(227)　SP-180…(227)　SP-181…(227)　SP-198…(228)
SP-200…(228)　SP-201…(228)　SP-203…(228)　SP-211…(228)
SP-212…(228)　SP-220…(228)　SP-224…(228)　SP-233…(228)

SP-234…(229)　SP-235…(229)　SP-236…(229)　SP-244…(229)
SP-248…(229)　SP-266…(229)　SP-270…(229)　SP-272…(230)
SP-273…(230)　SP-278…(230)　SP-281…(230)　SP-319…(230)
SP-325…(230)　SP-328…(230)　SP-343…(230)　SP-345…(231)
SP-355…(231)　SP-356…(231)　SP-363…(231)　SP-365…(231)
SP-368…(231)　SP-369…(232)　SP-373…(232)　SP-377…(232)
SP-382…(232)　SP-391…(233)　SP-400…(233)　SP-403…(233)
SP-412…(233)　SP-422…(233)　SP-428…(233)　SP-445…(233)
SP-446…(233)　SP-453…(233)　SP-468…(234)　SP-471…(234)
SP-473…(234)　SP-476…(234)　SP-480…(234)　SP-485…(234)

8　Ⅲ層出土遺物 ……235
【調査抄録】 ……248

挿 図 目 次

図１　文京遺跡16次調査A区位置図
（縮尺 1/3,500）…… 3
図２　文京遺跡16次調査A区主要遺構配置図
（縮尺 1/200）…… 4–5
図３　文京遺跡におけるⅣ層上面の微起伏復原
（外山秀一氏作成，縮尺 1/4,500）…… 5
図４　文京遺跡16次調査区土層断面図
（縮尺 1/100）…… 6–7
図５　SC-4遺構実測図（縮尺 1/50）……11
図６　SC-4出土土器実測図（1・2：掘り形埋土，3～9：上部Ⅲ層部分，縮尺1/3）……12
図７　SC-4出土石器実測図（縮尺 2/3，1/2）…13
図８　SC-4出土土製紡錘車実測図（縮尺 1/2）
……13
図９　SC-5・6遺構実測図（縮尺　1 /50）……14
図10　SC-5出土土器実測図（1:掘り形埋土，2～9:上部Ⅲ層部分，縮尺1/3）……14
図11　SC-6上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）……15
図12　SC-8・9・12遺構実測図（縮尺 1/50）…16
図13　SC-8出土土器実測図（1・2：掘り形埋土，3～8：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……17
図14　SC-8出土石器実測図（縮尺 1/2）……17
図15　SC-9上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）……18
図16　SC-25・41遺構実測図（縮尺 1/50）……21
図17　SC-25掘り形埋土出土土器実測図
（縮尺 1/3）……22
図18　SC-25内SK-527（1 ～ 8），SP-223（9・10）出土土器実測図（縮尺 1/3）……23
図19　SC-25内SK-527出土ガラス小玉実測図
（倍尺 2倍）……23
図20　SC-25出土鉄器実測図（縮尺 2/3）……23
図21　SC-25出土石器実測図
（1：SC-25内SK-527，2：SC-25内SP-223，3：掘り形埋土，4：SC-25内SP-234，縮尺 1/2，1/4）……24
図22　SC-25上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）……25
図23　SC-26，SK-28遺構実測図（縮尺 1/50）…26
図24　SC-26，SP-119出土土器実測図
（1･2:SC-26掘り形埋土，3:SP-119，4～7:SC-26上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……27
図25　SC-26出土石器実測図（縮尺 1/2）……28
図26　SC-32遺構実測図（縮尺 1/50）……29
図27　SC-32掘り形埋土出土土器実測図
（縮尺 1/3）……30
図28　SC-32内SK-89埋土出土土器実測図

（縮尺 1/3）……30
図29　SC-32上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）……31
図30　SC-32上部Ⅲ層部分出土土器拓影
（縮尺 1/3）……31
図31　SC-32出土石器実測図（1・3：掘り形埋土，2：上部Ⅲ層部分，4：SC-32内SP-322，縮尺 2/3，1/2）……32
図32　SC-33遺構実測図1（縮尺 1/50）
……34
図33　SC-33遺構実測図2（縮尺 1/50）
……35
図34　SC-33上部土器群出土土器実測図1
（縮尺 1/3）……36
図35　SC-33上部土器群出土土器実測図2
（縮尺 1/3）……38
図36　SC-33上部土器群出土土器実測図3
（縮尺 1/3）……39
図37　SC-33上部土器群出土土器実測図4
（縮尺 1/3）……40
図38　SC-33上部土器群出土土器実測図5
（縮尺 1/3）……41
図39　SC-33上部土器群出土土器実測図6
（縮尺 1/3）……42
図40　SC-33出土土器実測図（1 ～ 9:掘り形埋土，10 ～ 12:床面直上，13 ～ 33:上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……44
図41　SC-33内SK-513，SP-441・443・445・447・480ほか出土土器実測図（縮尺 1/3）
……46
図42　SC-33出土石器実測図1（1・3 ～ 6：上部土器群，2：床面，7：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/2，2/3）……47
図43　SC-33出土石器実測図2（縮尺 1/2）……48
図44　SC-33出土石器実測図3（SC-33内SK-513，縮尺 1/4）……49
図45　SC-33出土ガラス小玉，瑪瑙製管玉，緑色凝灰岩製管玉ほか実測図（倍尺2倍）……50
図46　SC-37遺構実測図（縮尺 1/50）……51
図47　SC-37内SP-226，SC-37上部Ⅲ層出土土器実測図（縮尺 1/3）……51
図48　SC-39，SK-435・439・494・529・530 遺構実測図（縮尺 1/50）……53
図49　SC-39掘り形埋土出土土器実測図1
（縮尺 1/3）……54
図50　SC-39掘り形埋土出土土器実測図2
（縮尺 1/3）……55
図51　SC-39掘り形埋土出土土器実測図3
（縮尺 1/3）……56
図52　SC-39上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）……56
図53　SC-39出土石器実測図（縮尺 2/3，1/2）…57
図54　SC-41出土土器実測図（1:掘り形埋土，2･3:上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……58
図55　SC-42・43遺構実測図（縮尺 1/50）……59
図56　SC-42及びSC-42内SP-457出土土器実測図（1・2：SC-42掘り形埋土，3：SP-457，縮尺 1/3）……60
図57　SC-43，SK-496出土土器実測図（1：掘り形埋土，3：上部Ⅲ層部分，2・4 ～ 7：SK-496，縮尺 1/3）……61
図58　SC-44・536，SK-535遺構実測図
（縮尺 1/50）……62
図59　SC-44出土土器実測図（縮尺 1/3）……63
図60　SC-47遺構実測図（縮尺 1/50）……64
図61　SC-47掘り形埋土，SK-75，SP-290出土土器実測図（縮尺 1/3）……64
図62　SC-47上部Ⅲ層部分出土土器実測図1
（縮尺 1/3）……65
図63　SC-47上部Ⅲ層部分出土土器実測図2
（縮尺 1/3）……66
図64　SC-69，SK-70，SP-278遺構実測図
（縮尺 1/50）……67
図65　SC-69掘り形埋土，SP-279，SC-69上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺 1/3）……68
図66　SC-71・519，SP-373遺構実測図
（縮尺 1 /50）……69
図67　SC-71掘り形埋土及びSP-415出土土器実測図（縮尺 1/3）……70
図68　SC-71上部Ⅲ層部分出土土製紡錘車実測図
（縮尺1/2）……70
図69　SC-71・519上部Ⅲ層部分出土土器実測図（1：SC-71・519境界部分，2 ～ 9：SC-71上部Ⅲ層部分，10･11：SC-519上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……70
図70　SC-78遺構実測図（縮尺 1/50）……72

図71　SC-78，SP-270出土土器実測図（縮尺 1/3）……73
図72　SC-84，SK-82・83・93遺構実測図（縮尺 1/50）……74
図73　SC-84出土土器実測図(1 ～ 10:掘り形埋土，11 ～ 28：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3)……75
図74　SC-84内SK-524･525出土土器実測図（1･2:SK-524，3：SK-525，縮尺 1/3）……76
図75　SC-84出土石製指輪実測図（縮尺 1/1)…76
図76　SC-84出土石器実測図（1・2・4：掘り形埋土，3：SC-84内SK-524，5：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/2，2/3)……77
図77　SC-92，SK-503，SP-428遺構実測図（縮尺 1/50）……79
図78　SC-92上部Ⅲ層出土土器実測図（縮尺 1/3)……79
図79　SC-97・506，SK-504，SP-355遺構実測図（縮尺 1/50）……80
図80　SC-97出土土器実測図（縮尺 1/3)……81
図81　SC-98・99，SK-531，SP-438遺構実測図（縮尺 1/50）……83
図82　SC-98・99出土土器実測図（1:SC-98内SP-344，2:SC-98上部Ⅲ層部分，3･4:SC-99掘り形埋土，縮尺 1/3)……84
図83　SC-98・99出土石器実測図（1：SC-98，2：SC-99，縮尺 1/2)……85
図84　SC-100，SK-501遺構実測図（縮尺 1/50）……86
図85　SC-100出土土器実測図（1･2:掘り形埋土，3 ～ 11：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……86
図86　SC-506出土土器実測図（縮尺 1/3）……88
図87　SC-506出土石器実測図（縮尺 1/2）……89
図88　SC-516遺構実測図（縮尺 1/50)……90
図89　SC-516出土土器実測図（1 ～ 5・7 ～ 10：掘り形埋土，6：貼り床部分，11 ～ 17：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……91
図90　SC-517，SK-522遺構実測図（縮尺 1/50）……93
図91　SC-517出土土器実測図（1 ～ 13：掘り形埋土，14 ～ 18：上部Ⅲ層部分，縮尺1/3）……94
図92　SC-517出土石器実測図（1:掘り形埋土，2･3：SC-517内SK-522，縮尺 2/3，1/2，1/4）……94
図93　SC-517内SK-522，SP-422出土土器実測図（縮尺 1/3)……95
図94　SC-536，SP-307・449・468出土土器実測図（1 ～ 5:SC-536掘り形埋土，6:SP-307，7:SP-449，8：SP-468，9：SC-536上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……97
図95　SC-536内SK-537掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3)……98
図96　SC-544，SK-543・545遺構実測図（縮尺 1/50）……99
図97　SC-544掘り形上部出土土器実測図（縮尺 1/3）……100
図98　SC-544掘り形下部出土土器実測図1（縮尺 1/3）……101
図99　SC-544掘り形下部出土土器実測図2（縮尺 1/3）……102
図100　SC-544出土石器実測図（縮尺 1/2，1/4）……103
図101　SC-546遺構実測図（縮尺 1 /50）……103
図102　SC-546上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺 1/3)……104
図103　SB-74遺構実測図1（縮尺 1/50）……106
図104　SB-74遺構実測図2（縮尺 1/50）……107
図105　SB-548遺構実測図（縮尺 1/50)……108
図106　SB-548・549，SA-552出土土器，石製品実測図（縮尺 1/3，2/3)……109
図107　SB-549遺構実測図（縮尺 1/50)……110
図108　SB-551遺構実測図（縮尺 1/50)……111
図109　SA-552遺構実測図（縮尺 1/100，1/50）……114
図110　SD-10・14 ～ 16・20・21・45・73・79・502・505配置図（縮尺 1/200）及びSD-14 ～ 16遺構実測図（縮尺 1/50)…114・115
図111　SD-10・20・45・79，SP-148・453遺構実測図（縮尺 1/50）……116・117
図112　SD-10・73・79・505・512，SP-328・363 ～ 365・368・369・377遺構実測図（縮尺 1/50)……118・119
図113　SD-10出土土器実測図（1・2・7・8：掘

り形埋土，3 ～ 6・9・10：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……120
図114　SD-14・15・16・20・21出土土器実測図（1 ～ 12：SD-14，13・14：SD-15，15：SD-16，16 ～ 23：SD-20，24・25：SD-21，縮尺 1/3）……121
図115　SD-16・29・36・79出土石器実測図（1：SD-16，2：SD-29，3・4：SD-36，5：SD-79，縮尺 2/3，1/2）……122
図116　SD-21・520，SP-164・166・167・169・180・181・272・273・281・412遺構実測図（縮尺 1/50）……124・125
図117　SD-29・36・55・62・72・91・508・509配置図（縮尺 1/200）……127
図118　SD-29・36・508・509遺構実測図（縮尺 1/50）……128・129
図119　SD-29・36，SP-236遺構実測図（縮尺 1/50）……130・131
図120　SD-29・62・72，SX-500，SP-356 遺構実測図（縮尺 1/50）……132・133
図121　SD-29出土土器実測図（縮尺 1/3）……134
図122　SD-36・91，SK-55遺構実測図及びDU ～ DY-20区調査区南壁土層断面図（縮尺 1/50）……134-135
図123　SD-36南半部掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）……136
図124　SD-36中央部及び北東部掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）……137
図125　SD-36上部Ⅲ層部分出土土器実測図（1 ～ 5：南西部，6 ～ 14：中央部，15・16：北東部，縮尺 1/3）……138
図126　SD-45出土土器実測図（縮尺 1/3）…139
図127　SD-55上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺 1/3）……140
図128　SD-62出土土器実測図（1：掘り形埋土，2 ～ 8：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……141
図129　SD-72出土土器実測図（1 ～ 6:上部Ⅲ層部分，7：掘り形埋土，縮尺 1/3）……142
図130　SD-73・520出土土器実測図（1 ～ 5：SD-73，6・7：SD-520，縮尺 1/3）……143
図131　SD-505・508出土土器実測図（1 ～ 7：SD-505，8 ～ 17：SD-508，縮尺 1/3）……145
図132　SD-509出土土器実測図1（縮尺 1/3）……147
図133　SD-509出土土器実測図2（縮尺 1/3）……148
図134　SD-509・512出土石器実測図（1・2：SD-509，3・4：SD-512，縮尺 1/2）……149
図135　SD-512出土土器実測図（1 ～ 5：掘り形埋土，6・7：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……150
図136　SK-1・2・38遺構実測図（縮尺 1/50）……152
図137　SK-1出土土器実測図1（縮尺 1/3）……153
図138　SK-1出土土器実測図2（縮尺 1/3）……154
図139　SK-1出土土器実測図3（縮尺 1/3）……155
図140　SK-1出土石器実測図（縮尺 1/2）……156
図141　SK-1出土ガラス小玉実測図（倍尺2倍）……156
図142　SK-2出土石器実測図（縮尺 2/3・1/2）……157
図143　SK-2出土土器実測図(1 ～ 18:掘り形上部，19・20：掘り形下底部，縮尺 1/3）……158
図144　SK-3・7・11・13・17，SP-130遺構実測図（縮尺 1/50）……159
図145　SK-3・7上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺 1/3）……160
図146　SK-11掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）……161
図147　SK-11・19・30・48・52出土石器実測図（縮尺 1/2）……162
図148　SK-13出土土器実測図（1・2：掘り形埋土，3 ～ 6：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……163
図149　SK-18・19・23・24・27・30・31・65・66，SX-40，SP-203遺構実測図（縮尺 1/50）……165
図150　SK-19・23・24・27・30・31・34出土土器実測図（縮尺 1/3）……167
図151　SK-34・35・46・48・49遺構実測図（縮尺 1/50）……171
図152　SK-35・38・46・48出土土器実測図（縮尺 1/3）……172
図153　SK-49，SX-57出土分銅形土製品

（縮尺 1/2）……174
図154　SK-49掘り形埋土出土土器実測図
（縮尺 1/3）……174
図155　SK-50 ～ 54・553遺構実測図（縮尺 1/50）
……175
図156　SK-50上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）……176
図157　SK-51 ～ 54・56・59・60・61・63出土土
器実測図（縮尺 1/3）……178
図158　SK-56・59・60・61・63・64・67・68・
76・77，SP-248遺構実測図（縮尺 1/50）
……180
図159　SK-67・68上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）……183
図160　SK-70掘り形最上部～上部出土土器実測
図（縮尺 1/3）……184
図161　SK-70掘り形中部出土土器実測図
（縮尺 1/3）……185
図162　SK-70掘り形中部及び下部出土土器実測
図（縮尺 1/3）……186
図163　SK-70・90・82・515出土石器実測図
（縮尺 1/2，1/4）……187
図164　SK-70上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）……188
図165　SK-76・77・81出土土器実測図
（縮尺 1/3）……190
図166　SK-80・81・85 ～ 88・90・94 ～ 96，
SP-485遺構実測図（縮尺 1/50）……192
図167　SK-82・83出土土器実測図（1：SK-82，
2 ～ 5：SK-83掘り形埋土，6：SK-83上部
Ⅲ層部分，縮尺 1/3）……193
図168　SK-85・86・96出土土器実測図
（縮尺 1/3）……195
図169　SK-95掘り形埋土出土土器実測図
（縮尺 1/3）……197
図170　SK-435・439出土土器実測図（縮尺 1/3）
……199
図171　SK-496・501・503・510出土土器実測図
（縮尺 1/3）……201
図172　SK-510・511・514・515・518・521・
529・531遺構実測図（縮尺 1/50）……204
図173　SK-511掘り形埋土出土土器実測図
（縮尺 1/3）……205
図174　SK-511出土石器実測図
（縮尺 2/3，1/2，1/4）……206
図175　SK-511上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）……207
図176　SK-511（1），Ⅲ層（2･3）出土鉄器実測図
（縮尺 2/3）……207
図177　SK-515・521・529・535・540
出土土器実測図（縮尺1/3）……208
図178　SK-540・541・547遺構実測図
（縮尺 1/50）……210
図179　SK-541出土土器実測図1
（縮尺 1/3）……211
図180　SK-541出土土器実測図2
（縮尺 1/3）……212
図181　SK-541出土石器実測図1（縮尺 1/2）
……213
図182　SK-541出土石器実測図2（縮尺 1/2）
……214
図183　SK-543掘り形埋土出土土器実測図
（縮尺 1/3）……215
図184　SK-547出土土器実測図（1：掘り形埋土，
2 ～ 6：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）
……216
図185　SK-553掘り形埋土出土土器実測図
（縮尺 1/3）……217
図186　SK-553出土石器実測図（縮尺 1/4）
……217
図187　SX-40出土土器実測図（縮尺 1/3）……219
図188　SX-57・58・498遺構実測図（縮尺 1/50）
……220
図189　SX-57・58・498・500出土土器実測図
（縮尺 1/3）……221
図190　SP-106・116・120・129・135・154・155・
157・163・176・198・211・212・220・
233・234・235・244・266・325遺構実測図
（縮尺 1/50）……223
図191　SP-116・119・129・148・157・164・
174・176・198・224・233・234・235・
244・248・266出土土器実測図
（縮尺 1/3）……224
図192　SP-135上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）……225
図193　SP-154出土石器実測図（縮尺 1/4）…226

図194　SP-155，212出土石器実測図（縮尺 2/3，1/2）……227
図195　SP-328・343・345・382・391・471・473・476遺構実測図（縮尺 1/50）……231
図196　SP-272・273・305・343・345・356・368・382・391・403・471・473・476出土土器実測図（縮尺 1/3）……232
図197　Ⅲ層出土土器実測図1（縮尺 1/3）……236
図198　Ⅲ層出土土器実測図2（縮尺 1/3）……237
図199　Ⅲ層出土土器実測図3（縮尺 1/3）……237
図200　Ⅲ層出土土器実測図4（縮尺 1/3）……238
図201　Ⅲ層出土石器実測図1（縮尺 2/3）……239
図202　Ⅲ層出土石器実測図2（縮尺 1/2）……240
図203　Ⅲ層出土石器実測図3（縮尺 1/2）……241
図204　Ⅲ層出土石器実測図4（縮尺 1/2）……242
図205　Ⅲ層出土石器実測図5（縮尺 1/2）……243
図206　Ⅲ層出土石器実測図6（縮尺 1/2）……244
図207　Ⅲ層出土土製紡錘車実測図（縮尺 1/2）……244
図208　16次調査Ａ区における主要遺構重複関係1……246
図209　16次調査Ａ区における主要遺構重複関係2……247

表　目　次

表１　文京遺跡16次調査A区出土遺構…… 4－5
表２　文京遺跡16次調査Ⅳ・Ⅴ層解説…… 6・7
表３　文京遺跡16次調査A区遺構観察表……249～262
表４　文京遺跡16次調査A区出土土器観察表……263～294
表５　文京遺跡16次調査A区出土石器・石製品観察表……295～297
表６　文京遺跡16次調査A区出土土製品観察表……297
表７　文京遺跡16次調査A区出土鉄器観察表……297
表８　文京遺跡16次調査A区出土装身具ほか観察表……298

写真図版目次

図版１－１　16次調査区全景（南から）1
図版２－１　16次調査A区の表土掘削作業及びⅢ層上面検出作業の状況（南から）
－２　16次調査A区ではⅢ層掘り下げ後の遺構検出作業，B区では遺構精査と実測作業の状況（北東から）
図版３－１　16次調査区全景（南から）2
－２　16次調査区全景（北から）
図版４－１　16次調査区北壁土層断面（南から）
－２　16次調査A区南壁土層断面(北西から)
－３　16次調査A区南壁土層断面(北東から)
図版５－１　16次調査A区南壁土層断面(北西から)
－２　16次調査A区DV・DW-20区のⅢ層内にみられる砂礫層（SD-557，北から）
図版６－１　16次調査区中央南北土層断面（北西から）
－２　16次調査区中央南北土層断面（南西から）
図版７－１　SC-4～6及びSK-3検出状況(南西から)
－２　SC-4～6及びSK-3完掘状況(南西から)
図版８－１　SC-4完掘状況（南から）
－２　SC-5・6完掘状況（南西から）

図版９－１　SC-8検出状況（西北から）
－２　SC-8完掘状況（西から）
図版10－１　SC-25・41 ～ 44・536, SK-535検出状況（南西から）
－２　SC-25・41 ～ 44完掘状況（西から）
図版11－１　SC-25内SK-527完掘状況（北西から）
－２　SC-536, SK-535完掘状況（西から）
図版12－１　SC-32・33完掘状況（西から）
－２　SC-33遺物出土状況（西から）
図版13－１　SC-32・33完掘状況（南から）
－２　SC-33内SK-513土層断面及び遺物出土状況（北から）
図版14－１　SC-37完掘状況（南東から）
－２　SC-39検出状況（南から）
－３　SC-39掘り形検出面での焼土出土状況
図版15－１　SC-39遺物出土状況（南西から）
－２　SC-39・529及びSK-1・2・530完掘状況（西から）
図版16－１　SC-47検出状況（南から）
－２　SC-47遺物出土状況（北から）
－３　SC-47床面でのSK-75, SP-261の検出状況（北から）
図版17－１　SC-47完掘状況（北から）
－２　SC-47貼り床底面完掘状況（北から）
図版18－１　SC-69, SK-70完掘状況（北から）
－２　SC-78完掘状況（北から）
図版19－１　SC-84検出状況（東から）
－２　SC-84, SK-82・83・93・525・526完掘状況（東から）
図版20－１　SC-84内SK-524塹壕壁面における土層断面（東から）
－２　SC-84内SK-524焼土・炭化物・灰検出断面（東から）
－３　SC-84内SK-524完掘状況（東から）
図版21－１　SC-92・97・506完掘状況（北西から）
－２　SC-97・506完掘状況（北東から）
図版22－１　SC-516床面までの完掘状況（南東から）
－２　SC-516貼り床完掘状況（東から）
－３　SC-516土層断面（東から）
図版23－１　SC-517完掘状況（北から）
－２　SC-517内SK-522遺物出土状況（北から）
図版24－１　SC-92・97 ～ 99周辺完掘状況（南東から）
－２　SC-544, SK-543・545完掘状況（北東から）
図版25－１　SB-74　SP-256土層断面（南から）
－２　SB-74　SP-257土層断面（東から）
－３　SB-74　SP-258土層断面（北東から）
－４　SB-74　SP-259土層断面（北東から）
－５　SB-548　SP-282土層断面（南から）
－６　SB-548　SP-267土層断面（北から）
－７　SB-549　SP-269土層断面（東から）
－８　SP-129土層断面（西から）
図版26－１　SP-129, SK-13完掘状況（東から）
－２　SP-154検出状況（南から）
－３　SP-262土層断面（東から）
－４　SP-270土層断面（東から）
－５　SP-281土層断面（東から）
図版27－１　SD-29・36完掘状況（南から）
－２　SD-29・36完掘状況（南西から）
図版28－１　SD-36（DZ-20区）遺物出土状況（北から）
－２　SD-36（DZ-20区）遺物出土状況（西から）
－３　SD-20検出状況（西から）
図版29－１　SD-29・36・55・62・72完掘状況（南から）
－２　SD-55（DV-20/21区）完掘状況（北から）
図版30－１　SD-10・79・73完掘状況（南から）
－２　SD-79（DV-24区南半部）掘削痕跡（南東から）
図版31－１　SD-79（DV-24区南半部）掘削痕跡（南東から）
－２　SD-520（DY-30区）土層断面（北から）
－３　SD-508・509完掘状況（南から）
－４　SK-1・2検出状況（南から）
図版32－１　SK-1検出時の遺物出土状況（南から）
－２　SK-2検出時の遺物出土状況（南から）
図版33－１　SK-3検出状況（南から）
－２　SK-3完掘状況（南から）
－３　SK-3周辺の遺構配置（南西から）
図版34－１　SK-3粘土塊断面（北から）
－２　SK-11遺物出土状況（南西から）
－３　SK-13土層断面（南から）

図版35－１　SK-547検出状況（南西から）
－２　SK-547完掘状況（北から）
－３　SK-17粘土塊出土状況（南から）
図版36－１　SK-19遺物出土状況（南東から）
－２　SK-23検出状況（南から）
－３　SK-23完掘状況（南から）
図版37－１　SK-35遺物出土状況（北東から）
－２　SK-48・49・56検出状況（北東から）
－３　SK-54土層断面（西から）
図版38－１　SK-56完掘状況（東から）
－２　SK-59, SP-248完掘状況（東から）
－３　SK-60完掘状況（南から）
図版39－１　SK-76土層断面（北西から）
－２　SK-76完掘状況（西から）
図版40－１　SK-439遺物出土状況（南西から）
－２　SK-511遺物出土状況（東から）
図版41－１　SK-515完掘状況（東から）
－２　SK-541土層断面及び遺物出土状況（東壁付近は未掘状況, 東から）
図版42－１　SK-541遺物出土状況（南壁付近は未掘状況, 東から）
－２　SK-540・541完掘状況（東から）
図版43　SC-4・5出土土器
図版44　SC-5・6・8・9出土土器
図版45　SC-9・12・25出土土器
図版46　SC-25出土土器
図版47　SC-25・26・536出土土器
図版48　SC-26・32出土土器
図版49　SC-32出土土器
図版50　SC-33出土土器1
図版51　SC-33出土土器2
図版52　SC-33出土土器3
図版53　SC-33出土土器4
図版54　SC-33出土土器5
図版55　SC-33出土土器6
図版56　SC-33出土土器7
図版57　SC-33出土土器8
図版58　SC-33出土土器9
図版59　SC-33出土土器10
図版60　SC-33・37・39出土土器
図版61　SC-39出土土器1
図版62　SC-39出土土器2
図版63　SC-39, SK-439出土土器
図版64　SC-39・41・42・43・SK-496出土土器
図版65　SC-43・44・47出土土器
図版66　SC-47・69出土土器
図版67　SC-69・71・78・519出土土器
図版68　SC-78・84出土土器
図版69　SC-84出土土器
図版70　SC-92・97出土土器
図版71　SC-97・98・99・100出土土器
図版72　SC-100・506出土土器
図版73　SC-506出土土器1
図版74　SC-506出土土器2
図版75　SC-506出土土器3
図版76　SC-506・516出土土器
図版77　SC-516・517出土土器
図版78　SC-517出土土器1
図版79　SC-517出土土器2
図版80　SC-517・536出土土器
図版81　SC-536・544出土土器
図版82　SC-544出土土器1
図版83　SC-544出土土器2
図版84　SC-544・546, SB-549出土土器
図版85　SD-10・14出土土器
図版86　SD-14・15・20出土土器
図版87　SD-20・21・29出土土器
図版88　SD-29・36出土土器
図版89　SD-36出土土器1
図版90　SD-36出土土器2
図版91　SD-36出土土器3
図版92　SD-36出土土器4
図版93　SD-36・45・55出土土器
図版94　SD-55・62・72・73・505・520出土土器
図版95　SD-72出土土器
図版96　SD-505・508・509出土土器
図版97　SD-509・512, SK-1出土土器
図版98　SK-1出土土器1
図版99　SK-1出土土器2
図版100　SK-1出土土器3
図版101　SK-1出土土器4
図版102　SK-1出土土器5
図版103　SK-1・2出土土器1
図版104　SK-1・2出土土器2
図版105　SK-2・3・7・11出土土器
図版106　SK-11・13・17・19出土土器

図版107　SK-19・23出土土器
図版108　SK-24・27・28・31・34出土土器
図版109　SK-34・35・38出土土器
図版110　SK-46・48・49・60出土土器
図版111　SK-49・553出土土器
図版112　SK-50・52・53・54・56・553出土土器
図版113　SK-56・60・61・63出土土器
図版114　SK-64・66・67・70出土土器
図版115　SK-70出土土器
図版116　SK-70・76出土土器
図版117　SK-76・77出土土器
図版118　SK-77・81・82出土土器
図版119　SK-82・83出土土器
図版120　SK-83・86出土土器
図版121　SK-86・95, SD-91出土土器
図版122　SK-95・96・496・503出土土器
図版123　SK-503・510・511, SD-505出土土器
図版124　SK-511出土土器
図版125　SK-511・535・537・541出土土器
図版126　SK-541出土土器1
図版127　SK-541出土土器2
図版128　SK-541出土土器3
図版129　SK-541出土土器4
図版130　SK-541出土土器5
図版131　SK-541・543・547出土土器
図版132　SK-547, SX-40, SP-135・148・174・273出土土器
図版133　SP-157・343・345・473出土土器
図版134　Ⅲ層出土土器及び分銅形土製品
図版135　出土石器1
図版136　出土石器2
図版137　出土石器3
図版138　出土石器4
図版139　出土石器5
図版140　出土石器6
図版141　出土石器7
図版142　出土石器8
図版143　出土石器9
図版144　出土石器10
図版145　出土石器11
図版146　出土石器12
図版147　出土石器・滑石製指輪
図版148　出土紡錘車・分銅形土製品
図版149　SC-25・33, SK-1出土ガラス小玉
図版150　SC-33出土ガラス小玉･緑色凝灰岩製管玉･瑪瑙製管玉ほか

序　　説

1　調査にいたる経緯と経過

1996（平成 8）年 12 月 6 日，本報告書に収めた文京遺跡 16 次調査 A 区に当たる愛媛大学工学部校舎新営第Ⅲ期工事の具体的な工事計画が施設部から提示された。発掘調査に向けての環境整備や調査体制等の調整を行い，以下の確認を行い，調査計画を立案した。

①建設予定地東隣に位置する文京遺跡 12 次調査結果から弥生時代～古墳時代の遺跡の存在が予想され，建設予定地全域（1,384㎡）の発掘調査を行うこと。

② 1997（平成 9）年度の諸工事については，設計を工夫することで，埋蔵文化財に影響が生じないようにすること。

③ 1997 年度の諸工事に伴う発掘調査は，16 次調査に調査室員全員が出動しているので，その進捗状況に合わせて調整すること。

④ 16 次調査 A 区には，4 月末に調査に着手する計画であるが，遺構の密集が予想されるので，12 月末までの調査期間を確保すること。

⑤ 16 次調査 B 区は調査終了後，シートで覆い養生して，A 区の調査が終わるまで埋め戻さないこと。

⑤降雨や遺跡の残存状況によって調査計画の変更が予想されるので，定期的に施設部との協議を行うこと。

発掘調査には 1997 年 4 月 28 日に着手した。埋蔵文化財調査室から現地に器材を搬入すると同時に，調査区南東角から大型重機を用いて基本層序Ⅰ層の表土層と近世以降の水田層であるⅡ層の剥ぎ取り作業を開始した。Ⅰ・Ⅱ層を掘り下げると，練兵場時代の塹壕や既設配管が縦横に検出され，その撤去を小型重機で進めた（図版 2-1）。こうした後世の攪乱部の断面で基本層序Ⅲ層の層厚や遺構の分布状況を把握することに努めた。表土剥ぎ作業と攪乱部の掘り下げ作業を終了した 5 月 15 日以降，座標点の移動を行い，調査区区割りを設定し，Ⅲ層を掘り下げることとした。Ⅲ層は 30 ～ 40cmの層厚であるため，上部，中位，下部に人為的に区分し掘り下げることとした。東隣の 12 次調査区と同じく，Ⅲ層の中位以下から点々と遺物が出土し始める。遺物が集中する地点については 1/20 の出土状況図を作成するとともに，後述する 1 m方眼の調査区割りを用いて取り上げた。

梅雨時でもあり，Ⅲ層の掘り下げには 7 月末まで費やすこととなった。その間，6 月 13 日と 7 月 23 日には，施設部と協議を行い，16 次調査と 1997 年度の他の諸工事に伴う発掘調査計画を調整した。

8 月 4 日，Ⅳ層上面での遺構検出作業を調査区南東角から開始した。予想通り多くの遺構が出土し，1/100 の遺構検出図を作成するとともに，検出順に遺構番号を付与していった。8 月 25 日には遺構検出作業を終わり，遺構の精査を開始した。遺構の精査を進める過程で，多くの遺物が出土した。その中には，炭化物や焼土を確認できた炉跡や，ガラス小玉が出土する遺構があり，掘り形埋土を採取し水洗選別を行うこととした。

ちょうど夏期休業期間に入ったことから，考古学専攻生であった佐川殉・成相景子・松田ちづる・田中久美子・坂元恒太の諸氏の参加を得て，大量の遺物が出土する遺構の調査を順調に進めることができた。11 月 8 日，B 区を含めた現地説明会を開催し，見学者は 100 名におよんだ。11 月 11 日・12 日の両日をかけて，B 区を含めた全体写真を撮影した。その後，補足的な調査を行い，12 月初めから調査区壁面を中心として基本層序Ⅳ層の調査を行い，Ⅳ層の堆積状況の把握と遺構・遺物の有無を確認し，土層断面図を作成した。12 月 22 日，最終的な記録作業を終え，器材・出土遺物を埋蔵文化財調査室に搬入し，調査を完了することができた。

文京遺跡 16 次調査 A 区の調査略号・調査番号ほかは，以下の通りである。

調査略号：BNK-16A

調査番号：99701

調査面積：1,384㎡
工 事 名：愛媛大学工学部校舎新営第Ⅲ期工事（その1）
調査期間：1997（平成9）年4月28日～
1997年12月22日
調査担当：田崎博之
調査補助：宮崎直栄
依頼文書：愛大工発第502号

2　整理作業・報告書刊行の経過

愛媛大学工学部校舎新営工事に伴う文京遺跡12・14・16次調査を終了した後，1998（平成10）～2000（平成12）年度に出土遺物の洗浄・分類・注記・復元作業，土壌水洗選別作業，炭化物やガラス小玉等の微細遺物の選り分け作業，遺構実測図の基礎的な整理を，発掘調査の合間をぬいながら進めた。しかし，毎年度連続して発掘調査が実施され，正式報告書の刊行に向けた本格的な整理作業は寸断されることとなる。また，2001（平成13）年度～2010（平成22）年度には，出土した遺構と遺物が相対的に少ない文京遺跡13・18・20・23・25次調査，樽味遺跡4～8次，桑原西稲葉遺跡3～5次調査の正式報告書を先行して刊行していくこととしたため，12・14・16次調査の整理作業は中断状態に立ち至った。

2011（平成23）年度，16次調査区及び14次調査区の北側に設定されたグリーンゾーンの整備について学内で論議が始まり，グリーンゾーン設定の基礎資料であることから，文京遺跡の本体部分に当たる12・14・16次調査の正式報告書の刊行を学長から強く要望された。そこで，12・14・16次調査の調査成果を『文京遺跡Ⅶ』として一括報告する中期計画をたて，整理作業を再開することとなった。しかし，10年間にもおよぶ整理作業の中断によって，記録類の再確認作業に手間取った上に，整理作業を再開した当初の2011年度には城北団地の第3体育館建設に伴う文京遺跡45次調査ほかの発掘調査に忙殺され，結果として16次調査A区の調査報告書の刊行は2013年度までずれ込むこととなった。

3　調査区割りの設定と出土遺構・遺物の記録方法

（1）基本層序及び調査区の設定

1）基本層序

現在，文京遺跡が所在する城北団地では，遺跡全体にわたる基本層序を上位からⅠ～Ⅴ層に区分している。発掘調査にあたっては，個々の調査地点ごとで，基本層序を構成する土層群の細かな特徴や構成をそれぞれ記録している。

基本層序は，以下の通りである。

Ⅰ層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。
Ⅱ層：灰色系の砂礫混じりのシルト層からなる水田層。
Ⅲ層：弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含する黒色～黒褐色系の土層。
Ⅳ層：縄文時代前期～晩期の遺構と遺物を包含する黄褐色系のシルト～砂質シルト層。
Ⅴ層：Ⅳ層下の花崗岩を円礫・亜円礫を主体とする砂礫層ないしは礫層，砂層。

2）調査区の区割り

16次調査A区は，現在の工学部5号館建物範囲の東西38ｍ，南北34ｍと，北側に7.5ｍ幅で24ｍほどのびる範囲に当たり，東隣は12次調査区，北東側は16次調査B区である（図1）。

発掘調査時には，城北団地内に設置されている平面直角座標Ⅳ系基準点から座標点を移動し，X=93980，Y=-67220を基点として設定した12次調査区の5ｍ方眼の調査区割りを延長して調査を進めた。ところが，1997年以降，城北団地内での調査が増加し，調査ごとに区割りを設定すると混乱が生じかねない状況となってきた。そこで，

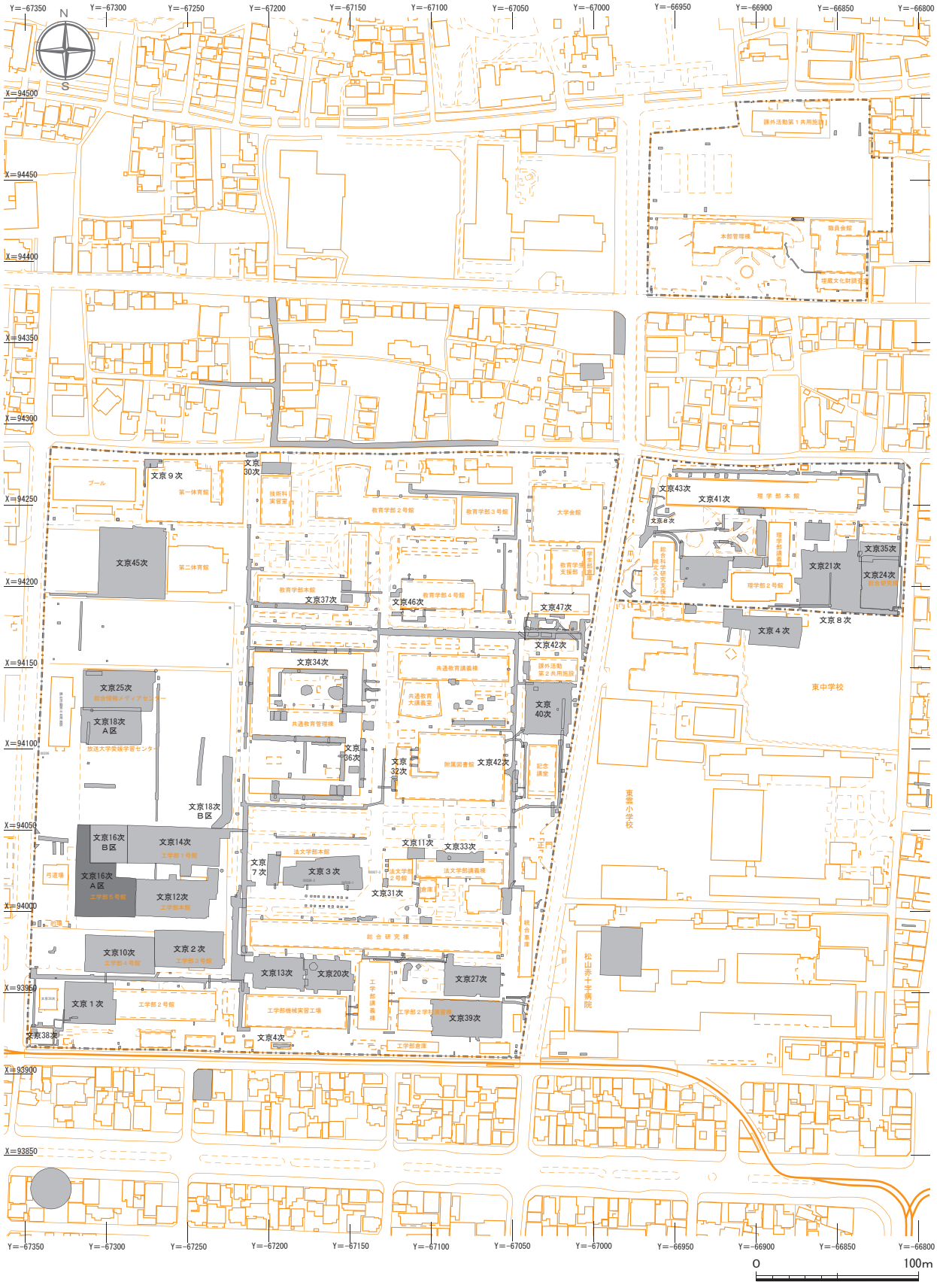


図１　文京遺跡16次調査Ａ区位置図（縮尺 1/3,500）

1998（平成10）年に，X=93900，Y=-66800を基点に城北団地全域をカバーする調査区割りとして，東から西へ向かって5ｍおきにAA・AB・AC・AD・・・・・BA・BB・BC・BD・・・・・EM・EN･EO･EP，南から北へ向かって5ｍおきに1･2･3・・・・118・119・120とする5ｍ方眼の調査区割りを設定し直した。本書で報告する16次調査A区も，この新たな区割りに読み替えている。この新区割りでは，16次調査A区は，DS～DZ-20～31区に当たる。また，必要に応じて，5ｍ方眼を，南東角から西に1～5，その北側列を6～10，北西角の25区画にいたる1ｍ方眼に細分している。この1ｍ方眼を示す場合は，「DR-15-14区」などと呼んでいる。

（2）出土遺構・遺物の記録の方法と保管

1）遺構の登録番号と種別の表示

出土遺構には，Ⅳ層上面で遺構の掘り形を確認した順に，竪穴建物・溝・土壙の大型遺構に1から，柱穴・小穴には101から連番で遺構番号を付与していった。ところが，調査の最終段階にさしかかった頃，大型遺構が予想外に100基をこえ，急遽501からの遺構番号を付すこととした。また，当初，柱穴・小穴と考えた遺構の中にも，調査の結果，土壙と判断した遺構も混じる。さらに，調査最終段階に調査区壁面の観察で遺構と判断できる掘り込みを確認でき，調査終了後，欠番とした遺構番号を付与した。本書で報告する遺構番号は，混乱を避けるため，以上の調査時の遺構番号を用いている。

加えて，竪穴建物や掘立柱建物は複数の土壙や柱穴から構成される。これらにも個々に遺構番号を与えているため，竪穴建物や掘立柱建物は複数の番号をもつ遺構から構成される。

遺構番号に加えて，

SA：柵列
SB：掘立柱建物
SC：竪穴建物
SD：溝
SK：土壙
SP：柱穴・杭穴・小穴
SX：その他の遺構

の遺構の種別を表す略号を遺構番号に冠している。

以上の遺構の調査所見を巻末の遺構観察表にまとめて記載している（表3）。

2）遺物の取り上げと登録番号

出土遺物には，R-1からの連番遺物番号を付けながら取り上げた。調査終了後，取り上げの単位ごとに連番の遺物番号を追加した。

さらに，遺物実測に当たり，同じ遺物番号をもつ複数の遺物で実測及び写真撮影した遺物には，R-5001からの遺物番号を新たに付与した。遺物には，遺構，出土区・層位と遺物登録番号を注記し，遺物台帳を作成した。本書に掲載した遺物は，巻末の表3～8に遺物番号・コンテナ番号の項を設け，報告書から検索ができるようにしている。

3）調査記録類・出土遺物の保管

発掘調査時の記録類には，遺構・土層の観察所見記録・実測図・写真がある。遺構の観察所見記録は，埋土の土質・色調やメモ類で，遺構台帳を作成し，個々の観察記録とした。調査区内のすべての遺構の全体図と，調査区壁の土層断面図を20分の1の縮尺で作成し，主要な遺構については20分の1または10分の1の縮尺で個別図を作成した。これらの実測図には，0001からの4桁の連番の登録番号を付し，遺構実測図台帳に順次記録して整理・保管している。

遺物実測図には，001～の3桁の連番の登録番号を与えて，順次，遺物台帳に記録した。また，遺物を収納したコンテナ箱には，001～の3桁の登録番号を付して，遺物台帳に記入している。

調査及び整理の際には，35㎜モノクロ・カラースライド，6×7モノクロ・カラースライドによる写真を撮影した。写真類は，カットごとに検索用のカードを作成し，写真登録番号を付して，台帳に記録している。各フィルムは，35㎜モノクロに3桁＋2桁（001-01～），35㎜カラースライドには3桁（001～），6×7モノクロ・カラースライドには4桁（0001～）の通しの登録番号を付し，検索用カードと写真台帳に併記している。

表１　文京遺跡16次調査Ａ区出土遺構

遺構の種類	遺構略号		
竪穴建物	SC	SC-4・5・6・8・9・12・25・26・32・33・37・39・41・42・43・44・47・69・71・78・84・92・97・98・99・100・495・506・516・517・519・536・544・546	34棟
掘立柱建物	SB	SB-74・548・549・551	4棟
柵列	SA	SA-552	1条
溝	SD	SD-10・14・15・16・20・21・29・36・45・55・62・72・73・79・91・505・508・509・512・520・557	21条
土壙	SK	SK-1・2・3・7・11・13・17・18・19・23・24・27・28・30・31・34・35・38・46・48・49・50・51・52・53・54・56・59・60・61・63・64・65・66・67・68・70・76・77・80・81・82・83・85・86・87・88・90・93・94・95・96・324・409・410・411・413・414・427・435・439・443・444・464・477・494・496・501・503・504・507・510・511・514・515・518・521・529・530・531・532・535・540・541・543・545・547・553・558	89基
その他の遺構（土器溜まり）	SX	SX-40・57・58・498・500	5基
柱穴・小穴	SP	SP-101～103・105～143・147～157・159～184・190～192・194～203・206・208～218・220～246・248～323・325～331・333～361・363～408・412・415～426・428～434・436～438・440～442・445～463・465～476・478～490・492・493・497・499・523・528・542・550・554～556・559	
欠番		144～146・158・185～189・193・204・205・207・219・247・332	

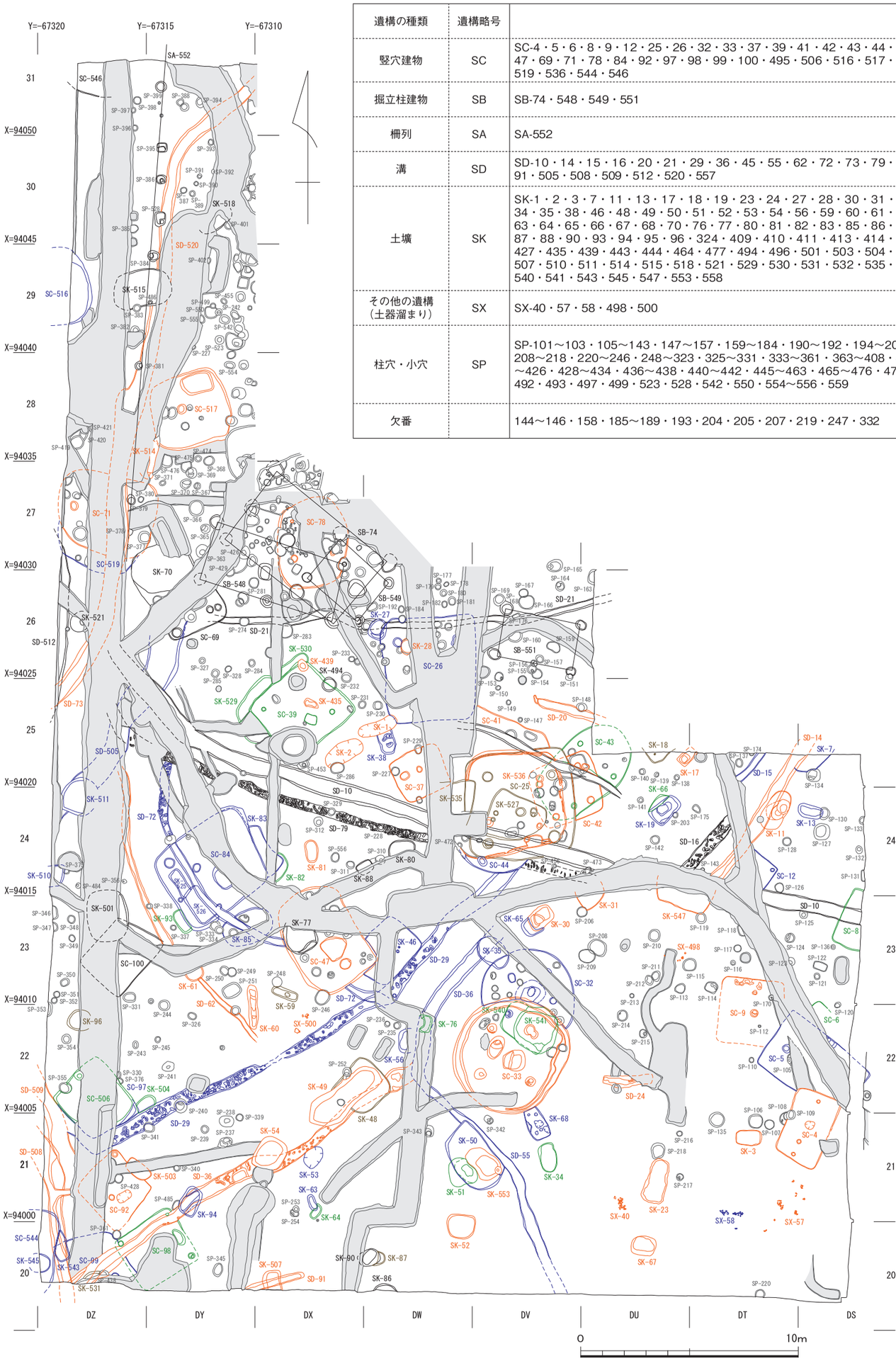


図2　文京遺跡16次調査A区主要遺構配置図（縮尺 1/200）

Ⅰ　層序と遺構・遺物の概要

1　層序の概要

16 次調査でも，文京遺跡全域で設定している基本層序Ⅰ～Ⅴ層を確認できた（図 4）。

その中で，Ⅱ層は基本的には近世以降の水田層であるが，調査区南壁面では，Ⅱ層下部で古代～中世の水田層と考えられるⅡ-3・4 層を確認できた。SK-324・409・411，SD-557 などは，Ⅱ-3・4 層の層界面から掘り込まれた遺構である。こうした調査区南壁沿いは，後述するように基盤となるⅤ層の砂礫層が落ち込み浅い谷状地形が東西にのびる地点に当たる。谷状地形が埋積した結果残される微凹部は，Ⅲ層上面にも残り，そこに古代～中世の水田層と遺構が残されたものと考える。ただし，上層の水田層であるⅡ-1・2 層の耕作活動によって水田面は破壊されている。

Ⅲ層は暗褐色～黒褐色の砂質シルト～シルト質砂で，場所によってはシルトがとくに多く混じる。また，調査区北西部では砂礫が多く混じる。Ⅲ層の層厚は 30 ～ 40cmを測り，調査に当たり，上部，中位，下部に分けて掘り下げていった。上部から弥生土器を中心とする遺物が出土し始めたが，小片ばかりで，散漫にしか出土していない。Ⅲ層上部は，中位と比べて若干白っぽい土色を呈し，淘汰も悪く，攪拌を受けているものと考えられる。その結果，土層断面ではⅢ層上部まで掘り込みを確認できる遺構はごく一部で，Ⅲ層中位以下でしか掘り込みを確認できない遺構が大半を占める。Ⅲ層下部，特に最下面のⅣ層直上の 5cmほどは，わずかに灰色みをおびた黒褐色を呈し，遺構の掘り形底面が下層のⅣ層と明確な層理面をなすこととは異なり，漸移的に変化する。

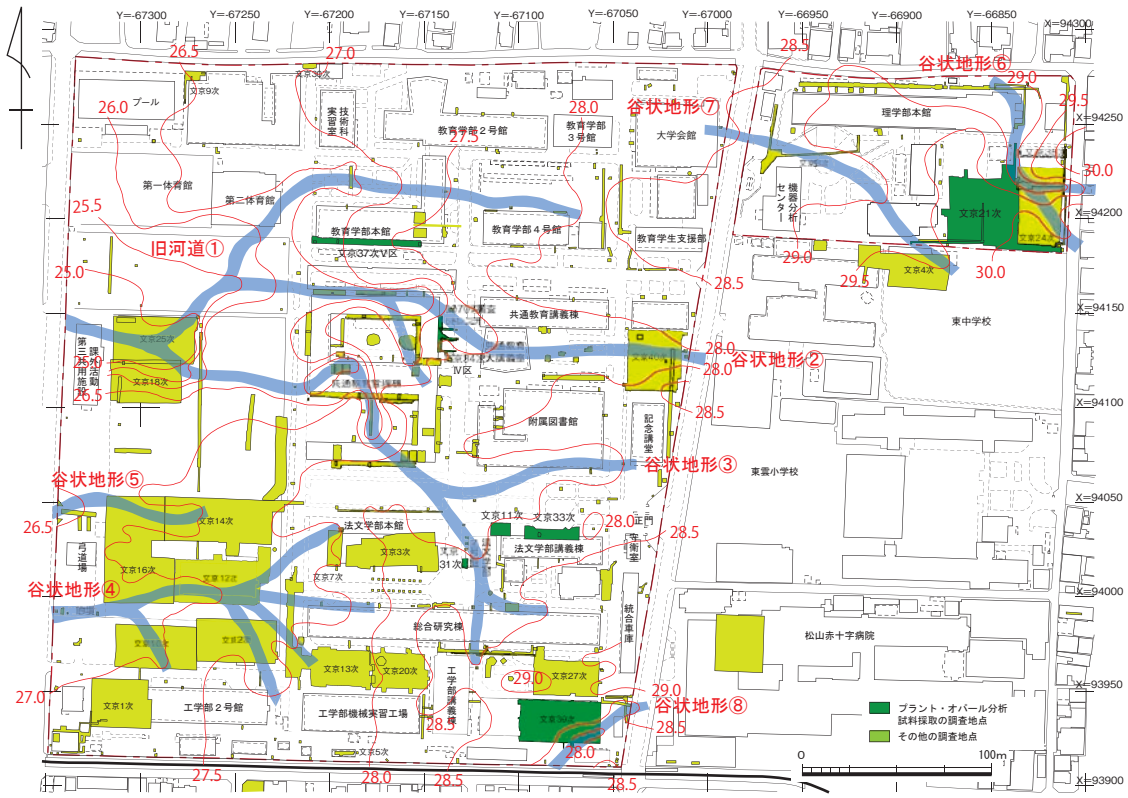


図３　文京遺跡におけるⅣ層上面の微起伏復原（外山秀一氏作成，縮尺 1/4,500）

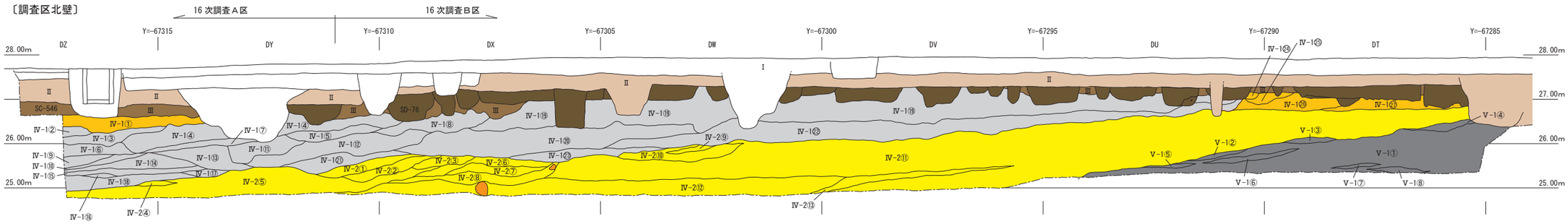
表２　16次調査Ⅳ・Ⅴ層土層解説

調査区北壁面		
Ⅳ-1	①	砂礫が非常に多く混じる黄灰色砂質シルト。
	②	灰色粗砂。
	③	灰褐色粗砂。
	④	暗灰白色砂礫で，灰色の粗砂層と礫の薄層が縞状に互層堆積。
	⑤	灰褐色粗砂。
	⑥	やや黄色みをおびた灰色細砂。
	⑦	灰褐色細砂。
	⑧	細礫が多く混じる暗灰褐色粗砂。
	⑨	灰褐色粗砂。
	⑩	灰色細砂。
	⑪	暗灰色砂礫。
	⑫	暗灰色粗砂。
	⑬	灰色の粗砂～極粗砂と径3㎝～拳大の花崗岩礫が縞状に互層堆積。
	⑭	灰色の粗砂～中礫の薄層が縞状に互層堆積。
	⑮	灰色粗砂。
	⑯	極粗砂～細礫のレンズ状ブロック。
	⑰	灰色粗砂。
	⑱	灰白色粗砂。
	⑲	暗褐色粗砂～細礫からなる砂礫層。径3～5㎝の礫が非常に多く混じり，淘汰が悪い。
	⑳	暗灰色～灰白色の粗砂と細礫～中礫の薄層が縞状に互層堆積。
	㉑	灰色の粗砂～中礫の薄層が縞状に互層堆積。
	㉒	暗灰黄色細砂。
	㉓	灰色の粗砂～細礫からなる砂礫層。
	㉔	にぶい黄褐色砂質土にⅢ層が部分的に混じり込む。
	㉕	にぶい黄褐色砂質土にⅢ層が部分的に混じり込む。
	㉖	にぶい黄褐色砂質シルト。
	㉗	肌色に近い淡黄褐色細砂。
Ⅳ-2	①	灰褐色細砂と粗砂の薄層が縞状に互層堆積。
	②	灰褐色細砂。
	③	暗灰色～暗灰黄色の粗砂と細砂の薄層が縞状に互層堆積。
	④	極粗砂のレンズ状ブロック。
	⑤	灰黄色極粗砂～粗砂層と褐色細砂の薄層が縞状に互層堆積。細礫が混じる。東半部では西に傾き，西半部では水平に堆積。
	⑥	暗灰色粗砂。
	⑦	灰黄色細砂。
	⑧	径1～3㎝の礫が多く混じる灰黄色粗砂。
	⑨	⑩内の暗灰色細砂のレンズ状ブロック。

調査区北壁面		
Ⅳ-2	⑩	⑪内の暗灰黄色細砂のレンズ状ブロック。
	⑪	暗灰黄色の粗砂と細砂の薄層が縞状に互層堆積。
	⑫	径30㎝前後の花崗岩礫が詰まる砂礫。
	⑬	⑪内の灰色粗砂。
Ⅴ	①	径3～15㎝の花崗岩の円礫を主体とする礫層。部分的に粗砂のレンズ状ブロックを挟む。
	②	①最上面の粗砂のレンズ状ブロック。
	③	①最上面の粗砂のレンズ状ブロック。
	④	①内の粗砂のレンズ状ブロック。
	⑤	①内の粗砂のレンズ状ブロック。
	⑥	①内の粗砂のレンズ状ブロック。
	⑦	①内の細礫のレンズ状ブロック。
	⑧	①内の細礫のレンズ状ブロック。

調査区南壁面		
Ⅳ-1	①	黄灰色砂質シルト。③と比べて粘性をおびる。
	②	にぶい黄褐色シルト。①と比べて粘性が強い。
	③	黄褐色砂質シルト。
Ⅳ-2	①	黄灰色細砂。
	②	灰色粗砂。
	③	浅黄色砂質シルト。
	④	灰白色～浅黄色の砂質シルト。部分的に砂質が強い部分がある。
	⑤	粗砂と拳大の礫からなるレンズ状ブロック。
	⑥	暗灰褐色粗砂～極粗砂。上面には鉄分が沈着する。
	⑦	暗灰色粒砂
	⑧	浅黄色シルト。下部は極細砂に漸移的に変化。
	⑨	灰褐色粗砂。
	⑩	浅黄色のシルトと細砂～極細砂の薄層が縞状に互層堆積。
	⑪	浅黄色のシルトと細砂～極細砂の薄層が縞状に互層堆積。西端近くでは暗灰色の粗砂がブロックで混じる。
	⑫	暗灰色粗砂。
	⑬	暗灰色粗砂。
	⑭	径2～3㎝の礫が混じる暗灰色粗砂。
	⑮	暗灰色粗砂。
	⑯	灰白色の細砂～中砂と粗砂～極粗砂の薄層が縞状に互層堆積。
Ⅴ-1		粗砂～極粗砂を主体とする灰白色の砂礫。
Ⅴ-2		径1～3㎝の円礫が混じる黄灰色細砂。
Ⅴ-3		拳大の花崗岩の円礫を主体とする暗灰色砂礫。

〔調査区北壁〕


16 次調査Ａ区
16 次調査Ｂ区
Y=-67315
Y=-67310
Y=-67305
Y=-67300
Y=-67295
Y=-67290
Y=-67285
DZ
DY
DX
DW
DV
DU
DT
28.00m
27.00m
26.00m
25.00m
SC-546
SD-76
SK-546
SK-547
SK-548
SK-549
SK-550
SK-551
SK-552
SK-553
SK-554
SK-555
SK-556
SK-557
SK-558
SK-559
SK-560
SK-561
SK-562
SK-563
SK-564
SK-565
SK-566
SK-567
SK-568
SK-569
SK-570
SK-571
SK-572
SK-573
SK-574
SK-575
SK-576
SK-577
SK-578
SK-579
SK-580
SK-581
SK-582
SK-583
SK-584
SK-585

調査区中央南北ライン		
Ⅳ-1	①	暗灰白色極細砂～細砂。
	②	にぶい黄褐色シルト。調査区南壁のⅣ-1②と対応。
	③	黄褐色砂質シルト。
	④	黄褐色砂質シルト。③と比べて粒径が大きくなる。
	⑤	黄褐色のシルト質の極細砂～細砂。
Ⅳ-2	①	オリーブ色シルト質細砂。下部はシルトに変化。
	②	灰オリーブ色砂質シルト。
	③	暗灰色細砂。
	④	浅黄色のシルトと細砂～極細砂の薄層が縞状に互層堆積。調査区北壁⑪に対応。
	⑤	黄色粗砂。
	⑥	黄灰色粗砂。
	⑦	淡い灰色の粗砂。
	⑧	灰色粗砂。
	⑨	灰色細砂～中砂。
	⑩	黄茶色砂層。粗砂と細砂の薄層が縞状に互層堆積。
	⑪	灰白色の粗砂と細礫の薄層が縞状に互層堆積。
	⑫	黄褐色粗砂。
	⑬	灰白色の粗砂と細礫の薄層が縞状に互層堆積。
	⑭	黄褐色中砂～粗砂。
	⑮	黄色みをおびる灰白色細砂。
	⑯	黄褐色細砂。
	⑰	灰黄色の粗砂と細砂の薄層が南に傾き互層堆積。
	⑱	灰黄色の粗砂と細礫の薄層が南に傾き互層堆積。
	⑲	淡い暗灰色粗砂。

調査区中央南北ライン		
Ⅳ-2	⑳	灰黄色シルト質砂。
	㉑	灰褐色細砂質シルト。
	㉒	灰褐色シルト質細砂。
	㉓	灰黄色極細砂～シルト。
Ⅳ-2	㉔	灰黄色シルト質砂。
	㉕	灰オリーブ色の細砂と極細砂～シルトの薄層が縞状に互層堆積。
	㉖	黄褐色の極細砂～中砂の薄層が縞状に互層堆積。下部ほど粒径が大きくなる。
	㉗	黄灰色の粗砂～細礫からなる砂礫。
	㉘	細砂～粗砂の薄層が縞状に互層堆積。
	㉙	暗灰色粗砂。
	㉚	灰白色～暗灰白色の粗砂。トラフ状斜交層理を観察できる。
	㉛	灰白色細砂の中に浅黄色シルト～極細砂の薄いレンズ状ブロックがみられる。
	㉜	灰白色細砂の中に浅黄色シルト～極細砂。
	㉝	灰白色細砂の中に浅黄色のシルト～極細砂の薄いレンズ状ブロックが縞状にみられる。
	㉞	浅黄色のシルトと細砂～極細砂の薄層が縞状に互層堆積。
Ⅴ-1	①	灰褐色の砂礫の薄層が南に傾きながら縞状に互層堆積。拳～人頭大の礫が多く混じる。
	②	径5㎝前後の円礫が混じる砂礫。鉄分が沈着して赤化。
	③	灰白色の粗砂と細礫からなるレンズ状ブロック。
Ⅴ-2		拳大の花崗岩の円礫を主体とする砂礫層。砂は細砂。調査区北壁のⅤ-1①と対応。
Ⅴ-3	①	径5～20㎝の円礫が混じる極粗砂～中礫を主体とする砂礫。
	②	灰白色砂礫であるが，鉄分が沈着して赤化。
	③	灰色砂。
	④	灰白色細砂。
	⑤	径5～20㎝の円礫が混じる極粗砂～中礫を主体とする砂礫。

Ⅳ層は，後述する調査区の南北で東西方向にのびるⅤ層上面の谷状地形を埋めるⅣ-2層と，残された微凹部を含めて調査区全域に広がるⅣ-1層に区分できる（図4，表2）。Ⅳ-1層は黄褐色砂質シルトを主体とし，DS～DZ-20～25区の16次調査A区南半部の全域に広がる。調査区北壁沿いでは，Ⅳ-2層を切り込む灰褐色･暗灰白色･灰色の粗砂～細礫を主体とする砂礫層が堆積する。そのため，DS～DZ-28～31区に当たる16次調査A区北西部やB区の遺構埋土には砂礫が多く混じる。調査区北壁沿いの谷状地形を埋めるⅣ-2層は灰黄色粗砂で，暗灰色・暗灰黄色・灰黄色・褐色の粗砂と細砂が縞状に互層堆積がみられる。一方，調査区南壁沿いの谷状地形を埋めるⅣ-2層は，下部に浅黄色・灰褐色・暗灰色の砂質シルトを主体とする土層群で，部分的にシルトと微細砂が縞状に互層状態でみられ，上部は灰色･暗灰色の砂である。以上のように，調査区北壁沿いと南壁沿いでは，同じⅣ-2層でも堆積構造が異なり，堆積時期が異なると考えられる。

Ⅴ層は，灰白色～暗灰色の極粗砂～中礫，拳大の花崗岩の円礫などから構成される砂礫層で，土層断面ではトラフ状斜交層理を観察できる。全体としては，DT～DZ-24～28区のほぼ東西にのびる中州状の高まりがあり，その南北は1m以上の谷状地形となっている。こうした谷状地形はⅣ層上面の微細起伏にも反映され，外山秀一が復原するⅣ層上面の微細起伏とも対応する（図3）。16次調査区北半部の谷状地形は外山が復原する谷状地形⑤，南半部は谷状地形④に対応する。

2　出土遺構と遺物の概要

（1）出土遺構の概要

16 次調査 A 区では，第二次世界大戦前の練兵場時代の塹壕が縦横に掘られ，調査区西辺には南北にのびる既設配管の攪乱溝，植樹のための攪乱が数多くみられた。そうした後世の攪乱に破壊されながらも，竪穴建物 34 棟，掘立柱建物 4 棟，柵列 1 条，溝 21 条，土壙 87 基，土器溜まり 5 基，他に柱穴や小穴が数多く出土した（表 1）。この中で，SC-495，SD-557，SK-95・324・409・410・411・413・414・427・443・444・477・496・558，SP-403 ～ 408・559 は，DS ～ DZ-20 区の調査区南壁や DU-25・26 区東壁で土層断面を観察中に確認できた遺構で，掘り込みがⅢ層中に収まり，Ⅳ層上面では掘り形を検出できていない。また，144 ～ 146・158・185 ～ 189・193・204・205・207・219・247・332 号遺構は，調査の結果，樹根やⅢ層とⅣ層の層界の窪み部分とわかり，欠番とした。

以上，各遺構の所属時期と切り合い関係を図 208・209 に整理しているので，参照されたい。また，種別ごとの遺構の概要は，次の通りである。

【竪穴建物】　地表を掘り下げて床面を造る建物を「竪穴式住居跡」という名称で呼んできた。確かに，文京遺跡でこれまで調査されてきた竪穴式住居跡は，灰穴炉と考えられる中央土壙や，灰・炭化物・焼土が一定の範囲に集中する地床炉を備え，住居跡と判断できる事例がほとんどであった。ところが，12 次調査区や 16 次調査Ａ区では，一辺 3 ～ 4 ｍの小規模な建物の中で，炉跡や柱穴が伴う事例があるとともに，炉跡の伴わない事例が確認され始めた。小規模な建物は簡易の小屋がけの建物や工房などの性格が考えられる。そのため，「竪穴式住居跡」としてきた遺構のすべてを住居跡とすることはできない。そこで，今次調査の報告から，竪穴建物の名称を用い，付帯する施設によって住居や小屋等の性格を推定することとした。なお，遺構略号は従来のまま SC を用いる。

16 次調査 A 区では 34 棟の竪穴建物が出土している。この中で，SC-69・100・546 の 3 棟は古墳時代後期の建物で，他はいずれも弥生時代中期後葉～後期の時間幅の中に収まる。また，SC-495 は DU-25・26 区調査区東壁で土層断面を観察中に確認できた遺構で，掘り込みがⅢ層中に収まり，Ⅳ層上面では掘り形を検出できていない。しかし，後述するように，大型で底面が平坦に掘り込まれており，竪穴建物と判断した。

弥生時代の竪穴建物は，掘り形が円形の SC-32・33・516，小判形の SC-43・44・71・78，小型の隅丸長方形もしくは方形の SC-4・5・8・9・12・37・42・47・92・98・506・517，大型の隅丸長方形や方形の SC-25・26・39・84・536 に分類できる。円形の SC-32・33 は灰穴炉と考えられる土壙型の炉跡をもつが，小判形や大型の隅丸長方形や方形の掘り形をもつ竪穴建物の炉跡は浅い掘り込みしかもたない。さらに小型の隅丸長方形もしくは方形の建物は炉跡が伴わないものが圧倒的に多い。また，円形の竪穴建物は 4 ～ 5 本柱構造，小判形や大型の隅丸長方形や方形の建物は多くが 4 本柱構造であるが，小型の隅丸長方形もしくは方形の建物は 1 本ないし 2 本の柱で上屋を支える。掘り形の形状，炉跡，柱構造に一定の相関性が認められる。

この他，後述する土壙を含めて，竪穴建物の埋積状況を観察すると，下層の基本層序Ⅳ層を起源とする大小の小塊（偽礫）が掘り形埋土に多く混じる事例がみられる。埋積状況は掘立柱建物の柱穴と共通し，人為的に埋め戻されていると判断できる。また，SC-33 では，掘り形の埋没途中で大量の土器や石器に伴いガラス小玉や碧玉製管玉が一括して投棄されていた。これらの遺物は，SC-33 の上部土器群として報告する。

【掘立柱建物】　掘立柱建物は 4 棟が出土した。SB-74・548・549 は出土遺物から古墳時代後期に比定できるが，他の 1 棟は出土遺物で時期を比定できず，古墳時代後期以降としか把握できなかった。

【柵列】　調査区北西部の DY-DZ-27 ～ 31 区では，ほぼ南北方向にのびる柵列が出土している。

後述するように，B区SB-1と同じ方向に並び，これに伴う柵列と考えられる。

【溝】　21条の溝が出土しているが，塹壕や既設配管で破壊され，途切れており，SD-73・520のように一連の溝の可能性が高い溝も含まれている。時期別にみると，SD-10・16・21・79・512は古墳時代後期，SD-45は弥生時代後期後葉～古墳時代後期，SD-557は調査区南壁の断面だけで確認した溝で，Ⅱ層下半から掘り込まれた古代～中世の溝である。他は弥生時代中期後葉～後期中葉に比定できる。また，埋土に流水痕跡をとどめ水路と考えられる弥生時代のSD-505・509・520に対して，流水痕跡がみられない古墳時代後期のSD-10・79，弥生時代のSD-20・29・36・55・62・72は集落内の区画溝の性格を推定できる。

【土壙】　89基の土壙が出土している。この中で，SK-95・409 ～ 411・413・414・427・443・444・477・496・558は，DS ～ DZ-20区の調査区南壁とDU-25・26区の東壁で土層断面を観察中に確認できた遺構で，掘り込みがⅢ層中に収まり，Ⅳ層上面では掘り形を検出できていない。その中には，大型で下底面がほぼ平坦な掘り形をもつことから竪穴建物と考えられる遺構も含まれる。しかし，炉跡や上屋を支える柱穴を確認できていないので，土壙として報告しておく。また，SK-324・409・410・435・439・494は，検出時には柱穴か小穴と考えたが，遺物等の出土状況から土壙とした。

時期別にみると，SK-70・77・86・95・496・501・515・521・558は古墳時代後期，SK-80・324・409・411・413・444は古代～中世，SK-88・90・410・414・427・443・477・494・518は時期不明，他はすべて弥生時代の土壙である。こうした土壙の中で，弥生時代のSK-1・2・19，古墳時代後期のSK-70には多くの土器群が一括して投棄されていた。また，弥生時代のSK-3・13・17では，粘土塊が掘り形内に詰め込まれていた。

【土器溜まり】　Ⅲ層の中位や下部まで掘り下げた時点で，比較的限られた範囲から遺物が集中して出土する地点があり，多くの場合，その下位のⅣ層上面で遺構の掘り形を検出できた。しかし，中にはⅣ層上面で遺構を確認できなかった地点もある。掘り込みがⅢ層内に収まる何らかの遺構と考えられる。土器溜まりとしてその他の遺構に含めた。SX-40・57・58・498・500の5基がある。

【柱穴・小穴】　A区の各所で多くの柱穴や小穴が出土している。SP-403 ～ 408は，DS ～ DZ-20区の調査区南壁の土層断面を観察中に確認できた小穴で，掘り込みがⅢ層中に収まり，Ⅳ層上面では掘り形を検出できていない。一方，SP-120・135・163・164・167・169・180・200・266・270・272・278・281・319・328・363・365・368・412・453では立柱痕跡，SP-220では杭痕跡を検出できた。しかし，周辺で掘立柱建物や柵列などを構成する柱穴や杭穴が確認できなかったので，柱穴・小穴の項で報告する。また，SP-154などでは扁平な花崗岩塊を礎石としている。以外にも遺物が出土し，所属時期を推定できる小穴もある。これらを中心として報告を行う。

（2）出土遺物の概要

16次調査A区で出土している遺物は，弥生土器が大半を占めるが，古墳時代後期の須恵器・土師器，中世の土師器などが少量ながらある。さらに，石器・石製品，ガラス小玉や碧玉製管玉，瑪瑙製管玉，滑石製指輪の装身具が加わる。また，前述したように，出土した大半の遺構は土層断面の観察からⅢ層中位から掘り込まれていることを確認できた。そこで，掘り形上部のⅢ層部分から出土した遺物も含めて，遺構ごとに報告を行う。出土遺物の種別ごとの概要は，以下の通りである。

【土器】　文京遺跡では，松山平野の他の弥生時代遺跡と比べて，外来系土器が数多く出土する。16次調査A区でも，瀬戸内でも備讃瀬戸周辺，瀬戸内を挟む広島湾沿岸～斎灘周辺，東北部九州，別府湾沿岸の東部九州，東南部九州からの搬入品や模倣品がある。その中でも，16次調査A区では東南部九州の山ノ口式系土器の搬入品や模倣品が目立つ。隣接する12次調査や16次調査B区

などと比べてとくに多い。そのため，できるだけの資料を報告することとした。

また，弥生時代中期後葉～後期の土器がほとんどを占めるが，当該期に特徴的な凹線文については，波板状，沈線様，浅く細い擬凹線文に区分できる。こうした凹線文の特徴を遺物写真で記録化することとした。さらに，焼き上がりの色調も多様である。精製された胎土をもち灰白色の焼き上がりの土器や，暗褐色の焼き上がりの土器などがある。加えて，弥生時代の SK-3・13・17 では粘土塊が掘り形内に詰め込まれていた。外来系土器を含めて，胎土分析を行うことを予定している。

この他，特徴的な土器として，SC-33・99・544 などから出土している口縁部に断面楕円形の粘土帯を貼り付けた鉢がある。類例は大阪市都島区榎並城跡伝承地遺跡などで出土している。形状的な特徴は朝鮮半島南部の粘土帯土器と呼ばれる無文土器と共通する。文京遺跡例は弥生時代中期後葉～後期に伴うと考えられる。ところが，朝鮮半島南部では楕円形粘土帯土器は，日本列島の弥生時代前期～中期中葉に平行する初期鉄器時代後半期の土器であり，時間的にズレがある。この点については，Ⅶ -5 分冊で考察を加える。

なお，遺構の時期比定に不可欠な土器編年については，松山平野では宮本（1991）や梅木（2000）などがある。しかし，16 次調査 A 区の主要遺構の切り合い関係を整理した結果，図 208・209 に示すように，弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構は，これまでの編年案では分期できず，当該期の土器編年の見直しが必要になってきた。そこで，本書では弥生時代中期後葉（梅木編年の伊予中部Ⅳ様式にほぼ対応，以下同じ），後期初頭（Ⅳ -1 様式），前葉（Ⅳ -2 様式），中葉（Ⅳ -3 様式），後葉（Ⅳ -4 様式）に時期区分し，Ⅶ -5 分冊で 12・14 次調査で出土している土器とともに土器編年の見直しを行うこととした。

【石器・石製品】

弥生時代の磨製石鏃 2 点，打製石鏃 11 点，石庖丁 12 点，石鑿 2 点（転用品も含む），柱状片刃石斧 4 点（破片のため他の器種である可能性をもつ 2 点を含む），スクレーパー 2 点，姫島産黒曜石の石核 1 点をはじめ，石器素材，砥石，磨石，敲石，凹石，台石が出土している。他に，古墳時代後期の石製円盤が 1 点ある。

【装身具類】 SC-25 炉跡の SK-527 から破片を含めて 8 点，SC-33 上部土器群とともに 53 点，SK-1 から 2 点のガラス小玉が出土している。SC-33 上部土器群では，碧玉製管玉 2 点と瑪瑙製の管玉と考えられる破片 1 点がある。推定径 7.7 ㎜，推定口径 4.05㎜を測る大型品で，弥生時代の出土例としては，岡山県楯築墳丘墓や福岡県糸島市平原墳丘墓につぐ国内 3 例目に当たる。また，石製指輪がある。SC-84 が埋没する過程で投棄されたもので，弥生時代後期初頭の例である。こうした瑪瑙製管玉や滑石製指輪は，朝鮮半島との交流によって入手された遺物であり，Ⅶ -5 分冊で考察を行う。

【鉄器】 SK-25・511 から柳葉形の有茎鉄鏃が各 1 点，Ⅲ層から鉄鏃 1 点，刀子と考えられる破片 1 片が出土している。その他，器種を特定できなかった鉄器破片が出土している。表 7 に観察所見を報告している。

【土製品】 土製紡錘車 3 点，分銅形土製品 3 点が出土している。SK-49 と SX-57 から出土している分銅形土製品は円形の粘土円盤の両側にくり込みをいれたもので，Ⅲ層出土品は隅丸方形のものと考えられる。

【その他】 竪穴建物に付属する炉跡からは，焼土や灰とともに多くの炭化物が出土している。その中で，SC-25 の炉跡 SK-527，SC-32 炉跡 SK-51，SC-47 炉跡 SK-75，SC-84 炉跡 SK-524 ではとくに多くの炭化物があり，埋土を採取して水洗選別を行い，出土した大型植物遺体の分析を進めた。また，SC-33 の埋没過程で一括して投棄された上部土器群や SK-1・2 などでも一括して投棄された土器に混じり炭化物が出土している。これらについても分析を行っている。Ⅶ -5 分冊で報告する。

Ⅱ　出土遺構と遺物の記録

1　竪穴建物

4号竪穴建物（SC-4，図5～8，図版7・8・43・137・141・148）

調査区南東部のDS・DT-21・22区に位置する。南北3.15～3.45m，東西2.1～2.19mの隅丸長方形の掘り形をもつ竪穴建物である。Ⅳ層の上面で掘り形を確認できた（図版7-1）。

SC-5及びSP-108を切り，SP-109に切られる。①～④層に分層できるが，②層を除いて，自然流入土と判断できる。掘り形埋土はややしっとりした質感の極暗褐色シルトを主体とし，②層には浅黄色砂質シルトの小塊が混じる。全体に径数㎜～小指先大の炭化物の小片が散漫に混じり，とくに床面東側に炭化物が集中する（図5，図版7-2）。床面に貼り付いた状況で検出され，SC-4の廃絶時に伴う炭化物の集積と考えられる。

床面ではSK-22とSP-171～173を検出した。SK-22は，床面のほぼ中央に位置し，短径38cm，長径45cm，深さ6cmほどの浅い不整円形の皿状の遺構である。埋土は極暗褐色砂質土に少量の小指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が混じる。炭化物が多く混じることから，炉跡と判断した。

SP-171～173は，掘り形の中央長軸線上に並ぶ。SP-171・173で立柱痕跡を確認でき，2本柱構造の住居跡と考える（図

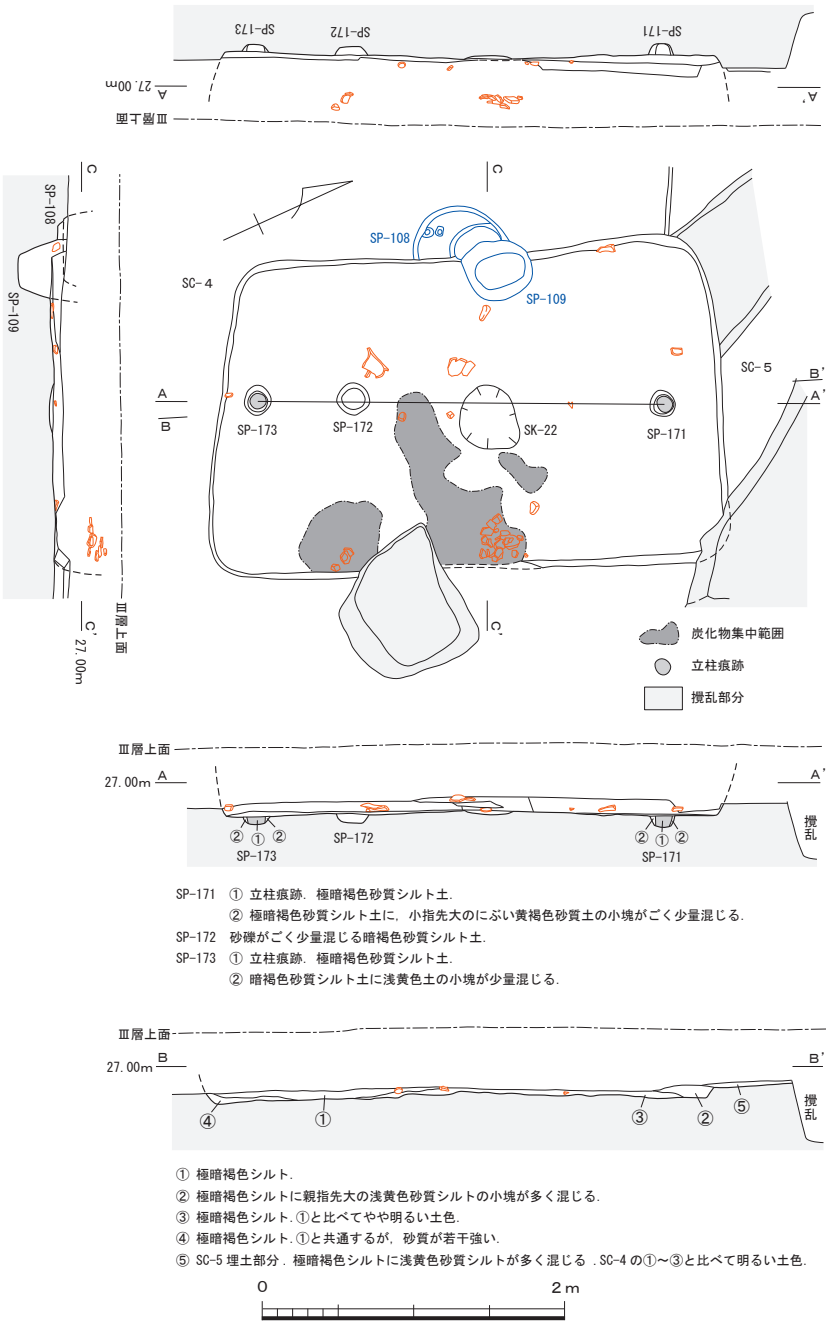


図5　SC-4遺構実測図（縮尺 1/50）

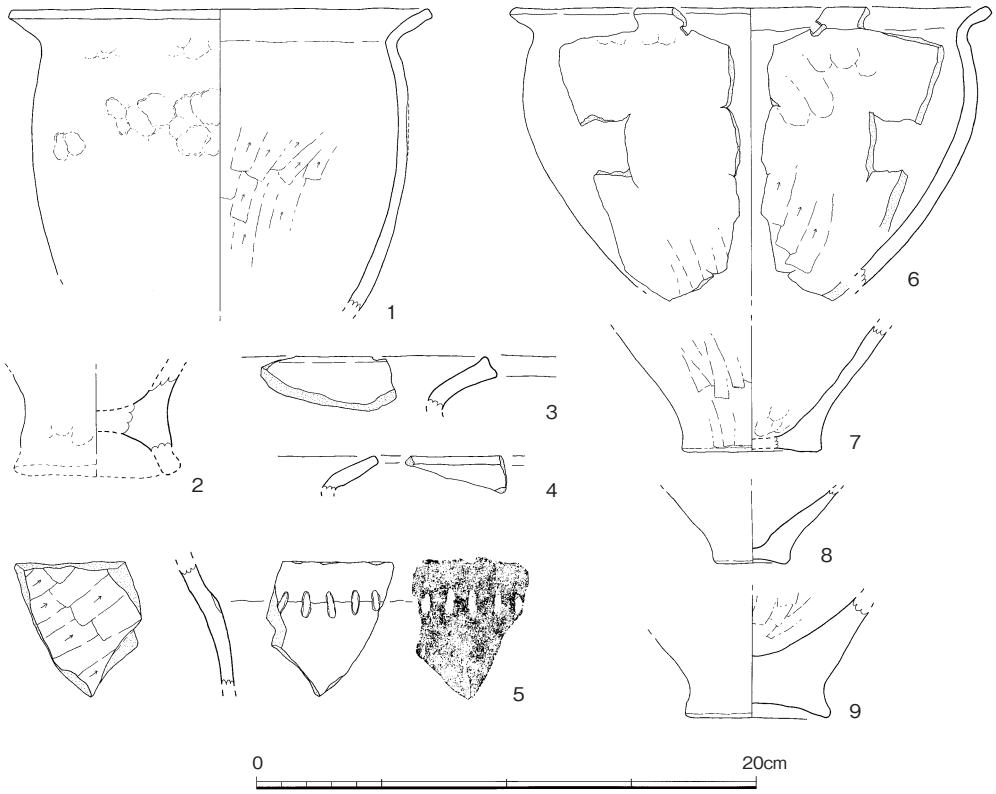


図６　SC-4出土土器実測図（1・2：掘り形埋土，3〜9：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

版 8-1）。SP-171 は径 17 〜 18cmの不整円形の掘り形をもち，床面からの深さ 8cm，立柱痕跡は径 10 × 13cmを測る。底面に柱を据え，周囲を極暗褐色の砂質シルト土で埋めて固定する。小指先大のにぶい黄褐色砂質土塊が混じる。SP-173 は，径 18 〜 19cmの不整円形の掘り形を持ち，床面からの深さは 4cm，立柱痕跡は径 10 〜 11cmを測る。SP-171 と同じく，底面に柱を据え，浅黄色土塊が少量混じる暗褐色砂質シルトで埋める。SP-171・SP-173 間は 2.68 mを測る。SP-172 は，径 22cm，深さ 5cm の不整円形の掘り形の小穴で，埋土は暗褐色の砂質シルト。SP-171・173 を結ぶ線上に位置することから，SC-4 に伴う小穴と考えた。

遺物は，掘り形埋土中と上部Ⅲ層部分から出土している（図６〜８）。床面近くや上部Ⅲ層中位から出土しており，SC-4 が埋積される過程で投棄されたり流入した遺物である。図 6-1・2 は掘り形埋土中から出土した甕である。1（図版 43-1）は，比較的大きな破片が，掘り形南半部で 2 ヶ所に分かれて床面から若干浮いた状態で出土した。緩やかに外反する「く」字形口縁をもち，胴部がわずかに膨らむ。焼成は良好ではあるが，残存状況は悪く脆い。外面は二次的な火熱を受け，胴部外面にはコゲ状に炭化物が付着し，浅い剥離痕が帯状に連続して生じている。胴部中位以下の内面にも薄く炭化物が付着する。2 は，脚台状の上げ底の破片で，掘り形の北部中央で床面から若干浮いた状態で出土した。

図 6-3 〜 9 は SC-4 上部Ⅲ層部分から出土した。3・4・6・7 は，東側壁沿いに当たる位置の上部Ⅲ層中部でかたまって出土している。3 は壺の口縁部破片。口縁端部を横ナデ調整する結果，口縁部内面に小さな窪みが生じている。4 は緩やかに屈曲する「く」字形口縁の甕である。5（図版 43-5）は掘り形南東部の壁際近くに当たるⅢ層上部から出土。壺の肩部の破片で，口縁部直下に棒状工具を押捺した短線文を施文する。6・7（図版 43-2・3）は同一個体の鉢の破片で，直接接合しないために個々に図示した。緩やかに屈曲する「く」字形口縁をもち，胴部は丸みをおび，胴部最大径は上部にある。底部付近を中心として焼成不良な状態で，小さな土塊となって崩れている。口縁屈曲部にわずかに成形時の指頭圧痕が残る。胴部下半の外面には，丁寧な板状工具によるナデ

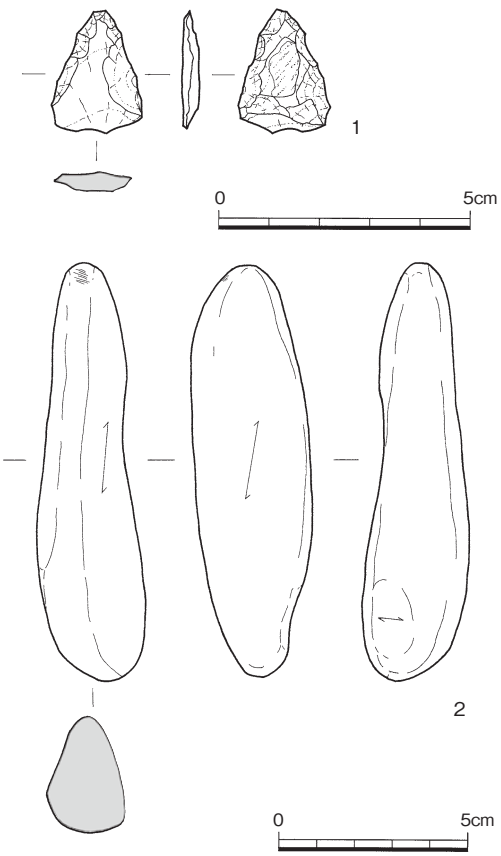


図７　SC-4出土石器実測図（縮尺 2/3，1/2）

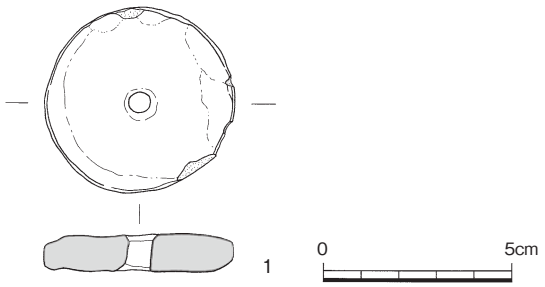


図８　SC-4出土土製紡錘車実測図（縮尺 1/2）

調整を施す。底部側辺には板状工具をかなり強く押しつけたナデ痕跡が残る。胴部内面の上半には強い指頭によるナデ調整を施し，下半には斜め上方に向かうケズリ痕跡が残る。内底面には指頭で押さえつけた痕跡が残る。8 は SK-22 北西側の上部Ⅲ層から出土。甕の底部破片で，文京遺跡で出土する中型の甕と比べて比較的胎土の肌理が細かい点と底径から，小型の甕もしくはミニチュア品と考える。9（図版 43-4）は SK-22 南西部のⅢ層最下部から出土した厚手の上げ底の甕。底部裾が小さく「ハ」字形に張り出す。

図 7-1（図版 137-10）は打製石鏃である。SK-22 と SP-171 の間の位置で床面から若干浮いた状態で出土した。赤色頁岩製の平基式打製石鏃である。片面に自然面を残す。調整剥離はやや粗い。重量 1.5g を測る。2（図版 141-3）は，断面三角形の細長い砂岩礫を利用した磨石である。上端部に擦痕が残る。重量 104.5g を測る。床面から若干浮いた状態で出土した。図 8-1（図版 148-1）は土製紡錘車で，SC-4 の南壁中央の壁沿いで，掘り形内に転落したような状態で出土している。周縁は幅 4㎜ほど面取りされ，径 4.9 ～ 5.05㎝，最大厚 1㎝，重量 27.9 ｇを測る。

この他，SK-22 からは，弥生土器と考えられるごく小さな破片が少量と，多くの炭化物片が出土している。埋土から炭化物を水洗選別し分析を行った。Ⅶ-5 分冊で報告する。

以上，SC-4 は，炉跡の SK-22 と柱穴 SP-171・173 を伴う住居跡である。出土遺物は，弥生時代後期初頭と前葉に比定できる。いずれも SC-4 の堆積過程で流入したもので，SC-4 の埋没時期を示す遺物である。遺物の中でもっとも新しい時期の図 6-1・6・7・9 から判断して，SC-4 は弥生時代後期前葉に最終的に埋没する住居跡と考える。

5号竪穴建物（SC-5，図9・10，図版7・8・43・44）

調査区南東部の DS・DT-22 区に位置する。Ⅳ層上面で検出した時点で，残存した掘り形は浅く，中央を塹壕で破壊されているため，周壁を部分的にしか確認できなかった。東側に隣接する 12 次調査区の SK-338 とした遺構は SC-5 の一部と考えられ，長辺 4.6 m，短辺 2.93 mの隅丸長方形の竪穴建物を復元できる。SC-4 に切られる。掘り形埋土は極暗褐色シルトに斑文状に浅黄色砂質土の小塊が多く混じる。SC-4 と比べて明るい土色を呈する。廃絶直後に人為的に埋め戻された可能

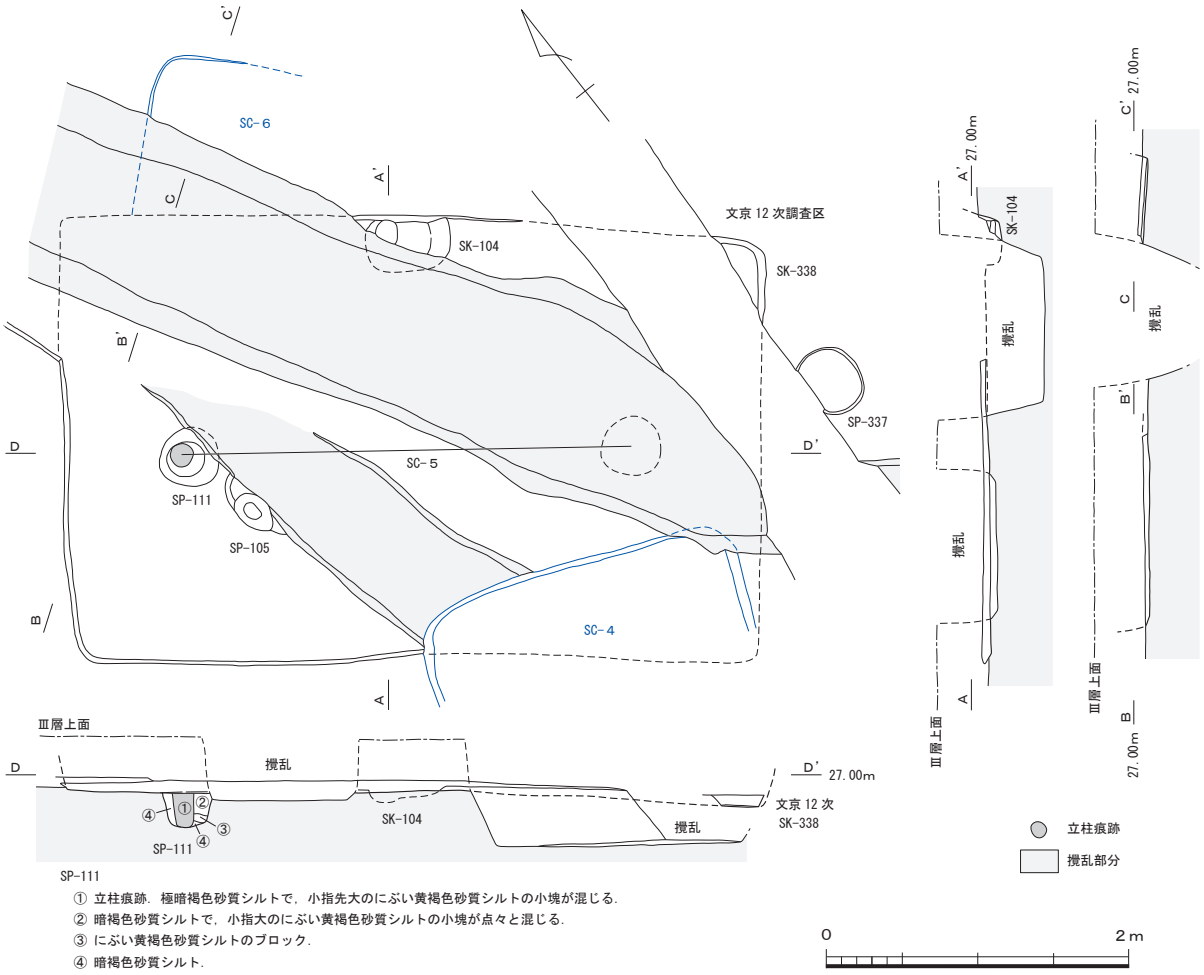


図９　SC-5・6遺構実測図（縮尺 1/50）

性が高い（図 9，図版 7・8）。

床面では SK-104，SP-105・111 が出土した。SP-111 では立柱痕跡を確認でき，掘り形中央の長軸線上に位置することから，SC-5 の柱穴と判断した。SP-111 が周壁から 80cm ほど離れており，対称的に柱穴が配置されているならば，柱間は 2.8m 前後と推定される。SP-111 の掘り形は，径 40cm，床面からの深さ 22cmの長円形で，立柱痕跡は，にぶい黄褐色砂質シルトの小塊が混じる極暗褐色砂質シルト。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトを主体とし，にぶい黄褐色砂質シルトの小塊が点々と混じる。掘り形の中央に柱を立て，まず北西側を埋めて，柱の傾きを調整しながら南東側を埋めている状況を観察できる。

SK-104 は，北壁沿いのほぼ中央に位置する。大半を塹壕で破壊されているが，北壁に接して掘られた推定径 80cmほどの半円形の小型土壙である。SC-5 の北壁を意識して掘られており，出入

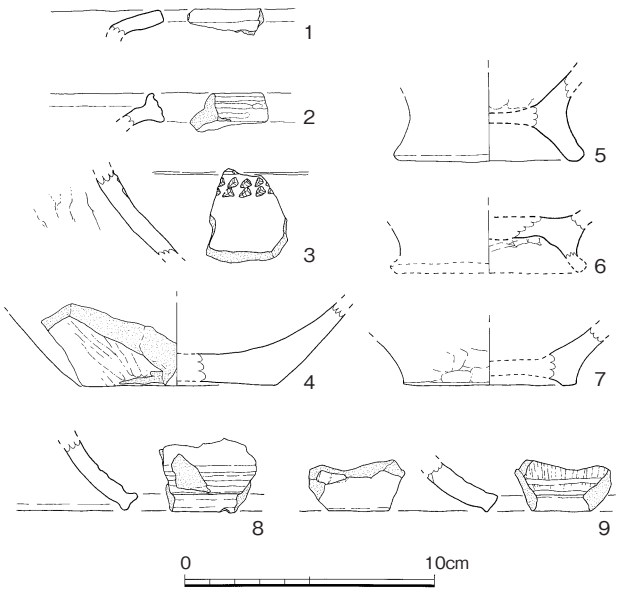


図10　SC-5出土土器実測図
（1：掘り形埋土，2～9：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

り口に伴う掘り込みの可能性が高い。埋土は，砂礫が多く混じる極暗褐色シルトで，浅黄色砂質土の小指先大の小魂を含む。

SP-105 は，大半を塹壕で破壊されている。長径 60㎝ほどの浅い小穴で，埋土は暗浅黄色砂が少量混じる褐色砂質シルトである。底面近くから炭化物の破片が点々と出土している。SC-5 に伴う小穴であるかは不明である。

SC-5 の埋土には小指先大の炭化物片がごく少量混じり，甕の破片が数点出土しているにすぎない（図 10-1，図版 43-6・7）。図 10-1 は土層観察用畦の埋土部分から出土。緩やかに「く」字形に屈曲させる甕の口縁部破片である。図版 43-6 は，甕の胴部下半の破片で，外面が暗文風のミガキ調整で仕上げられている。図版 43-7 も甕の胴部下半の破片で，SK-104 上面から出土している。外面には草本類の茎を利用したと考えられる縦方向の擦過痕が残る。内面には下から上方へのケズリ調整を施す。

SC-5 の上部Ⅲ層から出土した遺物は比較的多い（図 10-2 ～ 9）。2・4・8・9 は掘り形西角近く，3・5 ～ 7 は SC-5 のほぼ中央部に当たるⅢ層部分から出土している。いずれも SC-5 が埋没する過程で流入した遺物と考えられる。

ただし，SC-5 は，後述する SC-6 と大きく重複するため，以下に報告するⅢ層出土遺物の中には SC-6 に伴う可能性があるものが含まれる。図 10-2 は壺の口縁部破片で，口縁上端に粘土紐を貼り付けて拡張し，端面に 3 条の沈線様の凹線文をめぐらす。3（図版 44-1）は壺の肩部破片で，頸部の付け根に沈線をめぐらし，その下方に刷毛目工具の木口部角を斜め上方から刺突するように押捺し，小さな三角形状の列点文を二段施文する。4 は，壺の平底の破片で，わずかに上げ底となっている。5・6 は，裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の甕の底部である。7 は鉢の上げ底の破片。8・9 は高坏の脚裾部の破片。8（図版 43-8）は，裾部の端部に横ナデによる深めの凹線文をめぐらし，その上方に 2 条の浅い凹線文を追加する。9（図版 43-9）は脚裾部の破片。外面は横ナデ調整を施した後，縦方向の暗文風のミガキを行い，最後に非常に浅い幅の広い沈線を 2 条めぐらす。いずれも弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。

出土遺物は，SC-5 が埋め戻された際に混入したもので，弥生時代中期後葉～後期初頭の時間幅に収まる。後期前葉に埋没する SC-4 に切られていることも含めて，SC-5 の廃絶時期は弥生時代後期初頭に求めることができる。

6号竪穴建物（SC-6，図9・11，図版8・44）

調査区南東部の DS-22・23 区のⅣ層上面でＬ字形に弧を描く掘り形の一部を確認でき，SC-6 とした。隅丸の方形または長方形の掘り形と考えられる。塹壕の壁面で観察すると，周壁の立ち上がりは緩やかである。位置関係から SC-5 に切られる可能性が高い（図 9，図版 8-2）。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，Ⅳ層起源の浅黄色砂質土の小塊が点々と混じるため，やや淡い黒褐色の土色を呈する。浅黄色砂質土塊が混じることから，人為的に埋め戻された可能性が高い。

SC-6 は掘り形の一部しか確認できておらず，出土遺物も少ない。しかも，掘り形埋土から出土した遺物は，鉢の胴部上半の破片 1 点だけである（図版 44-2）。外面に草本類の茎を利用したと考えられる縦方向の擦過痕が残り，内面には下から上方へのケズリ調整を施す。器面調整の特徴から，弥生時代中期後葉～後期中葉のものと考えられる。

上部Ⅲ層部分から出土し図化できた遺物も，甕の口縁部と底部の破片，高坏の口縁部の破片と限られている（図 11-1 ～ 3）。1 は緩やかに「く」字形に屈曲させる甕の口縁部。口縁端面を横ナデ調整するため，口縁下面に粘土の小さな撚れが生じている。2 は甕の外底部の剥離した破片で，接合面

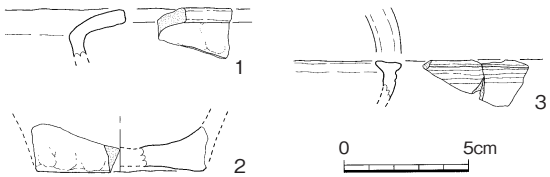


図11　SC-6 上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）

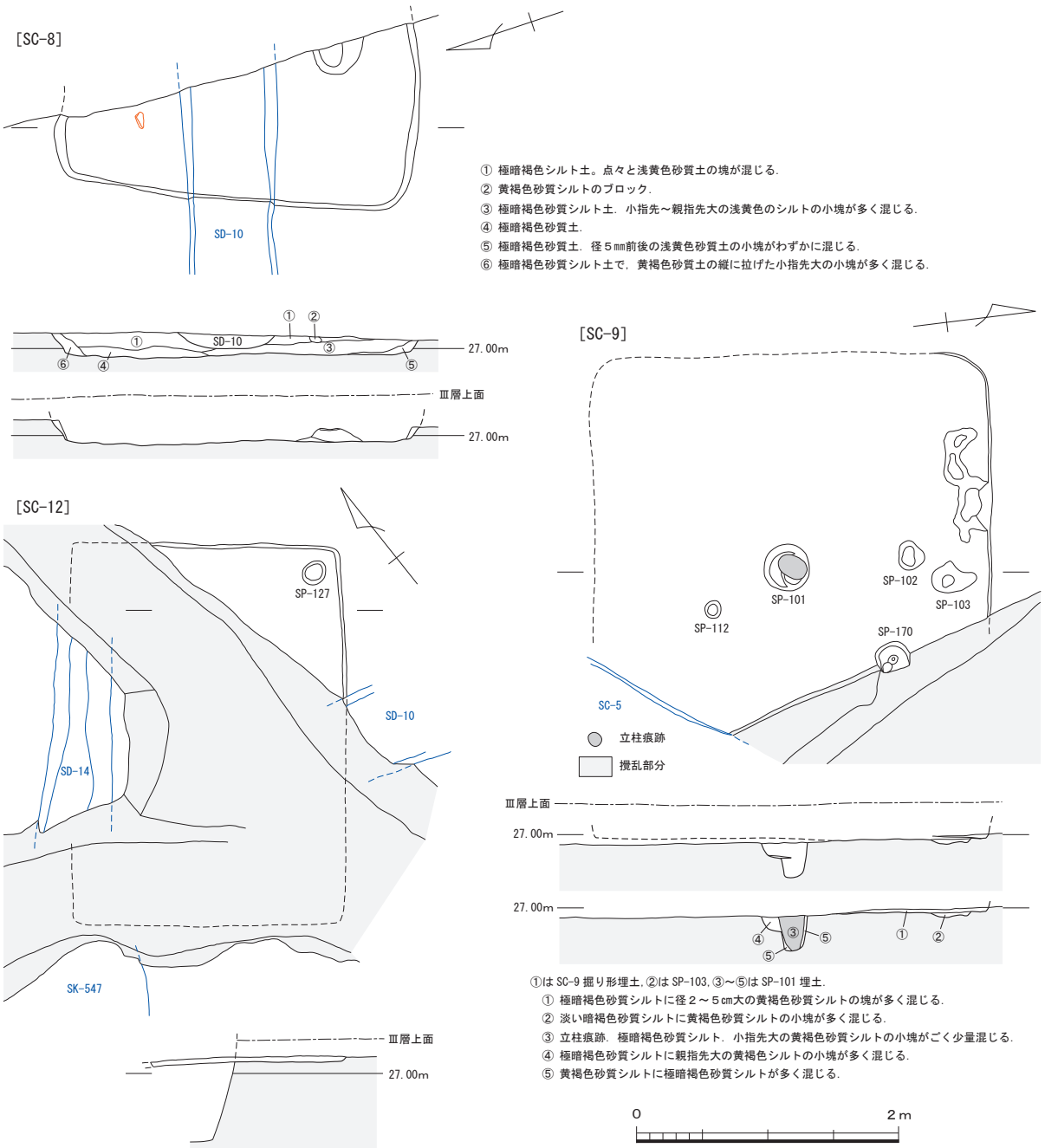


図12　SC-8・9・12 遺構実測図（縮尺 1/50）

には指頭圧痕が残る。3（図版 44-3）は口縁端部を内側に折り曲げて拡張し，口縁部直下に 2 条の沈線をめぐらす。口縁上端面には横ナデ調整によってごく浅い凹線状の窪みが生じている。これらは SC-6 掘り形の北角に当たる DS-22-24 区のⅢ層部分から出土し，弥生時代中期後葉～後期初頭の時間幅に収まる。後期初頭の SC-5 に切られることからも，SC-6 は弥生時代中期後葉に比定しておく。

8号竪穴建物（SC-8，図12～14，図版9・44・137）

調査区南西部の DS-23・24 区のⅣ層上面で検出した（図版 9-1）。東側は 12 次調査区にのびるが，

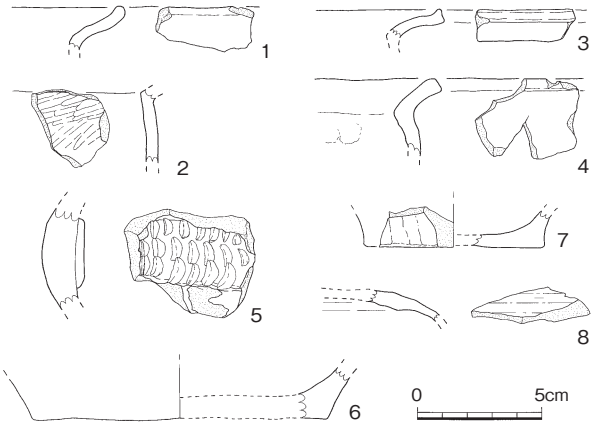


図13　SC-8 出土土器実測図
（1・2：掘り形埋土，3〜8：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

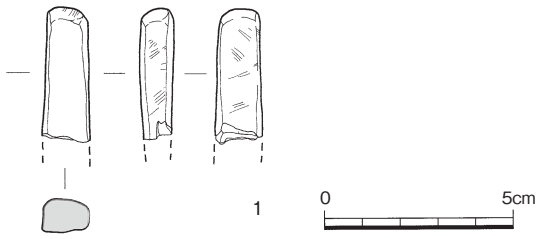


図14　SC-8 出土石器実測図（縮尺 1/2）

確認できていない。そのため，土壙の可能性も残るが，南北辺は 2.72 mと，SC-4 や SC-6 の短辺に近いため，竪穴建物として報告しておく。

隅丸の方形または長方形の掘り形で，Ⅳ層上面からの深さは17㎝前後を測る。SD-10 に切られる。床面の南半部には高さ 7 〜 8㎝の瘤状の高まりが残されている。Ⅳ層起源の黄褐色や浅黄色の砂質土塊が混じる極暗褐色シルト〜シルト質砂で埋積されており，人為的に埋め戻されているものと考える（図 12，図版 9-2）。

掘り形埋土からは，炭化物の小片が点々と出土するとともに，少量の弥生土器と石器が出土している（図 13-1･2, 図 14-1）。図 13-1･2 は，甕の「く」字形口縁部の破片で，1 は口縁上面にかなり強い横ナデを施す結果，受け口状の口縁に仕上げられる。2 は口縁部の付け根付近の破片で，「く」字形に強く屈折する口縁部がつくと考えられる。図 14-1 は（図版 137-3）石鑿の基部の破片と考えた。棒状の黒色の塩基性岩を用い，全体の形状は不明で，残存重量は 7.6g を測る。

上部Ⅲ層部分から出土した遺物は，弥生土器がほとんどであるが，1 点だけ須恵器が混じる（図 13-3 〜 8）。3 は掘り形南西部に当たる DS-23-19 区，4 は中央部西よりに当たる DS-23-18 区，5 は南壁沿い当たる DS-23-13 区，6・7 は掘り形北角に当たる DS-24-3 区のⅢ層部分から出土している。3 は「く」字形口縁の甕で，横ナデ調整で口縁端部をわずかに摘み上げる。4 も「く」字形口縁の鉢であるが，口縁部を緩やかに屈曲させる厚手のつくりである。5（図版 44-4）は，大型壺の頸部付け根の破片で，低いベルト状の突帯を貼り付け，爪で上から下へ刻目を三段，反時計回りに施文する。6 は壺または鉢，7 は甕の平底の破片である。これらの中で，弥生時代後期初頭の 4 を除いて，いずれも弥生時代中期後葉に比定できる。8 は須恵器の坏蓋の破片である。天井部が若干膨らみをもち，古墳時代後期の 6 世紀後半期〜末と考えられる。古墳時代後期の SD-10 と重複する DS-23-18 区部分から出土しており，SD-10 からの紛れ込みである。

以上の遺物は，須恵器を除き，SC-8 の埋没過程で流入したものである。その中で，掘り形埋土から出土した甕（図 13-1・2）は弥生時代中期後葉に比定できる。その一方で，上部Ⅲ層から出土した鉢(図 13-4)は後期初頭の特徴をもつ。ここでは，掘り形埋土出土遺物を指標として，SC-8 は弥生時代中期後葉に埋没する竪穴建物と捉えておく。

9号竪穴建物（SC-9，図12・15，図版44・45）

調査区南東部の DT-22・23 区で，Ⅳ層上面まで掘り下げた時点で，黒褐色〜極暗褐色の砂質シルトに黄褐色砂質シルトの小塊が斑文状に多く混じるＬ字形に残る掘り形を確認できた（図 12，図版 7-1）。炭化物の小指先大のブロックが散見される。また，1.3 mほど離れた位置に立柱痕跡をもつ SP-101 を確認できたので，SP-101 を主柱穴とする一辺 3 mほどの隅丸方形の竪穴建物を復元した。Ⅳ層起源の黄褐色砂質シルト塊が多く混じることから，人為的に埋め戻されている可能性が

高い。SC-5 と切り合うと考えられるが，先後関係は不明である。北壁沿いの床面では，深さ 6 ～ 7cmの不整形の窪みを確認できた。浅い窪みであるが，SC-5 の SK-104 と同じく，出入り口と考える。柱穴である SP-101 は径 35cmの円形の掘り形をもち，床面から 10cmほど掘り，さらに北半部をさらに 16cmほど掘り込み，先端が尖りぎみの柱を打ち込む。立柱痕跡は径 16 × 22cmを測る。掘り形埋土は，極暗褐色砂質シルトが多く混じる黄褐色砂質シルトや，親指先大の黄褐色シルトの小塊が混じる極暗褐色砂質シルトである。

この他，床面では SP-102・103・112・170 を検出した。ただし，SC-9 に伴うかは不明である。SP-102 は径 20 ～ 22cm，深さ 9cmほどの不整円形の小穴である。埋土は黒褐色砂質シルトで，淡い黄褐色砂質土の小魂が点々と混じる。SP-103 は長さ 35cm，幅 2cm，深さ 7cmの不整形の窪みである。埋土は黒褐色砂質シルトで，黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じり，輪郭も曖昧であった。炭化物片が出土。SP-112 は，径 13cm前後の深さ 8cmほどの円形の小穴である。埋土は極暗褐色砂質シルト。SP-170 は東半部を塹壕で破壊されている。径 25cmの円形の皿状の窪みである。埋土は極暗褐色砂質シルトである。

SC-9 の掘り形埋土部分は，遺構検出時にはほとんど残っていなかったため，遺物は出土していない。報告する遺物は上部Ⅲ層部分から出土したものばかりである（図 15-1 ～ 14）。図 15-1 は掘り形西壁近くに当たる DT-23-4 区Ⅲ層，2 は掘り形南西角に当たる DT-22-19 区Ⅲ層最下面，3 は SP-112 南側の掘り形南半部に当たる DT-22-18 区Ⅲ層，4 は掘り形北西角付近に当たる DT-23-9 区Ⅲ層，14 は同下部，5 は SP-102 周辺の掘り形北半部に当たる DT-23-3 区Ⅲ層下部，6 は SP-102 東側の掘り形北半部に当たる DT-23-2 区Ⅲ層下部，7・9・10・12 は掘り形中央の SP-101 東側に当たる DT-22-22 区Ⅲ層，8 は西壁近くに当たる DT-23-4 区Ⅲ層，そして 11・13 は SP-102 周辺の掘り形北半部に当たる DT-23-3 区Ⅲ層最下部から出土した。以上の中で，図 15-2・4 ～ 6・11・13 はⅢ層でも下部～最下面から出土しており，SC-9 の掘り形埋土に伴うものと考える。

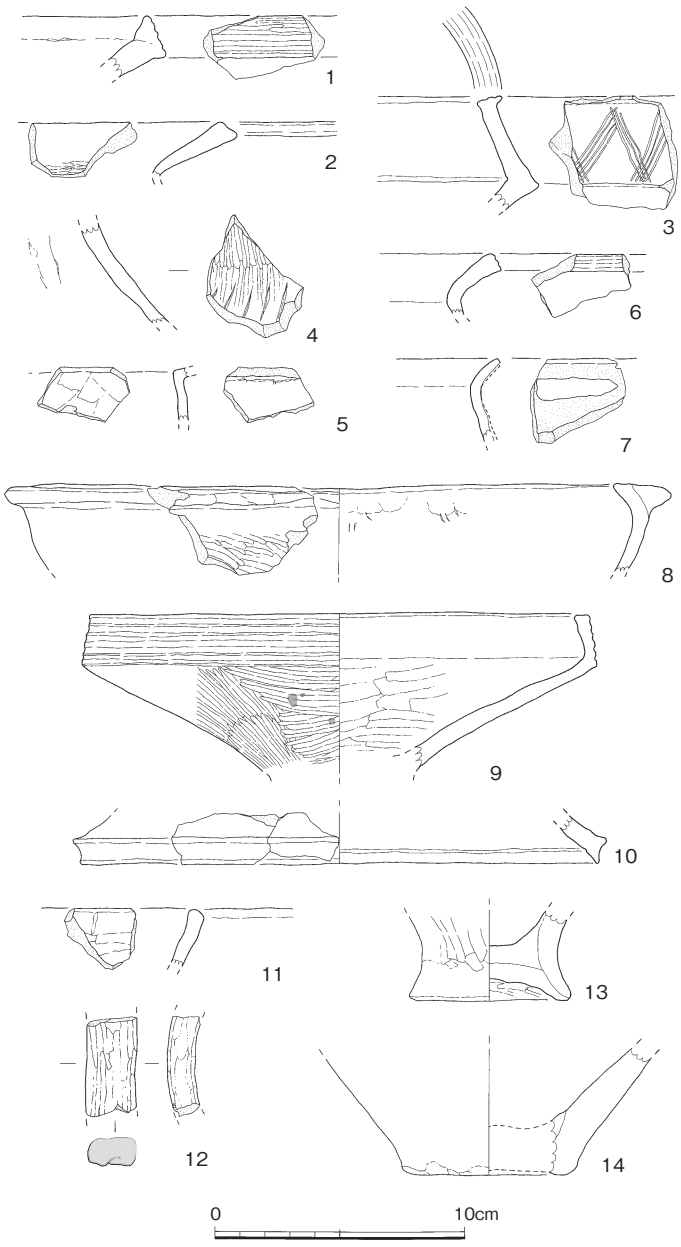


図15　SC-9 上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺 1/3）

図 15-1（図版 44-5）は壺の口縁部破片で，口縁端上面に粘土を貼り付けて口縁端面を拡張し，先端が細い棒状工具で 4 条の沈線様の凹線文を施す。2 は無頸壺と考えられる口縁部破片。口縁端面を横ナデ調整で拡張する。口縁端面に赤色顔料が付着する。3（図版 44-6）は複合口縁壺の口縁部破

片。複合口縁外面には複線山形文を連続して施文。口縁上端を外方に引き出し，2 条の沈線様の凹線文をめぐらす。4（図版 44-7）は壺の肩部破片。頸部から肩部へ移行する部分に，縦方向のミガキ調整の後に，「ノ」字形の短斜線文を施文する。5 は「く」字形に屈折させる口縁部をもつ甕の破片。口縁部を屈折させる際に用いた篦状工具の圧痕が屈折部に残る。その後，横ナデ調整を施す。内面は下から上方に向けて篦状工具でナデ上げる。6（図版 44-8）は緩やかに「く」字形に屈曲する甕の口縁部破片。口縁端面には浅く不明瞭な擬凹線文が 2 条めぐる。7 は「く」字形口縁の甕の破片。器表面の荒れが著しく，外面は薄く器表面が剥離している。8（図版 44-9）は高坏で，口縁端部の外方に粘土を貼り付け，断面Ｔ字形の口縁部につくる。口縁部周辺は篦状工具でナデ付けた後に横ナデ仕上げ，坏部外面にはミガキ仕上げを施す。9（図版 45-1）は全周の 1/5 ほどの坏部の破片。口縁部には幅 2㎜の細い波板状の凹線文がめぐる。口縁上端面には横ナデ調整で凹線状の窪みが生じている。杯部外面には暗文風のミガキを交差させる。内面は篦状工具で器表面を掻き取り，横方向のミガキ調整で仕上げる。10 は高坏の脚裾部の破片。口縁端面を上下に拡張し，端面を大きく窪ませる。その結果，下端が摘み出されたようになっている。内面には沈線が 1 条めぐる。11 は深鉢型の鉢の口縁部破片。外面には横ナデ調整を施し，内面には幅 1㎝ほどの篦状工具によるで横ナデ調整の痕跡が残る。12 は把手破片。やや乱雑なミガキ調整で仕上げている。13（図版 45-2）は甕の底部破片で，裾部が「ハ」字形に開く厚い上げ底である。破面の粘土接合線の観察から，作業台の上に外底に当たる粘土円盤を据えて，側面から粘土板を接合し，内底部を充填する成形過程を復元できる。また，底裾の破面が尖り，全体としてクレーター状に窪むことから，焼成破裂を生じている可能性が高い。14 は厚手の平底である。壺もしくは鉢と考えられる。

以上，SC-9 の掘り形埋土から出土したものはないが，上部Ⅲ層でも下部～最下面から出土した土器（図 15-2・4 ～ 6・11・13）は，SC-9 が人為的に埋め戻された際に流入した遺物と考えられる。いずれも弥生時代中期後葉～後期初頭の時間幅に収まる。一方，他のⅢ層出土土器も，その可能性があり，その中でも，緩やかに「く」字形に口縁部が外反する甕（図 15-7）は，長胴がつくと考えられ，後期中葉の特徴を備える。また，直接の切り合い関係は確認できなかったが，位置関係から後期初頭の SC-5 や中期後葉の SC-6 と同時併存したことは考えられない。したがって，SC-9 の廃絶時期は，弥生時代後期中葉に求めることができる。

12号竪穴建物（SC-12，図12，図版45）

調査区東部の DT-24 区に位置する。Ⅳ層上面で検出したが，非常に浅い掘り形しか確認できなかった。塹壕西側の SD-14 の調査時に，土層断面で SC-12 の掘り込みを確認できず，さらに西側でも掘り形を検出できなかったので，SD-14 に切られていると判断した。短辺 2.1 m，長辺 2.9 m ほどの長方形の竪穴建物を復元した（図 12）。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土が散漫に混じり，淘汰は悪い。

北東角近くの床面で SP-127 が出土した。長径 20㎝，短径 17㎝の長円形の掘り形をもち，床面からの深さは 5㎝ほどで，底面には細かな凹凸がある。長方形の小型竪穴建物で床面の四隅に柱穴が配置される SC-98 の事例があるので，SP-127 を SC-12 の柱穴と考えた。掘り形埋土は極暗褐色シルトである。

SC-12 の掘り形埋土からは遺物は出土していない。また，上部Ⅲ層部分から出土した遺物も確認できなかった。唯一，掘り形東壁周辺に当たる DT-24-2 区のⅢ層部分から弥生土器の小片 2 点が出土したのみである。1 点は壺の胴部破片である。やや厚手の器壁をもち，外面は縦方向の非常に丁寧なナデ調整を施す（図版 45-3）。こうした調整手法は弥生時代中期後葉～後期前葉の壺に一般的に見られる。また，SC-12 は弥生時代後期前葉に埋没する SD-14 や SK-547 と重複する。したがって，SC-12 の最終埋没時期は弥生時代中期後葉～後期初頭と捉えておきたい。

25号竪穴建物（SC-25，図16～22，図版10・11・45～47・135・146・149）

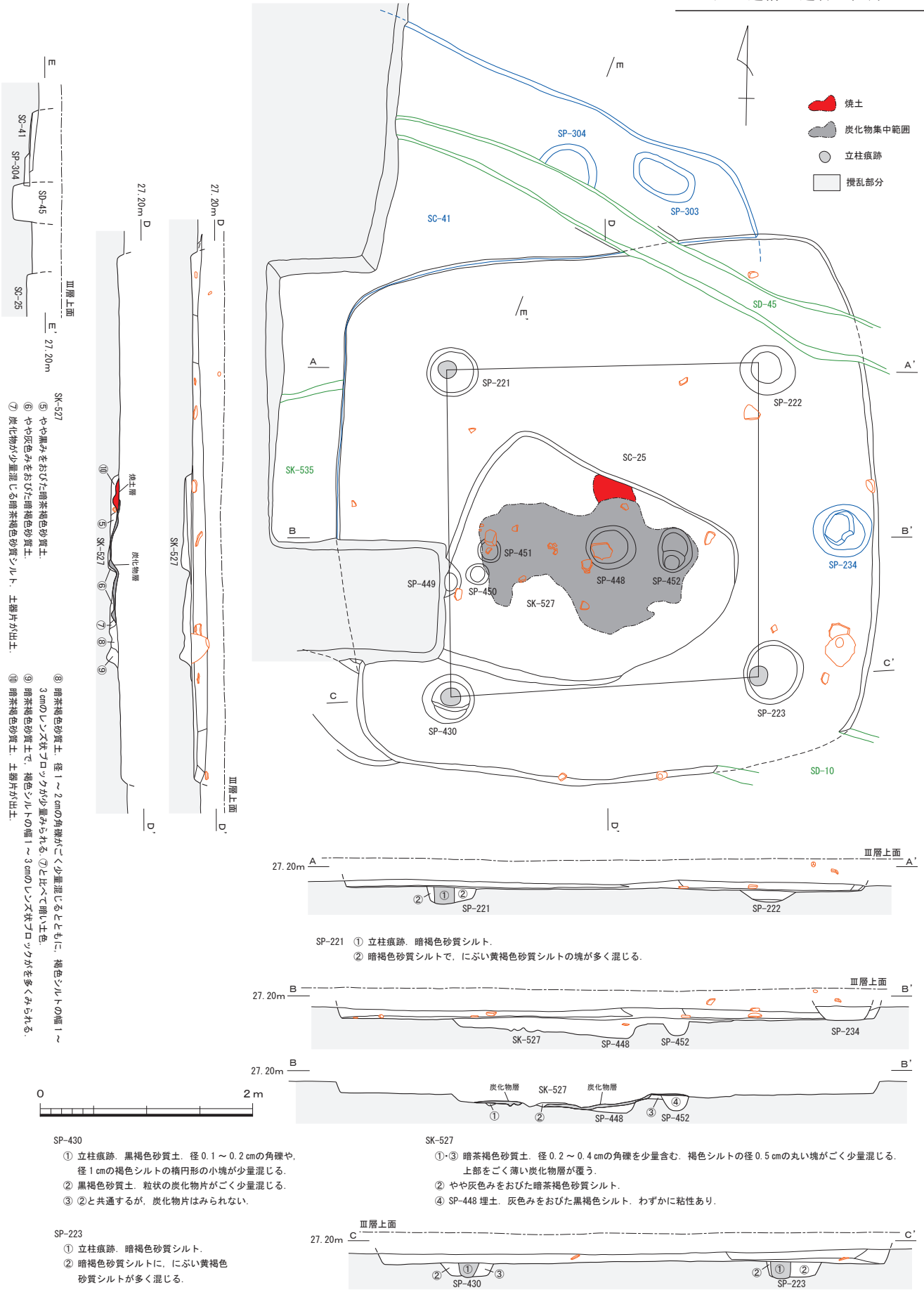
調査区のほぼ中央部に当たるDV・DW-24・25区に位置する。Ⅳ層上面で掘り形の平面形を検出できた(図版10-1)。掘り形は短辺4.95ｍ，長辺5.08ｍの隅丸方形である。SP-221・222・223・430を柱穴とし，中央に炉跡と考えられるSK-527が伴う住居跡である（図16，図版10-2)。SC-41・42・44・536を切り，SD-10・45，SP-234に切られる。掘り形埋土の上部は，径0.2～0.4cmの細礫が混じる暗茶褐色砂質土，下部はやや灰色みをおびる暗茶褐色の砂質シルトである。上部から下部への埋土の変化は漸移的である。また，全体にⅣ層起源の浅黄色～にぶい黄褐色のシルト質砂の小塊が点々と混じる。人為的に埋め戻されていると判断した。

床面の中央に位置するSK-527は，長さ2.63ｍ，幅2.3ｍ，床面からの深さ8～19㎝の不整形の掘り形をもつ（図版10-1，11-1)。中央には凹レンズ状に炭化物や焼土が集積する。埋土は暗茶褐色の砂～砂質シルトで，底面は凹凸が著しく，部分的に小穴状となるため，SP-448・449・450・451・452とした。この中で，SP-449は下層のSC-536の主柱穴であるが，他のSP-448・450・451は暗褐色砂質土の埋土をもち，炉跡に伴う施設である可能性が高い。

柱穴であるSP-221は，径46～49㎝，床面からの深さ16㎝の円形の掘り形をもち，北西側に偏って径17㎝の立柱痕跡を確認できた。底面に柱を立て，にぶい黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じる暗褐色砂質シルトで固定している。SP-222は，長径53㎝，短径47㎝，床面からの深さ11㎝の長円形の掘り形をもつ。降雨のため掘り形が崩れ，立柱痕跡は確認できなかった。埋土は極暗褐色砂質シルトで，小豆大～親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。SP-223は，長径59㎝，短径54㎝，床面からの深さ16㎝の長円形の掘り形をもつ。掘り形の西に偏った位置で径17㎝の立柱痕跡を確認できた。柱を立てる底面部分を若干掘り窪め柱を立て，にぶい黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じる暗褐色砂質シルトで埋めて固定する。SP-430は，長径49㎝，短径46㎝，床面からの深さ14㎝の長円形の掘り形をもつ。北半部を深く掘り下げ，さらにSP-223と同じく，柱を立てる部分を若干掘り窪め，径19㎝の柱を立てる。掘り形埋土は極粗砂が混じる黒褐色砂質土である。柱間は，SP-223･430間は2.9ｍ，SP-430・221間は3.08ｍを測り，SP-221・222間も3.0ｍ，SP-222・223間も2.9ｍと，ほぼ一定している。

SC-25の掘り形埋土や上部Ⅲ層部分，SK-527などから，多くの遺物が出土している（図17～22)。

掘り形埋土からは，弥生土器（図17-1～21)，敲石（図21-3)，鉄鏃（図20-1）が出土している。図17-1は床面に貼り付いた状態で出土した「く」字形に屈折する口縁部をもつ小型甕である。2・12は掘り形南西隅の埋土中から出土。2は「く」字形に屈折する口縁部をもつ甕。12は壺で，緩やかに反転する頸部の付け根に断面台形の突帯を貼り付ける。突帯の上端に細い棒状工具を押さえつけるため，沈線状となる。8・18は掘り形南壁沿いに落ち込んだような状態で出土している。周壁板の裏込めに混入した遺物と考えられる。8は器壁の厚さから鉢と判断した。18（図版46-3）は小さな凸レンズ状の甕の底部破片で，外面は二次的な火熱を受け赤変する。4・6はSK-527上面から出土し，4（図版45-6）はⅢ層最下面から出土した破片と接合復元できた。4はやや肩部が張る鉢で，緩やかに「く」字形に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は横ナデ調整で面取りする。胴部下半は二次的な火熱を受け，赤変するとともに，煤が付着する。6（図版45-7）は裾部が「ハ」字形にひろがる高い脚台状の甕の底部破片である。20と21は，折り重なるようにして掘り形南東隅で床面からやや浮いた状態で，3は21の南側で床面から若干浮いた状態で出土している。また，16は同一個体と考えられる3片の破片が埋土中及び上部Ⅲ層部分から出土した。20は不安定な平底をもつ壺。21は平底の壺の胴下半部の破片で，胴部外面には焼成破裂痕と考えられる円形の剥離痕が重複している。ただし，器壁が厚く，焼



SK-527
⑤ やや黒みをおびた暗茶褐色砂質土.
⑥ やや灰色みをおびた暗褐色砂質土.
⑦ 炭化物が少量混じる暗茶褐色砂質シルト．土器片が出土.
⑧ 暗茶褐色砂質土．径 1 ～ 2 cmの角礫がごく少量混じるとともに，褐色シルトの幅 1 ～ 3 cmのレンズ状ブロックが少量みられる．⑦と比べて暗い土色.
⑨ 暗茶褐色砂質土で，褐色シルトの幅 1 ～ 3 cmのレンズ状ブロックを多くみられる.
⑩ 暗茶褐色砂質土．土器片が出土.

SP-221
① 立柱痕跡．暗褐色砂質シルト.
② 暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色砂質シルトの塊が多く混じる.

SP-430
① 立柱痕跡．黒褐色砂質土．径 0.1 ～ 0.2 cmの角礫や，径 1 cmの褐色シルトの楕円形の小塊が少量混じる.
② 黒褐色砂質土．粒状の炭化物片がごく少量混じる.
③ ②と共通するが，炭化物片はみられない.

SP-223
① 立柱痕跡．暗褐色砂質シルト.
② 暗褐色砂質シルトに，にぶい黄褐色砂質シルトが多く混じる.

SK-527
①･③ 暗茶褐色砂質土．径 0.2 ～ 0.4 cmの角礫を少量含む．褐色シルトの径 0.5 cmの丸い塊がごく少量混じる．上部をごく薄い炭化物層が覆う.
② やや灰色みをおびた暗茶褐色砂質シルト.
④ SP-448 埋土．灰色みをおびた黒褐色シルト．わずかに粘性あり.

図16　SC-25・41 遺構実測図（縮尺 1/50）

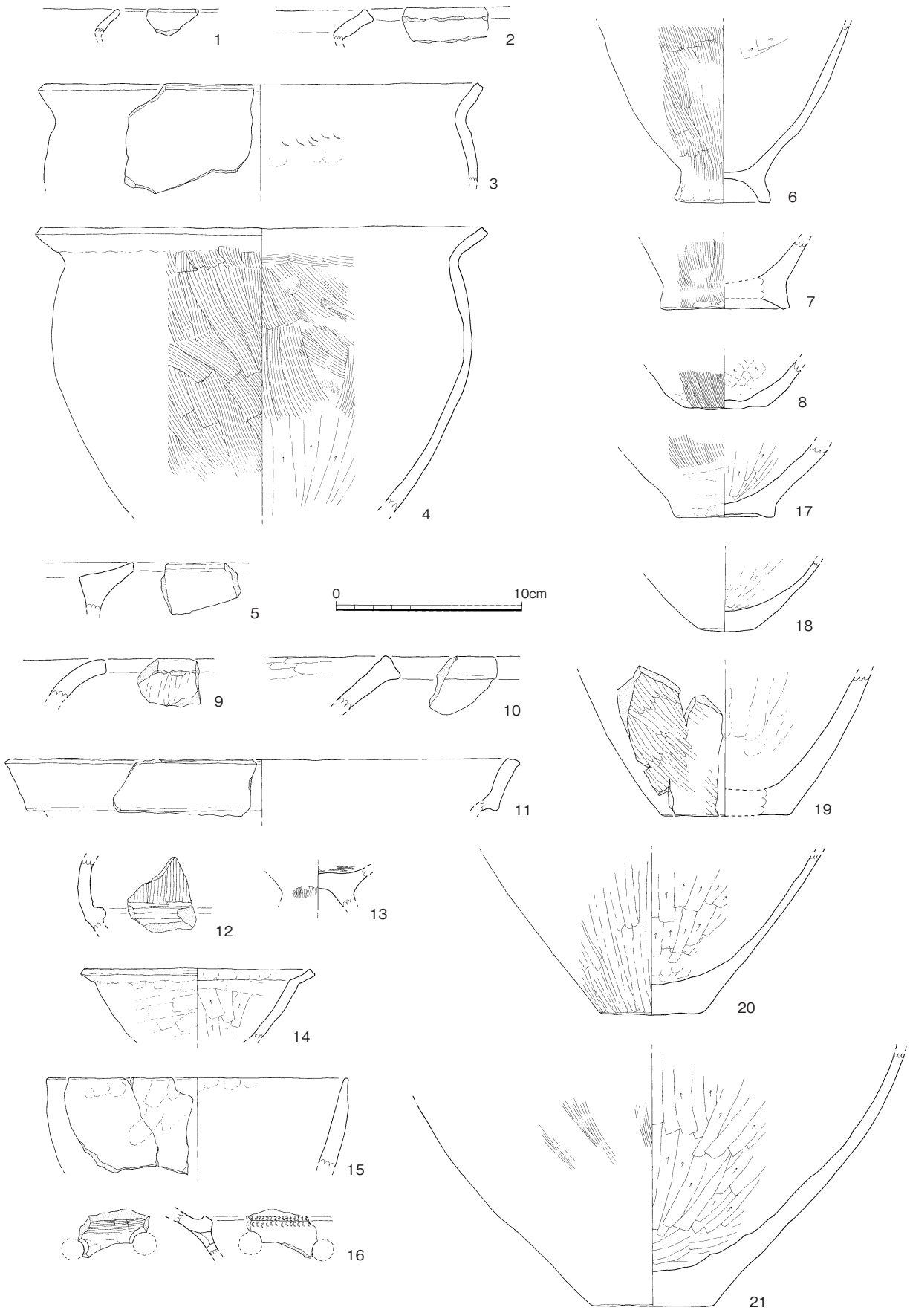


図17　SC-25 掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）

成破裂で器体に穴はあいていないと考えられる。16（図版 46-1）は高坏の脚端部分の破片。脚端部が箍状に突出して反転する。箍部の端面に径 2㎜の半截竹管で細く鋭いC字文を方向違いに施文する。また，同様の文様を箍部の上下にもめぐらす。この種の文様は分銅形土製品にもみられる（図版 148-5・6）。推定径 12 ㎜ほどの小孔を焼成前に穿孔する。

この他，掘り形埋土から出土した5（図版 45-8）は，山ノ口式系土器の甕の口縁部破片で，逆L字形の口縁部をもち，口縁端面には横ナデ調整で窪みが生じている。7 は裾部が短く「ハ」字形にひらく高台状の甕の底部破片。他の遺物とは時期差があり，周辺及び下層の遺構埋土からの混入品と考える。9・10 はラッパ形に開く広口壺の口縁端部の破片で，10 は口縁端部の下面に粘土を貼り付け，口縁端部を拡張する。11 は複合口縁壺の口縁部破片。口縁端面に横ナデ調整の後に，沈線を 1 条めぐらす。13 は径が小さいが，鉢部内面に刷毛目調整が施されているので，脚台付き鉢の脚台付け根部分と考えた。14（図版 45-9）は鉢の胴部～口縁部の破片で，指先で口縁部を折り曲げ成形するため，口縁部の内外に指頭圧痕が残る。15（図版 45-10）は直立する口縁部をもつ深鉢型の鉢の口縁部破片。口縁部先端を摘むように成形する。17（図版 46-2）は胴部の開き具合，器壁の厚さから鉢と考えた。19 はやや不安定な平底の壺の破片。底部の側縁の残りが悪いため，復元底径は不確実である。

また，SC-25 の東壁沿いに落ち込んだ状態で敲石が出土している（図 21-3，図版 146-1）。方柱状の砂岩の礫の上下端部に敲打痕が残る。主面と上端部には不鮮明ながら擦痕が残る。重量 526.9g を測る。また，埋土中から鉄鏃が出土している（図 20-1）。有茎の柳葉形鉄鏃で，茎部は矩形の断面形で，先端部を欠損する。鍛造品。錆化により断面が膨らむが，数回折り返している状況を観察できる。重量は 9.3 g を測る。

SK-527 からも炭化物や焼土に混じり，遺物が出土している（図 18-1 ～ 8）。図 18-1 は SK-527 掘り形北西部，2・4・5 は南東部，3 は掘り形中央に設定した先行トレンチ部分の埋土部分から出土している。6 は SK-527 の埋土から出土した破片と SC-25 の掘り形埋土の出土した破片が接合した。8 は掘り形北半部の焼土ブロックの下層から出土した。1 ～ 3

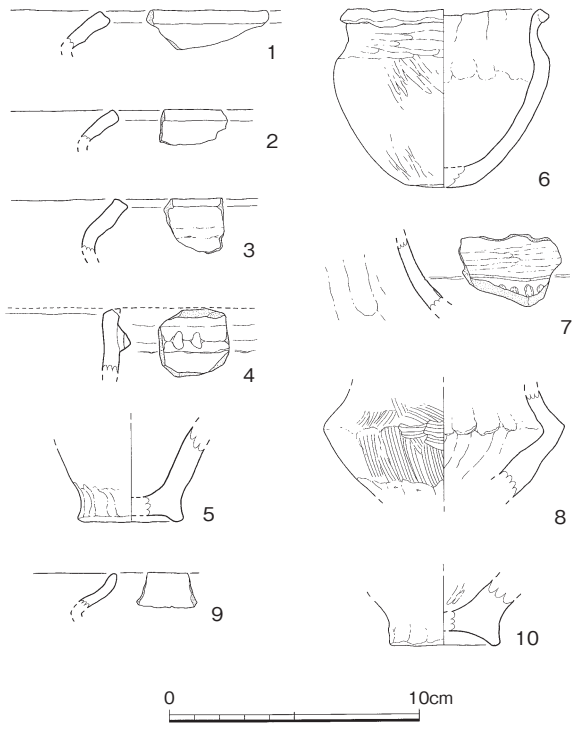


図18　SC-25内SK-527（1～8），SP-223（9・10）出土土器実測図（縮尺 1/3）

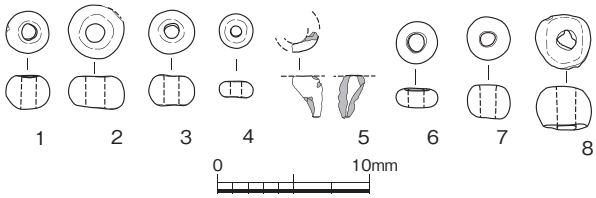


図19　SC-25内SK-527 出土ガラス小玉実測図（倍尺 2倍）

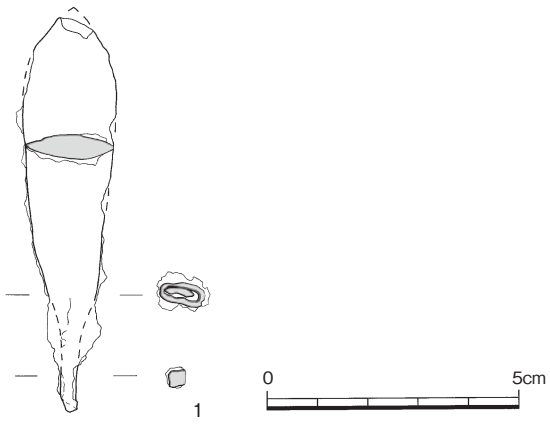


図20　SC-25 出土鉄器実測図（縮尺 2/3）

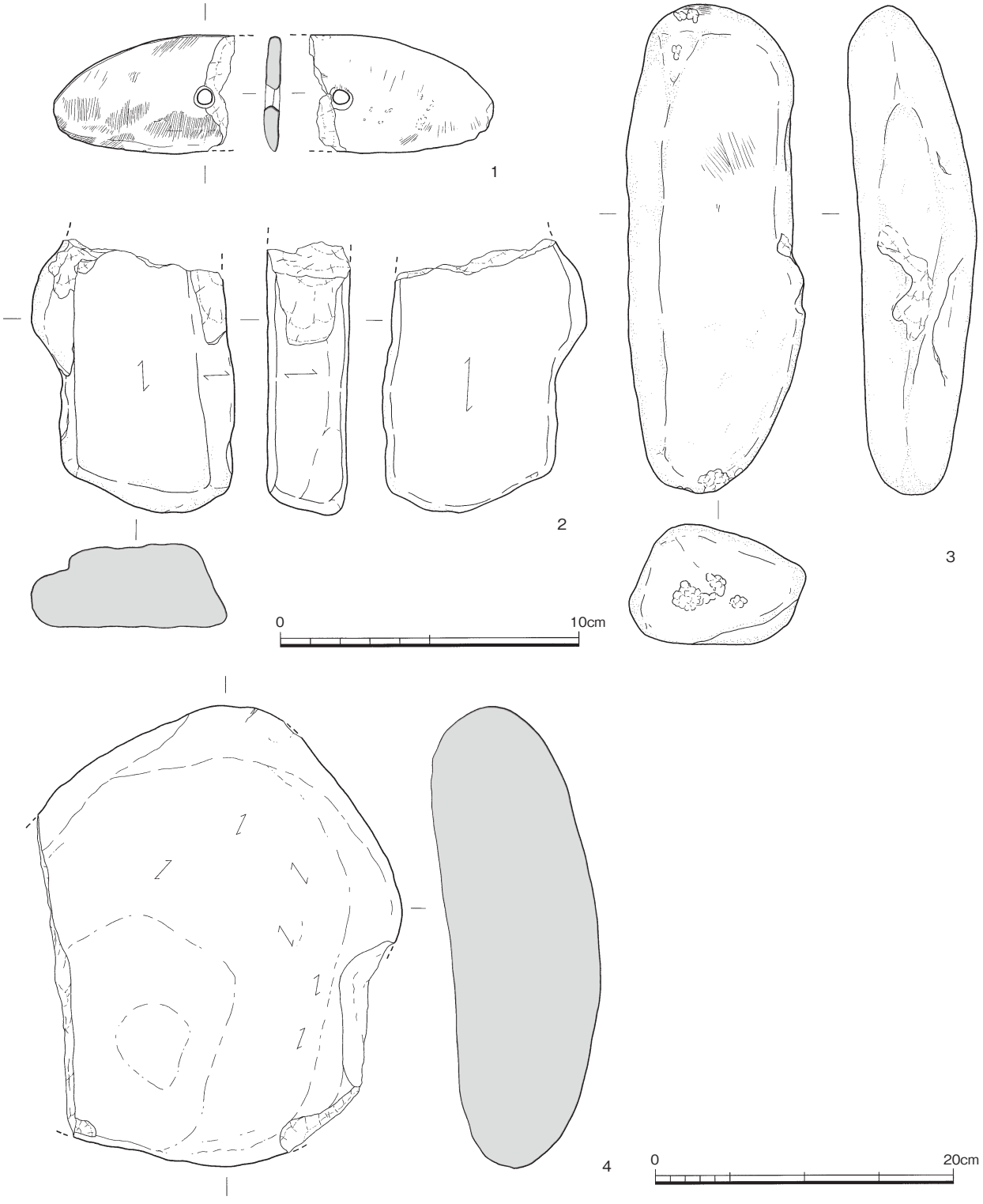


図21　SC-25 出土石器実測図
（1：SC-25内SK-527，2：SC-25内SP-223，3：掘り形埋土，4：SC-25内SP-234，縮尺 1/2，1/4）

は「く」字形に外反する甕の口縁部破片で，2 の口縁部下には煤が付着し，3 の外面には口縁部を屈曲させた際に生じた粘土の撚れが残る。4（図版 47-3）は口縁部下に断面三角形突帯をめぐらし刻目を施す下城式系土器の甕である。小片のため，器体の傾きは不確実である。時期的には弥生時代

中期後葉～後期前葉のもので，下層の遺構からの混じり込みの可能性が高い。5は上げ底の底部をもつ鉢と考えた。径はもう少し大きくなる可能性がある。6（図版47-6）は甕。肩部から緩やかに反転して口縁部へ移行する。口縁端部に細い突帯を貼り付ける。三角形を意識してはいるが，断面形は一定せず，部分的に台形となる。凸レンズ状に丸みをおびた底部をもつ。外面には棒状工具を擦りつけたようなミガキ調整が施されている。7（図版47-4）は壺の肩部の破片。頸部の付け根に浅く細い沈線をめぐらし，その下方に細い棒状工具を押捺して列点文をめぐらす。8（図版47-5）は小型の壺で，胴部を「く」字形に屈曲させる。器壁は厚く調整も粗雑である。外面には間隔の広い条線が残る刷毛目調整，内面には成形時の指頭圧痕が残る。

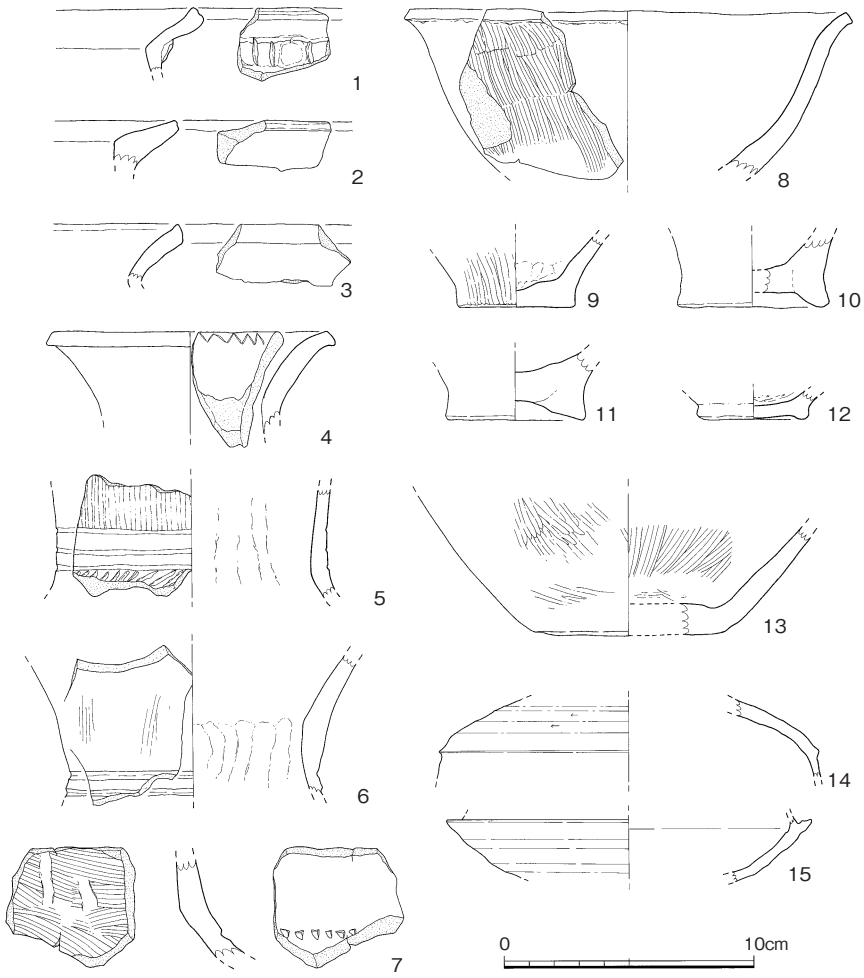


図22　SC-25 上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺 1/3）

この他，SK-527 の掘り形南西部の埋土中から，杏仁形磨製石庖丁が出土している（図 21-1，図版135-3）。片刃で，片面には自然面が残る。研磨は粗く，一部に剥離面を残す。緑色片岩製で，残存重量 22.1g を測る。さらに，SK-527 の埋土に含まれる炭化種実や炭化材を水洗選別する際に，破片 1 点を含むガラス小玉 8 点が出土した。径 2.3 ～ 3.5㎜，厚さ 1.1 ～ 2.3㎜，孔径 0.7 ～ 1.2㎜を測る。4 点は紺色，4 点はスカイブルーを呈する（図19，図版 149-1 ～ 8）。

SC-25 の柱穴である SP-223 から，弥生土器と砥石が出土している（図 18-9・10・図 21-2）。図18-9 は受け口状口縁の甕の破片。10 は低い脚台状の甕の底部破片。他に壺や甕の胴部小片 4 点がある。図 21-2 は，板状の砂岩礫の三面を使用する砥石である。主面は両面ともわずかに凹む。重量 301.1g を測る。SP-221 からは甕の胴部小片 2 点，壺の頸部と考えられる小片 1 点，SP-222 からは壺の胴部小片 1 点，SP-430 からは甕の胴部小片 2 点が出土している。器面調整の特徴から，弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。

SC-25 掘り形上部のⅢ層部分からも，比較的多くの遺物が出土している（図 22-1 ～ 15）。図 22-1 は SC-25 上部の DV-25-6 区Ⅲ層，2 は DV-24-20 区Ⅲ層最下面，3 は DV-24-24 区のⅢ層最下面，4 は DV-24-17 区のⅢ層最下面，5 は DV-24-25 区Ⅲ層，6 は DV-25-1 区Ⅲ層，7 は DV-24-22 区のⅢ層最下面，8 は DV-24-21 区Ⅲ層最下面，9 は DV-24-11 区Ⅲ層，10 は DV-24-9 区Ⅲ層，11 は DV-24-9 区Ⅲ層，12 は DV-24-19 区Ⅲ層，13 は住居床面に貼り付いた状態で出土した破片と DV-24-25 区Ⅲ層の破片が接合する。14 は DV-25-7 区Ⅲ層，15 は DV-24-23 区Ⅲ層から出土

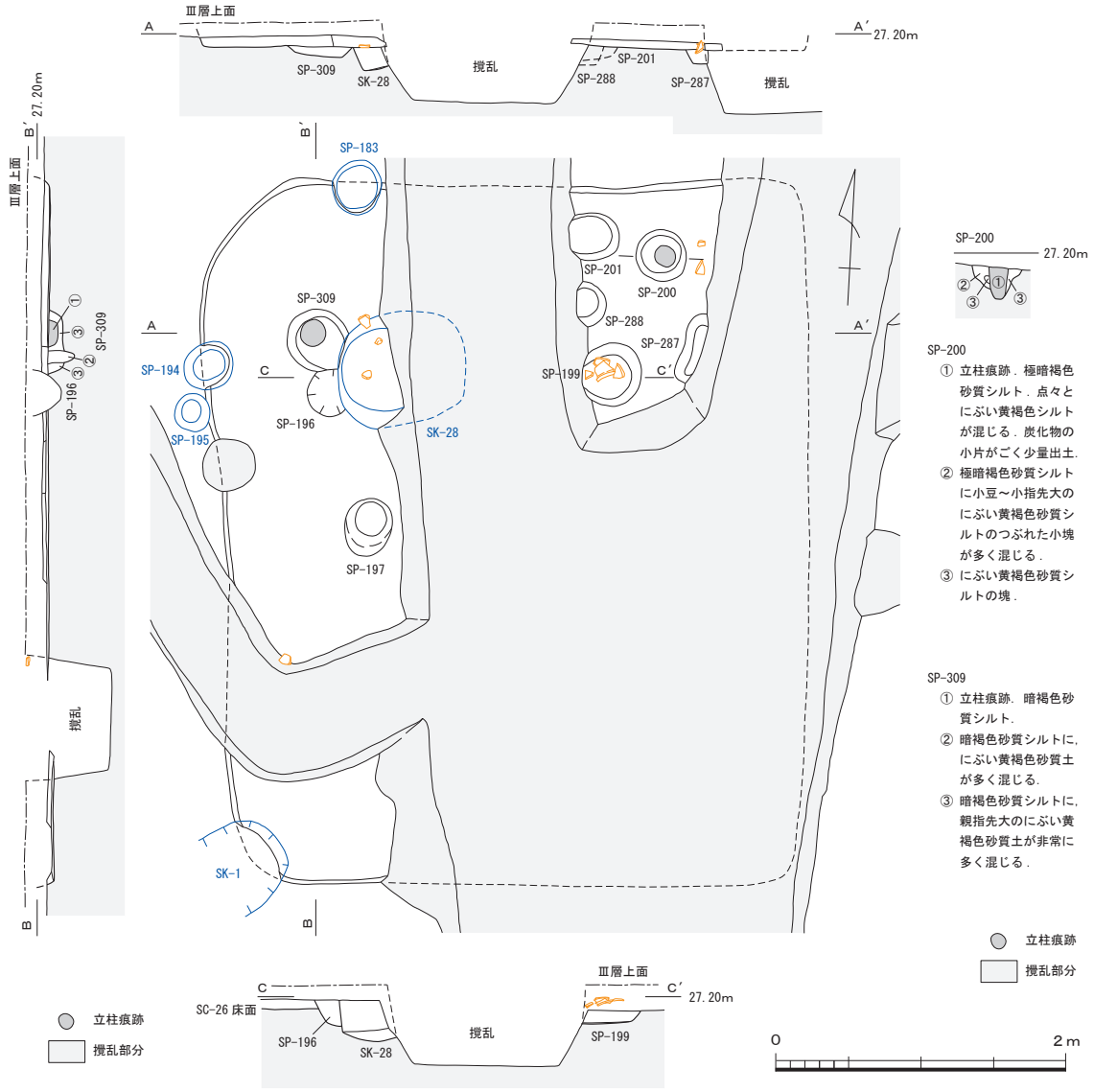


図23　SC-26，SK-28 遺構実測図（縮尺 1/50）

した遺物である。Ⅲ層最下面から出土した 2･3･4･7・8 に加え，13 が床面に貼り付いた状態で出土した破片とⅢ層出土の破片が接合しているので，これらの多くは，本来 SC-25 の掘り形埋土に包含されていた遺物と考えられる。

図 22-1 ～ 3 は甕。1（図版 46-9）は「く」字形に屈折する口縁部をもち，口縁端部に薄く粘土を継ぎ足し，端面に沈線を 1 条めぐらす。口縁屈曲部には低い突帯を貼り付け，爪で刻目を施すが，一部指先が触れて刻目が潰れている。2（図版 46-5）は山ノ口式系土器の甕の口縁部破片。内傾する逆Ｌ字形の口縁部を持ち，口縁端面には横ナデ調整で窪みが生じている。3 は「く」字形口縁をもち，口縁端部に横ナデ調整を施し上方に摘み上げたように仕上げる。4 ～ 7 は壺。4（図版 47-1）はラッパ形に開く口頸部をもち，口縁端部内面に先端が細く鋭い工具で連続山形文を施文する。5（図版 46-6）は頸部付け根付近の破片で，先端が丸く細い棒状工具で 3 条の沈線をめぐらし，下方に同じ工具を押捺して短斜線文を施文する。6（図版 46-7）は，5 と同じく撫で肩の胴部をもち，頸部の付け根付近に 2 条の沈線がめぐる。7（図版 47-2）は頸部破片。頸部の付け根に刷毛目工具の木口部の角を押捺して列点文を施文する。8（図版 46-8）は厚手のつくりの小型鉢である。口縁端面を横ナデ調整するため，下端に粘

土の撚れが生じている。9は平底の小型甕の破片。10・11は上げ底の甕の破片。12は低い高台状の底部をもつ鉢である。13（図版46-4）は凸レンズ状の壺の底部破片。14･15は須恵器で，14は坏蓋，15は坏身の破片である。この2点の須恵器はⅢ層中に掘り込まれた古墳時代後期の遺構に気がつかずに，Ⅲ層を掘り下げたため紛れ込んだ遺物と考える。

以上，多くの遺物が出土しているが，周壁板の裏込めに混入したと考えられる土器（図17-8・18）は凸レンズ底であることから弥生時代後期後葉，床面で折り重なるように出土した土器（図17-3・20・21）も後期後葉，炉跡内から出土した土器にも凸レンズ底をもつもの（図18-6）があり後期後葉に比定できる。したがって，SC-25は弥生時代後期後葉に営まれた住居跡と判断できる。

26号竪穴建物（SC-26，図23～25，図版47・48・140）

調査区中央部のDW-25・26区に位置する。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，親指先大のⅣ層起源の浅黄色やにぶい黄褐色の砂質土と小塊が多く混じるため，人為的に埋め戻されたと判断した。Ⅳ層上面での掘り形の輪郭は不明瞭で，周囲のⅣ層を含めて数cm掘り下げて，ようやく平面形を確認できた。塹壕で大部分を破壊されているが，南北長4.8m，東西幅4mほどの隅丸方形の竪穴建物を復元できる（図23）。SK-27を切り，SD-21，SK-28，SP-183・194・195・196・201に切られる。

床面では，SP-197・199・200・287・288・309が出土した。その中で，SP-200・309では立柱痕跡を確認できたが，両者を繋ぐラインは，北側周壁と斜交する。SP-200を柱穴と考えた場合，北側周壁と平行する位置には小穴はない。SP-309を柱穴と考えた場合，北側周壁と平行する位置にSP-287が位置することから，SP-309・287を北側の主柱穴と考えた。SP-287・309間は2.7m前後を測る（図23）。柱穴と考えたSP-287は，東側を塹壕で破壊されるが，南北径50cm，床面からの深さ10cmの不整長円形の掘り形をもつ。埋土は，暗褐色砂質シルトで，小豆～親指先大のにぶい黄褐色の砂質土の塊が混じる。一方，SP-309は南端部をSK-28で破壊されているが，長径50cm，短径42cmほど，床面からの深さ15cmを測る長円

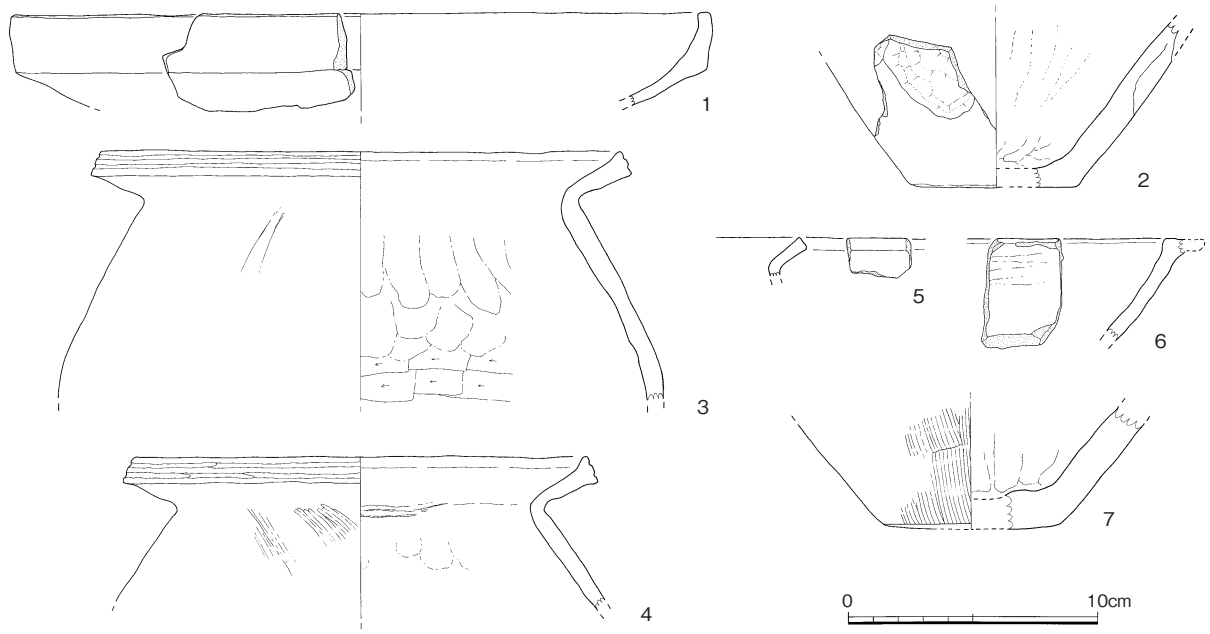


図24　SC-26，SP-119出土土器実測図
（1・2：SC-26掘り形埋土，3：SP-119，4～7：SC-26上部Ⅲ層部分，縮尺1/3）

形の掘り形をもつ。掘り形の北側寄りで径18～19cmの立柱痕跡を確認した。南側に径8～9cmの杭状の痕跡が伴う。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色砂質土が多く混じる。

この他，床面で検出したSP-197・199・200・288はSC-26に伴うかは不明である。調査所見については巻末の遺構観察表を参照されたい（表3）。

SC-26からは弥生土器・石器が出土している（図24・25）。図24-1は床面直上，図24-2と図25-1は掘り形埋土から出土。図24-3はSP-199の埋土中部～上部から出土している。4はSC-26北西部に当たるⅢ層部分から出土。6・7もSC-26北西部に当たるⅢ層部分から出土した。

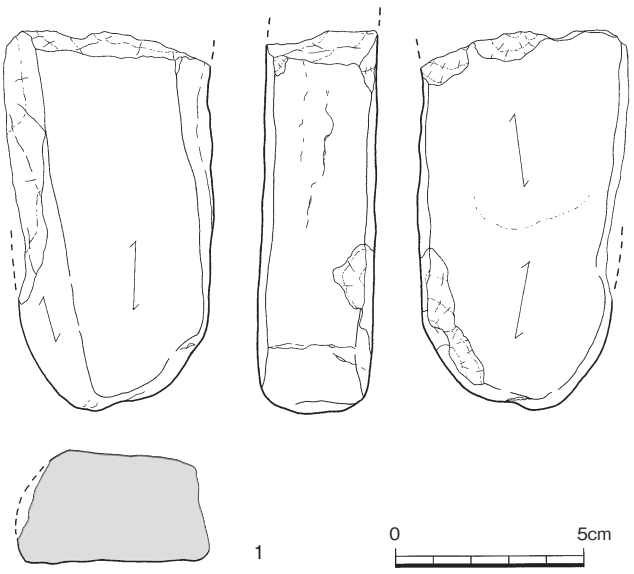


図25　SC-26出土石器実測図（縮尺1/2）

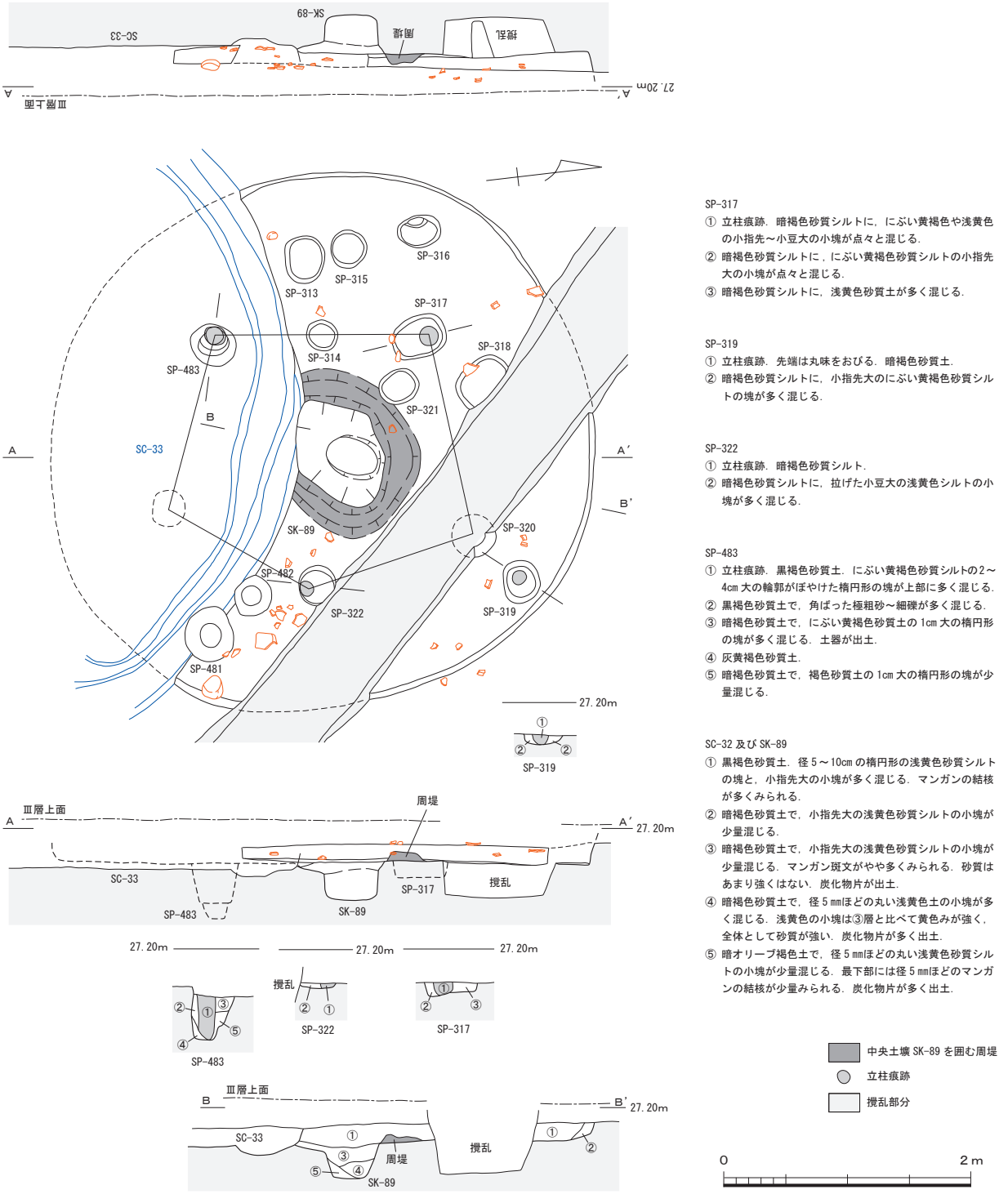
図24-1は口縁部が短く反転して立ち上がる高坏。2（図版47-8）は壺の平底の破片で，胴部下半に径5cm前後の楕円形の焼成破裂痕が生じている。図25-1（図版140-1）は細長い砂岩の亜円礫を利用した砥石である。四面を使用し，主面は両面とも中央がわずかに凹む。重量306.9gを測る。図24-3（図版48-1）は，張りが強い玉葱型の胴部をもつ甕の口縁部～胴部上半部の破片。横ナデ調整で口縁端部を拡張し，端面に凹線文状に沈線を2条めぐらす。5は「く」字形口縁の小型甕。6は高坏の坏部破片で，身が深く鋤形の口縁部がつくものと考えられる。7は壺で，不安定な凸レンズ状底をもつ。

この他，SC-26の柱穴であるSP-309の掘り形埋土からも，内外面をミガキ調整した鉢もしくは壺の胴部破片，厚手の壺の胴部破片が出土している。また，SC-26の床面で検出したSP-197からは外面を刷毛目調整し内面をケズリ調整する甕の胴部破片，外面をミガキ調整し内面を擦過調整する壺の胴部破片が出土している。いずれも調整手法の特徴から弥生時代中期後葉～後期前葉の時間幅に収まるものと考えられる。

以上の出土遺物は，床面直上から出土したものもあるが，基本的にはSC-26が廃絶して埋没する過程で流れ込んだ遺物と考えられる。その中で，床面から出土した高坏（図24-1）や，床面で出土したSP-199の埋土中から出土した甕（図24-3）は弥生時代後期初頭に比定できる。一方で，Ⅲ層からは後期後葉の凸レンズ状底をもつ甕（図24-7）が出土している。しかし，掘り形埋土から出土した遺物を重視して，SC-26の廃絶時期は弥生時代後期初頭に求めたい。

32号竪穴建物（SC-32，図26～31，図版12・13・48・49・135・137・143）

調査区南半部のDV-23・24区に位置する。SK-35を切り，南半部をSC-33に切られているが，推定径4.25ｍの円形の掘り形をもつ竪穴建物である。また，SK-540を切る。床面中央に炉跡であるSK-89，立柱痕跡を確認できたSP-317・322，SC-33の床面で検出できた立柱痕跡をもつSP-483，そしてSP-320，SC-33北西部に推定される柱穴を加えて，5本柱構造の住居跡として復元する。柱間は，SP-483・317間が1.72ｍ，SP-317･320間が約1.65ｍ，SP-320･322間が約1.43ｍを測る。SC-32の掘り形には，北側周壁沿いに小指先大の浅黄色の小塊が少量混じる暗褐色砂質土が流れ込むが，大半は径5～10cmや小指先大の楕円形の浅黄色シルト塊が多く混じる淘汰の悪



SP-317
① 立柱痕跡．暗褐色砂質シルトに，にぶい黄褐色や浅黄色の小指先～小豆大の小塊が点々と混じる．
② 暗褐色砂質シルトに，にぶい黄褐色砂質シルトの小指先大の小塊が点々と混じる．
③ 暗褐色砂質シルトに，浅黄色砂質土が多く混じる．

SP-319
① 立柱痕跡．先端は丸味をおびる．暗褐色砂質土．
② 暗褐色砂質シルトに，小指先大のにぶい黄褐色砂質シルトの塊が多く混じる．

SP-322
① 立柱痕跡．暗褐色砂質シルト．
② 暗褐色砂質シルトに，拉げた小豆大の浅黄色シルトの小塊が多く混じる．

SP-483
① 立柱痕跡．黒褐色砂質土．にぶい黄褐色砂質シルトの2～4cm 大の輪郭がぼやけた楕円形の塊が上部に多く混じる．
② 黒褐色砂質土で，角ばった極粗砂～細礫が多く混じる．
③ 暗褐色砂質土で，にぶい黄褐色砂質土の 1cm 大の楕円形の塊が多く混じる．土器が出土．
④ 灰黄褐色砂質土．
⑤ 暗褐色砂質土で，褐色砂質土の 1cm 大の楕円形の塊が少量混じる．

SC-32 及び SK-89
① 黒褐色砂質土．径 5～10cm の楕円形の浅黄色砂質シルトの塊と，小指先大の小塊が多く混じる．マンガンの結核が多くみられる．
② 暗褐色砂質土で，小指先大の浅黄色砂質シルトの小塊が少量混じる．
③ 暗褐色砂質土で，小指先大の浅黄色砂質シルトの小塊が少量混じる．マンガン斑文がやや多くみられる．砂質はあまり強くはない．炭化物片が出土．
④ 暗褐色砂質土で，径 5 ㎜ほどの丸い浅黄色土の小塊が多く混じる．浅黄色の小塊は③層と比べて黄色みが強く，全体として砂質が強い．炭化物片が多く出土．
⑤ 暗オリーブ褐色土で，径 5 ㎜ほどの丸い浅黄色砂質シルトの小塊が少量混じる．最下部には径 5 ㎜ほどのマンガンの結核が少量みられる．炭化物片が多く出土．

図26　SC-32 遺構実測図（縮尺 1/50）

い黒褐色砂質土で埋積され，人為的に埋め戻されているものと判断した（図 26，図版 12-1，13-1）。

炉跡と考えた SK-89 は，短径 70cm，残存長径 75cmの不整形の掘り形をもち，底面北半部に長径 45cm，短径 34cm，深さ 20cmの長円形の小穴が掘り込まれている。また，ほぼ南北に設定した土層観察用畦の断面では，幅 40cm，床面からの高さ 7 cmほどの高まりを観察できた。再度，床面を精査した結果，SK-89 の周囲に低い高まりがめぐることを確認できた。炉跡を囲む周堤である。SK-89

の埋土上半は，小指先大の浅黄色砂質シルトの小塊が少量混じる暗褐色砂質土層で埋積され，底面に掘り込まれた長円形の小穴部分は，浅黄色シルトの小塊が多く混じる暗褐色砂質土や暗オリーブ褐色土で埋まり，炭化物片が多く出土する。

柱穴であるSP-317は，長軸長44cm，短軸長35cm，床面からの深さ13cmの楕円形の掘り形をもち，北半部で径16～17cmの立柱痕跡を確認できた。柱は若干北に傾く。埋土は暗褐色砂質シルトで，小指先大のにぶい黄褐色砂質土の小塊が混じる。SP-320は，大半を塹壕で破壊されているが，推定径35cmの円形の掘り形をもつものと考えられる。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大の押し潰されたにぶい黄褐色砂質シルトの小塊が下部に多く混じる。SP-322は，径32cm，床面からの深さ4.5cmを測る円形の掘り形をもつ。北東端を塹壕で破壊されている。掘り形の南東部で径12～13cmの立柱痕跡を確認できた。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大の拉げた浅黄色砂質シルト塊が多く混じる。SP-483はSC-33の床面で検出した。長径39cm，短径39cm，SC-33の床面からの深さ45cmを測る長円形の掘り形をもち，西寄りで径15×17cmの立柱痕跡を確認できた。SP-320とともに炉跡のSK-89の長軸延長線上にあり，他の柱穴と比べて深い掘り形をもつ。埋土は，細礫～極粗砂が混じる黒褐色砂質土や暗褐色砂質土で，にぶい黄褐色砂質土や褐色砂質土の小塊が混じる。この他，床面ではSP-313～316・318・319・321・481・482が出土しているが，SC-32に伴うか否かは不明である。調査所見は巻末の遺構観察表を参照されたい（表3）。

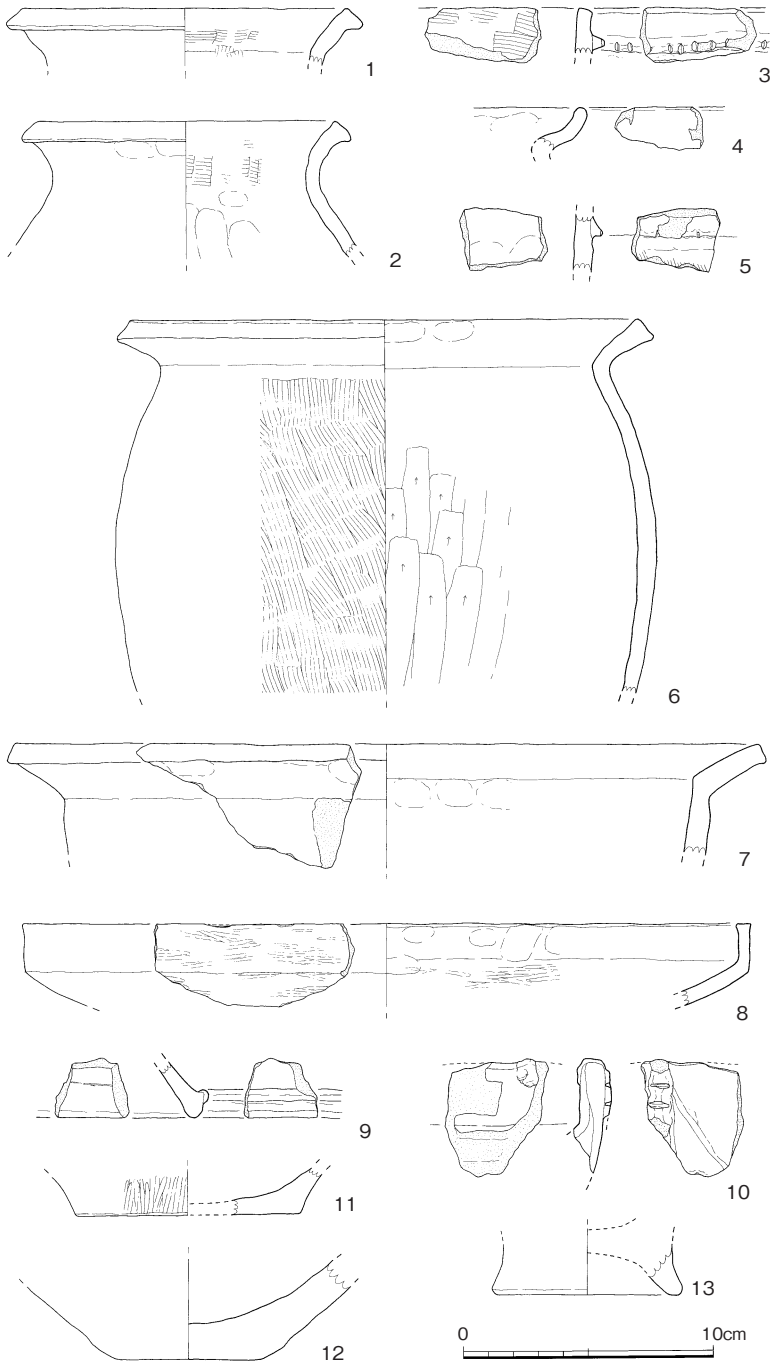


図27　SC-32 掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）

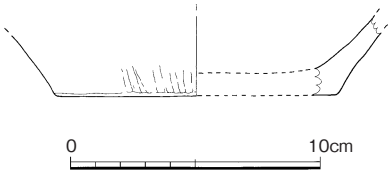


図28　SC-32内SK-89 埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）

SC-32 の掘り形埋土からは弥生土器と石器が出土している（図 27-1 ～ 13・図 31-1・3）。図 27-1 ～ 13 は掘り形埋土から出土した弥生土器で，1・2・6 は埋土下部，3・5・11 は掘り形東半部，8 は南東部上部，12 は北西部上部の埋土中，10 は床面直上から出土している。出土位置は異なるが，いずれも，SC-32 が埋め戻された際に混入した遺物である。

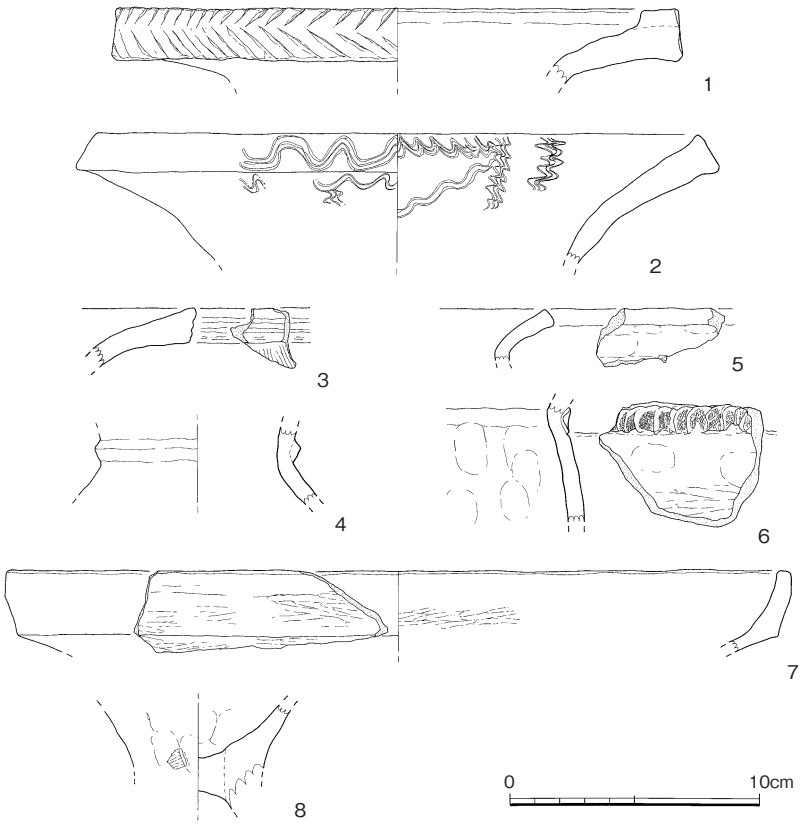


図29　SC-32 上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺 1/3）

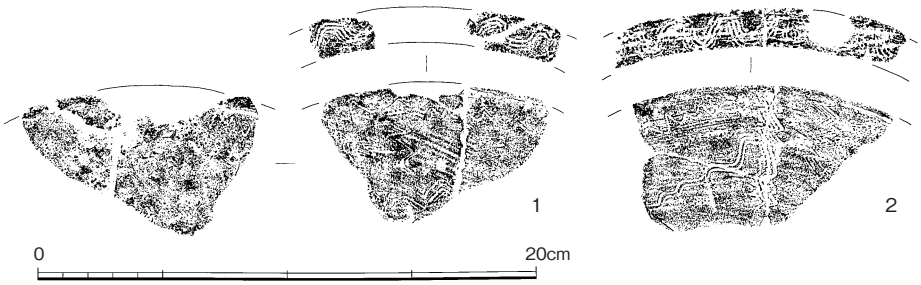


図30　SC-32 上部Ⅲ層部分出土土器拓影（縮尺 1/3）

図 27-1（図版 48-3）は口縁部が短く外反する壺の破片である。口縁端部下端を強い横ナデ調整で摘み出す。2（図版 48-2）は「ハ」字形に窄まる頸部から口縁部が緩やかに短く外反する壺である。口縁端部を横ナデ調整で上下に若干拡張させる。胴部外面にはミガキ調整が施され，内面には頸部～胴部に一連の刷毛目調整を施した後に，ナデ調整する。3 は直立する口縁部をもつ甕で，口縁端部よりやや下がった位置に断面三角形の突帯を貼り付けて，刻目を施す。

4 は受け口状口縁の甕の破片。口縁部は内彎しながら立ち上がり，端部は丸く収められている。5 は甕の胴部破片で，断面三角形の突帯を貼り付け，小さく浅い刻目を施す。6（図版 49-1）は「く」字形に屈曲する甕の口縁部破片。胴部外面には丁寧に刷毛目調整を施し，内面には下から上に向かって粗いケズリ調整を施す。外面には煤が付着する。7 は鉢の口縁部破片である。8 は口縁部が垂直に立ち上がる高坏の破片。口縁端部を横ナデ調整でわずかに拡張させる。9（図版 48-4）は高坏の脚端部の破片。脚端部を折り返し，幅広で浅い凹線文を 1 条めぐらす。10（図版 49-2）は波状口縁をもち，深鉢型の器形をもつ。口縁部の突出部分に内面から外面にかけて縦方向に粘土紐を貼り付け刻目を施す。外面には斜め方向の浅い沈線が施文される。12 は壺の平底の破片，13 は脚台状の上げ底の破片である。

図 31-1（図版 137-1）は，サヌカイト製の凹基

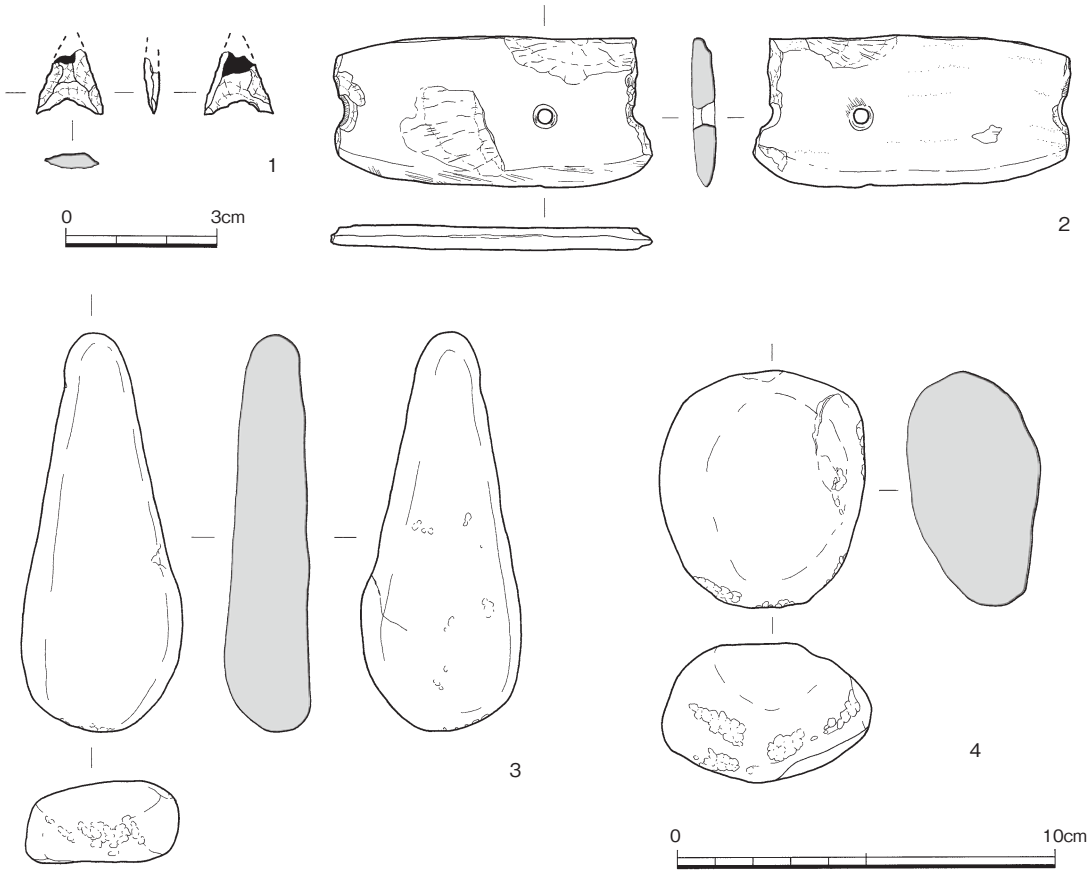


図31　SC-32 出土石器実測図
（1・3：掘り形埋土，2：上部Ⅲ層部分，4：SC-32内SP-322，縮尺 2/3，1/2）

式打製石鏃である。先端部を欠損する。重量 0.3g を測る。3（図版 143-3）は扁平な砂岩礫を利用した敲石である。下端部に敲打痕が集中し，上端部には摩耗痕が残る。重量 121.7g を測る。

SC-32 の炉跡である SK-89 からは，図 28-1 の薄い平底の壺の破片が出土している。図 31-4（図版 143-4）は SC-32 の柱穴である SP-322 から出土した砂岩礫を利用した敲石である。円礫の下端と片側の側部に敲打痕が残る。重量 159.9g を測る。

SC-32 掘り形上部のⅢ層部分からも比較的多くの遺物が出土しているが，代表的な遺物を報告する（図 29-1 ～ 8，図 31-2）。図 29-1 は口頸部がラッパ形にひらく広口壺である。口縁端上部に断面長方形の粘土帯を貼り付け，口縁端面に箆状工具で羽状文を施文する。口縁部形状は別府湾沿岸に分布する広口壺と共通する。2（図 30，図版 49-3）もラッパ形に大きく広がる壺の口頸部破片である。同一個体と考えられる 2 つの破片がある。口縁端面に 3 条 1 組の櫛描き波状文をめぐらし，口縁部の外面及び内面に 3 条 1 組の波状文を縦横に施文する。雷光を表現した記号文の可能性が考えられる。3 も広口壺の口縁部破片である。口縁端面に沈線が 3 条施文される。4 は壺の頸部破片で，頸部の付け根に断面三角形の突帯を貼り付ける。5 は短く外反する甕の口縁部破片。口縁端部は面取りされる。6 は甕の肩部破片。口縁屈曲部に粘土紐を貼り付け，布を巻きつけた箆状工具を押圧して刻目を施す。7 は高坏の坏部破片で，坏部上半を斜め外方に反転させ，立ち上げる。8 は裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の甕の底部破片である。図 31-2（図版 135-2）は，緑色片岩製の磨製石庖丁である。長方形で端部に抉りが入る。本来は長方形の石庖丁であるが，折損し，そのため両側に敲打を加えて抉り部をつくり再生している。片面には自然面が残るが，刃部を部分的に研磨して刃をつくり出す。わずかに刃部の稜が確認できる程度である。紐孔から背の方向に向かって紐擦れ痕が残る。重量は 30.3g を測る。

以上，上部Ⅲ層部分から出土した遺物も含めて，SC-32 が埋め戻された際に混入した遺物と考えら

れる。弥生時代中期後葉に遡る図 32-4 の受け口口縁の甕もあるが，以外は後期初頭に比定できる。SC-32 の廃絶時期は，弥生時代後期初頭に求めることができる。

33号竪穴建物

（SC-33，図32～45，図版12・13・50～60・135・138・139・141・143・146・147・149・150）

調査区南半部の DV・DW-22・23 区に位置する。Ⅲ層中位まで掘り下げた時点で，完形品を含む大量の土器群が出土し始めた。何らかの遺構であることを推定し，掘り形の検出に努めたが，平面形を確認できたのはⅣ層上面であった（図 32 上段，図版 12-1）。径 4.94 × 5.25 mの不整円形の掘り形をもち，床面中央の炉跡の SK-513，立柱痕跡を確認できた SP-440・441・442・447 を主柱穴とする住居跡と判断した（図 32 下段・33，図版 13）。柱間は，SP-440・441 間が 2.16 m，SP-440・447 間が 2.18 m，SP-447・442 間が 1.75 m，SP-442・441 間が 2.12 mを測る。周壁沿いには幅 20 ～ 50㎝，深さ 5 ～ 8㎝の周壁溝がめぐる。ただし，東半部では，周壁から離れていることから，住居が拡張された可能性が高い。SC-32，SK-68・541 を切る。

以上の炉跡や柱穴に加えて，床面で SK-539 を検出できた。長軸長 1.11 m，短軸長 68㎝の不整楕円形の掘り形をもつ土壙である。床面からの深さは南側で 5㎝を測り，北側はさらに小穴状に深く掘り込まれ，深さ 16㎝を測る。炉跡の SK-513 の西側 20㎝の近接した位置にある。炉跡が掘り形の中央ではなく，やや東に片寄っており，SK-539 を意識して設けられており，SC-33 に伴う何らかの施設と考える。

南北方向に設定した土層観察用畦の断面をみると，SC-33 の掘り形を埋める埋土の大半は，径 3mm ～ 2㎝の浅黄色砂質シルトの小塊が所々に混じる極暗褐色砂質土の①層で，北半部は黒みが強い土色に変化する。前述した大量の土器群とともにガラス小玉が出土している。淘汰の悪い土層で，住居が廃絶された後に大量の土器が投棄され埋め戻されたものと考える。調査に当たっては，①層内の土器群を SC-33 上部土器群として取り上げることとした。また，①層の直下には，床面を微凹部を覆うように，炭化物が混じる暗オリーブ褐色砂質土の④層，オリーブ褐色砂質土の⑤層，強い粘性をおびる極暗褐色砂質土の⑥・⑦層が薄いレンズ状にみられる。住居の造作時に生じた凹凸を平坦な床面に調整したものと考えられる。さらに，周溝内の土層は，周壁際に淡黄色砂質土の⑩～⑫層がみられ，その内側に浅黄色シルトの小塊が混じるオリーブ黒色砂質土の⑧層や暗褐色砂質土の⑨層がレンズ状に堆積する。⑩～⑫層は周壁内に組まれた木版等の周壁材の裏込め土，⑧・⑨層は周壁材が抜き取られた際に流入した土層と判断できる。

炉跡の SK-513 は，長径 104㎝，短径 96㎝，床面からの深さ 21㎝を測る不整形の掘り形をもつ（図版 13-2），西半分には 12㎝高い平坦面が造られている。埋土には炭化物が多く混じり，中位～上位は暗褐色砂質土の①層で埋まり，完形品に近い土器が出土している。①層には径 4 × 8cm の塊状や縞状の浅黄色シルトが混じり，下位の②層との層界面に焼土がみられる。①層下には極暗褐色土の②層，暗褐色砂質土の③層，極暗褐色土とにぶい黄橙色シルトが混じる④層がみられる。炭化物が出土しているが，その量は極端に少ない。以上の観察所見から，SK-513 は①層下底面を機能面とする炉跡と考える。

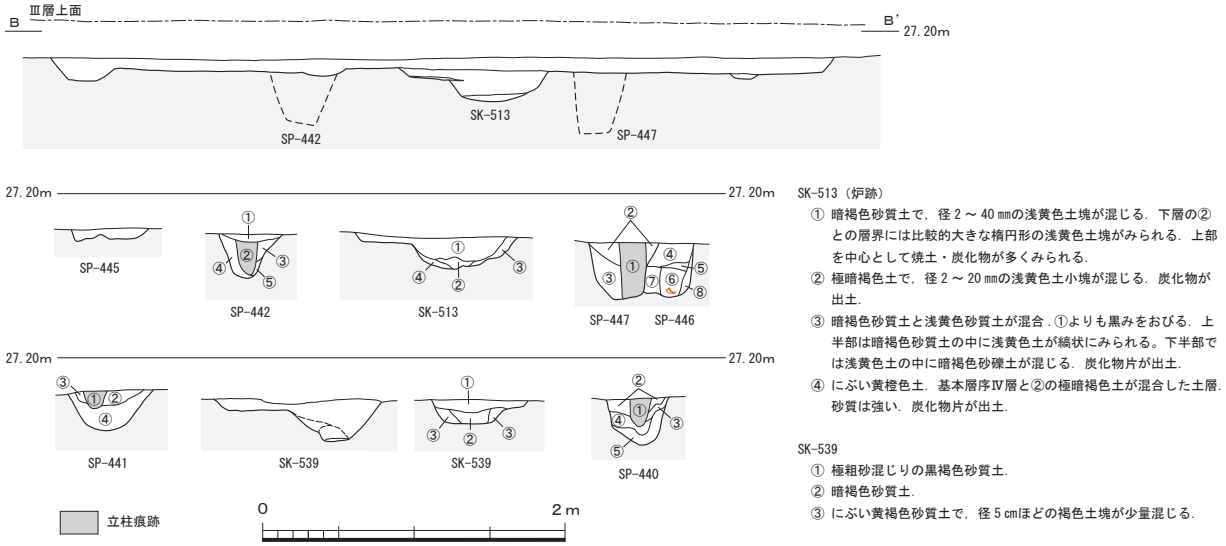
柱穴である SP-440 は，径 33 ～ 34㎝，床面からの深さ 31㎝の円形の掘り形をもつ。掘り形の中央北西寄りで径 16㎝の立柱痕跡を確認できた。掘り形下半部を拳大のにぶい黄褐色砂質シルト塊の間に暗褐色シルトが挟まる⑤層と，小指先大の浅黄色シルト小塊が多く混じる極暗褐色砂質土の④層で埋め，先端が丸い柱を打ち込み，周囲に暗褐色砂質土が少し混じる浅黄色砂質土の③層や極暗褐色砂質土の②層で埋めて柱を固定する。

SP-441 は，径 50 × 54㎝，床面からの深さ 27㎝の不整円形な擂り鉢状の掘り形をもつ。掘り形東寄りで径 19 × 22㎝の立柱痕跡を確認できた。底面を灰褐色砂質土に暗褐色砂質シルトが縞状に

SC-33

① 極粗砂～径 3mmほどの細礫混じりの極暗褐色砂質土．北側は黒みをおびる．小指先大～径 3mmの淡黄色砂質シルト塊が点々とみられる．
②-a 暗褐色砂質土で、小指先大の淡黄色砂質シルトの小塊が多く混じる．
②-b 暗褐色砂質土の塊．
③ 暗オリーブ褐色砂質土．炭化物片が出土．
④ 暗オリーブ褐色砂質土と基本層序Ⅳ層の淡黄色砂質土が混ざり合う．炭化物片が出土．
⑤ オリーブ褐色砂質土．①に比べてややシルトが多く混じる．③層と対応する土層．
⑥・⑦ 極暗褐色砂質土．やや粘性をおびる．
⑧-a オリーブ黒色砂質土．親指大の淡黄色砂質シルト塊が少量混じる．
⑧-b オリーブ黒色砂質土で、⑧-aよりも暗色の土色．径 5mmほどの淡黄色砂質シルトの小塊が多く混じる．
⑨ 暗褐色砂質土．径 1cmほどの淡黄色土塊が多く混じる．
⑩ 淡黄色砂質土．淡黄色砂質土を基本として、径 1cmほどの淡黄色やオリーブ黒色の砂質シルトが混じる．土質は⑨と同じ．
⑪ 淡黄色砂質土に淡黄色砂質土が混じる．⑩と比べて黄色みをおびる．
⑫ 淡黄色砂質土．⑪と比べて全体的に暗色の土色．

図32　SC-33 遺構実測図1（縮尺 1/50）



SK-513（炉跡）
① 暗褐色砂質土で，径 2 ～ 40 ㎜の浅黄色土塊が混じる．下層の②との層界には比較的大きな楕円形の浅黄色土塊がみられる．上部を中心として焼土・炭化物が多くみられる．
② 極暗褐色土で，径 2 ～ 20 ㎜の浅黄色土小塊が混じる．炭化物が出土．
③ 暗褐色砂質土と浅黄色砂質土が混合．①よりも黒みをおびる．上半部は暗褐色砂質土の中に浅黄色土が縞状にみられる。下半部では浅黄色土の中に暗褐色砂礫土が混じる．炭化物片が出土．
④ にぶい黄橙色土．基本層序Ⅳ層と②の極暗褐色土が混合した土層．砂質は強い．炭化物片が出土．

SK-539
① 極粗砂混じりの黒褐色砂質土．
② 暗褐色砂質土．
③ にぶい黄褐色砂質土で，径 5 cmほどの褐色土塊が少量混じる．

SP-441
① 立柱痕跡．暗褐色砂質シルト．径 5 ～ 10 ㎜のにぶい黄褐色シルトの塊が少量混じる．
② 暗褐色砂質土で，①よりも黄色みをおびる．
③ にぶい黄褐色シルトの中に，径 2 ～ 3 ㎜の褐色シルト土の塊が混じる．
④ 灰褐色砂質土の中に，暗褐色砂質シルト土が縞状に挟まる．

SP-442
① 黒褐色砂質シルト．
② 立柱痕跡．にぶい黄橙色シルト質砂質土に黒褐色土が混じる．下部ほど黒褐色土が多くなる．
③ 浅黄色砂質シルトで，小指先大の黒褐色土塊がごく少量混じる．
④ にぶい黄橙色砂質シルトに黒褐色土が混じる．②と共通するが，全体的に黄色みをおびる．
⑤ 黒褐色砂質シルト土で，にぶい黄橙色土が混じる．

SP-440
① 立柱痕跡．極暗褐色砂質土で，②と比べて肌理が細かく，やや黒みをおびる．
② 極暗褐色砂質土で，5×8 cmの楕円形の黄橙色土塊が南半部に混じる．
③ 浅黄色砂質土に暗褐色砂質土が少量混じる．
④ 極暗褐色砂質土．③とほぼ近似した土色であるが，小指先大の浅黄色土塊が多く混じる．
⑤ にぶい黄褐色砂質シルトの拳大の塊が詰まり，間に暗褐色シルト土が混じる．

SP-445 暗褐色砂質土で，径 5 cmほどの黄灰色土の塊が混じる．弥生土器の甕底部と石礫が掘り形検出面で出土．

SP-446・SP-447　①～③は SP-447，④～⑧は SP-446 の埋土．
① 立柱痕跡．極粗砂が混じる極暗褐色砂質シルト土で，径 2 ～ 10 ㎜ほどのにぶい黄橙色土塊が混じる．②よりも黒みをおびた土色．
② 極暗褐色砂質シルトで，径 5 ㎜ほどのにぶい黄橙色土塊が混じる．弥生土器片が西側上部から出土．炭化物片もみられる．
③ 浅黄橙色砂質シルトで，6×8 cmの黄色土の大きな塊がみられる．基盤のⅣ層の崩落部分．
④ 暗オリーブ褐色砂質シルト．
⑤ 極暗褐色砂質シルトで，径 3 ㎜ほどのにぶい黄橙色土塊が少量混じる．
⑥ 極暗褐色砂質シルトで，⑤よりも黒みをおびる．最下部から甕の底部破片が出土．
⑦ にぶい黄褐色砂質シルト．
⑧ にぶい黄褐色砂質シルト．

図33　SC-33 遺構実測図2（縮尺 1/50）

挟まる④層で埋め，柱を据えて暗褐色砂質土の②層や褐色シルト塊が混じるにぶい黄褐色シルトの③層で固定している。

SP-442 は，径 44 × 45cm，床面からの深さ 29 cmの円形の掘り形をもつ。最上面に堆積する黒褐色砂質シルトの①層を掘り下げた時点で，径 17 cmの立柱痕跡を確認できた。①層は柱が抜き取られた後に流入した土層である。柱は，小指先大の黒褐色土の小塊が少量混じる浅黄色砂質シルトの③層，にぶい黄橙色シルトに黒褐色土が混じる④層，にぶい黄橙色土が混じる黒褐色砂質シルトの⑤層を詰め込み固定させている。SP-447 は，SP-446 を切る長径 53cm，短径 47cm，床面からの深さ 38cmを測る長円形の掘り形をもつ。南寄りで径 18cmの立柱痕跡を確認できた。柱を掘り形底面に据え，径 5㎜ほどのにぶい黄橙色塊が混じる極暗褐色砂質シルトの②層，浅黄橙色砂質シルトの③層で固定している。

この他，SC-33 の床面では SP-445・446・480・497 が出土している。この中で，SP-480 は SC-33 の周溝，SP-446 は柱穴の SP-447 に切られており，時間的に先行する遺構である。他は SC-33 との関係は不明である。SP-445・446・480 については柱穴・小穴で報告するが，SP-497 の調査所見は巻末の遺構観察表を参照されたい（表 3）。

①上部土器群

前述したように，SC-33 には廃絶後に大量の土器群が投棄されていた（図 34 ～ 39，図版 12-2）。この中で，図 34，35-1 ～ 9 は壺，図 35-10 ～ 16，図 36-1 ～ 7 は甕，図 36-8，図 37-1 ～ 7 は鉢，図 37-8 ～ 13，図 38-1 ～ 4 は高坏に分類できる。壺には，「ハ」字形に頸部が窄まり口縁部を短く外

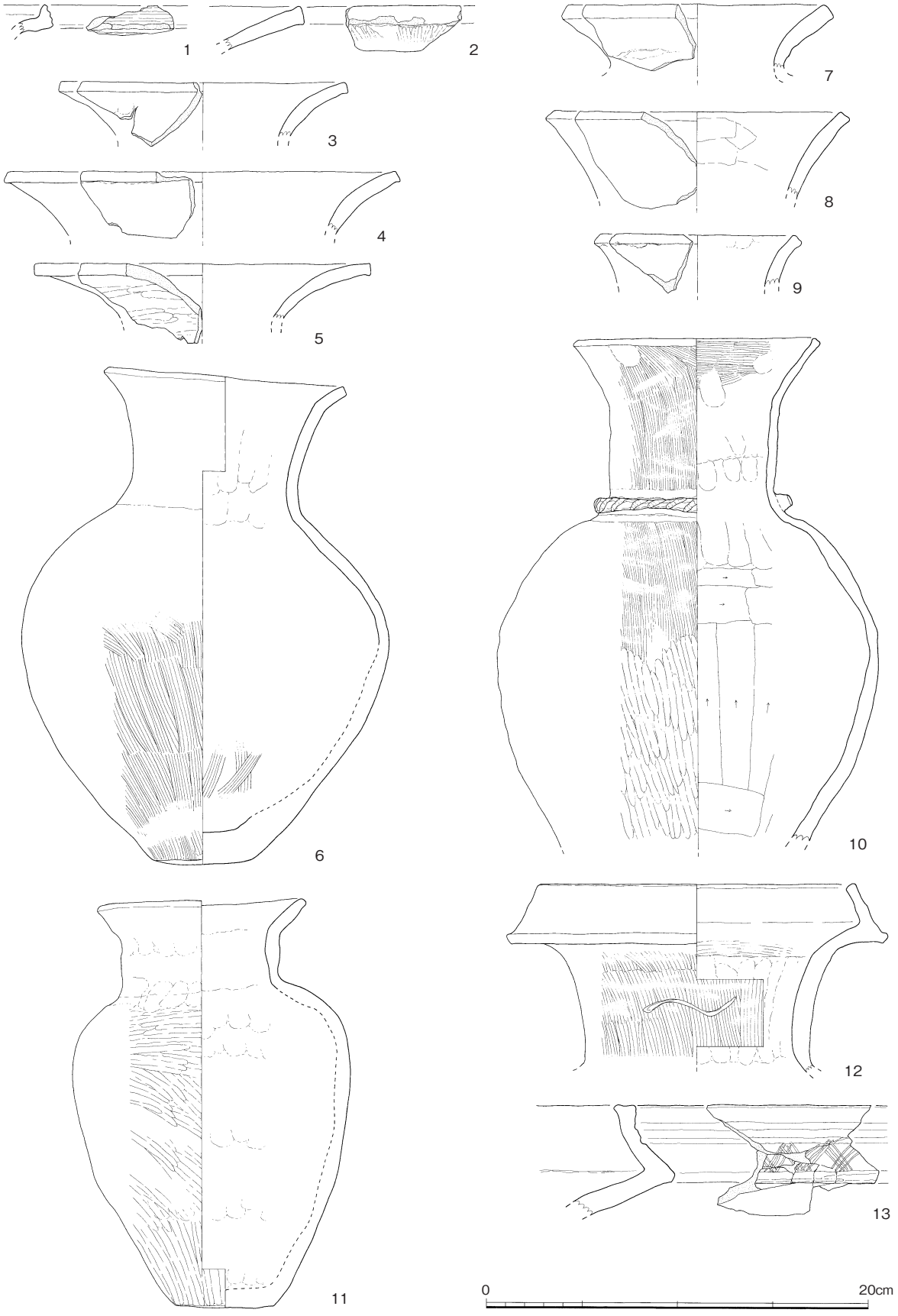


図34　SC-33 上部土器群出土土器実測図1（縮尺 1/3）

反させる壺（図 34-1，図 35-7），口頸部がラッパ形に広がる広口壺（図 34-2 ～ 11），複合口縁壺（図 34-12・13），無頸壺（図 35-1・2・6，図 35-8），球形の胴部をもち短く「く」字形に口縁部が外反する壺（図 35-3 ～ 5）がある。

図 34-1（図版 51-3）は，口縁端部に粘土を貼り付けて上方に折り返し，端面に波板状の凹線文を 3 条めぐらす。図 35-7（図版 51-5）は，口縁部を薄く肥厚させ，強い横ナデ調整を施して段をつくる。

図 34-3 ～ 5 は広口壺の中でも，口縁部がとくに大きく広がる。6（図版 50-1）は，球形の胴部から円筒形に近い頸部が立ち上がり，口縁部が短く外反する。凸レンズ底がつく。胴部下半には焼成破裂で生じた径 5cmほどの弧状の亀裂が生じている。7 の口縁部は短く，口縁下半部に口縁を折り曲げた際に生じた粘土の撚れが残る。8・9 は口頸部が逆「ハ」字形に直線的にひらく。10（図版 50-2）は，長胴から円筒形の頸部が立ち上がり，口縁部が緩やかに外反する。頸部の付け根に突帯を貼り付け，刷毛目工具の木口部を押捺して刻目を施す。外面は，胴部上半～口頸部を刷毛目調整，下半をミガキ調整する。内面にはケズリ調整が施され，肩部には成形時の指頭痕が帯状に残る。胴部外面には，径 3 ～ 5cmの焼成破裂が連続して生じ，器体に穴をあけている。11（図版 50-3）も円筒形の頸部に強く外反する口縁部がつく。肩の張った長胴で，底部は不安定な平底である。胴部外面はミガキ調整，内面はナデ調整され，粘土接合時の指頭圧痕が帯状に残る。図 35-8 は，図 34-10 と同じく肩部から円筒形の頸部が立ち上がる破片である。

12・13 は複合口縁壺である。12（図版 51-1）の頸部には，左から右に向かって描かれた「～」形の記号文が描かれている。わずかにひらく頸部から，箍状に整形した複合口縁部を接続させる。13（図版 51-2）は大型品で，口縁部外面の上半には凹線状の幅広の沈線を 2 条めぐらし，下方に櫛状工具で 3 条 1 組の連続山形文を施文する。掘り形を検出する以前に SC-33 上部Ⅲ層部分として取り上げた破片と接合する。

図 35-1（図版 51-4）は小型の無頸壺で，口縁部を短く外反させる。球形の胴部をもつ。胎土は精選され，肌理が細かく，丁寧なつくりである。2・6 も小型の無頸壺で，2（図版 51-8）は口縁部を「く」字形に強く屈折させる。長胴に厚手の平底がつく。胴部上半は刷毛目調整，下半部には擦過状の細密条線を観察できる。3（図版 52-1）は球形の胴部をもち，底部は平底であるが，不安定である。4・5 は大型品。4（図版 51-6）の口縁屈曲部には，刷毛目工具の木口部の角を押捺して列点文を施文する。図 35-9 の頸部の付け根には，段状の沈線が 1 条めぐり，下方に列点文が施文される。

甕（図 35-10 ～ 16，図 36-1 ～ 7）には，口縁端部に凹線文をめぐらす甕（図 35-10 ～ 12），口縁部上面がわずかに凹み受け口状となる甕（図 35-13），口縁部を短く外反させ，肩の張った長胴がつく甕（図 35-14 ～ 16・36-1 ～ 7）がある。

図 35-10（図版 52-2）は，口縁端部を横ナデ調整で拡張し，端面に 3 条の擬凹線文をめぐらす。11 は，口縁端部を横ナデ調整で下方に拡張し，2 条の幅広の浅い凹線文をめぐらす。12 の口縁屈曲部には成形時の指頭痕が残る。13 は，口縁部を「く」字形に屈折させ，口縁上面を横ナデ調整で窪ませ，受け口状に近い口縁部を成形する。14・15 は「く」字形口縁をもつ甕で，口縁端面には横ナデ調整によって窪みが生じている。16（図版 52-4）は図上で復元。緩やかに屈曲する「く」字形口縁をもつ。撫で肩の胴部で，不安定な凸レンズ底がつく。外面は二次的な火熱を受けて荒れが著しい。

図 36-1 の胴部外面には薄く煤が付着する。図 36-2 の胴部外面には，ミガキに近い丁寧なナデ調整を施す。3 の口縁屈曲部の直下に棒状工具を押捺して列点文をめぐらす。小片のために復元口径は不確実である。4（図版 52-5）の口縁屈曲部には，篦状工具で掻き取るように施した列点文がめぐる。5（図版 52-6）は，長胴に緩やかに屈曲する「く」字形口縁部がつき，底部は「ハ」字形に裾がひろがる高台状につくられる。口縁部の屈曲部に，刷毛目工具の木口部の角を押捺して施された列点文がめぐる。肩部外面は刷毛目調整の後にナデ仕上げる。内面には肩部に刷毛目調整，以下はケズリ調整を施す。底部の裾を中心として二次的火熱を受け，器表面は赤変する。胴部中位には幅 10 ～

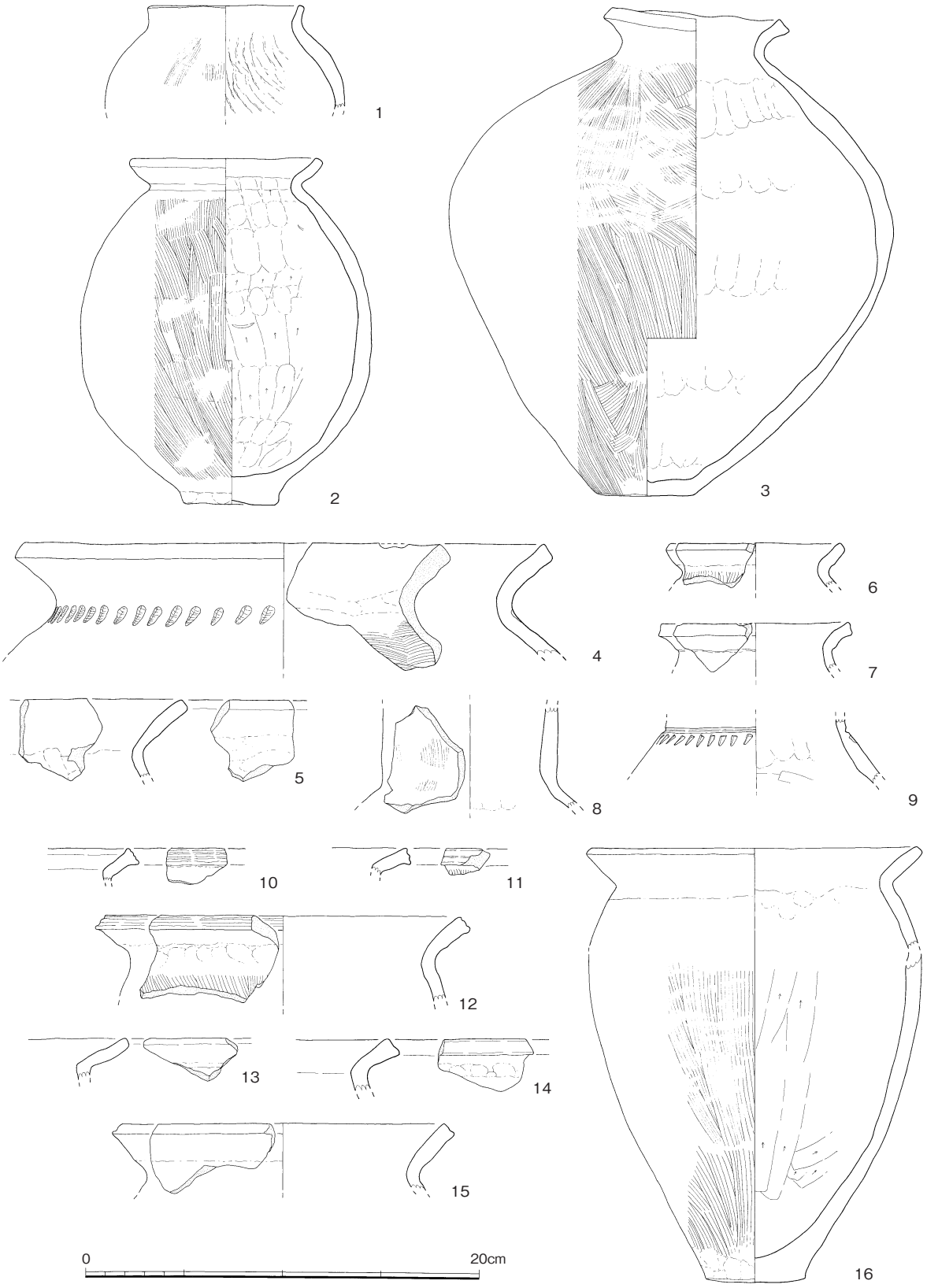


図35　SC-33 上部土器群出土土器実測図2（縮尺 1/3）

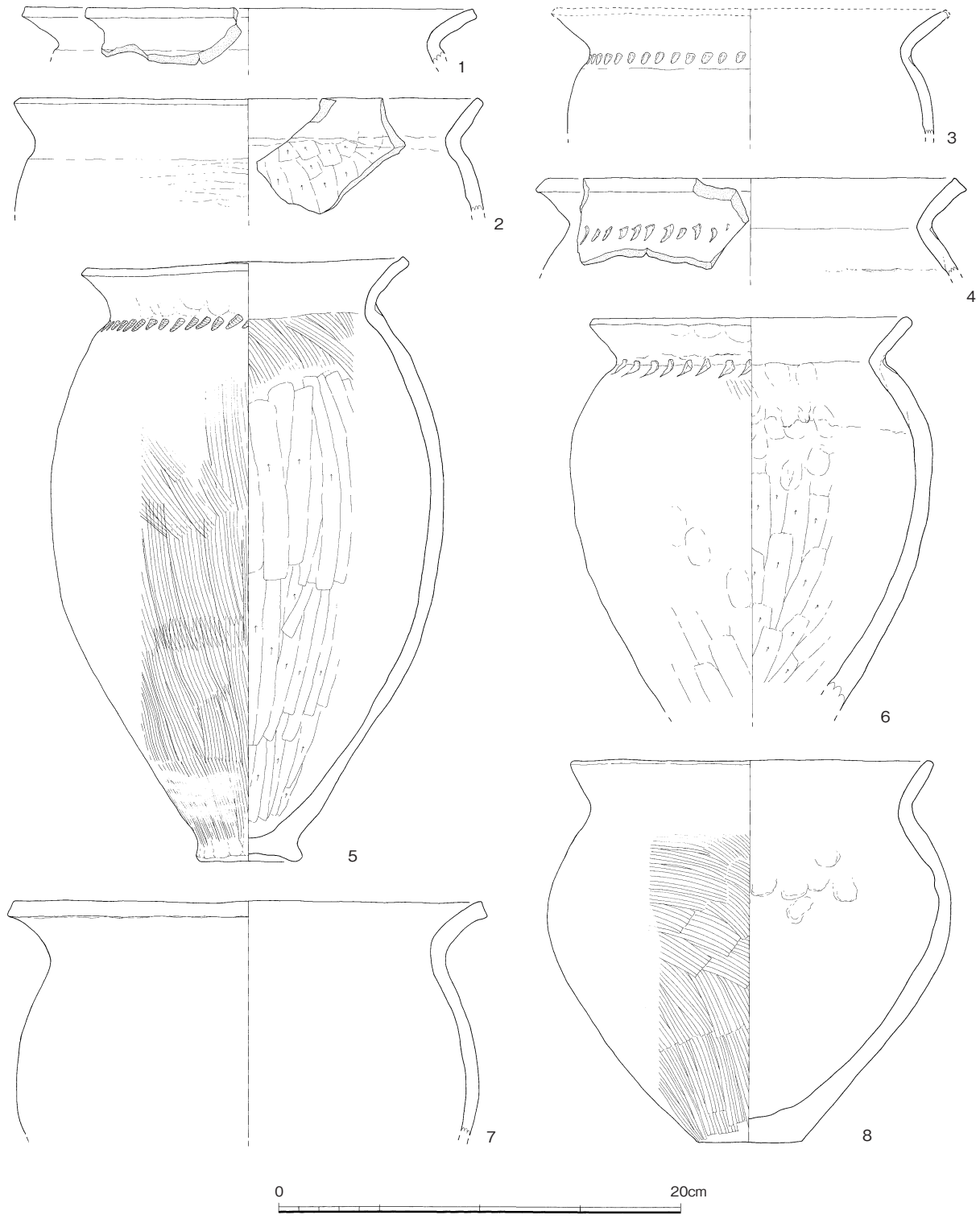


図36　SC-33 上部土器群出土土器実測図3（縮尺 1/3）

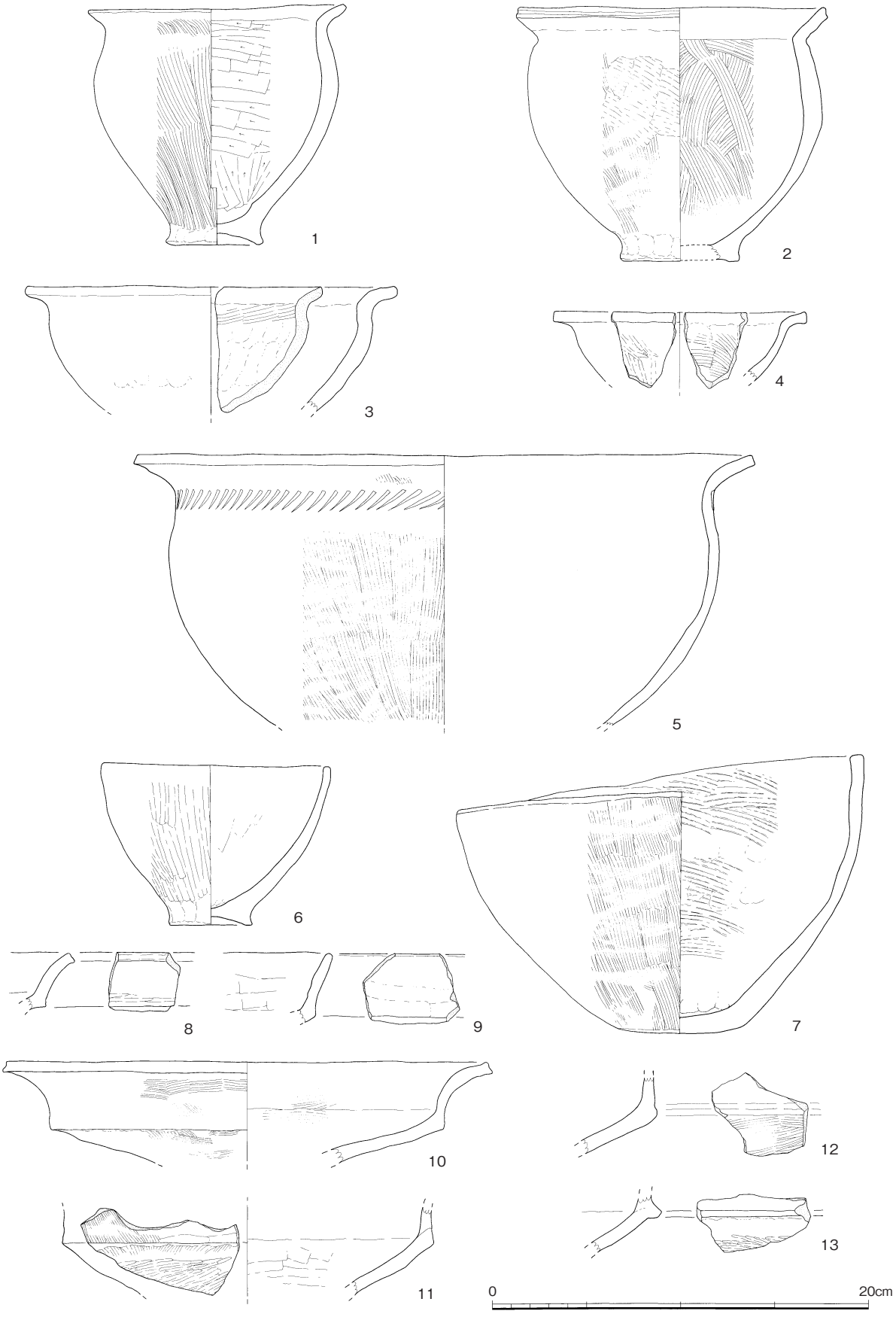


図37　SC-33 上部土器群出土土器実測図4（縮尺 1/3）

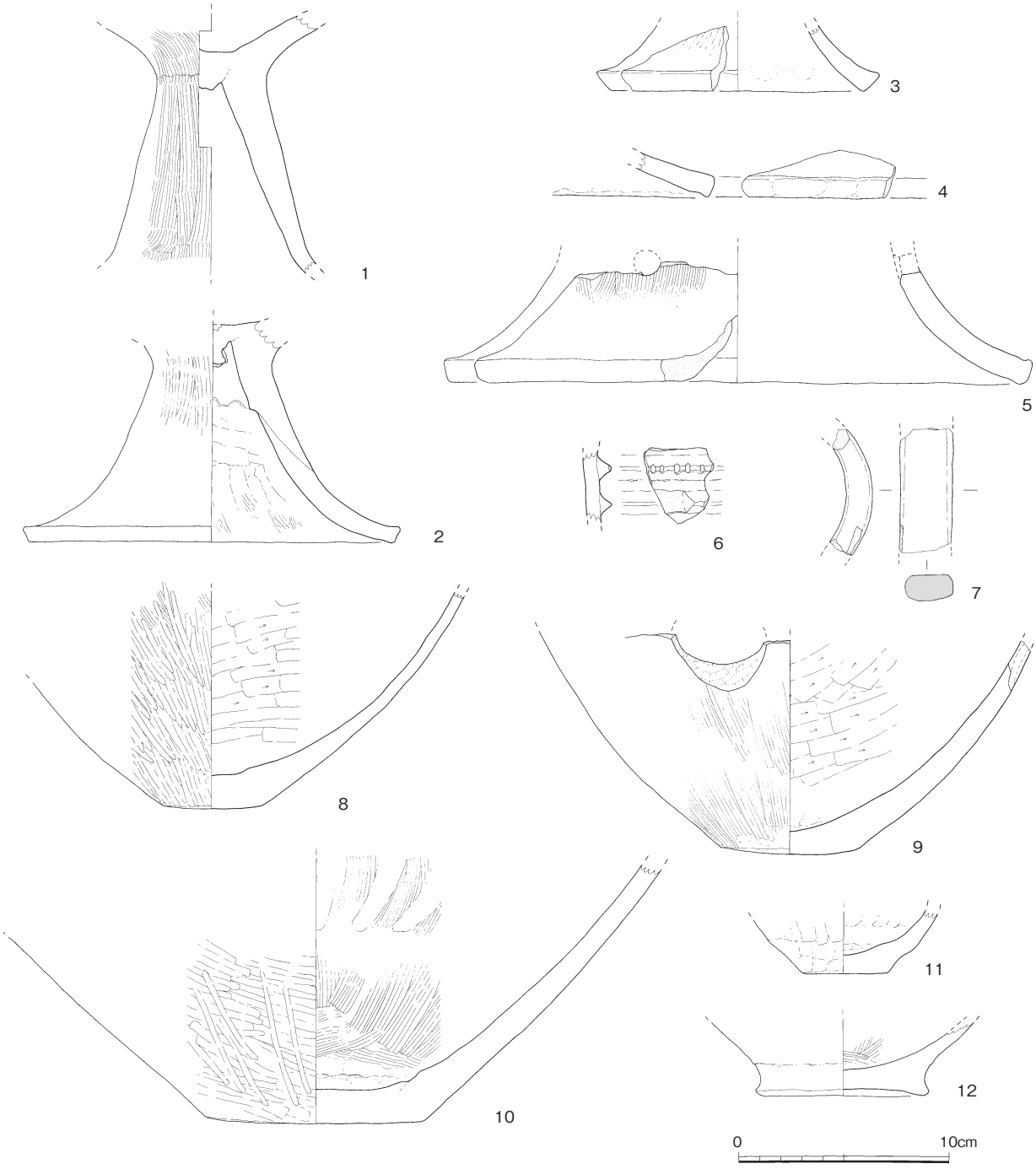


図38　SC-33 上部土器群出土土器実測図5（縮尺 1/3）

12cmの帯状に煤が付着する。6（図版 53-1）の口縁屈曲部には刺突列点文が施される。胴部外面には縦方向の刷毛目調整の後にナデ仕上げ，内面は上半部に刷毛目調整の後にナデ仕上げ，下半部にケズリ調整を施す。7 の口縁部は，他に比べて緩やかに外反する。器表面が荒れ調整は不明。口径は小片のために不確実である。

鉢（図 36-8，図 37-1 ～ 7）には，身が深く緩やかに外反する口縁部がつく鉢（図 36-8），胴部が張らず「く」字形口縁部がつく鉢（図 37-1・2），器高と比べて身が浅めの「く」字形口縁部がつく鉢（図 37-3 ～ 5），直口縁で半球形の胴部をもつ鉢（図 37-6・7）がある。図 36-8（図版 53-2）は，肩が窄まる壺型の鉢で，緩やかに外反する「く」

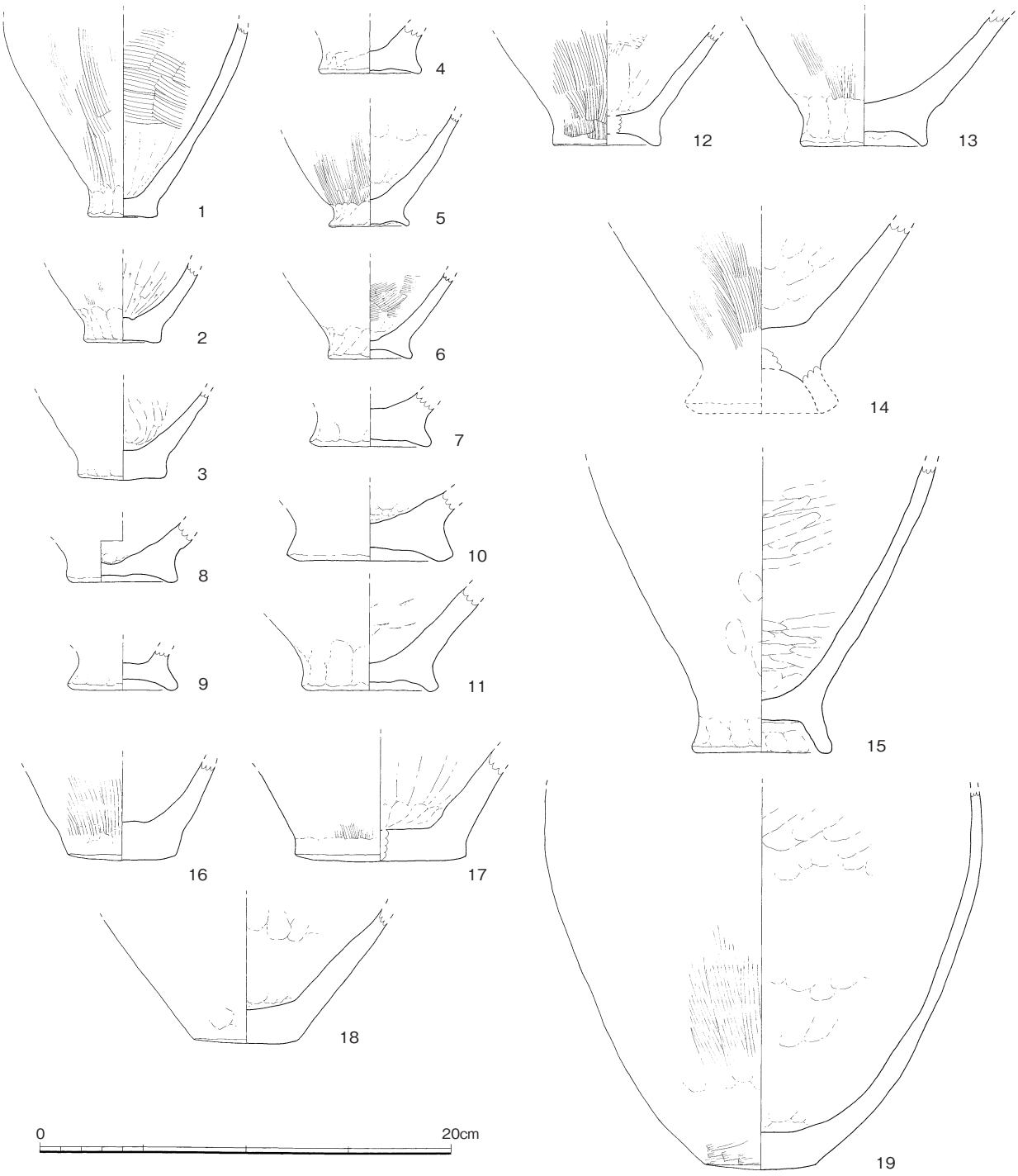


図39　SC-33 上部土器群出土土器実測図6（縮尺 1/3）

字形口縁がつく。平底で，口縁部を中心として外面は二次的火熱を受けて赤変している。図37-1（図版53-3）は，裾部が「ハ」字形に広がる高台状の底部をもつ。2（図版53-4）の口縁端面には沈線がめぐる。底部はやや厚めの安定した平底である。胴部外面は刷毛目調整を施した後にナデ仕上げる。上半部の半周ほどに板状工具を押しつけた面を観察できる。タタキ痕の可能性が考えられるが，確定できなかった。器壁の芯部には淡い黒色の黒化層が残り，胴部中位には焼成破裂が生じ，器体に穴があいている。3・4は皿状の鉢で，3（図版54-1）は厚手のつくり，4は小型品である。5（図

版 54-2）は大型鉢で，緩やかに外反する口縁部をもち，口縁部下に篦状工具を押捺して短斜線文をめぐらす。6･7 は直立する口縁部をもつ鉢で，6（図版 54-3）の胴部外面には幅 3 ～ 4㎜を単位とするナデ調整の痕跡が残る。ミガキに近いが，光沢がなくナデ調整の一種と考えた。7（図版 54-5）の底部は不安定な凸レンズ底である。

高坏（図 37-8 ～ 13，図 38-1 ～ 4）は，いずれも口縁部が坏部中位で反転してひろがる。図 37-8（図版 54-6）の外面には，橙色の肌理の細かい粘土を化粧掛けする。10（図版 54-8）の口縁端面は横ナデ調整で面取りされ，全体として刷毛目調整の痕跡が残るなど，粗雑なつくりである。12・13 は，坏部中位の反転部が箍状に成形されたもので，12 の屈折部の上方には幅の広い沈線状の段がめぐる。図 38-1 ～ 4 は高坏の脚部破片である。1（図版 55-1）の胎土には，大粒の礫が多く混じり，調整も粗雑である。坏部下半と脚部を粘土塊を充填して接合する。掘り形上部のⅢ層部分として取り上げた破片とも接合する。2・3 はラッパ形にひらく脚部で，2（図版 55-4）は坏部の下部に突起を作り脚部に差し込んで接合している。3 の外面にはミガキ様のナデ調整を施す。4 は調整痕跡から高坏の脚裾部の破片と考えた。器壁の厚さから大型品と考えられる。裾端面には指頭によるナデ痕跡が残る。外面には赤褐色の肌理の細かい粘土の化粧掛けが施される。

図 38-5 は，焼成前に円形の小穴が穿孔されている。大型の脚台付きの土器と考える。6（図版 55-2）は甕の胴部破片で，細い棒状の工具正面からを押捺して刻目を施す断面三角形突帯を貼り付ける。下方の突帯は残存状態が悪く，刻目の有無は不明である。7（図版 55-3）は，ジョッキ形土器の把手の破片である。厚さ 1.2㎝，幅 2.5㎝の粘土板を半環状に折り曲げる。上面及び側面は明赤褐色の粘土を化粧掛けする。

図 38-8（図版 55-6）・9 は，壺の凸レンズ状の底部破片である。9（図版 56-1）は焼成失敗品で，外底面は焼成不良のために細かな土塊となって崩れている。胴部中位には径 4.5㎝ほどの円形の焼成破裂が生じている。焼成破裂痕は深く，焼成時に器体に穴があいたものと判断できる。10（図版 57-1）は大型壺の底部破片で，やや不安定な平底である。11 は小型壺の平底の破片。12（図版 56-2）は鉢の底部破片で，裾部が「ハ」字形にひらく。上げ底である。

図 39-1 ～ 19 は甕の底部破片である。1 は小型甕で，底を厚くつくり腰高の器形につくる。2・3 は高台状の平底で，3 は外底面が膨らみ，座りが悪い。4 は底部裾が若干張り出す。5（図版 56-4）は小型甕で，底部裾を指で摘むように引き延ばし，「ハ」字形の高台状の厚底につくる。底部裾にはクレーター状に窪む剥離面があり，剥離面に器壁の芯部に残る黒色の黒化層がむき出しになっていないことから，焼成破裂痕と判断できる。6 ～ 11 も裾部が「ハ」字形にひろがる高台状の底部破片。8 は厚い底部破片で，器体がかなり歪んでいる。外面は二次的な火熱を受けて赤変し荒れている。9 は底径から小型品と考える。10 は大型甕の上げ底の底部。11（図版 56-5）の底部には成形時の指頭圧痕が残り，内面には篦状工具が接触して残された痕跡を観察できる。12･13 は高台状の上げ底，14・15 は脚台状の上げ底。14 の底部は焼成不良のため，小さな土塊となって崩れている。焼成不良品である。16 は外底面が膨らむ不安定な平底の破片。外面は二次的な火熱を受け赤変する。17（図版 57-3）は，焼成不良のため，器表面が土塊となって崩れる。18 は 16 と同じく，外底面が膨らむ不安定な平底である。胴部下半がやや大きくひらくことから，鉢の可能性も考えられる。内外面ともに二次的な火熱を受け赤変する。19（図版 57-2）は，丸みをおびた長胴に凸レンズ底がつく。掘り形上部のⅢ層下部から出土した破片とも接合する。

石器も出土している（図 42-1･3 ～ 6，図 43-1･2）。図 42-1（図版 135-1）は，穿孔途中の石庖丁の未成品である。緑色片岩製。平面形態は長方形に近く背部・刃部がわずかに外彎する。表面の研磨，刃部の研ぎ出しはおわっているが，穿孔がある側に自然面が部分的に残る。重量 44.4g を測る。3 ～ 5 は敲石である。3（図版 147-1）は，扁平な砂岩の円礫の下端部に敲打痕が残り，主面には擦痕が残る。重量 167.7g を測る。4（図版 143-5）は，楕円形の扁平な砂岩の円礫の下端部に敲打痕が残る。重量 121.3g を測る。5（図版 146-4）は，扁平な花崗岩の円礫の主面と下端部に敲打痕が残

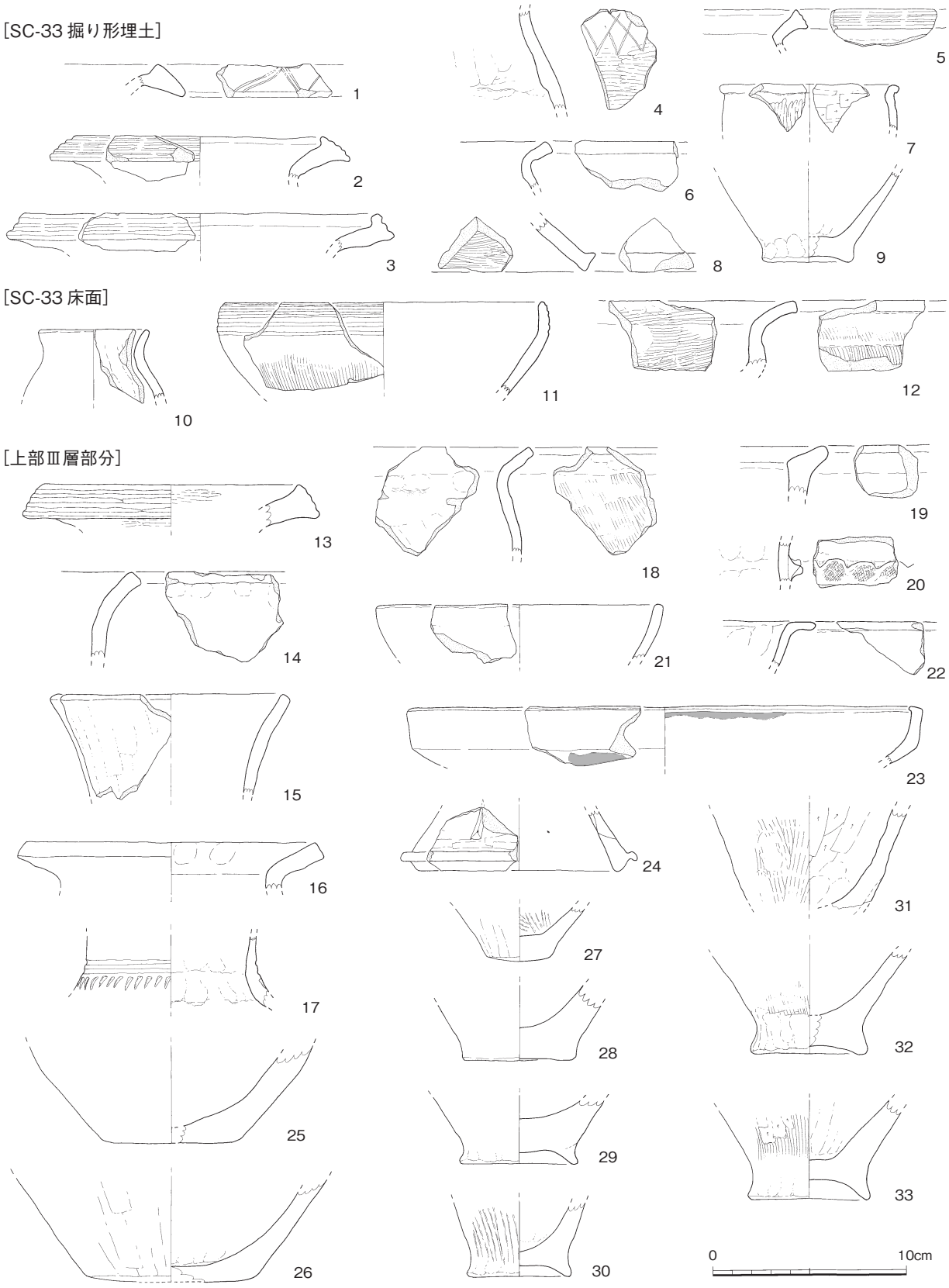


図40　SC-33 出土土器実測図（1～9：掘り形埋土，10～12：床面直上，13～33：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

る。下端部は大部分が風化している。重量 668.3g を測る。6 は砥石で，重量 1028.6g を測る。図 43-1（図版 139-2）も砥石で，扁平な楕円形の泥岩礫の全面を使用する。肌理の細かい石材で，手持ちの仕上砥か。重量 371.2g を測る。2 は敲石で，断面蒲鉾型の砂岩の円礫の側部に敲打痕が残る。重量 2200g を測る。

以上の上部土器群は，SC-33 が廃絶した直後に投棄されたものである。少数の弥生時代中期後葉～後期前葉の土器が混じるが，大半は弥生時代後期中葉に比定できる。

②掘り形埋土出土の遺物

図 40-1 ～ 9 は掘り形埋土中から出土した遺物である。この中で，1 は掘り形西半部，2・4 は南東部，5･6 は北東部，9 は東半部から出土している。

1 ～ 4 は壺である。1（図版 57-9）は，口縁端部を下垂させ，端面に 2 条 1 単位の複線山形文を施文する。2（図版 57-6）は口縁端部の下面に粘土を貼り付けて拡張し，幅狭の波板状の凹線文を 4 条めぐらす。3（図版 57-7）は口縁端部の上部に粘土紐を貼り付けて拡張し，幅広の波板状の凹線文を 2 条めぐらす。4（図版 57-5）は壺の肩部の破片である。篦状工具で細い連続三角文を施文する。線刻絵画の一部である可能性を残す。器体の傾きは不明である。5（図版 57-8）は，「く」字形に短く屈折する口縁部もつ甕で，口縁端面を横ナデ調整で拡張し，擬凹線文を 3 条めぐらす。6 は短く外反する「く」字形口縁部をもつ甕。口縁端面は横ナデ調整で面取りされる。7（図版 57-10）は小型甕で，口縁部を短く強く折り曲げる。胴部外面にはミガキ調整，内面はケズリ調整を施す。8 は高坏の脚裾部の破片で，裾端を横ナデ調整することで端部を摘み上げる。9 は高台状の甕の底部破片で，外面は二次的な火熱を受け赤変する。

③床面出土の遺物

図 40-10 ～ 12 は SC-33 の床面にほぼ貼り付いた状態で出土した。10・12 は床面東半部，11 は SP-445 の掘り形を検出した面で出土している。10（図版 58-1）は無頸の小型壺。緩やかに外反する口縁部に長胴がつく。11（図版 58-2）は埦型の坏部をもつ高坏である。口縁部下に 5 条の沈線様の凹線文をめぐらす。外面には赤褐色の肌理の細かな粘土を化粧掛けする。12 も高坏で，坏部中位で反転し，緩やかに外彎しながらひろがる口縁部がつく。器壁は厚く，刷毛目調整で仕上げられるなど，粗雑なつくりである。

この他，SP-445・442 間の床面から，砂岩の円礫を磨石・敲石とした図 42-2（図版 141-2）が出土している。上面には擦痕，側縁には敲打痕が残る。重量 130g を測る。二次的な火熱を受けて表面は赤変している。

④上部Ⅲ層部分出土の遺物

上部土器群が出土し始める以前にもⅢ層から多くの土器が出土した（図 40-13 ～ 33）。14・17・19・21・22・25・31 ～ 33 はⅢ層下部から出土し，上部土器群に含まれると考える。

図 40-13 ～ 17 は壺。13 は，口縁端部を上下にやや拡張し，凹線文を 3 条めぐらす。14 は円筒形の頸部から短く口縁部がひらく。15（図版 58-3）はラッパ形にひらく口頸部をもつ。16 は「ハ」字形に窄まる頸部をもつものと考えられる。17（図版 58-4）は肩部～頸部の破片である。頸部の付け根に 2 条の沈線をめぐらし，その下方に列点文を施文する。

図 40-18 は甕。口縁部を緩やかに外反させる。19（図版 58-5）は内傾する短い断面台形の口縁部をもち，山ノ口式系土器の甕である。器壁は厚く，やや粗雑なつくりである。20 は甕の胴部破片で，粘土紐を貼り付け，平織りの布を巻きつけた指頭を押圧して太い刻目を施す。21 は埦型の小型鉢である。22 も鉢で，口縁部を逆Ｌ字形に強く屈曲させる。薄手のつくりである。23・24 は高坏である。23（図版 58-6）は坏部破片で，坏部上半が外傾ぎみに屈折する。口縁部周辺を中心として赤彩の痕跡が残る。24 は低脚の脚部破片。矢羽根形を意識した長三角形の未貫通の透かし孔を焼成前に施す。外面を橙色粘土で化粧掛けしている。25･26 は壺の底部破片で，25 は不安定な平底，26・27 は凸レンズ底につくられている。27 は小型甕もしくは深鉢型の鉢と考えられる。28 は厚底で，底径は小さい。外面にナデ調整を施していることから，壺の底部と考えた。29 は鉢あるいは甕。外底面に粘土紐を貼り付けて上げ底とする。30 ～ 33 は甕の底部破片である。30 は低い上げ底。二次的な火熱を受け，器表面は赤変している。

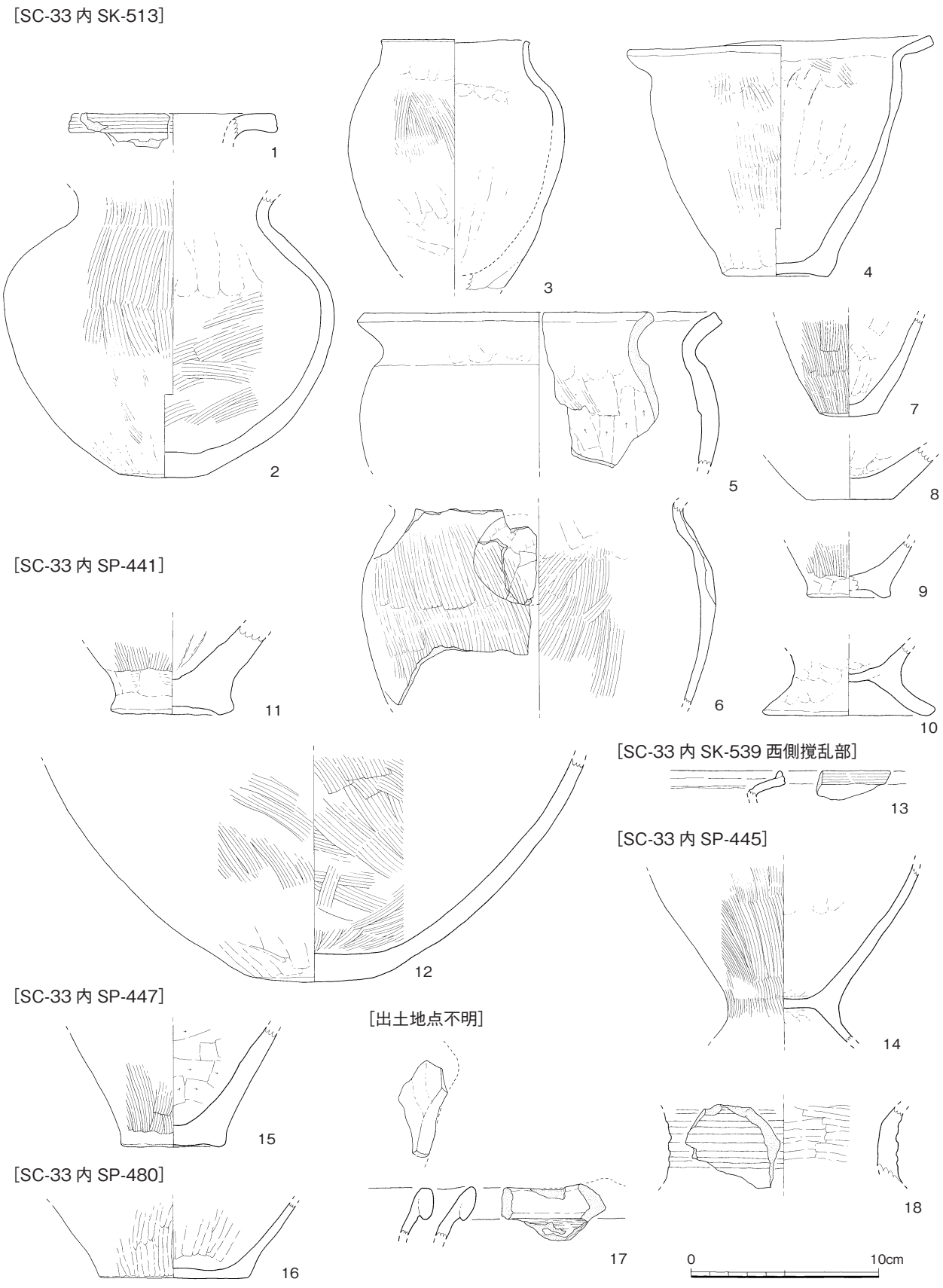


図41　SC-33内SK-513，SP-441・443・445・447・480ほか出土土器実測図（縮尺 1/3）

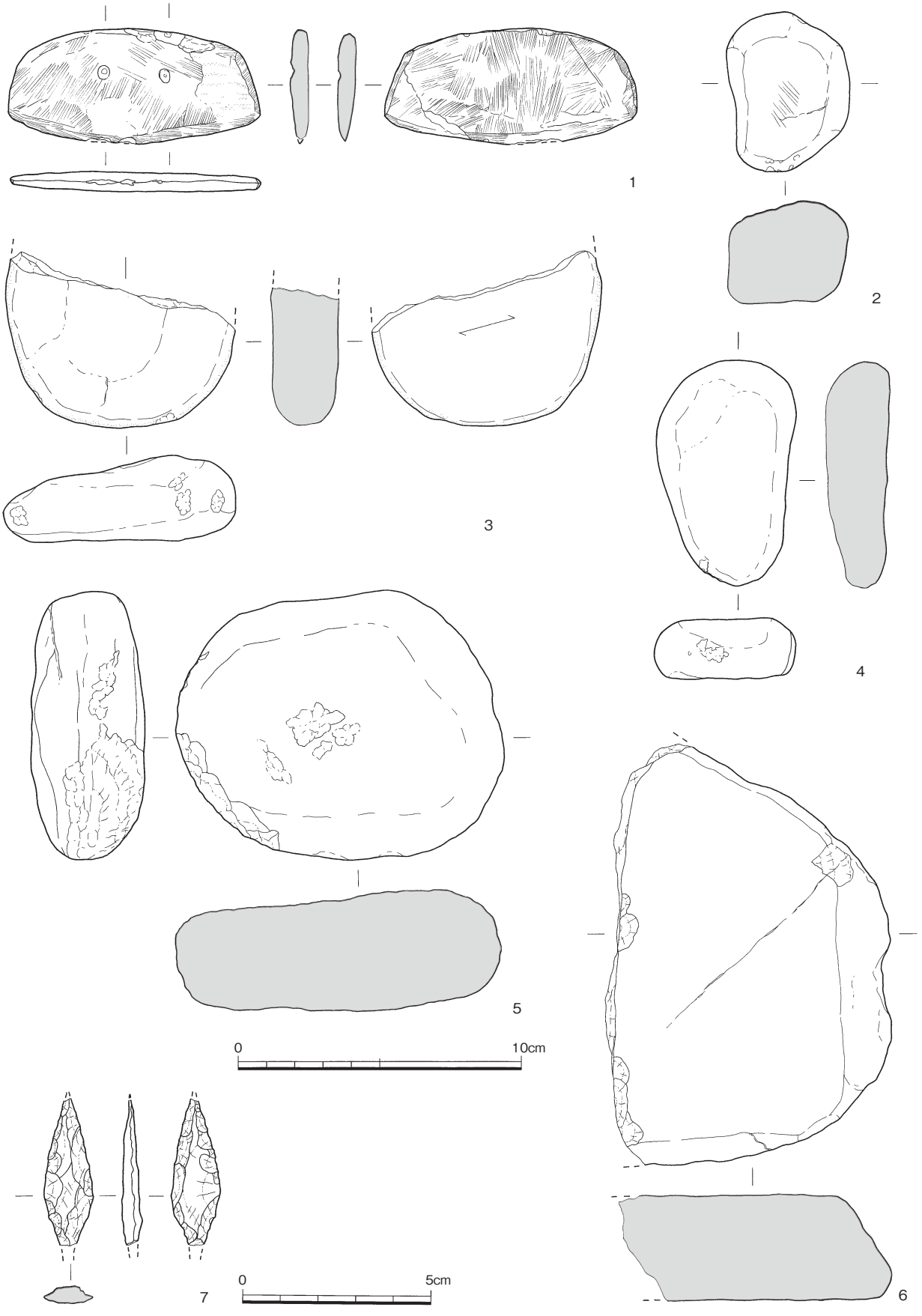


図42　SC-33 出土石器実測図1（1・3～6：上部土器群，2：床面，7：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/2，2/3）

31・32 は厚めの上げ底，33 は低い高台状の上げ底である。

この他，SC-33 中央南寄りのⅢ層中部から，打製石鏃が出土している（図 42-7，図版 138-2）。サヌカイト製の凸基式打製石鏃で，主要剥離面を残す。先端部と基端部が欠損する。残存重量 2.1g を測る。

⑤炉跡 SK-513 出土の遺物

炉跡である SK-513 では，掘り形上半部に完形に近い大型破片を含む土器が投げ込まれた状態で出土した（図 41-1 ～ 10）。1 ～ 3 は壺，5・6 は甕，4・7 は鉢である。

図 41-1（図版 58-9）は口縁部をほぼ水平に外反させる。口縁端面には浅い沈線様の凹線文を 2 条めぐらす。2（図版 59-1）は，扁球形の胴部に緩やかに屈曲する口縁部がつく。底部は凸レンズ底につくる。3（図版 60-1）は長胴で口縁部がほぼ直立する小型壺である。口縁部を横ナデ仕上げするため，口縁端部に粘土が撚れている。焼成不良品で，底部周辺は小

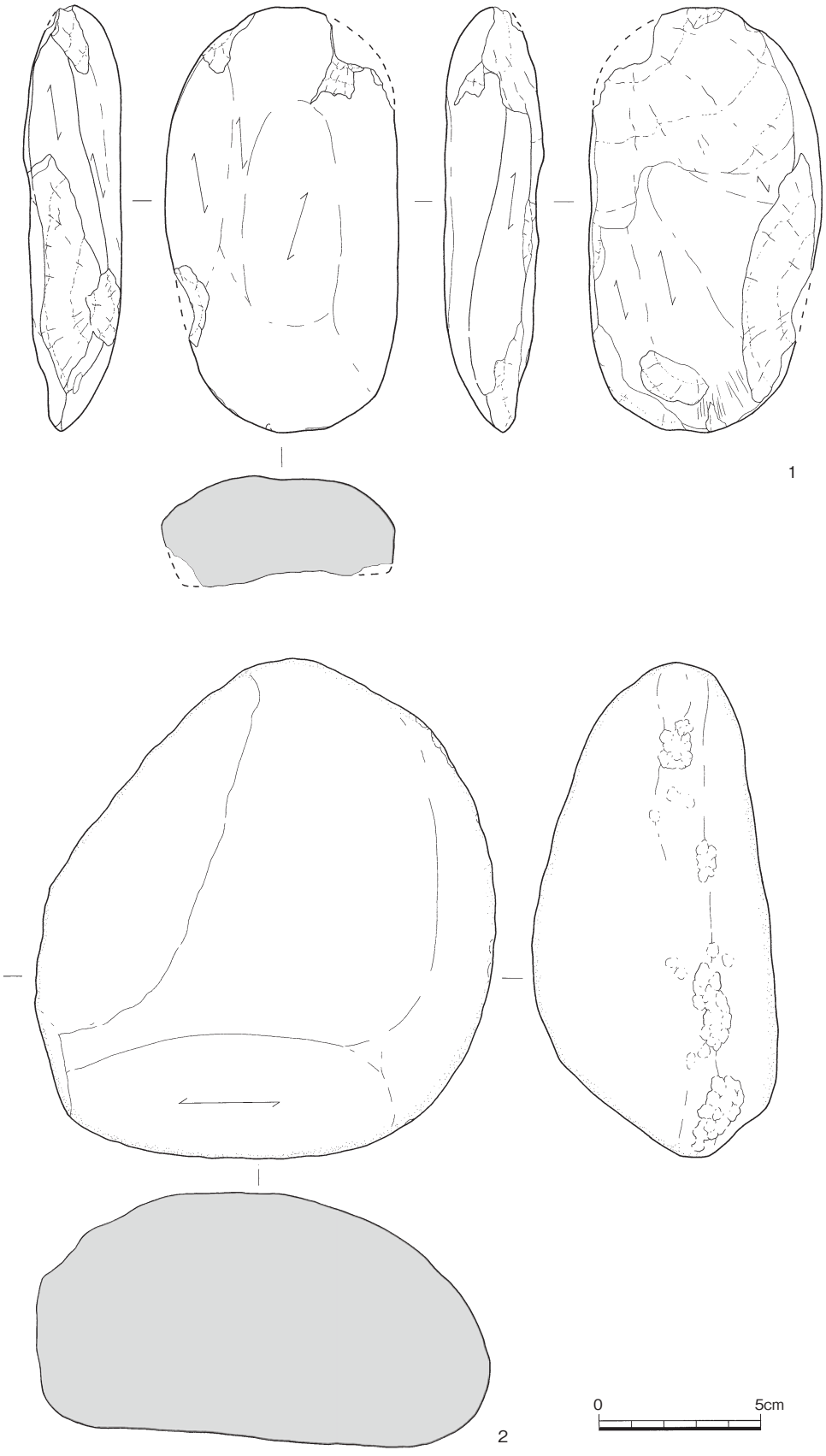


図43　SC-33 出土石器実測図2（縮尺 1/2）

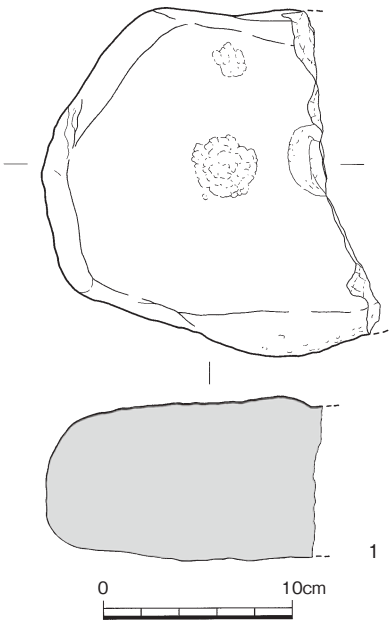


図44　SC-33 出土石器実測図3
（SC-33内SK-513，縮尺 1/4）

さな土塊になって崩れる。4（図版 59-2）は「く」字形口縁の小型鉢。口縁部を屈曲させる際，均等に力が入っていないため，内彎する部分もあり，器体も歪む。5（図版 58-7）は厚手のつくりの甕で，口縁部を短く緩やかに屈曲させる。6（図版 59-3）は焼成失敗品。口縁部直下～胴部上位に径 5.5cmほどの円形の焼成破裂が生じている。一旦，接着剤で接合したが，焼成破裂土器片が薄く接合を外すことができず，そのままの状態で作図，写真撮影した。外面には煤が付着する。7 はコップ型の小型鉢で，底部は凸レンズ底で不安定である。8 は平底の壺の底部，9 は小型甕の上げ底の底部。10 は甕の底部破片で，裾部が「ハ」字形に大きくひらく脚台状につくられている。

この他，台石が出土している（図 44-1）。敲打痕が数か所に集中する。重量 4385g を測る。

⑥柱穴出土の遺物

柱穴である SP-440 からは，掘り形下半部を埋める⑤層から弥生土器と考えられる土器の胴部小片が 4 点出土した。いずれも小片で，図示できなかった。

SP-441 からは，図 41-11・12 が掘り形の上半部から出土している。11 は厚底の甕の底部破片で，裾部が若干「ハ」字形に広がる。底裾付近には，刷毛目工具を押さえつけるため，小さな面が生じている。12 は凸レンズ状底の中型壺の破片である。この他，弥生土器と考えられる土器の胴部小片が 10 点ほど出土している。

SP-442 からは，弥生土器の甕の胴部小片が 5 点出土したのみである。

SP-447 の掘り形埋土上層から図 41-15 が出土している。平底の甕の底部破片。この他，掘り形西端の柱を固定した②層から土器片が出土し，弥生土器の胴部小片 10 点がほどある。炭化物片がごく少量出土している。

SC-33 内から出土した遺物として，出土位置が不明であるが，図 41-17（図版 60-4）の鉢がある。口縁部に断面楕円形の粘土帯を貼り付け，一部を強く折り曲げて，片口をつくる。また，SK-539 の西側の攪乱部分から，図 41-18（図版 60-5）の 5 条の凹線文を施す壺の頸部の破片が出土している。図 41-13 は，SK-539 東側の攪乱部から出土。「く」形口縁甕で，口縁端上部に細い粘土紐を貼り付けて口縁端部を拡張して，2 条の凹線文をめぐらす。さらに，図 41-14 は床面で確認できた SP-445，図 41-26 は SP-480 から出土した遺物で，柱穴・小穴の項で報告する。

⑦ガラス小玉・管玉ほかの遺物

SC-33 の上部土器群を精査中にガラス小玉が出土していることに気がついた。土壌も含めて採取して水洗選別を行い，ガラス小玉の出土を確認できた。取り上げ時に掘り形埋土や上部Ⅲ層部分とした土壌からもガラス小玉が出土したが，調査終了後に再度出土位置を確認した。その結果，掘り形内に投棄された SC-33 上部土器群の分布範囲に収まるので，土器群とともに投棄されたものと考える。

ガラス小玉は，破片も含めて 53 点が出土している（図 45-1 ～ 53，図版 149-11 ～ 150-26）。径 1.6 ～ 1.8㎜の小型品，径 2.2 ～ 3.4㎜の中型品，径 3.5 ～ 4.7㎜の大型品，径 5.4㎜を測る特大品がある。中型の小玉がもっとも多い。その中でも，図 45-5 の孔内には棘状の突出を観察できる。27・37 は斜めに切断された小玉である。また，ほとんどは丸く仕上げられているが，28 は短い管状の形状を呈する。色調は紺色とスカイブルーのもので占められる。巻末の遺構観察表を参照されたい（表 8）。

ガラス小玉に加えて，3 点の管玉が出土してい

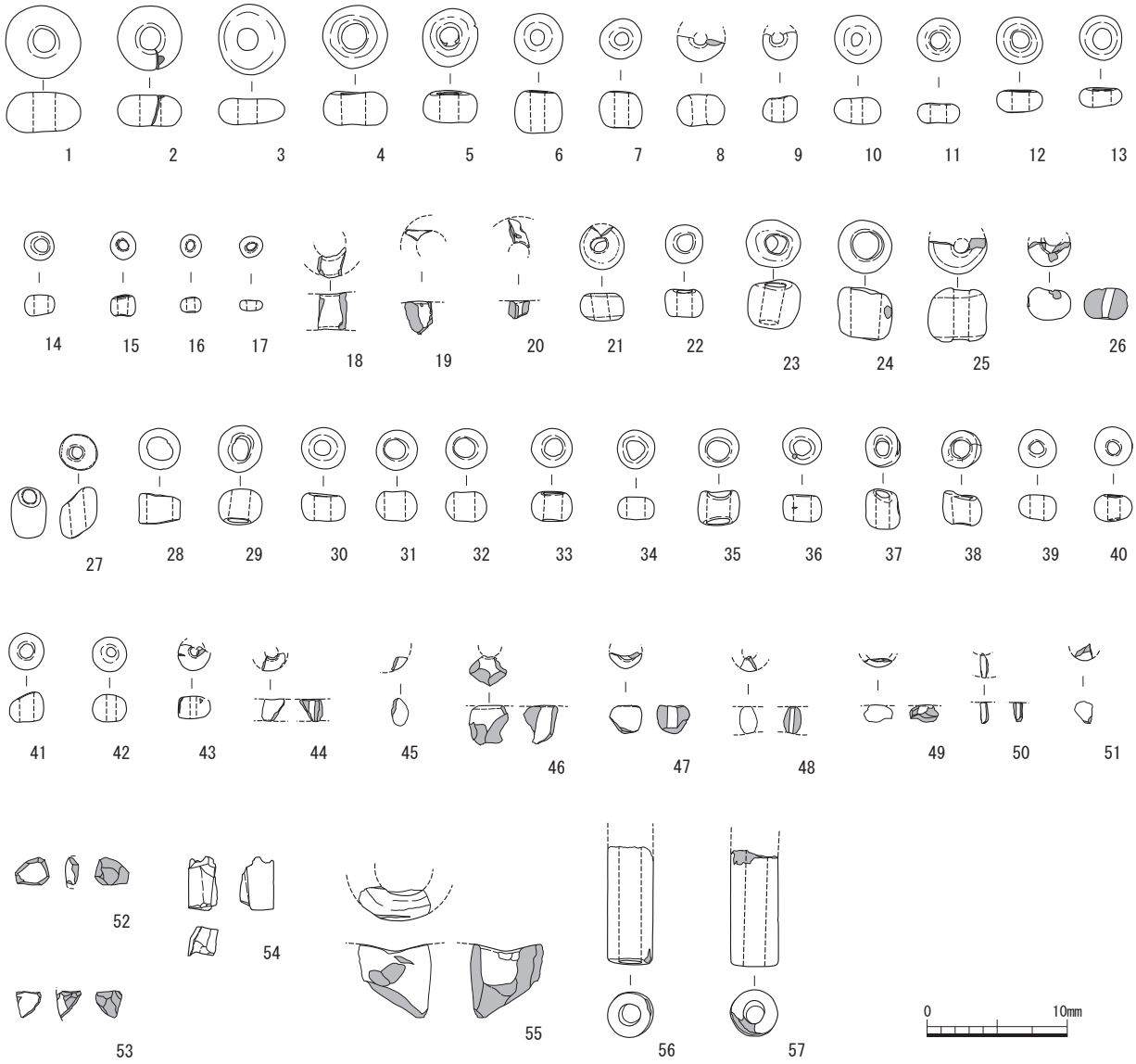


図45　SC-33 出土ガラス小玉，瑪瑙製管玉，緑色凝灰岩製管玉ほか実測図（倍尺２倍）

る（図 45-55 ～ 57）。55（図版 150-29）は，瑪瑙製の管玉の破片で，推定径 7.7㎜，推定孔径 4.05㎜を測る大型管玉である。こうした大型で瑪瑙製の管玉は弥生時代後期～終末期の例としては岡山県楯築墳丘墓や福岡県糸島市平原墳丘墓がある。56・57 は緑色凝灰岩製の管玉である。ともに一端を欠くが，径 3.4㎜，孔径 1.5㎜で，56（図版 150-30）は残存長 8.4㎜，57（図版 150-31）は残存長 8.3㎜を測る。

その他，緑色のガラス破片 1 点（図版 150-27）と透明ガラスの破片 1 点（図 45-54，図版 150-28）が出土している。透明ガラスは近代のもので，混入品である。また，図版 150-32 は，ガラスが溶融して滴状に固まったもので，ガラス滓の可能性が高い。

以上，SC-33 から出土した遺物は多いが，上部土器群は弥生時代後期中葉の土器がほとんどを占め，それ以前の遺物は混入品と考えられる。床面や炉跡・柱穴から出土した土器は弥生時代中期後葉～後期中葉のもので，とくに炉跡 SK-513 から出土した土器には後期中葉に比定できる凸レンズ底をもつ壺がある。重複する SC-32 が後期初頭に比定できるので，SC-33 は弥生時代後期中葉に廃絶する住居跡と判断できる。

37号竪穴建物（SC-37，図46・47，図版14・60）

調査区のほぼ中央のDW-24・25区に位置する竪穴建物である（図46，図版14-1）。SP-224・227・229に切られる。南北辺2.2ｍを測るが，東南部を塹壕で破壊され，東西長は不明である。しかし，塹壕の東側では掘り形を確認できなかったので，一辺2.3～2.4ｍと推定でき，掘り形の平面形は隅丸方形と考えられる。Ⅳ層の上面で検出でき，深さは5～7cmを測る。規模的には，大型土壙に近いが，底面がほぼ平坦であること，立柱痕跡をもつSP-226を検出できたことから，SP-226に柱を立てた簡易の竪穴建物と考えた。掘り形埋土は細礫が多く混じる暗灰黄色砂質土で，径6cmほどや径1～2cmの黄褐色砂質土塊が混じる。

柱穴と考えたSP-226は，長径45cm，短径36cm，床面からの深さ12～13cmを測る長円形の掘り形をもつ。検出面で径15cm前後の立柱痕跡を確認できたが，半截して土層断面を観察中に，降雨のため土層断面が崩れてしまった。そのため，土層図は作成できなかった。埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が非常に多く混じる。立柱痕跡部分は暗褐色シルトである。底面近くから弥生土器の破片が出土している。この他，床面ではSP-225が出土した。長径31cm，短径26cm，深さ2cmほどの浅皿状の窪みである。浅黄色砂質土が多く混じる暗褐色砂質シルトである。床面のほぼ中央に位置することから，SC-37に伴う可能性が高い。

SC-37では，掘り形埋土から遺物は出土していない。唯一，SP-226から弥生土器の破片が出土しただけである（図47-1）。1（図版60-7）は，山ノ口式系土器で甕の胴上半部の破片である。断面三角形の突帯を2条貼り付ける。この他，掘り形上部のⅢ層部分から，弥生土器が数点出土している（図47-2～5）。2は，「く」字形に口縁部を屈折させる甕である。口縁部外面には成形時の指頭痕が残る。3（図版60-6）は高坏の脚裾部の破片である。脚端部を横ナデ調整で斜め上方に摘み上げる。脚部下半の残存部分に4条，端面に1条の凹線文がめぐる。4は口縁部を「く」字形に屈折させる甕の破片で，器壁は薄く，小型品と考えられる。5（図版60-8）は深鉢型の手捏ねのミニチュア土器で，上げ底の底部をもつ。

SC-37の掘り形埋土は，淘汰が悪く，Ⅳ層起源の黄褐色土の大小の塊が混じる。人為的に埋め戻されたと考える。出土遺物は，Ⅲ層出土土器を含めて，埋め戻しの際に混入したものである。上

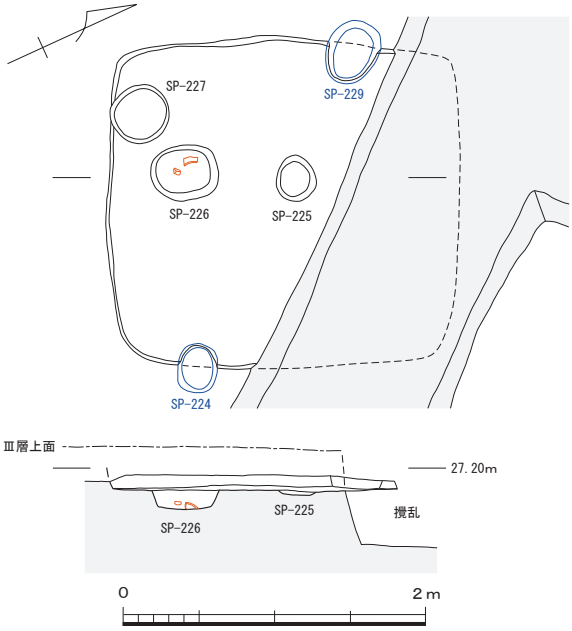


図46　SC-37 遺構実測図（縮尺 1/50）

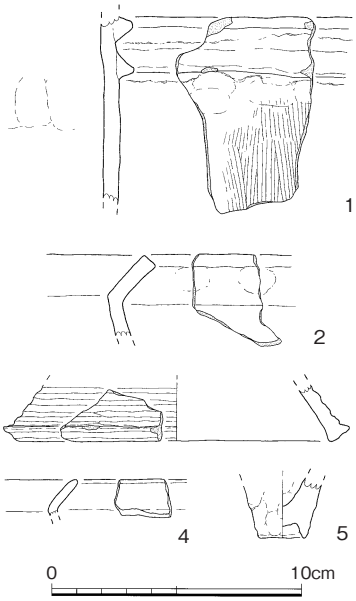


図47　SC-37内SP-226，SC-37 上部Ⅲ層出土土器実測図（縮尺 1/3）

部Ⅲ層の遺物には，弥生時代中期後葉の高坏（図47-3）もあるが，2点の甕（図47-2・4）は後期前葉に比定できる。したがって，SC-37の最終埋没時期は弥生時代後期前葉に求めることができる。

39号竪穴建物（SC-39，図48～53，図版14・15・60～64・138・139・144）

調査区の中央西寄りのDX・DY-25・26区に位置する。Ⅳ層上面で掘り形を検出できた（図版14-2）。塹壕や樹木の植樹のための攪乱で破壊されているが，南北長3.65 m，東西幅3.47 m，検出面であるⅣ層からの深さ15cmほどの隅丸方形の掘り形をもつ。床面では，SK-491，SP-488～490・492・493を検出できた。SK-491は，後述するように，浅い皿状の掘り込みであるが，炭化物が多く混じることから，SC-39に伴う炉跡と判断した。また，SP-489・492は，方形の掘り形の対角線上に位置し，南北の柱穴が攪乱で失われたものと考え，4本柱の構造を推定した。以上から，SC-39は住居跡と判断した（図48，図版15）。

SK-435・439・494に切られ，SK-529・530，SP-439を切る。掘り形の平面形を検出した時点で，SK-435を検出できた。また，その周辺で焼土が径30×40cm，径10～15cmの範囲に集中することを確認できた。焼土の一部はSK-435の上面まで広がっており，SC-39やSK-435が埋没した後のものと考えた。

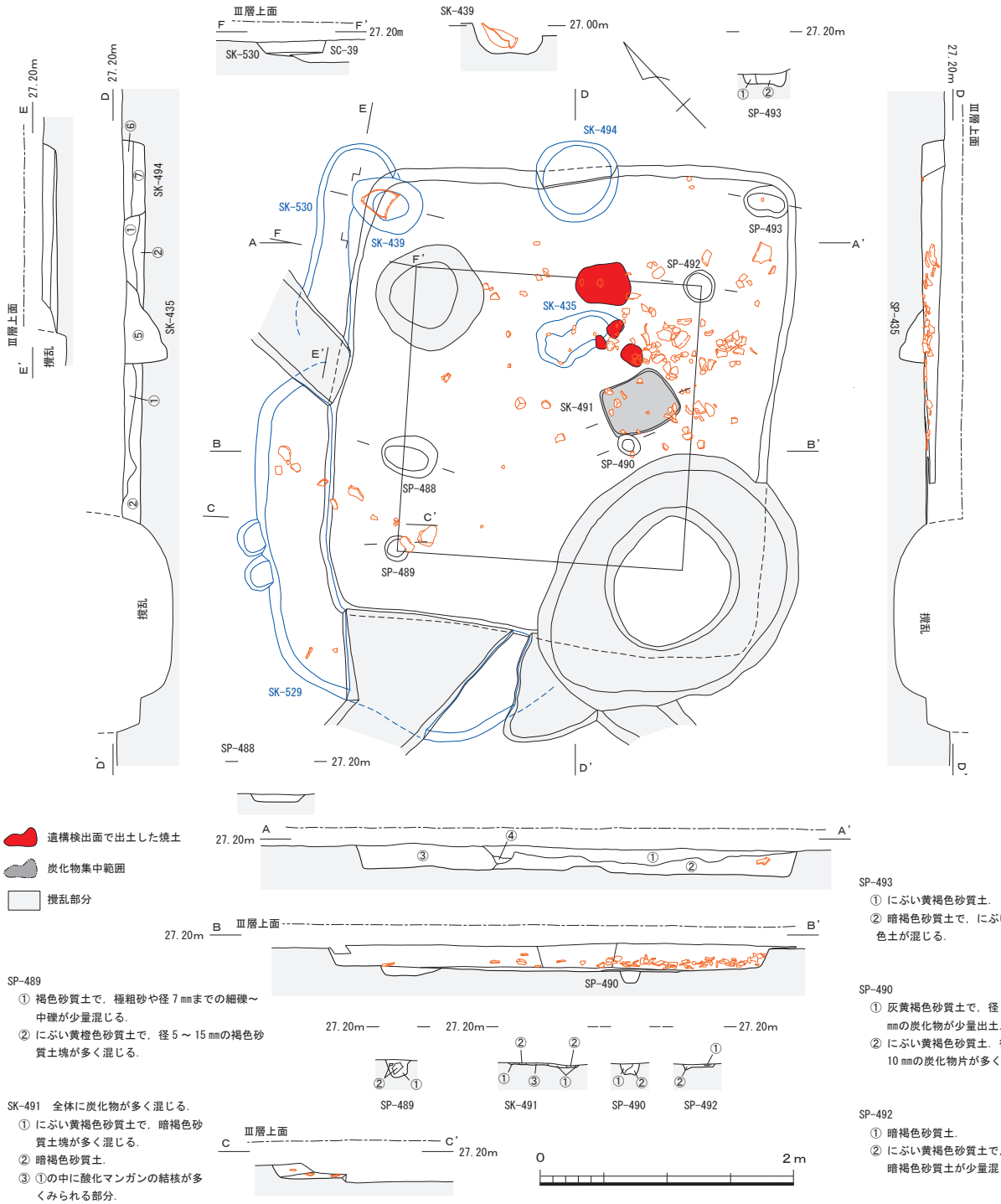
SC-39の掘り形は，下半部を中心として，径3～15㎜の黄褐色シルトや暗褐色砂質土の小塊が混じるにぶい黄褐色砂質土の②層や黒褐色砂質シルトの③層で埋まり，最上部の凹部に小指先大～径4cmの黄褐色シルト小塊が少量混じるやや粘質をおびる暗褐色砂質シルトの①層が流れ込む。②・③層は，大小の多くの黄褐色シルトや暗褐色砂質土の小塊が混じり，淘汰も悪いことから，人為的に埋め戻された土層と考えた。周壁沿いに自然流入土が見られないことから，SC-39は廃絶直後に掘り形の大部分が埋め戻されて窪みとなり，その後，周辺から①層が流入したものと考える。また，掘り形の検出時に40×90cmの範囲に薄い焼土層を確認できた（図版14-3）。①層とともに流れ込んだものと考える。

炉跡であるSK-491は，床面の南東寄りに位置し，長径59cm，短径42cm，床面からの深さ1～2cmの非常に浅い皿状の矩形の窪みである。にぶい黄褐色砂質土や暗褐色砂質土で埋まり，全体に炭化物が多く混じる。

柱穴と考えたSP-489は，径20×22cm，床面からの深さ15cmの不整円形の掘り形をもつ。埋土は，極粗砂や細礫が少量混じる褐色砂質土で，にぶい黄橙色砂質土の大きな塊がみられる。SP-492は，径25～26cm，床面からの深さ5cmを測る浅皿状の円形の掘り形をもつ。埋土はにぶい黄褐色砂質土で，暗褐色砂質土の小塊が混じる。この他，床面で検出したSP-493はSC-39掘り形北東角にあり，柱穴SP-489・492を繋ぐ対角線上にある。長軸長35cm，短軸長25cm，床面からの深さ10cmを測る楕円形の掘り形をもち，にぶい黄褐色砂質土の中に，にぶい黄褐色土の塊が斑文状に混じる暗褐色砂質土がみられる。平面を再確認したが，立柱や杭などの痕跡は検出できなかった。SP-488・490については，SC-39との関係は不明である。調査所見は巻末の遺構観察表を参照されたい（表3）。

SC-39の掘り形埋土からは比較的多くの遺物が出土している（図49～52）。その中で，図49-2・4・5，図50-2～5・7・8・10，図51-1・2・4，図53-1・3・4・6は，②・③層を含む掘り形下半部から出土し，完形近くに復元できる土器を含むことから，SC-39が埋め戻された際に投棄された遺物と考える。掘り形上半部から出土した図50-1・6・9，図51-5，図53-2・5は，SC-39が埋め戻された後に①層とともに流れ込んだ遺物である。

図49-1～5は壺。1（図版60-10）は，口縁端部を横ナデ調整で上下に拡張し，凹線文を2条めぐらす。2は，「ハ」字形に窄まる頸部から，口縁部が短く外反する。3・4は頸部破片。3（図版60-9）は，肩部からラッパ形にひろがる頸部が立ち上がる。頸部の付け根に低い断面三角形突帯を貼り付け，指頭を押捺して大きな刻目を施す。4（図版61-1）は，頸部が緩やかに外反する。頸部の付



SP-489
① 褐色砂質土で，極粗砂や径 7 ㎜までの細礫～中礫が少量混じる．
② にぶい黄橙色砂質土で，径 5 ～ 15 ㎜の褐色砂質土塊が多く混じる．

SK-491　全体に炭化物が多く混じる．
① にぶい黄褐色砂質土で，暗褐色砂質土塊が多く混じる．
② 暗褐色砂質土．
③ ①の中に酸化マンガンの結核が多くみられる部分．

SP-493
① にぶい黄褐色砂質土．
② 暗褐色砂質土で，にぶい黄褐色土が混じる．

SP-490
① 灰黄褐色砂質土で，径 1 ～ 5 ㎜の炭化物が少量出土．
② にぶい黄褐色砂質土．径 1 ～ 10 ㎜の炭化物片が多く出土．

SP-492
① 暗褐色砂質土．
② にぶい黄褐色砂質土で，①の暗褐色砂質土が少量混じる．

①～④は SC-39 掘り形埋土，⑤は SK-435，⑥・⑦は SK-494 掘り形埋土．
① 暗褐色砂質シルトで，小指先大から径 4㎝ ほどの黄褐色シルトの小塊が少量混じる．⑤よりも暗色の土色で，若干粘質がある．炭化物片が少量出土．
② にぶい黄褐色砂質土で，パサパサした質感．小指大から 1 ㎝ほどの黄褐色シルトの小塊が多く混じり，暗褐色砂質土の塊もみられる．炭化物片が少量出土．
③ 黒褐色砂質シルトで，①よりも若干肌理が粗い．径 3 ～ 15 ㎜の黄褐色シルト塊が多く混じるため，全体として黄色みをおびる．暗褐色砂質土の小塊も少量混じる．炭化物片がごく少量出土．
④ 暗褐色砂質シルトで，親指先大から径 8 ㎝の黄褐色シルト塊が少量混じる．①よりも粘質がない．
⑤ SK-435 埋土．暗褐色砂質シルトで，①よりも暗色．親指大～径 5㎝ の楕円形の黄褐色シルト塊が少量混じる。炭化物片がごく少量出土．
⑥ SK-494 埋土上部．褐色砂質土で，②よりも砂質が強い。径 4 ㎝前後の黄褐色シルト塊が少量混じる．
⑦ SK-494 埋土下部．褐色砂質土．土質的には②と共通するが，若干黄色みをおびる．

図48　SC-39，SK-435・439・494・529・530 遺構実測図（縮尺 1/50）

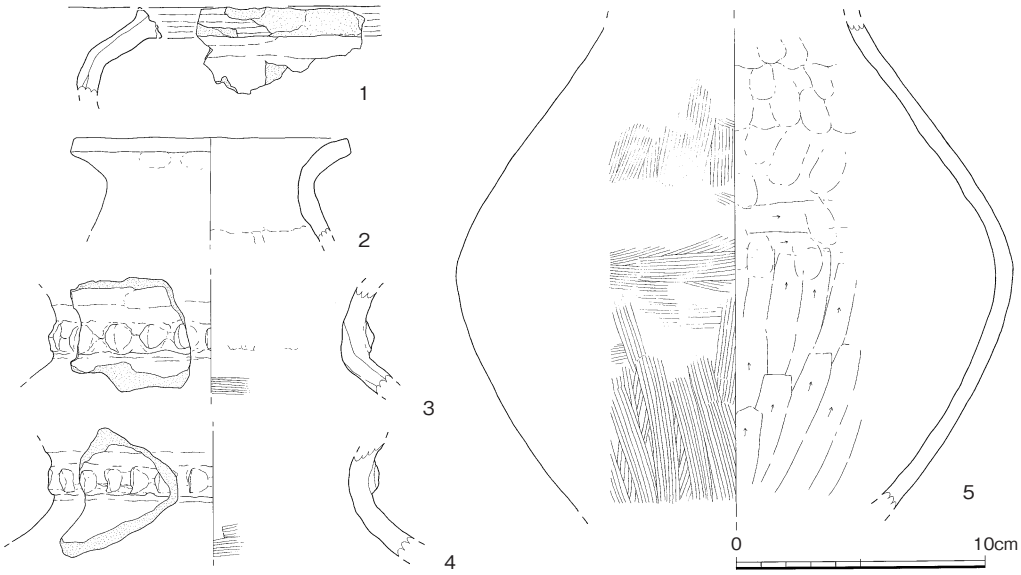


図49　SC-39 掘り形埋土出土土器実測図1（縮尺 1/3）

け根に低い断面蒲鉾状の突帯をめぐらし，板状工具の木口部を押圧して刻目を施す。5（図版 61-4）は胴部～頸部の破片。胴部最大径は胴中位にあり，「ハ」字形に窄まる頸部につながる。外面には縦方向の刷毛目調整を施した後，最大径周辺に帯状に横方向のナデ調整を加える。内面には下から上に向かってケズリ調整を行い，最大径周辺に横方向のケズリ調整を加える。最大径より上部には成形時の指頭痕が顕著に残る。

図 50-1 ～ 5 は甕。1 は口縁端部の破片で，横ナデ調整で端部を上方に小さく拡張する。2 は口縁部上端を横ナデ調整でわずかに突出させる。3（図版 61-3）は，肩部がわずかに張る腰高の胴部に，「く」字形口縁がつく。底部は，裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の上げ底である。胴部外面には縦方向のミガキ調整を施すが，所々に 3cm 四方程度の小さな平坦な面が連続して残されている。タタキ調整の痕跡の可能性が高い。内面はケズリ調整の後に，下半部には縦方向，上半部には横方向のミガキ調整を施す。胴部下半の外面には径 2 × 1.5㎝，深さ 1㎜ほどの楕円形の焼成破裂痕が生じている。外面に煤が付着する。4（図版 62-1）は，胴部最大径が上半にある膨らみをもつ胴部に，「く」字形口縁がつく。口縁部は強く屈折し，口縁端部に横ナデ調整を施し，上端をわずかに摘み上げる。底部は，脚台状の上げ底で，裾部が「ハ」字形にひろがる。外面は縦方向のミガキ調整，下半部には部分的にナデ調整が施される。このナデ調整は，一見ミガキ調整に見えるが，残された条線の単位が平行すること，始点に直交する木口痕が残ることから，板状工具によるナデ調整と考えた。底部付近は二次的火熱により赤変し，胴部中位以上には煤が付着する。5（図版 62-2）は胴下半部の破片で，接合する破片の一方には焼成破裂が生じているが，他の破片には焼成破裂痕がみられない。焼成破裂が接合する破片間で途切れている。焼成中に器体が破損し，一部の破片にだけ焼成破裂が生じた焼成時破損品である。6（図版 61-2）は高坏の埦型の坏部破片である。口縁部下に細く浅い沈線が 3 条以上めぐる。7・8 は壺の底部破片で，ともに薄い平底である。9 は壺の底部で，磨滅により外底面周縁が削れ不安定な底となっている。10 は甕の脚台状の底部破片で，裾部が「ハ」字形にひろがる。11 は甕の底部破片である。

図 51-1 ～ 4 は，山ノ口式系土器の甕である。内傾する逆台形の口縁部に成形する。口縁端面は，横ナデ調整でわずかに窪む（図版 62-3･4）。4（図版 62-5）の口縁部下には低く小さな断面三角形突帯がめぐる。5（図版 62-6）は内傾ぎみの口縁部に 3 条の断面三角形突帯を貼り付ける。

図 53-1（図版 138-4）は，頁岩製の凹基式磨製

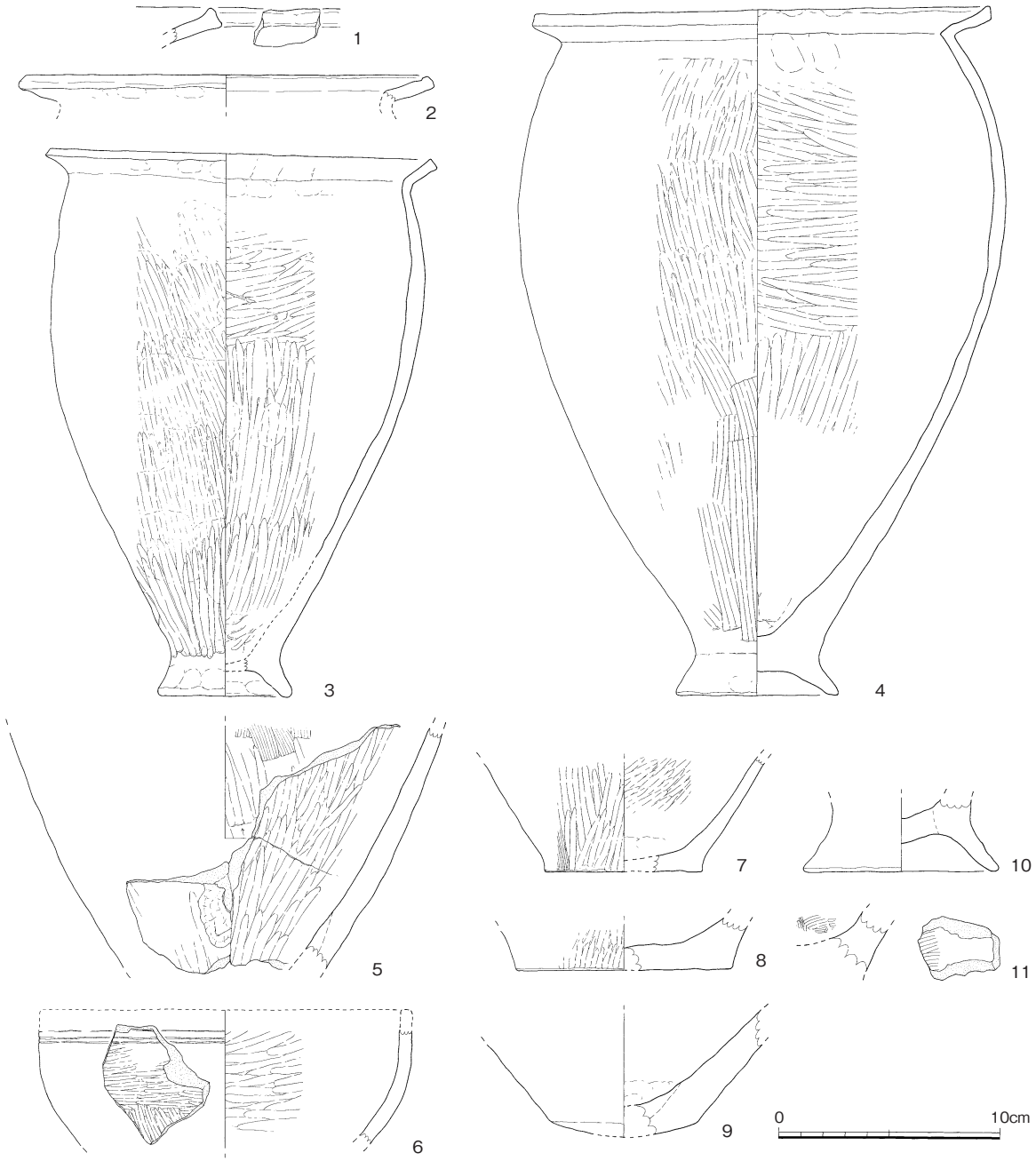


図50　SC-39 掘り形埋土出土土器実測図2（縮尺 1/3）

石鏃。先端部を欠損する。刃部は鋭く研磨され，基部には研磨され狭い面がつくられる。重量 2.0 g を測る。2 ～ 4・6 は砂岩製の砥石である。2（図版 139-5）は一端を欠損する。側面に短い擦痕が連続し，幅 1 ～ 2㎜の溝となっている。重量は 44.9g を測る。3（図版 139-1）は，四面を利用する。二面に幅 3 ～ 4 ㎜の線条痕が残る。重量は 166.6g。4（図版 139-4）は，三面を使用し，いずれの面も中央が凹む。重量は 125.9g。6 は三面を使用する大型の砥石である。重量 756.5g を測る。5（図版 144-4）は砂岩を利用した敲石で，下端部に敲打痕が集中する。重量は 405.5g を測る。

掘り形上部のⅢ層部分からも遺物が出土している（図 52-1 ～ 14，図版 64-1・2）。1 ～ 3 は壺。1 は口縁端部の破片で，指頭で成形した後の横ナデ調整で端面を面取りする。2 はラッパ形にひらく

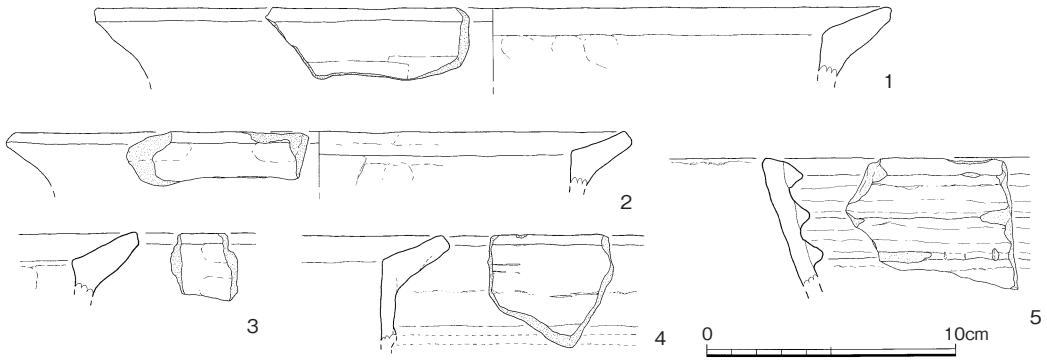


図51　SC-39 掘り形埋土出土土器実測図3（縮尺 1/3）

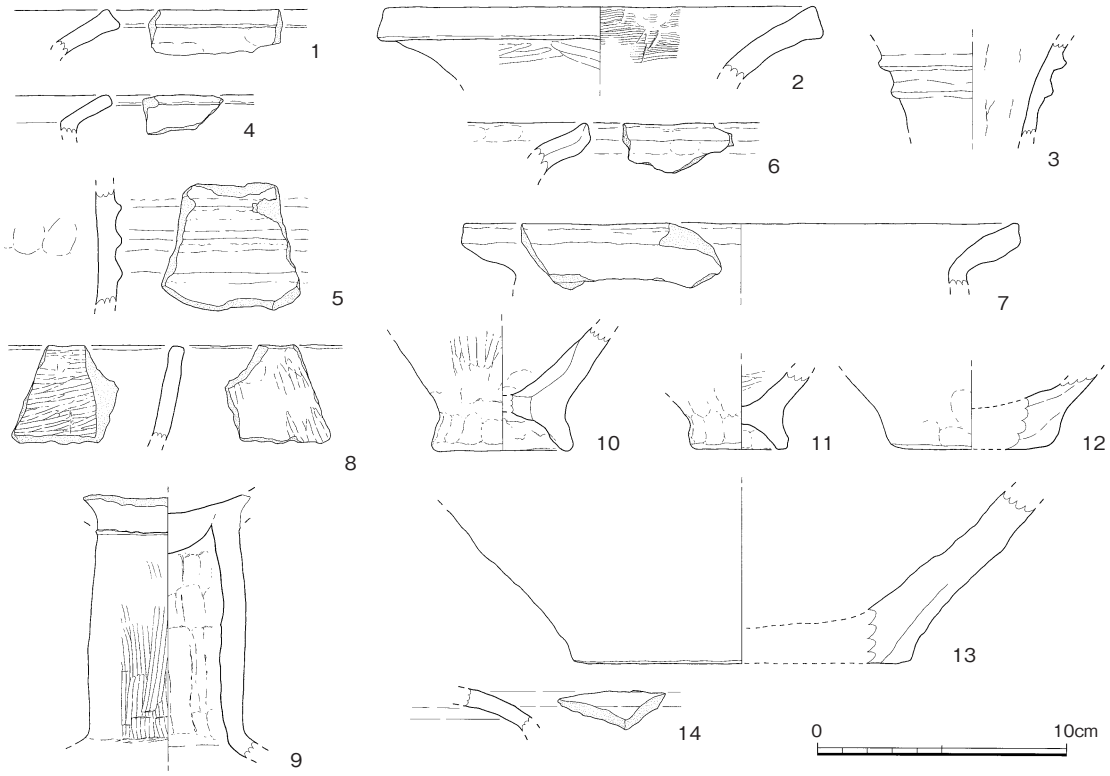


図52　SC-39 上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺 1/3）

口頸部の破片で，横ナデ調整によって端面を面取りする。3（図版 63-4）は細頸で，小さな断面台形の突帯が 2 条めぐる。4 ～ 7 は甕。4 は屈折が強い「く」字形口縁をもつ。5（図版 63-3）は山ノ口式系土器の甕の胴部破片で，断面三角形突帯が 3 条貼り付けられている。6・7 は西南四国系の壺甕である。6 の口縁部は短く緩く屈曲し，端部を上方にわずかに摘み出す。7 は口縁部の先端部が肥厚し，外面には成形時の指頭圧痕が多く残る。8 は直立する口縁部をもつ深鉢型の鉢である。9（図版 63-5）は高坏の脚柱部で，わずかに膨らみを持つ円筒形で，裾部が屈曲してひろがる。柱部の上部には坏部が剥離した痕跡が残されている。10 は甕の底部。裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の底部で，側面には指頭圧痕の凹凸が多く残る。11 も同様の小型甕の底部で，側面の括れ部分は指押さえによる凹凸が著しい。12・13 は壺の底部破片。12 は厚底で，外底面周縁が磨滅して不安定な底となっている。13 は大型の壺もしくは鉢の平底である。

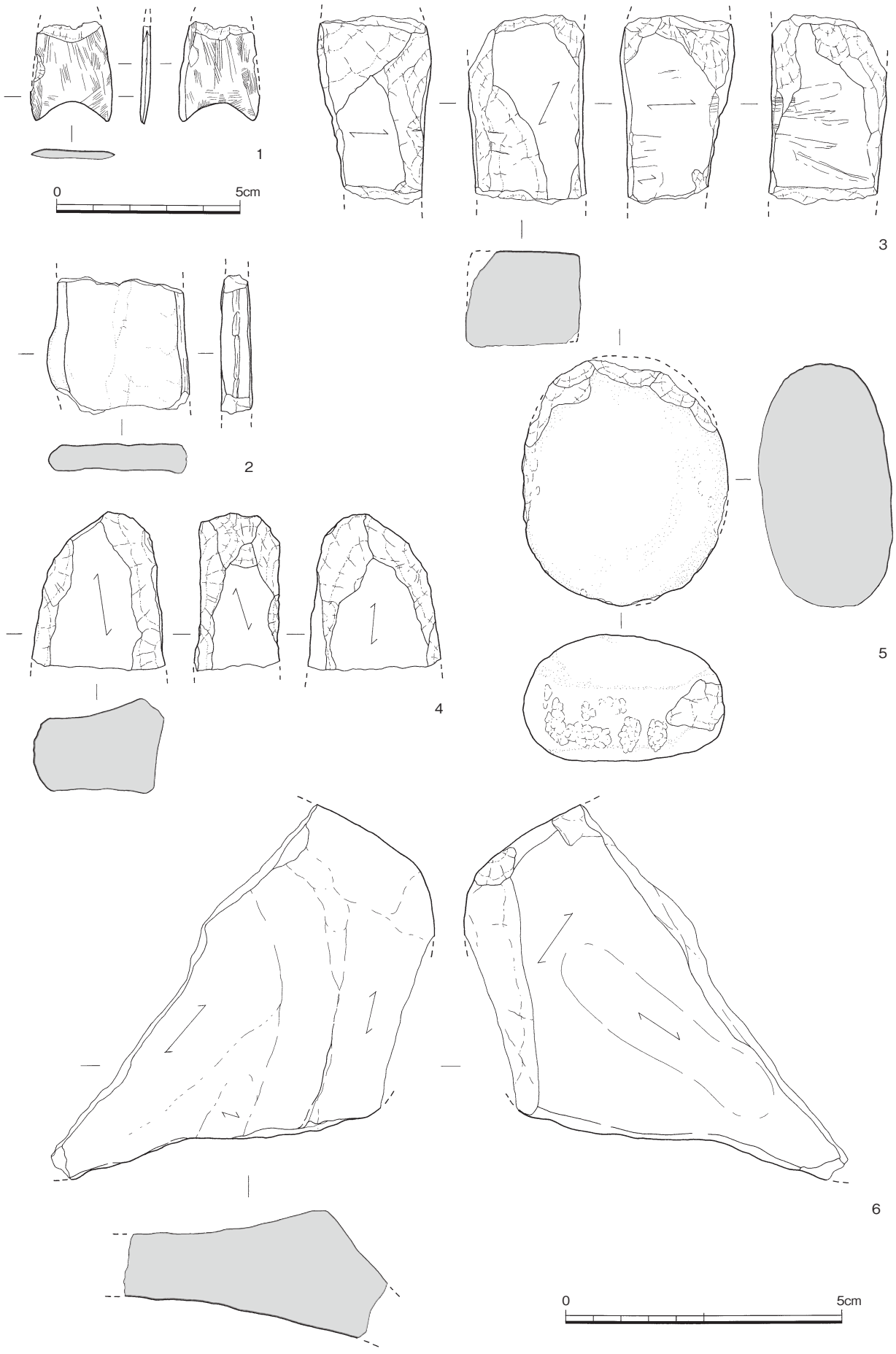


図53　SC-39 出土石器実測図（縮尺 2/3，1/2）

14 は須恵器の坏蓋の破片である。図版 64-1・2 は縄文土器の破片である。同一個体と考えられる。小片のため天地は不明。胎土には雲母が多く混じる。これらは混入品と考えられる。

SC-39 が人為的に埋め戻された際に投棄された②・③層出土の土器（図 49-2 ～ 5，図 50-2 ～ 5・7・8・10，図 51-1・2・4）は，弥生時代中期後葉に比定できる。当該期に SC-39 の廃絶時期を求めることができる。

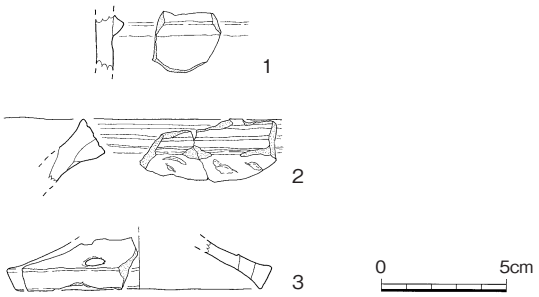


図54　SC-41 出土土器実測図（1：掘り形埋土，2・3：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

41号竪穴建物（SC-41，図16・54，図版10・64）

調査区中央部の DV・DW-24・25 区のⅣ層上面で掘り形の平面を検出できた。SC-25・536 や SD-45 に切られ，部分的にしか残存しておらず，柱穴等も明確でないが，底面がほぼ平坦であるので，竪穴建物とした（図 16）。一辺 3 ～ 4 m前後の隅丸方形の掘り形と考えられる。掘り形埋土は，暗褐色砂質シルトで，Ⅳ層起源の浅黄色砂質土の小塊が多く混じり，人為的に埋め戻されているものと判断した。

床面では SP-303・304 を確認できた。SP-303 は，長軸長 65cm，短軸長 35cm，床面からの深さ 5cm前後の不整楕円形の皿状に窪む掘り形をもつ。底面は凹凸にとむ。埋土は極暗褐色砂質土である。SP-304 は，推定径 55cm，検出できた SC-41 の床面からの深さ 10cmほどの円形の掘り形をもつ小穴である。埋土は極暗褐色砂質土。ただし，SP-304 の掘り形埋土からは古墳時代後期の須恵器坏の小片が出土し，SP-304 は SC-41 や SD-45 の遺構検出時に見落とした SC-41 を切る小穴である。SP-303 も，SP-304 と共通する埋土をもつので，古墳時代後期の遺構である可能性が高い。

SC-41 の掘り形埋土から出土した遺物は少なく，いずれも細片で，図化できた遺物は 1 点だけである（図 54-1）。甕の胴部破片で，断面三形の突帯を貼り付ける。胎土に砂礫が多く混じり，暗赤褐の色調で，器壁も厚いことから，山ノ口式系土器の甕と考える。

上部Ⅲ層出土遺物も小片がほとんどである（図 54-2・3）。2（図版 64-4）は，口縁部下面に粘土を貼り付け，口縁部端面を拡張して篦状工具で沈線を 3 条めぐらすことで，凹線文を表現する。口縁部外面には成形時に生じた粘土の撚れが窪みとして残る。3（図版 64-3）は遺構検出直前のⅢ層最下面から出土している。紐通し孔と考えられる小孔があり，復元径が 10cm前後であることから，蓋とした。上部Ⅲ層部分からは，これら以外にも土器の破片が出土しているが，いずれも弥生土器ばかりである。

SC-41 は，弥生時代後期後葉の SC-25，後期中葉の SC-536 に切られる。しかし，出土遺物が少なく小片のため埋没時期を絞り込めない。弥生時代中期後葉～後期前葉の時間幅で捉えておく。

42号竪穴建物（SC-42，図55・56，図版10・64）

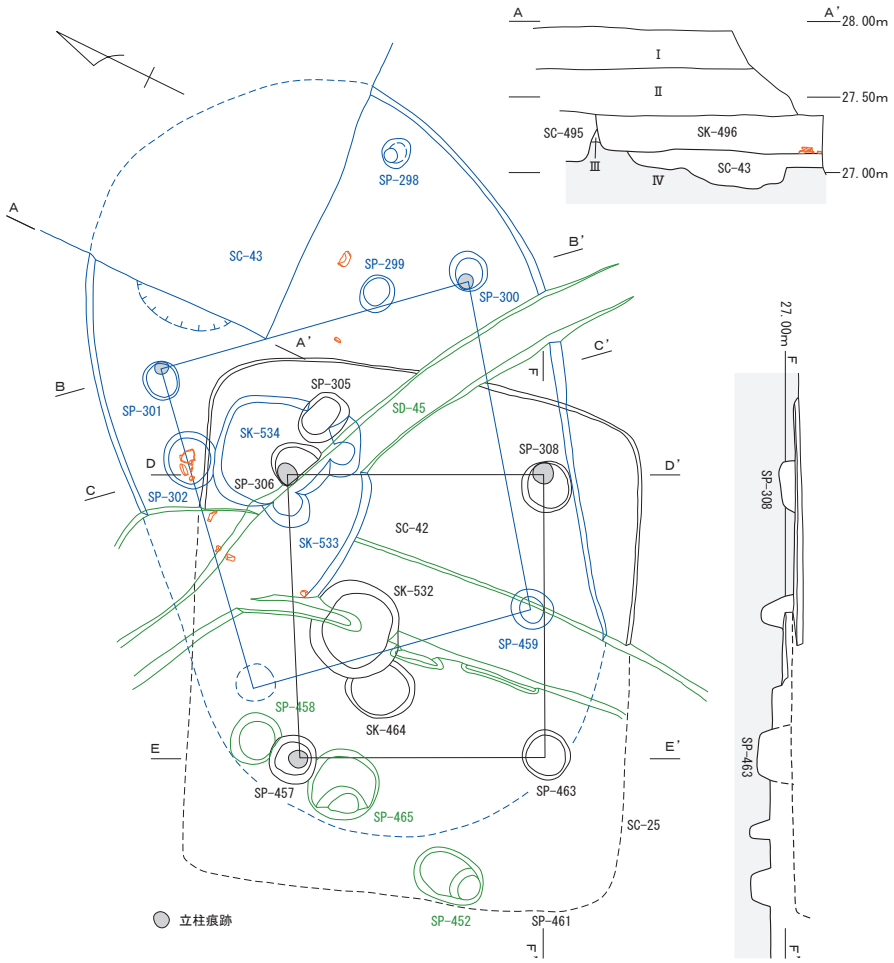
DU・DV-24・25 区に位置する。SC-25 の掘り形平面をⅣ層上面で検出した際，北東側に広がる径 3 ～ 4cmの浅黄色砂質シルト塊が混じる暗褐色砂質シルトの広がりを確認できた。SC-25 の掘り形埋土やⅣ層の黄褐色砂質シルトと対比させながら，隅丸方形の掘り形を検出した。SC-43 を切り，SC-25･536，SD-45 に切られる（図 55，図版 10）。

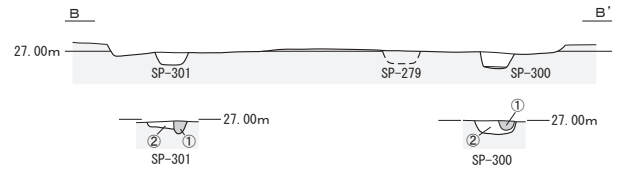
SC-25 と同時に調査を進め，床面で立柱痕跡をもつ SP-306･308 を確認し，SC-25 の床面で検出した SP-457･463 を加え，4 本柱構造の竪穴建

物を推定した。柱間は，SP-306･308 間が 1.69 m，SP-308･463 間が 1.76 m，SP-457･463 間が 1.62 m，SP-306･457 間 が 1.87 m である。柱配置を基準とすれば，2.9 × 3.45 m の隅丸方形の掘り形を推定できる。検出面であるⅣ層上面からの深さは 4 ～ 7cmを測る（図 55，図版 10）。また，4 本の柱が囲むほぼ中央で SK-464･532 が出土した。当初，炉跡と考えたが，埋土には炭化物や焼土が確認できず，炉跡とは考え難い。この他，北側角の床面で SP-305 を検出したが，これも加え，SC-42 に伴うものかは不明である。

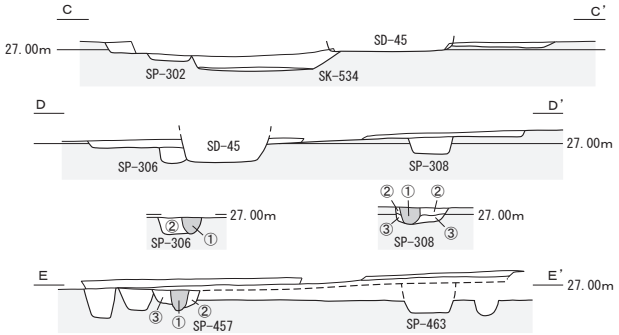
柱穴である SP-306 は，SD-45 に切られ，径 33 cmほどの不整円形の掘り形をもつ。SC-42 の床面からの深さは 11 ～ 12cm。掘り形の西壁沿いで径 12 × 14cmほどの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の先端は丸みをおび，若干打ち込まれたような痕跡となっている。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，立柱痕跡部分には小豆大の浅黄色砂質土塊が帯状に集積する。

SP-308 は，径 34 ～ 35 cm，SC-42 床面からの深さ 11cmを測る円形の掘り形をもつ。北壁沿いで径 14cmの立柱痕跡を確認できた。柱を底面に若干打ち込み，掘り形下部





SP-300　① 立柱痕跡，径 10 cm前後．極暗褐色砂質シルト．
② 暗褐色砂質シルトに，拉げた小豆大の浅黄色砂質土塊が多く混じる．
SP-301　① 立柱痕跡，径 9 cmで先端は尖る．暗褐色砂質シルト．
② 極暗褐色砂質シルトに，小豆大の浅黄色砂質土塊が多く混じる．



SP-306　① 立柱痕跡，径 12 ～ 14 cm．極暗褐色砂質シルト．
② 極暗褐色砂質シルトに，小豆大の浅黄色砂質土の塊がかたまって帯状に集積．
SP-308　① 立柱痕跡，掘り形埋土の②に近いが、にぶい黄褐色砂質シルトの小塊の量が少ない．
② 極暗褐色砂質シルト．径 3 ～ 4 cmの粘質土部分のブロックが含まれる。小豆大のにぶい黄褐色砂質土の塊が多く混じる．
③ 極暗褐色砂質土の中に浅黄色砂質土の小指先大の塊が混じる．
SP-457　① 立柱痕跡．暗褐色砂質シルトで，粒状の炭化物がごく少量混じる．
②･③ 暗褐色砂質シルト。径 1 cmほどの褐色シルト土の楕円形のブロックが多く混じる．

図55　SC-42・43 遺構実測図（縮尺 1/50）

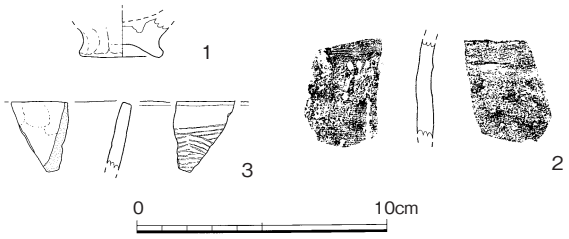


図56　SC-42及びSC-42内SP-457 出土土器実測図
（1・2：SC-42 掘り形埋土，3：SP-457，
縮尺 1/3）

を径 1cm前後の極暗褐色砂質土塊の間に浅黄色砂質土が混じる土③層で固め，さらに径 3 ～ 4cmの粘質をおびる極暗褐色砂質シルト塊や径 1cm前後のにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じる②層を充填する。

SP-457 は，径 31 ～ 33cm，検出できた SC-25 の床面からの深さ 9cmを測る円形の掘り形をもつ。掘り形中央の東寄りで径 13cm前後の立柱痕跡を確認できた。柱の先端は尖りぎみで，底面に 4cmほど打ち込まれる。埋土は径 1cmほどの褐色シルト塊が多く混じる暗褐色砂質シルトである。

SP-463 は，SC-25 の床面で検出した。径 31 ～ 32cm，深さ 10cmほどの円形の掘り形をもつ。立柱痕跡は確認できなかった。埋土は親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が非常に多く混じる暗褐色砂質シルトである。

この他，SK-464 は，SK-532 を切り，長径 45cm，短径 41cmの長円形の掘り形をもつ。検出できた SC-25 の床面からの深さ 4cmを測る皿状の掘り込みである。埋土は暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色土や浅黄色砂質土が多く混じる。遺物は出土していない。SK-532 は，径 61 ～ 63cm，深さ 7cmほどの円形の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質シルトで，径 3 ～ 5cmの浅黄色砂質土やにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。埋土中からは花崗岩の亜円礫が 1 点出土している。柱穴 SP-306 の東側の床面で検出した SP-305 は，長軸長 36cm，短軸長 28cm，深さ 13cmほどの楕円形の掘り形をもつ。埋土は極暗褐色砂質シルトで，下部には親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。

SC-42 の掘り形埋土から出土した遺物は，土器の小片ばかりで，量も少ない。弥生土器もあるが，図化できたものは縄文土器の深鉢底部（図 56-1）と胴部上半部（図 56-2）の破片だけである。1（図版 64-5）は小さな上げ底で，内面は粘土接合面で剥離し，剥離面には細い棒状工具で突き刺したような痕跡が残る。2（図版 64-6）は破片の上部に浅い段があり，わずかに屈曲するようにみえる。胴部でも口縁部近くの破片と考えられる。また，柱穴の SP-457 埋土中からも，縄文土器の口縁部破片が出土している（図 56-3，図版 64-7）。深鉢の口縁部で，外面には条痕調整，内面はナデ調整を施す。

以上，SC-42 から出土した土器で図示できたものは縄文土器ばかりである。弥生土器も出土しているが，胴部の小片ばかりで量も少なく，SC-42 の時期の決め手とはならない。しかし，後述する弥生時代中期後葉～後期初頭に埋没する SC-43 を切り，後期中葉の SC-536 と後期後葉の SC-25 に切られていることから，弥生時代後期前葉の竪穴建物と考えておく。

43号竪穴建物（SC-43，図55・57，図版10・64・65）

DU・DV-24・25 区に位置する。Ⅳ層上面で SC-25・42 の北側にのびる掘り形を確認でき，床面まで掘り下げた時点で，立柱痕跡をもつ SP-300・301 を検出できた。SP-300・301 間の柱間は 2.1 mを測り，SP-300 を基点として南側に直交方向に延長した 2.2 mの位置に SP-459 を確認できた。SP-301 を基点にして南側には小穴を欠くが，SP-300・301・459 を柱穴とする竪穴建物を復元できる（図 55，図版 10）。北東端は調査区外にのびるが，長軸長 5 m前後，短軸長 2.95 mの楕円形の掘り形をもつものと考えられる。また，SP-301 の南側の床面では SK-533･534 が出土した。しかし，ともに埋土中に焼土や炭化物はみられず，炉跡とは考えない。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，Ⅳ層起源の径 3 ～ 4cmの浅黄色砂質土塊が斑文状に多く混じる。SC-42 と比べて浅黄色砂

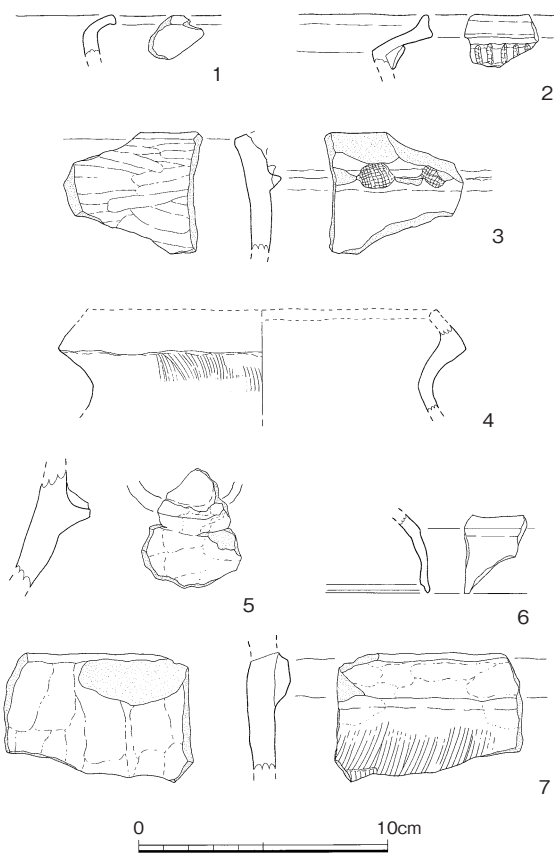


図57　SC-43，SK-496 出土土器実測図
（1：掘り形埋土，3：上部Ⅲ層部分，
2･4～7：SK-496，縮尺 1/3）

質土塊がとくに多く混じり，Ⅳ層や SC-42 との区分はかなり容易で，掘り形の輪郭線も明確であった。SC-25・42・536 に切られる。また，調査区壁面の土層断面で，SC-43 の上層に SK-496・558 が掘り込まれていることを確認できた。

柱穴である SP-300 は，径 26 ～ 27cm，床面からの深さ 11cmほどを測る円形の掘り形をもつ。西壁沿いで径 10cmの立柱痕跡を確認した。埋土は暗褐色砂質シルトで，拉げた小豆大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。SP-301 は，長径 27cm，短径 24cm，床面からの深さ 8 ～ 9cmの長円形の掘り形をもつ。北東壁沿いで径 9cmほどの立柱痕跡を確認できた。埋土は極暗褐色砂質シルトで，小豆大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。SP-459 は，SC-42 の床面に位置し，長径 29cm，短径 26cm，深さ 16cmを測る長円形の掘り形をもつ。立柱痕跡は検出できなかった。埋土は暗褐色シルトで，にぶい黄褐色砂質シルトが斑状に混じる。この他，掘り形北半部の調査区沿いには不整形の窪みが掘り込まれている。

床面で検出できた SK-533 は，SD-45 に切られ，大部分を破壊されている。残存する長軸長は約 1 m，幅は 60cm未満の細長い楕円形の掘り形で深さ 6cmほどの舟底状の土壙である。埋土は暗褐色砂質シルトで，径 3 ～ 5cmの浅黄色砂質土やにぶい黄褐色砂質シルトの塊が多く混じる。また，SK-534 は，長軸長 92cm，短軸長 74cm，床面からの深さ 9cmを測る不整形の土壙である。掘り形内には浅黄色砂質土が縞状に混じる暗褐色砂質シルトが流れ込む。この他，SC-43 の床面で検出した SP-298・299・302 の調査所見は巻末の遺構観察表を参照されたい（表 3）。

SC-43 から出土した遺物はきわめて少ない。図化できた遺物は甕あるいは鉢の口縁部破片と胴部破片だけである（図 57-1，図版 65-1）。図 57-1 は，口縁部を緩やかに外反させ，内外面ともに横ナデ調整を施す。図版 65-1 は，外面に刷毛目調整，内面に篦状工具によるナデ調整を施す甕の胴部破片である。また，SP-305 の埋土中からは，外面に幅 13㎜ほどの擦過調整，内面に縦方向のミガキ調整を施す甕の胴部破片が出土（図版 64-13）。

掘り形上部のⅢ層部分からは，少量であるが遺物が出土している（図 57-2 ～ 7）。この中で，3 は SC-43 中央北よりにあたる DU-25-9 区Ⅲ層最下面から出土し，SC-43 に伴う遺物と考えられる。他は，SC-43 の上層に掘り込まれた SK-496 に伴う遺物である。

図 57-2（図版 64-8）は「く」字形口縁の甕の破片で，口縁端部に細い粘土紐を貼り付け，上方に口縁端部を摘み上げる。口縁屈折部に突帯を貼り付け，刷毛目工具の端部を押捺して刻目を施す。3（図版 64-9）は肩部～口縁部の大型甕の破片である。口縁部を「く」字形に屈折させ，口縁屈折部から若干下がった位置に断面三角形の突帯を貼り付け，平織りの布を巻いた指先を押捺して太い刻目を施す。4（図版 64-10）は複合口縁壺の破片。短めの頸部が緩やかに反転して複合口縁部につながる。5（図版 64-11）は小片であるが，U 字形の突起が貼り付けられ，外面には篦状工具による乱雑なナデ調整，内面には指頭によるナデ調整を施す。同様の胴部中位に U 字形の突起をもつ弥生

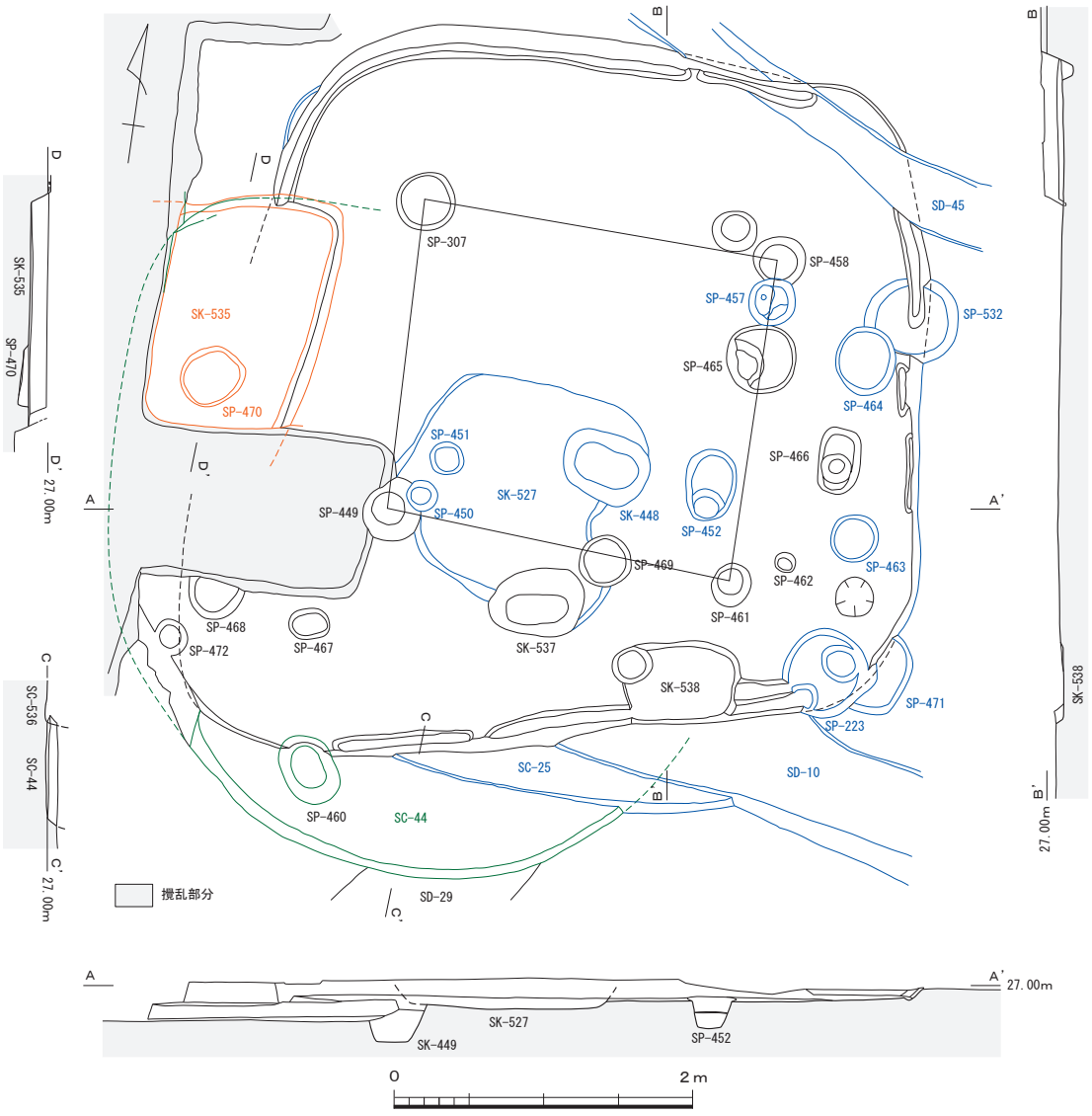


図58　SC-44・536，SK-535 遺構実測図（縮尺 1/50）

土器としては，朱の最終精製過程で用いられる把手付片口鉢がある。胎土には径 2 ～ 3㎜の角礫，極粗砂が多く混じる。6 は須恵器の坏蓋の破片で，体部と天井部の境界部に段があり，口縁端部の内面には沈線様の浅い段がめぐる。7（図版 64-12）は低い断面台形の籠をめぐらす。円筒埴輪の破片と考えられる。破片上端は疑口縁となっている。

以上，SC-43 が営まれた時期を決定できる遺物はごくわずかである。しかし，外面に刷毛目調整，内面に篦状工具によるナデ調整を施す甕の胴部破片（図版 65-1）にみられる調整手法は，弥生時代中期後葉～後期初頭に一般的にみられる。また，遺構検出面直上のⅢ層最下面から出土した甕（図 57-3）も弥生時代中期後葉のものである。さらに，弥生時代後期後葉に埋没する SC-25，後期中葉の SC-536 に切られることから，SC-43 の埋没時期は弥生時代中期後葉～後期初頭の時間幅で捉えることができる。

44号竪穴建物（SC-44，図58・59，図版10・65）

調査区中央部の DV・DW-24 区に位置する SC-25，その下層で出土した SC-536 の南側

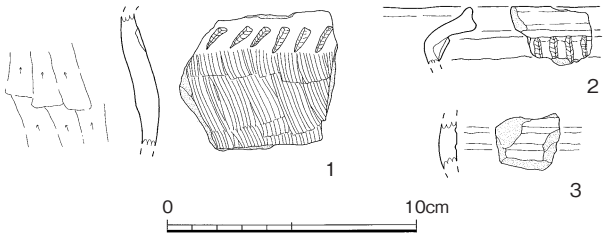


図59　SC-44 出土土器実測図（縮尺 1/3）

で確認できた竪穴建物である（図 58，図版 10）。SC-25・536，SK-535，SD-10 に切られる。SC-25・536 の南側と北西側の SK-535 との切り合い部分で確認できた掘り形をつなげ，長径 4.5 m，短径 4.2 mの長円形の竪穴建物と推定した。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，Ⅳ層起源の浅黄色砂質シルトの大小の塊が多く混じり，人為的に埋め戻されていると判断した。小型ではあるが，円形を呈することから，住居跡と考える。床面では，SP-460 が出土したが，SC-44 との関係は不明である。また，SC-536 と比べて，SC-44 の床面が若干浅く，SC-536 の床面で検出した小穴や柱穴の中には SC-44 に伴うものがあると考えるが，特定できなかった。床面で検出した SP-460 の調査所見は，巻末の遺構観察表を参照されたい（表 3）。

SC-44 の掘り形埋土からは弥生時代中期後葉～後期初頭の甕と壺などの小片が数点出土したにすぎない（図 59-1 ～ 3）。1（図版 65-2）は SC-44 の北西部に当たる SK-535 との重複部から出土した。甕の肩部～胴部の破片で，口縁部下に刷毛目工具の木口部の角を押捺した短斜線文をめぐらす。外面には煤，内面には炭化物が付着する。2・3 は SC-44 の掘り形埋土から出土。2（図版 65-3）は緩やかに「く」字形に外反する甕の口縁部破片である。口端部に細い粘土紐を貼り付けて横ナデ調整で端部を摘み上げる。口縁部の屈曲部には突帯をめぐらし，刷毛目工具の木口部を押捺した刻目を施す。3（図版 65-4）は壺の頸部の小片である。2 条の浅い沈線文をめぐらす。いずれ弥生時代後期初頭の特徴をもつ。

SC-44 は，弥生時代後期後葉に埋没する SC-25，後期中葉の SC-536 に切られ，後期前葉と推定される SC-42 とは近接して営まれている。出土遺物はごくわずかで，しかも SC-44 が埋め戻される過程で混入した遺物と考えられる。以上を参考とすれば，SC-44 の廃絶時期は弥生時代後期初頭と捉えることができる。

47号竪穴建物（SC-47，図60～63，図版16・17・65・66）

DW・DX-23・24 区に位置する。SK-46 と SD-72 を切り，SK-77，SP-246 に切られる。北半部を塹壕で破壊されている。Ⅳ層上面で検出した掘り形をつなぎ，長辺 4.83 m，短辺 3.35 mの隅丸長方形の掘り形を復元した（図版 16-1）。塹壕北側の床面は，南側と比べて若干高い。埋土に炭化物や焼土が詰まる SK-75 を炉跡と考え，床面南東部で出土した SP-261 で立柱痕跡を確認できたので，塹壕の中に柱穴を推定して 2 本柱構造を考えた（図 60，図版 17-1）。ほぼ均一の淘汰の悪い極暗褐色砂質シルトで埋積されている。掘り形底面にはかなり凹凸があり，凹み部分を砂礫が多く混じる極暗褐色砂質シルトで埋めて貼り床とし，平坦な床面を造っている（図版 17-2）。

炉跡の SK-75 は径 107 × 111cmの不整形で，浅い窪み状で，貼り床を深さ 4 ～ 5cm掘り窪めている（図版 16-2）。底面には凹凸があり，埋土は暗褐色砂質土で，炭化物や焼土が詰まる。柱穴の SP-261 は，長径 67cm，短径 49cm，床面からの深さ 8cmほどを測る長円形の掘り形をもち，貼り床を掘り下げている。掘り形の中の南東寄りの位置で径 19cmの立柱痕跡を確認できた。掘り形の埋土は暗褐色砂質土である。立柱痕跡の先端は丸みをおびる。

床面では，SP-263 ～ 265・289 ～ 295 が出土したが，SC-47 との関係は不明である。SC-47 を切る SP-246 とともに，調査所見は巻末の遺構観察表を参照されたい（表 3）。

出土遺物は土器片が多い。Ⅲ層部分～掘り形埋土の上下より比較的大型の破片が出土しており，中には掘り形埋土とⅢ層部分から出土した破片が接合する例がある（図 61-1 ～ 6）。遺物の出土状

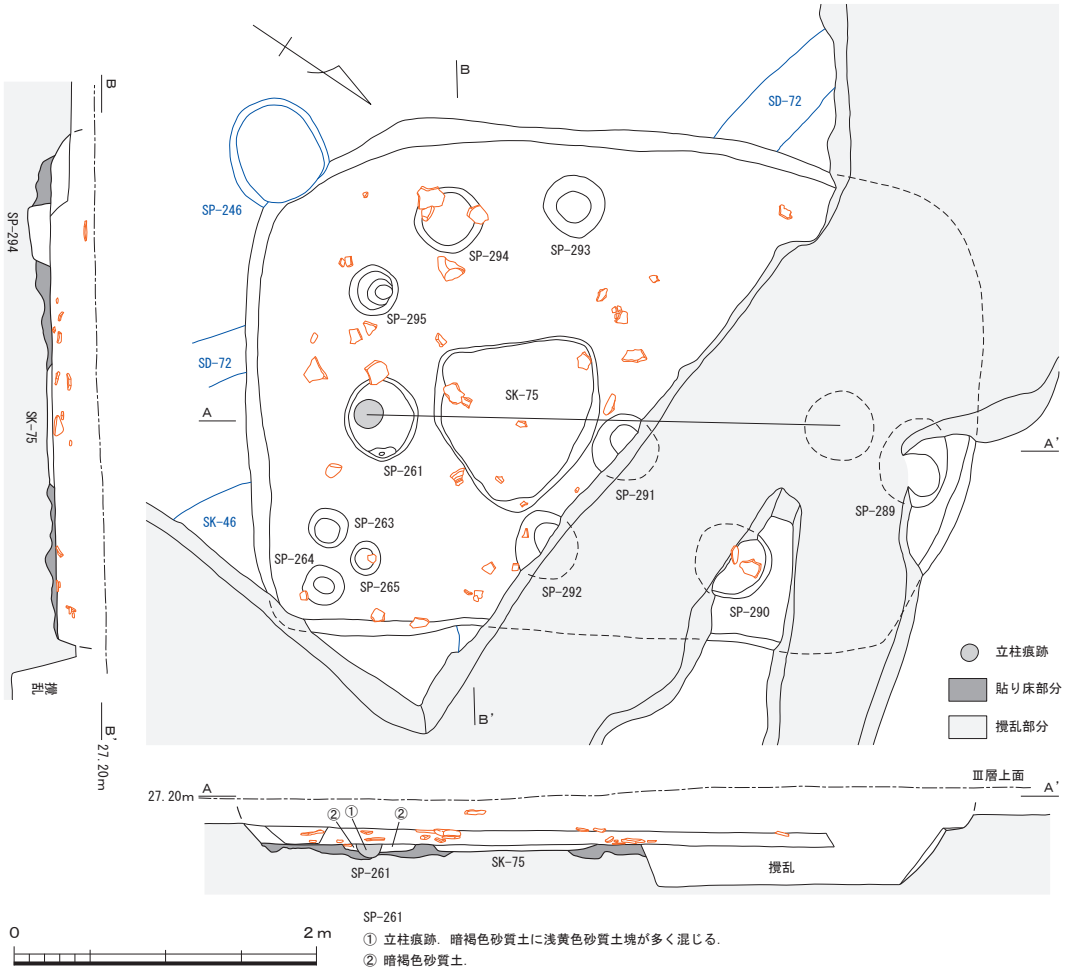


図 60　SC-47 遺構実測図（縮尺 1/50）

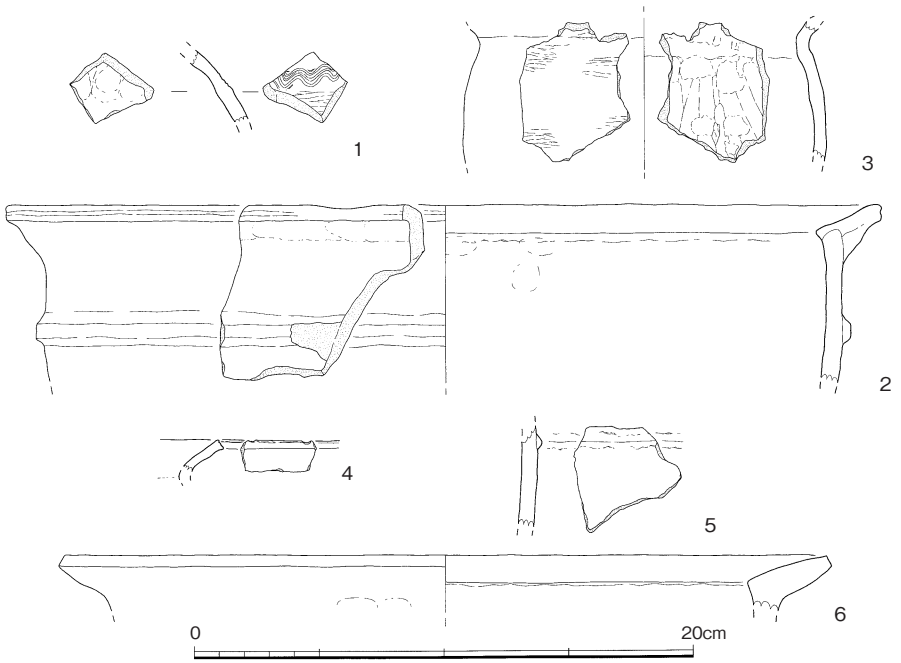


図 61　SC-47 掘り形埋土，SK-75，SP-290 出土土器実測図（縮尺 1/3）

況は散漫で，破片も小さいので，SC-47の埋没過程で流れ込んだ遺物と考えられる（図版16-2）。

図61-1・2は掘り形埋土，3は炉跡であるSK-75の底面，4・5は貼り床部分，6はSP-290埋土から出土した。1（図版65-5）は壺の肩部破片で，5本1単位の櫛描き波状文が施文されている。2・5・6は山ノ口式系土器の甕である。3は小型甕の胴部上半の破片である。2（図版65-6）・6（図版65-7）は内傾する断面台形の口縁部を成形する。口縁下に断面M字形突帯を1条めぐらせる。5は胴部上半に小さな断面三角形突帯を貼り付ける。4は，器壁の薄さから，小型甕の口縁部破片と考えた。

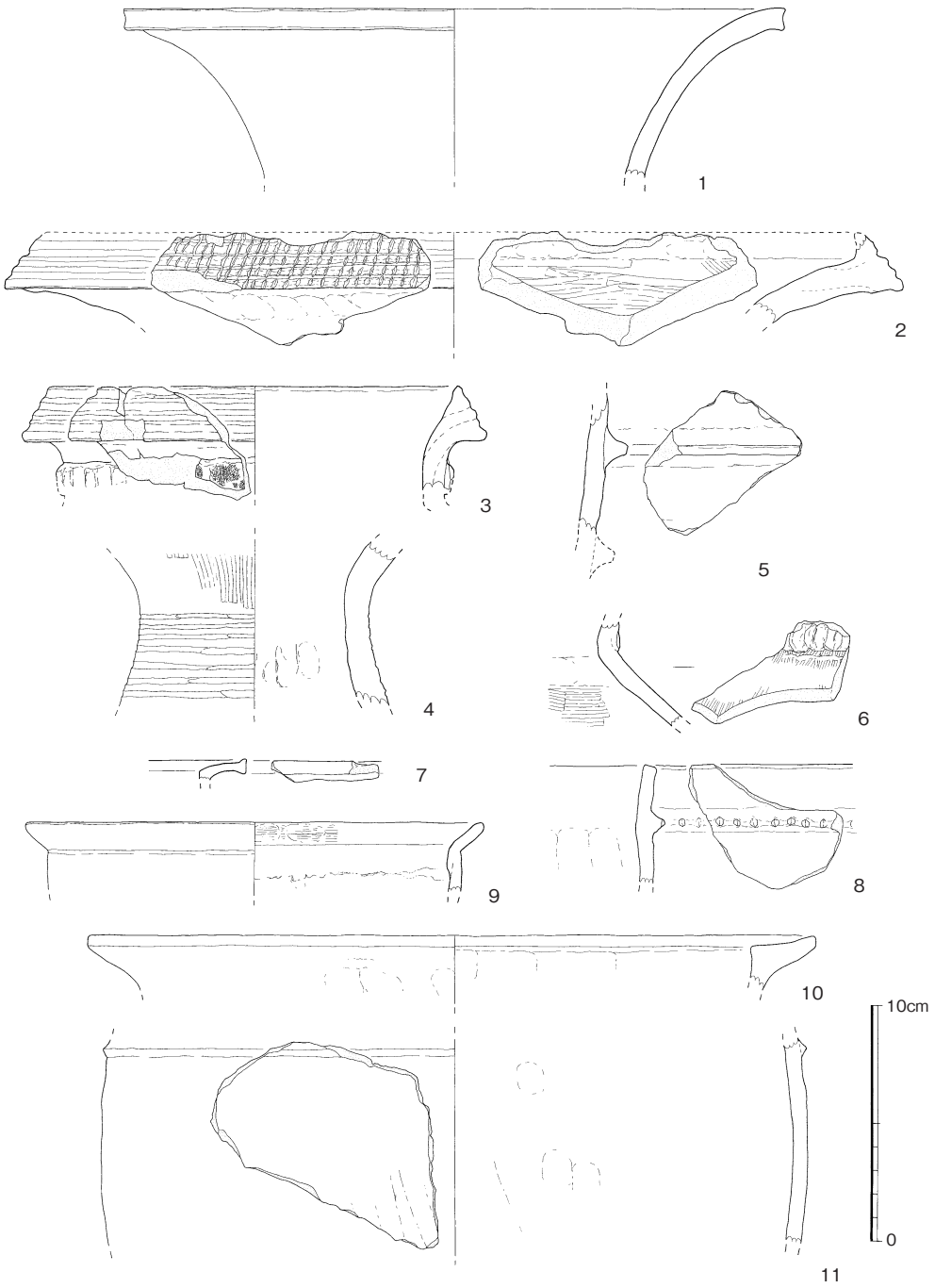


図62　SC-47上部Ⅲ層部分出土土器実測図1（縮尺1/3）

掘り形上部のⅢ層部分からは比較的多くの遺物が出土している（図62・63）。その中でも，図62-5・6・9，図63-1・2・5・9はⅢ層部分でも下部から出土し，図62-3は掘り形埋土とⅢ層部分から出土した破片が接合する。図62-1（図版65-8）は，口縁部が大きくラッパ形にひらく壺の口頸部の破片である。口縁端面は強いナデ調整により凹む。2（図版66-3）はラッパ形にひらく壺の口縁部破片で，口縁上端部に粘土帯を貼り付け拡張して，凹線文を4条めぐらし，その上に短斜線文を施文する。3（図版66-1）は円筒形の頸部から口縁部が短く外反する厚手のつくりの壺である。口縁上端部に粘土帯を貼り付け拡張し，太いが浅い凹線文を4条めぐらす。頸部には平織りの布を指頭に巻いて太い刻目を施す突帯がめぐる。4は壺の頸部の破片である。緩やかに「ハ」字形

に窄まり，大きくラッパ形にひろがる口縁部がつくものと考えられる。頸部中央に7条の沈線がめぐる。5（図面65-10）は壺の胴部破片と考えた。断面台形状の突帯を1条貼り付ける。残存している突帯の下方に横ナデ調整による窪みが観察でき，下方に若干離れて，もう1条突帯が貼り付けられた可能性が高い。6（図版66-5）は壺の肩部破片で，頸部の付け根に爪で刻目を施す低い突帯が1条めぐる。7は逆L字形に口縁部を屈折させる甕で，端部を横ナデ調整で上方に摘み出す。8は下城式系土器の甕である。直立する口縁部のやや下がった位置に断面三角形の突帯を貼り付け，小さな刻目を施す。胎土にはクサリ礫や径5㎜前後の白色の角礫が混じる。9は「く」字形口縁部をもつ鉢である。口縁部上面がやや内彎ぎみに窪む。10・11は山ノ口式系土器の甕である。10（図版65-9）は内傾する断面台形の口縁部をもつ。11（図版66-2）の胴部上半には断面三角形の突帯が1条めぐる。10・11の胎土には金雲母が多く含まれる。

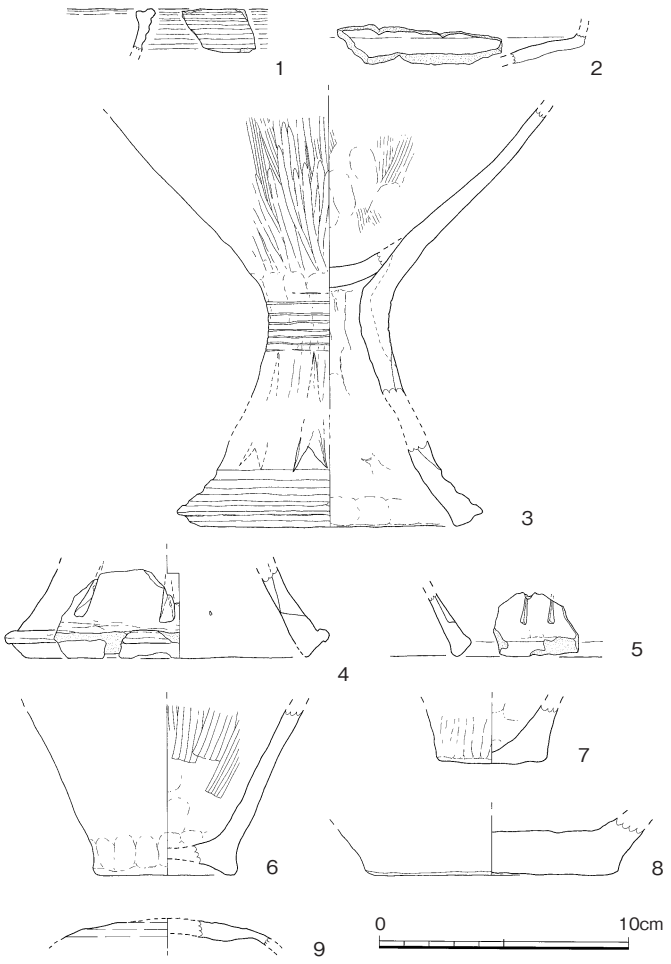


図63　SC-47上部Ⅲ層部分出土土器実測図2（縮尺1/3）

図63-1（図版66-6）は椀型の坏部をもつ高坏である。口縁端部を左右に拡張し，端面に1条，外面に4条以上の凹線文をめぐらす。2は坏部中位で反転する高坏である。3は長脚の高坏で，坏部は深い椀型である。脚柱部の付け根に6条の沈線，脚裾部に3条の凹線文，その間に未貫通の矢羽根透かし孔を焼成前にあける。裾端部を横ナデ調整で引き延ばして，1条の凹線文を施す。4・5は高坏の脚端部の破片である。4（図版66-4）には，三角形の透かし孔が施され，一部貫通する。端部は強いナデ調整によって上端部が小さな玉縁状となる。明赤褐色の薄いスリップを施している。5には未貫通の三角形の透かし孔を意識した斜線文が施される。胎土は図63-2と類似し，精製され，わずかに極粗砂～粗砂を含む。6は甕の上げ底の底部，7は復元した底径から小型の深鉢型の鉢と考えた。8は平底の壺の底部である。9は須恵器の短頸壺の蓋で，内外面ともに回転ナデ調整を施す。

出土した遺物の中で，須恵器の蓋（図63-9）は，古墳時代後期のSD-72との重複部分のⅢ層部分から出土しており，混入品と判断できる。これを除いた土器は弥生時代中期後葉～後期前葉に比定できる。その中で，炉跡SK-75から出土した甕（図61-3）は後期前葉，貼り床部分から出土した甕（図61-4）は後期初頭の特徴を備える。したがって，SC-47の廃絶時期は弥生時代後期前葉に求めることができる。

69号竪穴建物（SC-69，図64・65，図版18・66・67）

DY・DZ-26・27区のⅣ層上面で検出できた竪穴建物である。中央部を塹壕で，北半部をSK-70

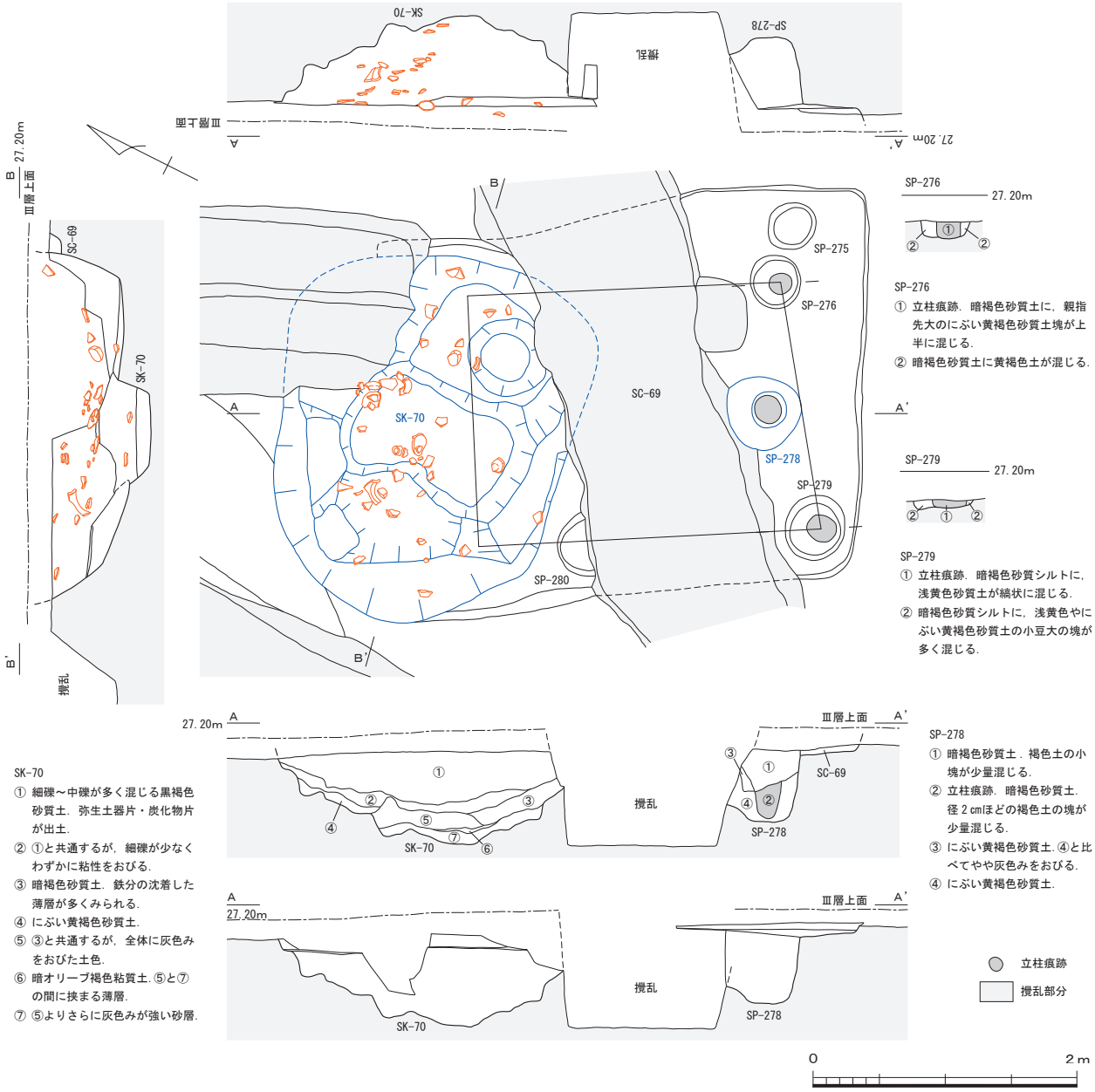


図 64　SC-69，SK-70，SP-278 遺構実測図（縮尺 1/50）

で大きく破壊されているが，東西幅 2.85 m，南北の推定長 3.6 mほどの隅丸長方形の掘り形を復元できる（図 64，図版 18-1）。SD-21・505 を切る。検出面のⅣ層からの深さは 5 ～ 7cmを測る。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，径 2cmほどのⅣ層起源のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じり，人為的に埋め戻されていると判断できる。南半部の床面で SP-275・276・278 ～ 280 を検出でき，SP-276・278・279 では立柱痕跡を確認した。この中で，SP-278 は土層観察畦の断面で SC-69 の埋土を掘り込んでいることを確認でき，SP-276・279 を SC-69 の柱穴と考えた。掘り形の南半部に位置するので，北側の SK-70 との重複部分に 2 つの柱穴を推定し，4 本柱構造を復元することができる。

柱穴の SP-276 は，径 38 ～ 41cm，床面からの深さ 13cmを測る円形の掘り形をもつ。掘り形の中央南寄りで径 16 ～ 18cmの立柱痕跡を検出できた。埋土は暗褐色砂質土に黄褐色土が混じる締まった土質である。SP-279 は，長径 50cm，短径

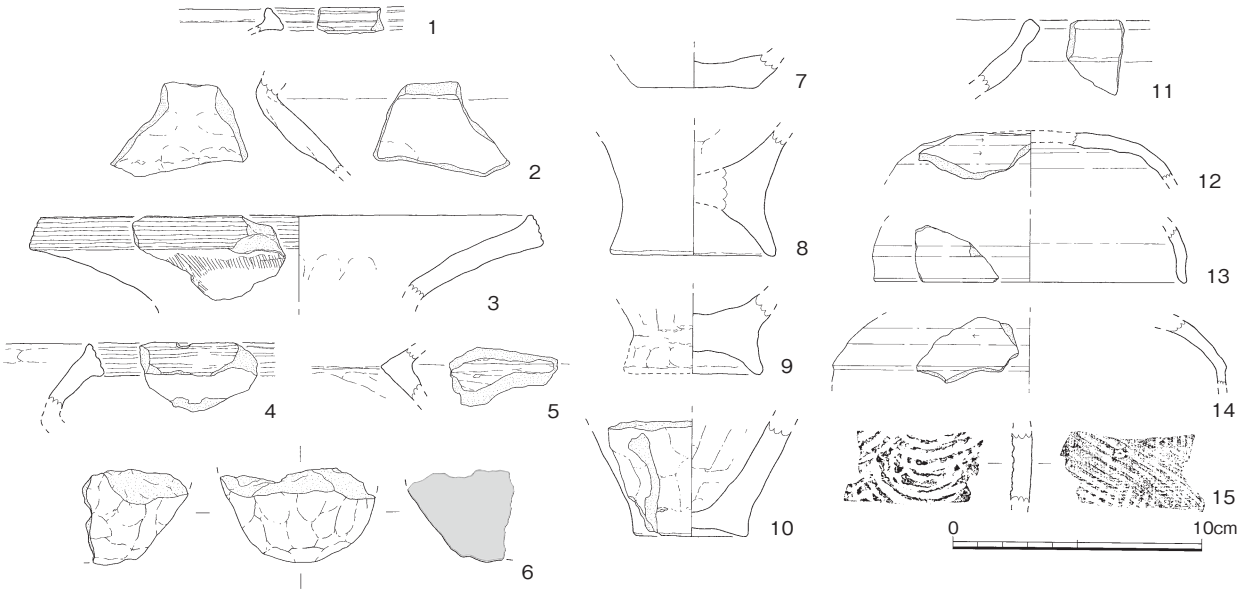


図 65　SC-69 掘り形埋土，SP-279，SC-69 上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺 1/3）

46cm，床面から深さ 6cmほどの長円形の掘り形をもつ。掘り形の中央南寄りで径 21 × 18cmの立柱痕跡が出土した。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大の拉げた浅黄色やにぶい黄褐色の砂質土の小塊が多く混じる。SP-276・279 の柱間隔は 1.9 m である。

この他，床面で検出した SP-275・280 は SC-69 に伴うものかは不明である。調査所見については巻末の遺構観察表を参照されたい（表 3）。なお，SP-278 については柱穴・小穴の項で報告する。

SC-69 の掘り形埋土から出土した遺物は少なく，図化できた遺物は甕の口縁部小片だけである（図 65-1，図版 66-9）。口縁上端部に粘土を貼り付けて拡張し，浅い凹線文を 2 条めぐらす。また，柱穴の SP-279 からは壺の破片が出土している（図 65-2）。肩部の破片で，内面には粘土接合の痕跡が残る。

一方，掘り形上部のⅢ層部分からは比較的多くの遺物が出土している（図 65-3 ～ 15）。その中で，3 ～ 6・8・9・11・15 はⅢ層部分でも SC-69 の掘り形検出面近くの最下部から出土しており，本来は掘り形埋土に包含されていた可能性が高い。3（図版 66-10）は大きくラッパ形にひらく壺の口縁部の破片である。頸部は円筒形に立ち上がると考える。口縁端部は横ナデ調整でやや上方に拡張され，沈線が 3 条施される。4･5 は甕である。4（図版 67-1）は，口縁端部を横ナデ調整で上下に小さく拡張し，浅い凹線文を 3 条めぐらす。5 は口縁屈曲部の破片である。6（図版 66-11）は高坏の脚部と坏部を繋ぐ充填円盤の破片である。7 は壺の平底の破片，8・9 は甕の底部破片である。8 は裾部が「ハ」字形にひらく脚台状の上げ底で，9 は高台状の上げ底である。10 も甕の底部破片で，厚めの上げ底に仕上げられている。

11 は古墳時代後期の土師器の甕の口縁部破片である。口縁部はやや内彎ぎみで，口縁端近くに強い横ナデ調整を施して窪ませている。12 ～ 14 は須恵器の坏蓋で，12 は丸みをおびた天井部をもち，13 の口縁端部の内側には回転横ナデ調整で小さな面をつくる。14 の天井部と体部境には凹線文状の段がめぐる。15 は須恵器の胴部壺か甕の破片で，傾きは不明である。外面には平行条線のタタキの後にカキメ調整を施し，内面には同心円文の当て具痕が残る。

SC-69 の掘り形埋土や柱穴から出土した遺物は少なく，上部Ⅲ層部分から出土した遺物には弥生土器に加えて古墳時代後期の土師器や須恵器が混じる。とくに，SC-69 の検出面近くのⅢ層最下部から出土した遺物にも，古墳時代後期の土師器甕（図 65-11）や須恵器の胴部破片（図 65-15）が混じる。以上から，SC-69 は古墳時代後期に比定できる。

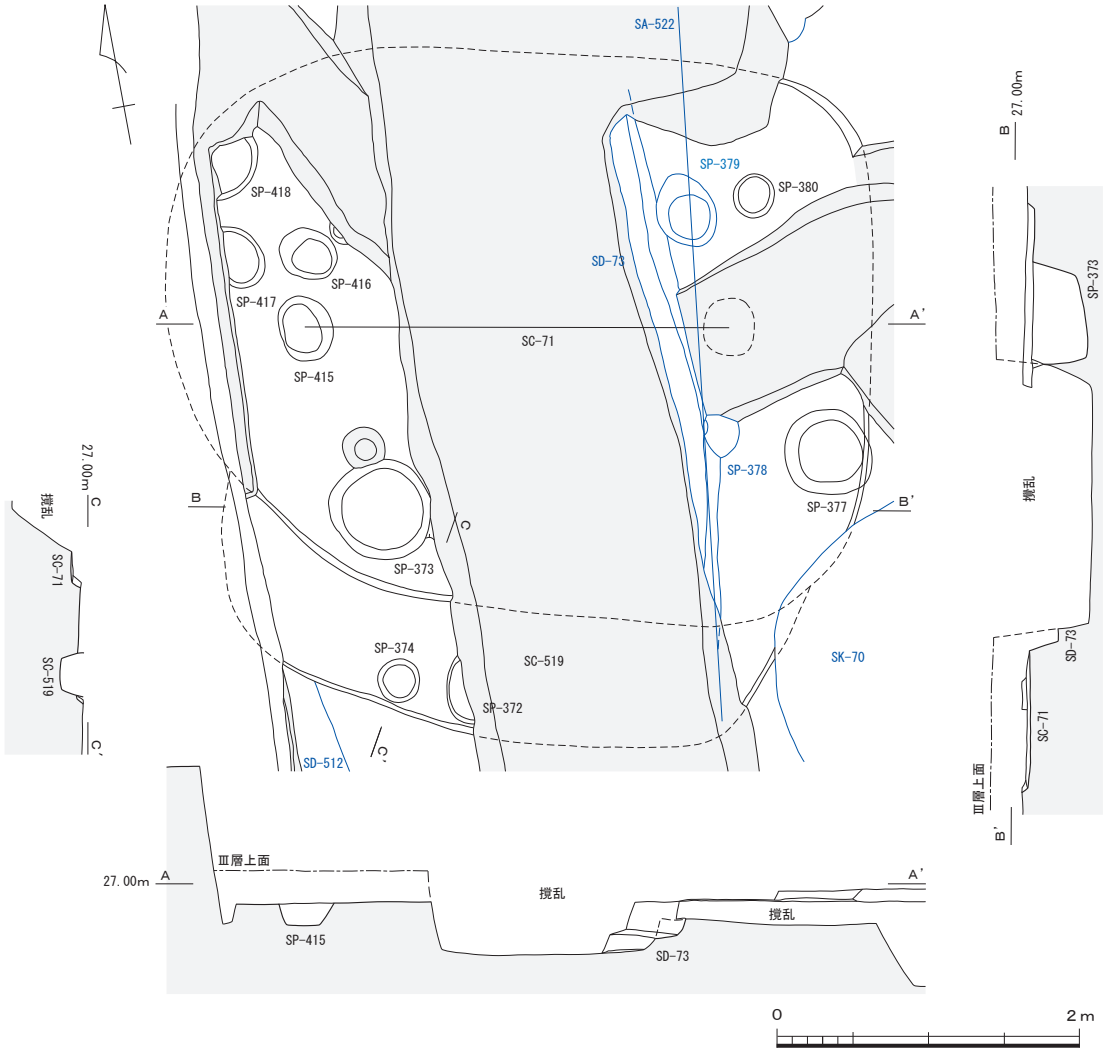


図 66　SC-71・519，SP-373 遺構実測図（縮尺 1/50）

71号竪穴建物（SC-71，図66～69，図版67・148）

DY・DZ-27 区に位置する。SD-73，SK-70，SA-552 を構成する SP-378・379 に切られる。SP-377 を切る。Ⅳ層上面で掘り形の平面形を確認できたが，塹壕で大きく破壊され，当初 1 棟の建物跡と考えて調査を進めた。ところが，掘り形を掘り下げていくと，南端部が 1 段高くなることを確認できた。そこで，北側の深い建物跡を SC-71，南側の浅い建物跡を SC-519 とした。土層を再度観察した結果，SC-71 が SC-519 を切ることを確認できた。

塹壕の周囲で確認できた掘り形から，長軸長 4.65 m，短軸長 3.7 mほどの不整楕円形の掘り形を復元できる。Ⅳ層上面からの深さは 8cm前後である（図 66）。掘り形埋土は，にぶい黄褐色砂質シルトの小塊が混じる暗褐色砂質シルトである。Ⅳ層起源のにぶい黄褐色シルト塊が混じることから，人為的に埋め戻されているものと判断できる。

床面で SP-373・377・380・415 ～ 418 が出土した。この中で，掘り形の長軸線上に位置する SP-415 を西側の柱穴とする 2 本柱構造を考えた。SP-415 は，径 35cm× 45cm，床面からの深さ 15cm ほどを測る長円形の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質シルトで，径 2 ～ 4cmの拉げた楕円形のにぶい黄褐色砂質シルト塊が非常に多く混じる。また，SP-380 は，SC-71 の床面で検出できたが，埋土は暗褐色砂質シルトで，塹壕の埋土と同じく風化が著しい花崗岩塊が混じる。塹壕を部分的に掘り残した可能性が高い。床面で検出した SP-373・

377・416 ～ 418 については，SC-71 に伴うかは不明である。深くしっかりした掘り形をもち柱穴と考えられる SP-373・377 は柱穴・小穴の項で報告するが，SP-416 ～ 418 の調査所見は巻末の遺構観察表を参照されたい（表 3）。

SC-71 から出土した遺物は少ない（図 67-1 ～

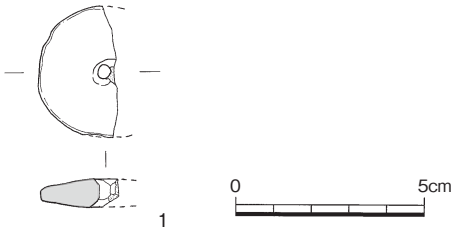


図 68　SC-71 上部Ⅲ層部分出土土製紡錘車実測図（縮尺 1/3）

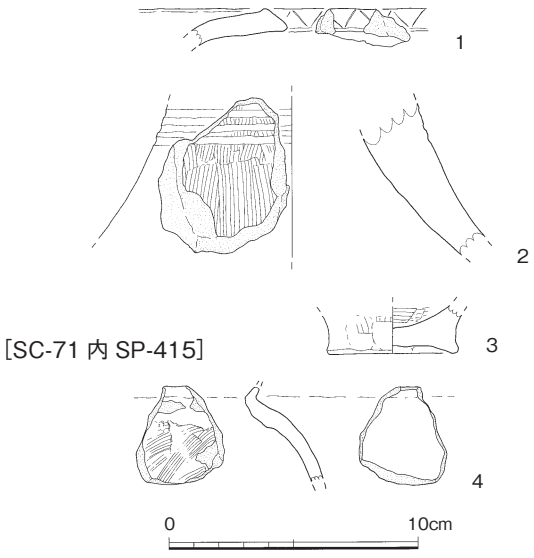


図 67　SC-71 掘り形埋土及び SP-415 出土土器実測図（縮尺 1/3）

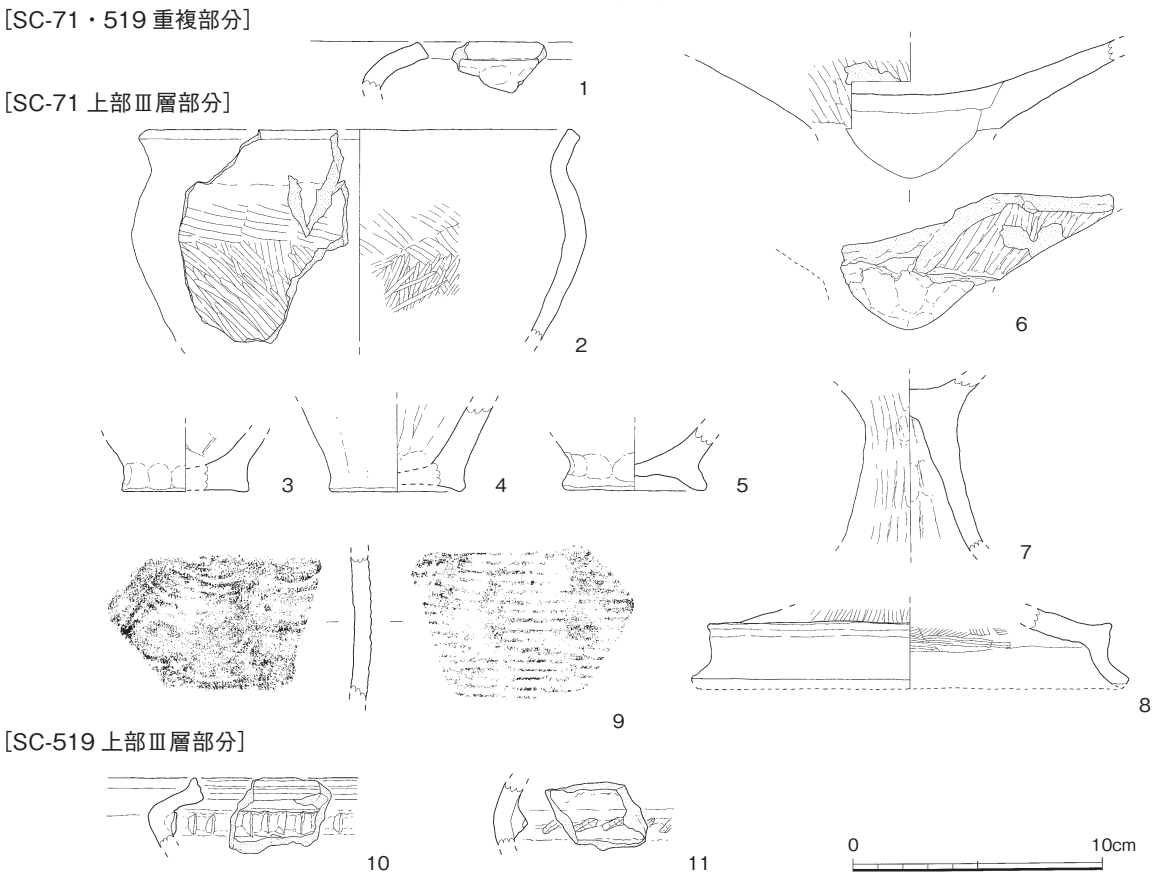


図 69　SC-71・519 上部Ⅲ層出土土器実測図（1：SC-71・519 境界部，2 ～ 9：SC-71 上部Ⅲ層部分，10・11：SC-519 上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

4)。1 ～ 3 は掘り形埋土から出土しているが，小片であり，SC-71 が埋め戻された際に混入した遺物と考えられる。4 は柱穴と考えた SP-415 から出土している。1（図版 67-2）はラッパ形にひらく壺の口縁部破片である。口縁部上端は横ナデ調整で小さく摘み出され，端面を面取りして篦状工具で連続山形文を施文する。2（図版 67-3）は脚台付鉢の脚台部か。沈線様の凹線文が 3 条めぐる。3 は高台状の甕の底部である。4 は壺の肩部の破片で，下半部は刷毛目調整，頸部周辺はナデ調整を施す。この他，SC-71 南壁沿い近くに当たる DZ-27-8 区のⅢ層部分から土製紡錘車が出土している（図 68-1，図版 148-2)。Ⅲ層でも下部から出土しており，本来は SC-71 の掘り形埋土に包含されていた可能性が高い。半欠品である。全面をナデ調整する。径 3.4cm，最大厚 7.5㎜。周縁は 2.5㎜ほどの幅で面取りされる。残存重量は 4.5 ｇを測る。

掘り形上部のⅢ層部分から出土した遺物には，調査時に SC-519 との切り合い関係を把握できなかったため混乱が生じている（図 69-1 ～ 9)。出土位置が確実な遺物としては，図 69-1 は SC-71 と SC-519 の境界部分，2 ～ 9 は SC-71，10・11 は SC-519 の上部Ⅲ層部分に包含された遺物である。1 は短く「く」字形に屈曲する無頸壺の口縁部である。外面には成形時の指頭圧痕が明瞭に残る。2（図版 67-6）は「く」字形口縁部をもつ鉢で，胴部外面には肩部まで縦方向，肩部以上には横方向の刷毛目調整を施した後に，肩部以下に粗いミガキ調整を施す。口縁部周辺には横ナデ調整を施す。内面には斜方向の刷毛目調整の後に，肩部以下はミガキ調整を施す。3 ～ 5 は甕の底部破片で，3 はやや厚めの平底，4 は上げ底，5 は裾部が「ハ」字形にひろがる。6（図版 67-8）は高坏で，脚部が剥離し，坏部底面に凸レンズ状の円盤充填部が残る。7 は緩やかに「ハ」字形にひらく高坏の脚部破片。8（図版 67-7）は高坏の脚裾部の破片で，ラッパ形にひらく脚部の端が反転してひらく。反転部の直下には横ナデ調整で浅い凹みが生じている。9 は須恵器の胴部破片で，外面には平行条線のタタキ目，内面には同心円文の当て具痕が残る。

以上の遺物は，SC-71 の埋没過程で混じり込んだものと考えられる。その中で，掘り形埋土出土の壺（図 67-1）はラッパ形にひろがる口縁部をもち，端面を拡張して文様を施す。こうした特徴は，弥生時代後期前葉からみられ始める。上部Ⅲ層出土遺物には須恵器（図 69-9）もあるが，他は後期前葉に比定することができる。須恵器を周辺の古墳時代後期の SD-512 から紛れ込んだ遺物と考え，SC-71 の廃絶時期を弥生時代後期前葉と捉えておく。

78号竪穴建物（SC-78，図70・71，図版18・67・68）

DX-26・27 区の 16 次調査 A・B 区の境界部に位置する竪穴建物である。A 区では SC-78，B 区では SC-53 の遺構番号を付したが，A 区側に占める部分が広いので，SC-78 として A 区で報告する。SB-74 の柱穴である SP-258，SB-549 の柱穴である B 区 SP-443，また SP-267･268･269･270 に切られる（図 70，図版 18-2)。

長軸長 4.24 m，短軸長 3.15 mほどの不整な小判形の掘り形をもつ。床面のほぼ中央で炭化物が集積する窪みが出土し，これを炉跡とする住居跡と考えた。掘り形の輪郭を確認できたⅣ層上面からの深さは 18 ～ 22cmで，床面はほぼ平坦である。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，炭化物片が点々と混じる。

床面で検出できた SP-296 で立柱痕跡が確認できた。当初，小判形の掘り形であるため，6 本柱構造を考えたが，床面南半部に該当する柱穴を確認できず，SP-296，B 区 SC-53P-6 と P21 から構成される 4 本柱構造を復元した。柱間は，SP-296- B 区 SC-53P21 間 が 1.8 m，SP-296-B 区 SC-53P-6 間が 1.2 mほどである。

柱穴の SP-296 は径 33cm，深さ 26cmの掘り形をもち，確認できた立柱痕跡の直径は 16 ～ 18cmである。埋土は暗褐色砂質シルトで，立柱痕跡には親指先大のにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じる。

掘り形埋土からは比較的多くの弥生土器が出土

している（図 71-1 ～ 9）。1・8 は掘り形東半部，2・4・7 は西半部の埋土中から出土し，5・6 は北西部の埋土下部で折り重なった状態で出土している。いずれも SC-78 の埋没過程で流れ込んだ遺物と考える。

図 71-1・2 は壺である。1 はラッパ形に外反する口縁部破片で，端部は横ナデ調整で上下に小さく拡張する。2（図版 68-1）は胴部破片で刷毛目工具の木口部の角を押捺して刺突列点文を施す。列点文より下方に縦方向の刷毛目調整を確認できる。器体の傾きは，小片のため不明である。3・4 は甕。3 は口縁部を逆 L 字形に強く屈折させ，口縁端部上端を横ナデ調整で上方に摘み上げる。4（図版 68-3）は断面三角形の突帯を貼り付けた胴部破片である。形状は山ノ口式系土器と類似するが，外面はにぶい黄橙色，内面は黒褐色を呈するため，模倣品と考える。器体の傾きは小片ため不明である。5（図版 67-9）・6 は同一個体と考えられる高坏である。坏部中位で一旦反転してひろがる。7 は高台状の底部破片である。外面は成形直後の粘土が軟らかい時点で工具を掻き上げるように調整する。内面には幅 1.2cmの擦過状の調整痕が残る。8 は壺の平底の底部で，外面には縦方向のミガキ調整，内面及び底面にはナデ調整が施される。9（図版 68-2）は深鉢型の鉢である。薄手のつくりで，外面には，口縁下部に横方向，胴部に縦方向の平行条線の幅 1mm，間隔 1.5 ～ 2.5mmのタタキ目が残る。内面はナデ調整で仕上げられる。外面には煤が付着する。7・9 については出土位置が掘り形の東西と離れているが，サイズ的に製塩土器の可能性を考えた。しかし，外面にタタキ目を残す製塩土器は弥生時代終末～古墳時代初頭にみられるもので，弥生時代後期前葉までは外面にはケズリ調整を施す。口縁部を丁寧に横ナデ調整する点も異なる。また，弥生時代後期の製塩土器が底部を円盤充填で成形することとも異なる。そのため，製塩土器と確定することはできなかった。

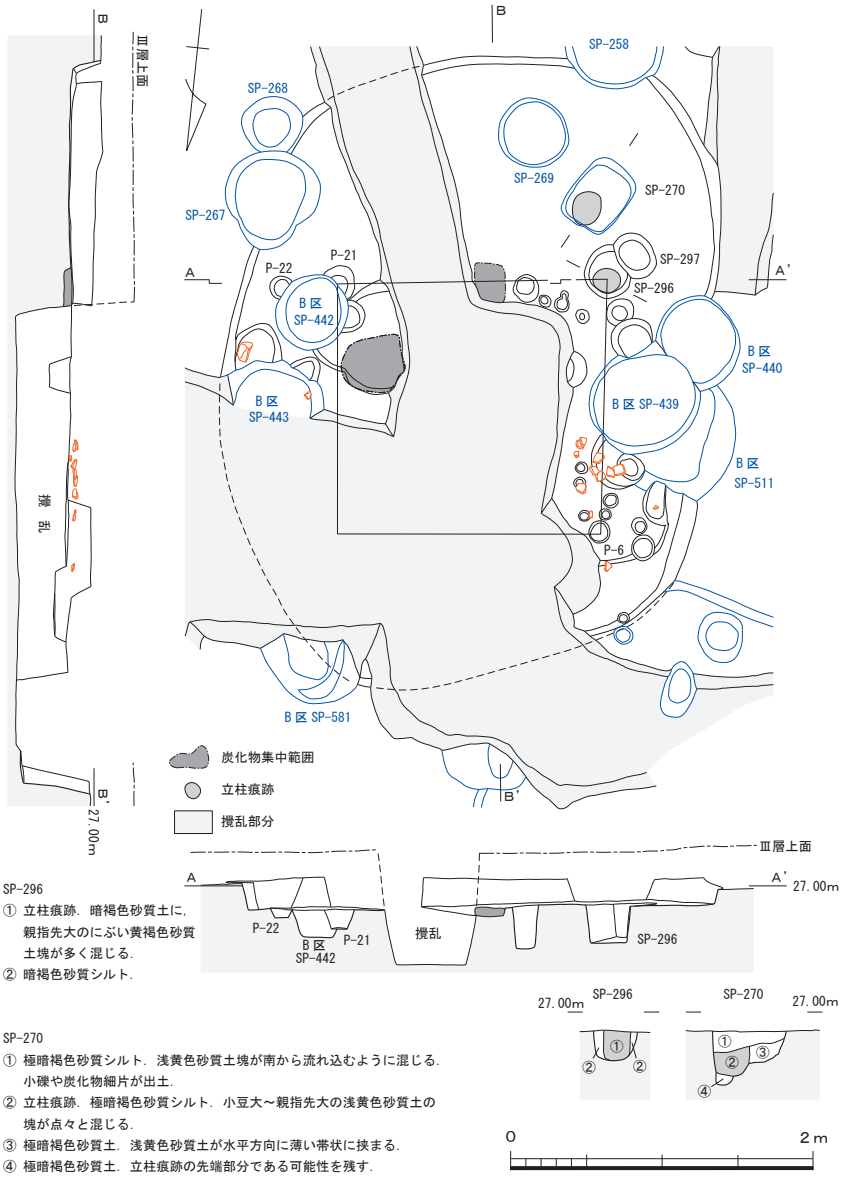


図 70　SC-78 遺構実測図（縮尺 1/50）

掘り形上部のⅢ層部分からも弥生土器が出土し，その中には，時期を比定できる甕が混じる（図 71-12・13）。12 は口縁部を「く」字形に外反させる。口縁部周辺内外面には，成形時の指頭圧痕が

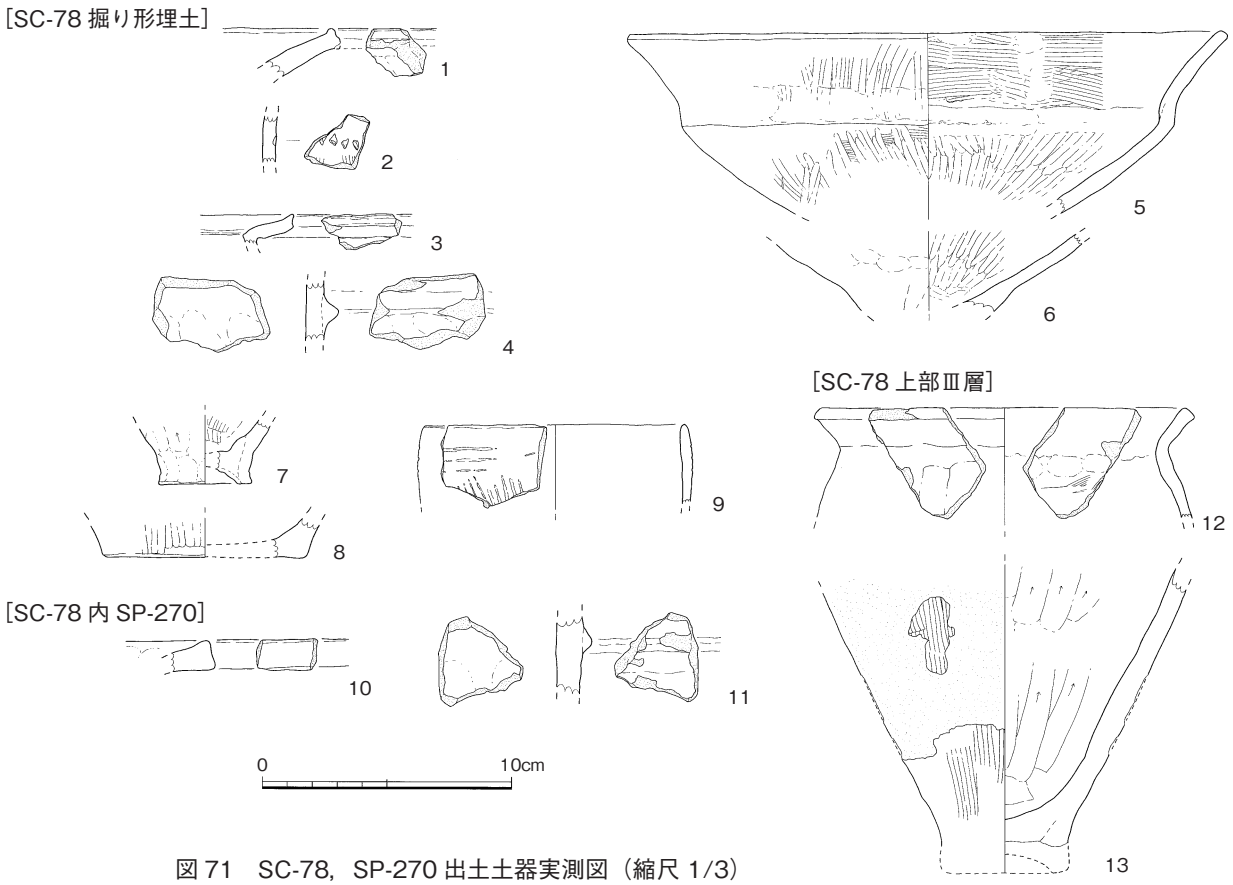


図 71　SC-78，SP-270 出土土器実測図（縮尺 1/3）

多く残る。胴部外面にはナデ調整，内面は口縁～屈曲部直下はナデ調整，胴部には刷毛目調整の後にナデ調整が施される。13 は外底部が粘土接合面で剥離している。外面には縦方向の刷毛目調整を施す。外面は二次的火熱を受けて赤変し，器表面が薄く剥離し，煤が付着する。

この他，図 71-10 は SC-78 を切る SP-270 の立柱痕跡，11 は掘り形埋土中から出土した遺物である。柱穴，小穴の項で報告する。

以上，遺物の出土状況から考えれば，埋土下部で折り重なって出土した高坏（図 71-5・6）が SC-78 の埋没時期を比定できる資料となる。5・6 は弥生時代後期前葉の特徴を持つことから，SC-78 は当該期に廃絶する住居跡と捉えることができる。

84号竪穴建物（SC-84，図72～76，図版19・20・68・69・138・147）

DX・DY-23・24 区に位置する。掘り形の中央を塹壕で破壊されている。Ⅳ層上面で掘り形の平面を検出でき，SD-72，SP-333 に切られ，SK-82・83・93 を切る（図 72，図版 19-1）。東西長 4.2 ～ 4.7 m，南北幅 4.05 mの隅丸方形の掘り形をもつ。北角周辺は周壁の上半が崩れている。検出面のⅣ層上面からの深さは 10 ～ 15cmを測る。床面で出土した SK-524 は，炭化物や焼土が集積することから SC-84 の炉跡と判断した。また，SP-434 では立柱痕跡を確認した。床面中央の北西寄りに位置するが，他に SC-84 に伴う柱穴は確認できなかったので，SP-434 だけで上屋を支えている構造を考える。さらに，SK-525・526 は互いに切り合うが，ともに周壁と平行して掘られており，埋土は SC-84 の掘り形を埋める土層と共通し，出土した土器破片が SC-84 の掘り形埋土から出土した破片と接合することから，SC-84 と同時に機能していた遺構と考えた。屋内貯蔵穴などの可能性を

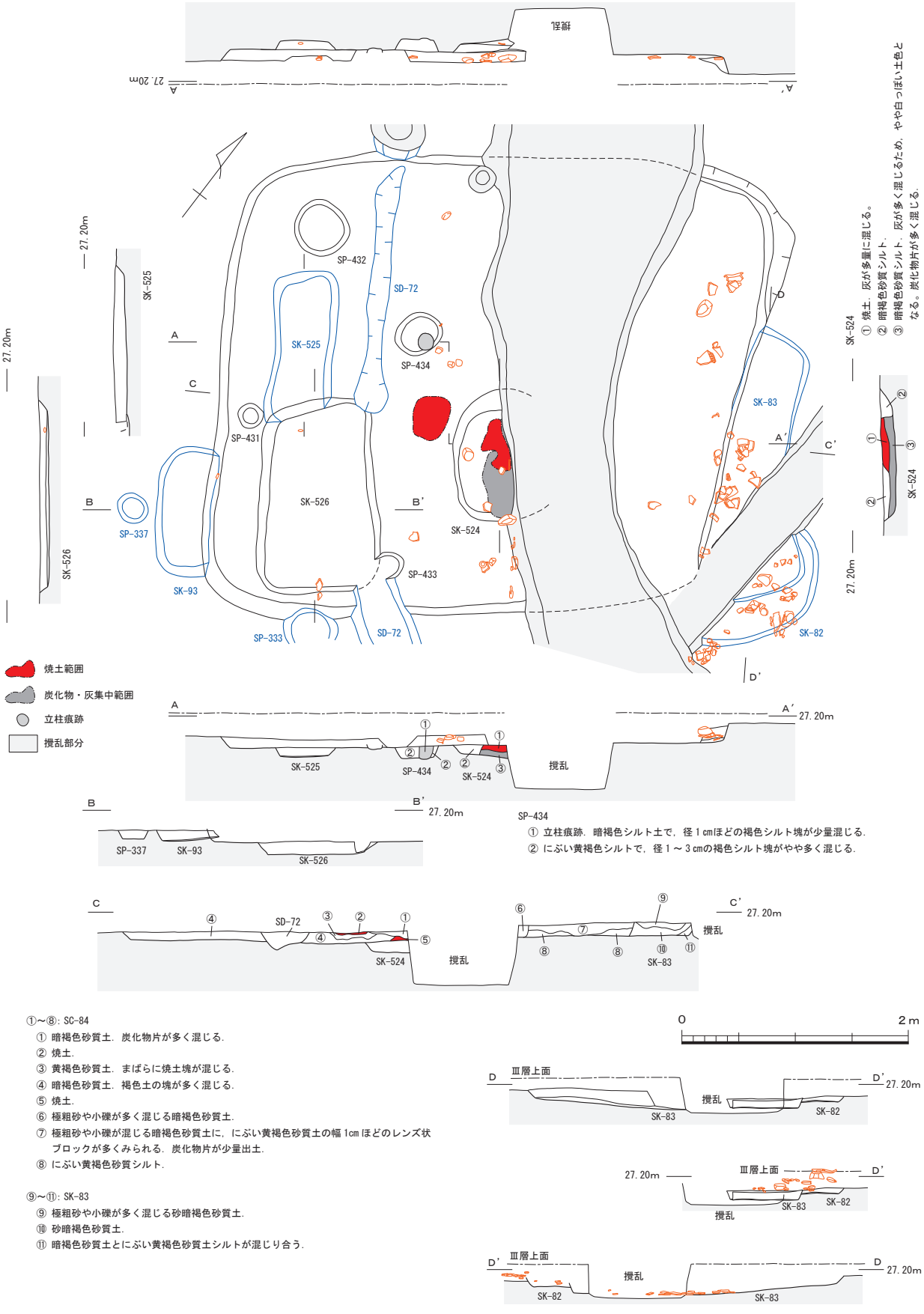


図 72　SC-84，SK-82・83・93 遺構実測図（縮尺 1/50）

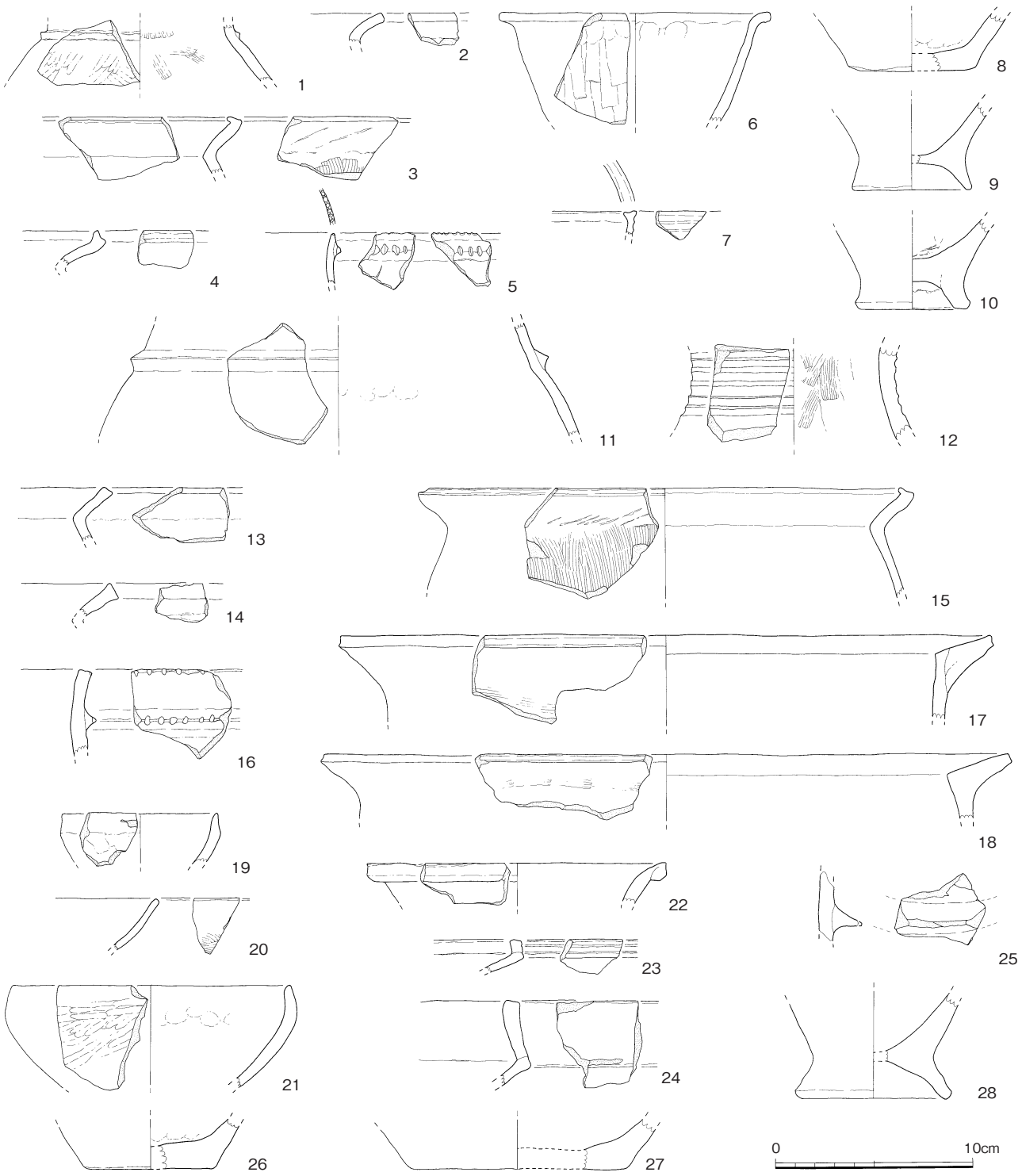


図 73　SC-84 出土土器実測図（1 ～ 10：掘り形埋土，11 ～ 28：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

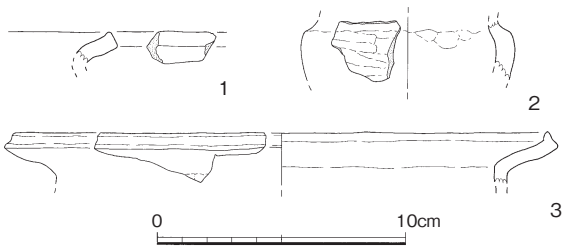


図 74　SC-84 内 SK-524・525 出土土器実測図
（1・2：SK-524，3：SK-525，縮尺 1/3）

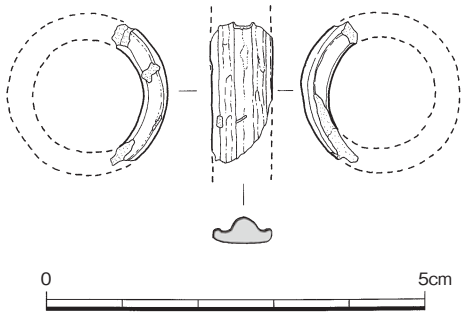


図 75　SC-84 出土石製指輪実測図（縮尺 1/1）

想定しておく（図版 19-2）。

SC-84 の掘り形埋土は，暗褐色砂質土～褐色シルト土を主体とし，検出面で焼土の薄いレンズ状のブロックを確認できた。炉跡の SK-524 は，東半部を塹壕で破壊されているが，長径 1.15m，推定 93cmほどの長円形の掘り形をもつ。床面からの深さは 9 ～ 12cmを測る。皿状の掘り込みである（図版 20-1）。床面から盛り上がるように灰が大量に混じる焼土がかたまってみられ，その南側には炭化物層を確認できた。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，下部には灰が多く混じり，やや白っぽい暗褐色の土色となっている（図版 20-2・3）。柱穴とした SP-434 は，長径 35cm，短径 41cm，床面からの深さ 11cmほどを測る長円形の掘り形をもつ。南東寄りで径 15cmほどの立柱痕跡を確認できた。埋土は，にぶい黄褐色シルトの中に，径 1 ～ 3cmの褐色シルト塊が多く混じる。

SK-525 は SK-526 に切られる隅丸長方形の土壙である。残存長 1.25m，幅 50cm，深さ 11cmを測る。埋土は暗褐色砂質シルトであるが，浅黄色砂質土が混じるため，やや明るい土色を呈する。にぶい黄褐色砂質シルトの小塊がみられる。SK-526 は長さ 1.7m，幅 1.0m，深さ 8cmほどの隅丸長方形の土壙である。埋土は暗褐色砂質シルトで，大小の浅黄色砂質土塊が多く混じる。ごく少量の炭化物片やモモと考えられる炭化種実が出土した。他に，SP-431・432 は床面で出土したが，SC-84 に伴う遺構かは不明である。調査所見は巻末の遺構観察表を参照されたい（表 3）。

掘り形埋土中の遺物は，床面近くから埋土上部にかけて散在した状態で出土している（図 72，図 73-1 ～ 10）。その中で，3・4 は，北側角の床面から 5cmほど浮いた状態で折り重なって出土した。6・10 は掘り形南半部の SK-524 上部の埋土中から出土している。出土状況から考えれば，これらの遺物は SC-84 の埋没過程で混じり込んだものと判断できる。

図 73-1（図版 69-5）は壺の肩部破片で，頸部の付け根に細い粘土紐を貼り付け，指先で摘むように細い断面三角形の突帯に仕上げる。2 ～ 4 は「く」字形口縁をもつ甕。2 は小型品。3（図版 68-8）・4（図版 68-6）は，松山平野の弥生時代中期後葉～後期初頭の口縁端部を上方に摘み上げる甕と異なり，端部を内側に小さく折り曲げる。東北部九州の弥生時代後期初頭～前葉の跳ね上げ口縁の甕と考える。外面には煤が付着する。5（図版 69-7）は刻目凸帯文土器の深鉢である。口縁部破片で同一個体と考えられる小片が 2 点出土している。口縁端部に連続する小さな刻目を施し，端部から若干下がった位置に細い断面三角形突帯を貼り付けて小さな刻目を施す。刻目の間隔は密である。にぶい橙色の焼き上がりで，細く小さな刻目凸帯であることから，弥生時代初頭に比定できる。混入品と考えられる。6（図版 68-10）は小型鉢で，口縁部を指頭で折り曲げる。胴部外面には煤が付着する。7（図版 68-5）は埦型の高坏の坏部破片で，口縁部直下に 3 条の波板状の凹線文，口縁端面を内側に拡張して 1 条の凹線文を施す。器表面には明赤褐色の肌理の細かな粘土を化粧掛けする。8 は壺または鉢の平底であるが，裾部の角が取れ，不安定な底となっている。9・10 は脚台状の甕の底部破片で，裾部が「ハ」字形にひろがる。

掘り形の埋土中から，磨石・敲石・砥石が出土している（図 76-1・2・4）。1 は礫岩の亜円礫を利用した磨石で，扁平な礫の端部に擦痕と敲打痕が残る。重量 282g を測る。2 は砂岩の亜円礫を

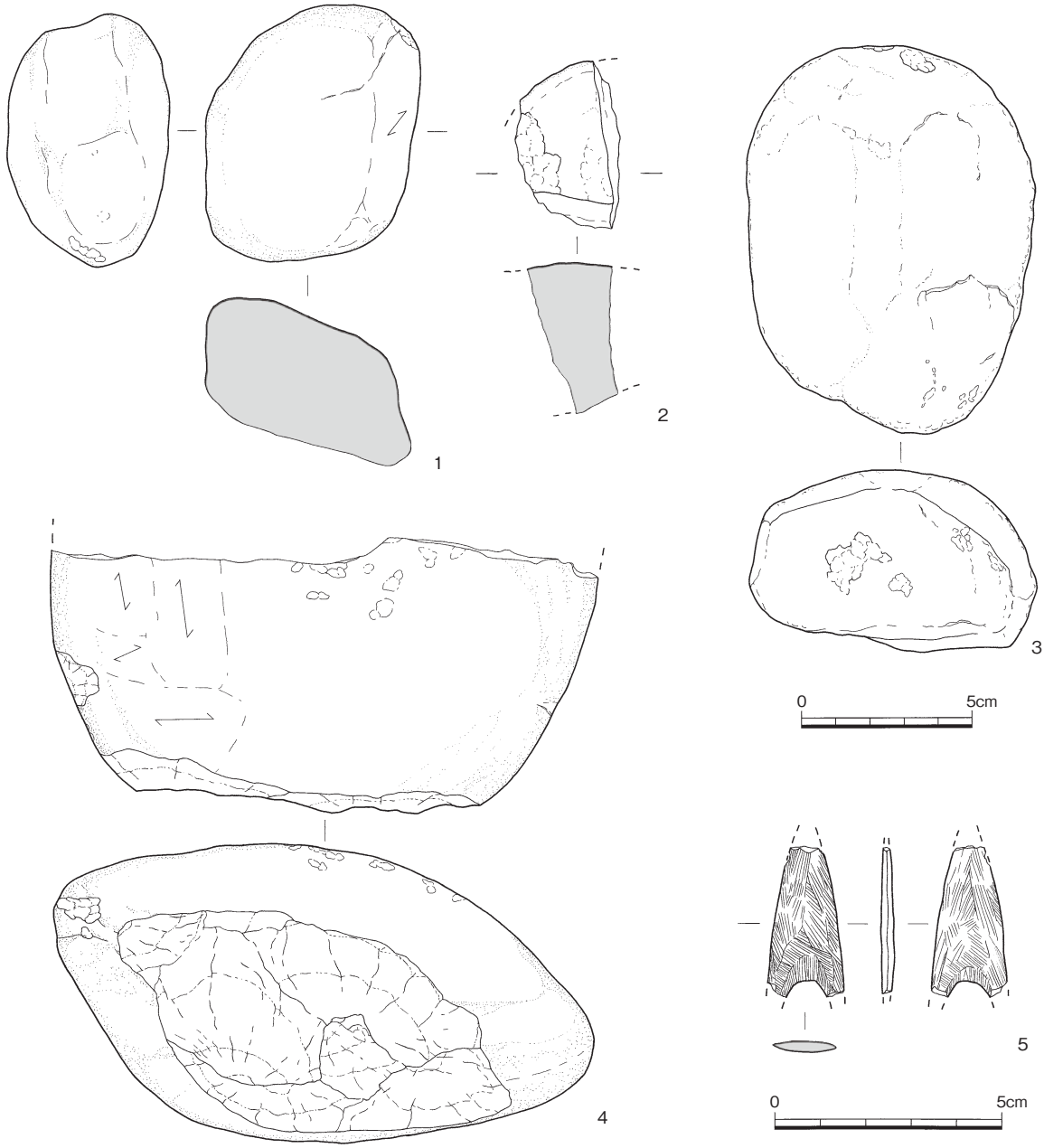


図 76　SC-84 出土石器実測図
（1・2・4：掘り形埋土，3：SC-84 内 SK-524，5：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/2，2/3）

利用した敲石で，重量 64.9g。4 は砂岩を利用した砥石である。丸みをおびた側面部に幅約 2cm 単位の幅で擦痕を観察できる。また，礫の中央部には敲打痕が残り，側部には打ち欠き痕がある。重量は 1405g を測る。

さらに，特筆すべき遺物として滑石製指輪がある（図 75-1，図版 147-4）。SP-434 東側の肩部で床面から若干浮いた状態で出土した。外径 20 ～ 21㎜，内径 14 ～ 15㎜の環状を呈するものと推定できる。やや小型品であるが，指輪と考える。中央部が隆起し，その両側は擦り切って溝をつける。縁部はわずかに隆起する。幅 7㎜，中央部厚 3 ～ 4㎜，縁部厚さ 1.5㎜を測る。内側はわずかに膨らむ。

SC-84 の炉跡である SK-524 からは，弥生土器（図 74-1・2）と敲石（図 76-3）が出土している。

図 74-1 は口縁部を短く「く」字形に外反させる甕である。口縁上面に横ナデ調整を施すため，端面がわずかに窪む。2（図版 69-8）は手捏ねのミニチュア壺の胴部破片である。3（図版 69-9）は，SK-525 中央部から北寄りの埋土中から出土した破片と SC-84 の掘り形埋土から出土した破片が接合する。甕の口縁部破片で，「く」字形に強く屈折する口縁部で，細い粘土紐を貼り付けて，口縁端部を上方に跳ね上げる。形状的な特徴は図 73-3・4 と共通する。図 76-3 は，花崗岩の亜円礫を用いた敲石である。上下端部に敲打痕がわずかに確認できる。重量 616.4g を測る。

掘り形上部のⅢ層部分からも比較的多くの遺物が出土している（図 73-11 ～ 28）。その中で，12 ～ 15・17・18・22・24 ～ 27 はⅢ層でも下部～最下部から出土している。掘り形埋土中の遺物と同じく，SC-84 の埋没過程で混入した遺物と考える。11・12 は壺。11 は撫で肩の胴部に，「ハ」字形に緩やかに窄まる頸部がつく。頸部の付け根に断面三角形突帯を貼り付ける。器体の傾きはやや不確実である。12（図版 68-9）は頸部破片で，外面に 6 条の凹線文状の幅広の沈線を 1 条ずつめぐらす。13 ～ 18 は甕である。13 は，「く」字形に口縁部を屈折させ，口縁部先端を強く横ナデ調整し，端部を面取りする。鉢の可能性も残す。14 は，「く」字形口縁の端部を若干肥厚させるため楔形の断面形となっている。15（図版 68-7）は，出土地点は異なるが，SC-84 北側角の床面から 5㎝ほど浮いた状態で出土した図 73-3 と同一個体である可能性が高い。同じく接合しないが，SC-84 北西角に当たるⅢ層上部からも，同一個体と考えられる破片が出土している。16（図版 68-11）は下城式系土器の甕で，直立する口縁部をもち，口縁端部からやや下がった位置に断面三角形突帯を貼り付ける。口縁端部と突帯に器体正面から細い棒状の工具を押捺して刻目を施す。17・18 は山ノ口式系土器の甕で，ほぼ直立する胴部上端に粘土を貼り付けて細長い台形の口縁部に成形する。17（図版 69-2）の胎土には金雲母が混じる。胴部外面は器表面が薄く剥がれているが，部分的に刷毛目様の条線を観察できる。18（図版 69-1）の胎土にも金雲母が混じる。19 は埦型の鉢で，口縁部がわずかにすぼまる。均質の粘土に細粒砂が混じる精製品である。外面には部分的に明赤褐色の肌理の細かな粘土を化粧掛けした痕跡が残る。20 は浅い皿型の鉢である。口縁端面は小さく面取りされる。薄手のつくりで，肌理の細かな粘土に中砂～極粗砂を混ぜた胎土をもつ。21 も埦型の鉢。22（図版 69-6）は，断面楕円形の粘土紐を巻き込むようにして貼り付けて口縁部を成形する。精製された肌理の細かな粘土に，ほぼ均質の細砂～中砂が混じる胎土をもつ。他に，こうした胎土をもつものもあるが，器種は特異である。23・24 は口縁部が反転してほぼ直立する高坏である。23（図版 69-4）は，口縁上端部の断面方形の粘土を貼り付け，端面には凹線文状に沈線を 2 条めぐらす。25（図版 69-3）細長い断面三角形突帯を貼り付ける。両端がわずかに反り上がり，上向きの U 字形に貼り付けられたものと考えられる。胎土には，角のある極粗砂～粗砂が多く混じる。SC-43 上部Ⅲ層部分からも，同様な破片（図 57-5）が出土している。把手付片口鉢の可能性が高い。26 は平底の壺の底部破片。27 は底径から鉢と考えた。28 は裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の甕の底部破片で，二次的な火熱を受けて明赤褐色に赤変する。

以上の遺物に加えて，弥生土器の口縁端部を上方に拡張して凹線文をめぐらす甕の口縁部破片，壺や甕の胴部破片がある。その中に混じり，古墳時代後期の須恵器の破片 1 点が出土している。SC-84 の北西角近くに当たるⅢ層部分からは，磨製石鏃が出土している（図 76-5，図版 138-3）。珪質泥岩と考えられる石材を用いた凹基式磨製石鏃である。刃部･基部ともに丁寧に研磨されている。先端部は欠損する。残存重量 1.7g を測る。

上部Ⅲ層部分から出土した 1 点の須恵器を除けば，掘り形埋土や上部Ⅲ層の遺物は，いずれも弥生時代中期後葉及び後期初頭に比定できる。また，SK-524 の土器も弥生時代後期初頭に比定できる。須恵器は上部Ⅲ層内に収まる後出の遺構に伴うものと考え，SC-84 は弥生時代後期初頭に廃絶して埋没する住居跡と捉えておく。

92号竪穴建物（SC-92，図77・78，図版21・24・70）

調査区南西隅のDY・DZ-20・21区に位置する。SK-503に切られ，西半部を塹壕で破壊されている。立柱痕跡を確認できたSP-358を中央の柱とする南北長3.2 m，東西幅2.3 mほどの竪穴建物を復元できる（図77，図版21-1）。検出面であるⅣ層上面からの深さは3cmほどと浅い。掘り形埋土は淘汰の悪い砂礫が多く混じる暗褐色砂質シルトで，径3～4cmの浅黄色砂質土塊が非常に多く混じり，人為的に埋め戻されていると判断できる。

掘り形のほぼ中央に位置する柱穴SP-358は，径25～28cm，床面からの深さ8cmほどを測る不整円形の掘り形をもつ。掘り形の南半部で径12cm前後の立柱痕跡を確認できた。埋土は暗褐色砂質土で，親指先大の浅黄色土塊が多く混じる。SP-358の北東側では，長径70cm，短径30cmの細長い隅丸方形の掘り込みを確認できた。床面からの深さ2cmほどの舟底状の掘り込みで，SK-502とし，SC-92に伴う遺構と考えた。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色土が薄い縞状に混じる。この他，床面ではSP-357・428が出土した。SP-428は柱穴・小穴の項で報告するが，SP-357についての調査所見は巻末の遺構観察表を参照されたい（表3）。

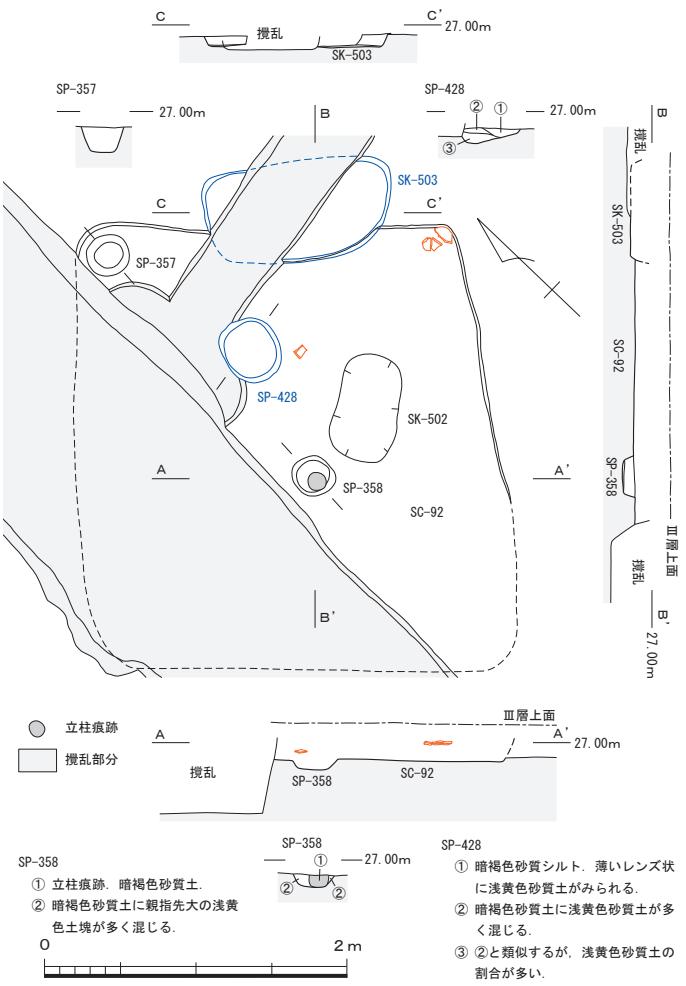


図77　SC-92，SK-503，SP-428遺構実測図（縮尺1/50）

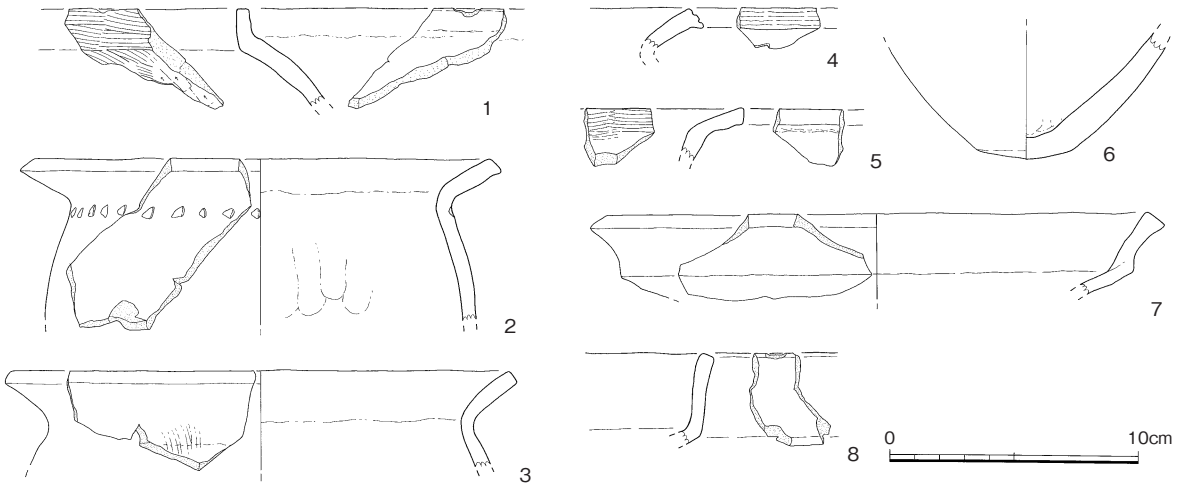


図78　SC-92上部Ⅲ層出土土器実測図（縮尺1/3）

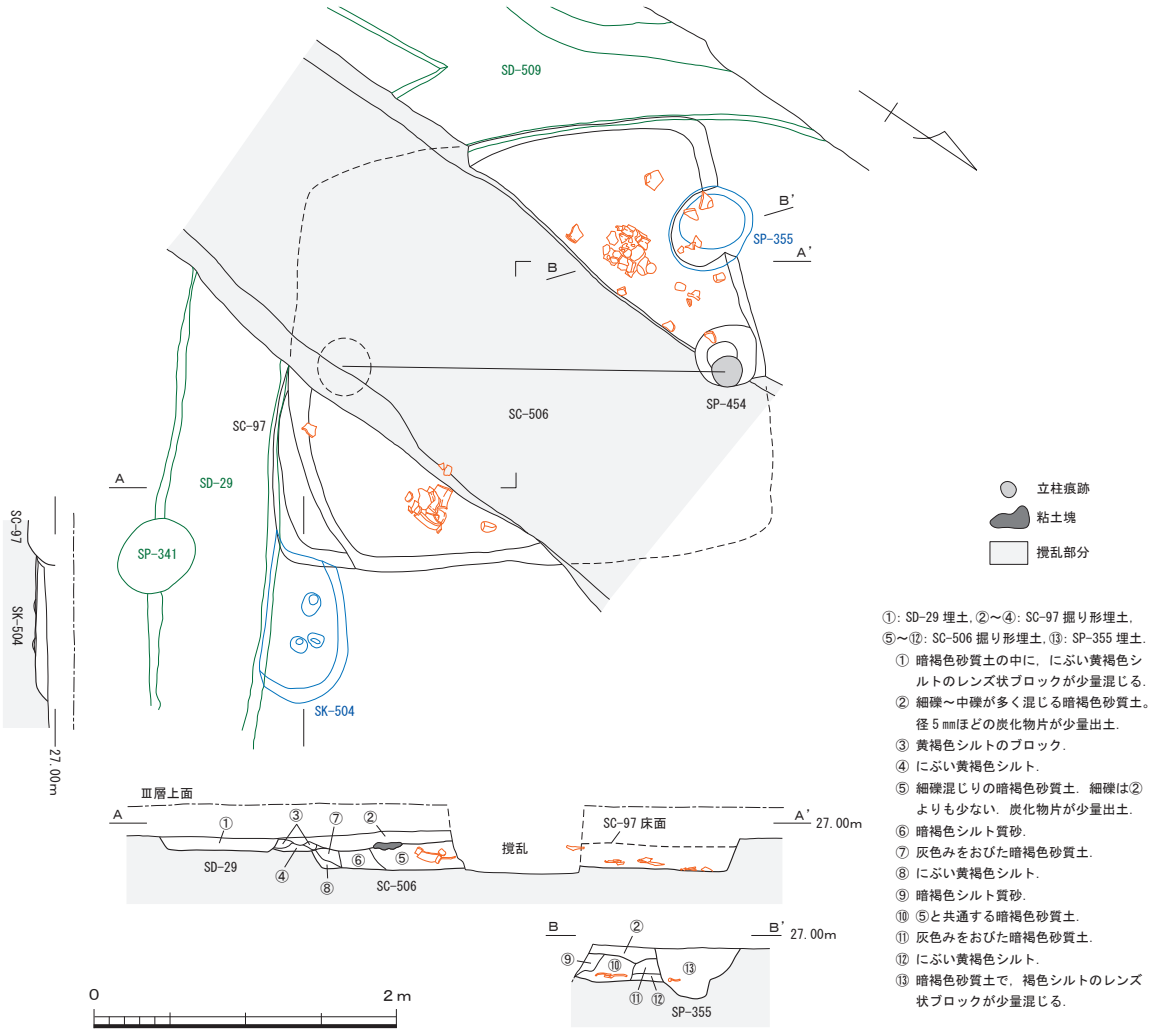


図 79　SC-97・506，SK-504，SP-355 遺構実測図（縮尺 1/50）

SC-92 は検出面から 3cmほどしか掘り形を検出できず，埋土部分から遺物は出土していない。一方で，掘り形上部のⅢ層部分からは比較的多くの遺物が出土している（図 78-1 ～ 8, 図版 70-1 ～ 5）。その中で, 図 78-1 はⅢ層でも最下面, 図 78-3 ～ 5・7・8，図版 70-4・5 は下部から出土している。以上を含む出土遺物はいずれも小片ばかりである。

図 78-1 は肩が張った胴部から短く口縁部が立ち上がる無頸壺である。2 ～ 4 は「く」字形に外反する甕の口縁部破片である。2（図版 70-2）の口縁屈曲部に小さな三角形の刺突列点文が施文される。3 の外面には部分的に薄く煤が付着する。4（図版 70-1）は口縁端部を横ナデ調整で下方に摘み出し，端面に沈線様の凹線文を 2 条めぐらす。5 は口縁部の外反が緩やかな鉢の口縁部破片である。6 は小さな凸レンズ状の甕の底部である。7・8 は高坏の坏部破片。7（図版 70-3）は，坏部中位で反転して広がり，やや肥厚し端部を面取りする口縁部につながる。口縁端面に細く浅い擬凹線文を 2 条めぐらしているようにみえるが，器表面が荒れ判然としない。8 は，坏部中位で緩やかに反転して立ち上がり，口縁部につながる。図版 70-4・5 は甕の胴部破片。4 の外面には刷毛目調整，内面にはケズリ調整の後にミガキ調整が施される。5 の胴部外面にハケズリ調整，内面にはナデ調整が施されている。他に，口縁端面に 2 条の擬凹線文を施した甕の口縁部小片が 1 点，弥生土器の甕・鉢・壺の胴部破片が多数ある。

以上の遺物の中で，Ⅲ層上半部から出土した凸レンズ状底の甕（図 78-6）を除いて，SC-92 の埋

没過程で混入したと考えられるⅢ層最下面～下部の遺物は，弥生時代後期初頭～前葉の時間幅に収まる。また，SC-92 は後期中葉と考えられるSK-503 に切られている。したがって，SC-92 の廃絶時期は弥生時代後期前葉と捉えることができる。

97号竪穴建物（SC-97，図79・80，図版21・70・71）

調査区南西部の DZ-21・22 区に位置する。Ⅳ層上面まで掘り下げた時点で，隅丸方形の掘り形の輪郭を検出できた。土層観察用畦を設定して掘り形埋土の精査に入ったが，その途中で，もう 1 棟の竪穴建物が入れ子状態で掘り込まれていることを確認できた。そこで，上層の遺構を SC-97，下層の遺構を SC-506 とした（図 79，図版 21）。遺構の調査を終了した後に，遺物の所属遺構を整理し，混乱を解消した。SC-97 は，SD-29 と SP-355 に切られ，SC-506 と SK-504 を切る。

SC-97 の平面は下層の SC-506 と重なっており，掘り形の平面形は土層観察用畦の断面から推測することしかできない。平面形は長さ 3.65 m，幅 2.8 mの隅丸の矩形で，Ⅳ層上面からの深さは 8cm前後である。土層観察用畦の断面では，床面にレンズ状に粘土塊が残されていることを確認できた。掘り形には，南壁沿いに黄褐色シルトのブロックの③層やにぶい黄褐色シルトの④層が流れ込むが，ほとんどは細礫～中礫が多く混じる暗褐色砂質土の②層で埋積されている。

北壁沿いのほぼ中央で SP-454 が出土し，立柱痕跡を確認できた。下層遺構の SC-506 の床面で検出できた柱穴で，SC-97 もしくは SC-506 に伴うと考えられるが，確定できなかった。SC-506 の項で報告する。

SC-97 の掘り形埋土から出土した遺物は少ない（図 80-1 ～ 4，図版 70-9・10）。その中で，図 79-3 と図版 70-10 は住居北西隅付近の床面近くから出土している。SC-97 の廃絶直後に流れ込んだ遺物である。

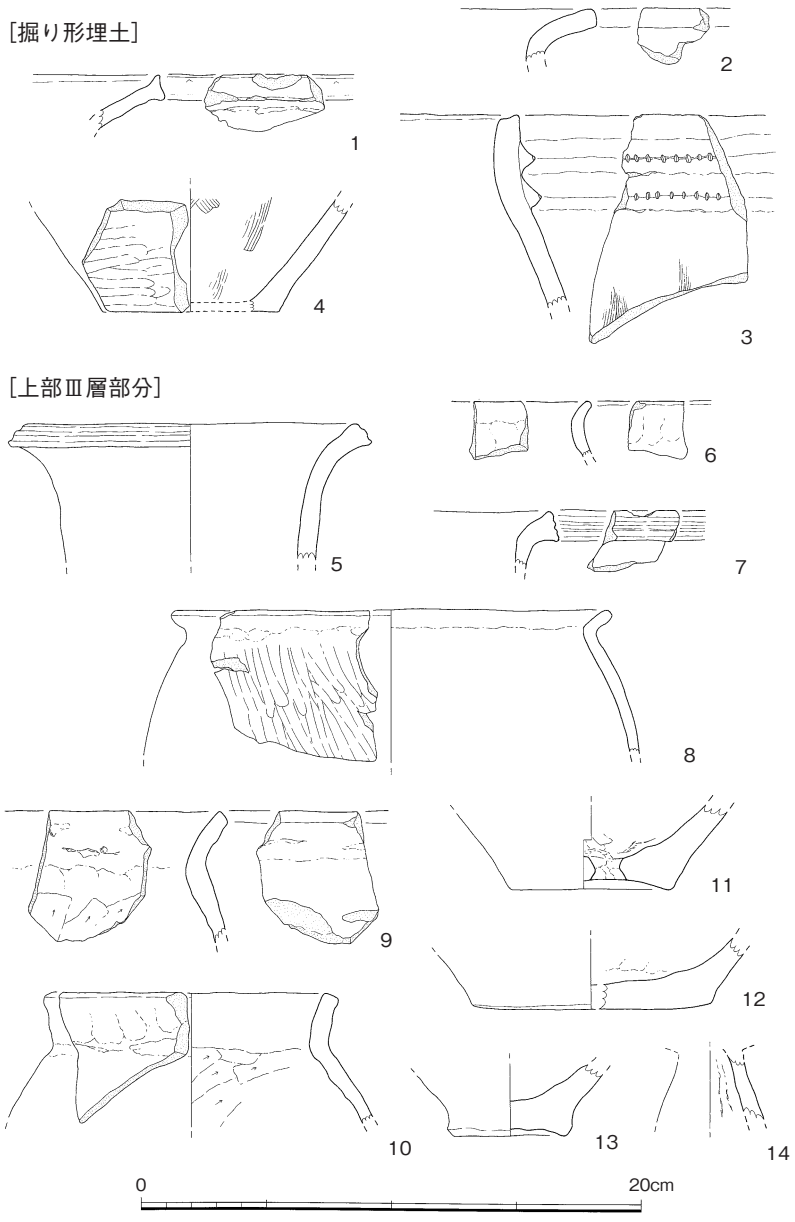


図 80　SC-97 出土土器実測図（縮尺 1/3）

図 80-1（図版 70-6）は壺の口縁破片で，端面を強く横ナデ調整して面取りするとともに，上下に若干拡張させる。2 は緩やかに「く」字形に外反する甕の口縁部の破片。3（図版 70-8）は口縁部が若干窄まる大型甕と考えた。口縁端部から若干下がった位置に断面三角形の突帯を貼り付け，先端に小さな刻目を施す。胴部外面はナデ調整で，部分的に細密条線の調整痕が残る。突帯以下には煤が付着する。4 は平底の鉢の底部破片である。外面には横方向のミガキ調整を施す。図版 70-9・10 は甕の胴部破片である。9 の外面にはミガキ調整，内面にはナデ調整を施す。10 の外面には刷毛目調整を行い，口縁屈曲部近くには横ナデ調整を施す。内面には指頭によるナデ調整を施す。

掘り形上部のⅢ層部分からは比較的多くの遺物が出土している。ここでは，Ⅲ層下部から出土した遺物を選び報告する（図 80-5 ～ 14）。5・6 は壺の口頸部の破片である。5 は円筒形の頸部から緩やかに外反する口縁部へつづく。口縁端面を若干拡張して，波板状の凹線文を 2 条めぐらす。6 は口縁部を指頭で短く緩やかに外反させる。類例には SC-33 床面直上から出土した壺（図 40-10）などがある。7（図版 70-7）は口縁部を緩やかに短く屈曲させる小型甕である。口縁部を短く外反させ，細い楔形の断面に成形する。端面には浅い擬凹線文を 3 条めぐらす。8（図版 71-1）は，短く屈曲する「く」字形口縁をもつ。9 は口縁部を指頭で緩やかに外反させる甕であるが，折り曲げがかなり乱雑で器体が大きく歪む。そのため，器体の傾きは不確実である。また，粘土の撚れが口縁部の内外面に多く残る。10 はほぼ直立する短い口縁部をもつ無頸壺である。口縁部の外面には指頭によるナデ痕跡が残る。11・12 は壺もしくは鉢である。11 は上げ底の底部で，焼成前に内側から外側に向けて穿孔を施す。穿孔の位置は底面中央よりも少しずれている。12 は凸レンズ状の不安定な底部である。13 は甕の高台状の厚めの底部破片である。底側面は小さく面取りされる。内外面ともに二次的火熱を受けて器表面は荒れが著しく，調整は不明である。14 は古墳時代後期の土師器の高坏である。「ハ」字形にひらく脚部で，外面は丁寧なナデ仕上げ，内面には絞り痕が残る。

SC-97 は，後述する弥生時代中期後葉の SC-506 を切り，後期初頭の SD-29 に切られる。廃絶直後に流れ込んだ土器（図 79-3，図版 70-10）は後期初頭の特徴をもつ。したがって，SC-97 は弥生時代後期初頭に比定できる。

98号竪穴建物（SC-98，図81～83，図版24・71）

DY・DZ-20・21 区に位置する。Ⅳ層上面で掘り形の平面形を検出できたが，中央部を塹壕で大きく破壊されているとともに，南半部は掘り込みが浅い。掘り形は北半部しか検出できなかった（図版 24-1）。SP-344･359･360 を柱穴として四隅に配置する隅丸方形の竪穴建物と考えられる（図 91）。南北長 3.6 m，東西幅 2.8 mの規模を推定できる。SC-99，SD-36 に切られる。掘り形埋土は，細礫～中礫混じりの暗褐色砂質土で，にぶい黄褐色シルトのレンズ状ブロックが多くみられる。にぶい黄褐色シルト塊が多く混じる場所と，点々と少量しか混じらない場所が混在し，人為的に埋め戻されていると判断できる。

柱穴と考えた SP-344 は，長径 31㎝，短径 28㎝の長円形の掘り形をもち，西半部は深さ 10㎝，東半部はさらに 6㎝ほど深くなる。埋土は極暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質シルト塊が点々と混じる。SP-359 は，大半を SD-36 で破壊されている。推定径 30㎝，深さ 14㎝ほどの掘り形をもつ。SP-360 は，径 25 ～ 26㎝の円形の掘り形をもち，径 13㎝の立柱痕跡を確認できた。深さは 14㎝を測る。埋土は暗褐色砂質シルトである。SP-359･360 間は 2.5 m，SP-344･359 間は 2.15 mを測る。

他に，床面では SK-362 が出土した。柱穴 SP-344・359 を繋ぐ線上に位置し，長軸方向が SC-98 の掘り形と同じ方向にとる不整楕円形の土壙である。以上の配置関係から SC-98 に伴う施設と考えた。西端を塹壕で破壊されるが，長軸長 95㎝，推定短軸長 42㎝前後，深さ 8 ～ 15㎝を測り，

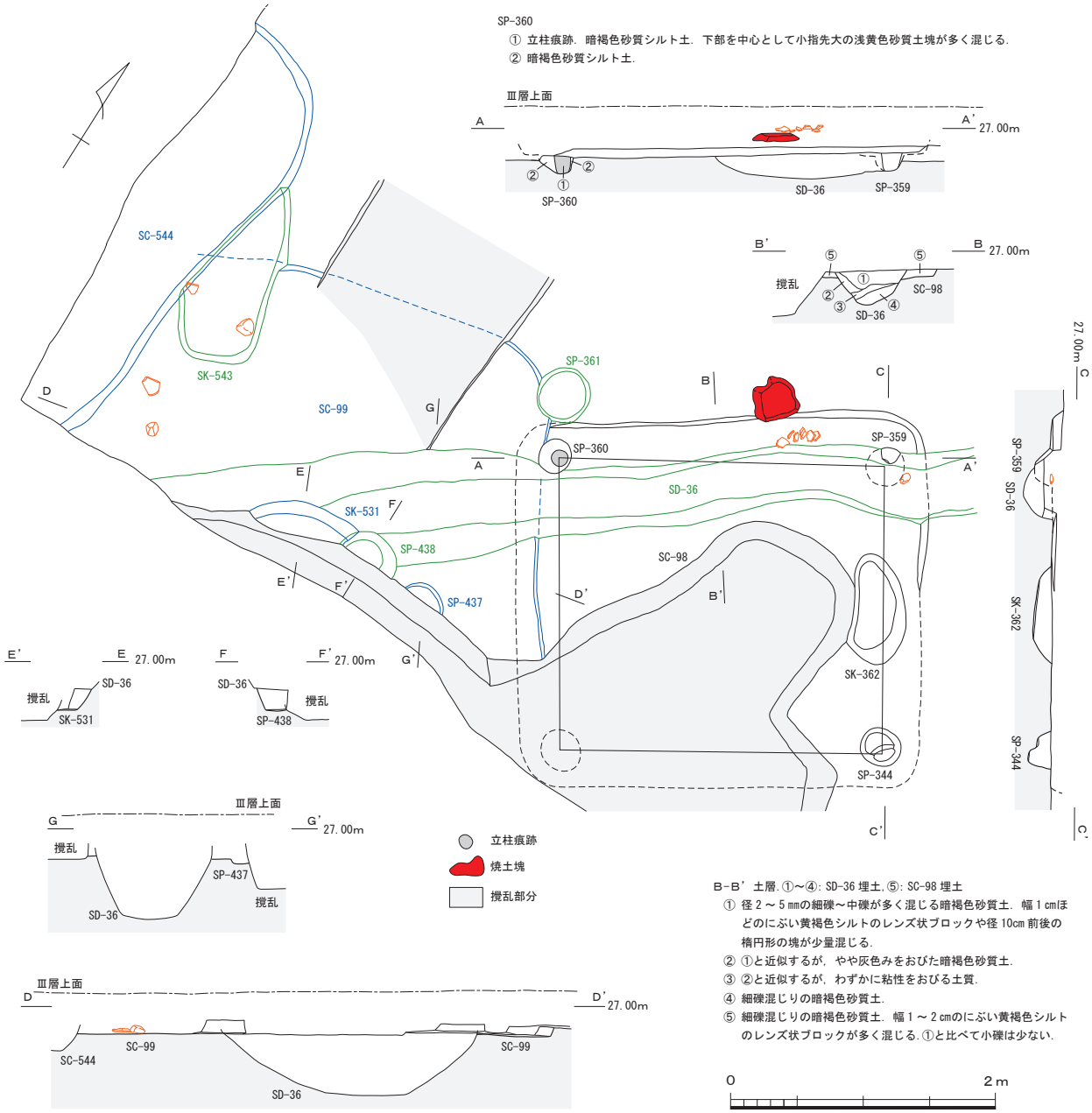


図 81　SC-98・99，SK-531，SP-438 遺構実測図（縮尺 1/50）

底面は南半部が深く窪む。埋土は暗褐色砂質土で，径 1cmほどの褐色シルト塊が多く混じる。

SC-98 の掘り形埋土から出土した遺物はなく，上部Ⅲ層部分も 10 数点にすぎない（図 82・83）。図 82-1 は SC-98 の柱穴 SP-344 から出土した甕の底部破片である。推定径と厚い器壁から，小さな平底となるものと考える。外面は二次的な火熱を受けて器表面が剥離する。2（図版 71-4）は SC-98 北壁沿いに当たるⅢ層部分から出土した壺の肩部の破片で，「ハ」字形に窄まる頸部がつくと考えられる。頸部の付け根に不揃いで乱雑な刺突列点文をめぐらす。図 83-1 は砂岩を用いた砥石の破片で，上面と側面に擦痕を確認できる。残存重量 450.9g を測る。

SP-359・360，床面で確認できた SK-362 から出土した遺物はない。また，北壁沿いの掘り形に接して，径 32 × 35cm，厚さ 4cmほどの粘土塊が出土している。Ⅲ層中部から出土しているので，SC-98 に伴うものかは不明である。

SC-98 は弥生時代後期初頭の SD-36 に切られる。一方，出土遺物には，Ⅲ層出土ではあるが，後期初頭に比定できる壺（図 82-2）が含まれている。したがって，SC-98 の廃絶時期は弥生時代後期初頭と捉えておく。

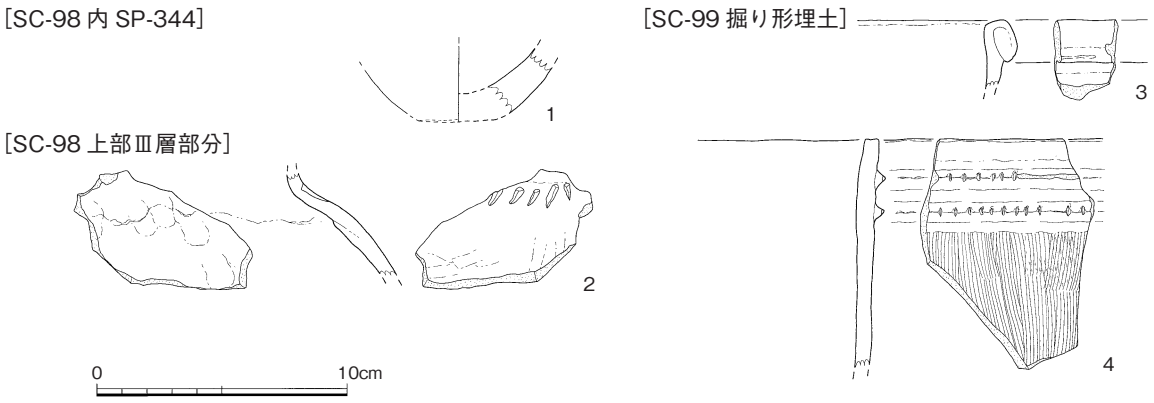


図 82　SC-98・99 出土土器実測図
（1：SC-98 内 SP-344，2：SC-98 上部Ⅲ層部分，3・4：SC-99 掘り形埋土，縮尺 1/3）

99号竪穴建物（SC-99，図81～83，図版24・71）

DZ-20 区に位置する。攪乱溝に大きく破壊されるとともに，SD-36 南西部分，SK-543，SP-361・438 に切られ，SC-98 を切る。東側と北側の壁を確認したにとどまるが，一辺 3.5 ～ 4 mほどの隅丸方形の掘り形になると推定される（図 81）。掘り形埋土はにぶい黄褐色砂質シルトの小塊が混じる暗褐色砂質シルトである。にぶい黄褐色砂質シルト塊はⅣ層に由来するもので，建物廃絶後に人為的に埋め戻されているものと判断する。

床面では SP-437 が出土した。南半部を塹壕で破壊されるが，推定径 37㎝，深さ 2 ～ 3㎝ほどの浅皿状の小穴で，埋土は暗褐色砂質シルトに多くの浅黄色砂質土が混じる。長軸線上に SP-437 を配置する竪穴建物の可能性も考えられるが，東側の床面に柱穴は見られず，確定できなかった。また，床面のほぼ中央に SK-531 があるが，SC-99 に伴うかは不明である。

西半部の床面近くから，花崗岩の石塊や大型壺の胴部破片が出土している。他に，掘り形埋土中からは，玉縁状の口縁部をもつ鉢の破片（図 82-3），下城式系土器の甕（図 82-4），外面にミガキ調整を施す甕の胴部破片（図版 71-6・7）など，数点が出土している。出土土器は小片ばかりで，SC-99 の埋没過程で混入したものと考える。

図 82-3（図版 71-3）は，粘土を巻き付けるようにして玉縁状の口縁部をつくる。口縁下部には横ナデ調整で生じた細密条線が残る。口縁部内側に不明瞭ながら面をもつ。同様の断面楕円形の玉縁状の口縁部をもつ土器は，他に SC-33（図 44-7）や SC-544（図 97-10）があるが，胎土は他の弥生土器と共通する。図 82-4（図版 71-5）は，SC-99 を切る SK-543 の床面近くから接合しないが同一個体と考えられる破片が出土している。直立する口縁部のやや下がった位置に 2 条の断面三角形突帯を貼り付け，篦状工具で正面から押さえつけるように細く小さな刻目を施す。下城式系土器である。胴部外面には煤が付着し，胎土には金雲母が混じる。図版 76-6 の外面にはミガキ調整，内面にはナデ調整が施されている。7 は外面にミガキ調整を施する。煤が付着する。調整手法から，弥生時代中期後葉～後期前葉の時間幅に収まる。図 83-2 は，掘り形埋土中から出土した花崗岩礫を利用した敲石である。扁平な亜円礫の両主面，下端部に敲打痕が残る。重量 1119.5g を測る。

以上，出土遺物には，特異な土器もあるが，基本的には弥生時代中期後～後期前葉の時間幅に収まる。SC-99 を切る SD-36 が後期初頭，SC-99 に切られる SC-98 も後期初頭と考えられることから，SC-99 の廃絶時期は後期初頭と捉えることができる。

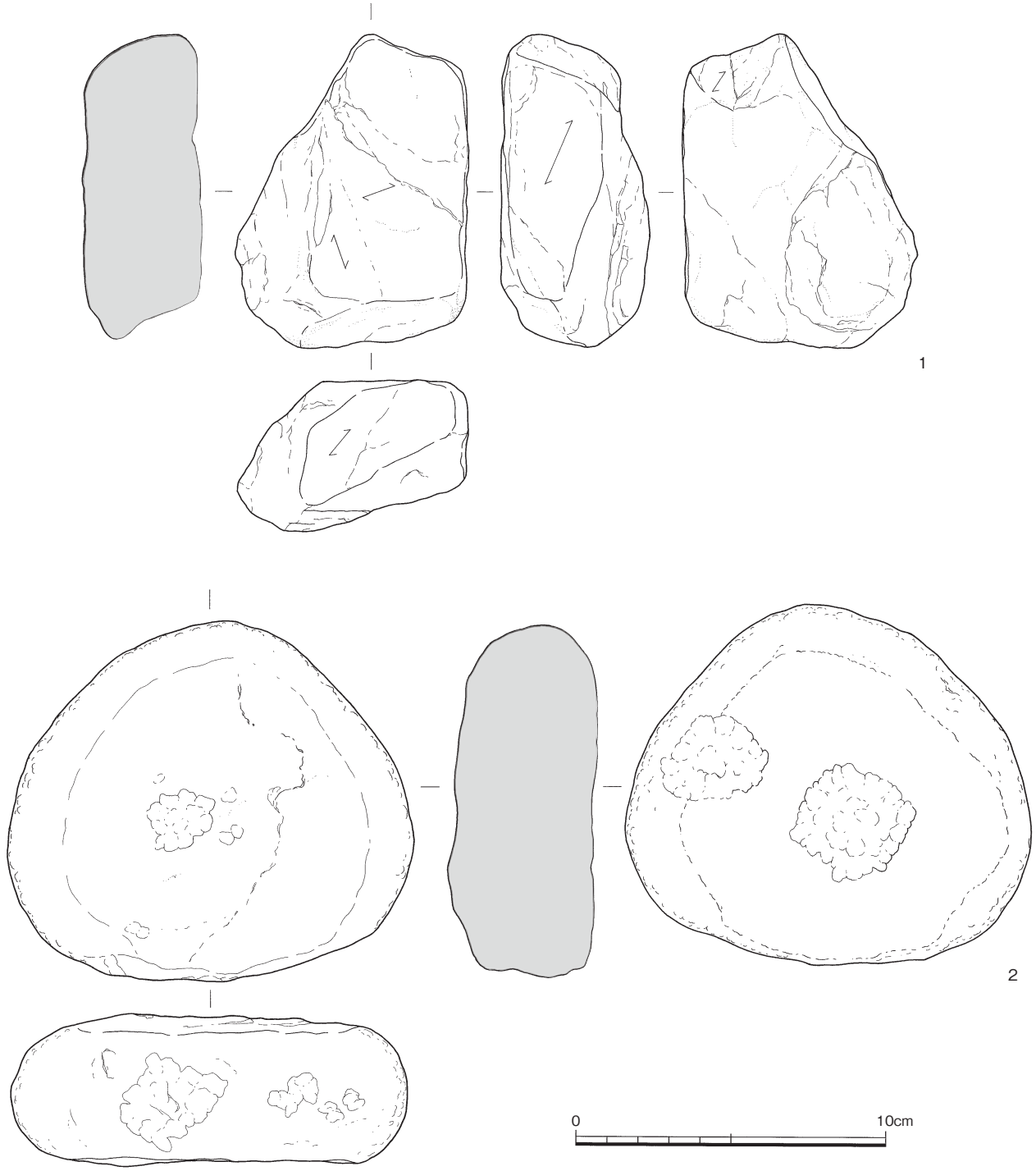


図 83　SC-98・99 出土石器実測図（1：SC-98，2：SC-99，縮尺 1/2）

100号竪穴建物（SC-100，図84・85，図版71・72）

DY・DZ-23 区に位置する。SK-501 に切られる。塹壕と既設管路の掘り形で大半を破壊されている。東側と北側の周壁の一部を確認したにとどまる。南北長 3.3 m，東西幅 2.45 mの隅丸長方形の掘り形と推定できる（図 84）。検出面であるⅣ層上面からの深さは 4 ～ 9㎝で，床面はほぼ平坦である。掘り形上部は暗茶褐色砂質土，下部は浅黄色砂質土が多く混じる暗褐色砂質土で埋積されて

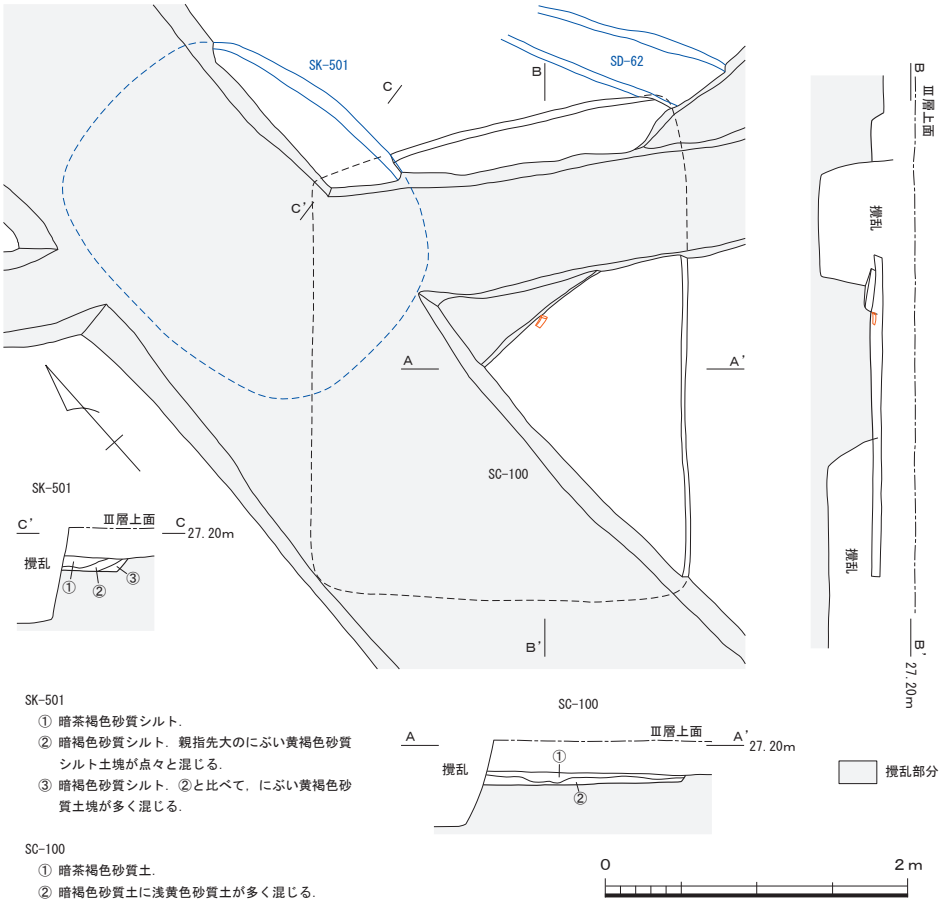


図 84　SC-100，SK-501 遺構実測図（縮尺 1/50）

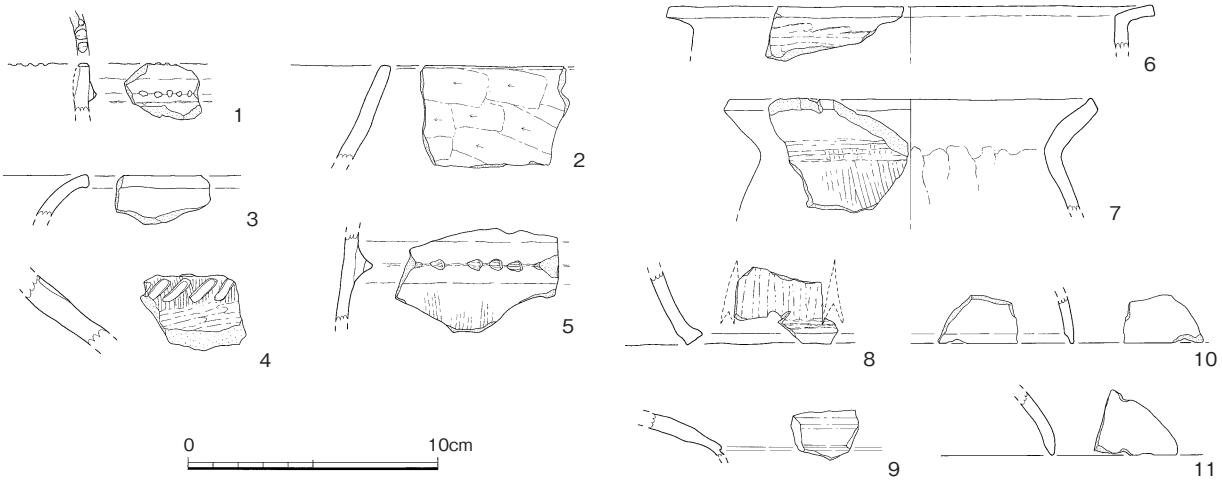


図 85　SC-100 出土土器実測図（1・2：掘り形埋土，3 ～ 11：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

いる。

掘り形埋土から出土した遺物は少ない（図 85-1・2，図版 72-5）。図 85-2 は床面直上から出土した破片と掘り形の中位から出土した破片が接合した。図 85-1（図版 72-3）は刻目凸帯文土器の深鉢である。口縁端部から若干離れた位置に低く細い断面三角形突帯をめぐらし，小さな刻目を施す。口縁端部にも比較的に密に小さな刻目を施す。刻

目凸帯文の形状や，にぶい黄橙色の色調に焼き上がっていることから，刻目凸帯文土器でも最も新しい段階に比定できる。2（図版 71-8）は粗製深鉢の口縁部破片である。同一個体と考えられる 2 片がある。外面にはケズリ調整，内面にはナデ調整を施す。図版 72-5 は弥生土器の甕の胴部破片で，外面にミガキ調整を施す。

掘り形上部のⅢ層部分からは，弥生土器が出土しているが，小片がほとんどである。ここでは，Ⅲ層でも下部，SC-100 の掘り形平面の検出面近くから出土した遺物を報告する（図 85-3 ～ 11）。3 ～ 5 は壺である。3 はラッパ形に緩やかに外反する口縁端部の破片。4（図版 72-1）は肩部破片で，先端が丸い棒状工具で幅広の短斜線文を施文する。5（図版 72-2）は胴部に断面三角形突帯を貼り付け，右から左に篦状工具で切り取るように刻目を施す。6 は逆Ｌ字形に口縁部を屈折させる鉢である。外面には篦状工具でミガキに近いナデ調整を施す。7 は「ハ」字形に窄まる頸部をもち，緩やかに屈曲する口縁部につながる。外面には刷毛目調整を施した後に，口縁屈曲部にはとくに強い横ナデ調整を行うため，細密条線が残る。8 は高坏の脚裾部の破片で，貫通する矢羽根透かし孔が焼成前に施される。外面には丁寧なミガキ状のナデ調整を施す。9 ～ 11 は須恵器である。9 は坏蓋の破片で，天井部と口縁部の境に小さな段がめぐる。10 も坏蓋の破片で，口縁端部内面に沈線状の段がめぐる。体部は丸みをもつものと考えられる。11 は坏蓋もしくは短頸壺の蓋と考えられる。体部は丸みをおびる。口縁端部を横ナデ調整で若干尖らせる。

SC-100 の掘り形埋土から出土した遺物は少ない上に，混入品と考えられる刻目凸帯文土器（図 85-1）や縄文時代の粗製深鉢（図 85-2）が含まれる。他に図示できなかったが，わずかに外面にミガキ調整を施す弥生土器の甕の胴部破片（図版 72-5）があるだけである。上部Ⅲ層部分から出土した土器は，SC-100 の掘り形の検出面近くのⅢ層下部から出土したもので，本来は掘り形埋土に包含されていた遺物と考えられる。また，SC-100 の埋土上部は，Ⅳ層由来の小塊が混じらない暗茶褐色砂質土である。出土遺物は SC-100 の埋積過程で流入したもので，須恵器（図 85-9 ～ 11）がみられるので，古墳時代後期を SC-100 の最終廃絶時期と捉えることができる。

495号竪穴建物（SC-495，図4）

DV-25・26 区の調査区東壁で，調査最終段階に土層断面を確認中，SD-20・21 に切られる落ち込みを確認できた。土層断面では幅 5.35 ｍの落ち込みで，Ⅱ層直下から深さ 18 ～ 25㎝掘り込まれている（図 4）。底面は小さな凹凸があるが，全体としては平坦である。竪穴式建物の一部と考え，SC-495 とした。規模から考えれば，径 6 ｍ前後の円形の掘り形をもつ竪穴建物である可能性が高い。

掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，床面下には部分的に，にぶい黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じる暗褐色砂質シルトの落ち込みがみられる。貼り床部分と考える。

遺物は出土していないが，弥生時代後期前葉の SD-20 に切られていること，円形の掘り形をもつ可能性が高いことから，弥生時代中期後葉～後期初頭の竪穴建物と考えておく。

506号竪穴建物（SC-506，図79・86・87，図版21・72～76・141・142）

調査区南西部の DY・DZ-21・22 区に位置する。SC-97 でも報告したように，SC-506 は SC-97 の下層で確認した竪穴建物である。SC-97，SD-29，SP-355 に切られ，SK-504 を切る。掘り形は，推定長 3.1 ｍ，幅 2.7 ｍの隅丸長方形と考えられる（図 79，図版 21）。南北に設定した土層観察用畦の断面観察では，建物が廃棄された後に，南側から暗褐色シルト質砂（⑥層），灰色みをおびる暗

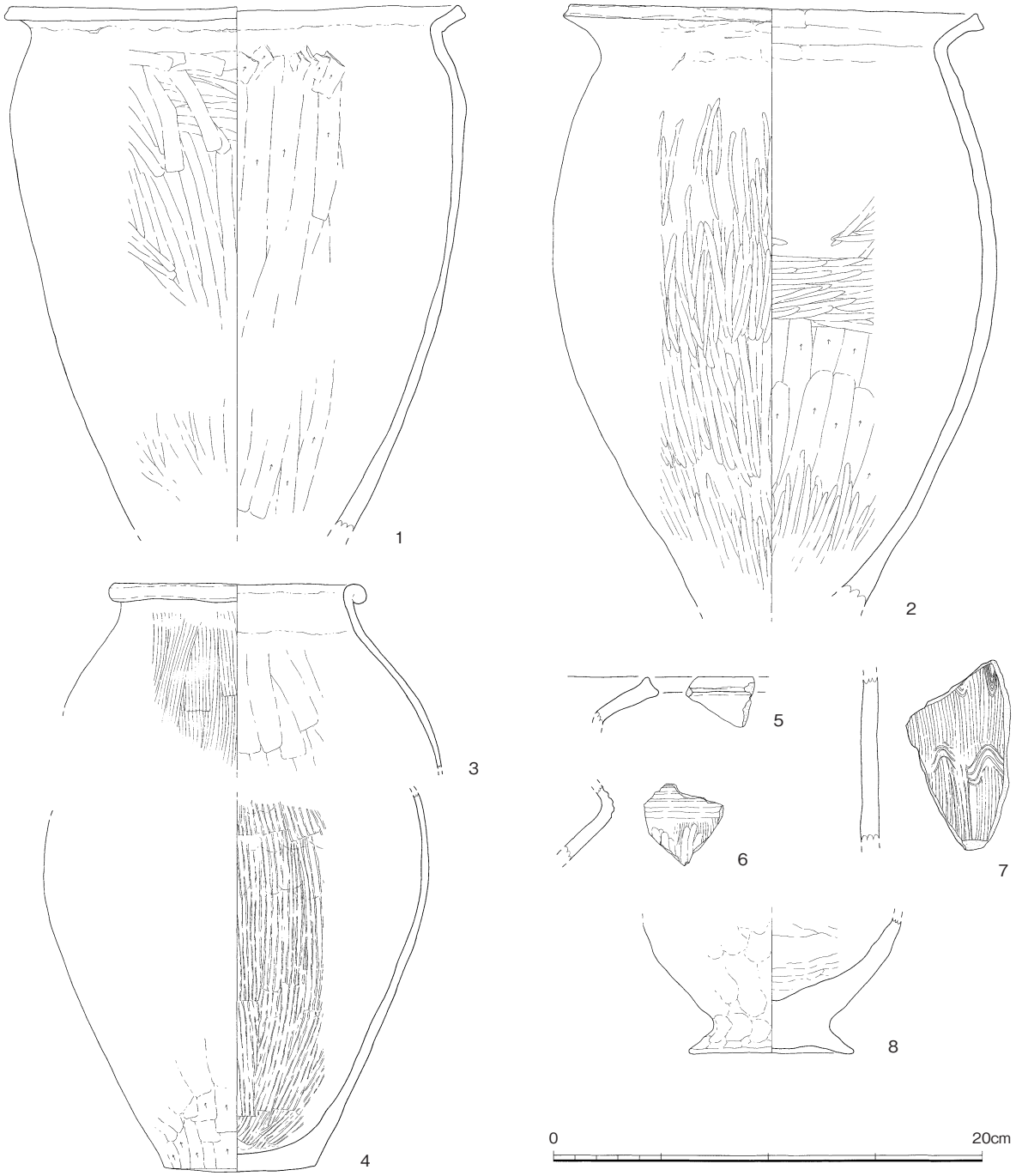


図 86　SC-506 出土土器実測図（縮尺 1/3）

褐色砂質土（⑦層），にぶい黄褐色シルト（⑧層），北側からはにぶい黄褐色シルト（⑫層）や褐色シルトのレンズ状ブロックがみられる暗褐色砂質土（⑬層）が流入し，掘り形中央に残された窪みを細礫混じりの暗褐色砂質土（⑤・⑩層）が埋積する。

床面で確認できた SP-454 は，東側を既設の埋設管路の掘り形で破壊されているが，推定径 45 cm，SC-506 の床面からの深さ 21cmを測る。掘り形南半部で径 19 ～ 20cmの立柱痕跡を検出できた。埋土は暗褐色砂質シルトで，褐色土や灰黄褐色土の小塊が混じる。ただし，土層断面を観察した後，降雨のため壁面が崩れてしまい，断面図を作成できなかった。

SC-506 の掘り形埋土中からは，比較的多くの弥

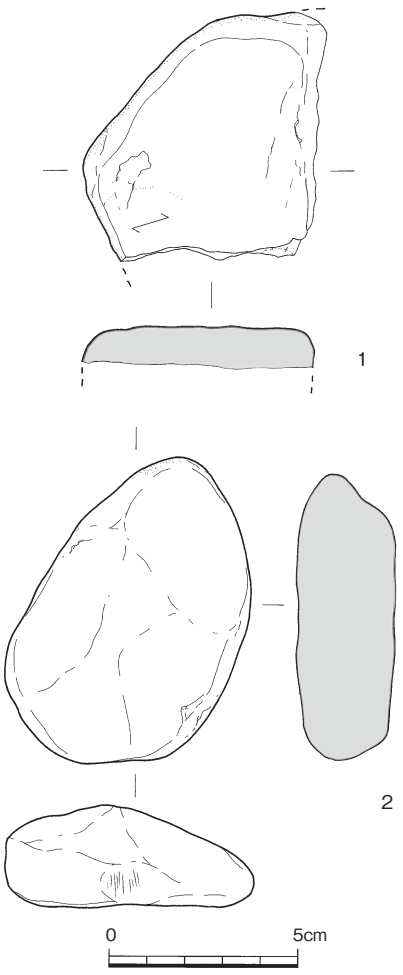


図 87　SC-506 出土石器実測図（縮尺 1/2）

生土器の破片が出土し，完形に近く復元できたものもある。いずれも建物廃絶後，掘り形中央に残された窪みを埋める細礫混じり暗褐色砂質土（⑤・⑩層）とともに投棄された遺物である（図 86-1 ～ 7・図 87-1・2，図版 72-6・7）。図 86-1 は掘り形南東部近く，図 86-2 は北西部で押し潰された状態で出土している。図 86-3・4 の破片は SC-506 の埋土中だけではなく，SC-97 の埋土や上部Ⅲ層部分から出土した破片と接合する。図 86-5・図版 72-7 は塹壕壁面の埋土中から出土。図 86-7 は SP-454 上面に当たる位置から出土している。

図 86-1 ～ 4 は甕である。1（図版 73-1）は口縁部を短く「く」字形に屈折させる。口縁の折り曲げ部には粘土の撚れが生じている。肩部が張る長胴である。胴部外面には擦過調整，内面には擦過に近いケズリ調整を施す。肩部内面には工具の木口部痕跡が残る。胴部上半～口縁部には煤が付着し，下半は二次的な火熱を受けて器表面が薄く剥落している。2（図版 74-1）は長胴に「く」字形に外反する口縁部がつく。胴部外面にはミガキ調整，内面には下半部をケズリ調整し，上半部にはナデ調整を施した後に部分的にミガキ調整を施す。胴部の器壁は，焼成不良のため，水分を含むとボロボロと崩れる。3・4（図版 75-1）は同一個体であるが，器体が歪み，復元径が合致しないため，個別に図示した。3 は断面円形の口縁部をもつ。器壁は薄く軽い。器表面は明褐色～灰褐色で，器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。胴部中位～肩部近くまで煤が付着する。口縁部周辺は横ナデ調整，胴部外面には刷毛目調整が施される。内面に残された調整痕跡は，ケズリに近いが砂粒は動いていないので，篦状工具による強いナデ調整とした。4 は胴部中位～底部の破片で，長胴で凸レンズ状の不安定な底部がつく。成形時の粘土の乾燥状態の違いによって，胴部外面は擦過状のナデ調整，底部近くはケズリ調整に変化する。内面には条痕調整痕が残る。外底面の周縁には反時計まわりに手持ちケズリ調整が施されている。5 は壺の口縁部破片で，口端部を横ナデ調整で拡張する。6（図版 72-4）は高坏の坏部中位の破片で，4 条の波板状の凹線文をめぐらす。7（図版 72-8）は胴部破片で，円筒形の形状に復元でき，岡山県南部に分布するジョッキ形土器である可能性を考えた。外面に，刷毛目調整を施した後に，櫛歯状工具で波状文を施文する。また，同じ工具で上方に向かう縦方向の条線帯が残る。8 は裾部が「ハ」字形に大きくひらく脚台状の底部をもつ鉢である。外面は指頭で整形し，脚台部の先端は指で摘むように成形している。内面は指頭を回転させて横ナデ調整する。図版 72-6 は壺あるいは鉢の胴部下半の破片で，外面には斜め方向にナデ調整を施す。内面の上半はナデ調整，下半にはケズリ調整を施す。7 は甕の胴部破片で，外面にミガキ調整を施すが，内面は器面が荒れているため調整は不明である。

図 87-1（図版 141-1）は砂岩を用いた砥石である。残存部でごくわずかに擦痕が残る。残存重量は 81.5g を測る。2（図版 142-7）は花崗岩のやや扁平な亜円礫を利用した磨石で，上下端部にわずかに擦痕が残る。重量 182.2g を測る。また，掘り形埋土や SP-454 からは炭化物の破片が出土し

ている。

以上，SC-506 の最終埋没時期を示す甕（図 86-1･2）は弥生時代後期初頭に比定される。一方，SC-506 は後期初頭の SC-97，SD-29 に切られている。そこで，SC-506 は弥生時代中期後葉の建物と捉えることができる。

516号竪穴建物（SC-516，図88・89，図版22・76・77）

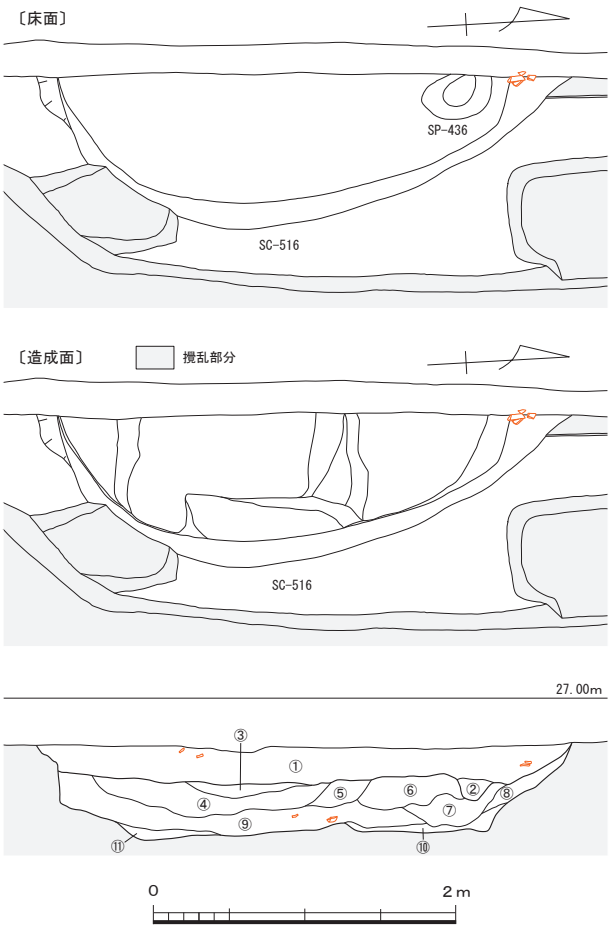
調査区西壁沿いの DZ-29 区に位置する。掘り形の大半が調査区外にひろがるが，径 4 ～ 5 mほどの円形の掘り形を推定できる。調査時には土壙の可能性も考えたが，これまで文京遺跡で出土した土壙の中で径 4 ～ 5 mの大型土壙はないので，竪穴建物と判断した（図 88，図版 22-1）。

調査区壁面で土層を観察すると，SC-516 の掘り形の立ち上がりはⅢ層下部で途切れる。SC-516 が位置する調査区北半部のⅢ層中部～上部は，やや白っぽい土色で，砂礫が多く混じり，攪拌されていると考えられる。

掘り形上部を埋める径 1cmほどのにぶい黄褐色シルト塊やレンズ状ブロックが少量混じる黒褐色砂質土（①層）を掘り下げると，径 2 ～ 4cmのにぶい黄褐色砂質シルトや黒褐色砂質土の塊が混じる暗褐色砂質土が斑状にあらわれた。北端の壁際で SP-436 を確認できたこと，暗褐色砂質土の中ににぶい黄褐色砂質土塊や褐色シルト塊が多く混じることから，厚さ 25 ～ 35cmの貼り床（③～⑩層）が施されていると判断した。SP-436 が出土し床面と考えた①層下面には，小さな凹凸が多くみられる。貼り床下面は，周壁沿いに高さ 15cm前後の掘り残し部分がみられるなど，底面にはかなり凹凸がある（図版 20-2・3）。

SP-436 は，短径 32cm，推定長径 45cm，深さ 12 ～ 13cmを測る不整円形の掘り形をもつ。埋土は，締まりのある黒褐色砂質土で，径 2 ～ 3cmの褐色シルト塊が少量混じる。

掘り形埋土（①層）からは，図 89-1 ～ 5・7 ～ 10 の比較的多くの遺物が出土している。12・17 は調査時に掘り形最上部として取り上げたが，SC-516 の掘り形埋土の最上部は上層のⅢ層と明確に区分できず，上部Ⅲ層部分から出土した遺物とともに報告する。貼り床部分（③～⑪層）から出土した遺物はほとんどなく，図化できたのものも図 89-6 の 1 点だけである。炭化物の小片が出土している。上部Ⅲ層部分の遺物には 11・13 ～ 16 があるが，いずれもⅢ層でも下部～下底面で出土している。他はⅢ層でも上半部から出土し，



①: SC-516 掘り形埋土，②SP-436 埋土，③～⑪: SC-516 貼り床部分．
① 黒褐色砂質土．幅 1 ～ 2 cmのにぶい黄褐色シルトのレンズ状ブロックや楕円形のブロックが少量混じる．弥生土器片や炭化物片がまばらに出土．
② SP-436 埋土．上層の①と近似する黒褐色砂質土で，しまりがある．径 2 ～ 3 cmの褐色シルト土塊が少量混じる．
③ やや灰色みをおびた暗褐色砂質土．径 2 ～ 3 cmのにぶい黄褐色砂質シルト塊が少量混じる．
④ 暗褐色砂質土．径 2 ～ 4 cmの褐色シルト塊が多く混じる．
⑤ 暗褐色砂質土．径 2 ～ 3 cmのにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じる．また，径 1 ～ 2 cmの褐色シルト塊が少量混じり，全体にやや灰色味をおびた土色．
⑥ 暗褐色砂質土．径 3 ～ 5 cmの黒褐色土や褐色土の塊が点々と混じる．炭化物片がごく少量出土．
⑦ 灰黄褐色砂質土．径 1 ～ 3 cmの褐色シルト土塊が多く混じる．
⑧ 黒褐色砂質土．北側から流れ込むように堆積し，下部では灰黄色砂質土が混じる．
⑨ 暗褐色砂質土．幅 3 ～ 20 cmの黒褐色砂質土のレンズ状ブロックがみられる．
⑩ 灰黄色砂．下部にマンガンの沈着が帯状にみられる．
⑪ 灰黄色砂．径 1 ～ 2 cmのにぶい黄褐色砂質土塊が少量混じる．

図 88　SC-516 遺構実測図（縮尺 1/50）

須恵器が混じる。前述したように，この地点のⅢ層部分は攪拌を受けているためである。

掘り形埋土から出土した1･2は壺である。1(図版76-5）は口縁部上端に粘土を貼り付けて端面を拡張し，4条の波板状の凹線文をめぐらす。2は小型壺の肩部～頸部の破片である。内外面に成形時の指頭痕が多く残る。3～5は「く」字形に強く屈折する甕の口縁部破片である。7は山ノ口式系土器の甕である。8・9は高坏。8は円筒形に近い脚柱部の破片で，細い沈線文を8条以上施す。9（図版76-7）は埦型の高坏の坏部破片で，口縁部が若干内彎する。口縁部下に4条の沈線様の凹線文がめぐる。外面には横方向のミガキ調整を施す。内面は口縁部から坏部彎曲部にかけて横ナデ調整，以下には横方向のケズリ調整の後に，横方向のミガキ調整を加える。10（図版76-4）はラッパ形に大きくひろがる。高坏の脚部の可能性も考えられるが，端面に刻目が施され，内外面に成形時の指頭痕が多く残されているので,鉢と考えた。1～9はいずれも弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できるが，10は当該期に類例のない特異な鉢である。

貼り床部分から出土した6（図版77-1）は，最大径が胴部中位にあり，短く外反する「く」字形口縁をもつ。胴部外面には径4.5×3cmほどの楕円形の凹レンズ状に窪む焼成破裂痕が生じている。外面は口縁部～肩部にかけて横ナデ調整し，胴部中位以下には縦方向のミガキ調整が施され

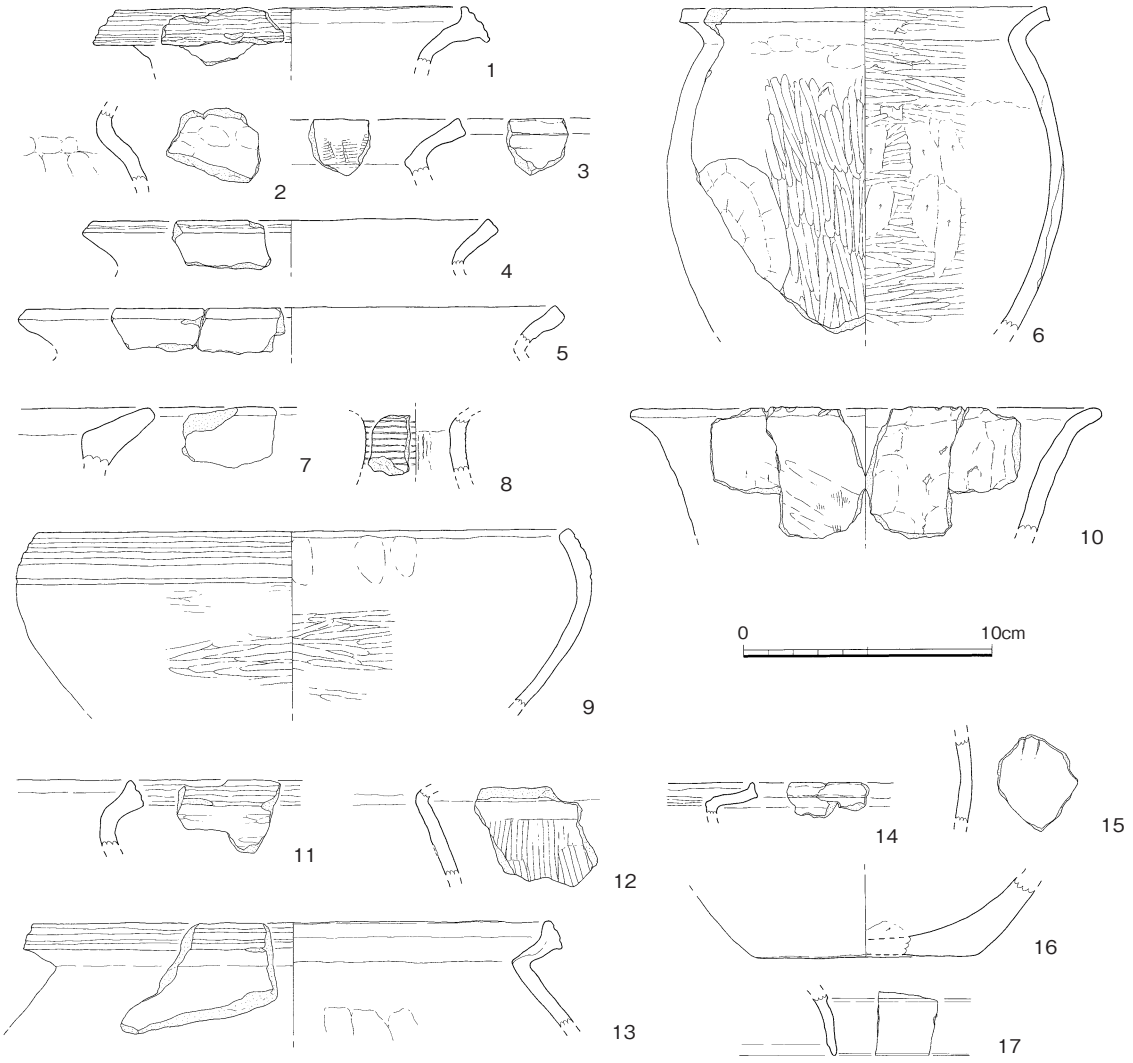


図89　SC-516出土土器実測図
（1～5・7～10：掘り形埋土，6：貼り床部分，11～17：上部Ⅲ層部分，縮尺1/3）

る。調整痕の終点が直線的であるので，篦状工具を用いたものと考える。内面にはケズリ調整の後に横方向のミガキ調整が加えられ，部分的にケズリ痕が残る。外面には焼成破裂痕を含めて煤が付着する。この他に貼り床部分からは，外面にミガキ調整，内面にナデ調整を施した壺の底部付近の破片，内外面ともにナデ調整が施される甕もしくは壺の胴部破片が出土している。

上部Ⅲ層部分から出土した11～14は甕である。11（図版76-2）の口縁部は短く緩やかに外反する。端部は横ナデ調整で上方に拡張され全体として楔形の断面形に成形される。端面には，2条の凹線文が施される。12は肩部破片。13（図版76-3）は，肩の張った胴部に強く屈折する「く」字形口縁がつく。口縁上端に粘土紐を貼り付けて拡張し2条の凹線文をめぐらす。14は逆L字形に口縁部を屈折させる。口縁端部を上方に摘み上げる。口縁部内面には屈曲部近くに浅い沈線が1条めぐる。15（図版76-6）は壺の胴部片である。肩部近くと考えられ，「ノ」字形の短斜線文が施文されている。器体の傾きは不明である。16は壺の平底の底部。17は須恵器の坏蓋で，天井部との境に浅い凹線状の窪みがめぐる。口縁端部は外方に摘み出したように短く屈曲させ，浅い段が形成される。

掘り形埋土から出土した土器は，前述したように弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。貼り床部分から出土した図89-6は後期初頭の特徴を備える。したがって，SC-516は弥生時代後期初頭の竪穴建物と捉えることができる。

517号竪穴建物（SC-517，図90～93，図版23・77～80・137・142）

DY-28区に位置する。北西角を塹壕で破壊されている。推定東西長3.8 m，南北長3.4 m，検出できたⅣ層上面からの深さ28cmを測る隅丸方形の竪穴建物である（図90，図版23-1）。床面の中央で出土したSP-424で立柱痕跡を確認でき，SP-424の1柱で上屋を支える簡易の建物と推定できる。床面の北東隅では不整な隅丸長方形のSK-522が出土した。北側及び東側の周壁に沿って掘られており，SC-517に伴う屋内貯蔵穴と考える（図版23-2）。

掘り形上部は，細礫～中礫が多く混じる暗褐色砂質土（①層）で埋まる。にぶい黄褐色砂質土のレンズブロックが点々とみられる。下部には，周囲から流れ込んだ黒褐色砂質土，灰黄褐色砂質土，にぶい黄褐色砂質土が堆積する。掘り形の南西部では，埋土中位から炭化物片が比較的集中して出土している。

柱穴のSP-424は，短径42cm，長径45cmの長円形の掘り形をもつ。床面からの深さは11～15cmを測り，東半部が緩やかに深くなる。掘り形の西半部で径18cm前後の立柱痕跡を確認できた。底面に暗灰褐色粗砂を敷き，底面をほぼ平坦にした上で柱を立て，灰褐色の極粗砂～細礫，そして砂礫が多く混じる暗褐色砂質シルトで固定する。

床面の北東隅のSK-522は，東西長1.48 m，南北長95cm，床面からの深さ14～15cmの掘り形をもつ。底面はほぼ平坦に整えられている。埋土は，底面近くに周囲から細礫混じりの黒褐色砂質土（⑩・⑪層）が流れ込む。上部にできた窪みに，細礫～中礫が多く混じる黒褐色砂質土（⑨層）が堆積し，その中から弥生土器が折り重なるように出土している。SC-517の廃絶に伴って投げ込まれた遺物である。

この他，床面ではSP-422・423・425・426が出土した。SC-517に伴うかは不明である。土器が出土したSP-422は，柱穴・小穴の項で報告するが，他の調査所見は巻末の遺構観察表を参照されたい（表3）。

掘り形埋土からは小片ばかりであるが，比較的多くの遺物が出土している（図91-1～13，図92-1）。図91-1・3・6・7・9～11，図版77-10は掘り形西半部の埋土最下部，12は西半部の埋土中位，2・4・5は東半部の埋土中位，8は東半部の埋土最下部から出土している。図92-1の打製石鏃は東壁際から出土している。また，図91-13は塹壕で破壊された掘り形西半部から出土している。

図91-1～4は壺である。1（図版77-2）は，横

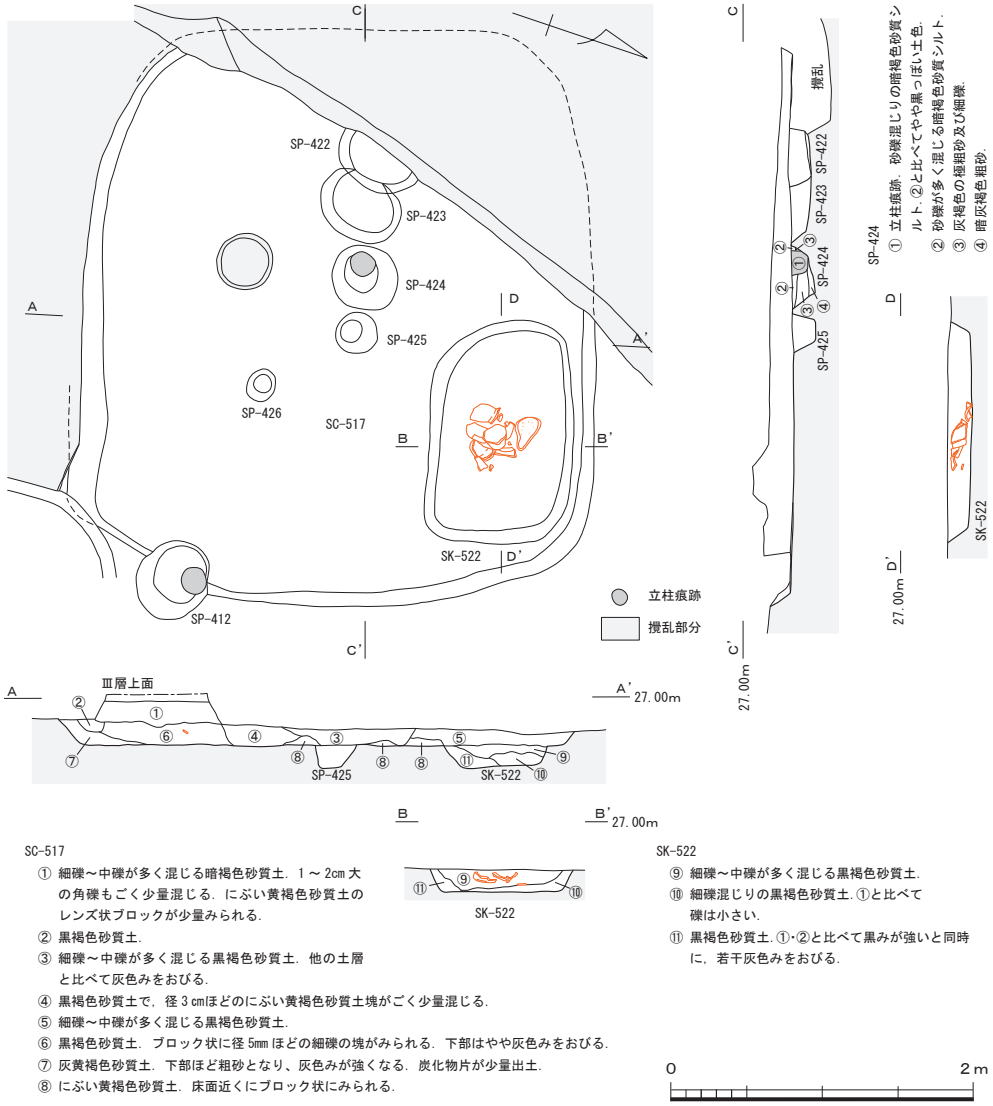


図 90　SC-517，SK-522 遺構実測図（縮尺 1/50）

ナデ調整で口縁端部を上下に摘み出し，下端に小さな刻目を密に施す。2（図版 77-4）の口縁端面には浅く細い 2 条の擬凹線文をめぐらす。外面には赤色顔料を塗布している。3（図面 77-8）は肩部破片で，太めの断面三角形突帯を貼り付け，爪先を押捺して太い刻目を施す。4（図版 77-5）は大型壺の口縁端部の破片で，口縁端面に 4 条の沈線様の凹線文を 1 条ずつめぐらした後に，不規則な間隔で縦方向の短斜線文を施す。5 ～ 10 は甕である。5（図版 77-3）・6（図版 77-7）は，口縁端面に 2 条の浅く細い擬凹線文を施す。7 は「く」字形に外反する口縁部破片である。外面には煤が付着する。8 は小型甕の口縁部周辺の破片。調整は乱雑で，指頭で逆 L 字形に口縁部を屈折させる。その際に口縁端部内面に窪みが生じている。また，口縁屈折部には篦状工具痕が残る。9・10 は甕の平底の破片。10 では，底面に当たる粘土円盤の上に粘土を積み重ねた成形過程を観察できる。11・12 は壺の平底の破片。11 は焼成不良のため，器体が小さな土塊となって崩れている。13 は須恵器の坏身の破片で，口縁端部を欠く。体部と底部の境界部に沈線文が 1 条めぐる。図 93-1（図版 137-7）は，サヌカイト製の平基式打製石鏃である。主要剥離面を大きく残す。調整剥離段階の未成品である。重量 0.9g を測る。

SC-517 に伴うと考えた SK-522 の掘り形埋土⑨層から，図 93-2・3・6・8・9，図版 80-10 が折り重なるようにして出土している。図 93-1・10 は

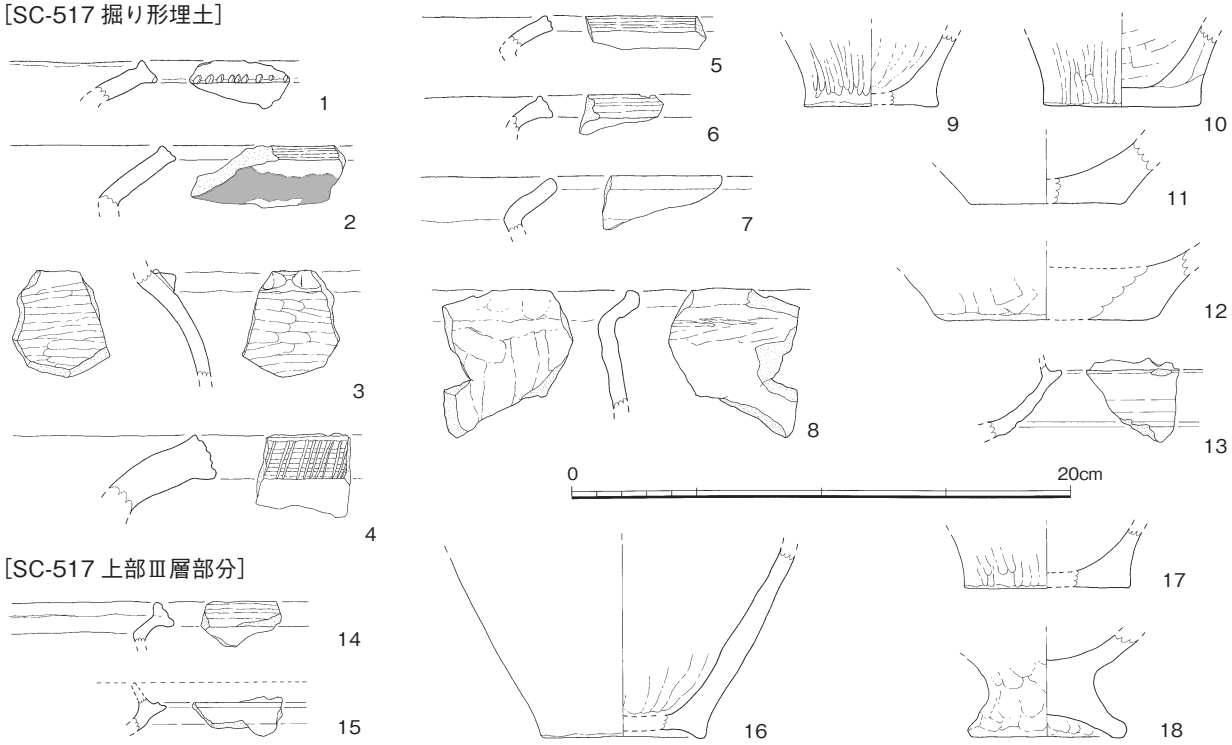


図 91　SC-517 出土土器実測図（1 ～ 13：掘り形埋土，14 ～ 18：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

掘り形西半部，図 93-4・11・12，図版 80-8 は東半部の埋土中，図 93-5・7・9，図 93-2・3 は埋土中から出土している。

図 93-1 ～ 5 は壺である。1（図版 80-7）はラッパ形にひらく口頸部の破片。2（図版 78-1）は球形の胴部破片で，底部は不安定な小さな平底である。外面は刷毛目調整の後にナデ仕上げる。内面には，胴部中位の屈曲部周辺に成形時の指頭痕が残り，乱雑な刷毛目調整で仕上げている。胴部外面の中位には帯状に煤が付着する。3（図版 78-2）は胴部下半の破片。小さな平底をもつ。下半と中位に径 3 ～ 5cmほどの焼成破裂痕が連続して生じている。4（図版 80-1）は肩部破片で，外面に浅く幅広の沈線様の凹線文を 1 条ずつ 3 条めぐらす。小片であるため，天地が逆となる可能性を残す。5（図版 80-2）は頸部付け根に貼り付けられた断面台形の突帯の破片で，接合面で割れている。刷毛目工具の木口部を押捺してX字形の刻目

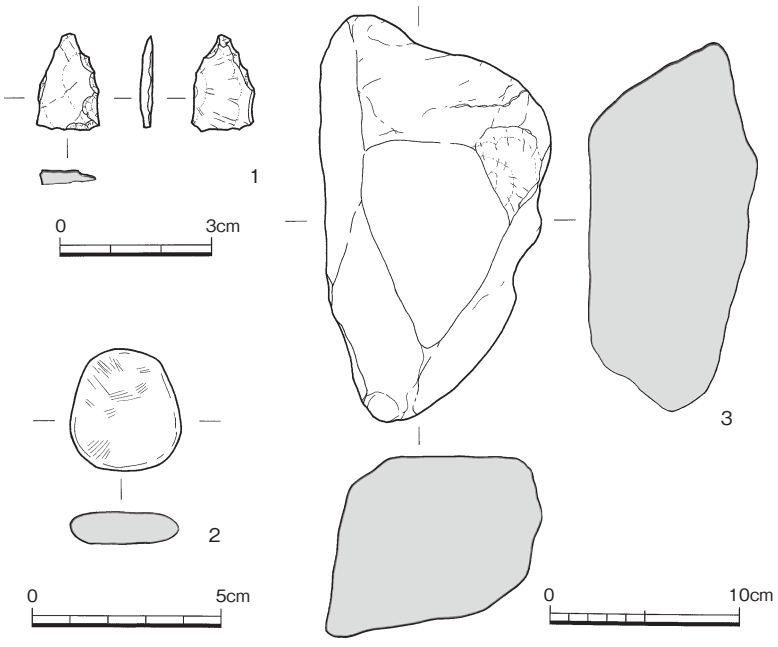


図 92　SC-517 出土石器実測図（1：掘り形埋土，2・3：SC-517 内 SK-522，縮尺 2/3，1/2，1/4）

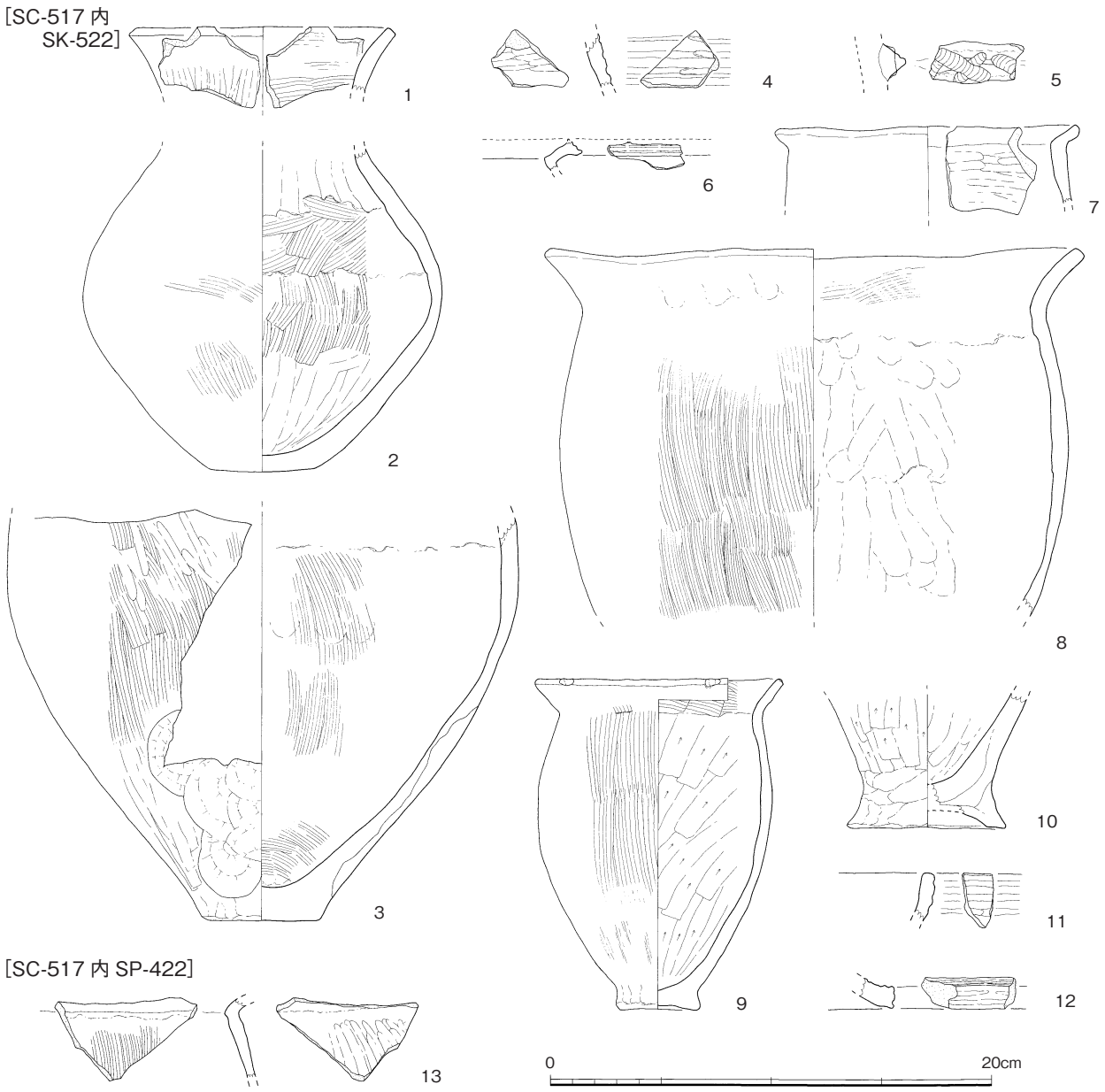


図 93　SC-517 内 SK-522，SP-422 出土土器実測図（縮尺 1/3）

を施す。6 ～ 10 は甕。6（図版 80-5）は，口縁部を「く」字形に屈折させ，口縁下端を横ナデ調整で摘み出し，2 条の凹線文をめぐらす。7 は小型甕の口縁部～胴部上半の破片である。同じ小型甕である後述する 9 と比べて，つくりは粗雑である。口縁部を「く」字形に短く屈折させる。8（図版 79-2）は，口縁部が歪み，胴部内面には成形時の指頭痕が残されている。器表面にはかなり凹凸があり，粘土接合線も残るなど，かなり粗雑な仕上げである。9（図版 79-1）は小型甕で，緩やかに口縁部を外反させる。胴部は膨らまず長胴で，若干上げ底の高台状の厚底がつく。口縁端面の四方向に 1 個ずつ浅い刻目を施す。胴部外面には刷毛目調整を施すが，下半は器面調整時に粘土が乾きすぎたためか，刷毛目と考えられる条線が部分的に残る。内面もケズリ調整であるが，上半の砂礫があまり移動しておらず，下半と比べて粘土が軟らかい時点で施されたと考えられる。器面調整が成形工程の最終段階に一気に行われたものと考えられる。10（図版 80-6）は，脚台状の上げ底の破

片。「ハ」字形にひろがる底裾部に薄く粘土を重ねて胴部下半に繋げ，内底面に粘土を追加する成形過程を観察できる。底部側面は指頭による成形痕跡が残り，胴部下半にケズリ調整を施す。11（図版 80-3）は高坏の口縁端部の破片で，外面には浅く幅広の沈線様の凹線文を1条ずつ3条めぐらす。外面には薄く煤が付着する。12（図版 80-4）は高坏の脚端の破片と考えた。端面の上下に 2 条の沈線様の凹線文を 1 条ずつ施す。上段の凹線文は途切れている。裾部には 3 ～ 4 条の沈線状の凹線文をめぐらす。図版 80-8 ～ 10 は，甕の胴部の破片。8 の外面にはミガキ調整，内面にはナデ調整を施す。10 の外面には刷毛目調整，内面にはナデ調整を施す。外面に煤が付着する。9 は壺の胴部破片で，外面にはミガキ調整，内面にはナデ調整を施す。図 93-2（図版 142-1）は，扁平な砂岩の亜円礫を利用した磨石で，部分的に擦痕が残る。重量 13.0g を測る。図 92-3 は台石の破片である。残存重量 3175g を測る。

図 91-14 ～ 18 は，SC-517 の上部Ⅲ層部分でも下部から出土した遺物である。図 91-14（図版 77-6）は甕の口縁部破片で，「く」字形に屈折する口縁部の上端に粘土紐を貼り付け，口縁端面を拡張し，2 条の凹線文をめぐらす。凹線文ではあるが，浅く不明確で，擬凹線文と言うべきか。15 は須恵器の坏身の破片で，回転横ナデ調整によって，蓋の受け部面に沈線様の条線がめぐる。16 はわずかに上げ底となる甕の底部破片。17 は甕の平底の破片。18（図版 77-11）は脚台付きの鉢と考える。「ハ」字形に端部を指で摘むように引き出して，脚台を成形している。図版 77-10 は甕の胴部破片で，外面には擦過状の調整痕跡，内面には刷毛目様の幅広の条線が残る。こうした調整痕跡は，他の土器ではほとんどみられない。

SC-517 から出土した遺物には須恵器（図 91-13）が 1 点だけ混じる。しかし，他は弥生時代後期初頭～中葉の遺物である。須恵器が出土した位置は塹壕が破壊する掘り形西半部に当たり，遺物を採り上げ時に紛れ込んだものと考える。さらに，SK-522 から折り重なるように出土した土器群（図 92-2・3・6・8・9）は弥生時代後期中葉に比定できる。したがって，SC-517 の廃絶時期は弥生時代後期中葉と捉えることができる。

519号竪穴建物（SC-519，図66・69，図版67）

DZ-27 区に位置する。SC-71 の報告で述べたように，Ⅳ層上面で掘り形の平面形を確認できたが，攪乱溝で大きく破壊され，当初，SC-71 と 1 棟の住居跡と考えて調査を始めた。SC-519 が SC-71 と別個の住居跡と確認できたのは，埋土を数cm掘り下げた後である。SC-519 は SC-71 及び SD-73・512 に切られる（図 66）。

部分的に残された掘り形を繋げると，長軸長 4 ｍほどの楕円形の掘り形をもつ竪穴建物を復元できる。掘り形埋土は，SC-71 と同じく，にぶい黄褐色砂質シルトの小塊が混じる暗褐色砂質シルトである。床面では SP-372・374 が出土したが，SC-519 に伴う遺構かは不明である。調査所見は巻末の遺構観察表を参照されたい（表 3）。

SC-519 の掘り形埋土からは，遺物は出土していない。掘り形上部に当たるⅢ層部分から弥生土器の破片が出土しているが，いずれも弥生土器の小片である（図 69-10・11）。10（図版 67-4）は緩やかに「く」字形に外反する口縁部をもつ甕である。口縁上端部に粘土紐を貼り付け拡張し，2 条の凹線文を施す。口縁屈曲部には，粘土紐を貼り付けて，板状工具を密に押捺して刻目を施す。その結果，突帯は押し潰され低い台形を呈する。11（図版 67-5）は壺の頸部破片。刷毛目状工具の木口部を押圧した断面三角形の突帯がめぐる。これらの遺物は弥生時代後期初頭に比定できる。

SC-519 は，弥生時代後期前葉に埋没する SC-71 に切られることと，SC-519 の埋没過程に混入したと考えられる掘り形上部のⅢ層部分から出土した土器を手掛りとして，弥生時代後期初頭に廃絶する竪穴建物と考える。

536号竪穴建物（SC-536，図58・94・95，図版11・47・80・81・125）

DV・DW-24・25区に位置する。SC-25の下層で検出した。SC-536はSC-25の入れ子状態にある。SC-41・42・44を切り，SC-25，SD-10・45，SK-535に切られる。掘り形は，東西長4.2～4.9m，南北幅4.75mの不整な矩形で，深さは12～13cmを測る。周壁沿いには，途切れながら幅10～15cm，床面からの深さ2～8cmの周壁溝がめぐる（図58，図版11-2）。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，拳大の浅黄色やにぶい黄褐色の砂質シルト塊が多く混じる。埋土は淘汰が悪く，SC-536が掘り込まれているⅣ層起源の浅黄色やにぶい黄褐色の砂質シルト塊が多く混じることから，人為的に埋め戻されたものと判断した。周溝の埋土は暗褐色砂質シルトである。

床面では，SK-537・538の小型土壙と，SP-307・448～452・457・458・461～469・472の小穴が出土している。この中で，SP-448・450・451は，SC-25の炉跡のSK-527に伴うと考えた小穴である。SP-457はSC-25，SP-463はSC-42の柱穴である。これらを除いて，SP-307・449・458・461はやや矩形となるが，SC-536のほぼ中央に掘り形と相似形に配置されている。立柱痕跡は確認されていないが，4本柱構造の建物と考えた。

SP-307は長径31cm，短径27cm，深さ21cmの長円形の掘り形をもつ。埋土は浅黄褐色砂質土が多く混じる極暗褐色砂質シルトである。SP-449は，SP-450に切られ，西端を塹壕で破壊されているが，径43cm，深さ27cmの円形の掘り形をもち，埋土は暗褐色砂質土である。SP-458はSC-25の柱穴であるSP-457に切られる。径32cm前後，深さ13cmほどの円形の掘り形をもち，埋土は暗灰色砂質土が多く混じる暗褐色砂質シルトである。

SP-461は，長径29cm，短径27cm，深さ14cmの長円形の掘り形で，埋土は暗褐色砂質シルトで，径0.5～2cm前後のにぶい黄褐色塊が非常に多く混じる。SP-307・458間は2.4m，SP-458・461間は2.15m，SP-461・449間は2.35m，SP-449・307間は2.1mを測る。

SK-538は南壁沿いに位置する不整な隅丸長方形の土壙で，SC-536の出入り口施設である可能性を考えた。長径59cm，短径55cmを測る。深さ3cm前後の浅い皿状の掘り込みである。埋土は暗褐色砂質シルトで，径3～4cmのにぶい黄褐色砂質シルト塊が非常に多く混じる。

SK-537は，長軸長63cm，短軸長46cm，SC-536

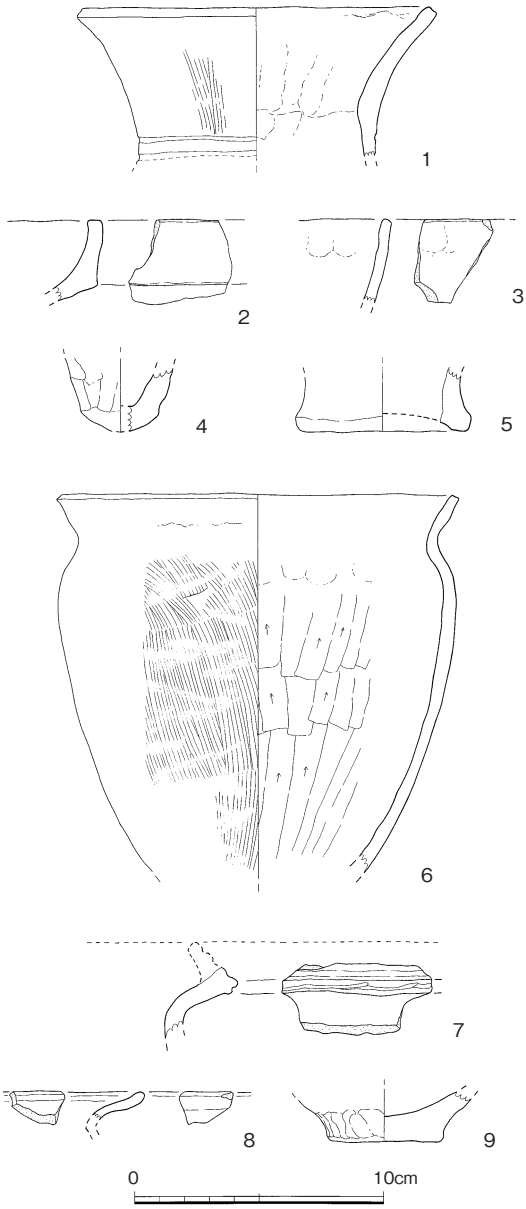


図94　SC-536，SP-307・449・468出土土器実測図（1～5：SC-536掘り形埋土，6：SP-307，7：SP-449，8：SP-468，9：SC-536上部Ⅲ層部分，縮尺1/3）

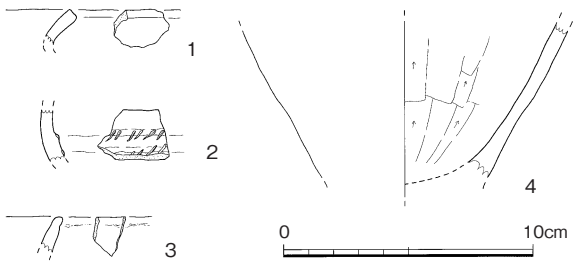


図 95　SC-536 内 SK-537 掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）

の床面からの深さ 23cmの楕円形の掘り形をもつ。埋土は極暗褐色シルトである。埋土に焼土や炭化物は混じらず，炉跡とは考えられない。しかし，長軸が南壁とほぼ平行し，柱穴と考えた SP-461・467 を結ぶ線上にあることから，SC-536 に伴う何らかの施設と考える。上層の SC-25 の炉跡である SK-527 に切られる。

この他，遺物が出土した SP-468 は柱穴・小穴の項で報告するが，SP-462・464・465・466・467・469・472 の調査所見については，巻末の遺構観察表を参照されたい（表 3）。

図 94-1 は SC-536 の掘り形北東部の埋土中，2・5 は北西部の床面直上，3 は北西部の埋土中，4 は北壁沿いの周溝内から出土した。1（図版 80-11）はラッパ形にひらく口頸部をもつ壺である。頸部の付け根に 2 条の沈線をめぐらす。2（図版 80-12）は口縁部がやや外傾して立ち上がる高坏の口縁部である。3 は深鉢型の鉢の口縁部破片。4（図版 81-1）は深鉢型のミニチュア土器のやや尖底ぎみの丸底の破片である。5 は甕の脚台状の底部側面の破片である。胴部下半との接合面で破損している。6（図版 47-7）は柱穴 SP-307 掘り形下部で破片が折り重なるように出土した。全周の 1/4 ほどの破片に復元できた甕である。やや肩部が張る胴部をもち，肩部から緩やかに外反する口縁部がつく。口縁端部は，横ナデ調整で面取りされ，わずかに窪む。7（図版 81-2）は柱穴の SP-449 から出土している。複合口縁壺で，口縁部の拡張部の接合面で破損する。口縁端面には波板状の凹線文，口縁下端の箍部に沈線を 1 条めぐらす。他に炭化物片が少量出土している。8 は SP-468 から出土。柱穴・小穴の項で報告する。他に，柱穴 SP-458 から弥生土器の甕の胴部小片 2 点，柱穴 SP-461 から弥生土器の胴部破片 2 点が出土している。9 は SC-536 の掘り形南西角に当たるⅢ層部分から出土した鉢もしくは壺の平底破片である。

SK-537 からは，弥生土器が出土しているが，小片である上に，量もごく限られている（図 95-1～4）。1 は「く」字形に屈曲する小型甕の口縁部破片で，口縁端面は横ナデ調整で面取りされる。2（図版 125-6）は壺の頸部破片で，頸部の付け根に，低く細い断面三角形の突帯を 2 条貼り付け，篦状工具で細い刻目を施す。3（図版 125-5）は深鉢型の鉢の口縁部破片。4 は甕の胴部下半の破片で，平底もしくは脚台状の上げ底がつくものと考えられる。

掘り形埋土から出土した土器は，弥生時代後期初頭～中葉の時間幅に収まる。また，柱穴の SP-307 から出土した甕（図 94-6）は，後期中葉に比定できる。上層の SC-25 が後期後葉の住居跡であるので，SC-536 の廃絶時期は弥生時代後期中葉と判断できる。

544号竪穴建物（SC-544，図96～100，図版24・81～84・142・144）

調査区南西角の DZ-20・21 区に位置する竪穴建物である。掘り形の西側と南側は調査区外にのびる。一辺 3.3 m以上の隅丸方形の掘り形と考えられる。SD-508，SK-545，SP408 に切られる。SK-543 を切る（図 96，図版 24-2）。

調査区西壁と南壁の土層断面では，掘り形埋土は①～④層の土層群から構成されるが，調査に当たっては，上部の①～③層が周辺のⅢ層と近似するため，当初Ⅲ層として掘り下げていた。ところが，①～③層の下面に当たる部分まで掘り下げた時点で，多くの遺物が出土し始め，出土状況を記録し，SC-544 の精査に入ったが，さらに下層の④層からも遺物が出土し始めた。①～③層はⅢ層と近似する暗褐色～黒褐色の砂質土であるが，周囲のⅢ層と比べて細礫や中礫，極粗砂が混じる。とくに，調査区西壁面では，①層下半部では砂礫

Ⅰ 表土（造成土）層.
Ⅱ 細礫～中礫，さらに径 10 ㎜前後の礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土.
Ⅲ 暗褐色砂質土.①～③と近似するが，細礫がほとんど混じらない.
①～④は SC-544,⑤は SK-545 埋土．ただし,①～③はⅢ層に類似するため，SC-544 上のⅢ層部分として調査.
① 細礫～中礫が多く混じる暗褐色砂質土.
② 細礫が混じる黒褐色砂質土．径 5 ～ 10 ㎜の褐色土の塊がごく少量混じる.
③ 黒褐色砂質土．ややサクサクした質感.
④ 平面的にも確実に SC-544 の埋土と確認できた黒褐色砂質シルト．径 1 ～ 2 ㎝のにぶい黄褐色シルト塊が混じり，わずかに灰色みをおびる．炭化物片が出土.
⑤ SK-545 埋土部分．黒褐色砂質シルトで，径 1 ～ 2 ㎝のにぶい黄褐色シルト土塊がやや多く混じる．全体的に灰色味をおび，下部から炭化物片が多く出土.

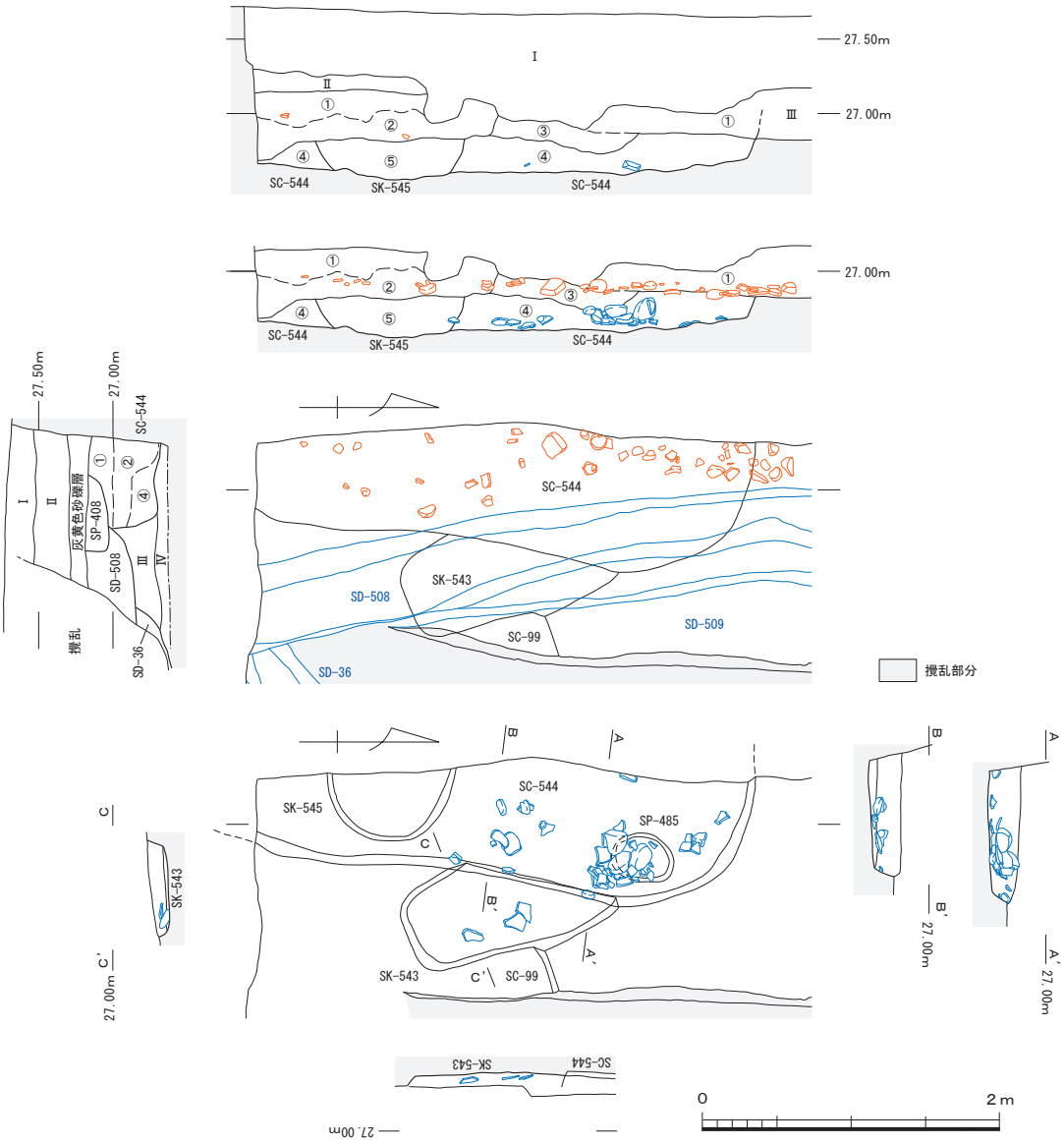


図 96　SC-544，SK-543・545 遺構実測図（縮尺 1/50）

が多く混じることから，Ⅲ層とは明確に区分できたものの，上半部ではⅢ層にも砂礫が混じり始め白っぽく変化していくために区分はできなかった。①層とⅢ層の上半部は後世に攪拌されている可能性が高い。④層はわずかに灰色みをおびる黒褐色砂質シルトで，径 1 ～ 2㎝のにぶい黄褐色シルト塊が少量混じる。

出土遺物は，前述したように，埋土上部の①～③層と，④層からそれぞれ出土している。①～③層を掘り形上部，④層を下部として出土遺物を報告する。

①掘り形上部出土の遺物

弥生土器，磨石，敲石，台石が出土している（図 97・100）。調査区壁面で SC-544 を切ることを確

認できたSK-545の遺物が一部混じり込んでいる可能性もあるが，出土地点を確認でき，SC-544の掘り形上部と確定できた遺物だけを報告する。図97-1～7は壺である。1（図版81-3）は，ラッパ形にひろがる口縁部の上端に粘土紐を貼り付け，口縁端面を拡張して2条の浅い凹線文を1条ずつ施す。2は厚手の口縁部で，横ナデ調整で口縁部内面を窪ませ，端部を上方に摘み上げる。3はラッパ形に大きくひろがる口縁部をもち，口縁部の下端に粘土紐を貼り付け，断面三角形に成形する。4・5は肩部～頸部の破片で，4（図版81-7）は円筒形の頸部で，肩部との境界に断面三角形の突帯を貼り付ける。5の頸部の付け根には，刷毛目工具の木口部を押捺して列点文を施文する。6(図版81-9)は「く」字形に口縁部が屈折する無頸壺と考える。器壁が薄い小型品である。7（図版81-8）は口縁部が緩やかに「く」字形に屈曲する。口縁端部に向かって次第に厚くなり，端面は面取りされ，全体として楔形の断面形を呈する。口縁部の屈曲部に，刷毛目工具の木口部を押捺して「ノ」字形の短斜線文が施される。また，口縁部外面には，成形時の粘土の撚れや工具痕が残る。8（図版81-6）は甕の胴上半部の破片である。胴部の張りは弱い。口縁屈曲部に細い粘土紐を貼り付け，平織りの布を巻いた爪先で押し潰すように刻目を施す。9（図版81-4）は高坏の脚部破片。脚端部を上方に跳ね上げ,端面に横ナデ調整で凹線文を1条めぐらし，さらに上方に細い棒状工具で8条の沈線を施文する。10（図版81-5）は鉢で，断面楕円形の粘土紐を巻きつけて玉縁状の口縁部に成形する。同様な断面楕円形の玉縁状の口縁をもつ鉢は,SC-33（図41-17），SC-99（図82-3）で出土している。11は壺の底部破片で，厚い平底である。12・13は甕の底部破片。若干上げ底につくり，裾部を「ハ」字形に小さくひろげる。

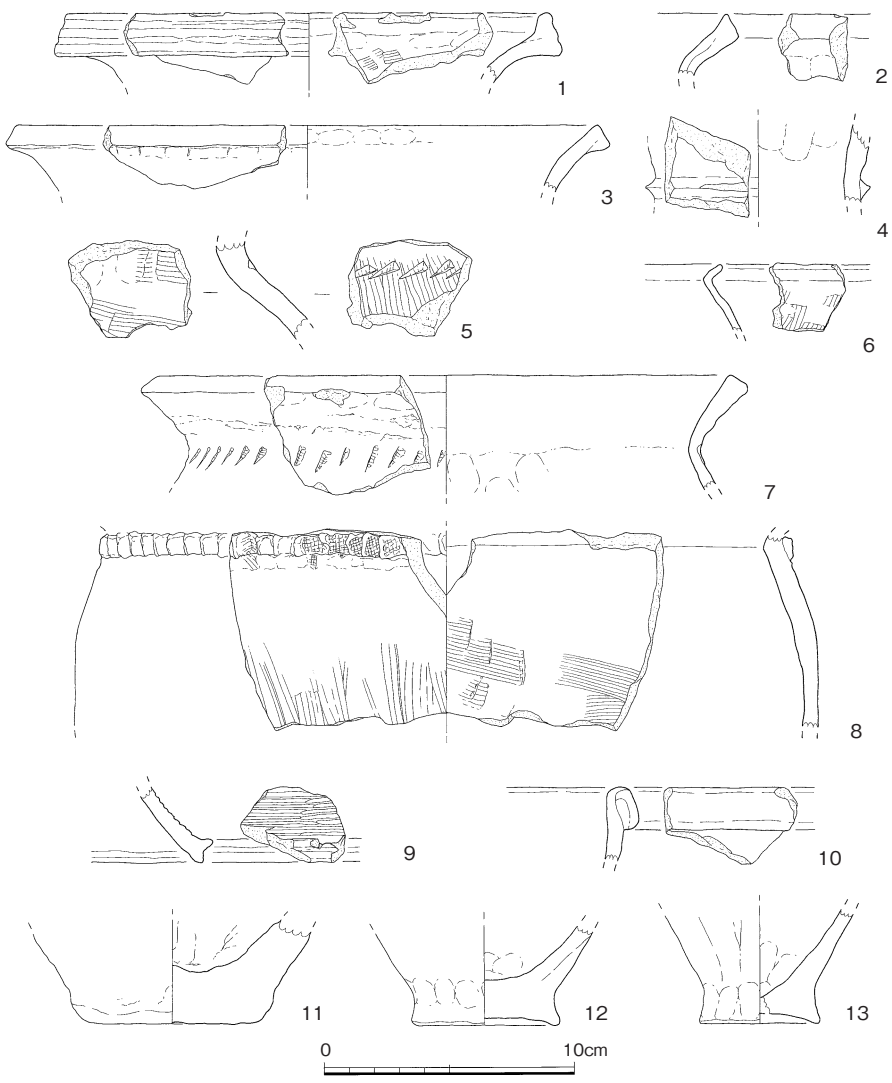


図97　SC-544掘り形上部出土土器実測図（縮尺1/3）

以上の土器に混じり，磨石，敲石，台石が出土している（図100-1～3・5）。1（図版142-5）は花崗岩を利用した磨石で，一面に擦痕が残る。重量は372gを測る。2・3は敲石。2（図版144-1）は直方体に近い礫岩を用い，上下二面に敲打痕が残る。重量は214.4gを測る。3は，扁平な亜円礫の下端部に敲打痕が残る。重量は2155gを測る。

5は扁平な砂岩の亜円礫を利用した台石の破片で，主面に敲打による浅い凹みを観察できる。残存重量は1066.9gを測る。

②掘り形下部出土の遺物

掘り形下部から出土した遺物は，北東側から投げ込まれたような状態で出土している（図98～100）。図98-1は「ハ」字形に窄まる頸部から外反する口縁部がつく壺と考える。口縁端部に横ナデ調整を施し，幅のある端面に仕上げている。2は口縁部を強く外反させる壺で，端部は横ナデ調整で上方に摘み上げる。3（図版82-1）は無頸壺である。ほぼ完形に復元できた。球形の丸みをおびた胴部に，「く」字形に屈折させる口縁部がつく。口縁端部を上方に小さく折り曲げ，端面を拡張し，2条の凹線文を施す。口縁屈曲部には細い粘土紐を貼り付け，板状工具で粘土紐を押し潰すように押捺して刻目を施す。肩部には刷毛目工具の木口部を押捺して，「ノ」字形の短斜線文を二段に施文する。ただし，上方の文様は部分的で一周しない。4・5は接合しないが，同一個体である。4（図版83-4）の短く外反する口縁部が，5（図版84-1）の丸みをおびた胴部から緩やかに反転しながらのびる頸部に接合する。外面はナデ調整，内面には成形時の指頭痕が多く残り，比較的粗雑なつくりである。

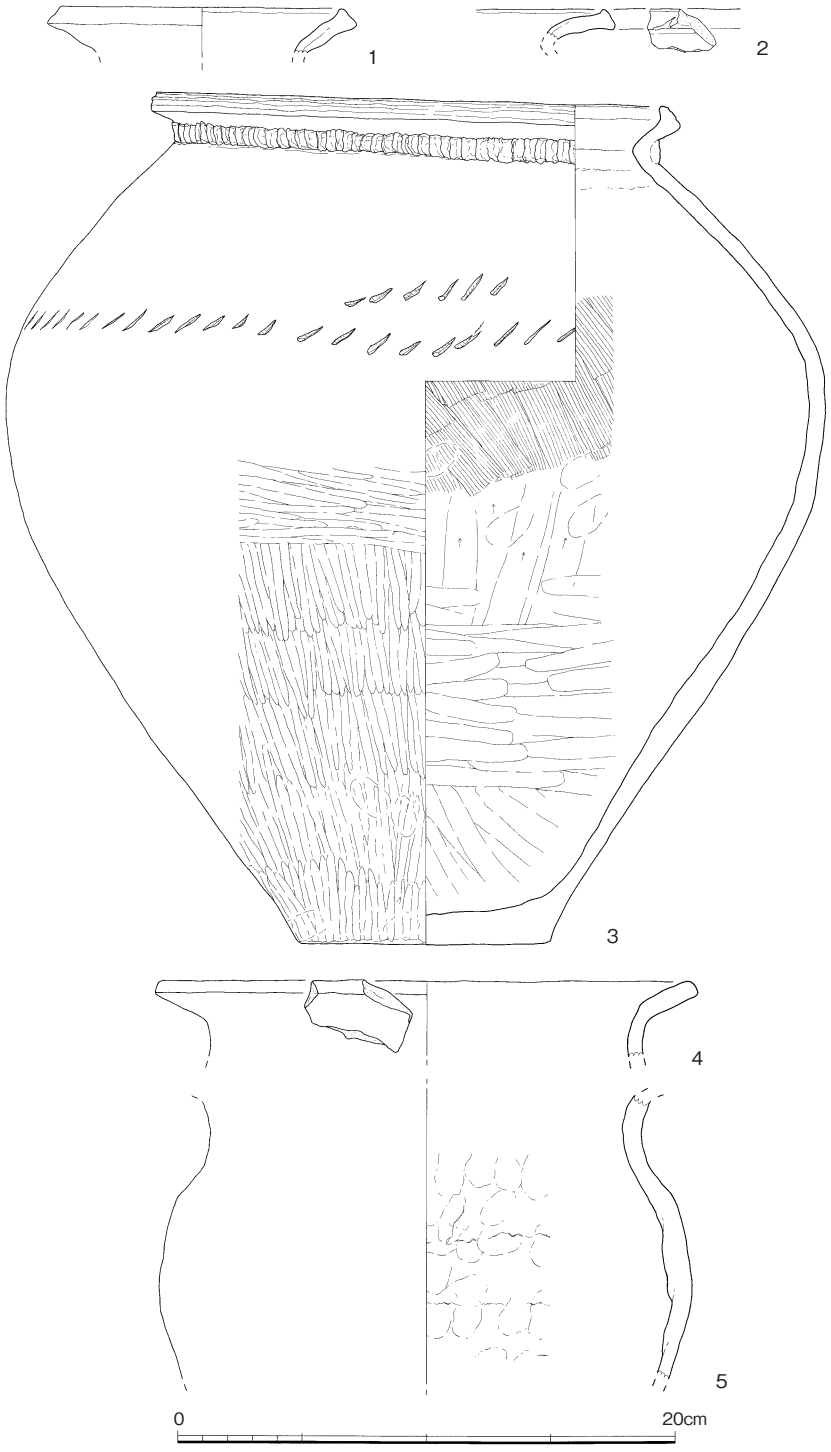


図98　SC-544掘り形下部出土土器実測図1（縮尺1/3）

図99-1～4・6（図版83-1）は，東南部九州地域に類例を見い出せる。1（図版83-1）は中溝式系土器の甕で，砲弾形の胴部から如意形に口縁部が外反する。胴部上半に断面三角形の突帯をめぐらし，篦状工具で細く小さな刻目を施す。2（図版83-3）・3（図版83-2）は下城式系土器の甕で，直立する口縁部をもち，若干下がった位置に断面三角形の突帯を2条貼り付け，細い棒状工具もし

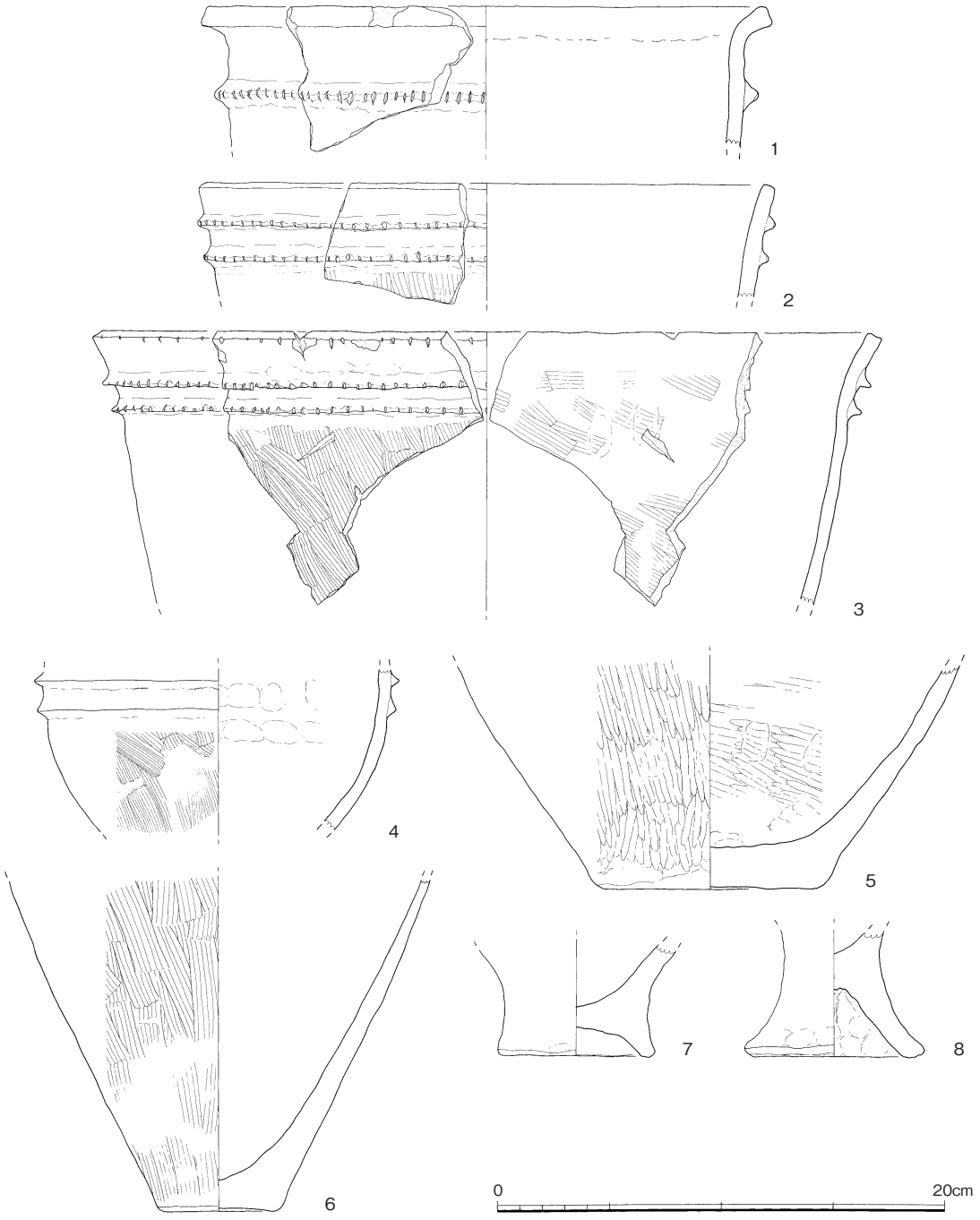


図 99　SC-544 掘り形下部出土土器実測図 2（縮尺 1/3）

くは篦状工具で刻目を施す。胎土には金雲母が含まれる。4（図版 84-3）は胴部破片である。2 条の断面三角形の突帯を貼り付けている。5 は壺の底部破片。球形の胴部に突帯をめぐらす壺は愛媛県域では類例はなく，4 も東南部九州系の土器と考えられる。6（図版 84-2）は，接合しないが胎土や色調から 3 と同一個体と考えた。やや厚めの平底から，直線的にひろがる胴下半部がつく。7 は円筒形に近い上げ底の破片。8 は裾部が「ハ」字形にひろがり，低脚の台付鉢と考える。図版 84-4 は甕の胴下半部の破片で，外面に縦方向の刷毛目調整，内面にはナデ調整が施される。内面には炭化物が付着する。

他に，図 100-4 は花崗岩の亜円礫を利用した台石である。重量 2940g を測る。

掘り形上部から出土した土器は，弥生時代中期

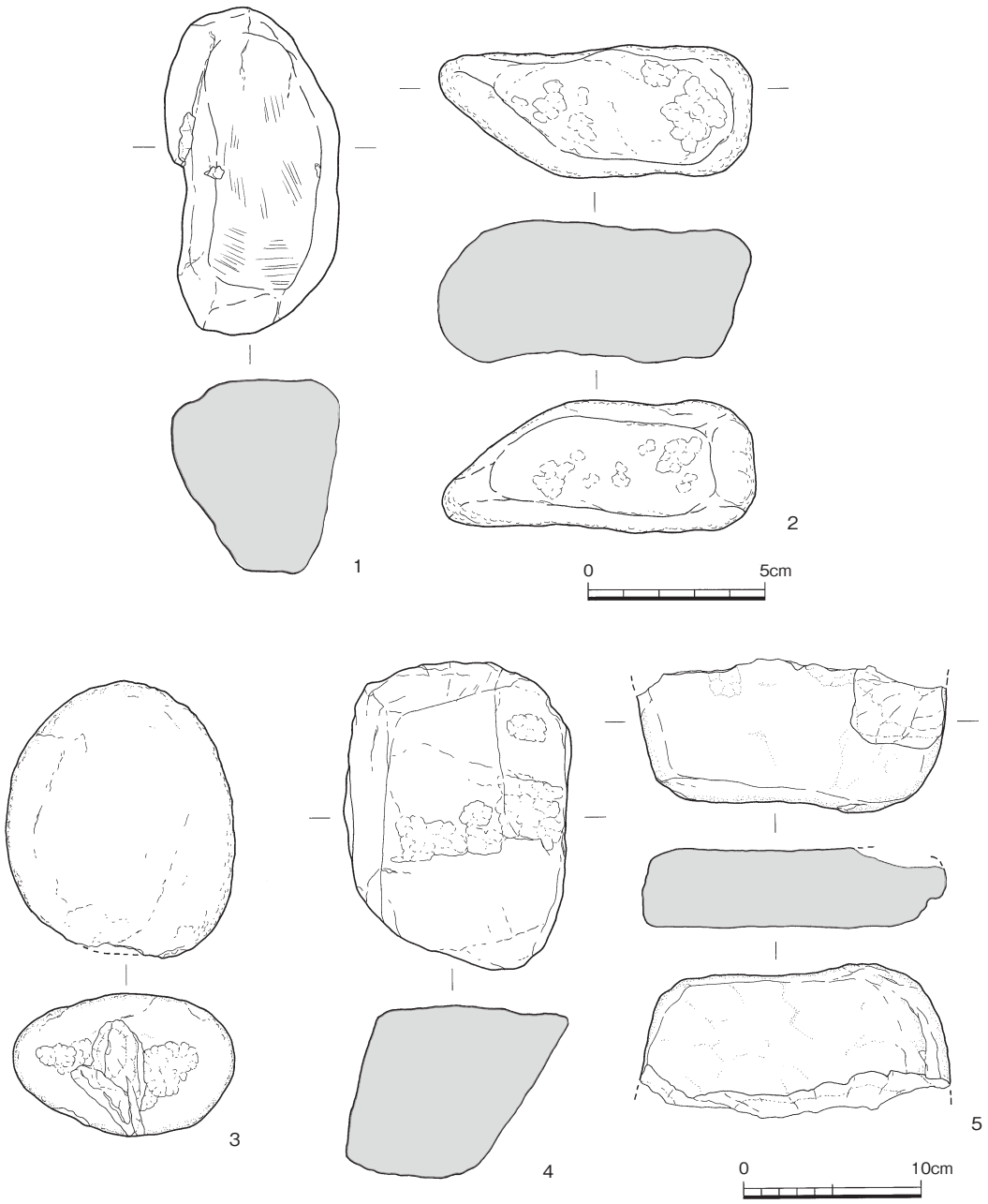


図 100　SC-544 出土石器実測図（縮尺 1/2，1/4）

後葉～後期初頭の時間幅に収まる。掘り形下部から出土した土器も同様である。SC-544 の廃絶時期は弥生時代後期初頭に求めることができる。

546号竪穴建物（SC-546，図101・102，図版84）

調査区北西角の DZ-31 区に位置する。調査区北西角を土層調査のために掘り下げ中に確認できた。掘り形埋土は光沢のある極暗褐色シルトで，下部には径 3 ～ 4㎝のにぶい黄褐色砂質シルト塊が少量混じる。掘り込まれたⅣ層は基盤がやや茶色みをおびた暗褐色シルトであり，比較的はっき

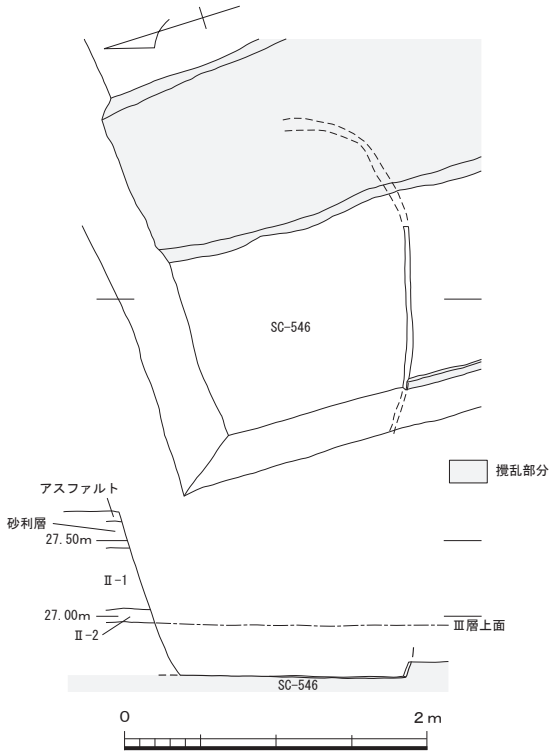


図 101　SC-546 遺構実測図（縮尺 1/50）

りと掘り形の輪郭を確認できた。掘り形の大半は調査区外にあり，平面形は不明である。Ⅳ層上面からの深さは 10cmほどを測り，壁面の掘り込みが垂直に近く，底面もほぼ平坦であるので，竪穴建物と考えた（図 101）。

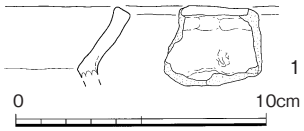


図 102　SC-546 上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺 1/3）

出土遺物は，SC-546 の掘り形を検出したⅢ層最下面から出土した甕の口縁部と胴部の破片だけである（図 102-1，図版 84-5）。図 102-1 は古墳時代後期の土師器の甕である。内彎しながら「く」字形に屈曲する口縁部をもつ。口縁端面は横ナデ調整で面取りされている。図版 84-5 は弥生土器の甕の胴部破片で，外面には縦方向の刷毛目調整を施す。内面は器表面が荒れ調整は不明である。外面には煤が付着する。

以上，掘り形検出面から出土した遺物しかないが，弥生土器と古墳時代後期の土師器がみられる。古墳時代後期の土師器甕（図 102-1）を指標として，SC-546 の廃絶時期は古墳時代後期と捉えておく。

2　掘立柱建物

74号掘立柱建物（SB-74，図103・104，図版25）

A区北側，B区との境界付近のDW～DY-26・27区に位置する。周辺ではⅣ層上面で，SC-78やSD-21に加えて，多くの小穴・柱穴が出土した。その中で，SP-258・266では立柱痕跡を確認できた。周囲で両柱穴と共通する大きさや深さの掘り形をもつ柱穴を探し，SP-256～259・487，B区SP-595・705から構成される2×3間の掘立柱建物を復元した（図103・104）。SP-257はSD-21に切られ，SP-258はSC-78を切る。

梁行長3.78～3.98m，桁行長6.34～6.48mの建物で，南側の桁行中央のSP-259・258間は1.75m，SP-258・257間は2.2m，東側の梁行中央のSP-256・487間は1.7m，SP-257・256間は2.08m，西側の梁行中央のB区SP-595・705間は2.05mを測る。

SP-256（図104，図版25-1）は，径86～88cm，深さ50cmの掘り形もつ。攪乱溝で破壊され不整円形の平面形となっている。掘り形上面で柱の抜き跡を確認できた。推定される立柱の径は20cm前後である。掘り形下部底面を極暗褐色砂質シルト，にぶい黄褐色シルト，浅黄色砂質土が縞状に互層となる④層で埋め，柱を立て，親指先大の浅黄色砂質土塊がみられる極暗褐色砂質シルトの③層，極暗褐色砂質シルトと親指先大のにぶい黄褐色シルト塊が多く混じる暗褐色砂質シルトが縞状に互層となる②層で埋める。

SP-257（図103，図版25-2）は，北東部を塹壕で破壊されているが，推定径80cm前後，深さ42～48cmの円形の掘り形をもつ。ただし，SP-257は，後述するようにSB-548を構成する柱穴でもある。SP-257では，土層断面が降雨のために一部が崩れてしまい，柱穴の重複を観察できなかった。しかし，底面の東西で深さが異なり，2つの柱穴が重複していることが考えられる。その場合，推定されるSB-74の柱位置がSP-257の掘り形でも東に偏っているため，SB-74はSB-548に先行する可能性が高い。

SP-258（図103，図版25-3）は，長径76cm，短径67cm，深さ56cmの長円形の掘り形をもち，上面で径24cm，下部では径10cmの立柱痕跡を確認できた。底面を極暗褐色砂質シルトににぶい黄褐色シルトが薄い縞状と混じる④層で埋め，柱を立て，極暗褐色砂質シルトににぶい黄褐色砂質シルトが厚さ1cmほどの縞状にみられる③層で固定する。

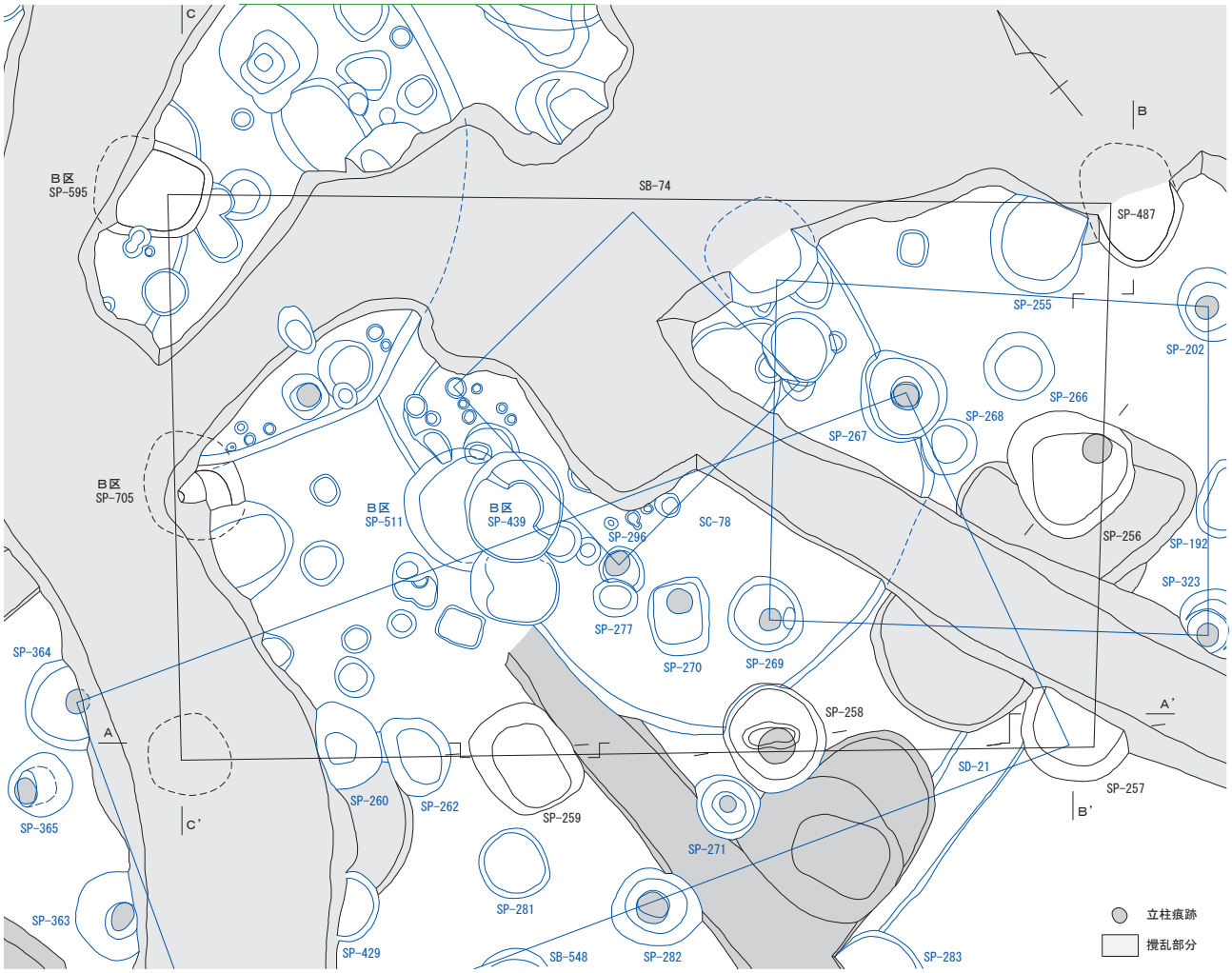
SP-259（図103，図版25-4）は長径76cm，短径63cm，深さ52cmの隅丸長方形の掘り形をもつ。掘り形中位で先端が尖りぎみの径14cmほどの立柱痕跡を確認できた。にぶい黄褐色シルトが縞状にみられる極暗褐色砂質シルトの中に，柱を立てている。柱は抜き取られ，にぶい黄褐色シルト塊が混じる極暗褐色砂質シルトが流れ込む。

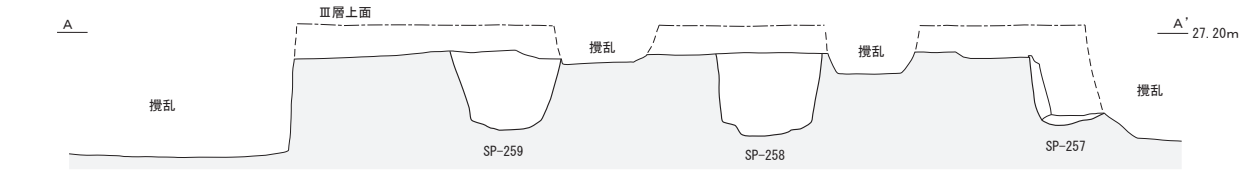
SP-487は，北半部を塹壕で大きく破壊されているが，推定長軸長88cm，短軸長65cm，深さ48cmの不整楕円形の掘り形をもつ。

B区SP-595は，西半部を塹壕で破壊されている。残存長径55cm，短径68cm，深さ35cmの不整な長円形の掘り形をもつ。

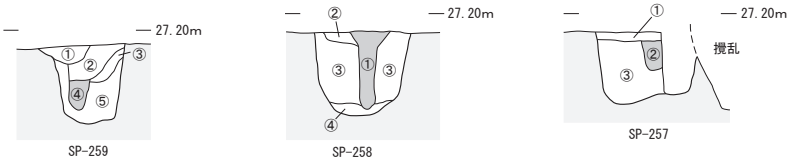
B区SP-705は，掘り形の大半を塹壕で破壊されている。推定径70cm前後，深さ53～54cmの不整円形の掘り形をもつと考えられる。

SB-74から出土した遺物は少ない。SP-256からは弥生土器の小片が出土し，その中には，甕の底部破片が含まれる。裾部が「ハ」字形にひろがる高台状の底部で，弥生時代中期後葉～後期前葉に一般的に見られるものである。SP-257からは弥生土器の胴部小片が10点ほど出土している。外面に細密条線の擦過痕が残り，内面をケズリ調整する甕の胴部破片，内外面に目の細かな刷毛目調整を施す甕の胴部破片がある。SP-259からは，胴部破片7点を含む計10点ほどの弥生土器の胴部小片が出土している。しかし，いずれも時期を比定できる資料ではない。なお，SP-259検出面直上のⅢ層最下面からは，外面をケズリ調整，内面をナデ調整する縄文時代後期～晩期の粗製深鉢の胴部破片が出土している。そして，B区SP-595からは須恵器の破片が出土している。





SP-257
① 極暗褐色砂質シルト．
② 立柱痕跡．暗褐色砂質シルト．にぶい黄褐色シルト塊がごく少量混じる．
③ 極暗褐色砂質シルトと，親指先大のにぶい黄褐色シルト塊が多く混じる暗褐色砂質シルトが縞状に互層堆積．



SP-258
① 立柱痕跡．極暗褐色砂質シルト．小豆大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる．
② 極暗褐色砂質シルト．にぶい黄褐色シルトが薄い縞状にみられる．
③ 極暗褐色砂質シルト．にぶい黄褐色砂質シルト塊が厚さ1㎝ほどの帯状に互層状態でみられる．
④ ②と共通する．

SP-259
① 極暗褐色砂質シルト．親指先大のにぶい黄褐色砂質シルトが点々と混じる．
② 極暗褐色砂質シルト．小豆大のにぶい黄褐色シルトが点々と混じる．
③ ①と類似するが，砂質が強い．
④ 立柱痕跡．先端部分のみが残存．極暗褐色砂質シルト．
⑤ 極暗褐色砂質シルト．縞状ににぶい黄褐色シルトが互層で混じる．

図 103　SB-74 遺構実測図 1（縮尺 1/50）

柱穴から出土した遺物は弥生土器が多いが，B区 SP-595 からは須恵器の破片が出土し，SB-74 の柱穴 SP-257 は，古墳時代後期の SC-69 を切る SD-21 に切られる。また，柱穴 SP-258 は弥生時

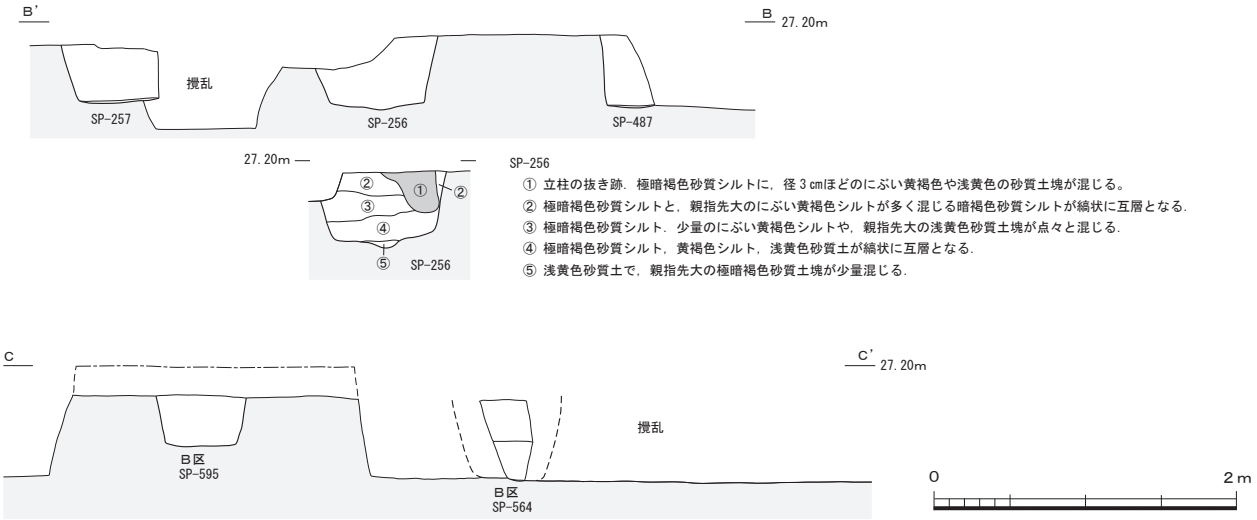


図 104　SB-74 遺構実測図 2（縮尺 1/50）

代後期前葉の SC-78 を切る。さらに，古墳時代後期の SB-548 に切られている可能性が高い。したがって，SB-74 は古墳時代後期の掘立柱建物と捉えることができる。

548号掘立柱建物（SB-548，図105・106，図版25）

A 区北側，B 区との境界付近の DX・DY-26・27 区に位置する。周辺ではⅣ層上面で，SC-78 や SD-21，SB-74 に加えて，多くの小穴・柱穴が出土した。その中で，SP-267・282・364 では立柱痕跡を確認できた。周囲で共通する大きさや深さの掘り形をもつ柱穴を探し，SP-257･267･282･364･B 区 SP-439 から構成される 1 × 2 間の掘立柱建物を復元した（図 105）。

梁行長 2.67 ～ 2.76 m，桁行長 6.1 ～ 6.35 m を測り，東側の梁行の SP-257・267 間は 2.67 m，北側の桁行の SP-267・B 区 SP-439 間は 2.9 m，SP-364・B 区 SP-439 間は 3.2 m，南側の桁行の SP-257・282 間は 3.18 mである。SP-257 は SD-21 に切られ，SP-267 は SC-78 を切る。

SP-257 は前述したように，SB-74 と SB-548 の柱穴が重複しているものと考えられる。SB-548 に伴う立柱位置は南に偏っているため，図 105 で図示した土層断面は，SB-548 に伴う柱穴部分に当たる。6 ～ 8㎝ほど掘り下げた時点で，径 16cm 前後の立柱痕跡を確認できた。掘り形中位～下部は，極暗褐色砂質シルトと親指先大のにぶい黄褐色シルト塊が多く混じる暗褐色砂質シルトが縞状にみられる③層で埋められている。

SP-267（図版 25-6）は径 62 ～ 67㎝，深さ 36㎝の不整円形の掘り形をもち，底面中央は 9㎝ほど円形に窪む。立柱の痕跡である。検出面から 12㎝ほど掘り下げた時点で，径 16 × 18㎝の立柱痕跡を確認できた。柱は基盤のⅣ層に打ち込まれ，浅黄色砂質土が少量混じる極暗褐色砂質シルトの③層を埋めて固定されている。掘り形上部には細礫～中礫が混じる極暗褐色砂質シルトの①層が流れ込む。

SP-282（図版 25-5）は東端を塹壕で一部破壊されている。長径 63㎝，短径 53㎝，深さ 40㎝を測る不整円形の掘り形をもつ。底面中央は柱を据えるため 5㎝ほど円形に窪む。立柱痕跡は検出面で径 28㎝，下部は径 17㎝で，先端がやや尖りぎみである。柱を固定している掘り形埋土は，下部から極暗褐色砂質シルトに縞状に灰黄色砂質土が多く混じる④層，極暗褐色砂質土に親指先大の浅黄色～灰黄色の砂質土塊が点々と混じる③層，極暗褐色砂質シルトに親指先大のにぶい黄褐色砂質シ

図 105　SB-548 遺構実測図（縮尺 1/50）

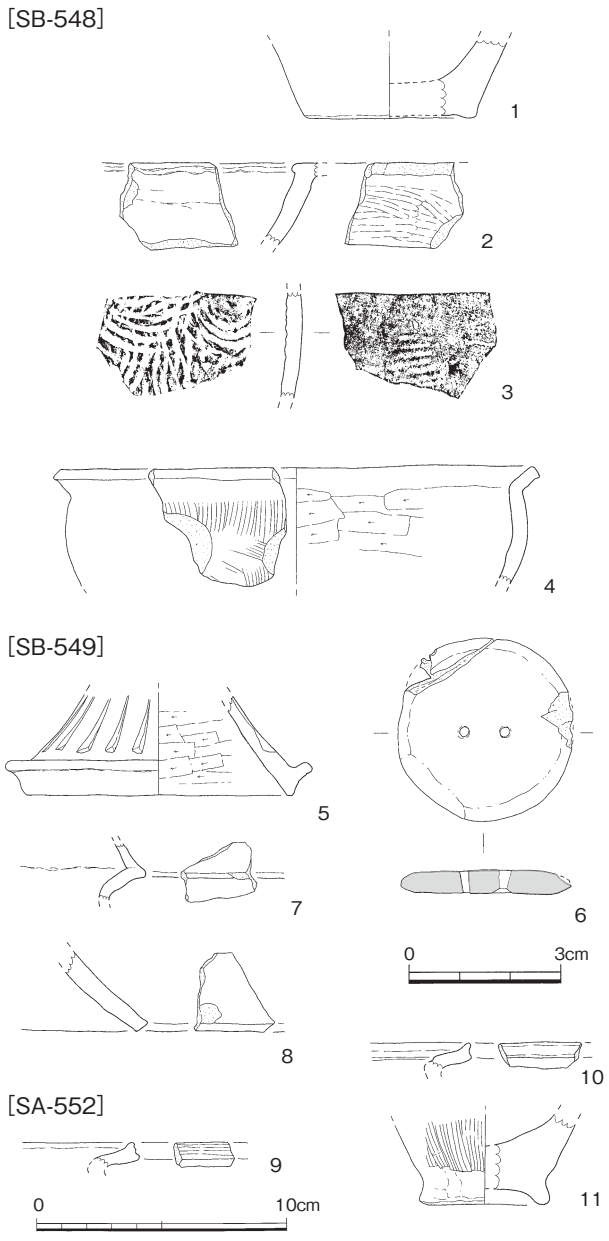


図 106　SB-548・549，SA-552 出土土器、石製品実測図（縮尺 1/3，2/3）

ルト塊が非常に多く混じる②層である。

SP-364 も東半部を塹壕で破壊されている。推定径 64cm，深さ 28cmの円形の掘り形と考えられる。掘り形の中央で径 18 ～ 20cmの立柱痕跡を確認できた。掘り形下部を締まりのある暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトが縞状にみられる③層で埋め，柱を立て，小豆大のにぶい黄褐色砂質シルト塊を含む細礫が混じる暗褐色砂質シルトの②層で埋める。

B 区 SP-439 は長径 74cm，短径 68cm，深さ 46 ～ 48cmの長円形の掘り形をもつ。

遺物としては，SP-267 の立柱痕跡②層から弥生土器の甕の底部破片（図 106-1）と胴部小片，柱を抜き去った後に流入した①層から弥生土器の胴部小片 1 点が出土している。掘り形埋土からは，外面をミガキ調整，内面を刷毛目調整する弥生土器の甕の胴部破片，胴部小片 4 点が出土している。また，SP-282 の立柱痕跡の①層からは弥生土器の胴部小片 5 点が出土。さらに，SP-364 からは須恵器の胴部破片（図 106-3）と弥生土器の高坏（図 106-2）や胴部の破片が出土している。2 は坏部上半の破片で，口縁部に強い横ナデ調整を施すため，内側には突起状の粘土の撚れが生じている。外面にはミガキ調整，内面にはかなり強いナデ調整を施す。3 の外面には平行条線のタタキ目，内面には同心円文の当て具痕が残る。外面には厚く自然釉がかかる。B 区 SP-439 からは，口縁部を短く「く」字形に屈曲させる弥生時代後期の鉢が出土（図 106-4）。

以上，切り合い関係と，SP-364 から須恵器の破片が出土していることから，SB-548 は古墳時代後期に比定できる。

549号掘立柱建物（SB-549，図106・107，図版25・84・148）

A 区北側，B 区との境界付近の DW・DX-26・27 区に位置する掘立柱建物である。SP-202・269・323 で立柱痕跡を確認でき，周囲で共通する大きさや深さの掘り形をもつ柱穴を探し，SP-202・323・269・B 区 SP-443 から構成される 1 × 1 間の掘立柱建物を復元した（図 107）。

梁行 2.3 ～ 2.4 m，桁行 2.98 ～ 3.04 m を測り，SP-269 は SC-78 を切る。また，SP-323 は SP-198 に切られる。

SP-202 は，長径 54cm，短径 48cm，深さ 31cmほどの不整長円形の掘り形をもつ。ほぼ中央で径 16cmの立柱痕跡を確認できた。ただし，降雨のため上層観察用の壁面が崩れてしまい，土層断面図は作成できなかった。

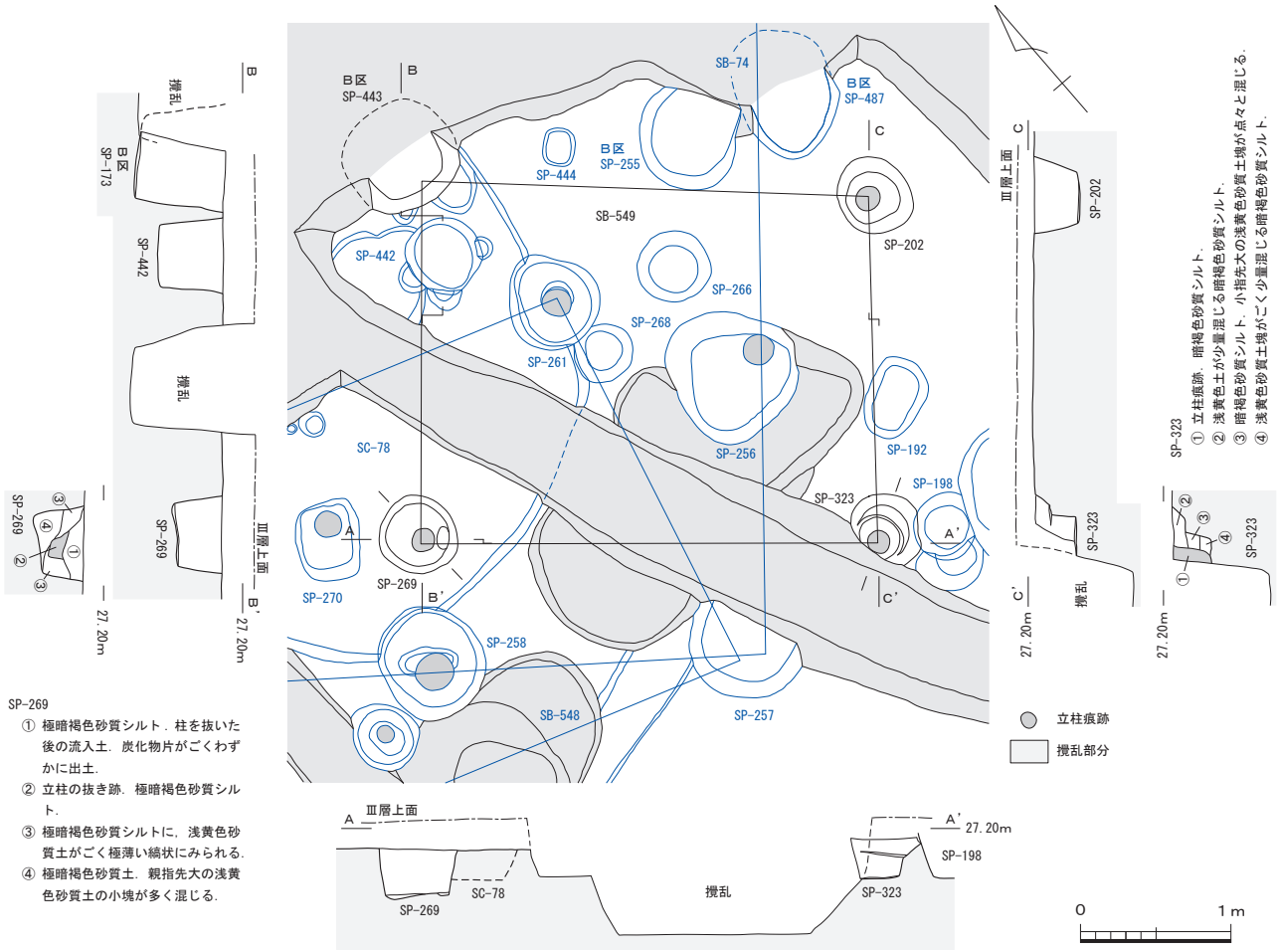


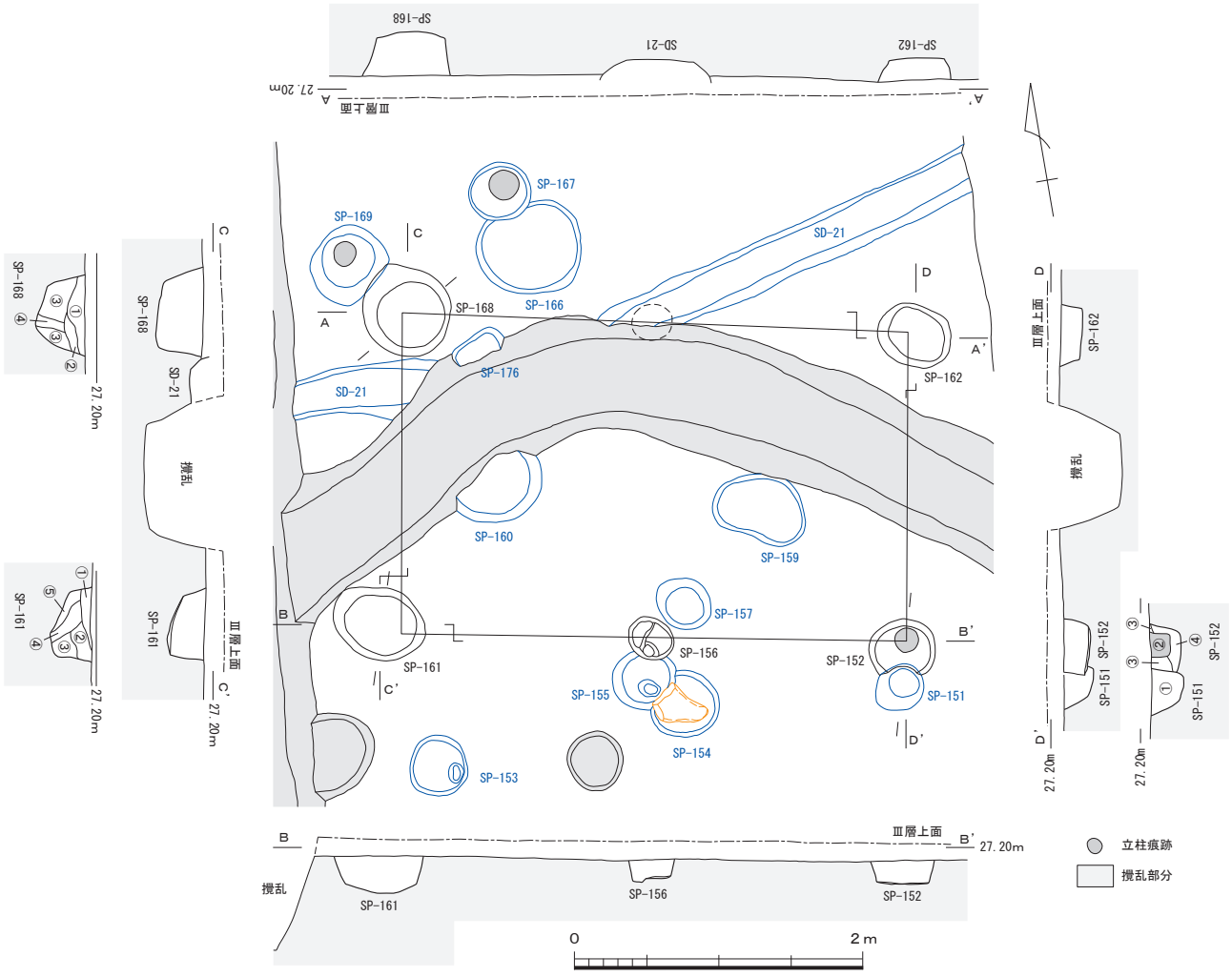
図 107　SB-549 遺構実測図（縮尺 1/50）

SP-269（図版 25-7）は，径 50 ～ 53cm，深さ 29 ～ 33cmの不整円形の掘り形をもつ。掘り形中位で，径 14 × 15cmの柱の抜き跡を確認できた。柱を固める③層は極暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土が薄い縞状に混じり込む。柱を抜き去った跡に流入した①層は，極暗褐色砂質シルトで，炭化物片が少量出土している。

SP-323 は，西半部を塹壕で破壊されている。推定径 42cm前後，深さ 27cmの円形の掘り形をもつ。やや南西寄りで径 15 ～ 17cmの立柱痕跡を確認できた。掘り形埋土は，暗褐色砂質シルトで，小指先大の浅黄色砂質土塊が混じる。

B 区 SP-443 は，北半部の大部分を塹壕で破壊されている。推定径 70cmほど，深さ 60cmほどの円形の掘り形と考えられる。

SB-549 の各柱穴からは，少量の弥生土器や滑石製有孔円盤が出土している。SP-269 では，流入土である①層から弥生土器の胴部小片 1 点，掘り形埋土から弥生土器の胴部小片 5 点，柱抜き跡である④層から弥生時代後期後葉の複合口縁壺（図 106-7）と胴部小片に加えて，埋土中から弥生土器の胴部小片 10 数点が出土している。SP-323 の掘り形埋土からは，高坏（図 106-8）と胴部小片 2 点，底面から外面にナデ調整，内面に擦過調整を施した壺の胴部下半部の破片と胴部小片 4 点が出土している。8 は「ハ」字形にひろがる高坏の脚端部の破片で，脚端部周辺には横ナデ調整を施し，外面には擦過状の調整痕跡が残る。B 区 SP-443 からは，弥生土器の破片とともに滑石製有孔円盤が出土した（図 106-5・6）。5（図版 84-6）は低脚の高坏で，脚端部を斜め上方に大きく摘み出し，未貫通の細長い三角形の透かし孔を施す。6（図版 148-4）は緑灰色の滑石で作られた有孔円盤で，径 3.5 ～ 3.65㎜，厚さ 4.5㎜を測る。



SP-152
① 暗褐色砂質シルト．SP-151 埋土部分．
② 立柱痕跡．極暗褐色砂質シルト．小指先大の浅黄色土塊が多く混じる．炭化物片が少量出土．
③ 極暗褐色砂質シルト．
④ 極暗褐色砂質シルト．親指先大～径 4cm の大小の浅黄色砂質土塊が多く混じる．

SP-161
① 極暗褐色砂質シルト．にぶい黄褐色砂質土が少量混じる．
② 極暗褐色砂質シルト．
③ にぶい黄褐色砂質シルト塊の間に，極暗褐色砂質シルトが混じる．
④ 極暗褐色砂質シルト．小指先大のにぶい黄褐色砂質土塊が混じる．
　にぶい黄褐色砂質土塊は北側から流れ込んだ状態．
⑤ 極暗褐色砂質シルト．にぶい黄褐色砂質シルトが縞状に多くみられる．

SP-168
① 極暗褐色砂質シルト．小豆大のにぶい黄褐色シルト塊が少量混じる．
② 極暗褐色シルト．小豆大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が少量混じる．
③ 親指大～径 3cm の極暗褐色シルト塊とにぶい黄褐色シルト塊が混じる．
④ 極暗褐色シルト．②に類似するが，やや粘性が高い．

図 108　SB-551 遺構実測図（縮尺 1/50）

重量は 10.7 g。中央に径 2㎜の小孔を片側から穿孔する。この他，弥生土器の胴部小片 5 点が出土している。

以上，出土遺物は弥生土器ばかりであるが，B 区 SP-443 から出土した滑石製有孔円盤（図 106-6）から，SB-549 は古墳時代後期の掘立柱建物と考える。

551号掘立柱建物（SB-551，図108）

調査区北東角の DV・DU-26 区で出土した SP-152 では立柱痕跡を確認できた。周囲で共通する大きさや深さの掘り形をもつ柱穴を探し，SP-152・156・161・162・168 から構成される掘

立柱建物を復元できた(図108)。梁行長2.13～2.2ｍの1間，桁行長3.5ｍの2間の建物で，南側の桁行のSP-152・156間は1.86ｍ，SP-156・161間は1.64ｍを測る。

SP-152は，SP-151に切られる。径46～48cm，深さ22cmの円形の掘り形をもつ。中央北寄りで径17～18cmの立柱痕跡を確認できた。掘り形埋土下部は径1～4cmの浅黄色砂質土塊が多く混じる極暗褐色砂質シルトで，上部は極暗褐色砂質シルトで埋められている。

SP-156は，桁行中央の若干小ぶりの柱穴である。長径33cm，短径28cm，深さ13cmの長円形の掘り形をもち，底面の西側が4cmほどさらに窪む。埋土は極暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。

SP-161は長径65cm，短径51cm不整な長円形の掘り形をもつ。底面は南半部が緩やかに窪み，深さは25～27cmほどである。土層断面から柱は抜き取られていると判断した。埋土は極暗褐色砂質シルトを基本とし，にぶい黄褐色砂質土や塊が縞状に混じる。

SP-162は，長径52cm，短径41cm，深さ15cmの不整な長円形の掘り形をもつ。埋土は極暗褐色砂質シルトである。

SP-168は，SP-169に切られる。径60～62cm，深さ29cmの円形の掘り形をもつ。立柱は抜き取られていると考えられ，径が小さく細ってはいるが，極暗褐色シルトの④層は柱の抜き跡と判断できる。極暗褐色砂質シルトの②層，親指大～直径3cmの極暗褐色シルトとにぶい黄褐色シルトの塊が混じりあう③層，にぶい黄褐色砂質シルトが縞状にみられる極暗褐色砂質シルトの⑤層は掘り形埋土に当たる。黄褐色シルト塊が少量混じる極暗褐色砂質シルトの①層は，柱を抜き去った後の流入土である。

SB-551の各柱穴からは弥生土器が出土している。SP-152では，掘り形埋土から7点，立柱痕跡から2点の弥生土器の胴部破片，炭化物片，SP-156からは弥生土器の胴部小片4点，SP-161では「く」字形に外反する甕の口縁部小片を含む弥生土器の小片が10数点，SP-162からは，大型壺を含む弥生土器の胴部破片6点，SP-168では，埋土①層から弥生土器の小片2点，②～⑤層から小片1点など，大型壺を含む弥生土器の胴部小片5点ほどが出土している。しかし，いずれも小片ばかりで，SB-551の時期を限定できる資料ではない。そのため，SB-551の時期は不明とせざるをえない。

3　柵列

552号柵列（SA-552，図106・109）

調査区東北部のDY・DZ-26 ～ 31区には，立柱痕跡を確認できたSP-379・381・386・399が位置する。南北のSP-379とSP-399を繋ぐ線上には，南からSP-381・486・384・528・386・395が並び，南側の延長線上にはSP-378が位置する。塹壕や後世の攪乱で破壊された部分もあるが，ほぼ等間隔に並ぶ傾向を読み取れることから，柵列SA-552とした（図109）。

SP-378は，SA-552南端に位置し，DZ-27区のSC-71床面で検出できた。攪乱部で北半部を破壊され，西半部はSD-73と重複する。SD-73との先後関係は確認できなかった。推定径38cm前後の円形の掘り形をもつと考えられる。深さは26cmほどの擂り鉢状を呈する。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。

SP-379はDZ-27区のSC-71床面で検出できた。南側のSP-378との間隔は約1.4 mを測る。長軸長50cm，短軸長38cm，深さ12 ～ 14cmの不整な楕円形の掘り形をもつ。掘り形のほぼ中央で，径13 × 16cmの楕円形の立柱痕跡を確認できた。埋土は極暗褐色～暗褐色の砂質シルトで，にぶい黄褐色シルトの小塊が混じる。

SP-381はDZ-28区に位置する。SD-73と切り合うが，先後関係は確認できなかった。長径42cm，短径35cmの不整長円形の掘り形をもつ。深さ14 ～ 25cmを測り，東側が深くなる擂り鉢状を呈する。掘り形中位で径9cm前後の立柱痕跡を確認できた。柱は抜き取られ，細礫が多く混じる暗褐色砂質シルトの①層が流れ込む。下部の②層には親指先大の浅黄色砂質土塊が多く含まれる。

SP-384はDY-29区に位置する。SD-73と切り合うが，先後関係は確認できなかった。北側のSP-528との間隔1.7 ～ 1.8 m，南側のSP-486との間隔2.2 mを測る。推定長径55 ～ 60cm，短径52cmの不整な長円形の掘り形をもつ。深さは33cm，西半部は円形の小穴状にさらに10cmほど窪む。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土やにぶい黄褐色砂質土が縞状に互層状態で堆積する。

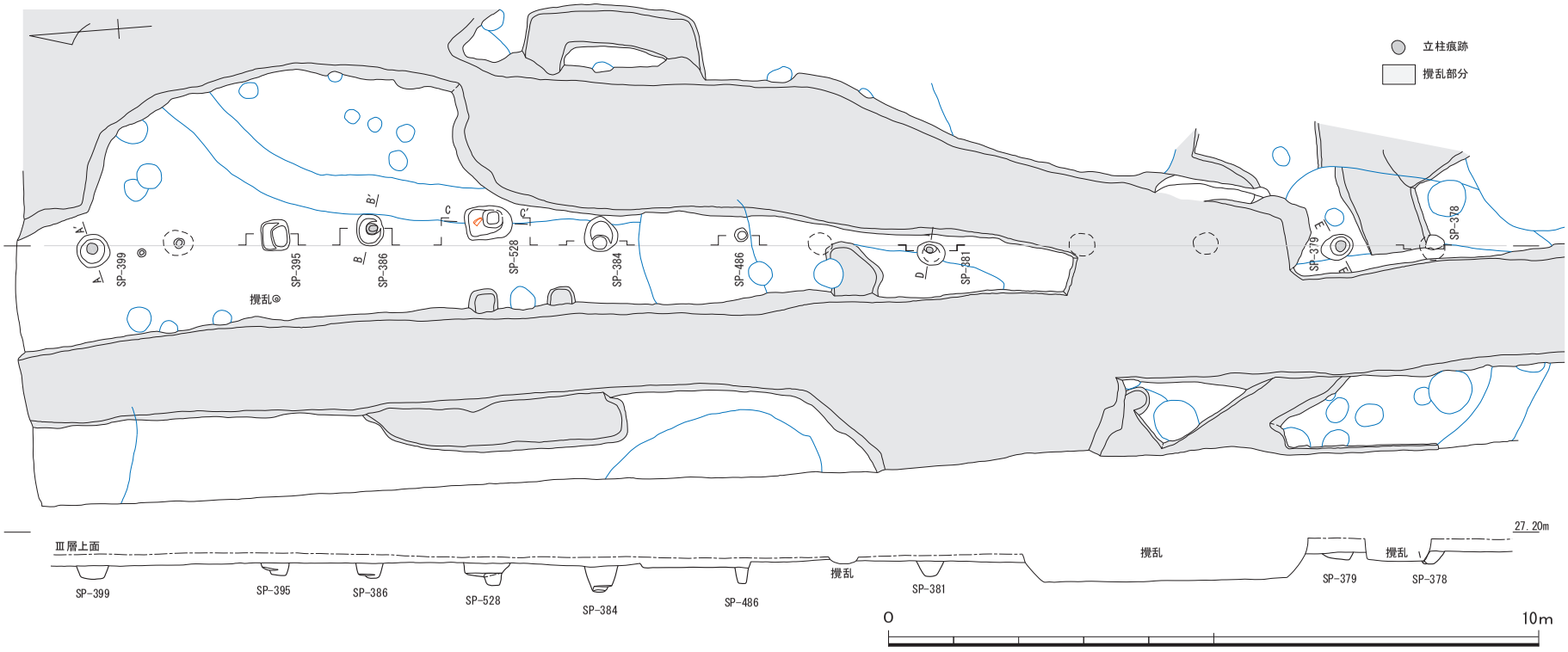
SP-386はDY-30区に位置する。北側のSP-395との間隔は1.4 ～ 1.5 m，南側のSP-528との間隔は1.8 m前後である。長軸長49cm，短軸長40cmの楕円形の掘り形をもつ。深さは15 ～ 18cmで，立柱痕跡の底面がわずかに窪む。柱は抜き取られており，細礫が多く混じる褐色砂質土の①層や黒褐色砂質土の②層が流れ込む。柱を固定する掘り形埋土は細礫～中礫が多く混じる黒褐色砂質土の④層で，やや粘性をおびる。

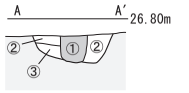
SP-395はDY-30区に位置し，北側のSP-399との間隔は2.85 m，南側のSP-386とは1.4 m離れる。長径47cm，短径45cmの隅丸方形の掘り形をもつ。検出できたⅣ層上面からの深さ19cmを測り，北半部は14cmほど高い平坦面がみられる。全体に底面は凹凸にとむ。埋土上部は暗褐色砂質シルトで，小豆～親指先大の浅黄色砂質土塊が点々と混じり，下部では暗褐色砂質シルト塊が混じる浅黄色砂質土に変化する。

SP-399は確認できたSA-552の北端に位置する。南側のSP-395との間隔は2.85 m。径48 ～ 50cmの円形の掘り形をもつ。検出できたⅣ層上面からの深さは14 ～ 18cmで，底面は東に向かって緩やかに傾斜する。径15cmの立柱痕跡を確認できた。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，下半部には薄い縞状に浅黄色砂質土が混じる。

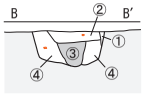
SP-486はSA-522の中央，SP-381・384の中間に位置する。南側のSP-381とは2.88 m，北側のSP-384とは2.2 mの間隔をもつ。SK-515の底面で掘り形を検出したが，本来はSK-515を切ると考えられる。径20 ～ 22cm，深さ17cmの円形の掘り形をもつ。

SP-528はDY-30区に位置する。当初，1つの柵列を構成する遺構として調査を始めたが，掘り形を半截した時点で，径45 × 50cmの隅丸方形の小穴と，推定径40 × 50cmの円形の小穴が重複することを確認できた。埋土は細礫～中礫が混じる暗褐色～褐色の砂質土である。

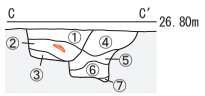




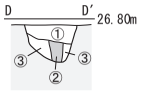
SP-399
① 立柱痕跡．浅黄色砂質土が混じる暗褐色砂質シルト．
② 暗褐色砂質シルト．
③ 暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が薄い縞状に混じる。



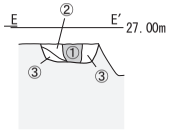
SP-386
① 細礫混じりの褐色砂質土．
② 細礫が多く混じる黒褐色砂質土．径１～２cmの褐色砂質土塊が少量混じる．
③ 立柱痕跡．細礫～中礫が混じるやや粘質をおびる黒褐色砂質土．
④ 細礫～中礫が多く混じる黒褐色砂質土．やや粘性をおびる．



SP-528
① 細礫混じりの暗褐色砂質土で，径１～２cmの褐色砂質土塊が多く混じる．
② 黒褐色砂質土で，径３cmほどの褐色シルト塊がごく少量混じる．
③ わずかに粘性をおびる黒褐色砂質土．
④ 細礫～中礫が多く混じる黒褐色砂質土．やや粘性をおびる．炭化物片が出土．
⑤ 細礫が多く混じるやや灰色みをおびる暗褐色砂質土．
⑥ 黒褐色砂質土．
⑦ やや灰色みをおびる黒褐色砂質土．

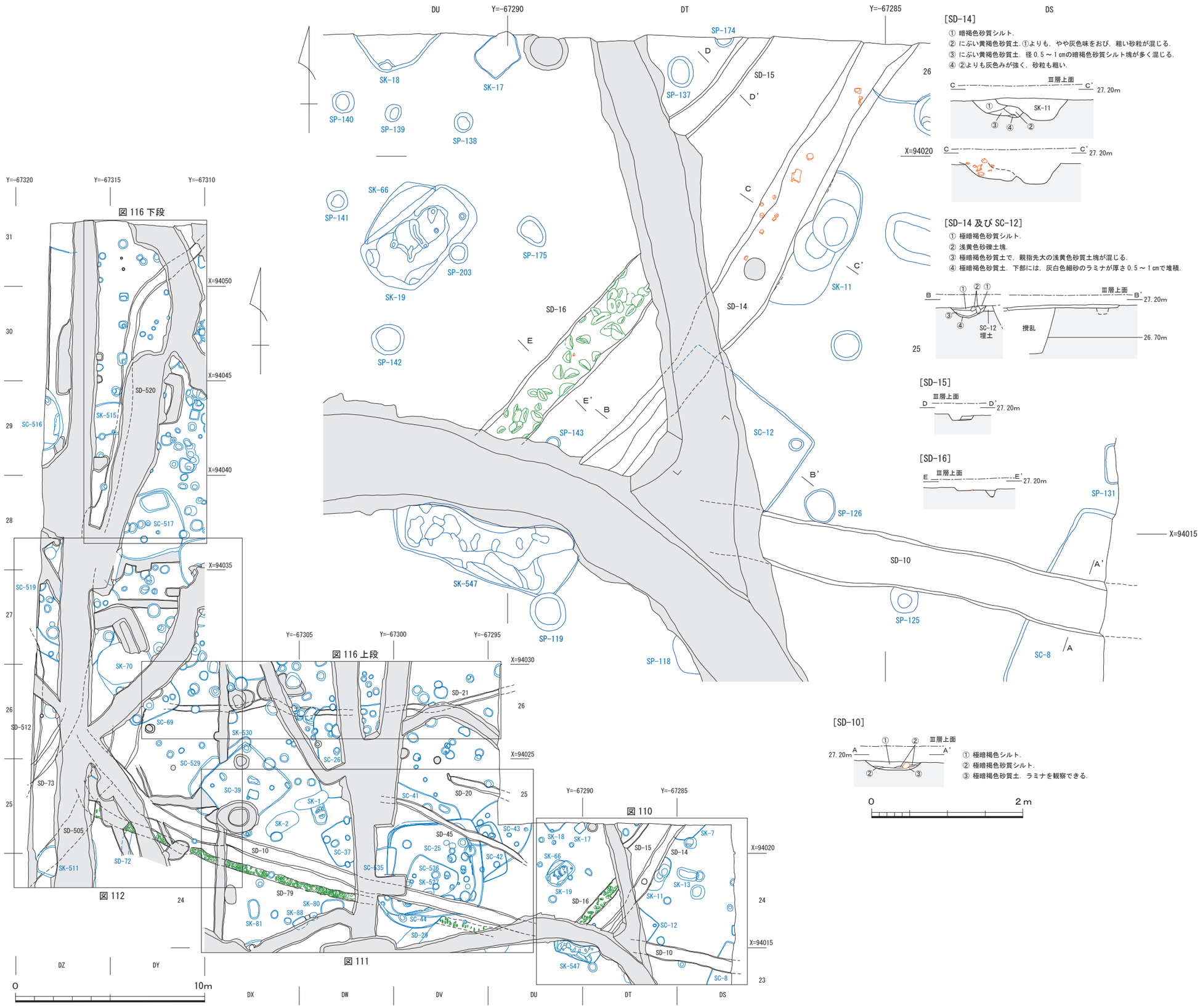


SP-381
① 細礫が多く混じる暗褐色砂質シルト．
② 立柱痕跡．暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊が点々と混じる．
③ 細礫混じりの暗褐色砂質シルト．親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる．



SP-379
① 立柱痕跡．暗褐色砂質シルトに親指先大のにぶい黄褐色シルト塊が多く混じる．
② 極暗褐色砂質シルトで，小豆大のにぶい黄褐色シルト塊が点々と混じる．
③ 暗褐色砂質シルトで，小指先大のにぶい黄褐色シルト塊が非常に多く混じる．

図 109　SA-552 遺構実測図（縮尺 1/100，1/50）



[SD-14]

① 暗褐色砂質シルト.
② にぶい黄褐色砂質土. ①よりも，やや灰色味をおび，粗い砂粒が混じる.
③ にぶい黄褐色砂質土. 径 0.5 ～ 1 cmの暗褐色砂質シルト塊が多く混じる.
④ ②よりも灰色みが強く，砂粒も粗い.

[SD-14 及び SC-12]

① 極暗褐色砂質シルト.
② 浅黄色砂礫土塊.
③ 極暗褐色砂質土で，親指先大の浅黄色砂質土塊が混じる.
④ 極暗褐色砂質土. 下部には，灰白色細砂のラミナが厚さ 0.5 ～ 1 cmで堆積.

[SD-15]

[SD-16]

[SD-10]

① 極暗褐色シルト.
② 極暗褐色砂質シルト.
③ 極暗褐色砂質土. ラミナを観察できる.

0 2m

図 110　SD-10・14 ～ 16・20・21・45・73・79・502・505 配置図（縮尺 1/200）及び SD-14 ～ 16 遺構実測図（縮尺 1/50）

出土遺物には，SP-378 から出土した弥生土器の胴部小片 2 点，SP-381 埋土①層の 1 点，②層の 2 点の弥生土器の胴部小片がある。また，SP-384 からは外面をミガキ調整した壺の肩部小片 1 点，SP-386 からは弥生土器の胴部小片 5 点，SP-399 掘り形埋土から甕の口縁部（図 106-9），壺の底部などの弥生土器の小片 4 点，柱痕跡①層から弥生土器の胴部小片 2 点が出土している。SP-497 からは，弥生土器の甕の口縁部破片（図 106-10），底部破片（図 106-11），壺の底部付近の破片，胴部小片の 10 点ほどが出土した。9 は「く」字形口縁をもつ甕で，口縁端部を横ナデ調整で上方に摘み上げ，端面に 2 条の擬凹線文をめぐらす。10 も「く」字形口縁をもつ甕で，口縁端部に細い粘土紐を貼り付けて，横ナデ調整で摘み上げる。口縁屈曲部の内面に細い沈線を 1 条めぐらす。11 は裾部が「ハ」字形にひろがる厚手の甕の底部破片である。

以上，出土遺物はいずれも弥生土器ばかりである。しかし，東側の B 区 SB-1 の大型掘立柱建物と主軸方向が一致することから，SB-1 に伴う古代の柵列と判断した。

4　溝

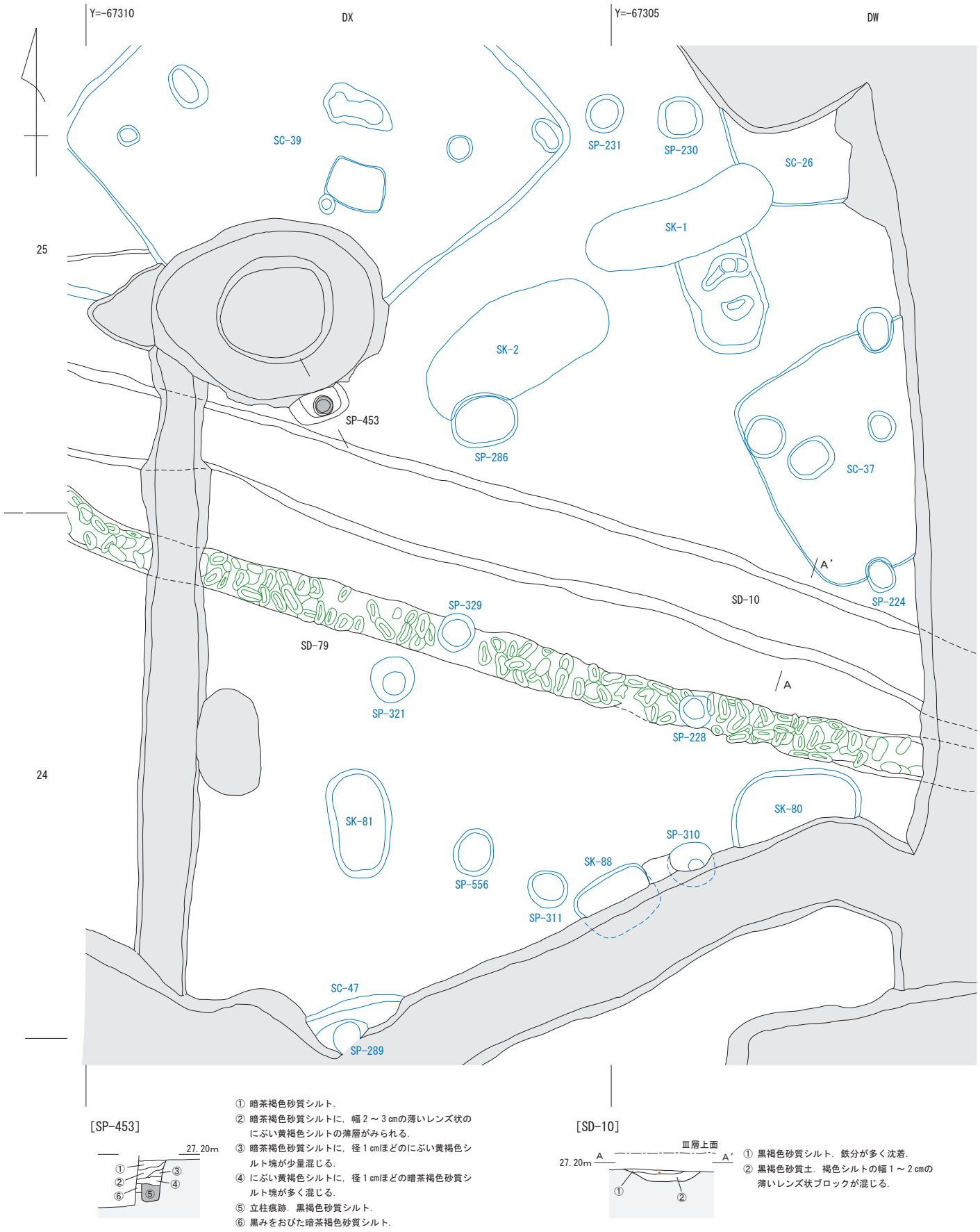
10号溝（SD-10，図110～113，図版30・85）

調査区中央部 DS ～ DY-23 ～ 25 区で，ほぼ東西にのびる溝で，東隣の 12 次調査区 SD-6 と一連の溝である（図 110 ～ 112）。東端で SC-8，西端で SD-505 を切る。東端がやや北側に折れ，総延長 36 ｍで，12 次調査 SD-6 を加えると総延長 80 ｍの溝となる（図版 30-1）。溝幅 62 ～ 86㎝，掘り形を検出できたⅣ層上面からの深さは 10㎝前後を測る。底面には小さな凹凸が無数にみられるが，後述する SD-16・79 のような明確な掘削痕跡ではない。掘り形上半部は，やや粘性をおびる極暗褐色や黒褐色のシルト～砂質シルトで埋積され，溝底近くには極暗褐色や黒褐色の砂質シルト～砂質土が堆積し，東半部では部分的ではあるがラミナを確認できた。しかし，恒常的に流水があったような痕跡は認められなかった。

SD-10 から出土した遺物は少ない（図 113-1 ～ 10）。1・7 は東端部の DS・DT-23 区，2・8 は中央部の DV･DW-24 区の掘り形埋土中から出土し，他は上部Ⅲ層部分から出土した遺物である。

図 113-1 ～ 7 は弥生土器である。1（図版 85-1）は小型甕で，口縁部周辺は横ナデ調整で仕上げられるが，成形時の指頭痕が多く残る。胴部外面には篦状工具によるナデ調整を施す。口縁部下面には煤が付着する。2 は鉢，3 は「く」字形口縁の甕である。4（図版 85-3）は山ノ口式系土器で，細長い断面台形の粘土を貼り付けて口縁部を成形し，口縁端面を横ナデ調整で小さく面取りする。胎土には金雲母が含まれる。5 は甕の胴部上半の破片である。口縁部屈折部に低い断面三角形突帯を貼り付ける。通有のものは刻目を施すが，本例は刻目を施していない。胴部外面には篦状工具による擦過痕が残る。6 は壺の平底の破片。7（図版 85-2）は支脚である。頭部が二股に分かれる。8 は土師器高坏の脚部破片で，エンタシス状の膨らみをもつ。内面には絞り痕と粘土接合線が残る。9・10 は須恵器である。9 は坏蓋の天井部破片で，天井部と口縁部との境に段がめぐる。10 は口縁部が直立する坏身である。

掘り形埋土及び上部Ⅲ層部分からは，弥生時代中期末～後期中葉，弥生時代終末期，古墳時代後期の遺物が出土している。掘り形埋土中からも，古墳時代の土師器高坏（図 113-8）が出土している。以上から，SD-10 は古墳時代後期に埋没する溝と判断できる。この SD-10 を境界として，北側では古墳時代の遺構・遺物が多く出土するが，南側では古墳時代後期の遺構は少なく，遺物もⅢ層を含めて極めて少ない。流水の痕跡が一部にしか認められないので，北側の 14 次調査区や 16 次調査 B 区に営まれた古墳時代後期の居住域を区画する溝と考える。



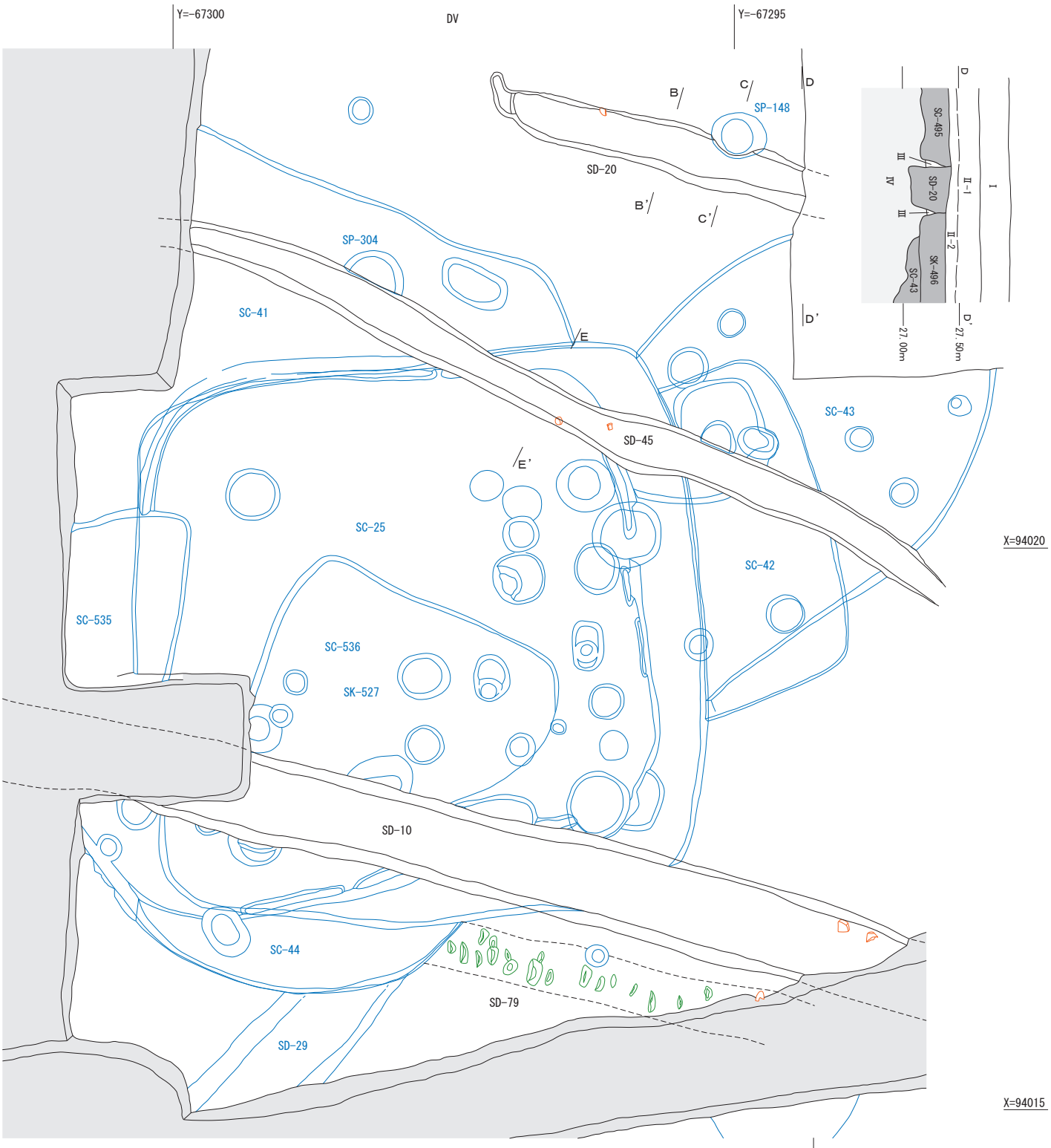
[SP-453]

① 暗茶褐色砂質シルト.
② 暗茶褐色砂質シルトに，幅 2 ～ 3 cmの薄いレンズ状のにぶい黄褐色シルトの薄層がみられる.
③ 暗茶褐色砂質シルトに，径 1 cmほどのにぶい黄褐色シルト塊が少量混じる.
④ にぶい黄褐色シルトに，径 1 cmほどの暗茶褐色砂質シルト塊が多く混じる.
⑤ 立柱痕跡．黒褐色砂質シルト.
⑥ 黒みをおびた暗茶褐色砂質シルト.

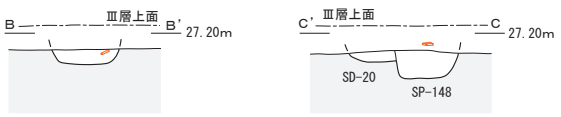
[SD-10]

① 黒褐色砂質シルト．鉄分が多く沈着.
② 黒褐色砂質土．褐色シルトの幅 1 ～ 2 cmの薄いレンズ状ブロックが混じる.

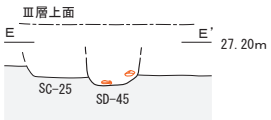
図 111　SD-10・20・45・79，SP-148・453 遺構実測図（縮尺 1/50）


Y=-67300
DV
Y=-67295
B
C
D
SP-148
SD-20
B'
C'
SP-304
SC-41
E
D'
SC-43
SD-45
E'
SC-25
SC-42
X=94020
SC-535
SC-536
SK-527
SD-10
SC-44
SD-79
SD-29
X=94015
SC-495
Ⅲ
Ⅳ
SD-20
Ⅲ
Ⅱ-1
Ⅱ-2
SK-496
SC-43
Ⅰ
27.00m
27.50m

[SD-20]

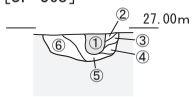

B
Ⅲ層上面
B'
27.20m
C'
Ⅲ層上面
C
27.20m
SD-20
SP-148

[SD-45]


Ⅲ層上面
E
E'
27.20m
SC-25
SD-45

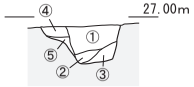
0
2m

[SP-368]



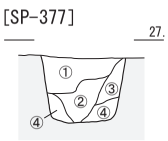
① 暗褐色砂質シルト．下部には径1cmほどの拉げた浅黄色土塊が多く混じる．立柱痕跡．
② にぶい黄褐色砂質シルト．
③ にぶい黄褐色砂質シルトで，小豆大の暗褐色砂質シルト塊が多く混じる．
④ 浅黄色砂質土に暗褐色砂質土が混じる．
⑤ 暗褐色砂質シルトに，径1cmほどの拉げた浅黄色土塊が混じる．
⑥ 浅黄色砂質土で，縞状に暗褐色砂質シルトの薄層がみられる．

[SP-369]

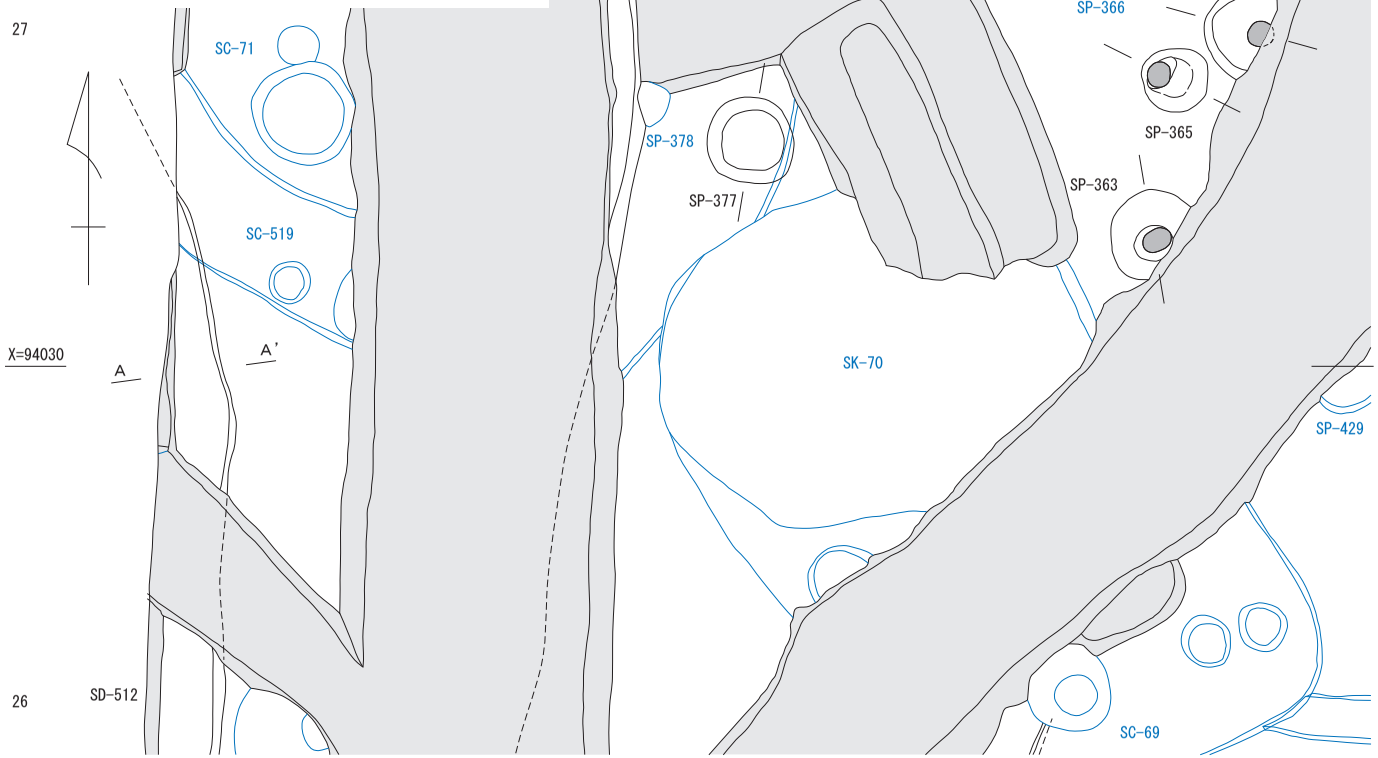


① 暗褐色砂質シルト．大小の浅黄色砂質土塊が多く混じる．
② 浅黄色砂質土．
③・⑤ 浅黄色砂質土で，小豆大の暗褐色砂質土塊が点々と混じる．
④ 暗褐色砂質土．

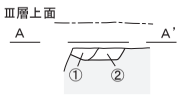
[SP-377]



① 暗褐色砂質シルト．径3～4cmの浅黄色砂質土塊が多く混じる．
② ①と共通するが，浅黄色砂質土塊が多く混じる．①・②は立柱の抜き跡か．
③ 暗褐色砂質シルト．拉げた小豆大の浅黄色砂質土塊が点々と混じる．
④ 暗褐色砂質シルト．径3～4cmのにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる．



[SD-512]

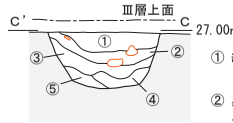


① 暗褐色砂質シルト．径1cm前後の褐色とにぶい黄褐色のシルト塊が少量混じる．
② 暗褐色砂質シルト．①に比べてやや黒みをおびた土色．褐色シルトの薄いレンズ状ブロックが少量みられる．

[SD-512]

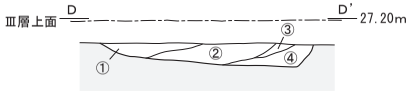
① 暗褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土が混ざり合う．径0.5～1cmの礫が多く混じる．

[SD-73]



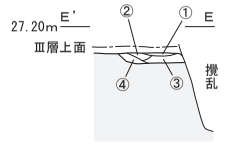
① 細礫混じりの暗褐色砂質土．とくに，細礫は上部に多い．
② 黒褐色砂質土．細礫が混じるが，①よりかなり少ない．
③ やや灰色みをおびた暗褐色砂質土．

[SD-505]



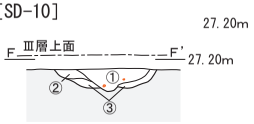
① 細礫～中礫が少量混じる極暗褐色砂質シルト．
② 暗褐色砂礫層．部分的に小豆大の浅黄色土塊が点々と混じる．
③ 暗褐色砂質土．
④ 暗褐色砂礫層．

[SD-505]



① 細礫が多く混じる暗褐色砂質シルト．暗灰色砂が混じり，全体に白っぽい土色．
② 暗灰白細砂層．
③ ①と共通するが，より細礫が多い．
④ 暗灰白色粗砂．

[SD-10]



① 黒褐色砂質土．径1cmほどのにぶい黄褐色シルト塊が少量混じる．やや粘性をおびる．
② 暗褐色砂質シルト．
③ 暗褐色砂質シルト．②よりきめが細かく，径1～2cmのにぶい黄褐色シルト塊が少量混じる．

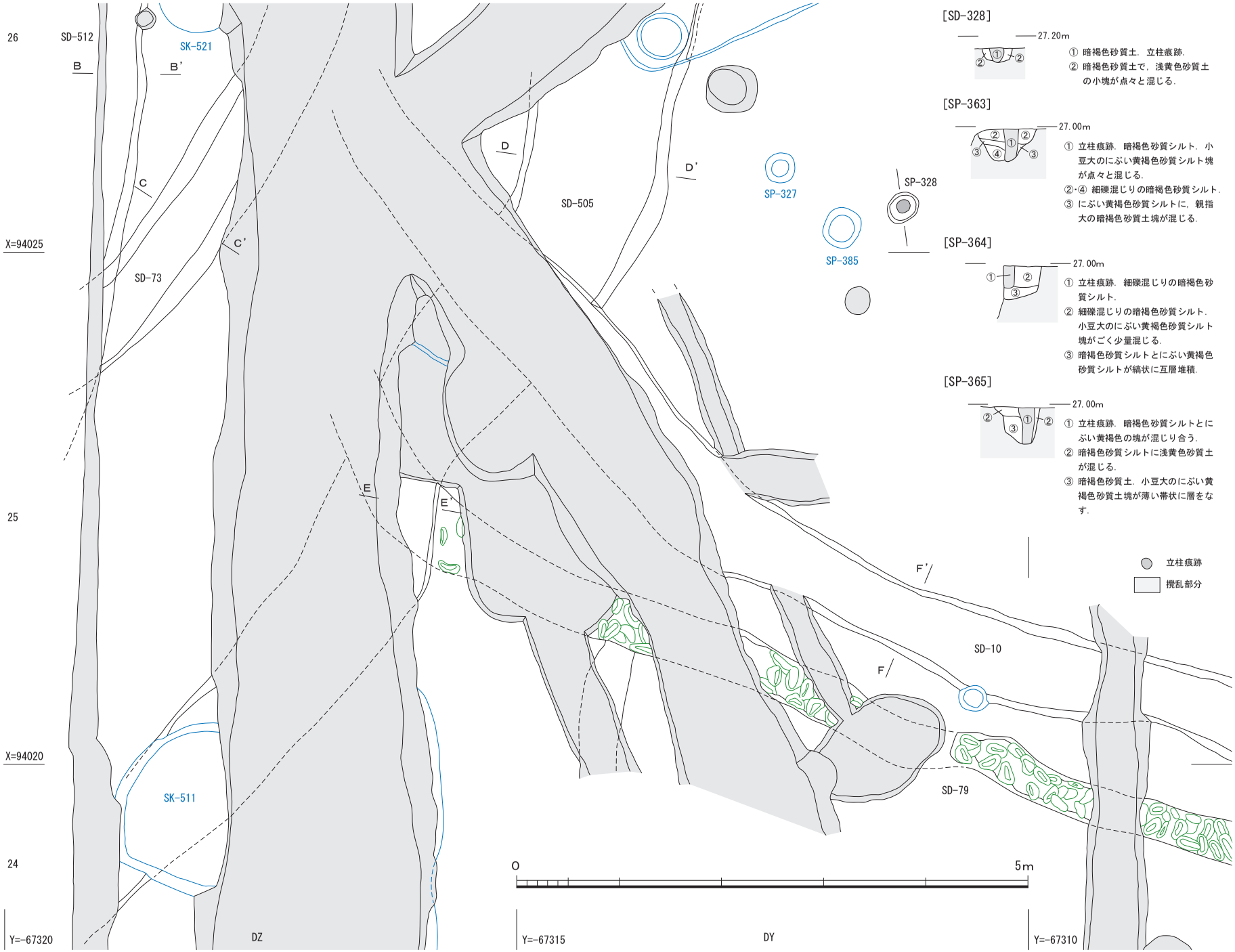


図 112　SD-10・73・79・505・512，SP-328・363 ～ 365・368・369・377 遺構実測図（縮尺 1/50）

14号溝（SD-14，図110・114，図版85・86）

DS・DT-24・25区に位置する北東-南西方向の溝である（図110）。北端は調査区外にのび，南隣は塹壕で切られ，その南側では延長部分を確認できなかった。確認できた溝長は6.8 mほどである。SK-11に切られ，SC-12とSK-7を切る。幅43～72cm，掘り形を検出できたⅣ層上面からの深さは12cm前後を測る。掘り形の上部～中部は極暗褐色砂質シルト～砂で埋積され，浅黄色砂礫土の大きな塊が混じる。溝底には，灰白色細砂のラミナを含む極暗褐色砂質土がレンズ状に薄く堆積する。

出土遺物（図114-1～12）の中で，1・3・6は西側からSD-14に投棄されたような状態で，2・4・5は北半部の埋土中から出土している（図版34-1）。7～12はSD-14北半部の上部Ⅲ層部分から出土した遺物である。

図114-1（図版85-4）は，口縁部が「く」字形に緩やかに外反する甕で，細身の胴部につながる。外面は篦状工具でナデ上げ，内面は先端が丸い工具を強くナデつけている。胴部外面には煤が付着する。2の胴部はほとんど膨らまず，短く外反する口縁部がつく。小型甕と考えたが，鉢の可能性も残す。3（図版86-1）は高坏の坏部破片である。口縁端部を内側に折り曲げる。口縁部外面には幅広の沈線様の凹線文を4条めぐらす。4は高坏の坏部～脚部の破片で，坏部底に充填されていた粘土円盤が剥離している。脚部外面にはミガキ調整を施す。5は壺の底部破片。裾部が摩滅して不安定な平底となっている。外面には篦状工具で縦方向のナデ調整を施す。6は甕。裾部が「ハ」字形にひらく脚台状の底部破片である。7は「く」字形口縁の甕の破片。8（図版86-2）は壺の肩部破片で，頸部の付け根に断面楕円形の突帯を貼り付けて，爪を押捺して刻目を施す。9～12は甕の脚台状の底部破片。9は外面を成形最終段階に篦状工具で押さえつけている。11は，内外面ともに二次的火熱を受けて器表面が荒れ，調整は不明である。12は大型甕である。持ち上げた粘土円盤の側面に粘土を貼り付け，内底面に粘土を充填する。

SD-14は，弥生時代中期後葉～後期初頭と考えられるSC-12やSK-7を切り，後期前葉に埋没するSK-11に切られている。また，掘り形内に西側から投棄されたような状態で出土した甕（図114-1）は後期前葉，高坏（図114-3）や甕の底部（図114-6）は中期後葉～後期初頭に比定できる。したがってSD-14は弥生時代後期初頭～前葉に掘削され放棄された溝と捉えることができる。

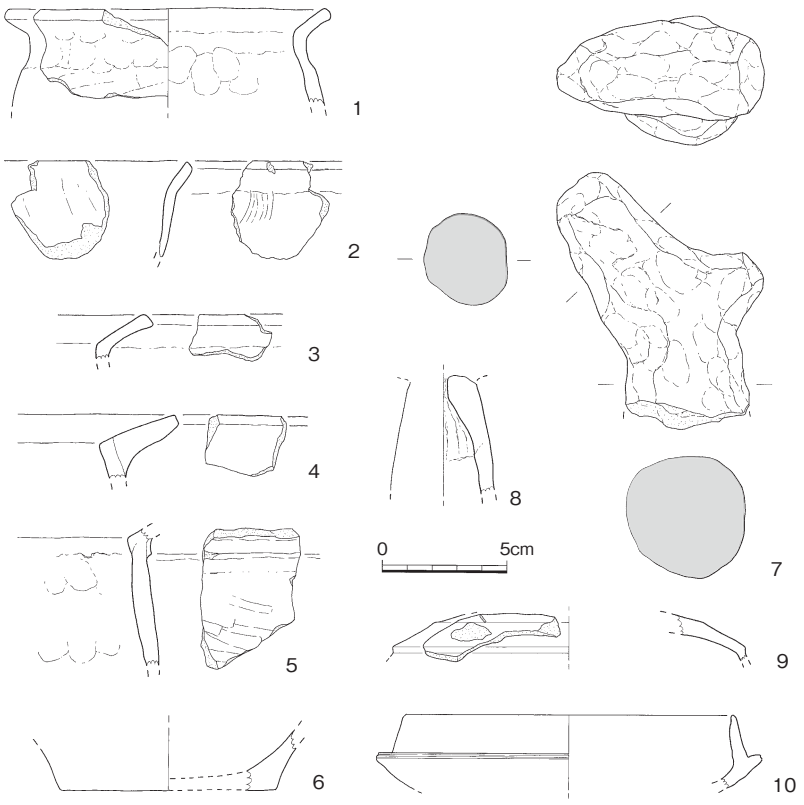


図113　SD-10出土土器実測図
（1·2·7·8：掘り形埋土，3～6·9·10：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

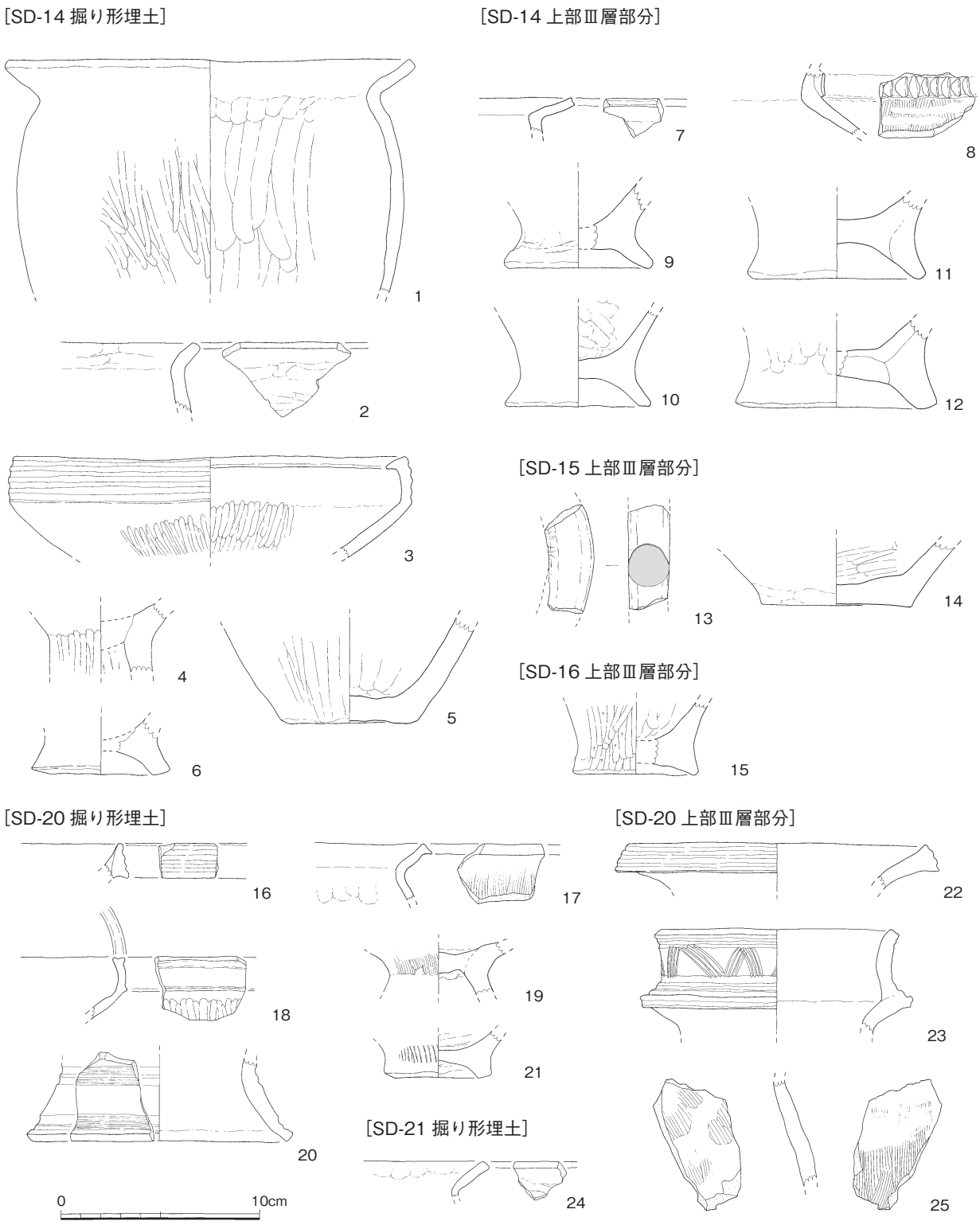


図 114　SD-14・15・16・20・21 出土土器実測図
（1 ～ 12：SD-14，13・14：SD-15，15：SD-16，16 ～ 23：SD-20，24・25：SD-21，縮尺 1/3）

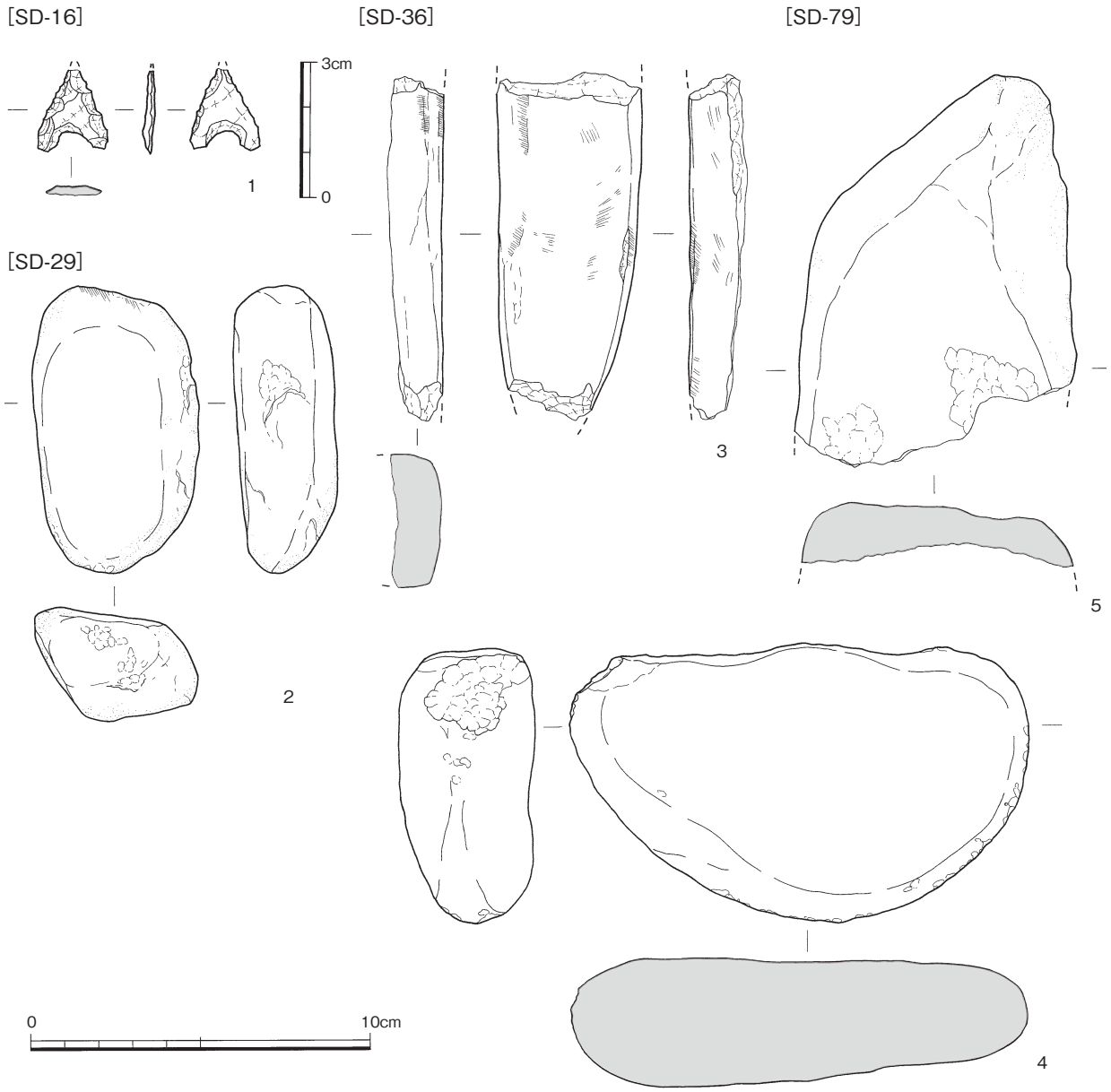


図 115　SD-16・29・36・79 出土石器実測図
（1：SD-16，2：SD-29，3・4：SD-36，5：SD-79，縮尺 2/3，1/2）

15号溝（SD-15，図110・114，図版86）

DT-25 区に位置する。東側の SD-14 とほぼ平行して北東 - 南西にのびる（図 110）。北端は調査区外にのび，塹壕で切られた南側では途切れている。なお，南西側に 13 mほど離れた延長線上に SD-36 が位置する（図 2）。後述するように，SD-36 の延長部分である可能性を考える。残存の溝長は 1.8 m，幅 31 ～ 35cm，掘り形を確認できたⅣ層上面からの深さは 8cm前後を測る。逆台形の断面で，掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，大小の浅黄色砂質土の小塊が混じる。

掘り形埋土からは遺物は出土していない。上部のⅢ層部分からは，数点の弥生土器の破片が出土している（図 114-13・14）。13（図版 86-3）は環状の把手の破片。径 2 ～ 2.2cmの粘土紐を折り曲

げて作る。表面を指頭によるナデ調整で仕上げる。内側には粘土紐を折り曲げた際に粘土の撚れが生じている。14 は壺の平底の破片である。外面を縦方向の篦状工具でナデ上げた後に，底部側面を篦状工具で押さえつけている。内面には篦状工具によるナデ調整を施す。ともに弥生時代中期後葉～後期前葉の時間幅に収まる。一方，掘り形埋土には，Ⅳ層由来の浅黄色砂質土の小塊が多く混じり，一気に埋め戻されたものと判断できる。出土遺物は埋め戻しの際に混入したものと考え，SD-15 の埋没時期は弥生時代中期後葉～後期前葉の時間幅の中で捉えておく。

16号溝（SD-16，図110・114・115，図版137）

DT・DU-24 区に位置する。塹壕で南北を破壊され，延長部分は確認できなかった。確認できた溝長は 3 mほどで，幅は 53 ～ 61㎝，掘り形を確認できたⅣ層上面からの深さ 4㎝前後の浅い舟底状を呈する（図 110）。掘り形埋土は，極暗褐色シルトで，径 2 ～ 5㎝の浅黄色砂質土の塊が点々と混じる。

溝底には隅丸の長底辺三角形（三角おむすび形）の窪みが数多く残る。底辺幅 15 ～ 20㎝，高さ 11 ～ 13㎝，深さ 2 ～ 3㎝を測る窪みが最も多い。底辺に平行する断面形はＶ字形もしくはＵ字形，直交する断面形は「レ」字形やＶ字形を呈する。鋤・鍬による掘削痕跡である。こうした溝底に明瞭な掘削痕跡が残されている点は，SD-79 と共通し，Ⅳ層上面からの深さも類似する。SD-79 は DU-23・24 以東で検出されておらず，SD-79 が北に折れ，SD-16 に連結する可能性が高い。

溝底面近くから打製石鏃が出土したが，他に出土遺物はない（図 115-1）。1（図版 137-5）はサヌカイト製の凹基式打製石鏃である。先端部が欠損する。主要剥離面を残す面は，調整剥離がほとんど行われていない。重量は 0.4g を測る。上部Ⅲ層部分からは弥生土器の破片が 4 点出土しただけである（図 114-15）。上げ底の甕の底部破片で，外面は篦状工具によるケズリに近い強いナデ調整を下から上方に向かって施す。

出土遺物は，上部Ⅲ層を含めて，弥生時代の遺物ばかりであるが，量も少なく，出土遺物から SD-16 の時期を決定することはできない。ただし，前述したように，SD-16 は，SD-79 と一連の溝である可能性が高く，古墳時代後期の溝と考えておきたい。

20号溝（SD-20，図110・111・114，図版28・86・87）

DU・DV-25 区に位置する。ほぼ東西方向にのびる溝で，東側は調査区外にのび，西端は DV-25 区中央付近で途切れる（図 110・111，図版 28-3）。検出できた溝長は 2.9 m，幅は 41 ～ 49㎝を測る。SP-148 に切られる。調査区壁面で，Ⅲ層上面から掘り込まれていることを確認できた。本来の深さは 34㎝前後，掘り形を検出できたⅣ層上面からは 6 ～ 12㎝を測る。また，土層断面では南側の SK-496 に切られ，SC-495 を切る。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色砂質シルトの小塊が混じる。

掘り形埋土からは，小片ばかりであるが，弥生土器が出土している（図 114-16 ～ 21）。16（図版 86-4）は壺で，口縁端面に粘土を貼り付けて，幅広の口縁端面をつくり，3 条の浅い擬凹線文をめぐらす。17 は緩やかに「く」字形に外反する甕の口縁部で，端部を横ナデ調整でわずかに下方に引き出す。18（図版 86-6）は高坏の坏部破片で，口縁部を緩やかに折り曲げて直立させ，口縁端面と直下に幅広の凹線文をめぐらす。口縁部が直立する境界部には細く低い段状の突帯がめぐる。19 も高坏で，脚部と坏部の接合部に粘土円盤を充填する。坏部外面には擦過状の調整痕が残る。20（図版 86-7）は脚台付き鉢の脚部破片である。脚部付け根と裾部に擬凹線文をめぐらす。21 は上げ底の甕の底部破片。外面には刷毛目調整，内面及び

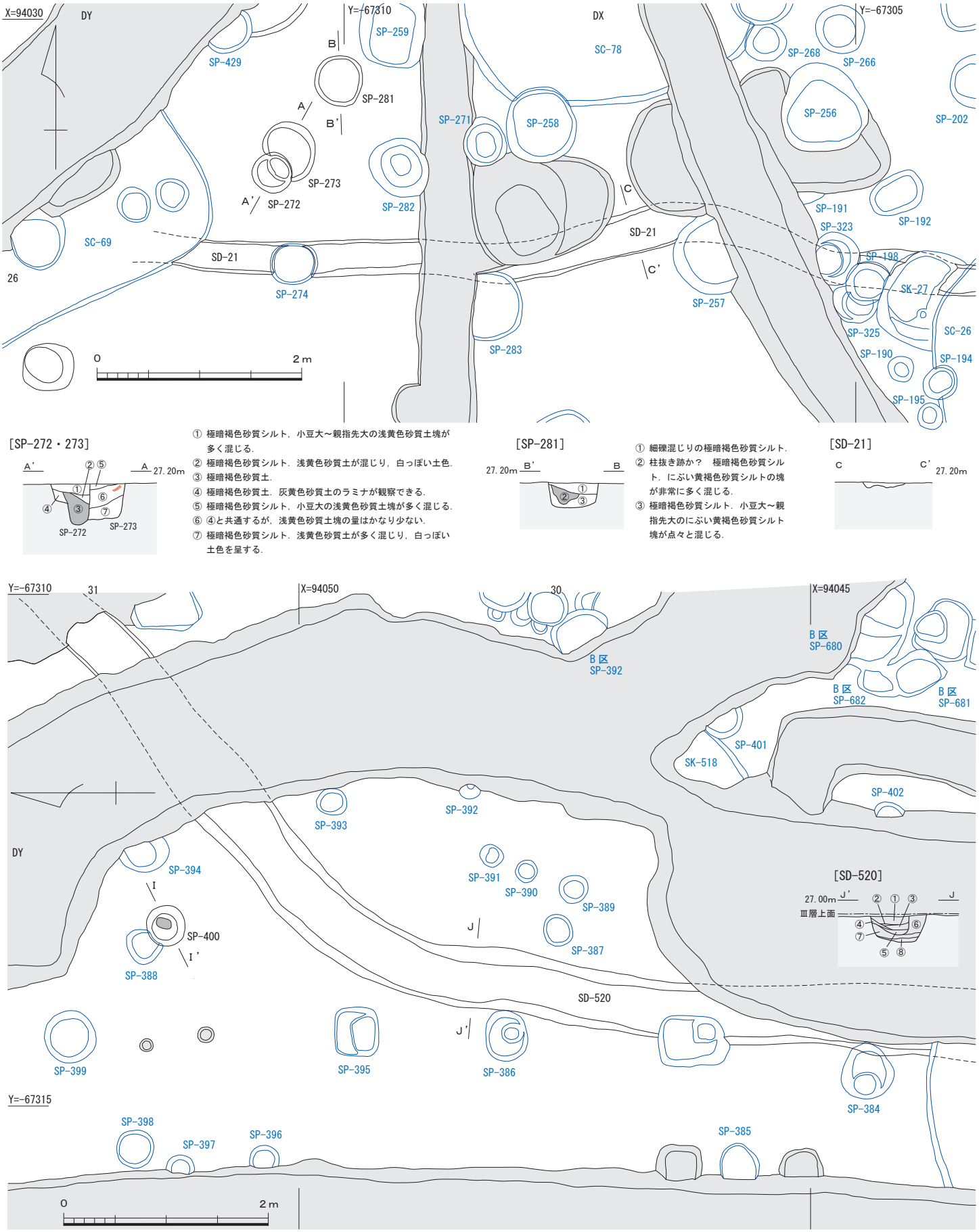
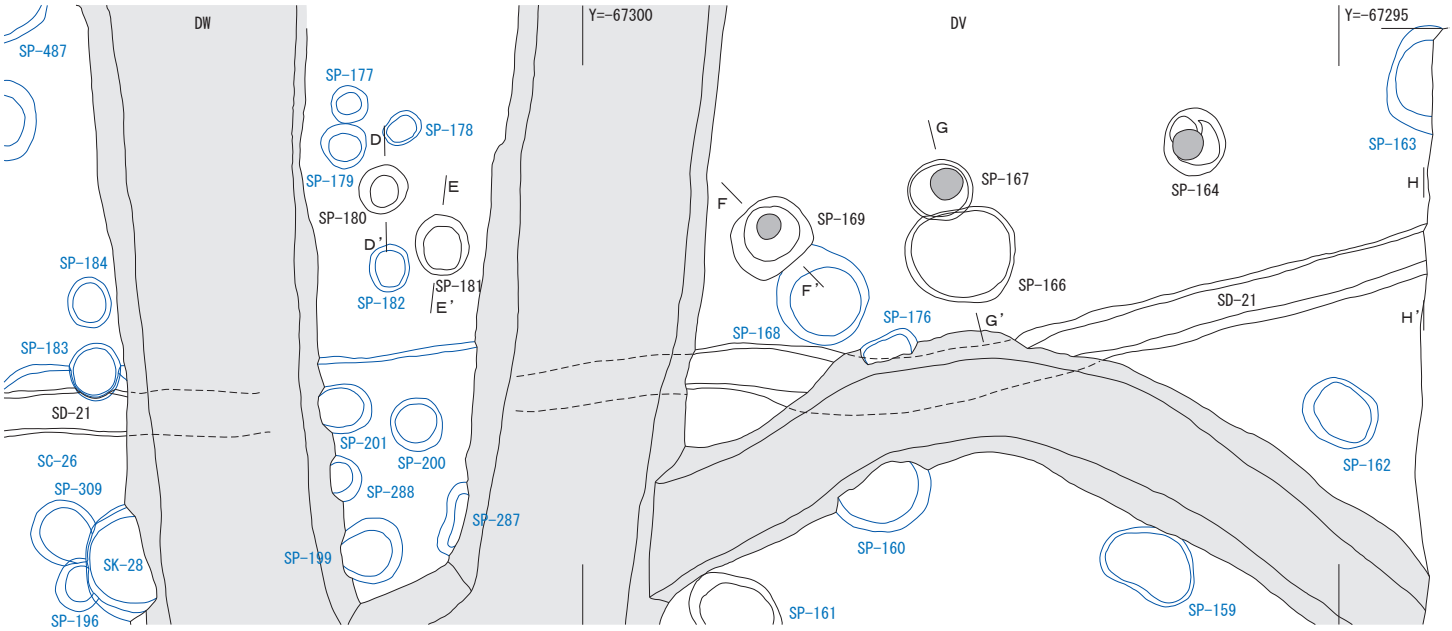
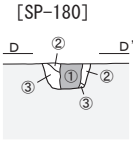


図 116　SD-21・520，SP-164・166・167・169・180・181・272・273・281・412 遺構実測図（縮尺 1/50）

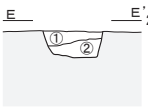


[SP-180]



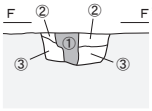
① 立柱痕跡．極暗褐色砂質シルト．
② 極暗褐色砂質シルト．にぶい黄褐色砂質土が少量混じる．
③ にぶい黄褐色砂質シルト．ごく少量の極暗褐色砂質シルトが混じる．

[SP-181]

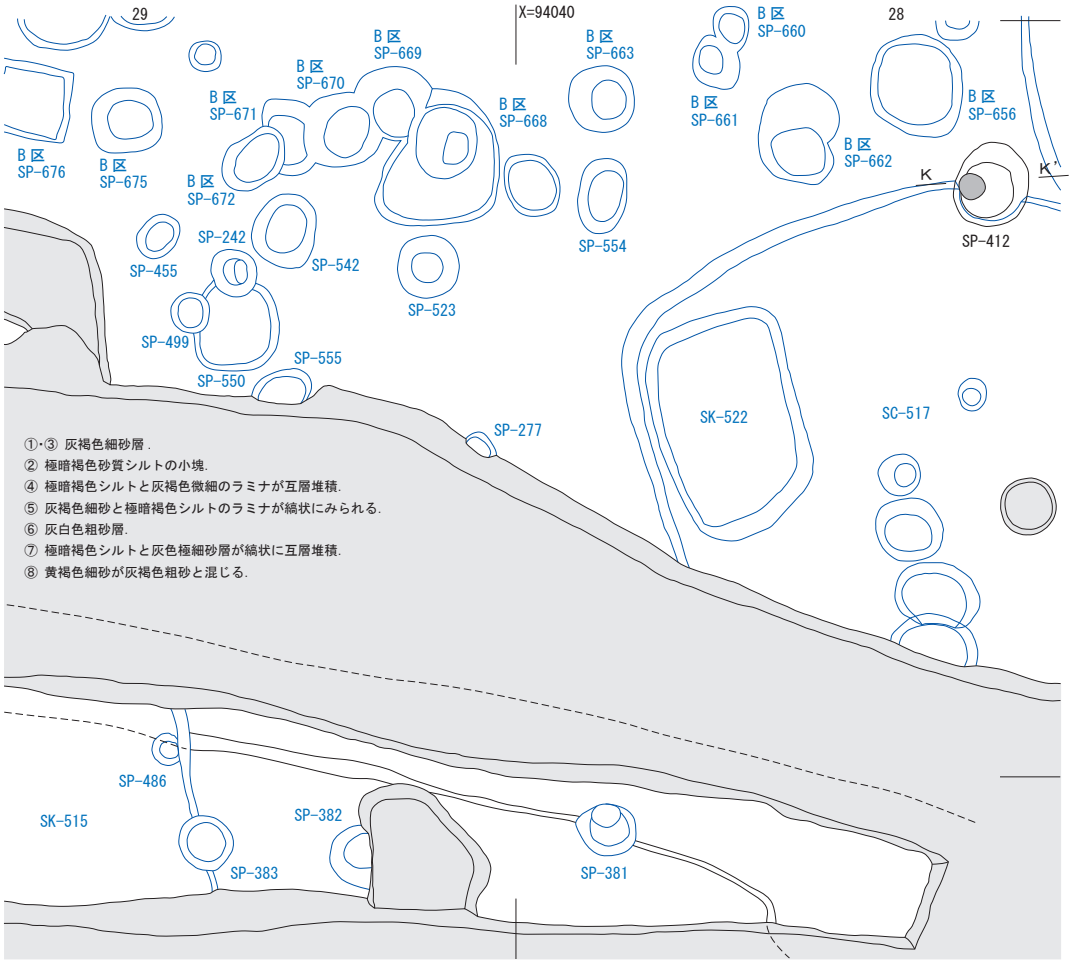


① 極暗褐色砂質シルト．拉げた親指先大のにぶい黄褐色砂質土塊が非常に多く混じる．
② 極暗褐色砂質シルト．にぶい黄褐色砂質土の薄層が縞状に多くみられる．

[SP-169]

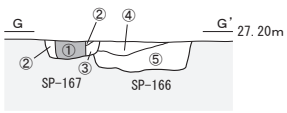


① 立柱痕跡．暗褐色砂質シルト．
② 暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が多く混じり、全体に明るい土色を呈する．
③ 浅黄色砂質シルトに暗褐色砂質シルトの小塊が点々と混じる．



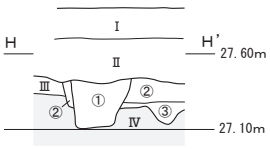
①･③ 灰褐色細砂層．
② 極暗褐色砂質シルトの小塊．
④ 極暗褐色シルトと灰褐色微細のラミナが互層堆積．
⑤ 灰褐色細砂と極暗褐色シルトのラミナが縞状にみられる．
⑥ 灰白色粗砂層．
⑦ 極暗褐色シルトと灰色極細砂層が縞状に互層堆積．
⑧ 黄褐色細砂が灰褐色粗砂と混じる．

[SP-166・167]



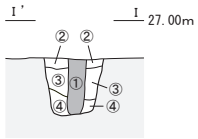
① 立柱痕跡．極暗褐色砂質シルト．
② 極暗褐色砂質シルト．小指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が少量混じる．
③ 暗褐色砂質シルトににぶい黄褐色砂質土が多く混じる．
④ 極暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が少量混じる．
⑤ 浅黄色砂質土．暗褐色砂質シルトが薄い縞状にみられる．

[SD-21]



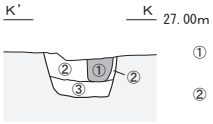
① 極暗褐色シルト．SD-21 埋土．
② 暗褐色砂質シルト．SC-495 掘り形埋土．
③ 暗褐色シルトで，にぶい黄褐色シルトの塊が多く混じる．SC-495 掘り形埋土の下半部分．

[SP-400]



① 立柱痕跡．砂礫混じり暗褐色砂質シルト．
② 砂礫が多く混じる暗褐色砂質シルト．
③ 浅黄色砂質シルトに薄い暗褐色砂質シルト層が互層で堆積．
④ 暗褐色砂質土．

[SP-412]



① 立柱痕跡．細礫が多く混じる暗褐色砂質土．
② 細礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土．
③ 褐色砂質シルト．

外底面には指頭によるナデ調整を施す。

掘り形上部のⅢ層部分からも弥生土器が出土している（図 114-22･23）。ともに壺である。22（図版 86-5）は，口縁端部を上下に拡張して，3 条の沈線様の凹線文をめぐらす。口縁部が歪み，復元口径は不確実である。23（図版 87-1）は，直立する細頸の上部を逆「ハ」字形にひろげ，反転して直立する複合口縁部をつくる。複合口縁の反転部は箍状で，端面に沈線をめぐらす。口縁上部に幅広の沈線を 3 条，下部に細い沈線を 2 条めぐらし，その間に 4 条 1 単位の複線山形文を施文する。複線山形文の施文はかなり乱雑である。

SD-20 は，溝底に流水の痕跡はなく，Ⅳ層由来のにぶい黄褐色砂質シルトの小塊が混じることから，区画溝であると同時に，人為的に埋め戻された可能性が高い。掘り形埋土から出土した土器には，弥生時代後期初頭の高坏（図 114-18）とともに，後期前葉の甕（図 114-17）がある。上部Ⅲ層部分から出土した壺（図 114-22・23）も弥生時代後期前葉の特徴をもつ。古墳時代後期の SK-496 に切られていることからも，弥生時代後期前葉に機能した区画溝と考えておく。

21号溝（SD-21，図110・114・116，図版30・87）

DU ～ DY-26 区に位置する。塹壕や SC-26・69 などと重複するが，その間に残る掘り形を繋ぎ，17.5 ｍほどの東西方向にのびる溝を復元できた（図 110・116，図版 30-1）。東側は調査区外にのび，西端は SC-69 との重複部分で途切れる。SC-26，SB-74･548 を構成する柱穴 SP-257 を切り，SC-69 に切られる。溝幅は 28 ～ 30㎝を測る。掘り形を検出できたⅣ層上面からの深さは 5㎝前後であるが，東端の調査区壁面では，Ⅲ層上面から 30㎝ほど掘り込まれて，SC-495 を切ることを確認できた。掘り形埋土は極粗砂～細礫が多く混じる極暗褐色シルトで，部分的に褐色シルトの薄いレンズ状ブロックがみられる。

遺物は弥生土器の破片が 10 数点出土しただけである。その中で，甕の破片を図示した（図 114-24・25）。24 は緩やかに「く」字形に外反する口縁部破片である。外面には口縁部を屈曲させた際に生じた粘土の撚れが残る。25（図版 87-2）は肩部破片で，外面には刷毛目調整の後に横ナデ調整を加える。内面には刷毛目調整の後にナデ調整を施し，成形時に残された指頭痕内に刷毛目調整の痕跡が残る。

出土遺物はいずれも小片で，遺構の時期は比定できない。しかし，SD-21 に切られる SP-257 が古墳時代後期の SB-548 の柱穴であり，SD-21 を切る SC-69 も古墳時代後期に埋没していることから，SD-21 も古墳時代後期の時間幅に収まるものと考える。

29号溝（SD-29，図2・4・117～121，図版27・29・87・88・144）

DV ～ DZ-21 ～ 24 区に位置する。調査区南西部で南西から北東にのびる溝である（図 117 ～ 119，図版 27・29）。SP-240･341 に切られ，SC-97，SD-72，SK-504 を切る。北東端は SC-44 との重複部分で途切れるが，DT・DU-25 区北壁の土層断面で SD-29 の延長部に当たる SK-18・558 に切られる掘り込みを確認できた。底面に掘削痕跡と考えられる小さな凹凸が観察できた（図 2）。後述するように，SD-29 の底面には多くの掘削痕跡が残されており，共通する小さな凹凸を確認できることから，SD-29 の延長部分と考えた。

また，南西端の DZ-21 区の既設配管路よりも西側では延長部分を確認できなかった。しかし，SD-509 で報告するように，SD-509 の南東に向かって分岐する部分の埋土は SD-29 と共通する。SD-29 は南西端で北西に折れ，SD-509 に切られていると考える。

以上，SD-29 は総延長 30 ｍを測ることになる。しかし，中央部の DX-22 区西半部では，底面が浅く途切れている。北半部でも塹壕によって途切

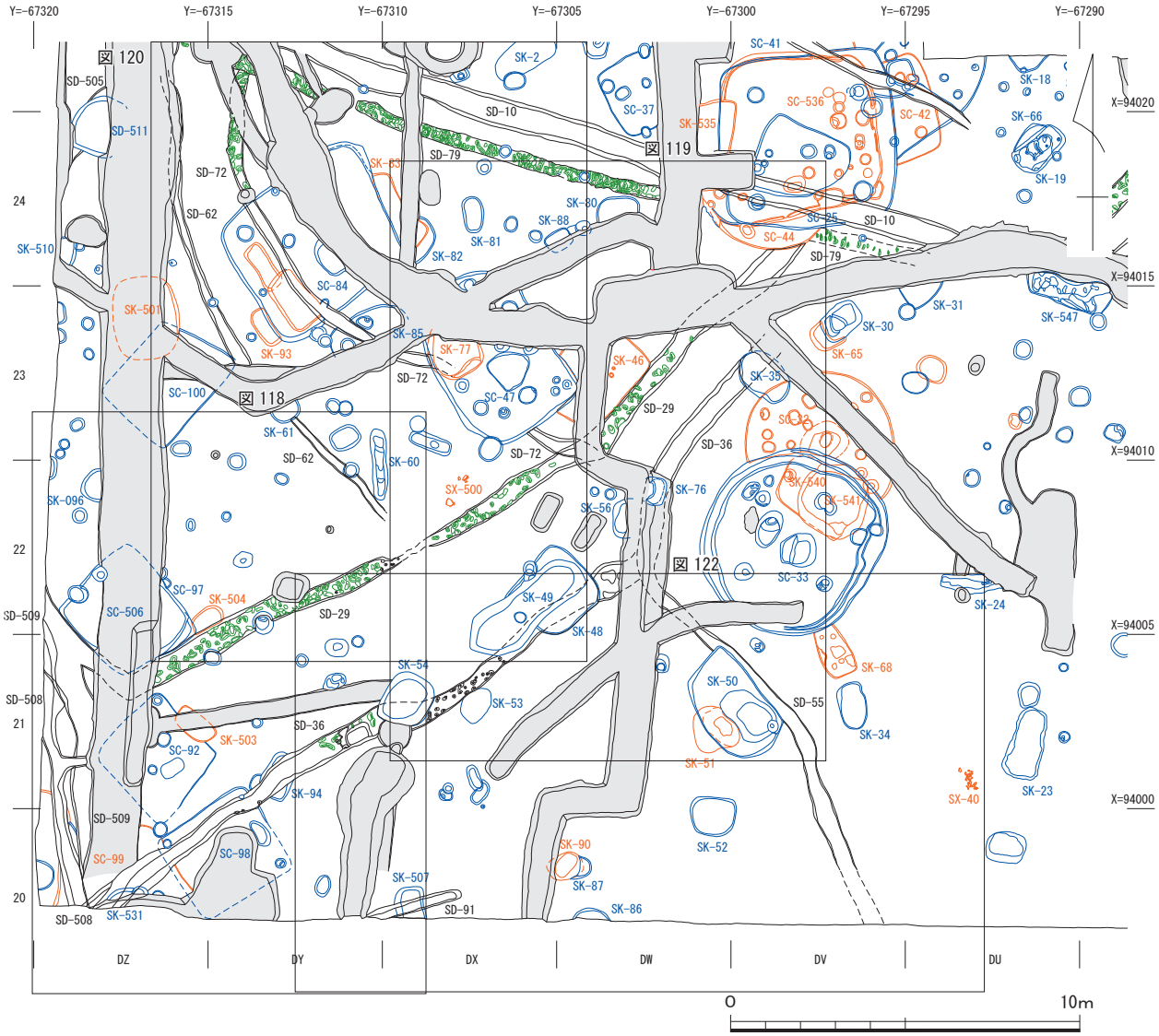


図 117　SD-29・36・55・62・72・91・508・509 配置図（縮尺 1/200）

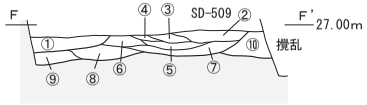
れている。そこで，SD-29 を南西部，中央部，北東部に分けて調査を進め，出土遺物を取り上げた。

掘り形の輪郭はⅣ層上面で検出できた。溝幅 55 ～ 82cm，深さ 6 ～ 8cmを測る。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルト土で，下部を中心としてにぶい黄褐色や浅黄色砂質シルトの親指先大～直径 3cm 大の塊が点々と混じる。場所によっては，極粗砂や細礫が混じるが，流水があった痕跡はみられず，集落域内を区画する溝と考えられる。

溝底には，幅 15 ～ 26cm，高さ 9 ～ 15cmの楕円形や半月形の掘削痕跡が多く残る。溝底面からの深さは 5 ～ 8cmで，断面形は U 字形や「レ」字形を呈する。東北部と南西部では溝方向に直交して並ぶ痕跡が多く，中央部では溝の側部に平行して並ぶ痕跡が目立つ。南西端部付近では，溝方向に直交・平行する痕跡が混在する。こうした掘削痕跡の分布状況から数グループで溝を掘削したことを推定できる。

掘り形埋土からは，弥生土器の小片が 20 点前後と敲石 1 点が出土しているにすぎない（図版 88-2・4・5，図 115-2）。しかも，土器は胴部破片ばかりで，明確な時期を比定できるものはない。いずれも SD-29 南西部の掘り形埋土及び溝底から出土している。図版 88-2 は，厚さ 4㎜ほどの甕の胴部破片で，外面には刷毛目調整を施す。煤が厚く付着する。4 は壺の肩部破片で，外面には刷

［SD-508・509］

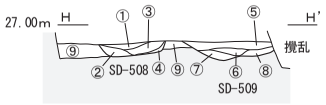


※ ①は SD-508，②～⑩は SD-509 の埋土．ただし，⑩は SD-509 の分岐部分で，SD-29 に当たる．
① 細礫混じりの暗灰色粗砂．
② 暗灰色粗砂混じりの暗褐色シルト．
③・⑥ 暗灰色粗砂が多く混じる暗褐色シルト．
④ 暗灰色粗砂～極粗砂．
⑤ 暗灰色粗砂．親指先大の暗褐色シルト塊が混じる．
⑦ 暗灰褐色粗砂．
⑧ 暗褐色砂質シルト．暗灰色砂が多く混じる．
⑨ 暗灰色粗砂層に多くの暗褐色シルトが混じる．
⑩ 暗褐色砂質シルト．

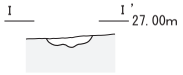
［SD-508・509］

※ ①・②は SD-508，③～⑦は SD-509 の埋土．
① 暗褐色シルト．暗灰色粗砂が多く混じる．
② ①に近いが，暗褐色シルトが多い．
③ 細礫～中礫混じりの暗灰色粗砂層．
④ 細砂の薄いレンズ状ブロックが多くみられる．
⑤ 暗灰色粗砂．
⑥ 暗褐色シルトのラミナが互層堆積．
⑦ ⑤と共通するが，暗褐色シルトが少量混じる．

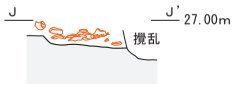
［SD-508・509］



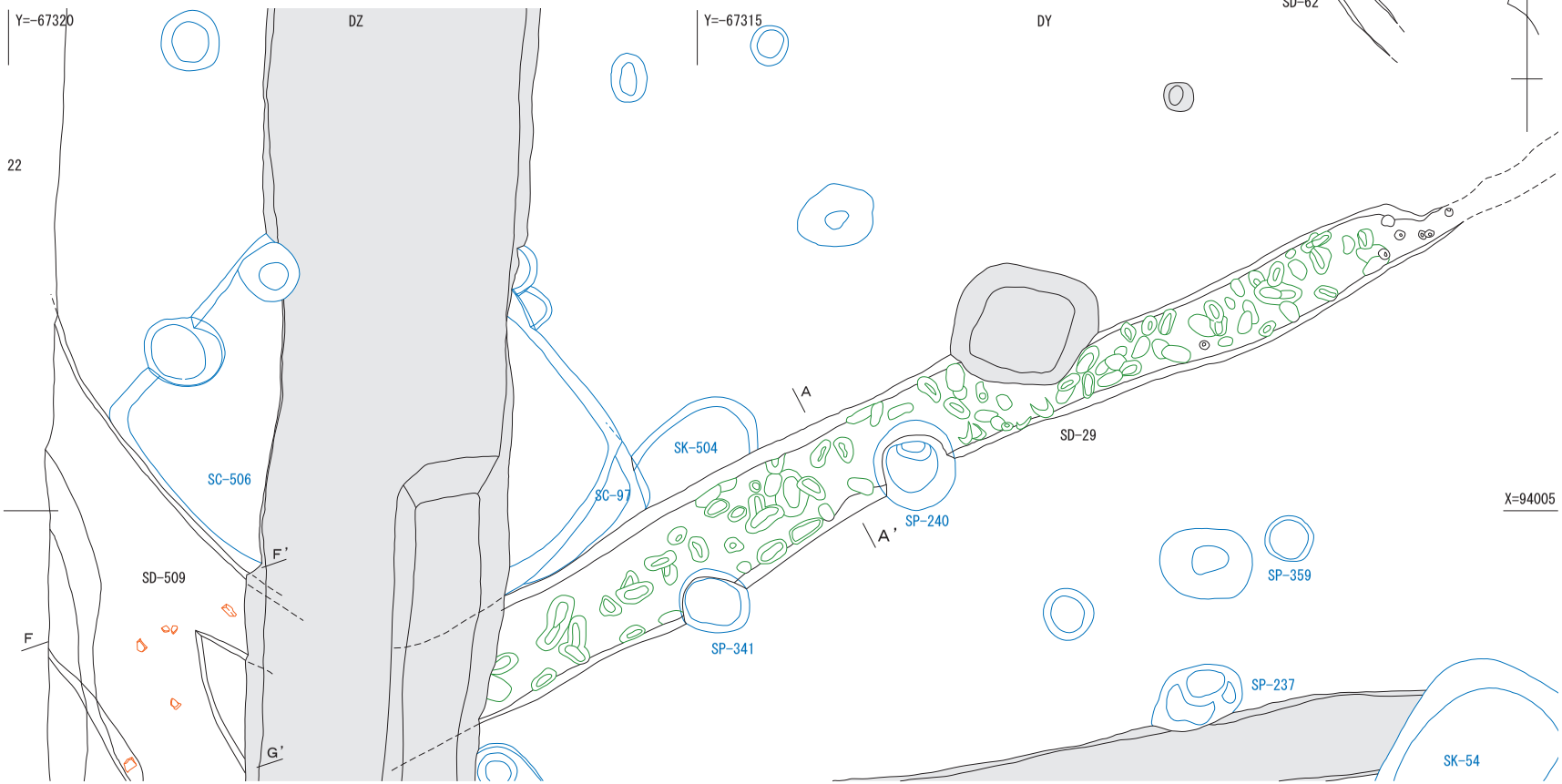
［SD-508］



［SD-509］



※ ①～④は SD-508，⑤～⑧は SD-509 の埋土．
① 暗褐色シルト．にぶい黄褐色粗砂の薄いレンズ状ブロックが多く混じる．
② 暗褐色砂質シルト．径 5 ～ 10 mmのにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じる．
③ 暗褐色砂質シルト．にぶい黄褐色砂質土の薄いレンズ状ブロックが縞状に多くみられる．
④ 暗褐色砂質土．
⑤ 砂礫混じりの暗褐色シルト．浅黄色や暗灰色の細砂の薄いレンズ状ブロックが非常に多くみられる．
⑥ 暗褐色シルト．
⑦ 暗褐色シルト．浅黄色砂質土の薄いレンズ状ブロックが多くみられる．
⑧ 暗褐色シルト．浅黄色砂質土や暗灰褐色砂質土のレンズ状ブロックが多くみられる．
⑨ 浅黄色砂質土．Ⅳ層の最上部．



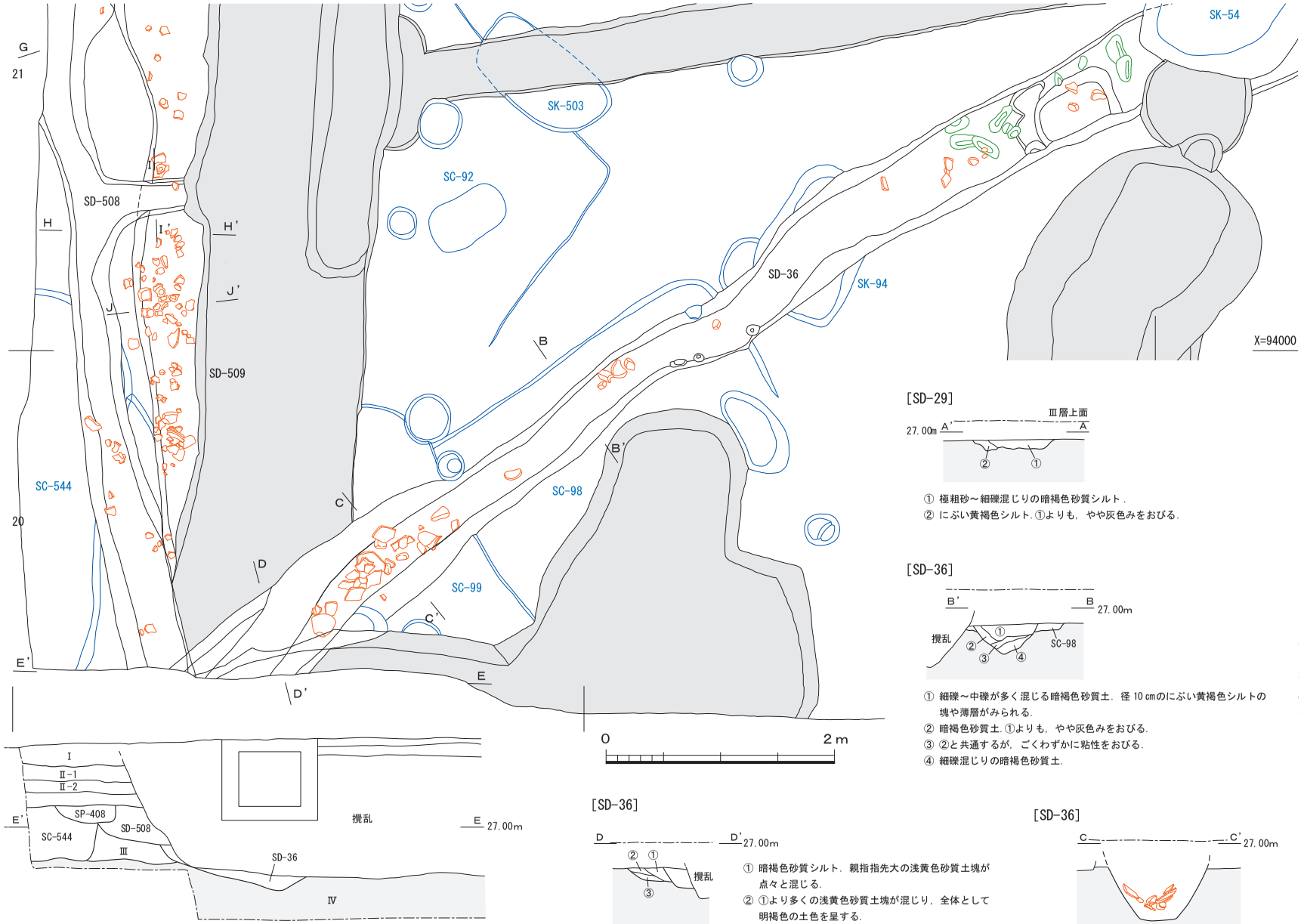


図 118　SD-29・36・508・509 遺構実測図（縮尺 1/50）

〔SD-29・72〕

① 極粗砂が少量混じる灰黄褐色砂質土．
②よりやや黒みをおびる．SD-29 埋土．
② 極粗砂が少量混じる灰黄褐色砂質土．
SD-72 埋土．

〔SD-29〕

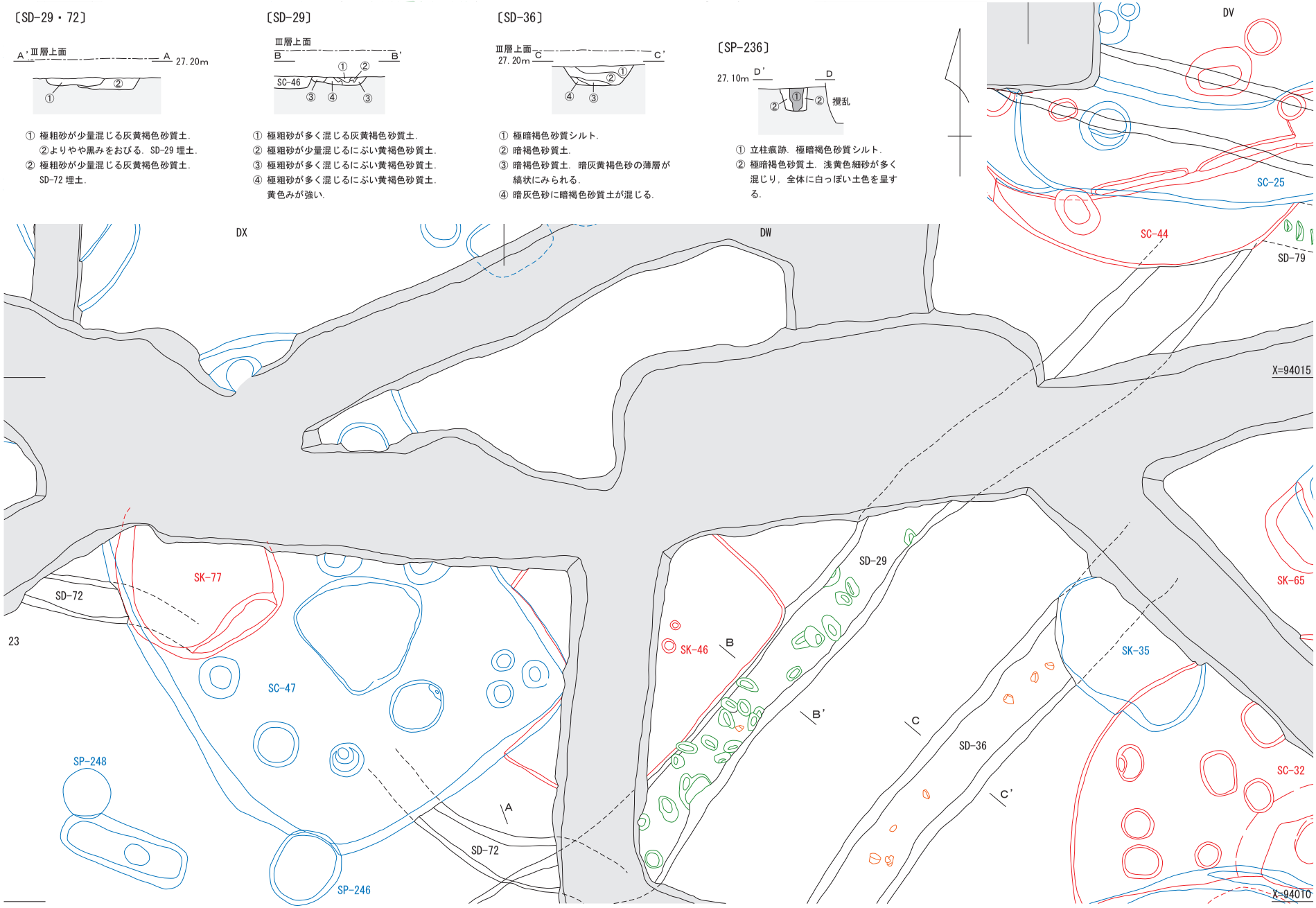
① 極粗砂が多く混じる灰黄褐色砂質土．
② 極粗砂が少量混じるにぶい黄褐色砂質土．
③ 極粗砂が多く混じるにぶい黄褐色砂質土．
④ 極粗砂が多く混じるにぶい黄褐色砂質土．
黄色みが強い．

〔SD-36〕

① 極暗褐色砂質シルト．
② 暗褐色砂質土．
③ 暗褐色砂質土．暗灰黄褐色砂の薄層が
縞状にみられる．
④ 暗灰色砂に暗褐色砂質土が混じる．

〔SP-236〕

① 立柱痕跡．極暗褐色砂質シルト．
② 極暗褐色砂質土．浅黄色細砂が多く
混じり，全体に白っぽい土色を呈す
る．



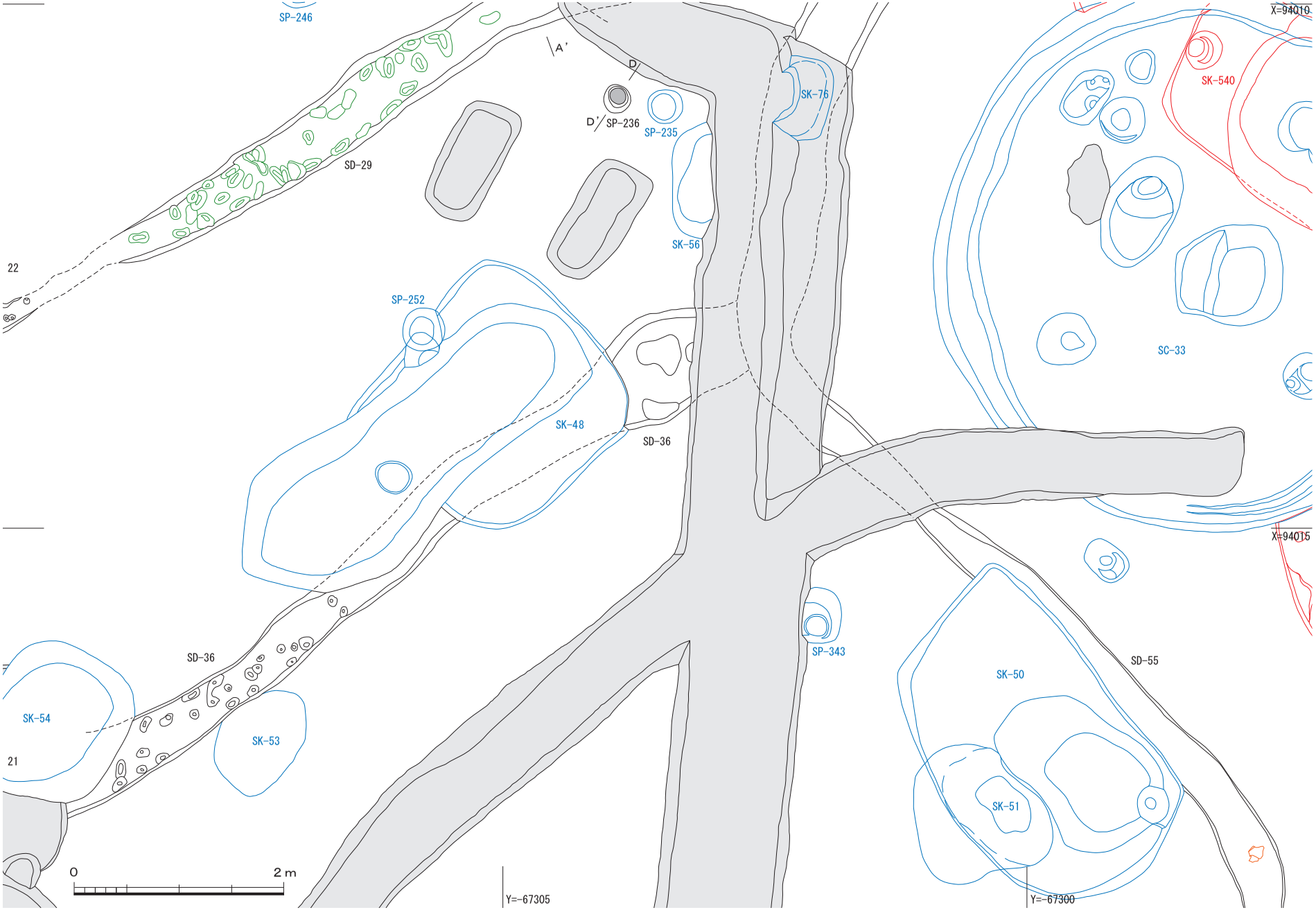
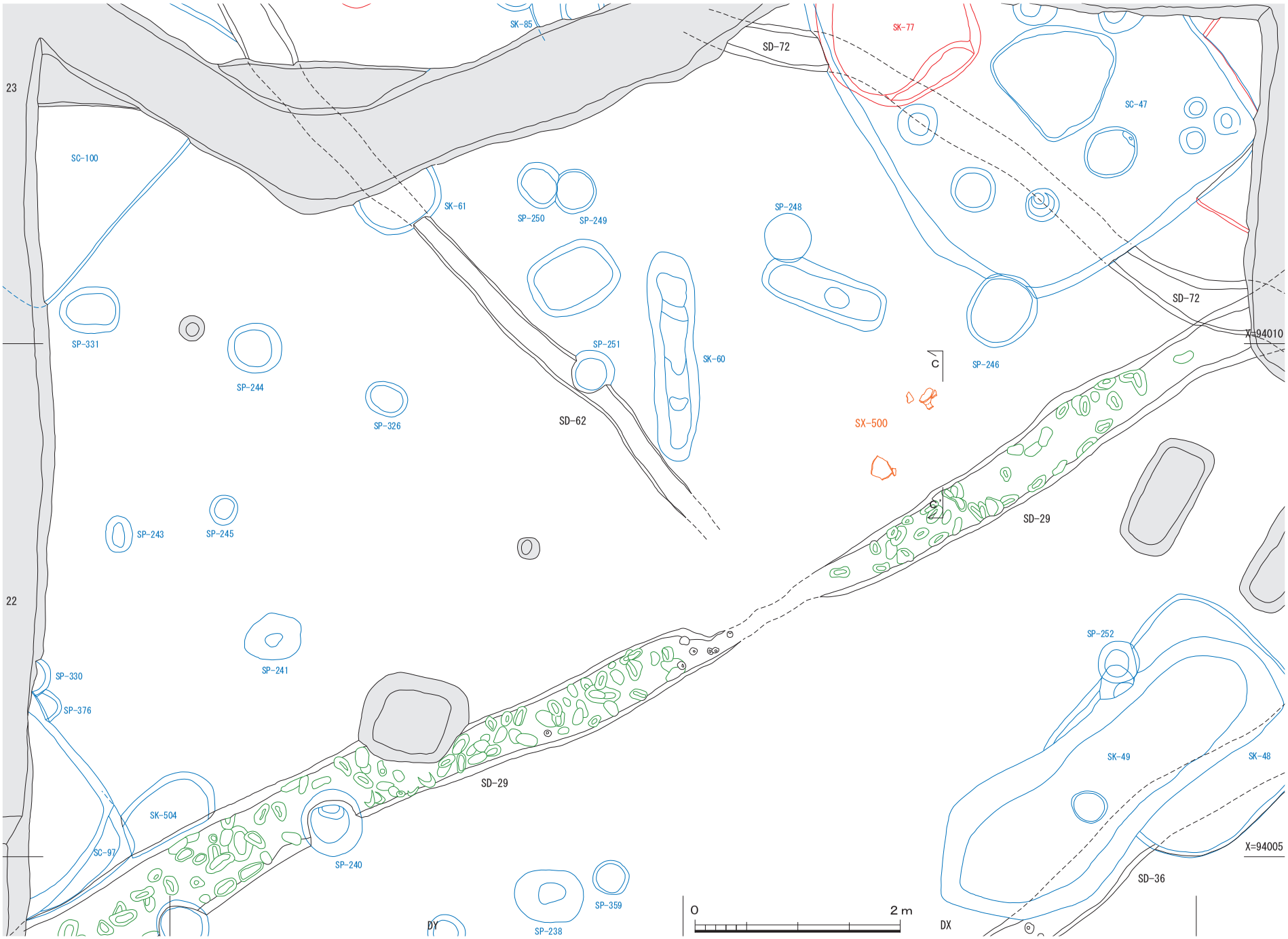


図 119　SD-29・36，SP-236 遺構実測図（縮尺 1/50）

図 120　SD-29・62・72，SX-500，SP-356 遺構実測図（縮尺 1/50）


SK-85
SD-72
SK-77
SC-47
23
SC-100
SK-61
SP-250
SP-249
SP-248
SD-72
SP-331
SP-244
SP-251
SK-60
X=94010
C
SP-246
SP-326
SD-62
SX-500
C'
SP-243
SP-245
SD-29
22
SP-241
SP-252
SP-330
SP-376
SK-49
SK-48
SK-504
SD-29
SC-97
SP-240
X=94005
SD-36
SP-359
SP-238
DY
0
2 m
DX

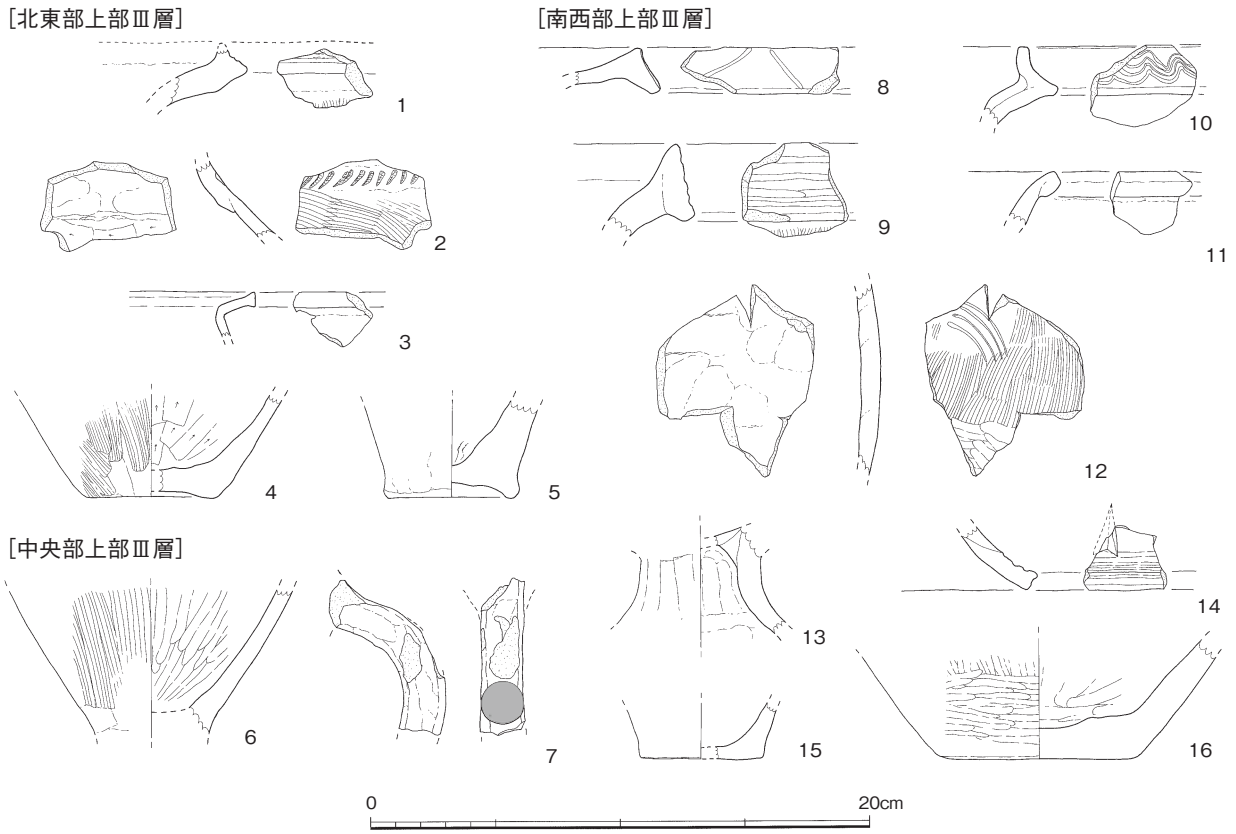
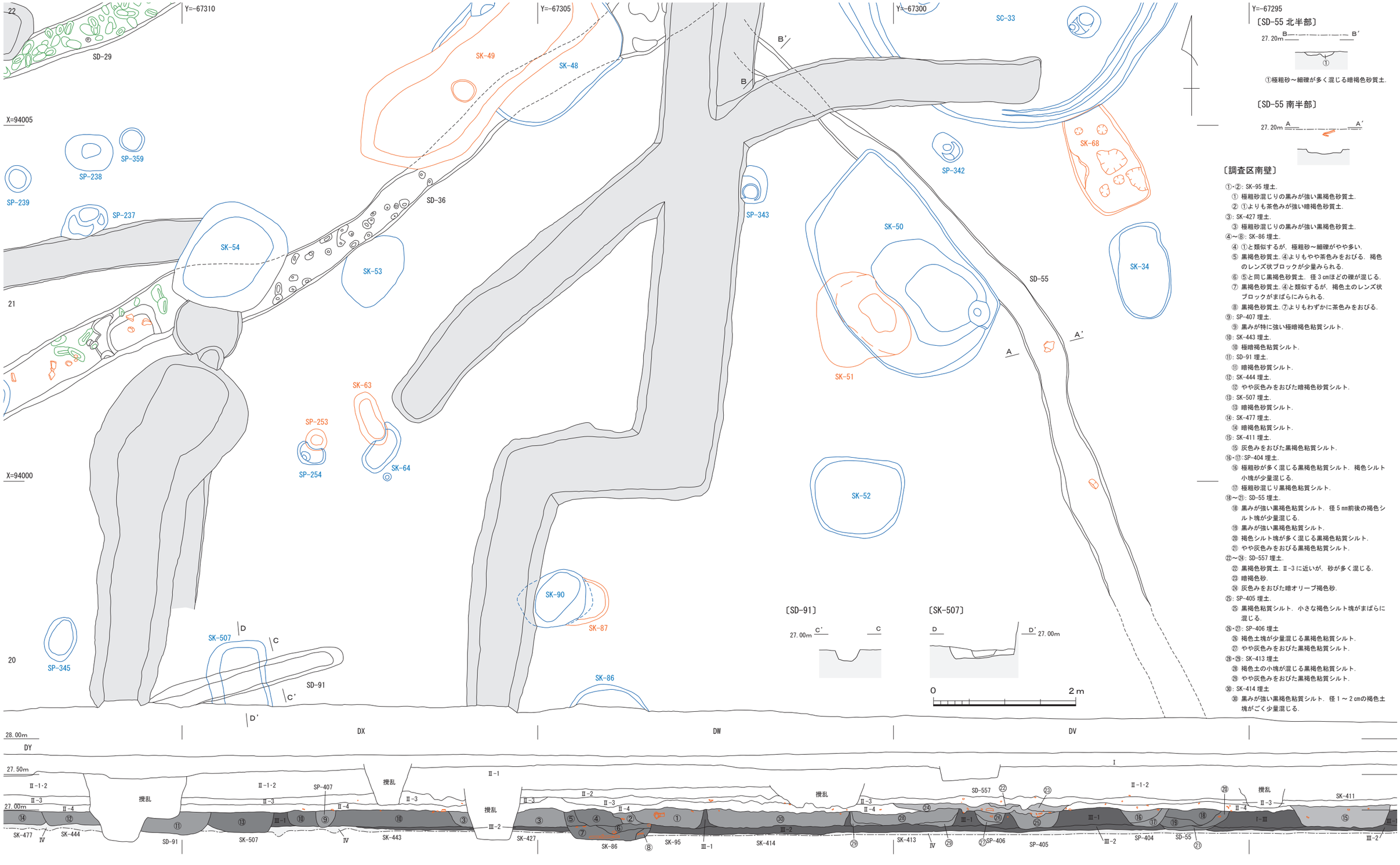


図 121　SD-29 出土土器実測図（縮尺 1/3）

毛目調整の後に横ナデ調整を加える。内面には横ナデ調整を施す。5 は壺の胴部破片で，外面にはミガキ調整，内面にはナデ調整を施す。図 115-2（図版 144-3）は，南西部の DY-22-4 区の溝底から出土した砂岩の亜円礫を利用した敲石である。下端及び側部に敲打痕，上端部には敲打痕や擦痕が残る。重量 189.9 g を測る。

SD-29 の上部Ⅲ層部分からも，遺物が出土しているが，小片ばかりである。SD-29 の一部がかかる DX-22-17 区Ⅲ層から須恵器の小片が 1 点出土している。出土状況が曖昧で，混入品と考え，SD-29 には伴わないものと判断した。これを除くと，出土遺物は弥生土器ばかりである（図 121-1 ～ 16）。1 ～ 5 は SD-29 東北部，図 121-6・7 は中央部，図 121-8 ～ 16 は南西部の上部Ⅲ層から出土した。その中で，6・8 は，SD-29 の掘り形の検出面近くのⅢ層でも最下部から出土している。

1・2 は壺。1（図版 87-5）は口縁部の破片で，端部に細い粘土紐を貼り付け，横ナデ調整を加えて，口縁端面を拡張する。端面には沈線様の凹線文をめぐらす。2（図版 87-6）は肩部破片で，頸部の付け根に刷毛目工具の木口部を押捺して列点文を施文する。3 は甕の口縁部破片で，端部を横ナデ調整で上下に小さく拡張する。4 ～ 6 は底部破片。4 は壺で，やや上げ底。外面には擦過調整，内面には乱雑なケズリ調整を施す。5・6 は甕。6（図版 88-3）は，外面に刷毛目調整を施し，底部近くには篦状工具でナデ調整を加える。内面にはケズリに近い強いナデ調整を施す。7（図版 87-4）は環状の把手破片である。8 ～ 10 は壺である。8（図版 87-3）は，口縁部を下垂させ，端面に先端が丸く細い棒状工具で，上方から下方に向かって「ハ」字形の文様を施文する。9（図版 87-8）は，口縁部に粘土帯を貼り付け，外面に幅広の擬凹線文を 1 条ずつ計 4 条めぐらす。10 は複合口縁壺。口縁部外面に 4 条の波状文を施文する。11（図版 87-7）は鉢の口縁部破片で，口縁部に断面楕円形の粘土帯を貼り付け，下端を細い棒状工具でナデ付け，端面を横ナデ調整する結果，狭い面が生じている。胎土自体は精製され，にぶい橙色を呈し，



①・②: SK-95 埋土.
① 極粗砂混じりの黒みが強い黒褐色砂質土.
② ①よりも茶色みが強い暗褐色砂質土.
③: SK-427 埋土.
③ 極粗砂混じりの黒みが強い黒褐色砂質土.
④～⑧: SK-86 埋土.
④ ①と類似するが，極粗砂～細礫がやや多い.
⑤ 黒褐色砂質土．④よりもやや茶色みをおびる．褐色のレンズ状ブロックが少量みられる.
⑥ ⑤と同じ黒褐色砂質土．径 3 cmほどの礫が混じる.
⑦ 黒褐色砂質土．④と類似するが，褐色土のレンズ状ブロックがまばらにみられる.
⑧ 黒褐色砂質土．⑦よりもわずかに茶色みをおびる.
⑨: SP-407 埋土.
⑨ 黒みが特に強い極暗褐色粘質シルト.
⑩: SK-443 埋土.
⑩ 極暗褐色粘質シルト.
⑪: SD-91 埋土.
⑪ 暗褐色砂質シルト.
⑫: SK-444 埋土.
⑫ やや灰色みをおびた暗褐色砂質シルト.
⑬: SK-507 埋土.
⑬ 暗褐色砂質シルト.
⑭: SK-477 埋土.
⑭ 暗褐色粘質シルト.
⑮: SK-411 埋土.
⑮ 灰色みをおびた黒褐色粘質シルト.
⑯・⑰: SP-404 埋土.
⑯ 極粗砂が多く混じる黒褐色粘質シルト．褐色シルト小塊が少量混じる.
⑰ 極粗砂混じり黒褐色粘質シルト.
⑱～㉑: SD-55 埋土.
⑱ 黒みが強い黒褐色粘質シルト．径 5 mm前後の褐色シルト塊が少量混じる.
⑲ 黒みが強い黒褐色粘質シルト.
⑳ 褐色シルト塊が多く混じる黒褐色粘質シルト.
㉑ やや灰色みをおびる黒褐色粘質シルト.
㉒～㉔: SD-557 埋土.
㉒ 黒褐色砂質土．Ⅱ-3 に近いが，砂が多く混じる.
㉓ 暗褐色砂.
㉔ 灰色みをおびた暗オリーブ褐色砂.
㉕: SP-405 埋土.
㉕ 黒褐色粘質シルト．小さな褐色シルト塊がまばらに混じる.
㉖・㉗: SP-406 埋土
㉖ 褐色土塊が少量混じる黒褐色粘質シルト.
㉗ やや灰色みをおびた黒褐色粘質シルト.
㉘・㉙: SK-413 埋土
㉘ 褐色土の小塊が混じる黒褐色粘質シルト.
㉙ やや灰色みをおびた黒褐色粘質シルト.
㉚: SK-414 埋土
㉚ 黒みが強い黒褐色粘質シルト．径 1 ～ 2 cmの褐色土塊がごく少量混じる.

図 122　SD-36・91，SK-55 遺構実測図及び DU ～ DY-20 区調査区南壁土層断面図（縮尺 1/50）

胎土の特徴はSC-84の鉢（図73-22），SC-506から出土した甕（図86-3・4）と共通する。口縁部の粘土帯の芯部には，淡い黒色の黒化層が残る。12（図版87-9）は胴部破片で，器体の傾きは不明である。外面に4条の弧線を描く。記号文の可能性が高い。1.2～1.5㎝間隔で粘土接合線が残る。13・14は高坏の脚部破片。13は低い脚部で，緩やかに「ハ」字形にひろがる。脚上半部に篦状工具による上方へのナデ調整を施した後に，下半部を中心に横ナデ調整を加える。14（図版88-1）は，脚裾に3条，脚端面に1条の幅広の沈線様の凹線文をめぐらす。15は平底の甕の破片。16は壺の底部破片。底部裾が摩滅し，不安定な平底となっている。

SD-29は弥生時代後期初頭と考えられるSK-46に切られ，同時期のSC-97を切る。上部Ⅲ層では，北半部で弥生時代中期後葉～後期中頃，中央で中期後葉～後期，南半部で後期初頭～中葉の土器が出土している。これら上部Ⅲ層出土土器がすべてSD-29に伴うかは確定できないが，他の遺構との切り合い関係を手がかりとして弥生時代後期初頭に位置づければ大きな矛盾はない。ここでは，SD-29の掘削時期を当該期に求めておく。

36号溝（SD-36，図115・117～119・122～125，図版27・28・88～93・137）

DV～DZ-20～23区に位置する。調査区の南西角から北東に向かってのびる（図117～119・122，図版27・29）。SK-35・54・531に切られ，SC-98･99，SK-49･53･94，SP-485を切る。3.2～3.8ｍの間隔で，SD-29とほぼ並行する溝で，中央東よりのDW-22区の塹壕を挟んで，SD-29との間隔は1.4ｍと狭くなる。SD-36の調査に当たっては，DW-22区の塹壕よりも北側を北東部，南側を中央部～南西部に分けて進めることとした。

SD-36はⅣ層上面で掘り形の輪郭を確認できた。総延長25.5ｍを測る。Ⅳ層上面での溝幅は42～65㎝を測る。深さは19～25㎝で，中央部の溝底には一部，幅27㎝前後，高さ12～15㎝，深さ4～9㎝の楕円形や半月形の掘削痕跡もみられるが，短径7～10㎝，長径12～15㎝，深さ2～4㎝の小さな楕円形や円形の小穴状の窪みが多い。

溝の断面形は，北東部では逆台形で，中央部～南西部ではV字形に近い。掘り形埋土は極暗褐色～暗褐色の砂質シルトを主体とするが，北東部では溝底に暗灰黄褐色砂が縞状にみられたり，暗灰色砂に暗褐色砂質土が混じる。中央部～南西部では浅黄色砂質土塊が混じる。

このように，北東部と中央部～南西部で，溝幅，断面形，埋土が異なる。東北部と中央部～南西部を分ける塹壕部分に向かって，ほぼ直交してSD-55がのびてくる。後述するように，SD-55の断面形は逆台形であり，SD-36北東部が南東に折れてSD-55につながる可能性を考える。

また，SD-36の北東方向への延長線上にはSD-15がある。SD-36はDV-24区の攪乱溝より北側では途切れているが，前述したようにSD-15が逆台形の断面で，大小の浅黄色の砂質土塊が混じる暗褐色砂質シルトを埋土とし，SD-36の東北部の断面形と埋土と共通する。一連の溝である可能性を考える。

さらに，調査区南西角付近では，溝幅が94㎝と広くなり，深さ47㎝ほどの落ち込みを確認できた。SD-36の他の部分とは異なり，弥生土器の大きな破片が折り重なるように出土している（図版28）。他の遺構との重複も考えたが，土層断面では切り合いは確認できなかった。

掘り形埋土からは，点々と遺物が出土しているが，遺物が集中する箇所は，調査区南西角付近の落ち込み部分である（図118・123-1～11）。埋没途中に一気に投棄された状態で出土している。図123-1（図版91･92-1）は壺で，球形の胴部から，「ハ」字形に頸部が窄まり，強く外反する口縁部がつく。底部は中央がナデ付けられ若干接地面より浮く。外面には口縁部から肩部に横ナデ調整，胴部上半には縦方向の刷毛目調整を施した後にナデ調整，胴中位には横方向，胴部下半には縦方向のミガキ調整を施す。口縁部内面には横方向のミガキ調整，頸部には成形時に生じた絞り痕が残る。胴部内面はナデ調整で，下半部には縦方向の刷毛目調整を

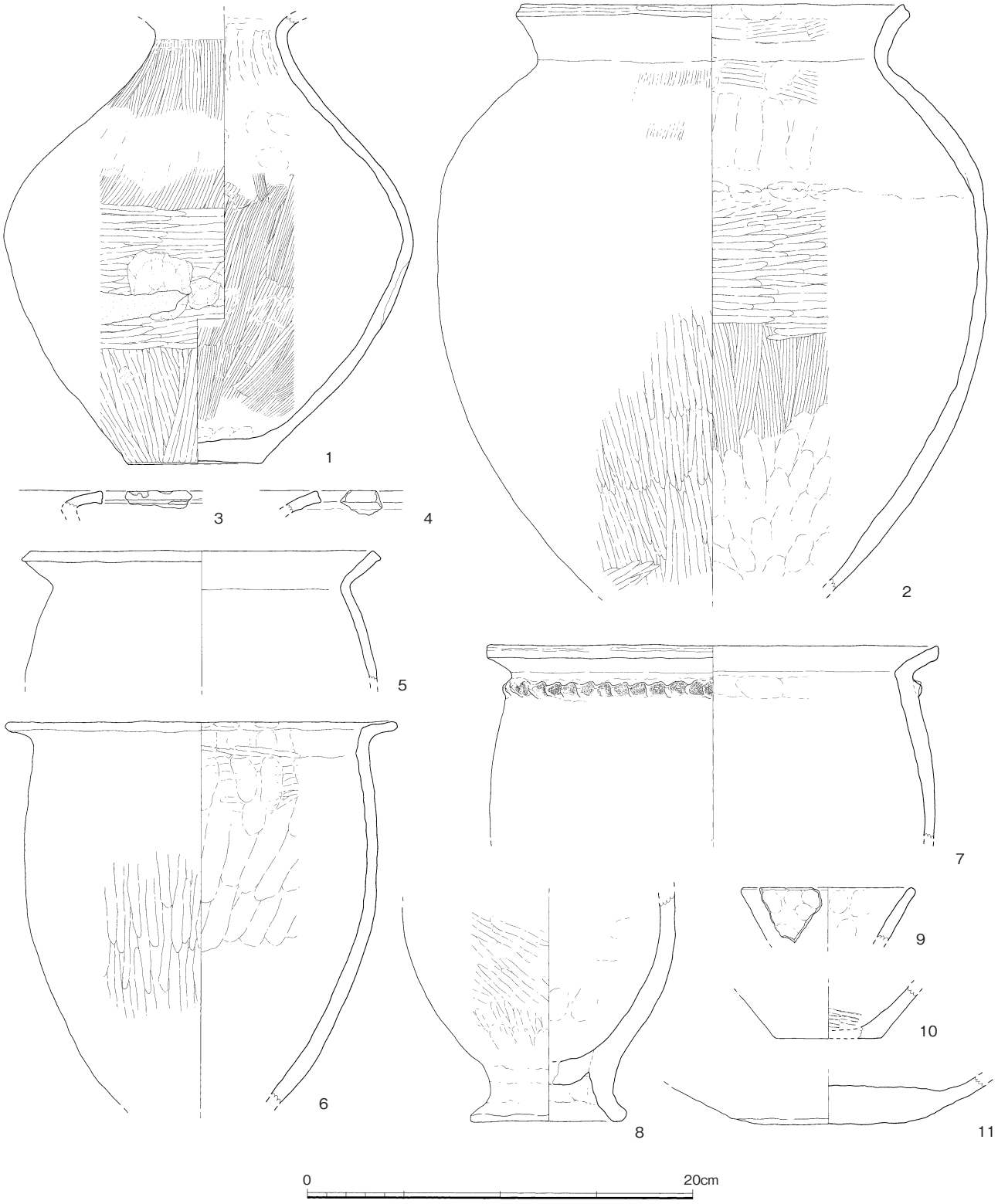


図 123　SD-36 南半部掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）

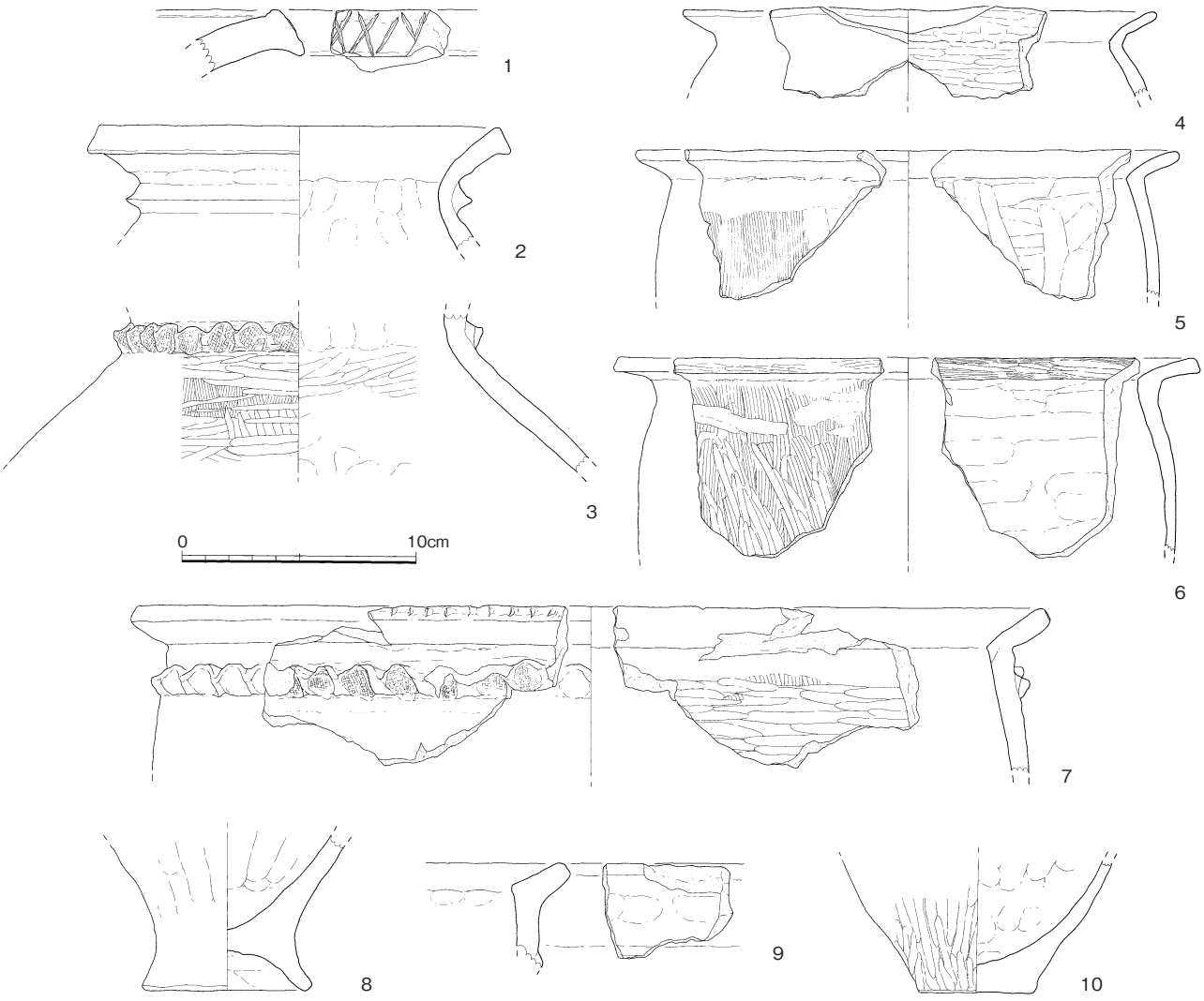


図 124　SD-36 中央部及び北東部掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）

施す。胴部外面には焼成破裂が生じている。2(図版 89-1）は「く」字形に屈曲する口縁部の付け根が窄まる。無頸壺に分類する。肩部の張りは強い。胴部外面には縦方向のミガキ調整痕が残り，胴部内面には下半部に刷毛目調整，上半部には擦過調整の痕跡が残る。刷毛目調整から擦過調整への移行は漸移的で，部位ごとの乾燥状態が異なるため，こうした調整痕が残されたと考える。3～7は「く」字形口縁をもつ甕である。3 は口縁部を逆Ｌ字形に強く屈折させる。6（図版 90-1）は，口縁部を指先で強く屈曲させ，横ナデ調整を施す。胴部外面には上半部をナデ調整，下半部には縦方向のミガキ調整が施される。胴部外面に煤が付着し，胴下半部は二次的火熱を受け，器表面が薄く剥落する。7（図版 88-7）は，口縁端面には横ナデ調整の結果，浅い沈線状の凹みがめぐる。口縁屈曲部から若干下がった位置に，断面三角形の突帯を貼り付け，平織りの布を巻いた指頭を押捺して太い刻目を施す。8（図版 92-2）は脚台付の鉢で，胴部と脚台部は円盤充填で接合される。9 は口縁部が逆「ハ」字形にひらく小型鉢である。内外面に成形時の指頭痕が残る。10・11 は壺の底部。平底である。

図 124-1 ～ 5・8 と図 115-3・4 は，SD-36 の中央部～南西部，図 124-6・7・9・10 は北東部の掘り形埋土から出土した。図 124-1 ～ 3 は壺。図 124-1（図版 92-4）は，口縁端面に篦状工具で X 字文を施文する。2（図版 93-3）は，口縁部下端

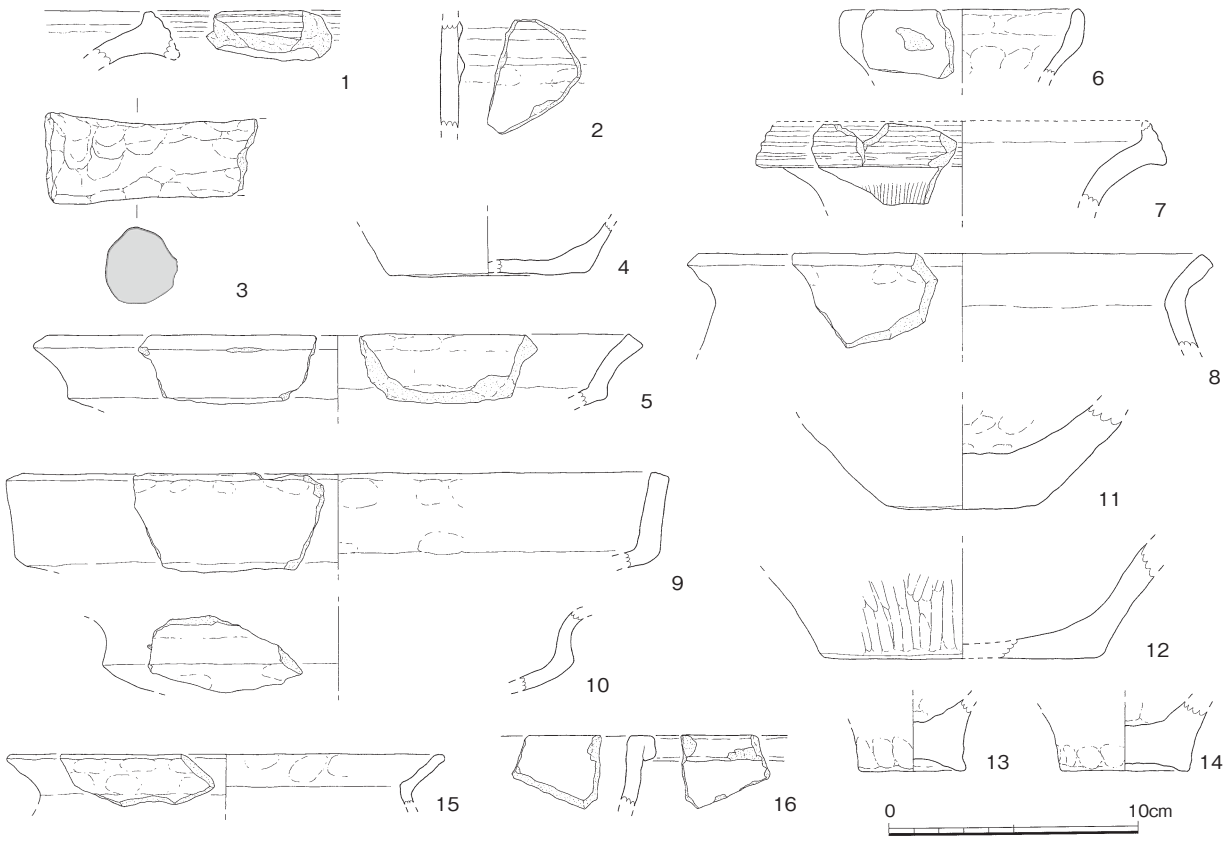


図 125　SD-36 上部Ⅲ層部分出土土器実測図（1 ～ 5：南西部，6 ～ 14：中央部，15・16：北東部，縮尺 1/3）

を横ナデ調整で小さく引き出し，口縁屈曲部に断面三角形突帯を 1 条貼り付ける。3(図版 88-6)は，口縁屈曲部に断面三角形突帯を貼り付け，平織りの布を巻いた指頭を押捺して太い刻目を施す。4 ～ 7 は「く」字形口縁をもつ甕である。4 は胴部が張るが，5・6 の胴部の張りは弱い。5（図版 90-2）の口縁部には横ナデ調整，胴部外面には刷毛目調整が施される。口縁屈曲部には板状工具の木口部が接触した痕跡が残る。胴部内面にはナデ調整が施され，細密条線が残されている。6（図版 90-3）の胴部外面には縦方向の刷毛目調整を施し，胴部中位には縦方向のミガキ調整が追加される。口縁部内面には横方向の刷毛目調整とナデ調整，胴部には横方向のナデ調整を施す。胴部には煤が付着する。7（図版 88-8）は大型品で，口縁端面に刷毛目工具の木口部を押捺して刻目を施す。口縁屈曲部からやや下がった位置に，断面三角形突帯を貼り付け，平織りの布を巻いた指頭を押捺して太い刻目を施す。8（図版 93-4）は，裾部が「ハ」字形にひらく脚台状の甕の底部である。9（図版 92-5）は，内傾する細長い台形状の口縁部をもつ山ノ口式系土器の甕の口縁部破片で，胴部上半に低い断面三角形の突帯がめぐる。暗褐色～褐色を呈し，胎土には金雲母が含まれる。10 は甕の平底の破片。図 115-3（図版 137-1）は，柱状片刃石斧の破片である。断面形態は縦長の長方形を呈する。緑色片岩製で，残存重量 140.4 ｇを測る。図 115-4 は，砂岩の亜円礫を利用した敲石で，扁平な礫の側縁に敲打痕が残る。重量 598.3 ｇを測る。

SD-36 上部Ⅲ層部分では，SD-36 南西部に当たる位置から図 125-1 ～ 5，中央部に当たる位置から図 125-6 ～ 14，北東部の上部Ⅲ層部分からは図 125-15・16 が出土している。図 125-1 は大きく外反する壺の口縁部破片である。口縁端部を上下に拡張し，端面に波板状の凹線文を 3 条以上めぐらす。2 は胴部に低い三角形突帯を 2 条貼り付けた甕の胴部破片である。外面は灰黄褐色，内面はに

ぶい黄橙色を呈するので，山ノ口式系土器の模倣品と考えた。3（図版 93-2）は棒状の把手の破片である。4 は古代～中世の土師器坏の底部破片。5 は口縁部が短く反転してひろがる高坏の破片である。6 は，口縁部が内彎ぎみに立ち上がる壺の口縁部破片である。7（図版 92-3）はラッパ形にひろがる口頸部をもつ壺で，口縁端部を上下に拡張し，端面に浅い沈線様の凹線文が 4 条めぐる。8 は「く」字形口縁の甕。9・10 は高坏。9（図版 93-1）の口縁部は短く，ほぼ直立する。11 ～ 14 は底部破片。11 は厚い平底の壺，12 は平底の鉢または壺である。13・14 は厚手の上げ底の甕である。15 は「く」字形口縁の甕で，薄手のつくりである。16 は備前焼の鉢で，口縁部を玉縁状に折り返し，断面は四角形を呈する。

SD-36 では，上部Ⅲ層部分から古墳時代や中世～近世の遺物が出土しているが，掘り形埋土からは弥生時代の遺物だけが出土している。また，溝の断面形が逆台形で溝底に暗灰黄褐色砂が縞状にみられたり暗灰色砂に暗褐色砂質土が混じる東北部では，弥生時代後期初頭の特徴をもつ甕（図 124-6・7）が出土している。これ対して，断面形が V 字形に近く埋土に浅黄色砂質土塊が混じる中央部～南西部では，後期初頭の甕（図 124-5･8）に加えて，後期前葉と考えられる甕（図 124-4）がみられる。さらに，調査区南西角付近の落ち込み部分からも，後期初頭の壺（図 124-1）や甕（図 124-6・7）とともに，後期前葉まで下がる甕（図 124-5）が出土している。このように，SD-36 では，

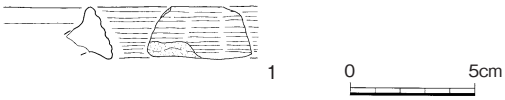


図 126　SD-45 出土土器実測図（縮尺 1/3）

北東部と中央部～南西部で，断面形，埋土，出土遺物に違いが認められる。

後述するように，SD-36 の東北部と中央部～南西部を分ける塹壕部分に向かって，ほぼ直交して SD-55 がのびてくる。断面形は逆台形で，埋土は極粗砂～細礫が多く混じる暗褐色砂質土ないしは，褐色シルト塊が混じる黒褐色粘質シルトで溝底にはやや灰色みをおびる黒褐色粘質シルトが堆積する。掘り形埋土から出土した土器はないが，上部Ⅲ層部分から出土土器はいずれも後期初頭の時間幅の中に収まる。

他の遺構との切り合い関係からみると，SD-36 の北東部は後期初頭の SK-35 に切られ，中央部～南西部では中期後葉の SC-98，後期初頭の SC-99 を切り，後期前葉の SK-54 に切られている。一方，SD-55 は弥生時代後期初頭～前葉に人為的に埋め戻された土壙と考えられる SK-50 に切られている。

以上から，弥生時代後期初頭に SD-36 北東部分が南東に折れて SD-55 につながる溝として掘られ，その後，後期前葉に南東方向にのびる SD-36 の中央部～南西部分が延長されたと考える。

45号溝（SD-45，図110・111・126，図版93）

DU・DV-24・25 区に位置する南東 - 北西方向にのびる溝である（図 110・111）。SC-25･41･42･43 を切るが，SC-41 の掘り下げ中に確認できた。溝長は 7.5 m，幅 32 ～ 50㎝を測り，残存する深さは 20㎝ほどである。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトである。

SD-45 は SC-41 の掘り下げ中に確認したため，SC-41 の上部と SD-45 の上部の遺物に混乱が生じている。SD-45 の掘り形埋土の出土遺物と確定できる遺物は，2 点の弥生土器の小片だけである（図 126-1，図版 93-6）。ともに掘り形埋土から出土している。図 126-1（図版 93-5）は，壺の口縁部破片で，端部を上下に拡張して 5 条の沈線様の凹線文をめぐらす。図版 93-6 は，外面にナデ調整を施す甕の胴部破片である。煤が付着する。内面には成形時の指頭圧痕が残る。

出土遺物は少なく，いずれも小片で，遺構の時期を特定できない。しかし，弥生時代後期後葉の SC-25 を切ることから，弥生時代後期後葉もしくは古墳時代後期の溝と考えておきたい。

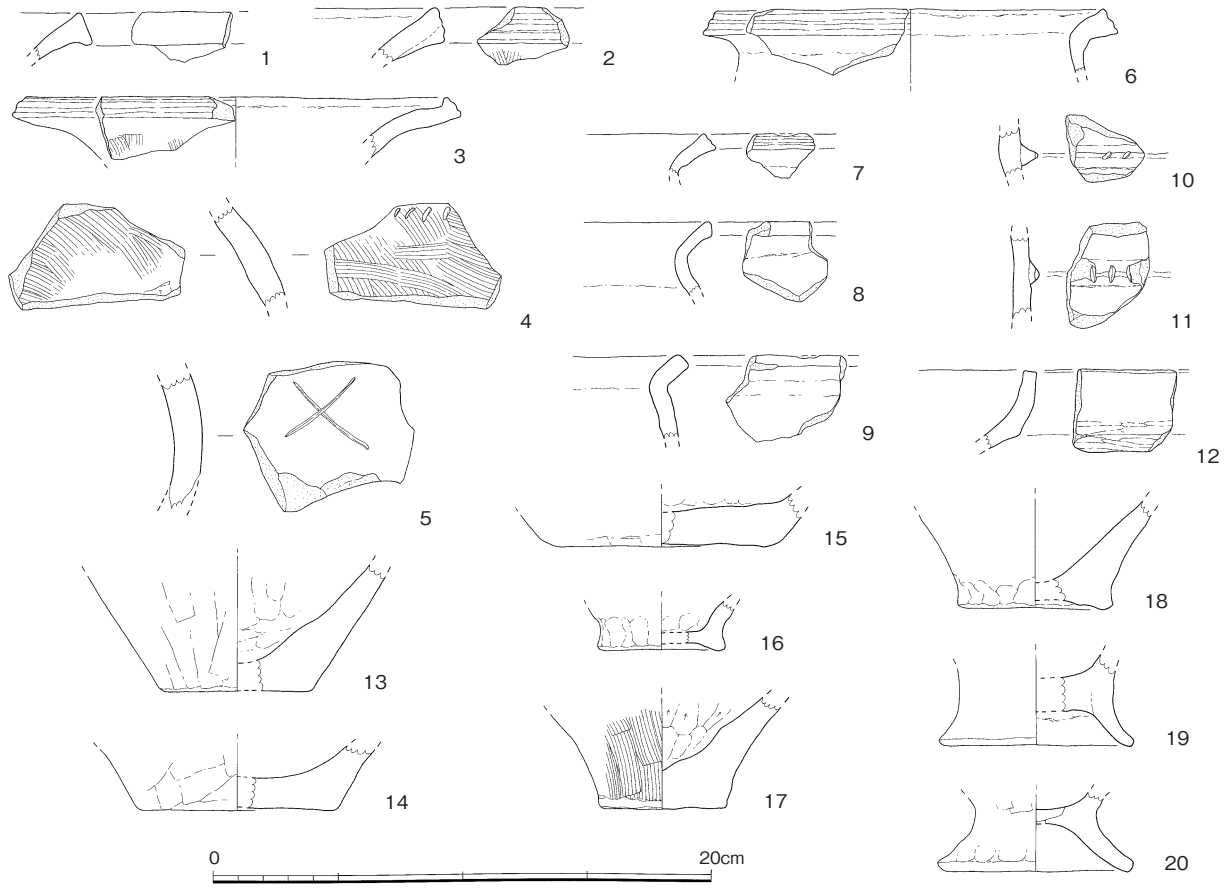


図 127　SD-55 上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺 1/3）

55号溝（SD-55，図117・122・127，図版29・93・94）

DV・DW-20 ～ 22 区のⅣ層上面で検出した緩やかに東に弧を描きながら南東 - 北東にのびる溝である（図 117・122，図版 29-1）。SK-50 に切られる。北端は DW-22 区南東部で塹壕に破壊され途切れる。DW-22 区南東部でほぼ直角に折れ，SD-36 北東部に連結すると考える。

Ⅳ層上面では南端も途切れるが，調査区南壁面でⅢ層上面から掘り込まれた SD-55 の延長部分を確認できた（図 122，図版 29-2）。残存長は 11.3 ｍを測る。溝幅は，北半部で 30 ～ 37㎝，南半部で 37 ～ 60㎝，調査区南壁では 1 ｍ近い。Ⅳ層上面では深さ 3 ～ 7㎝しか残存していないが，調査区南壁では 38㎝を測る。溝底にはかなり凹凸がみられ，部分的に径 5 ～ 10㎝，深さ 4 ～ 10㎝の不整な円形や長円形の窪みを確認できたが，明確な掘削痕跡ではない。掘り形埋土は極粗砂～細礫が多く混じる暗褐色砂質土，ないしは褐色シルト塊が混じる黒褐色粘質シルトで，溝底にはやや灰色みをおびる黒褐色粘質シルトが堆積する。

SD-55 では，掘り形埋土から出土した遺物はないが，上部Ⅲ層部分からは比較的多くの弥生土器が出土している（図 127-1 ～ 20）。1 ～ 8・12・14・16 は SD-55 南半部，9 ～ 11・13・15・17 ～ 19 は中央部，20 は北端部の上部Ⅲ層部分から出土している。

図 127-1 ～ 5 は壺。1 は口縁端部を下方に拡張する。2（図版 93-7）は，口縁部下面に粘土を貼り付けて，端面を拡張し，3 条の沈線様の凹線文をめぐらす。3（図版 93-9）は，ラッパ形にひろがる口頸部をもち，口縁端部を上方に折り曲げ，端面に 2 条の沈線様の凹線文をめぐらす。4（図版 93-8）は，頸部の付け根に列点文を施文する。5（図版 94-2）は肩部破片で，篦状工具でＸ字形の記号文を描く。

6 ～ 11 は甕。6（図版 94-1）は小型品で，口縁部を肥厚させ楔形の断面形の口縁部をつくる。上端部を突起状に小さく折り曲げ，端面には 2 条の沈線様の凹線文をめぐらす。口縁屈曲部には成形時に生じた粘土の撚れが残る。7 は「く」字形に緩やかに屈曲する甕の口縁部である。横ナデ調整で口縁端面を若干拡張し，2 条の擬凹線文をめぐらす。8 は口縁部に篦状工具を押しつけ緩やかに口縁部を外反させる。9 は厚手のつくりの小型品で，口縁部を短く屈曲させる。10 は断面三角形突帯を貼り付けた胴部破片で，篦状工具で刻目を施す。器体の傾きは，小片であるために不確実である。高さのある突帯で，在地の土器にはあまりみられない事例である。11 は，10 と比べて低い断面三角形突帯を貼り付け，太い刻目を篦状工具で施す。外面には煤が付着する。12 は高坏で，坏部中位で反転して緩やかに彎曲しながら立ち上がる。13 ～ 20 は底部破片。13 ～ 15 は壺の平底の破片，16 ～ 20 は甕である。16 は小型甕の上げ底の底部破片で，底部側縁と内底面には成形時の指頭圧痕が残る。17 は厚い平底の甕もしくは鉢。18 は上げ底で，底部側縁には成形時の指頭圧痕が残る。19・20 は裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の底部で，19 の脚台部内面には粘土接合線が残り，20 の内底面には径 2.6㎜ほどのボタン状の粘土円盤が充填されている。

SD-55 では，掘り形埋土から遺物は出土していない。しかし，上部Ⅲ層から出土した弥生土器はいずれも弥生時代後期初頭に比定できる。したがって，SD-55 の埋没時期は当該期と考えておく。

62号溝（SD-62，図117・120・128，図版29・94）

DX ～ DZ-22 ～ 25 区に位置し，緩やかに弧を描きながら北半部は SD-72 とほぼ平行しながら南東 - 北西方向にのびる（図 117・120，図版 29-1）。全長 14 ｍを確認できた。SK-61 に切られる。Ⅳ層上面で掘り形の輪郭を検出した。Ⅳ層上面での溝幅は 21 ～ 26cm，最大 42cmを測る。深さは 4 ～ 8cmで，溝底には凹凸があり，断面は不整台形となる。掘り形埋土は砂礫が若干混じる黒褐色砂質土で，径 2 ～ 3cm 大の楕円形の褐色塊が少量みられる。場所によっては，浅黄色の細砂質土と暗褐色砂質シルトが互いに塊となって混じりあう。流水の痕跡はみられず，Ⅳ層起源の小塊が多く混じることから，人為的に埋め戻された集落内の区画溝と考える。

SD-62 の掘り形埋土から出土した遺物は弥生土器の小片ばかりで，図化できた遺物は北半部の埋土中から出土した鉢が 1 点だけである（図 128-1）。直立する口縁部をもつ鉢の口縁部破片で，口縁部周辺には横ナデ調整，体部には下から上方へ向かう擦過状の調整痕が残る。小片のため器体の傾きは不明である。

以上の掘り形埋土から出土した遺物に対して，SD-62 上部Ⅲ層部分から出土した遺物は，弥生土器の破片ばかりで量も少ない（図 128-2 ～ 8）。2 は SD-62 の南端部，3・4・7 は北半部，5・6・8 は南半部の上部Ⅲ層部分から出土している。2（図版 94-4）は山ノ口式系土器の甕で，内傾する断面台形の口縁部を成形する。胎土には金雲母が混じ

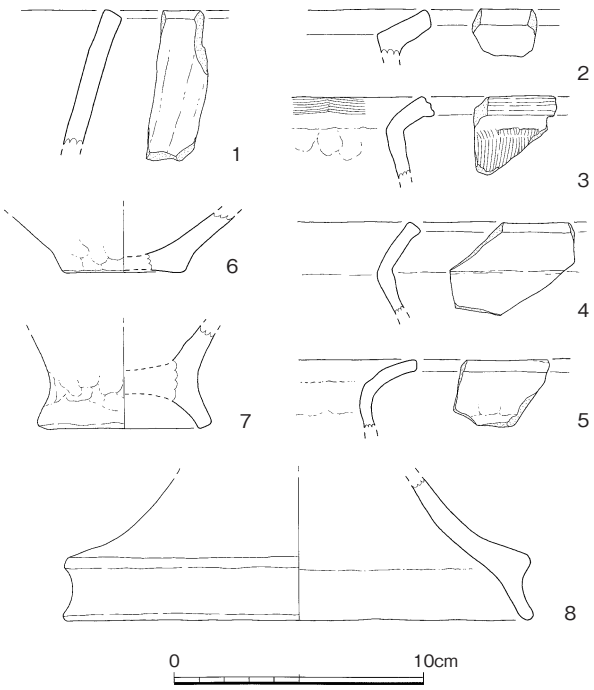


図 128　SD-62 出土土器実測図
（1：掘り形埋土，2 ～ 8：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

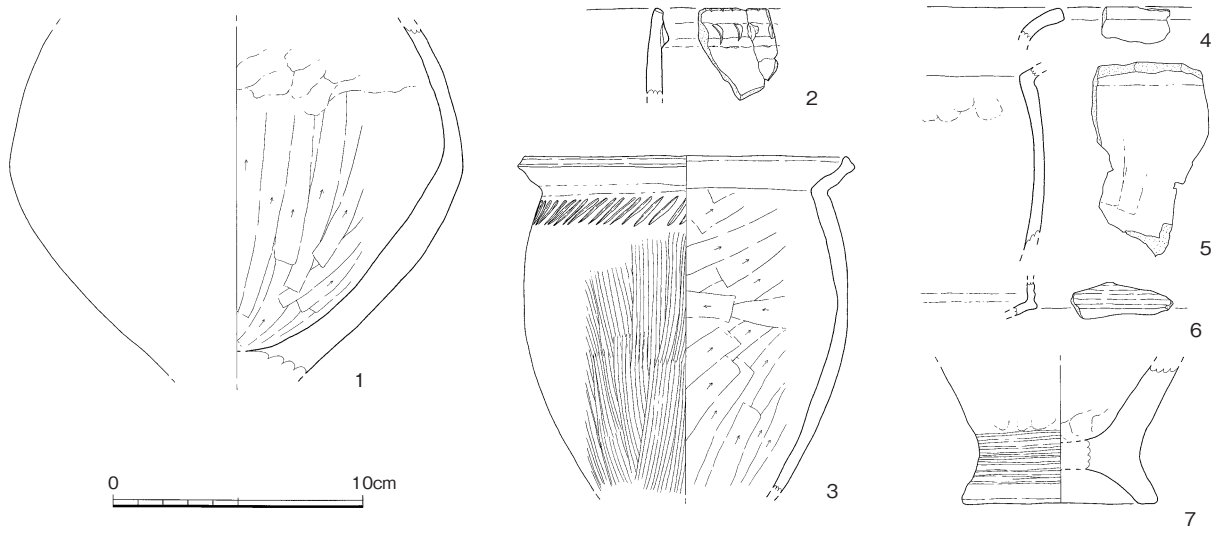


図 129　SD-72 出土土器実測図（1 ～ 6：上部Ⅲ層部分，7：掘り形埋土，縮尺 1/3）

る。3・4 は「く」字形に短く屈曲する甕の口縁部破片。3（図版 94-3）は，口縁端面を横ナデ調整で若干拡張して，2 条の沈線様の凹線文をめぐらす。4 の口縁屈折部には口縁を折り曲げた際に生じた浅い段がめぐる。5 は緩やかに外反する甕の口縁部破片で，屈曲部には成形時の指頭痕がわずかに残る。6 は平底の壺の破片。外面は二次的な火熱を受けて赤変する。7 は裾部が「ハ」字形にひらく脚台状の甕の底部破片。外面は二次的な火熱を受けて赤変する。底部側面には成形時の指頭痕が多く残る。8 は高坏の脚部破片で，ラッパ形にひらく脚裾が一旦反転して短く「ハ」字形にのびる。反転部は箍状となっている。

SD-62 は，Ⅳ層起源の浅黄色の細砂質土の小塊やⅢ層起源の暗褐色砂質シルト塊が混じり，人為的に埋め戻されている。上部Ⅲ層部分出土の遺物も，埋め戻しの際に混入した遺物と考えられる。時期的には弥生時代後期初頭（図 128-2・3・7）と後期前葉（図 128-4・8）に限られている。SD-62 は弥生時代後期前葉に埋め戻される集落内の区画溝と捉えることができる。

72号溝（SD-72，図117・120・129，図版30・31・94・95）

DW ～ DY-23 ～ 25 区に位置する。南側のほぼ並行する SD-62 と同じく，緩やかに弧を描きながら南東 - 北西方向にのびる（図 117・120，図版 30-1）。SC-84，SK-85 を切り，SC-47，SD-29・79 に切られる。北端は DY-25 区の SD-79 に切られる部分で，南端は DX-23 区の SD-29 に切られた部分で途切れ，全長は 16 ｍを測る。Ⅳ層上面で確認できた溝幅は 28 ～ 42㎝，深さは 10 ～ 16㎝である。溝底には小さな凹凸がみられ，北半部の DY-24･25 区では，幅 20 ～ 32㎝，高さ 8 ～ 12㎝，深さ 2 ～ 7㎝の楕円形や半月形の掘削痕跡が，溝方向に直交したり，溝の側縁に多数残る。掘り形埋土は，場所によって，褐色土塊が混じる暗褐色砂質土であったり，砂礫が混じる灰黄褐色砂質土であったりする。

SD-72 の掘り形埋土からは弥生土器の甕の底部破片が 1 点だけ出土した（図 129-7）。しかし，出土位置が SC-84 との重複部分であり，SC-84 に埋積していたものが混入したものと考えられる。この他，上部Ⅲ層部分から比較的多くの土器片が出土しているが，いずれも弥生土器の小片で図示できた遺物は少ない（図 129-1 ～ 6）。1・3・4 は SD-72 の南半部，2・6 は中央部，5 は北半部の上部Ⅲ層部分から出土している。

図 129-1 は球形の壺の胴部破片である。外面器表面が剥離しているため，調整は不明。内面は下方をケズリ調整した後に，肩部を中心として指頭によるナデ調整を加える。2（図版 94-5）は刻目凸帯文土器の深鉢の口縁部破片で，口縁端面を小さく面取りした後に爪で刻目を施す。さらに，口縁端部から若干下がった位置に断面三角形突帯を貼り付けて爪で刻目を加える。3（図版 95-1）は口縁部を「く」字形に屈折させる小型甕である。口縁端部を横ナデ調整で上方に摘み出す。口縁屈折部直下に篦状工具で短斜線文を施文する。胴部外面には刷毛目調整，内面にはケズリ調整を施す。胴部下半外面には煤が付着する。4 は「く」字形に緩やかに屈曲する甕の口縁部破片。5 は甕の肩部破片で，外面は器表面が荒れ，部分的に篦状工具によるナデ調整痕を観察できるのみである。6（図版 94-6）は高坏の坏部破片。坏部中位で反転して立ち上がり，3 条以上の幅広の沈線様の凹線文をめぐらす。器表面には赤褐色の粘土を塗布する。7（図版 94-7）は裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の甕の底部破片で，底部側面には横ナデ調整で生じた沈線状の線条痕が帯状に残る。

SD-72 は，弥生時代後期初頭の SC-84，SD-29，SK-85，SD-29 を切り，後期前葉の SC-47 に切られている。上部Ⅲ層部分から出土した土器は，混入品と考えられる深鉢（図版 94-5）を除けば，後期初頭に比定できる。したがって，SD-72 は弥生時代後期初頭に埋め戻される集落内の区画溝と考える。

73号溝（SD-73，図110・112・130，図版30・94）

DZ-25 ～ 27 区に位置する。DZ-25・26 区で掘り形の輪郭を検出し，その延長線上の DZ-27 区でも西半部を既設管路の掘り形で破壊された溝を確認でき，SD-73 とした（図 110・112）。SC-71・519 を切る。溝幅 77 ～ 80cm，掘り形を検出できたⅣ層上面からの深さ 36 ～ 38cmを測る。断面はU字形を呈する。掘り形の上部は，細礫が混じる暗褐色～黒褐色の砂質土で埋積され，溝底には，灰白色粗砂層や，極暗褐色シルトと灰色微細砂層が縞状の互層をなす流水痕跡が残る。既設配管による撹乱溝を挟み北側の DY・DZ-28 ～ 31 区で出土した SD-520 と断面形及び埋土の堆積状況も共通しており，一連の水路と考えた。

SD-73 の掘り形埋土からは，弥生土器が出土している（図 130-1 ～ 5）。1（図版 94-8）は小型壺の胴部破片で，やや肩が張る細身の胴部をもつ。2・3 は「く」字形口縁の甕である。3 は，横ナデ調整で口縁端部を上下に拡張して，浅い擬凹線文を 2 条めぐらす。4（図版 94-9）は高坏の脚裾部破片で，反転する脚端部が粘土接合面で剥離している。焼成前に径 12㎜ほどの円孔を穿孔する。5 は甕の平底破片である。

SD-73 は，弥生時代後期初頭の SC-519，後期前葉の SC-71 を切り，古墳時代後期と考えられる SD-512 に切られている。一方，SD-73 の掘り

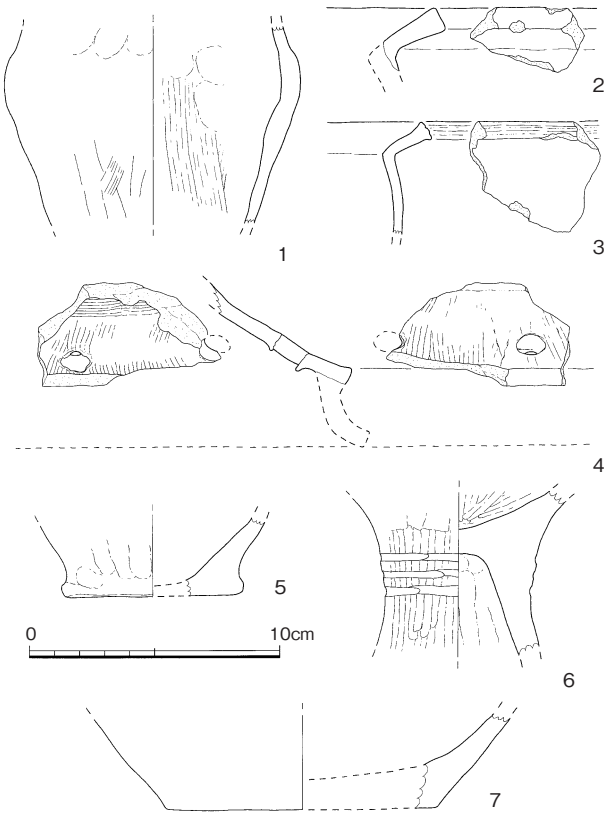


図 130　SD-73・520 出土土器実測図
（1 ～ 5：SD-73，6・7：SD-520，縮尺 1/3）

形埋土から出土した土器には，後期初頭の甕（図130-3）に加えて後期中葉の高坏（図130-4）がある。他の遺構との切り合い関係や出土遺物から，SD-73は弥生時代後期中葉に比定できる。

79号溝（SD-79，図110～112・115，図版30・31）

DU・DZ-24区のSC-25・44の東側でⅢ層を掘り下げたところ，Ⅳ層上面で暗褐色砂質シルトが詰まる隅丸の長底辺三角形（三角おむすび形）や半月形の窪みが東西方向に平行して並ぶことを確認できた（図版30-2，31-1）。底辺幅14～23cm，高さ5～13cm，深さ4～5cmを測り，底辺に平行する断面形はV字形もしくはU字形，直交する断面形は「レ」字形やV字形を呈する。鋤・鍬による掘削痕跡である。東側のDW～DZ-24・25区でも同様の掘削痕跡が並ぶことを確認でき，SD-79とした。東側のDS～DU-23区では，掘削痕跡は確認できず，前述したように北に折れてSD-16に連結する可能性が高い（図110～112，図版30-1）。

溝幅は35～48cmを測り，22ｍを確認できた。SP-329に切られ，SD-72を切る。

SD-79は掘削痕跡を繋げて確認できた溝のため，伴う遺物は特定できなかった。ただし，直上のⅢ層部分からは砂岩の亜円礫を利用した凹石の破片が出土した（図115-5）。上面には敲打痕が集中して残り，残存重量は298.2gである。

SD-79は，弥生時代後期初頭に比定できるSD-72を切っている。また，SD-79は東端で北に折れSD-16と連結するとしても，DV～DY-24区では古墳時代後期のSD-10と50～70cmの間隔でほぼ並行する。SD-10を意識して掘られているものと考えれば，SD-16を含めて，SD-79は古墳時代後期の溝の可能性が高い。

91号溝（SD-91，図117・122，図版121）

DX・DY-20区の調査区南壁沿いに位置する。SK-507を切る。Ⅳ層上面で検出したが，調査区南壁面の土層観察ではⅡ層直下から掘り込まれていることを確認できた。幅34cm前後を測り，確認できた溝長は2.75ｍである（図117・122）。断面はU字形を呈し，深さは32cmを測る。掘り形埋土は，極暗褐色砂質シルトで，Ⅲ層と比べて黒みが強く，粘性をおびる。流水の痕跡は認められず，集落内の区画溝と考える。

出土遺物は少ない（図版121-2・3）。ともに掘り形西半部の埋土中から出土している。2は弥生土器の壺の胴部中位の破片で，内外面ともにミガキ調整を施す。3は縄文土器の深鉢の胴部破片で，外面にはケズリ調整，内面にはやや光沢をもつ丁寧な横方向のナデ調整を施す。

出土遺物の中で，縄文土器は本来Ⅳ層に包含されていたものが混入したと考えられる。弥生土器の壺の胴部破片（図版121-2）で観察されるミガキ調整は，弥生時代中期後葉～後期中葉に一般的にみられる調整手法である。他の遺構との関係では，SD-91はSK-507を切るが，SK-507の時期は特定できない。少ない出土遺物ではあるが，弥生土器の胴部破片（図版121-2）から，SD-91の埋没時期は弥生時代中期後葉～後期中葉の時間幅で捉えることができる。

505号溝（SD-505，図110・112・131，図版94・96・123）

DY・DZ-24～26区に位置する。緩やかにカーブしながら南西-北東にのび，南端ではSK-511，北端ではSC-69とSD-10に切られる（図110・112）。それ以北ではSD-505の掘り形は確認でき

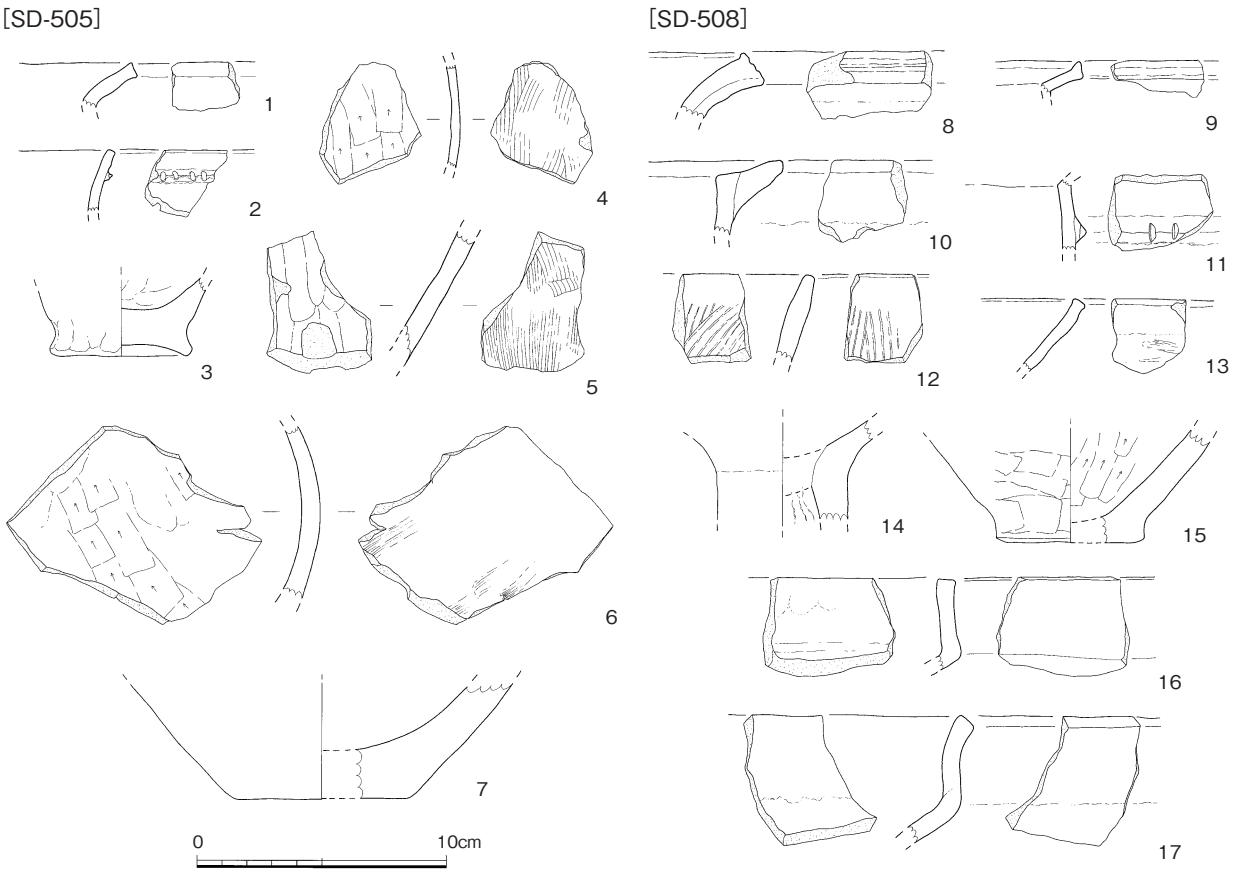


図 131　SD-505・508 出土土器実測図（1 ～ 7：SD-505，8 ～ 17：SD-508，縮尺 1/3）

なかった。溝幅 1.04 ～ 1.44 m，深さ 7 ～ 14㎝を測り，中央部がやや浅くなる。掘り形埋土は，細礫～中礫が混じる極暗褐色ないしは暗褐色の砂質シルトで，溝底には流水があったことを示す暗灰白色粗砂や暗褐色砂礫のラミナが縞状に堆積する。

掘り形埋土からは，弥生土器の小片が 40 ～ 50 点ほど出土した（図 131-1 ～ 7）。1 は「く」字形口縁の甕の破片である。2（図版 123-2）は，刻目凸帯文土器の深鉢の口縁部である。緩やかに外反する口縁部のやや下がった位置に細い断面三角形突帯を貼り付け，細い棒状工具を押捺して刻目を施す。3 は甕の厚手の上げ底の破片で，外面には成形時の指頭圧痕が残る。内面には指頭によるナデ調整を施す。4・5 は甕の胴部破片で，ともに器体の傾きは不明である。4（図版 96-1）は，外面に刷毛目調整の後にナデ調整を加え，内面にはケズリ調整を施す。5（図版 94-11）は，外面には刷毛目調整の後にナデ調整を加える。内面には指頭による強いナデ調整を施す。6（図版 94-12）は壺の胴中位の破片である。外面はナデ調整。部分的にナデ調整で生じた細密条線が残る。内面にはケズリ調整の後に部分的にナデ調整を施す。7 は壺の平底の破片である。

SD-505 は流水痕跡を残すので水路と考えられる。弥生時代後期初頭の SK-511，古墳時代後期の SC-69 と SD-10 に切られる。一方，出土遺物は，混入品の刻目凸帯文土器の深鉢（図 131-2）があるとともに，弥生時代後期初頭の甕（図 131-1）がある。弥生時代後期初頭に埋没する水路として SD-505 を捉えておきたい。

508号溝（SD-508，図117・118・131，図版31・96）

調査区南西隅のDZ-20～22区に位置する。SC-544とSD-509を切る。ほぼ東西にのびる溝で，溝幅35～55cm，深さ8～10cmを測り，舟底状の断面形をもつ（図117・118，図版31-3）。中央のDZ-21南半部で東に向かって分岐する。しかし，攪乱部の東側では延長部分を確認できなかった。分岐部分の溝幅は30cm，深さは7cmの舟底状の断面形を呈する。掘り形埋土は細礫混じりの暗灰色粗砂で，暗褐色シルトが多く混じる部分や，にぶい黄褐色砂質土のラミナが縞状にみられる部分がある。一定の流水があったものと考えられる。

SD-508から出土した遺物は，いずれも弥生土器の破片である（図131-8～17）。8・11は溝底，9はSD-508の北半部，12は中央部，13～17は南半部の掘り形埋土中から出土している。15は南半部と中央部の掘り形埋土から出土した同一個体と考えられる破片である。

図131-8（図版96-2）は壺の口縁部破片で，端面に2条の擬凹線文をめぐらす。9・10は甕。9は逆L字形に屈折する口縁部をもつ甕である。口縁上端に細い粘土紐を貼り付け，横ナデ調整で摘み上げる。10は内傾する細長い台形の口縁部に成形した山ノ口式系土器の甕である。11（図版96-3）は口縁部を欠損するが，逆L字形に屈折する口縁部がつくものと考えられる。口縁部から若干離れた位置に断面三角形突帯を貼り付けて刻目を施す。12（図版96-4）は厚手の直立する口縁部をもつ鉢である。胴部には条痕様の幅広の粗い刷毛目調整が施される。13は薄手の壺の口縁部で，わずかに外方に膨らみながらひろがる。外面には横ナデ調整で生じた細密条線が残る。14は高坏の脚部上半部の破片。坏部と脚部の間には粘土円盤を充填するが，剥落している。15は円盤状の厚い底部がつく甕である。外面には強いナデ調整，内面にはケズリ調整を施す。16・17は高坏の口縁部破片。ともに坏部中位から口縁部が反転する。この他，内外面を刷毛目調整する大型壺の胴部破片，外面をミガキ調整，内面をケズリ調整する甕の胴部破片などが出土している。

SD-508の掘り形埋土から出土した遺物は弥生時代中期後葉～後期前葉の時間幅に収まる一方で，後期初頭～中葉の土器が出土するSD-509を切る。切り合い関係を重視して，SD-508は弥生時代後期中葉の溝と考えておく。

509号溝（SD-509，図117・118・132～134，図版31・96・97）

調査区南西隅のDZ-20～22区に位置する。SD-508と重なりながら，ほぼ同じ南北方向にのびる溝である。SD-508に切られる。溝幅63～85cm，深さ12～16cmを測り，舟底状の断面形をもつ（図117・118，図版31-3）。掘り形埋土は，暗灰色粗砂混じりの暗褐色シルトや暗灰褐色粗砂～細礫で，細砂や暗褐色シルトの薄いラミナがみられ，上層のSD-508と同じく水路として機能していたことがわかる。

北部のDZ-21北半部では，南東に向かって分岐する部分を確認できた。攪乱部分がありSD-29との直接的な関係は確認できなかったが，分岐部分の埋土が暗褐色砂質シルトで，本体部分の埋土とは異なり，むしろ極暗褐色砂質シルトを主体とするSD-29と近似する。位置関係を含めて，SD-509から分岐した部分はSD-29と連結するものと考える。その場合，SD-509はSD-29を切ることになる。

埋土中からは比較的多くの遺物が出土している（図132～134）。図132-1・2・4・7・8・12・14はSD-509の中央部，図132-3･11･15，図133-2･4･5・10・11は北半部，図132-5・6・9・10・13，図133-1・3・6～9，図134-1・2は南半部の掘り形埋土中から出土している。

図132-1～8は壺。1～3はラッパ形に口頸部がひらく。3（図版96-8）の口頸部は，2と比べてそれほどひろがらない。口縁部周辺には横ナデ調整を施す。頸部内外面には刷毛目調整を施すが，外面は器表面が荒れ部分的にしか観察できない。4～6は肩部破片。4（図版96-5）・5（図版97-1）

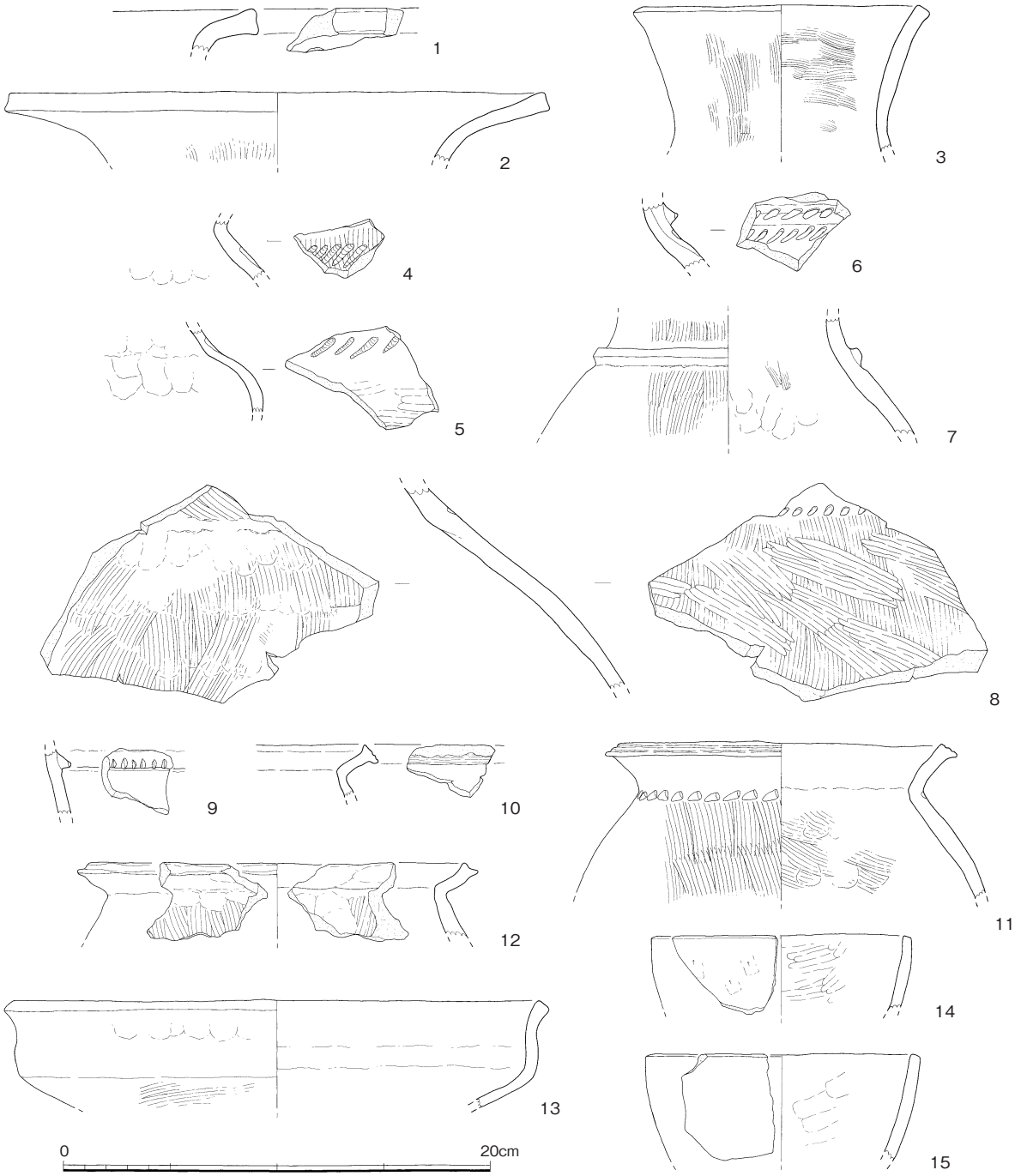


図 132　SD-509 出土土器実測図 1（縮尺 1/3）

は刷毛目工具の木口部を押捺して短斜線文を施文する。5 の胴部上半部には煤が付着する。6（図版 97-3）は，頸部の付け根に断面三角形突帯を貼り付け，細い棒状工具を正面から押捺して刻目を施す。突帯下方には，左下から刺突して列点文を施文する。7 は肩部～頸部の破片で，頸部の付け根に断面蒲鉾形の突帯を貼り付ける。肩部内面には成形時の指頭圧痕，頸部内面には部分的に細密条線の擦過痕が残る。8（図版 96-7）は大型壺の肩部破片で，頸の付け根に下方から棒状工具を刺突して列点文をめぐらす。内面には成形時の指頭圧痕が帯状に観察できる。9（図版 97-4）は甕か。小片のために，器体の傾きは不確実である。山ノ口式系土器と同じく茶色みをおびたにぶい赤褐色

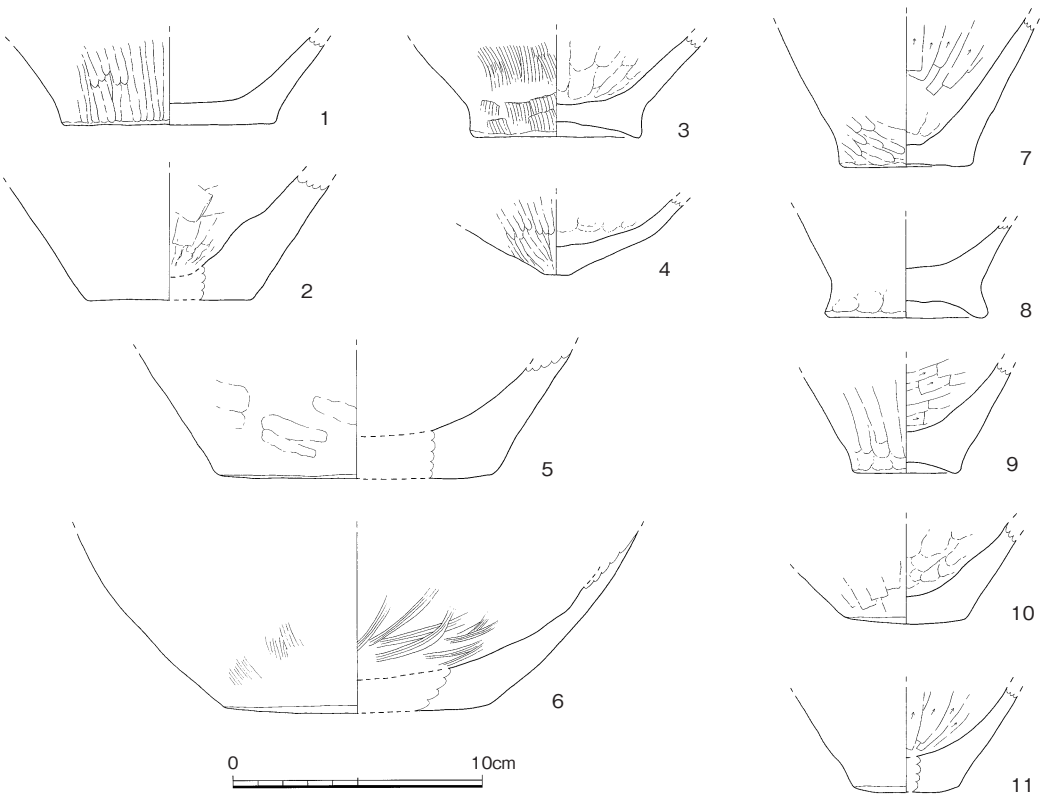


図 133　SD-509 出土土器実測図 2（縮尺 1/3）

を呈するが，本例のように三角突帯に篦状工具で細い刻目を施すものはない。10 ～ 12 は「く」字形口縁をもつ甕である。10 は口縁端部を横ナデ調整で上下に拡張する。口縁端面の大部分が剥落するが，口縁端部に擬凹線文を観察できる。11（図版 96-6）は，口縁下端を横ナデ調整で摘み出し，端面には 2 条の擬凹線文を施文する。口縁屈曲部には左方向から刺突して施した列点文がめぐる。12（図 96-9）は，「く」字形に屈折する口縁部で，端面を横ナデ調整で摘み上げる。13 は高坏で，坏中部から緩やかに反転しながら口縁部が立ち上がる。口縁端面は横ナデ調整で面取りされる。14･15 は直立する口縁部をもつ小型鉢である。14（図版 97-2）の外面はケズリ調整の後にナデ仕上げる。内面にはミガキ調整を施す。15 の外面には下から上に向かうナデ調整，内面には指頭によるナデ調整の痕跡がわずかに残る。

図 133-1 ～ 11 は底部。1 は壺もしくは鉢の平底の破片。外面にはミガキ調整を施す。2 も壺もしくは鉢で，やや不安定な平底。内底面には成形時に生じた粘土の撚れが残る。3 は甕もしくは鉢の上げ底の底部である。4 ～ 6 は壺。4 は小さな平底をもち，扁球形の胴部がつくものと考えられる。5 は大型壺。不安定な平底で，外面には幅 5㎜ほどの太めの棒状工具を押さえつけたような痕跡が残る。6 は大型壺の凸レンズ底である。内面には草本類の茎によると考えられる幅 3 ～ 4㎜の細密条線が集まる調整痕跡が残る。

7 ～ 11 は甕。7 は平底で，底部側面は篦状工具によるナデ調整が施される。二次的火熱を受けて赤変し，器表面は荒れている。8・9 は厚い上げ底。8 の底部側面には成形時の指頭圧痕がわずかに残る。9 の外面には篦状工具による擦過調整，内面にはケズリ調整を施す。10･11 は凸レンズ底。10 の外面には篦状工具によるナデ調整，内面には指頭によるナデ調整を施す。11 の外面にはナデ調整，内面にはケズリ調整を施す。

図 134-1･2 は，砂岩を用いた砥石である。1 は，残存部はごくわずかだが，砥石として利用した痕跡が残る。残存重量 261.9 ｇ。2 は厚みのある円礫の一部に擦痕が残る。重量 1645 ｇを測る。

以上，SD-509 から出土した土器は弥生時代後

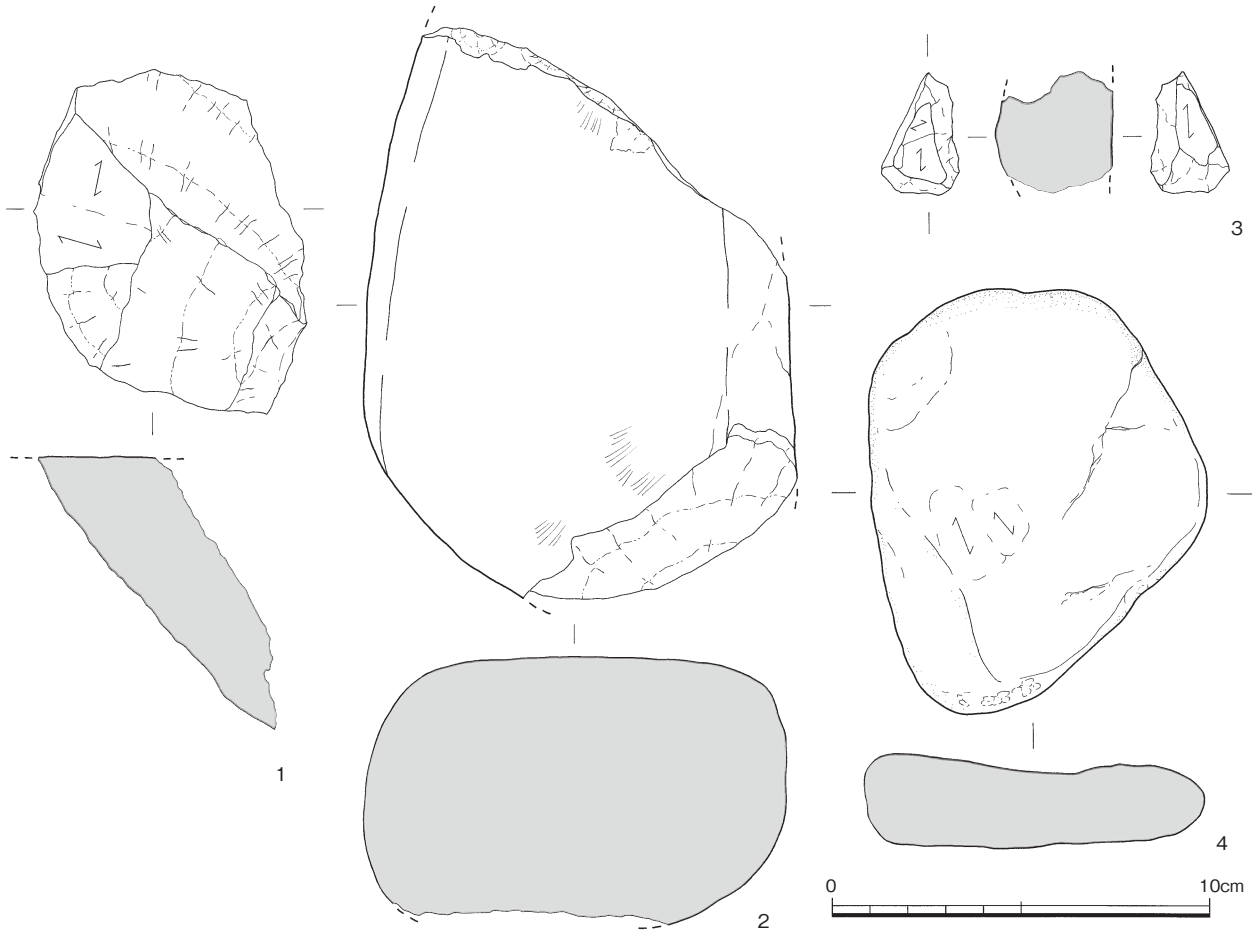


図 134　SD-509・512 出土石器実測図（1・2：SD-509，3・4：SD-512，縮尺 1/2）

期初頭を前後する土器が大半を占めるが，その中に，後期中葉に比定できる口頸部が大きく朝顔形にひらく壺（図 132-2）や凸レンズ底の底部破片（図 133-4・6・10・11）が混じる。SD-509 が後期初頭の SD-29 を切り破壊しているため後期初頭の土器が混り込んだものと考え，SD-509 は弥生時代後期中葉に埋没する水路と考える。

512号溝（SD-512，図110・112・134・135，図版97・139）

調査区西壁沿いの DZ-25 ～ 27 区に位置する。SD-73，SC-519 を切る。緩やかに弧を描く 7.5 m ほどを確認できたが，西側の肩部が攪乱で破壊され，溝幅は不明である。掘り形を検出できたⅣ層上面からの深さは 3 ～ 8㎝を測り，溝底には小さな凹凸が多数みられる。掘り形埋土は，砂礫を含む暗褐色砂質土で，にぶい黄褐色砂質土が混じる。一部はやや黒みをおびる暗褐色砂質シルトで，褐色シルトのレンズ状ブロックが底面にみられる。

掘り形埋土からは数 10 点の土器片が出土しているが，いずれも胴部の小片で，図示できた遺物は少ない。弥生土器に加えて，須恵器の坏蓋の口縁部や天井部の破片，壺の口頸部破片が出土している（図 134・135）。図 134-3・4，図 135-1 ～ 5 は掘り形埋土，図 135-6・7 は上部Ⅲ層部分から出土している。

図 135-1・2 は須恵器，3 は土師器，4・5 は弥生土器である。1 は坏蓋の天井部の破片である。

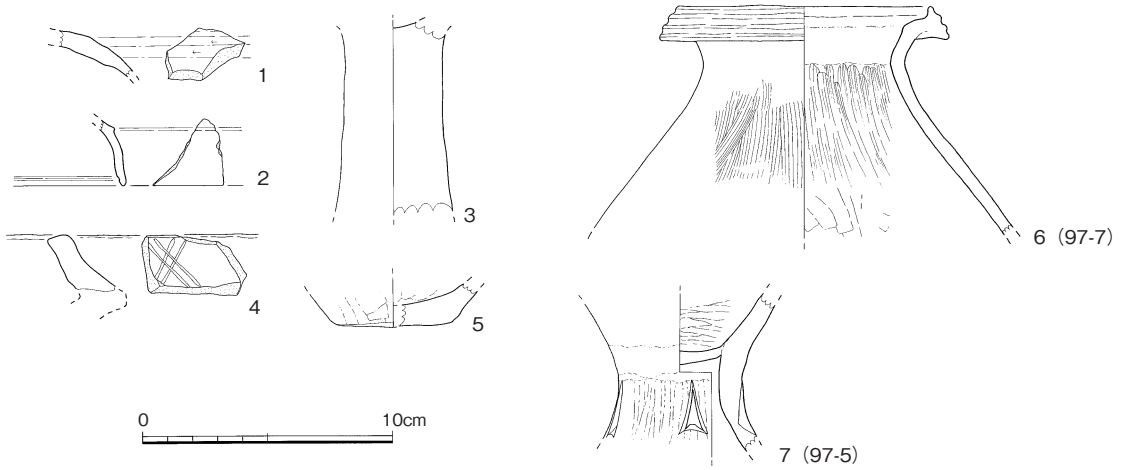


図 135　SD-512 出土土器実測図（1 ～ 5：掘り形埋土，6・7：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

外面には回転篦ケズリ調整，内面にはナデ調整を施す。2 も坏蓋で，体部と口縁部の境界部に小さな段が形成され，口縁端内面には浅く細い沈線がめぐる。3（図版 97-6）は中実の高坏の脚柱部の破片。4 は複合口縁壺の口縁部破片で，口縁外面には 2 条 1 単位のＸ字文を施文する。複合口縁部の接合面で剥離している。5 は甕の凸レンズ底の破片で，外面には篦状工具でナデ調整を施す。

図 134-3（図版 139-3）は浅黄橙色を呈する砂岩を利用した砥石の破片で，二面を使用している。残存重量は 19.1g を測る。4 は砂岩の亜円礫を利用した敲石の破片である。主面には擦痕，側部に敲打痕が残る。残存重量は 357.2g を測る。

SD-512 掘り形上部のⅢ層部分からも，弥生土器の破片が出土している。比較的大きな破片がある（図 135-6・7）。6（図版 97-7）は「ハ」字形に窄まる頸部に短く外反する口縁部がつく壺である。口縁端面を拡張して波板状の凹線文を 3 条めぐらす。口縁部周辺には横ナデ調整，頸部～肩部外面には刷毛目調整を施し，頸部内面には幅が狭い擦過状の調整痕が残る。7（図版 97-5）は低脚の高坏と考える。円筒状の脚部に六方向に未貫通の矢羽根透かし孔が施される。

以上，SD-512 は，弥生時代後期前葉の SD-73 を切り，埋土出土遺物に須恵器（図 135-1・2）や土師器（図 135-3）が混じることから，古墳時代後期に比定できる。

520号溝（SD-520，図110・116・130，図版31・94）

DY・DZ-28 ～ 31 区に位置し，断面形や埋土の特徴が共通することから，既設管による攪乱部分を挟むが，SD-73 と一連の溝と考えた（図 110・116）。北端部は 16 次調査 B 区にあり，SD-47 として調査されていたが，大部分が A 区にあることから，本分冊で報告する。SK-515 に切られる。

全長 16.5 mを測り，SD-73 と合わせると，緩やかにカーブしながらのびる 30 mほどの溝となる。溝幅は 54 ～ 62㎝，掘り形を検出したⅣ層上面からの深さは 25㎝を測る。DY-30 区中央部の土層観察用畦では，溝の掘り返しが行われていることを確認できた（図版 31-2）。掘り返し部分（①～⑤層）は灰褐色細砂を主体とし，最下面の⑤層は極暗褐色シルトと灰褐色微細砂層の薄層が縞状に互層堆積する。埋没当初の埋土（⑥～⑧層）は，灰白色粗砂の⑥層，下部の⑦層は極暗褐色シルトと灰色極細砂層が縞状の互層をなし，最下面の⑧層は基盤の黄褐色細砂と灰褐色粗砂が混じる土層である。流水の痕跡と考え，水路の機能を推定できる。

掘り形埋土中から，少ないながら弥生土器が出土している（図 130-6・7）。6（図版 94-10）は，

高坏の坏部～脚部の付け根に当たる破片である。脚部の付け根付近に浅い幅広の沈線様の凹線文を3条1条ずつめぐらす。外面及び坏部内面はミガキ調整を施した後に坏部だけに篦状工具によるナデ調整を加える。7は壺の平底破片である。

出土遺物は断片的ではあるが，SD-520がSD-73と一連の溝であることから，弥生時代後期中葉の水路と考える。

557号溝（SD-557，図122，図版5-2）

DV-20区の調査区壁面の土層観察時に確認できた（図122，図版5-2）。Ⅱ層下部から掘り込まれ，深さ10～20cmを測る溝である。溝底にはかなり凹凸がある。掘り形埋土は灰色みをおびた暗オリーブ褐色砂で，ラミナを観察でき，水路として機能していたと判断した。最上部に砂が多く混じる黒褐色砂質土や暗褐色砂のレンズ状ブロックが堆積する。出土遺物はないが，Ⅱ層下部から掘り込まれた溝であることから，古代以降の水路と考えてよい。

5　土壙

1号土壙（SK-1，図136～141，図版31・32・97～104・149）

DW・DX-25区でⅢ層中位まで掘り下げた時点で，土器片が折り重なって出土し始めた。遺構内の遺物と考え，周辺を精査したが，掘り形の輪郭は確認できず，Ⅳ層上面まで掘り下げ，ようやく不整な細長い長円形の掘り形を検出できた（図136，図版31-2･32-1）。SK-38を切る。長径1.81 m，短径61～63cm，Ⅳ層上面からの深さ15cmほどを測る。舟底状の土壙で，底面には小さな凹凸が多くみられる。

掘り形埋土は，極粗砂～細礫が多く混じる暗オリーブ褐色砂質土が大半を占め，下底面に灰色みをおびるオリーブ褐色砂質土がブロック状にみられる。また，埋土には径3～5㎜の炭化物片が点々と混じる。

図137～139は，SK-1上面で折り重なって出土した土器群である。SK-1の掘り形内に一気に投棄された遺物と考える。図137-1～3は壺である。1・2は短くラッパ形にひらく口頸部をもつ。1（図版103-3）の頸部の付け根には刺突列点文をめぐらす。2（図版97-8）は，長胴で，不安定な凸レンズ状の底部がつく。頸部外面を篦状工具でナデ上げ，胴部外面には刷毛目調整を施し，胴部内面には成形時の指頭によるナデ調整の痕跡が残る。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。3（図版102-2）は無頸壺である。球形の胴部に，「く」字形に緩やかに外反する口縁部がつく。肩部外面を篦状工具で口縁部に向ってナデ上げるため，浅い段が生じている。底部は厚い上げ底で，裾部が「ハ」字形にひろがる。底部側面には成形時の指頭痕を観察できる。底部付近の器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。胴部外面には部分的に刷毛目調整の痕跡が残る。胴部内面には基本的にはナデ調整を施す。上半部には刷毛目調整を施す以前の成形時の指頭痕を観察できる。

図137-4～8と図138-1～8は甕である。4・5は「く」字形に外反する口縁部をもつ。4（図版

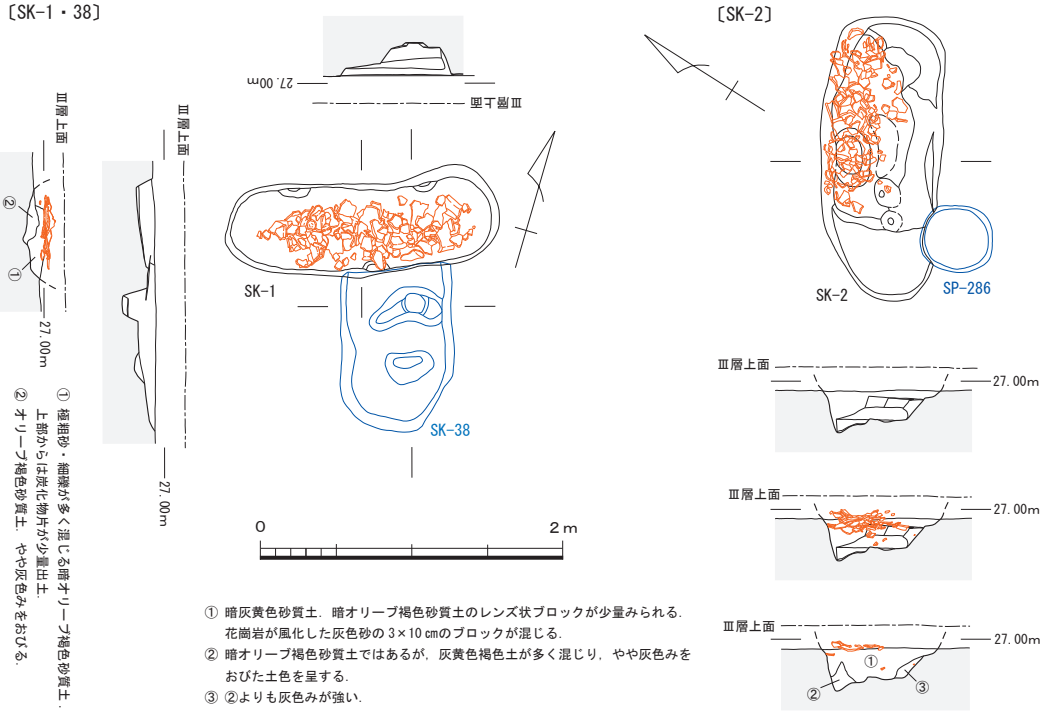


図136　SK-1・2・38遺構実測図（縮尺1/50）

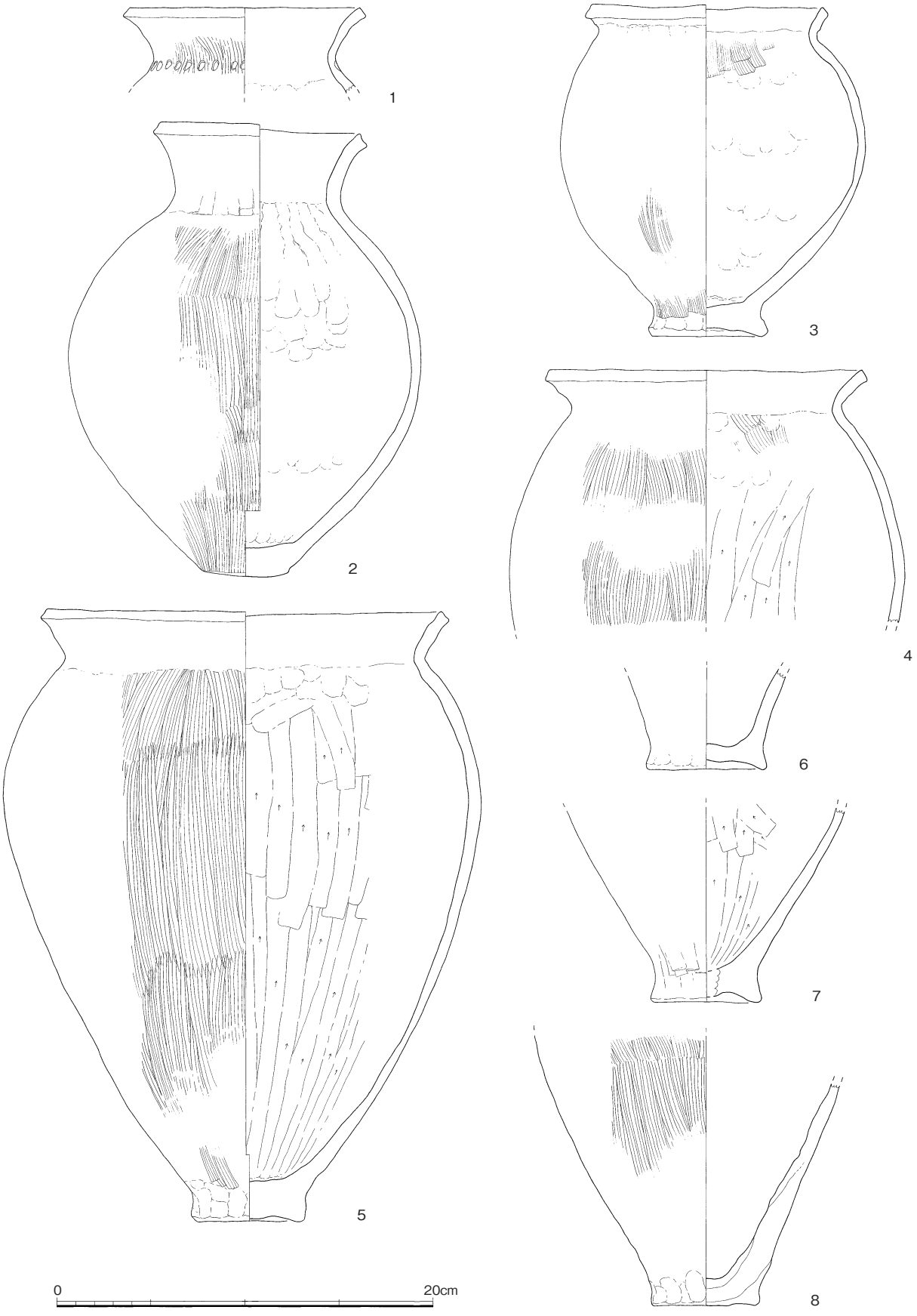


図 137　SK-1 出土土器実測図 1（縮尺 1/3）

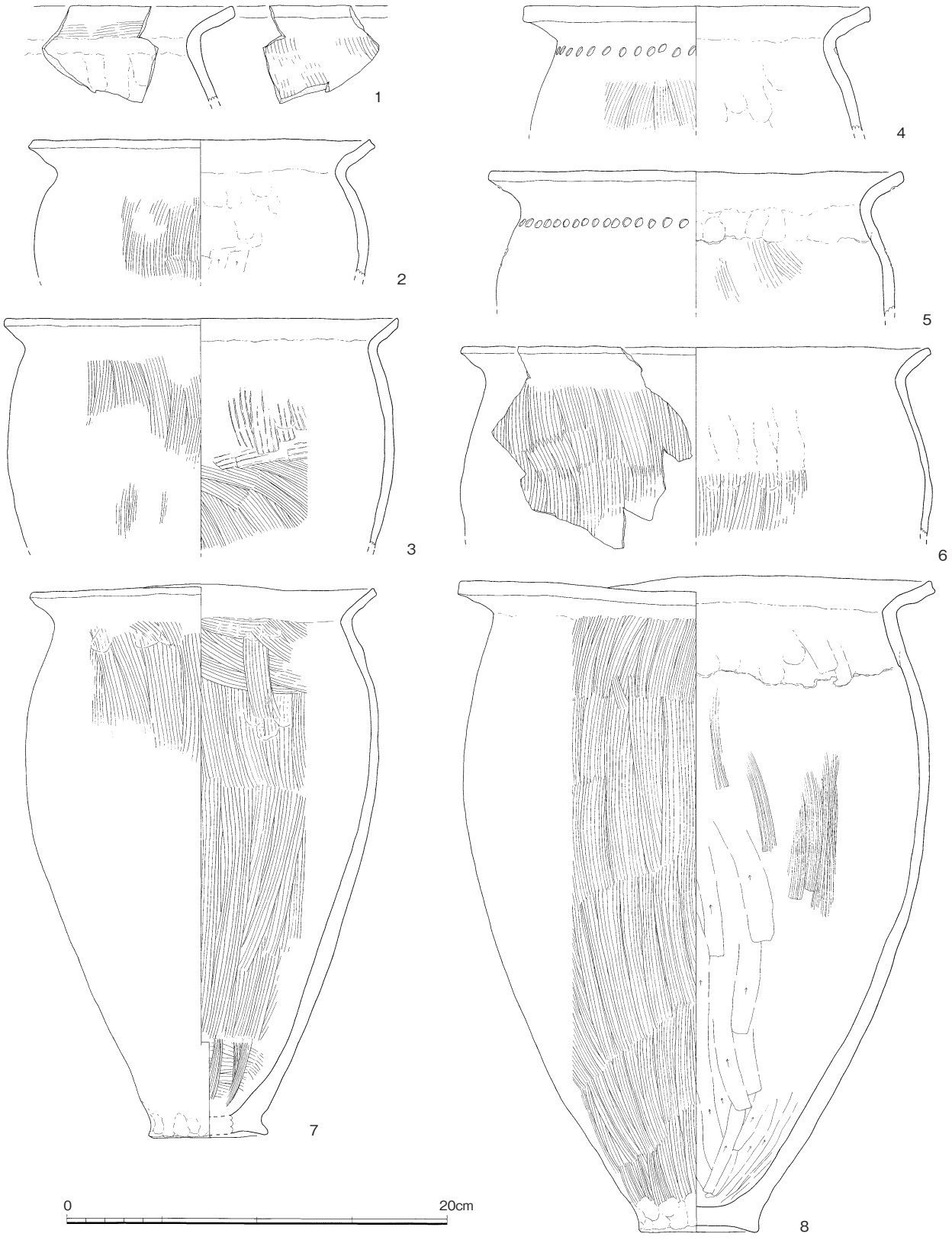


図 138　SK-1 出土土器実測図 2（縮尺 1/3）

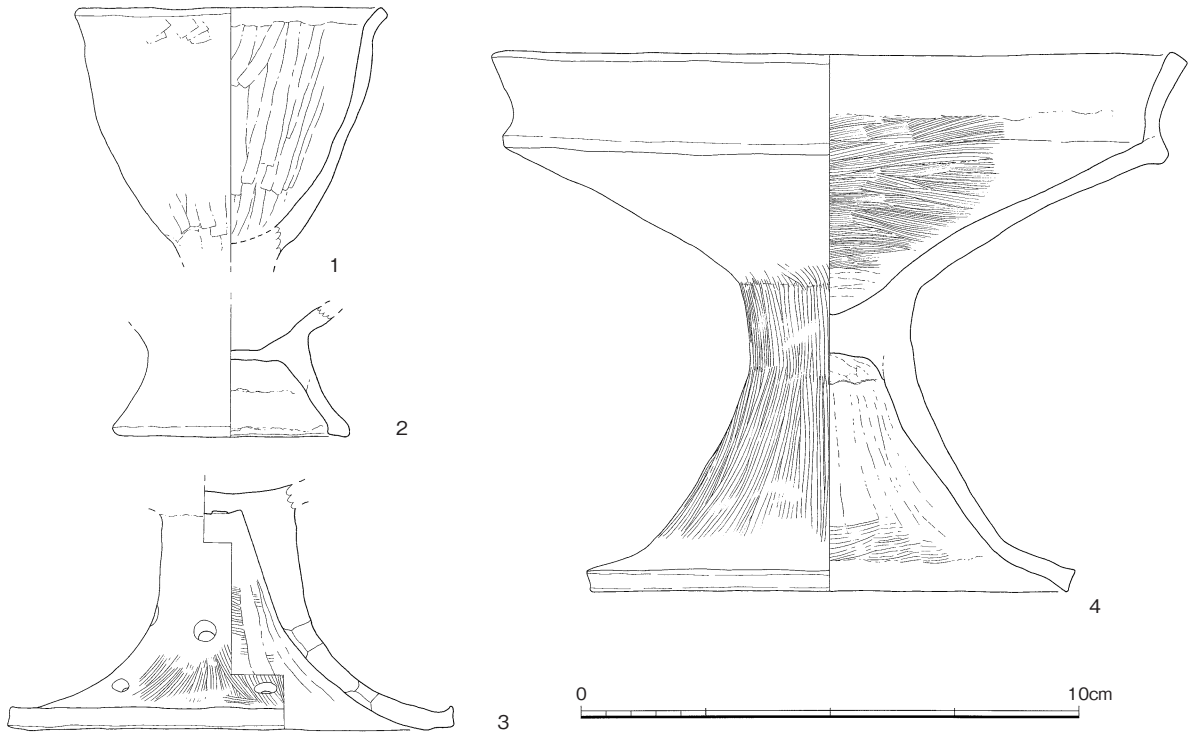


図 139　SK-1 出土土器実測図 3（縮尺 1/3）

101-1）は，丸みをおびた胴部をもつ。口縁部周辺には横ナデ調整を施す。胴部外面には部分的に刷毛目調整の痕跡が残る。口縁屈曲部の内面には刷毛目調整の後にナデ調整を施す。胴部内面にはケズリ調整を施し，成形時の指頭圧痕が残る。5（図版 98-1）は，器体がかなり歪んでいる。肩が張る細身の胴部をもち，厚い高台状の底部がつく。胴部外面には刷毛目調整，口縁部の屈曲部内面には指頭痕が残り，胴部内面にはケズリ調整が施される。胴部外面の上半部には煤が付着する。6 ～ 8 は胴部下半～底部の破片である。6 の外面は二次的火熱を受けて赤変する。7（図版 102-5）は，裾部が「ハ」字形に小さくひらく高台状の厚底をもち，底部裾には篦状工具でナデ上げた痕跡が残る。外面には薄く煤が付着する。8（図版 102-4）は焼成不良品で，底部付近が小さな土塊になって崩れている。底部は厚手で，成形時の粘土接合の状態を観察できる。

図 138-1 ～ 8 も，緩やかに外反する「く」字形口縁部をもつ。2（図版 101-3）の胴部外面には刷毛目調整，内面に指頭によるナデ調整，胴部中位にはケズリ調整を施す。3（図版 101-2）は，胴部外面に刷毛目調整を施し，中位にはナデ調整を加える。肩部内面には幅広の条痕様の調整痕跡が残り，一部はケズリに近い。中位には刷毛目調整が施されている。4（図版 102-1）・5 は，口縁屈曲部に刺突列点文をめぐらす。5 の外面は荒れが著しく，器表面が部分的に剥離している。6（図版 100-2）の胴部外面には刷毛目調整，内面上半部には指頭によるナデ調整，中位には刷毛目調整を施す。外面には煤が付着する。7（図版 100-1）の器体は歪む。胴上半部は膨らみをおびるが，細長い下半部につながり，底部は小さく「ハ」字形に裾を指頭で摘み出す。胴部内面には刷毛目調整を施すが，かなり強い調整で，とくに内底近くの横方向の刷毛目調整はケズリに近い。胴部外面は二次的火熱を受けて赤変するとともに，器表面の荒れが著しい。植物種子の圧痕が残る。8（図版 99-1）も器体がかなり歪んでいる。胴部があまり膨らみをもたない細長い胴部で，上げ底の底部がつく。胴部外面には刷毛目調整を施す。内面上半部には細密条線が残るナデ調整，下半部にはケズリ調整の痕跡を観察できる。口縁部近くまで粘土帯を積み上げて器体を成形した後に，一気に器面

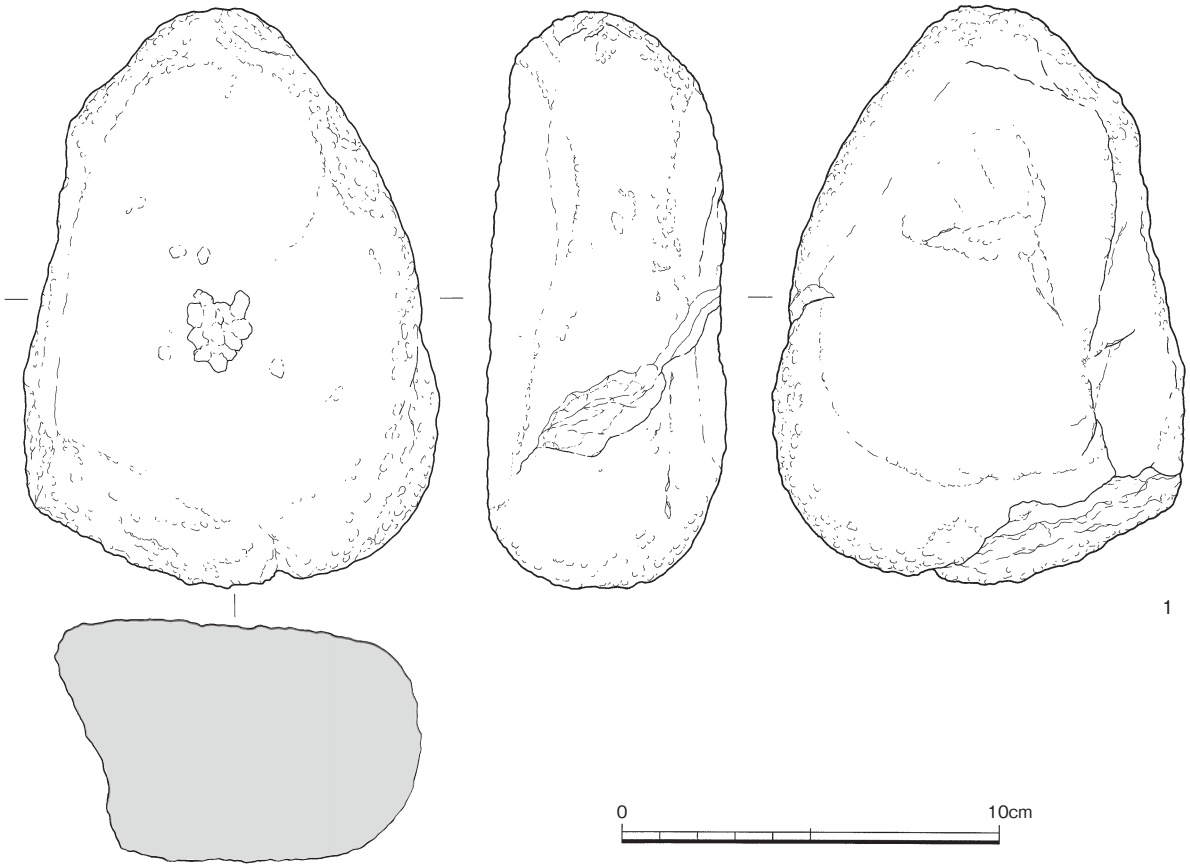


図 140　SK-1 出土石器実測図（縮尺 1/2）

調整を施すため，粘土の乾燥状態の違いで調整痕跡に変化が生じたものと考える。胴部中位に薄く煤が付着する。

図 139-1（図版 102-3）は深鉢型の鉢で，口縁部を短く外反させる。内外面ともに篦状工具によるナデ調整を施す。2（図版 104-1）は脚台付きの鉢と考える。3･4 は高坏である。3（図版 103-2）は，大きくラッパ形にひろがる高坏の脚部の破片で，脚端部を横ナデ調整する結果，端部が上方に若干跳ね上がる。脚部中位に 5 孔，下半に 10 孔の径 8 ～ 10㎜の円孔を焼成前に穿孔する。脚部内面の坏部との接合面には，径 6㎜，深さ 1㎜ほどの円形の押捺文が残されている。4（図版 103-1）は，坏部の約半分を欠損する。ラッパ形にひらく脚部をもち，坏部は中位から口縁部が一旦反転して立ち上がる。脚部外面には刷毛目調整の後にナデ仕上げを施す。坏部内面には細密条線の擦過状の調整痕が残る。

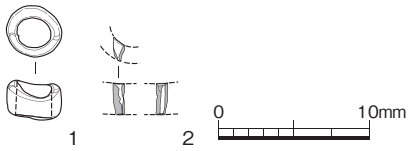


図 141　SK-1 出土ガラス小玉実測図（倍尺２倍）

これらの遺物に加えて，凹石が出土している（図 140-1）。花崗岩の亜円礫を利用しており，表面の風化が激しいが，わずかに敲打痕を確認できる。重量は 1496 g を測る。さらに，SK-1 の掘り形埋土を水洗選別した結果，ガラス小玉 2 点が出土した（図 141-1・2）。1（図版 149-9）は径 3.4㎜，孔径 2.0㎜，最大厚 2.4㎜を測る。ガラスを管状に引き伸ばし斜めに裁断している。2 は破片である。ともにスカイブルーを呈する。

以上の遺物は弥生時代後期前葉の良好な資料である。当該期に一気に遺物が投棄された土壙である。

2号土壙（SK-2，図136・142・143，図版31・32・103～105・136・137）

DX-25区のⅢ層下半部で土器片が折り重なり出土し始め，周辺を精査したが，掘り形の輪郭を確認できたのはⅣ層上面である。長径1.87ｍ，短径78㎝の細長い不整長円形の掘り形をもつ（図136，図版31-2・32-2）。舟底状の土壙で，底面は凹凸が著しく，深さも18～28㎝と一定していない。掘り形埋土は暗灰黄色砂質土を主体とし，上部には暗オリーブ褐色砂質土塊や風化が著しい花崗岩塊がみられる。SP-286に切られる。

遺物は出土状況から北西側から一気に投げ込まれたものと考えられる（図143-1～20，図142-1・2）。

図143-1・2は，球形の胴部に，ほぼ直立する短い口縁部がつく無頸壺である。1（図版104-2）は，2と同一個体の可能性を残す。2（図版104-5）の胴部外面には刷毛目調整の後にナデ調整を施すが，部分的に板状工具を押しつけたような面ができている。肩部内面には成形時に生じた粘土の撚れが残る。

3～12は甕の口縁部破片である。3・4は小型品で，3（図版105-2）は，張りのない細身の胴部に緩やかに外反する口縁部がつく。5～12は緩やかに外反する「く」字形口縁をもつ。5の口縁部屈曲部には列点文が施文される。8（図版104-7）は口縁部がかなり歪む。口縁屈曲部の外面には篦状工具の圧痕が残る。9は内外面ともに器表面が荒れ，調整は不明。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。10（図版104-4）は，口縁屈曲部に列点文を施文し，膨らみのある胴部をもつ。11（図版103-4）は口縁端部を肥厚させ，端面に浅い擬凹線文を2条めぐらす。口縁屈曲部に断面台形の突帯を貼り付け，平織りの布を巻いた指頭を押捺して太い刻目を施す。12（図版103-5）の口縁端面にも2条の浅い擬凹線文が施文される。口縁部下面には煤が付着する。

13～17は底部破片。13は外底面がわずかに膨らむ不安定な底部である。壺と考える。14～17は甕。14は厚い上げ底である。15は高台状の上げ底で，底部に当たる粘土円盤に胴部の粘土帯を貼り付け，内底部分に粘土を充填する。16・17は裾部を小さく「ハ」字形に突出させた高台状の上げ底である。18は脚台付きの鉢型のミニチュア土器である。脚台裾部を指頭で摘み出すようにつくり出し，胴部外面は篦状工具をナデつけているため，小さな面ができている。内面には指頭によるナデ調整を施す。

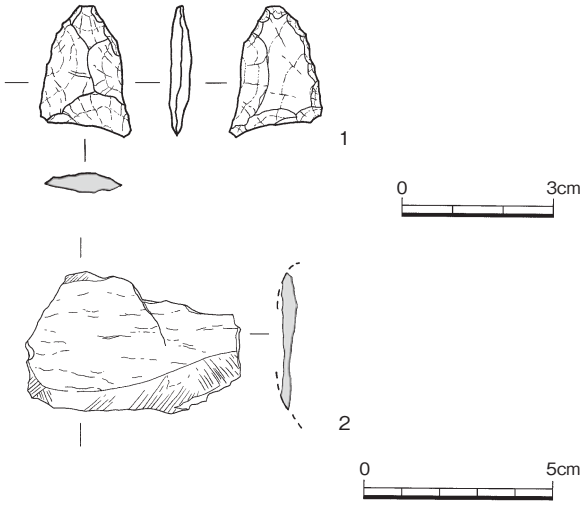


図142　SK-2出土石器実測図（縮尺2/3・1/2）

掘り形でも下底部から出土した19は無頸壺で，1・2と同じく，口縁部はほぼ直立し，長胴がつくものと考えられる。20は坏部中位で反転してひろがる高坏である。内外面をミガキ調整した後に，外面に赤彩を施す。

これらの弥生土器に混じり，打製石鏃と石庖丁の破片が出土している（図142-1・2）。1（図版137-8）はサヌカイト製の凹基式打製石鏃で，側辺は膨らみをもつ。細部の調整は雑で，未成品の可能性もある。重量1.9ｇを測る。2（図版136-8）は両面ともに剥離しているが，研磨面が残る。石庖丁の破片と考えたが，石斧の刃部近くが剥離した可能性も残す。残存重量は8.7ｇ。緑色片岩が用いられている。

SK-2の出土遺物は，SK-1と比べて破片が多いが，弥生時代後期前葉に比定できる。当該期に土器片を一気に投棄した土壙である。

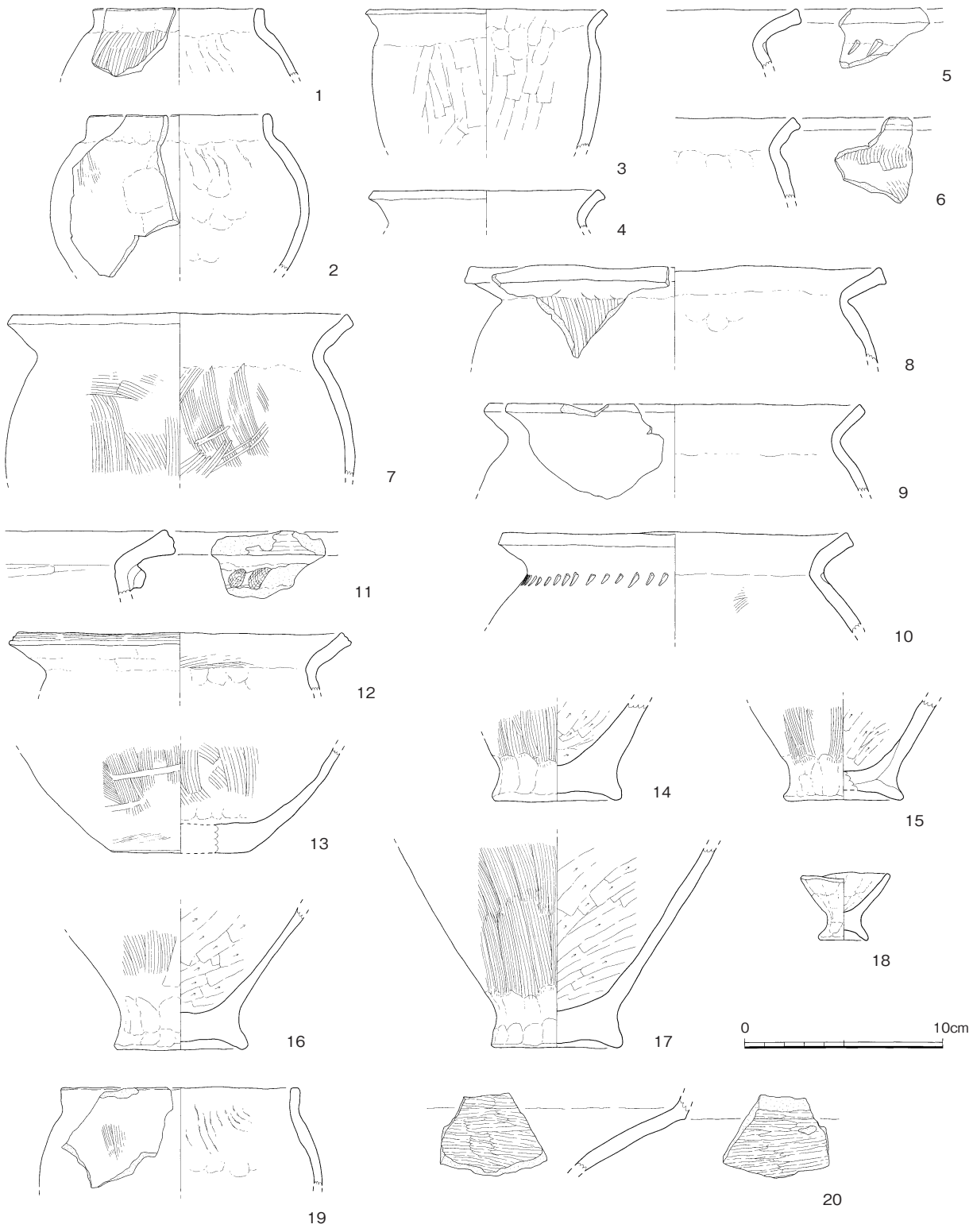


図 143　SK-2 出土土器実測図（1 ～ 18：掘り形上部，19・20：掘り形下底部，縮尺 1/3）

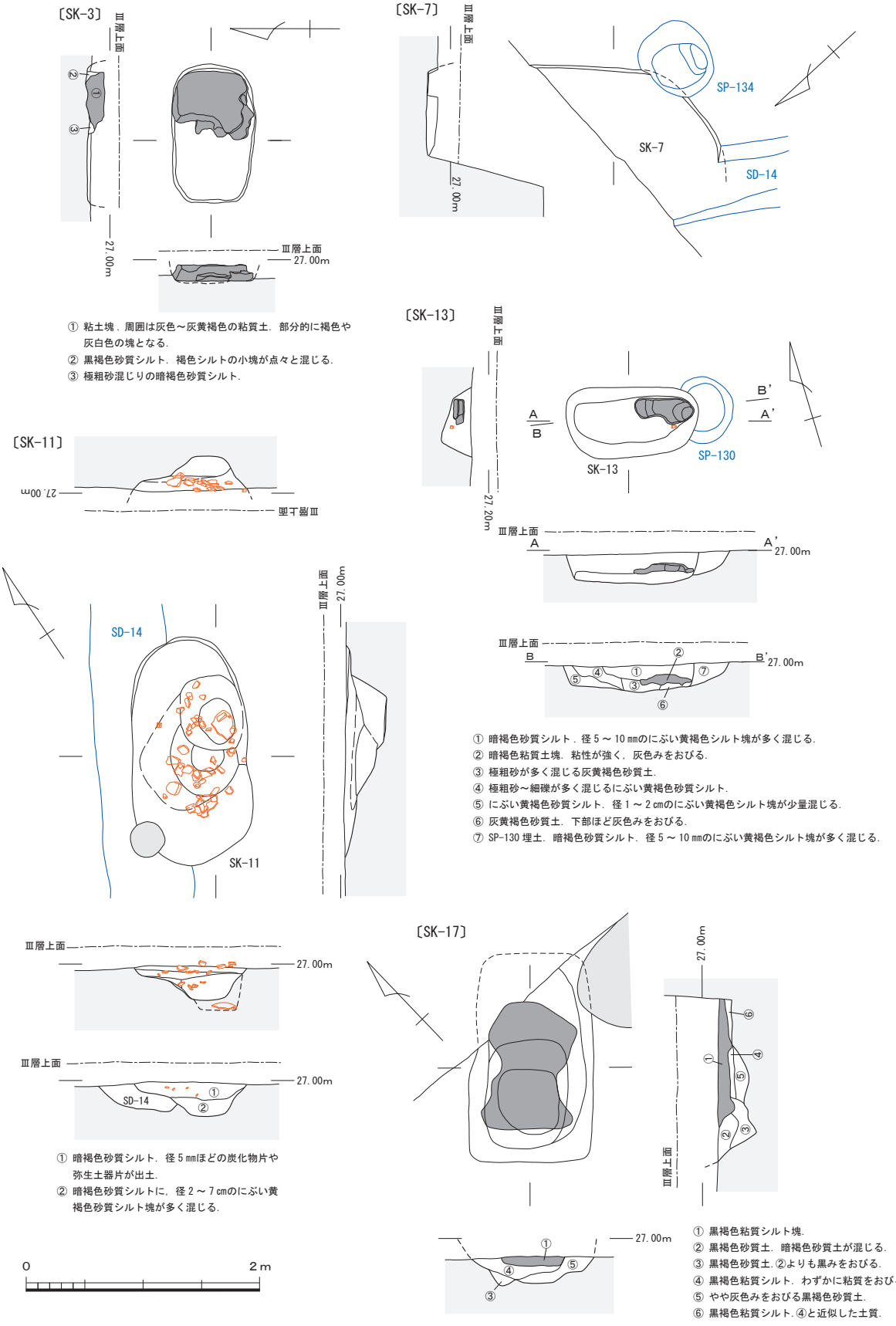


図 144　SK-3・7・11・13・17，SP-130 遺構実測図（縮尺 1/50）

3号土壙（SK-3，図144・145，図版33・34・105）

DT-21区に位置する。胴張りの隅丸長方形の掘り形をもつ。Ⅲ層中位で灰色～灰黄褐色のシルト質粘土塊があらわれた。しかし，掘り形の輪郭を確認できたのはⅣ層上面である。掘り形の長径は1.19ｍ，幅67～72㎝，Ⅳ層上面からの深さ3㎝を測り，底面には若干凹凸がみられる。Ⅲ層中位であらわれたシルト質粘土塊は，55㎝×60㎝，厚さ14㎝で，約46リットルを測る（図144，図版33-1～3・34-1）。掘り形の西半部に詰め込まれた状態にある。掘り形埋土は極粗砂が混じる暗褐色～黒褐色の砂質シルトで，小指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。

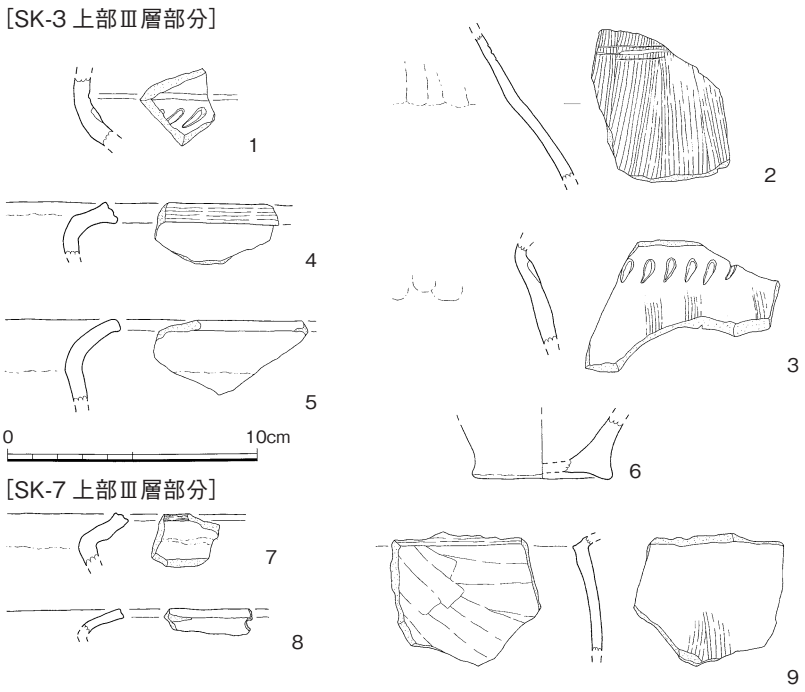


図145　SK-3・7上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺1/3）

土壙の掘り形内からは弥生土器の胴部破片が数点出土しただけで，粘土塊上部からも弥生土器の胴部破片1点が出土しているにすぎない。

掘り形上部のⅢ層部分から出土した遺物も少なく，小片ばかりである（図145-1～6）。その中で1・2は粘土塊が出土し始めたⅢ層下部から出土した壺である。1（図版105-4）は肩の付け根付近の破片で，沈線を1条めぐらし，その下方に短斜線文を押捺する。2も肩部の破片で，肩部から頸部の境界部分に沈線をめぐらすが，部分的に深くなったり，沈線が途切れたりする。外面には擦過に近い刷毛目調整を施す。3～6は甕である。3（図版105-5）は肩部破片で，緩やかに「く」字形に外反する口縁部がつくものと考える。刺突列点文をめぐらす。4（図版105-6）は緩やかに屈曲する「く」字形口縁をもつ。口縁端面に2条の擬凹線文をめぐらす。5は張りのない胴部から緩やかに外彎しながら外反する「く」字形口縁につながる。6は上げ底の甕の底部で，二次的な火熱を受けて赤変している。

以上，掘り形埋土から出土した遺物はないが，粘土塊を確認できたⅢ層下部から出土した壺（図144-1・2）は弥生時代後期前葉の特徴をもつ。当該期に粘土塊を埋納した土壙と考える。

7号土壙（SK-7，図144・145，図版105）

調査区北東隅のDS・DT-25区のⅣ層上面で確認できた。SD-14とSP-134に切られる。大半は調査区外にひろがり，規模は不明であるが，角部が隅丸となり，底面は比較的平坦で，竪穴建物の掘り形の一部である可能性を残す（図144）。

掘り形埋土からは遺物は出土していない。上部

Ⅲ層部分から弥生土器が出土したが，量も少なく，小片ばかりである（図 145-7 ～ 9）。いずれも「く」字形口縁の甕である。7 は短く緩やかに屈曲する口縁部で，端面に 2 条の擬凹線文をめぐらす。8 は薄手のつくりで小型品である。9（図版 105-7）は胴部上半の破片で，「く」字形に強く屈折する口縁部がつく。口縁部内面の屈折部には浅い沈線がめぐる。

以上，SK-7 の遺物は，上部Ⅲ層部分から出土した小片ばかりで，量も少ない。しかし，弥生時代中期後葉（図 145-9）と後期初頭（図 145-7・8）に比定できる土器がある。SK-7 の埋没時期は弥生時代後期初頭と捉えておきたい。

11号土壙（SK-11，図144・146・147，図版34・105・106・142・145）

DT-24 区に位置する。長径 1.95 m，短径 97㎝の長円形の土壙である。SD-14 を切る。Ⅳ層上

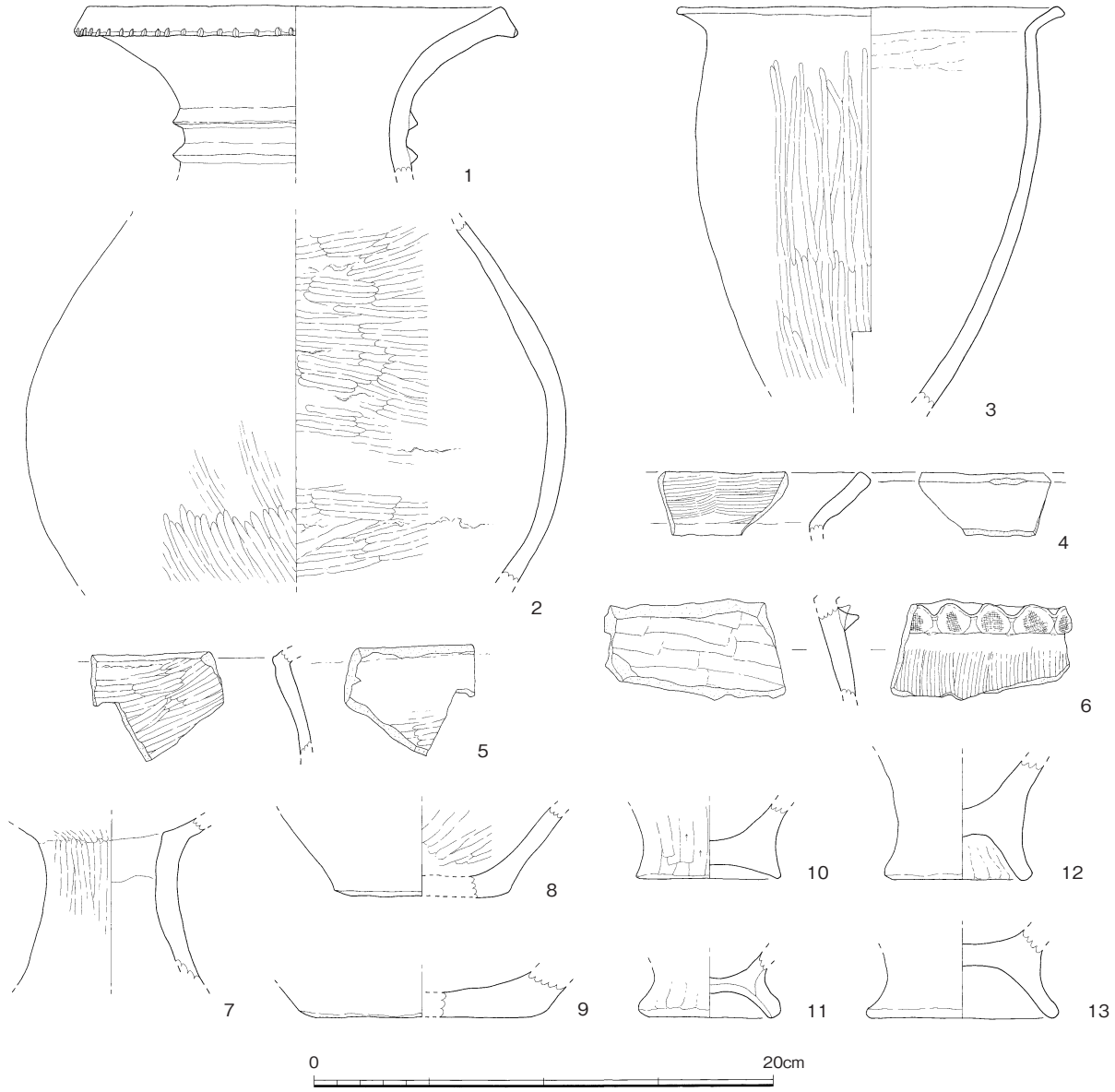


図 146　SK-11 掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）

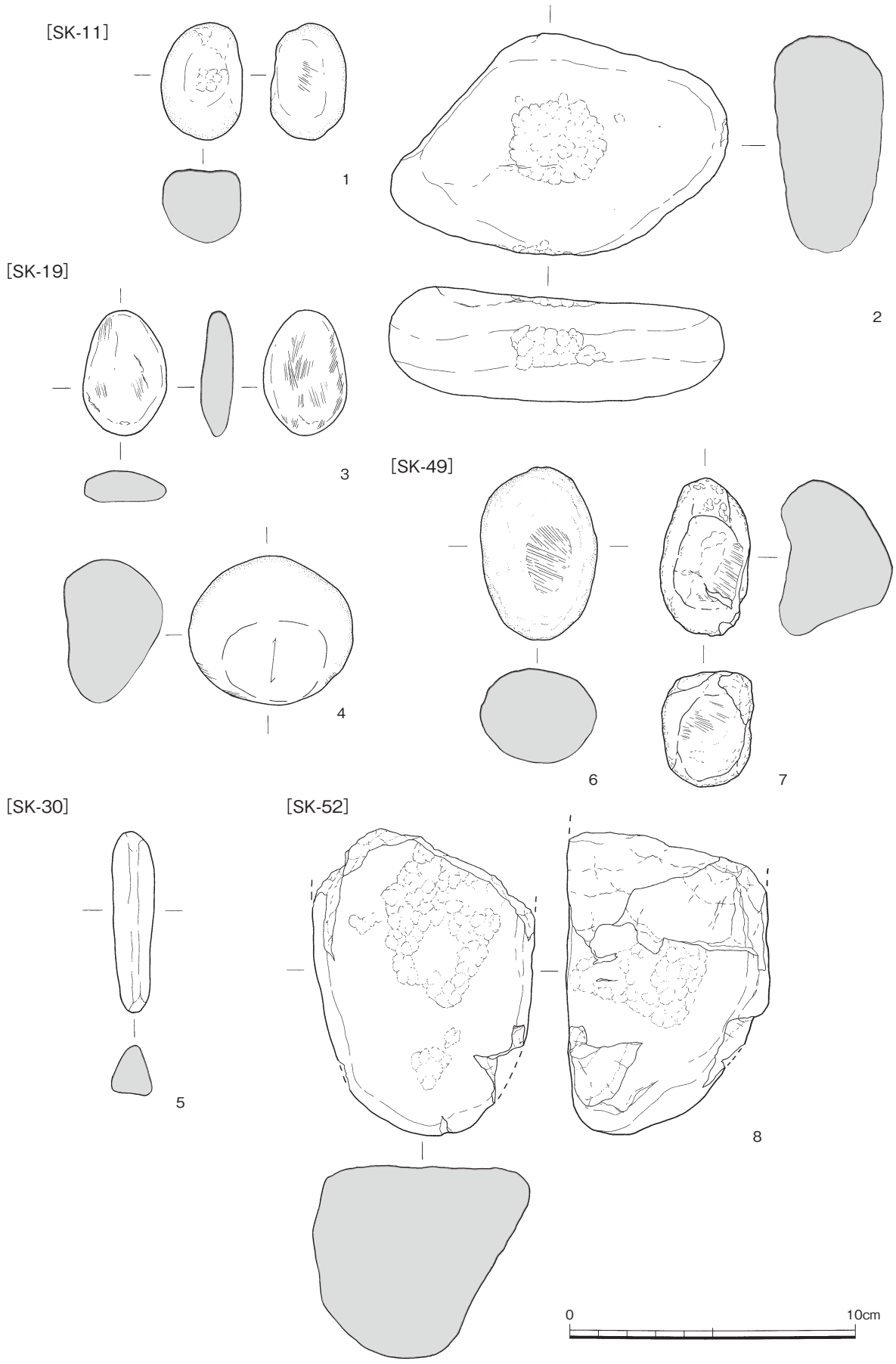


図 147　SK-11・19・30・48・52 出土石器実測図（縮尺 1/2）

面から 10cmほど掘られ，さらに中央部に深さ 20 ～ 28cmの小穴状の窪みが掘り込まれている（図 144，図版 34-2）。掘り形埋土は淡い暗褐色砂質シルト土で，切り合う SD-14 と比べて，わずかに黒みをおびる。下部には径 2 ～ 7㎜のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。

掘り形の上部からまとまって弥生土器が出土しているが，いずれも小片である（図 146-1・3 ～ 13）。底面では壺の胴部破片（図 146-2）が伏せられた状態で出土するとともに，点々と小指先大の炭化物片がみられた。

図 146-1･2 は壺である。1（図版 106-1）はラッパ形に大きくひらく口頸部をもつ。口縁端部を斜め下方に拡張し，刻目を施す。頸部中位には 2 条の断面三角形の突帯を貼り付ける。2（図版 105-10）は胴部破片で，外面でも上半部には丁寧なナデ調整，下半にはミガキ調整を施す。内面にはミガキ調整を施し，所々に粘土接合の痕跡を観察できる。3 ～ 6 は甕。3（図版 105-8）は，細身の胴部に「く」字形の口縁部がつく。外面にはナデ調整の後に，擦過に近いミガキ調整を加える。胴部中位～口縁部直下には煤が付着する。4・5 も「く」字形の口縁部をもつが，強く屈折する。6（図版 105-9）は，口縁屈曲部の直下に三角形突帯を貼り付け，平織りの布を巻いた指頭で摘むように大きな刻目を施す。7（図版 106-2）は高坏で，脚に厚さ 1.8cmの円筒形の粘土円盤を充填する。脚部外面にはミガキ調整を施すが，内面は器表面が荒れ，調整は不明。坏部底面には丁寧なナデ調整を施す。8 ～ 13 は底部破片。8・9 は壺で，ともに平底。8 の外底面は摩滅し，不安定な底部となっている。9 は焼成不良のため，器体が小さな土塊となって崩れている。底端部は摩滅して，稜角がとれている。10 ～ 13 は甕の底部。10 は厚手の上げ底，11 ～ 13 は裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の底部で，12 の外面は二次的な火熱を受けて赤変する。

この他，埋土中から磨石と敲石が出土している（図 147-1・2）。1（図版 142-4）は砂岩の小さな円礫で，わずかに敲打痕や擦痕を確認できる。重量は 44.0 g を測る。2（図版 145-5）は，砂岩の亜円礫を利用した敲石である。扁平な礫の主面と側部に敲打痕が残る。重量は 439.9 g を測る。

出土土器には弥生時代後期初頭（図 146-2･5･6）と前葉（図 146-3・4）のものがある。SK-11 は弥生時代後期前葉に埋没する土壙と考える。

13号土壙（SK-13，図144・148，図版26・34・106）

DS-24 区に位置する。Ⅳ層上面で検出した不整長円形の掘り形をもつ土壙である。SP-130 を切る。長径 1.13 m，短径 57 ～ 61cm，掘り形の平面形を検出できたⅣ層上面からの深さは 26cmを測る。底面にやや凹凸のある舟底状の土壙である（図 144，図版 26-1・34-3）。

掘り形上半部の埋土は暗褐色シルトを主体とし，下半部は砂礫混じりの灰黄褐色砂質土ないしにぶい黄褐色砂質シルトである。底面から若干浮いた状態で，50cm× 15 ～ 22cm，厚さ 5cmほどの灰色みをおびた暗褐色粘質土の塊（②層）が出土している。底面を埋める暗褐色砂質シルト（⑥層）には，径 5㎜ほどの炭化物片が少量混じる。

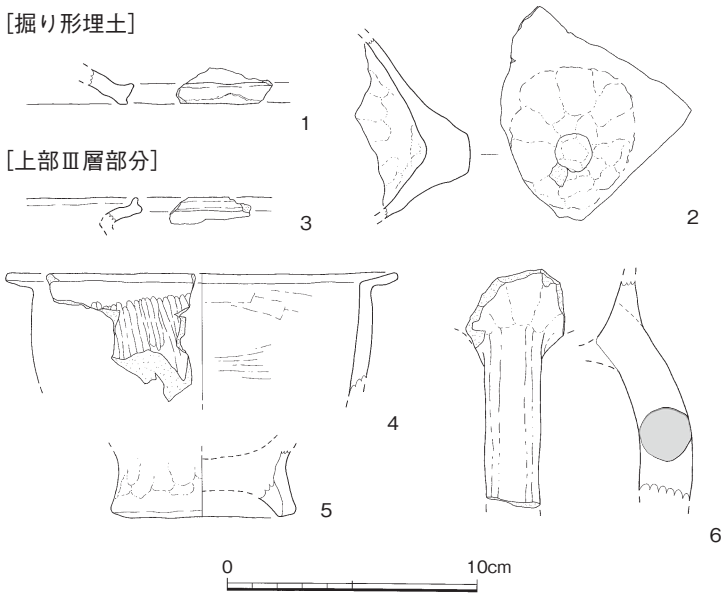


図 148　SK-13 出土土器実測図
（1・2：掘り形埋土，3 ～ 6：上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

掘り形埋土から出土した遺物は少ない。甕や壺の胴部片がほとんどであるが，高坏と甑形土器と考えられる破片がある（図 148-1・2）。1 は高坏の脚端部の破片である。端面に横ナデ調整を施すが，器面調整は均等でなく部分的に粘土の撚れが生じ，接地面には小さな面ができている。2（図版 106-3）は，左右両側から粘土板を貼り合わせ，接合部に突起をつくる。内外面ともに成形時の指頭圧痕が残る。この他，図版 106-5・6 の壺の破片が出土している。5 は肩部の破片で，外面にはナデ調整，内面にはミガキ調整を施す。粘土接合線が残る。6 は胴部下半の破片で，外面にはミガキ調整，内面にはナデ調整を施す。

上部Ⅲ層部分から出土した土器は，弥生時代中期後葉～後期初頭の時間幅で捉えられる甕や壺の胴部破片（図 148-3 ～ 5）であるが，中世の土師質土器が混じる（図 148-6）。3 は甕で，「く」字形口縁部の先端を上方に摘み上げるように成形する。口縁端部周辺に煤がこびりつく。4（図版 106-4）は深鉢型の鉢で，口縁部を逆 L 字形に強く屈折させる。焼成不良品で，胴部に亀裂が入り，小さな土塊となって剥離する。胴部外面にはミガキ調整を施し，内面には擦過状の調整痕跡が残る。5 は高台状の厚底の破片。粘土接合面で剥がれている。6 は中世の土師質土器の土鍋に付けられる棒状の脚部破片である。

以上，掘り形埋土の出土遺物には，SK-13 の時期を特定できるものは含まれていないが，弥生時代中期後葉～初頭の時間幅に収まる。一方，上部Ⅲ層部分からは，中世の土鍋の脚部破片（図 148-6）が出土しており，Ⅲ層中に当該期の遺構が掘られていた可能性が高い。他は，弥生時代中期後葉～後期初頭のものである。少ない資料ではあるが，SK-13 の埋没時期は弥生時代後期初頭と考えておきたい。

17号土壙（SK-17，図144，図版35・106）

DT・DU-25 区に位置する。北端は，攪乱で破壊されるとともに，調査区外にのびる。推定長 1.75 m，幅 98 ～ 105㎝の隅丸長方形の土壙である（図 144，図版 35-3）。底面にはかなり凹凸があり，Ⅳ層上面からの深さは 11 ～ 32㎝を測る。掘り形埋土は極粗砂～細礫が混じる黒褐色粘質シルトないしは黒褐色砂質土である。土層断面の観察から何度かの掘り返しが行われたことを推定できる。

SK-17 を確認するきっかけとなった掘り形上部の黒褐色粘質シルト（①層）は，長さ 98㎝，幅 53 ～ 78㎝，厚さ 7 ～ 14㎝の板状となっており，埋土とは異なり細礫～極粗砂が混じらない。

遺物は弥生土器の胴部小片が 2 点出土しているのみである（図版 106-7）。7 は甕の胴部破片で，外面にはナデ調整，内面には刷毛目調整が施される。外面には薄く煤が付着する。また，SK-17 掘り形の上部のⅢ層部分から出土した遺物も，弥生土器の胴部小片が 2 片あるだけである。

SK-17 から出土した遺物はごく少ないが，掘り形埋土の甕の胴部破片の調整は，弥生時代中期後葉～後期中葉に一般的にみられるものである。SK-17 は当該期の時間幅で捉えておく。

18号土壙（SK-18，図149）

調査区東北隅近くの DU-25 区に位置する。大半は調査区外に広がり，隅丸の角部を確認できたのみである。調査壁面の観察では SD-29 の延長部分を切る。底面がほぼ平坦で，竪穴建物である可能性も残す（図 149）。掘り形埋土は浅黄色砂質土で，小指先大～親指先大の極暗褐色砂質土の小塊が非常に多く混じる。一気に埋め戻されたものと判断できる。

遺物は出土していない。弥生時代後期初頭の SD-29 を切っているので，弥生時代後期前葉以降の遺構と考えることができる。

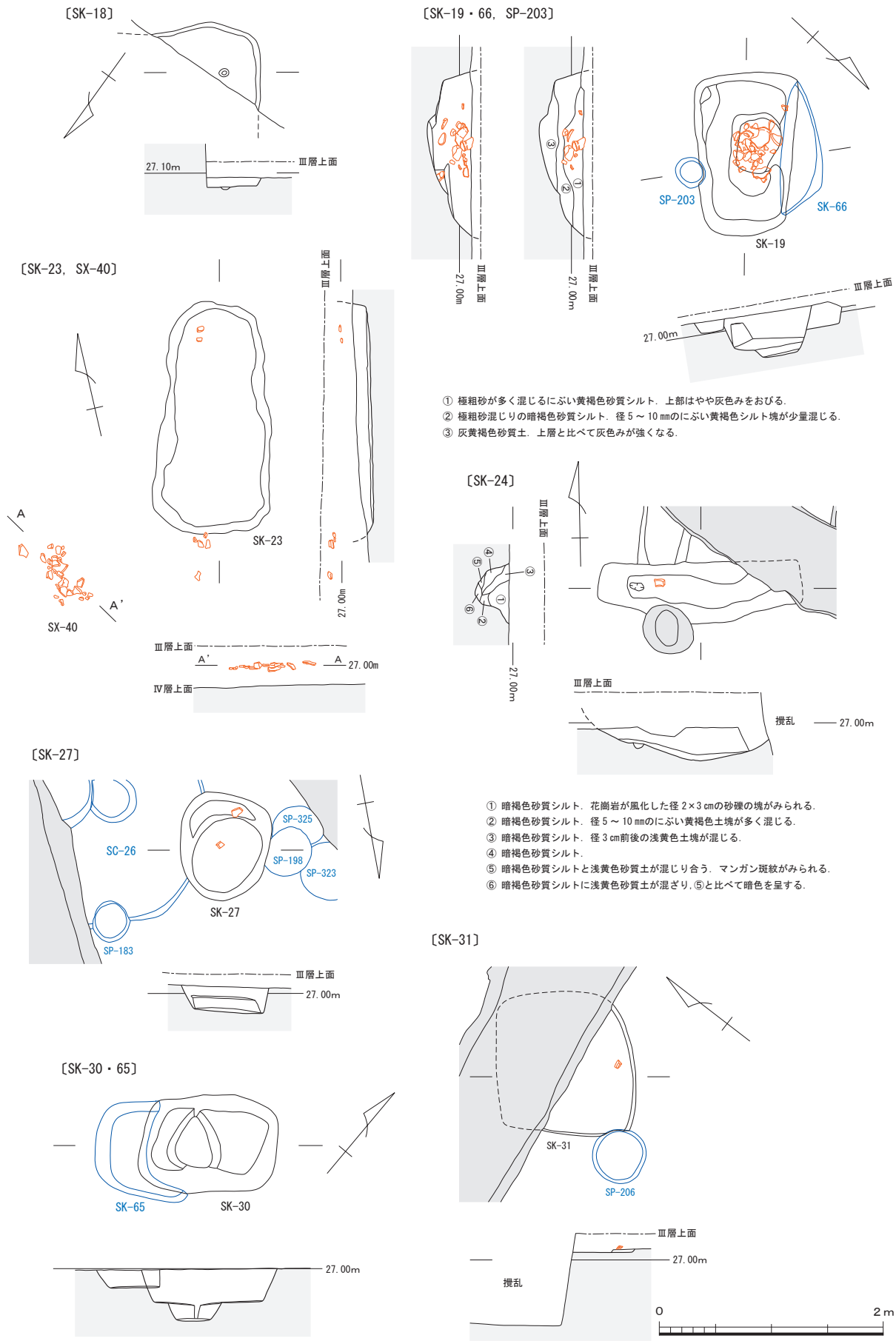


図 149　SK-18・19・23・24・27・30・31・65・66，SX-40，SP-203 遺構実測図（縮尺 1/50）

19号土壙（SK-19，図147・149・150，図版36・106・107・142）

DU-24区のⅣ層上面で確認した。SK-66を切る。長さ1.45ｍ，幅77～92㎝を測る隅丸長方形の掘り形をもつ（図149，図版36-1）。Ⅳ層上面からの深さは20㎝ほどで，底面は中央部が長さ73㎝，幅45㎝の隅丸長方形に深さ19㎝ほど窪む。掘り形上部には径1～2㎝の角礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質シルト（①層）が堆積し，弥生土器や石礫が比較的まとまって出土した。中位の埋土は暗褐色砂質シルト（②層），下部は灰色みをおびる灰黄褐色砂質土（③層）である。

掘り形上部の①層から集中して遺物が出土している。これらは，にぶい黄褐色砂質シルトとともに，一気に埋められた遺物である。

出土遺物は比較的多いが，接合復元できるものはない。図150-1・3～6は掘り形の上部の①層でかたまって出土している。1～4は甕である。1は口縁端部の破片で，緩やかに屈曲する「く」字形口縁と考える。2は裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の底部破片で，内外面とも横ナデ調整を施す。3（図版106-8）は外面をミガキ調整，内面をナデ調整する胴部破片である。4（図版106-9）は脚台状の底部～胴部下半で，外面には篦状工具による擦過痕が残る。5は壺の平底の破片。外面にはミガキ調整を施し，内面には指頭圧痕が残る。6（図版107-1）は高坏で，埦形の坏部に裾ひろがりの脚部がつく。坏部と脚部の接合部にはレンズ状の粘土円盤を充填する。

他に，磨石が2点出土している（図147-3・4）。3（図版142-2）は扁平な硬質砂岩の亜円礫を利用する。両面と側縁に擦痕が残る。重量は20.1ｇを測る。4は主面と片側の側部に擦痕が残る。重量は129ｇを測る。

以上の出土土器は弥生時代後期初頭に比定できる。当該期にSK-19の埋没時期を求めることができる。

23号土壙（SK-23，図149・150，図版36・107）

DU-21区に位置する。細長い不整長円形の掘り形をもち，長さ2.06ｍ，幅83～104㎝を測る。掘り形の輪郭を検出できたⅣ層上面からの深さは9～13㎝で，浅い舟底状となっている（図149，図版36-3）。掘り形埋土は粘性をおびる黒褐色砂質土で，所々に木の根の痕跡と考えられる鉄分が沈着した暗赤褐色土がみられる（図版36-2）。埋土下部には径5～10㎝の黄褐色シルト塊が点々と混じる。

遺物は掘り形下部から弥生土器の破片が出土している。外面をミガキ調整，内面をケズリ調整した甕の胴部破片（図版107-9）など，小片ばかりで，時期を比定できるものはない。掘り形上部からは甕の口縁部破片が1点だけ出土している（図150-7，図版107-4）。「く」字形の口縁部で，口縁屈折部に断面三角形の突帯を貼り付け，平織りの布を巻いた棒状工具を押捺して刻目を施す。

掘り形上部のⅢ層部分からも，弥生土器の小片が出土している（図150-8～15）。この中で，8・9・12は掘り形北半部，10・11は南半部の上部Ⅲ層部分から出土している。13～15はSK-23の南端部からやや離れた位置のⅢ層部分から出土しているが，SK-23に伴う可能性を考えて一緒に報告する。

8（図版107-3）・9（図版107-2）は壺の口縁端部の破片である。ともに，口縁端部を上方に拡張して，端面に2条の沈線様の凹線文をめぐらす。10（図版107-5）は外面に断面三角形の突帯を3条貼り付ける。壺の胴部破片と考える。11は甕の口縁部破片で，口縁端上面に細い粘土紐を貼り付け，上方に跳ね上げたような口縁部とする。12（図版107-8）は，脚台付きの鉢形のミニチュア土器で，内外面に成形時の指頭圧痕が残る。13は鉢と考えられる厚い底部破片。底部側面には，成形時に横方向に指頭でナデ付けた痕跡が残る。14（図版107-6）は高坏で，坏部中位で一旦反転して口縁部が広がる。粘土接合面で破損する。器壁の芯部には淡い黒色の黒化層が残るが，剥離してい

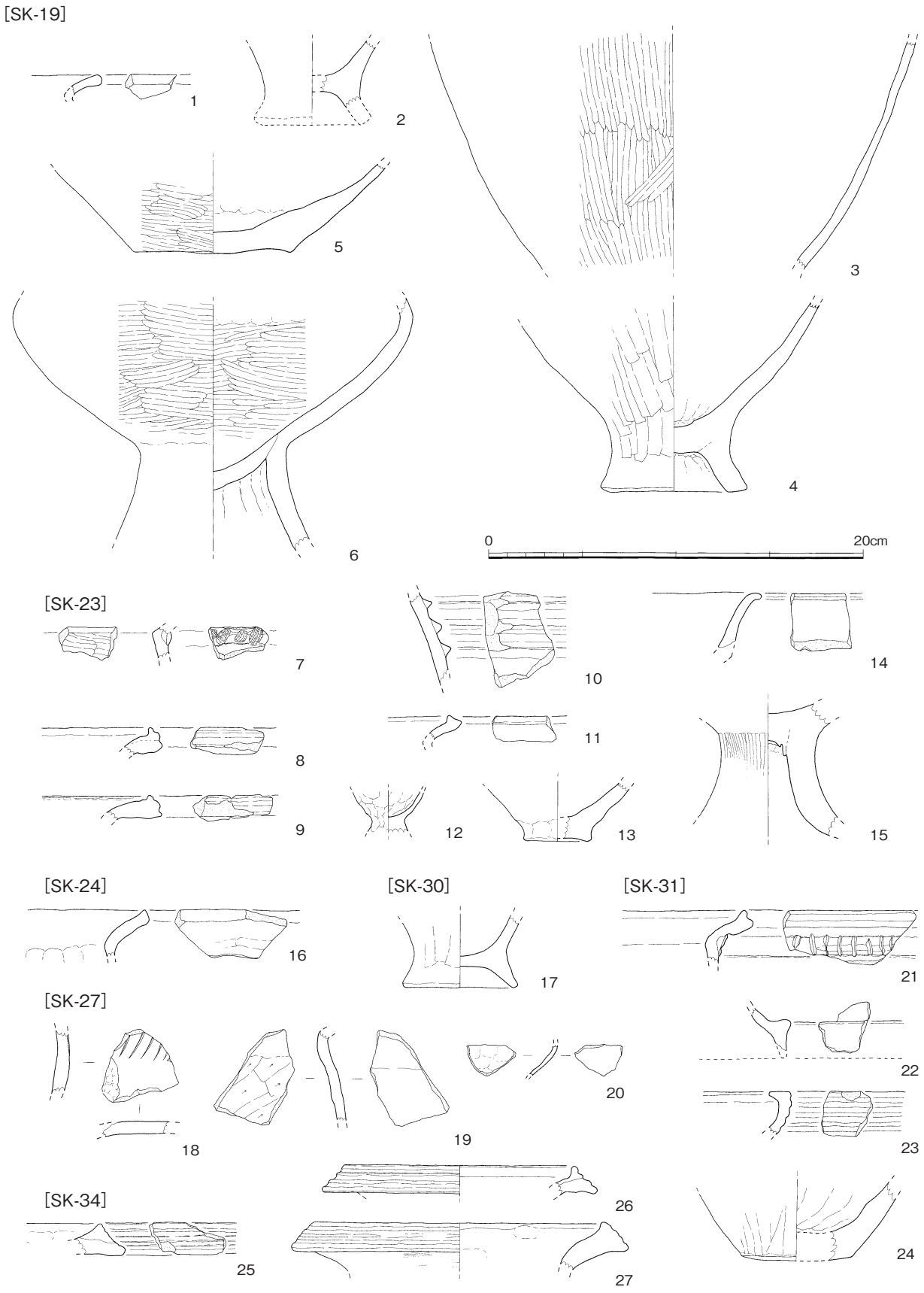


図 150　SK-19・23・24・27・30・31・34 出土土器実測図（縮尺 1/3）

る粘土接合面は器表面と同じく橙色を呈する。焼成時破損品の可能性が高い。15（図版 107-7）も高坏で，厚手のつくりである。円筒形の脚部に粘土を充填する。脚部外面には刷毛目調整の後にナデ調整を加える。

以上，掘り形埋土中から出土した甕（図 150-7）は，弥生時代後期中期後葉～前葉の時間幅で捉えることができる。Ⅲ層部分から出土した遺物も，同じ時間幅に収まる。したがって，SK-23 は弥生時代後期前葉に埋没する土壙と捉えることができる。

24号土壙（SK-24，図149・150，図版108）

DU-22 区に位置する。東端を塹壕で破壊されているが，残存長 1.78 m，幅 83 ～ 104cmの溝状の細長い不整な隅丸長方形の土壙と考える（図 149）。掘り形の輪郭を検出できたⅣ層上面からの深さは 38 ～ 54cmで，中央部が緩やかに窪む舟底状を呈する。掘り形埋土は，浅黄色砂質土が混じり，やや黄色みをおびた暗褐色砂質シルトであるが，掘り形中央に設けた土層観察用畦では，Ｖ字形に黒みの強い暗褐色砂質シルトの①層が堆積する。SK-24 は，埋没した後に，再度掘り返されているものと考えた。

出土遺物は少なく，弥生土器ばかりである。しかも，胴部小片ばかりで，時期をある程度推定できる遺物は 2 点のみである（図 150-16，図版 108-1）。図 150-16 は，掘り形埋土から出土。緩やかに「く」字形に外反する甕の口縁部の破片である。横ナデ調整で口縁端部を摘み上げる。口縁屈曲部の外面には，棒状工具を押さえつけたような痕跡が残る。図版 108-1 は掘り形でも下部から出土している。壺の胴部破片で，外面にはミガキ調整，内面にはナデ調整が施されている。

出土遺物は少ないが，掘り形内から出土した甕（図 150-16）は弥生時代後期初頭～前葉に比定できる。壺の胴部破片（図版 108-1）の調整手法も同時期に一般的にみられるものである。弥生時代後期初頭～後期前葉に埋没する土壙と考えておきたい。

27号土壙（SK-27，図149・150，図版108）

DW-26 区に位置する土壙で，SC-26 に切られる。長径 94cm，短径 77cm，深さ 21 ～ 23cmを測る長円形の掘り形をもつ。底面はほぼ平坦で，南側が 9 ～ 10cmほど一段高くなっている（図 149）。SC-26 に切られ，SP-189 を切る。掘り形埋土の上部は極暗褐色砂質シルトで，下部の土壙底近くには親指先大のにぶい黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じる。

掘り形からは弥生土器が出土しているが，数も少なく，小片ばかりである（図 150-18 ～ 20）。18（図版 108-4）は壺もしくは甕と考えられる胴部破片である。篦状工具で「ノ」字形の短斜線文を施文する。破片右下には焼成破裂痕が残る。かなり深い焼成破裂痕で，焼成時に焼成破裂が生じて器体に穴があいた可能性が高い。19（図版 108-2）は甕の肩部破片で，二次的火熱を受けて破片下半部は赤変するとともに，小さく器表面が剥げ落ちている。20（図版 108-3）の器種は不明である。器壁は薄く，胎土も精選され，外面には赤色顔料が厚く塗布されている。

以上の出土土器は，弥生時代後期初頭に比定できる。さらに SK-27 を切る SC-26 が弥生時代後期初頭に比定されることから，SK-27 は弥生時代後期初頭に SC-26 に先行して掘られた土壙と考える。

28号土壙（SK-28，図23，図版108）

DW-26区に位置する。Ⅳ層上面でSC-26を検出した際，SC-26の掘り形埋土の中で，極暗褐色砂質シルトを埋土とする掘り込みを確認でき，SK-28とした。SC-26を切る（図23）。東半部を塹壕で破壊されるが，径78cm前後，深さ22～28cmの円形の掘り形をもつと推定される。底面は緩やかに窪む。掘り形上部の埋土は，前述したように極暗褐色砂質シルトであるが，下部～底面近くには親指先大のにぶい黄褐色砂質シルトの小塊が点々と混じる。

掘り形埋土中からは，弥生土器と炭化物片が出土した。弥生土器は胴部破片だけで，その中には，外面を刷毛目調整した後にナデ仕上げし内面をケズリ調整する甕や，外面に板もしくは篦状の工具でナデ調整，内面に擦過状のケズリ調整を施す破片（図版108-5）がある。ともに，弥生時代中期後葉～後期前葉の時間幅に収まる。

SK-28は，弥生時代後期初頭に埋め戻されるSC-26を切ることから，弥生時代後期前葉と捉えておく。

30号土壙（SK-30，図147・149・150，図版138）

DV-23区に位置する。SK-65を切る。Ⅳ層上面で検出した。長さ1.18ｍ，幅85cmの不整の隅丸長方形の掘り形をもつ（図149）。深さは28～30cmで，底面中央がさらに15～16cmほど掘り込まれている。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，上半には砂が多く混じる。

遺物は少なく，掘り形埋土から甕の底部1点（図150-17）と胴部小片2点，磨石1点（図147-5）が出土したにすぎない。図150-17は，裾部が「ハ」字形にひらく脚台状の甕の底部破片である。外面を篦状工具でナデ上げ，内面には指頭によるナデ調整を施す。図147-5（図版138-10）は棒状の礫岩の亜円礫を利用した磨石である。上端部に線条痕が残る。重量は23.1ｇ。

出土遺物は少ないが，脚台状の甕の底部破片（図150-17）は，弥生時代中期後葉～後期前葉に一般的にみられるものである。当該期の時間幅の中でSK-30の時期を捉えておく。

31号土壙（SK-31，図149・150，図版108）

DU・DV-23・24区に位置する。SP-206に切られ，北半部を塹壕で破壊されているが，一辺1.25ｍほどの隅丸方形の掘り形と考えられる。掘り形の輪郭を検出できたⅣ層上面からの深さは4～5cmで，底面はほぼ平坦である（図149）。掘り形埋土は極暗褐色シルトで，浅黄色砂質土の小塊がごく少量混じる。

遺構検出面で甕の口縁部破片1点（図150-21，図版108-7）が出土した以外，掘り形埋土中から出土した遺物はない。「く」字形に屈折する口縁部で，口縁上端に粘土を貼り付け口縁端面を拡張し，端面に幅広の沈線をめぐらす。口縁屈折部に低い突帯を貼り付け，部分的に中央を凹線文状に窪ませ刻目を施す。

掘り形上部のⅢ層部分からは3点の弥生土器が出土している（図150-22～24）。この中で，22・23はⅢ層でも最下面から出土しており，本来SK-31の掘り形埋土に包含されていた遺物と考えられる。22は高坏の脚部破片で，脚裾が「ハ」字形に反転する。23（図版108-6）は高坏の坏部破片である。口縁端部を内側に折り曲げ，外面には4条の沈線様の凹線文をめぐらす。24は壺または甕の凸レンズ状の底部破片で，外面は篦状工具でナデ上げられている。

図150-21・23は弥生時代中期前葉～後期初頭，図150-22・24は後期中葉に比定できる。SK-31は弥生時代後期中葉に埋没する土壙と考えておきたい。

34号土壙（SK-34，図150・151，図版108・109）

DV-21区のⅣ層上面で検出した。長径1.34 m，短径80cmの細長い不整長円形の掘り形をもつ。深さは7～15cmで，底面は小さな凹凸があるが，全体として緩やかに窪み，舟底状となる（図151）。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，径1.5～5cmの黄褐色シルト塊が多く混じる。底面南半部には黄褐色シルトの薄層がみられる。Ⅳ層起源の黄褐色シルトの塊や薄層がみられることから，人為的に埋め戻されていると判断した。

掘り形埋土中からは　弥生土器や炭化物片が出土している。弥生土器は壺の口縁部破片2点（図150-26・27）と胴部小片3点だけである。26（図版108-9）・27（図版108-8）は，ともに口縁端部を上下に拡張し，端面に凹線文を3条めぐらす。この他，図150-25（図版109-4）は掘り形上部のⅢ層部分から出土した壺の口縁部破片である。口縁上端に粘土帯を貼り付け拡張する。端面には擬凹線文が4条めぐる。

掘り形の埋土中から出土した壺（図150-26・27）は，ともに弥生時代中期後葉に比定でき，SK-34が埋め戻された際に混入した遺物と考えられる。SK-34は当該期の土壙と判断できる。

35号土壙（SK-35，図151・152，図版37・109）

DV-23区のⅣ層上面で検出した。SC-32に切られ，SD-36の東北部を切る。北西側を塹壕で破壊されているが，長径1.68 m，残存短径91cmの不整な長円形の掘り形を復元できる（図151，図版37-1）。底面は北から南に向かって緩やかに傾斜し，深さは7～26cmを測る。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，部分的に暗灰色砂が混じる部分や，拳大の浅黄色砂質土塊が多く混じる部分がみられる。浅黄色砂質土塊はⅣ層を起源としており，人為的に埋め戻されている可能性が高い。

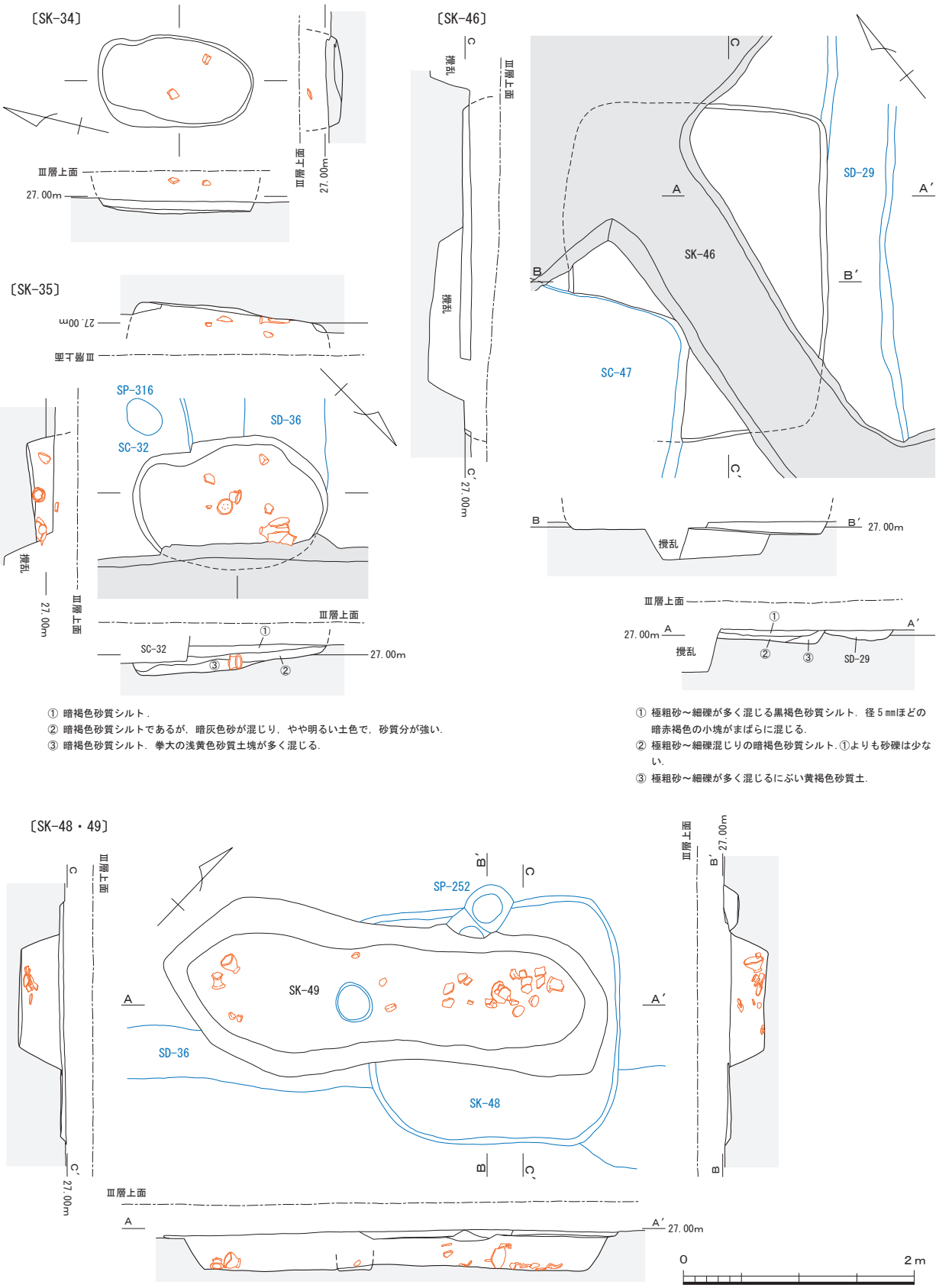
掘り形の中位～下部から，壺の大形破片や，ほぼ完形に復元できた甕が押し潰された状態で出土した（図152-1～3）。1（図版109-2）は，短い円筒状の頸部から緩やかに外反する口縁部がつく。口縁端面には浅い沈線様の凹線文が上下に1条ずつ計2条めぐる。2（図版109-3）は扁球形の壺の胴部破片である。平底がつく。外面にはミガキ調整，内底面には時計まわりの指頭によるナデ調整を施す。3（図版109-1）は口縁部を「く」字形に外反させ，横ナデ調整で端部を上方に摘み出す。裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の底部をもち，胴部最大径が上部にあるため，腰高のプロポーションを呈する。胴部外面には縦方向のミガキ調整，内面にはナデ調整を施し，成形時の指頭痕が多く残る。

以上の土器の中で，甕（図152-3）は弥生時代中期後葉に遡るが，壺（図152-1）は後期初頭の特徴をもつ。出土状況からSK-35は人為的に埋め戻された際に投棄されたものと考えられる。したがって，SK-35は弥生時代後期初頭に位置付けられる。

38号土壙（SK-38，図136・152，図版109）

DW-25区に位置し，SK-1に切られる。細長い不整長円形の掘り形をもつ（図136）。残存長径1.08 m，短径72cmを測る。浅い舟底状の土壙で，深さは12cm，部分的にさらに5～10cmほどの深さの小穴状の窪みがあるなど，底面はかなり凹凸にとむ。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，浅黄色砂質土の小塊が点々と混じる。

掘り形埋土から出土した遺物は，弥生土器の胴部の小片が10点ほどしかなく，弥生時代中期後葉～後期前葉に一般的にみられる外面を刷毛目調整した後にミガキ調整を加えた壺の胴部破片（図版109-6）以外は，時期を判別できるものはない。



① 暗褐色砂質シルト．
② 暗褐色砂質シルトであるが，暗灰色砂が混じり，やや明るい土色で，砂質分が強い．
③ 暗褐色砂質シルト．拳大の浅黄色砂質土塊が多く混じる．

① 極粗砂～細礫が多く混じる黒褐色砂質シルト．径５㎜ほどの暗赤褐色の小塊がまばらに混じる．
② 極粗砂～細礫混じりの暗褐色砂質シルト．①よりも砂礫は少ない．
③ 極粗砂～細礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土．

図 151　SK-34・35・46・48・49 遺構実測図（縮尺 1/50）

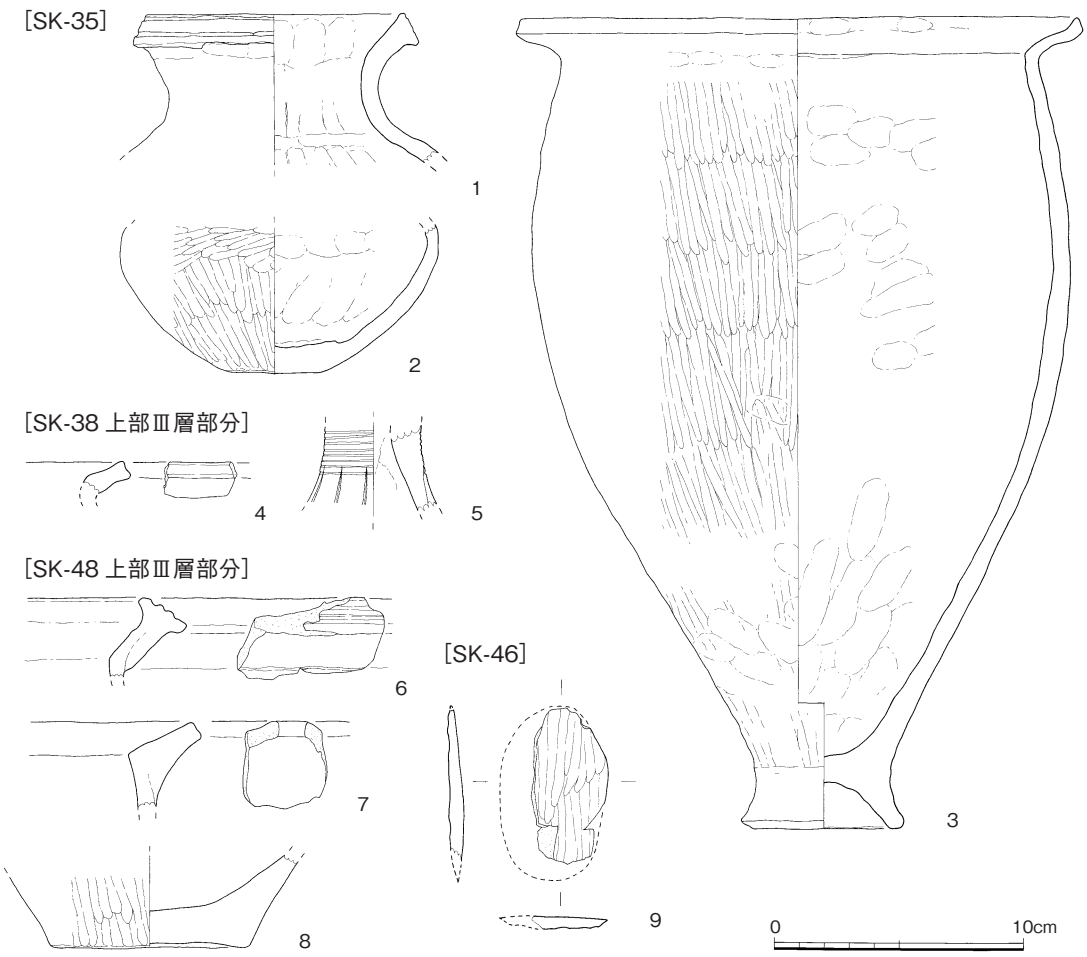


図 152　SK-35・38・46・48 出土土器実測図（縮尺 1/3）

上部Ⅲ層部分の出土土器も少ない。後期初頭～前葉と考えられる「く」字形口縁の甕の口縁端部破片（図 152-4），弥生時代中期後葉～後期初頭の脚柱部上半に 8 条の細く鋭い沈線をめぐらし，その下方に矢羽根透かし孔を穿孔する高坏の脚部破片（図 152-5）がある。

確実に SK-38 の時期を比定できる出土遺物はないが，弥生時代後期前葉の SK-1 に切られ，上部Ⅲ層部分を含めて，出土土器が弥生時代中期後葉～後期前葉に収まることから，SK-38 は弥生時代後期初頭の時間幅で捉えておきたい。

46号土壙（SK-46，図151・152，図版110）

DW-23 区に位置する。SC-47 に切られ，SD-29 を切る。掘り形埋土は黒褐色～暗褐色の砂質シルトで，長辺 2.86 m，短辺 2.25 mの隅丸方形の掘り形をもつ（図 151）。底面は西から東に向かって緩やかに傾斜するが，深さは 7 ～ 11cmで，全体としてはほぼ平坦である。竪穴建物とした長辺 2.9 m，短辺 2.1 mほどの SC-12 や，一辺 2.3 ～ 2.4 mほどの SC-37 とほぼ共通する大きさであるが，柱穴等を確認できなかったため，土壙とした。

掘り形埋土から出土した遺物は少ない（図 152-9，図版 110-2）。図 152-9（図版 110-3）は，残存長 6cm，幅 3cm，厚さ 5mmの外面にミガキ調整を施した甕の胴部破片である。右側の周縁は弧を描き，裏面の剥離面が凸レンズ状に膨らみ，周縁は鋭いエッジが生じている。推定長径 7cm，短径 4cmほどの楕円形の焼成破裂土器片である。図

版 110-2 は甕の胴部破片で，外面には刷毛目調整，内面にはナデ調整が施される。外面には煤が付着する。

出土遺物は少なく，胴部破片だけであるが，弥生時代中期後葉～前葉の甕に一般的にみられる器面調整が施されている。また，SK-46 は，弥生時代初頭の SD-29 を切り，後期初頭に埋没する SC-47 に切られてもいる。したがって，SK-46 の埋没時期は弥生時代後期初頭に求めることができる。

48号土壙（SK-48，図151・152，図版37・110）

DW・DX-21・22 区に位置し，SK-49 を切り，SP-252 に切られる（図版 37-2）。SD-36 との切り合い関係は明らかにできなかった。長辺 2.2 m，短辺 2.07 m，深さ 3 ～ 4㎝の不整な隅丸方形の掘り形をもつ（図 151）。底面はほぼ平坦である。前述した SK-46 と同じく，竪穴建物の可能性も残すが，柱穴等が確認できなかったため，土壙とした。掘り形埋土は暗褐色砂質土である。

掘り形埋土からは遺物は出土していない。上部Ⅲ層部分から弥生土器の破片が出土している（図 152-6 ～ 8）。6（図版 110-5）は壺である。口縁部を短く外反させるとともに，粘土を貼り付け肥厚させ，口縁部を成形する。口縁部の屈曲部には，粘土を接合した際に段が生じている。口縁端部を上下に拡張して，3 条の波板状の凹線文をめぐらす。7（図版 110-4）は山ノ口式系土器の甕である。口縁部は粘土を貼り付け，内傾する細長い断面台形につくる。端面は横ナデ調整で窪む。胎土には金雲母が多く混じる。8 は壺の平底の破片。外面にはミガキ調整，外底面には擦過状のナデ調整を施す。内面は器表面が荒れ調整は不明である。底部側面を中心として黒斑が生じている。

上部Ⅲ層部分から出土した土器は弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。しかし，SK-48 は後期初頭の SK-49 を切っている。そのため，位置的には SK-49 の掘り形上部から出土しているものの，SK-48 に切られる SK-49，もしくは後期初頭～前葉の土器が出土する SD-36 の埋土中に本来包含されていたものが混入したものと考える。切り合い関係を重視して，SK-48 は SD-36 が埋没した後の土壙と考え，弥生時代後期中葉～後葉の時間幅で捉えておきたい。

49号土壙（SK-49，図147・151・153・154，図版37・110・111・143・148）

DW・DX-21・22 区に位置する。SD-36，SK-48 に切られる。長径 3.35 m，短径 1.61 ～ 1.66 m，深さ 32 ～ 37㎝の細長い不整長円形の大形土壙である（図 151，図版 37-2）。掘り形の上部は暗オリーブ褐色砂質土，下部はオリーブ褐色シルトで埋積されている。床面で径 30 × 35㎝の小穴を確認できたが，長軸方向に沿って残した土層観察用畦で，上部と下部の境界部分から掘り込まれていることを確認できた。一旦埋没した SK-49 を再度掘り直しているものと考える。

出土遺物には，弥生土器の比較的大形の破片（図 154-1 ～ 6），分銅形土製品（図 153-1），磨石（図 147-6・7）がある。その中で，確実に掘り形下部の埋土から出土したものは図 154-1・3・4・6 と図 153-1 である。

図 154-1 ～ 4 は甕である。1（図版 111-2）は，細身の胴部に逆Ｌ字形に近く屈折する口縁部がつく。口縁外面には折り曲げの際に生じた粘土の撚れが残る。胴部内面には 2.5㎝間隔で粘土接合線を観察できる。外面には煤が付着する。2（図版 111-1）は，「く」字形に屈折する口縁部で，胴部外面には擦過状のナデ調整，内面にはミガキ調整を施す。口縁屈曲部に低いベルト状の突帯を貼り付け，平織りの布を巻いた指頭を押捺して刻目を施す。3（図版 110-6）は胴部破片。器体の傾き復元は不確実である。外面には刷毛目調整の後にミガキ調整，内面には擦過状のナデ調整を施す。胴部中位外面には煤が付着する。4（図版 110-7）も

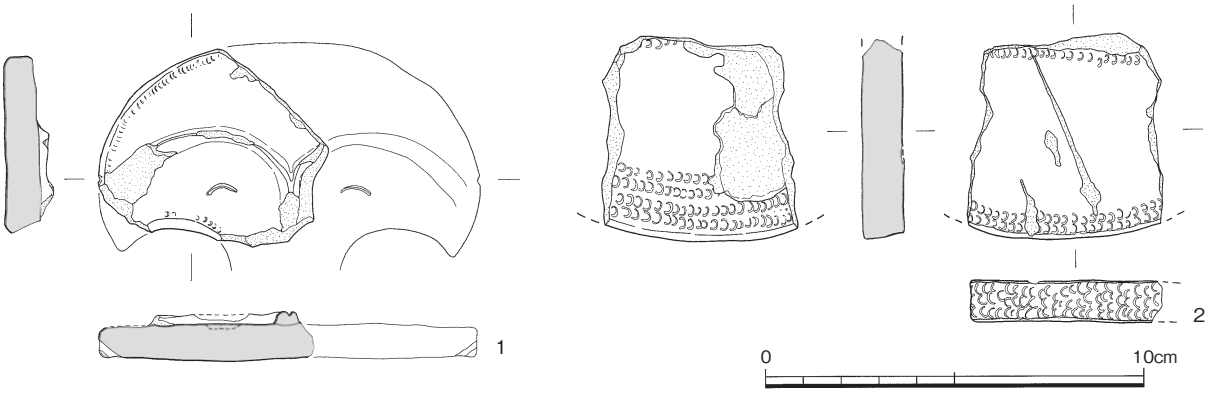


図 153　SK-49，SX-57 出土分銅形土製品（縮尺 1/2）

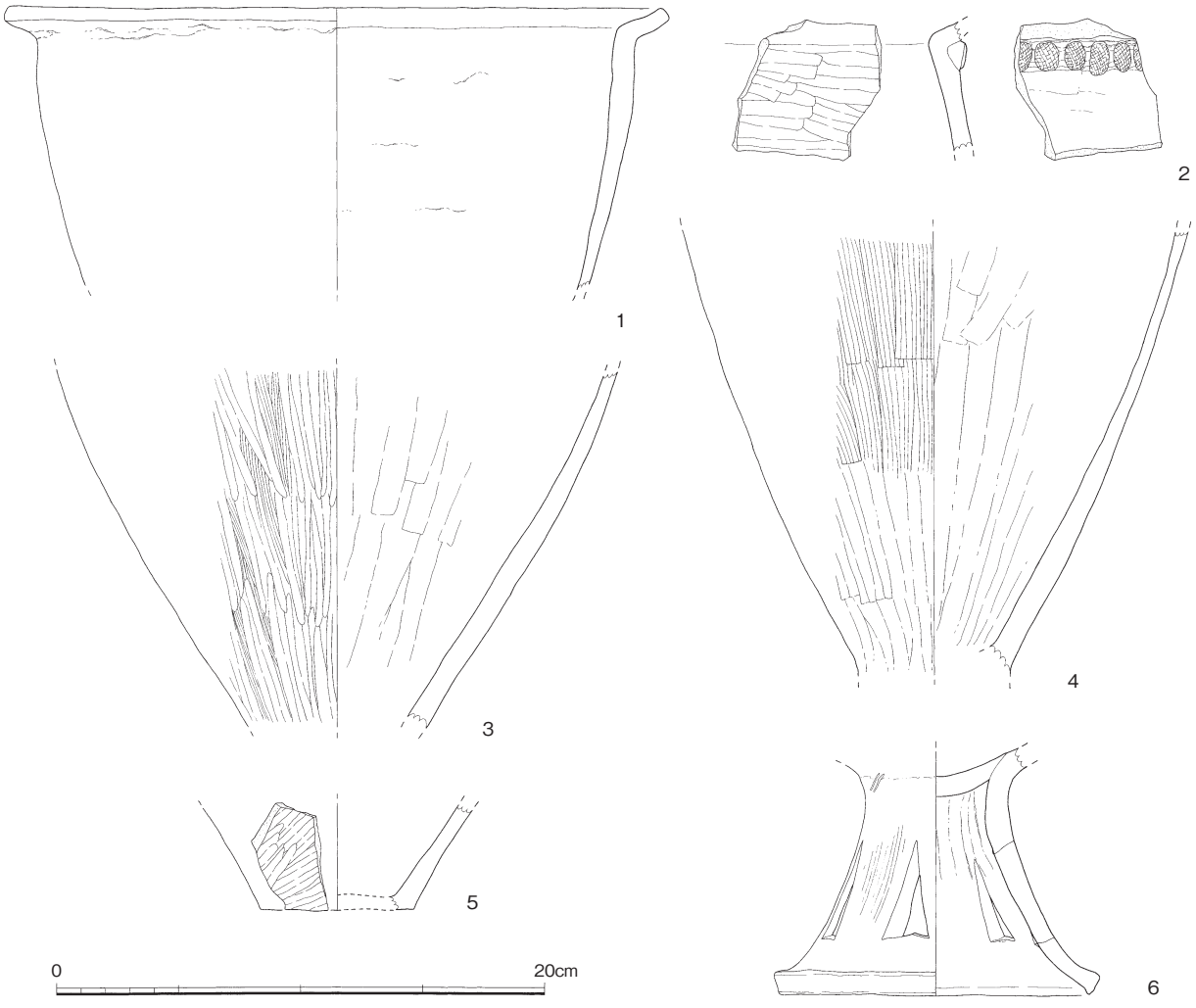


図 154　SK-49 掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）

胴部破片である。胴部中位外面に刷毛目調整を施し，下半は二次的火熱を強く受け赤変するとともに器表面が荒れ，幅 6 ～ 8㎜の擦過調整の痕跡を部分的に観察できるだけである。胴部内面には擦過状のナデ調整を施す。胴部中位には煤が付着する。5 は鉢または壺の平底の底部破片で，外面にミガキ調整，内面にはナデ調整を施す。6（図版 111-3）は高坏の脚部破片。脚部には八方向に三

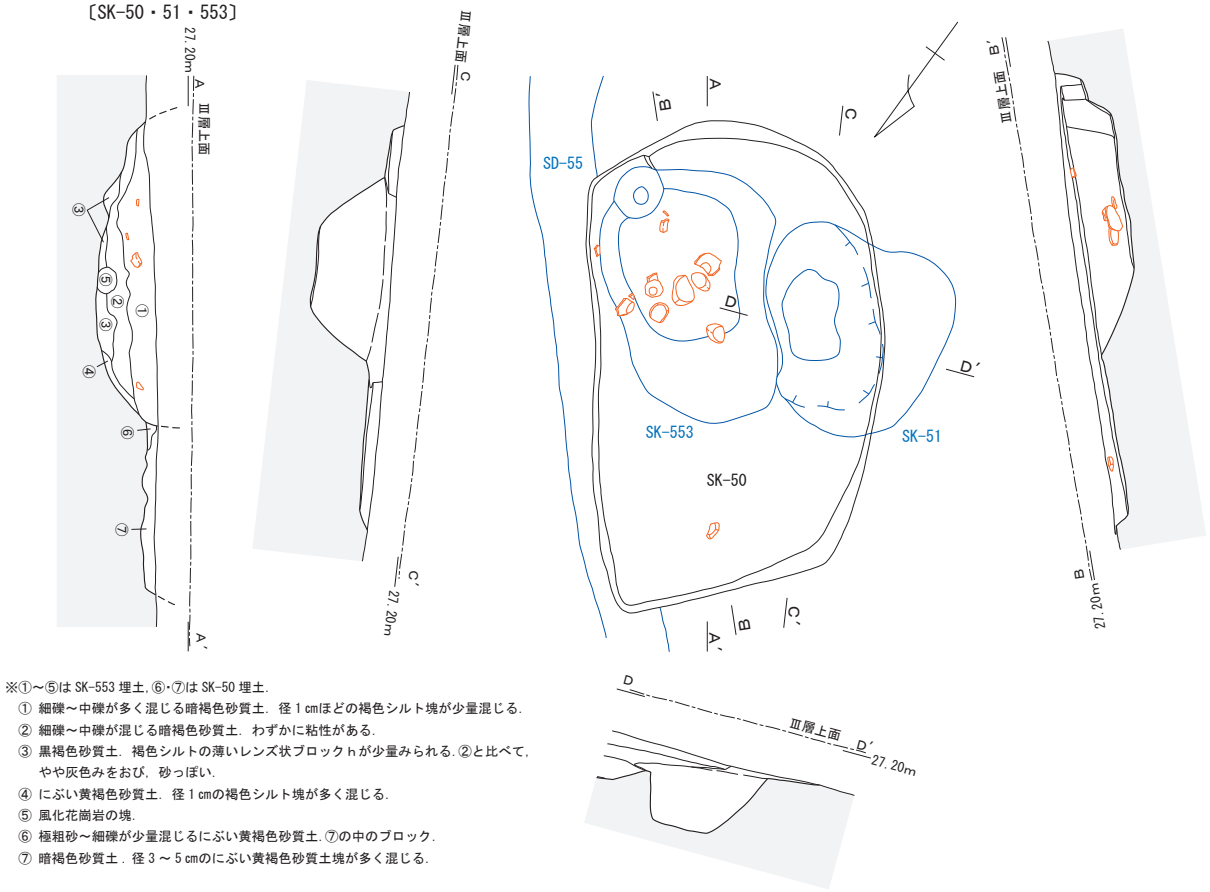


図155　SK-50～54・553遺構実測図（縮尺1/50）

角形の透かし孔を焼成前に穿孔する。脚の付け根に2条1単位の篦記号（？）を施す。坏部底面には凸レンズ状の粘土円盤を充填する。

図153-1（図版148-5）は土層観察用畦の埋土部分から出土した分銅形土製品である。推定幅10cm，厚さ8～9.5㎜の分銅形の土板に，粘土紐を貼り付けて高さ2～3.5㎜の眉と鼻梁，篦状工具で幅8㎜の弧状の目を表現する。側面から焼成前に径1.5㎜の小穴をあける。上面の周縁部には幅1㎜ほどの半截竹管の小さく細い「C」字形の刺突文をめぐらす。一部は弧状を呈さず，直線的な文様となる。「C」字形の刺突文の窪み内には赤彩の痕跡が残る。残存重量は36.2 gを測る。

図147-6・7は花崗岩の亜円礫を利用した磨石である。6（図版143-1）の一面にわずかに擦痕が確認できる。側縁に敲打痕と考えられる凹部を観察できるが，自然剥落との判別がつき難い。重量は108.9 gである。7（図版143-2）は断面三角形の礫の二面でわずかに擦痕が確認できる。重量は92 gを測る。

以上，掘り形下部の埋土から出土した甕（図154-1・3・4）は弥生時代後期初頭，高坏（図154-6）は中期後葉に比定できる。したがって，SK-49は，後期初頭～前葉の土器が出土するSD-36に先行して，弥生時代後期初頭までに埋没する土壙と捉えることができる。

50号土壙（SK-50，図155・156，図版112）

DV･DW-21区のⅣ層上面で検出した。長さ3.05m，幅1.37～1.4 m，深さ8～10㎝の細長い不整円形の掘り形をもつ。底面は平坦である。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，径3～5㎝のにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じる（図155）。また，極粗砂～細礫が混じるにぶい黄褐色砂質土の塊がみられ，人為的に埋め戻されていると判断した。SD-55とSK-51を切り，SK-553に切られる。

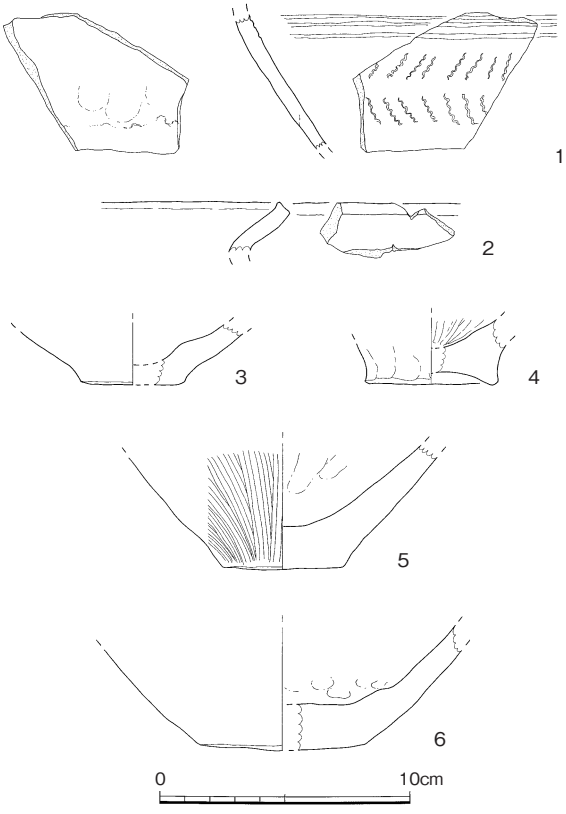


図156　SK-50上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺1/3）

掘り形埋土からは弥生土器が1点だけしか出土していない。しかも，胴部の小片で，時期は不明である。これに対して，上部Ⅲ層部分からは，少ないながら時期を比定できる弥生土器の破片が出土している（図156-1～6，図版112-2）。1（図版112-3）は壺の肩部破片で，頸部の付け根に3条の沈線をめぐらし，その下方に貝殻腹縁で羽状文を施文する。白っぽい明褐灰色を呈する。2は甕の「く」字形口縁部の破片で，口縁端部を横ナデ調整で小さく摘み上げる。3は外底面がやや膨らむ不安定な壺の平底，4は甕の厚手の上げ底の破片である。5･6は厚手の凸レンズ状の底部破片で，壺と考える。図版112-2は甕の胴部上半の破片で，外面には刷毛目調整の後にナデ調整を施し，内面では刷毛目調整とナデ調整を併用する。

上部Ⅲ層から出土した土器には，弥生時代後期後葉の凸レンズ状の底部（図156-5・6）が含まれている。しかし，SK-50は後期初頭のSD-55を切り，後期中葉のSK-553に切られているので，SK-50を掘り下げ中にSK-553に気がつかず，誤って取り上げた遺物と考える。これらを除外すれば，

他は後期初頭に比定できる。SK-50 は弥生時代後期初頭に埋め戻された土壙と考える。

51号土壙（SK-51，図155・157）

DV・DW-21 区に位置し，SK-50 に切られる。Ⅳ層上面では，底辺 1.42 m，高さ 1.2 mほどの隅丸三角形の掘り形の輪郭を検出したが，掘り下げていくと，東側に長径 1.25 m，短径 65cmの不整長円形の落ち込みを確認できた。掘り形埋土から壺の平底の破片 1 点が出土した（図 157-1）。

出土遺物は 1 点だけであるが，弥生時代中期後葉～後期前葉の時間幅で捉えることができる。SK-51 を切る SK-50 が後期初頭と考えられるので，SK-51 は弥生時代中期後葉～後期初頭の土壙である可能性が高い。

52号土壙（SK-52，図147・155・157，図版112）

DV・DW-20・21 区に位置する不整長円形の土壙である。最大長径 1.33 m，短径 1.15 mの掘り形をもつ。Ⅳ層上面からの深さは 5 ～ 8cmを測る。浅いがしっかりした掘り形をもつ（図 155）。底面にはわずかに凹凸がある。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆～親指先大の浅黄色砂質シルト塊が少量混じる。

掘り形埋土から弥生土器の高坏の坏部破片が 1 点出土したが，小片で時期を比定できない。上部Ⅲ層の最下面から敲石（図 147-8）と弥生土器の破片（図 157-2・3）が出土した。図 157-2（図版 112-4）は，坏中位で反転して口縁部がひろがる高坏の破片である。外面にはミガキ調整，内面には丁寧なナデ調整を施す。3（図版 112-5）は，径 1.65 × 1.5cmの細長い粘土棒を折り曲げた把手で，全面に成形時の指頭痕が残る。図 147-8 は，花崗岩を利用した敲石の破片である。上面と片側側面の二面に敲打痕が集中して残る。残存重量 706.4 ｇを測る。

掘り形埋土からは SK-52 の時期を特定できる遺物は出土していない。しかし，上部Ⅲ層から出土した高坏（図 157-2）は弥生時代後期前葉に比定でき，把手（図 157-3）は中期後葉～後期前葉に一般的にみられるものである。ともにⅢ層でも最下面から出土しており，本来 SK-52 の掘り形内に包含されていたと考えられる。資料は限られているが，最も新しい時期を示す高坏（図 157-2）から，SK-52 は弥生時代後期前葉の土壙と考えておきたい。

53号土壙（SK-53，図155・157，図版112）

DX-21 区に位置する。長径 1.06 m，短径 78cm，検出面であるⅣ層上面からの深さ 3 ～ 4cmの浅い皿状の土壙である。SD-36 中央部～南西部分に切られる。掘り形埋土は，暗褐色砂質シルトに，拳大の浅黄色細砂質土塊が多く混じり，Ⅲ・Ⅳ層の境界部分の凹みである可能性も残る。

掘り形埋土から高坏の脚部破片が 1 点出土した（図 157-4，図版 112-6）。脚端部を上方に横ナデ調整で跳ね上げ，その上方に波板状の凹線文をめぐらす。

出土遺物は 1 点しかないが，弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。また，後期前葉に埋没する SD-36 中央部に切られているので，SK-53 の埋没時期は弥生時代中期後葉～後期初頭の時間幅で捉えておきたい。

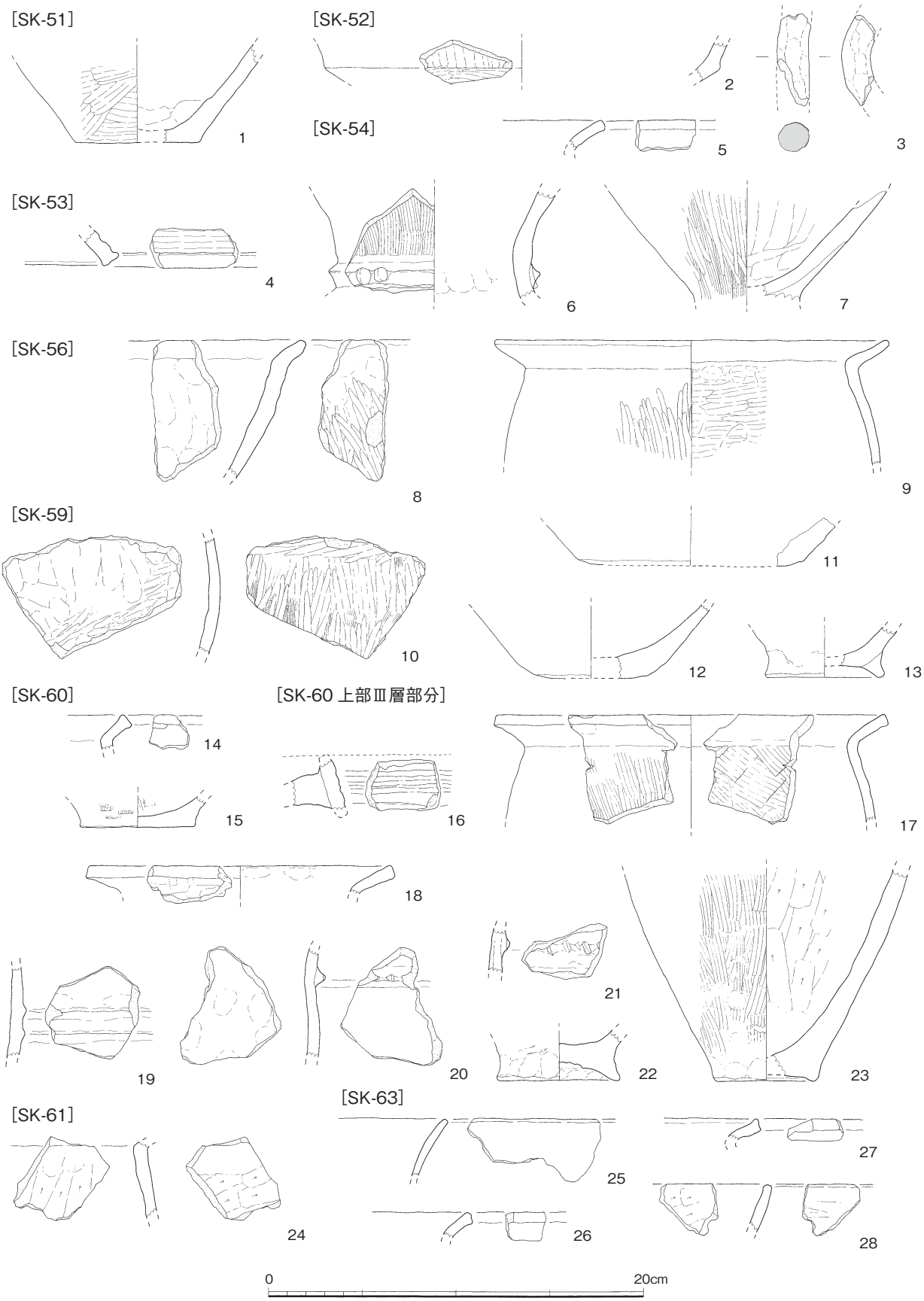


図 157　SK-51 ～ 54・56・59・60・61・63 出土土器実測図（縮尺 1/3）

54号土壙（SK-54，図155・157，図版37・112）

DX・DY-21区に位置する。SD-36の中央部～南西部分を切る。南端部の一部を攪乱で破壊されている。本来は方形の掘り形をもつ土壙であるが，降雨のために壁が崩落して隅丸方形となってしまった。推定長径1.6 m，短径1.36 m，深さ46 cmを測る。掘り形の断面は逆台形で，底面には小さな凹凸が残る（図155，図版37-3）。

掘り形内には上半～中位に，拳大の浅黄色砂質シルト塊，暗灰色砂が多く混じる暗褐色砂質シルトが周囲から流れ込んでいる。中位には土器片や大小の花崗岩の塊が投棄されていた。土壙底には，拳大の浅黄色土塊が非常に多くみられ，これに暗褐色砂質シルト土が混じる。SK-53が掘り込まれた基盤のⅣ層は浅黄色及び暗灰色の砂質土で，最下部の埋土は壁面沿いのⅣ層が崩れ落ちたものと考えられる。

図157-5～7は掘り形埋土の中位から出土した弥生土器である。5は緩やかに外反する甕の口縁端部の破片である。6（図版112-7）は壺の頸部の破片で，頸部の付け根に断面三角形の突帯を貼り付け指頭を押捺して2個一組の刻目を施す。7は壺の胴下半部の破片で，粘土接合面で破損している。外面には刷毛目調整の後にミガキ調整，内面には指頭による丁寧なナデ調整を施す。図版112-8・9は掘り形上半の埋土中から出土した弥生土器の胴部破片である。8は外面にミガキ調整，内面に擦過状のナデ調整を施す甕，9は外面にミガキ調整，内面にナデ調整を施す壺である。

出土遺物はいずれも弥生時代後期前葉の特徴をもち，SK-54が切るSD-36中央～南西部分は後期前葉に延長される溝の一部である。出土土器とあわせ，SK-54は弥生時代後期前葉に比定できる。

56号土壙（SK-56，図157・158，図版37・38・112・113）

DW-22区に位置する。東半部を塹壕で破壊されている。長径1.15 m，短径86cmほどの長円形の掘り形をもつと考えられる（図158，図版37-2）。底面には凹凸が多くみられるが，全体としては逆台形の断面形を呈する。掘り形の上部は暗褐色砂質シルト，下部は浅黄色砂質土が多く混じる暗褐色砂質シルトで埋積されている（図版38-1）。

掘り形の上半からは炭化物片，下半からは弥生土器の甕や鉢の口縁部破片，胴部小片が出土している（図157-8・9）。8（図版112-10）は口縁部を短く折り曲げる鉢である。器壁の厚いつくりである。9（図版113-1）は「く」字形口縁部をもつ甕である。口縁部上面が若干内彎し，受け口状の口縁部に仕上げられている。胴部外面には縦方向，内面には横方向のミガキ調整を施す。外面には煤が付着する。

出土遺物は2点にすぎないが，ともに弥生時代後期初頭に比定できる。SK-56は当該期の土壙と考えられる。

59号土壙（SK-59，図157・158，図版38）

DX-23区に位置し，SP-248に切られる。長さ1.24 m，幅44cmの細長い隅丸長方形の掘り形をもつ（図158，図版38-2）。底面には凹凸があり，掘り形の輪郭を確認できたⅣ層上面からの深さは17～22 cmを測る。掘り形上部の①層は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が多く混じり，下部の②層は灰白色砂質土で暗褐色砂質シルトや浅黄色砂質土が多く混じる。周囲から流れ込んだ土層である。

①層からは炭化物片，①・②層の層界部から，弥生土器の壺の底部破片，比較的大型の壺の胴部破片，胴部小片10数点が出土している（図157-10・11）。10は壺の胴部破片で，外面上半には横方向のミガキ調整，下半には刷毛目調整の後に横方向のミガキ調整を施す。内面には横方向の

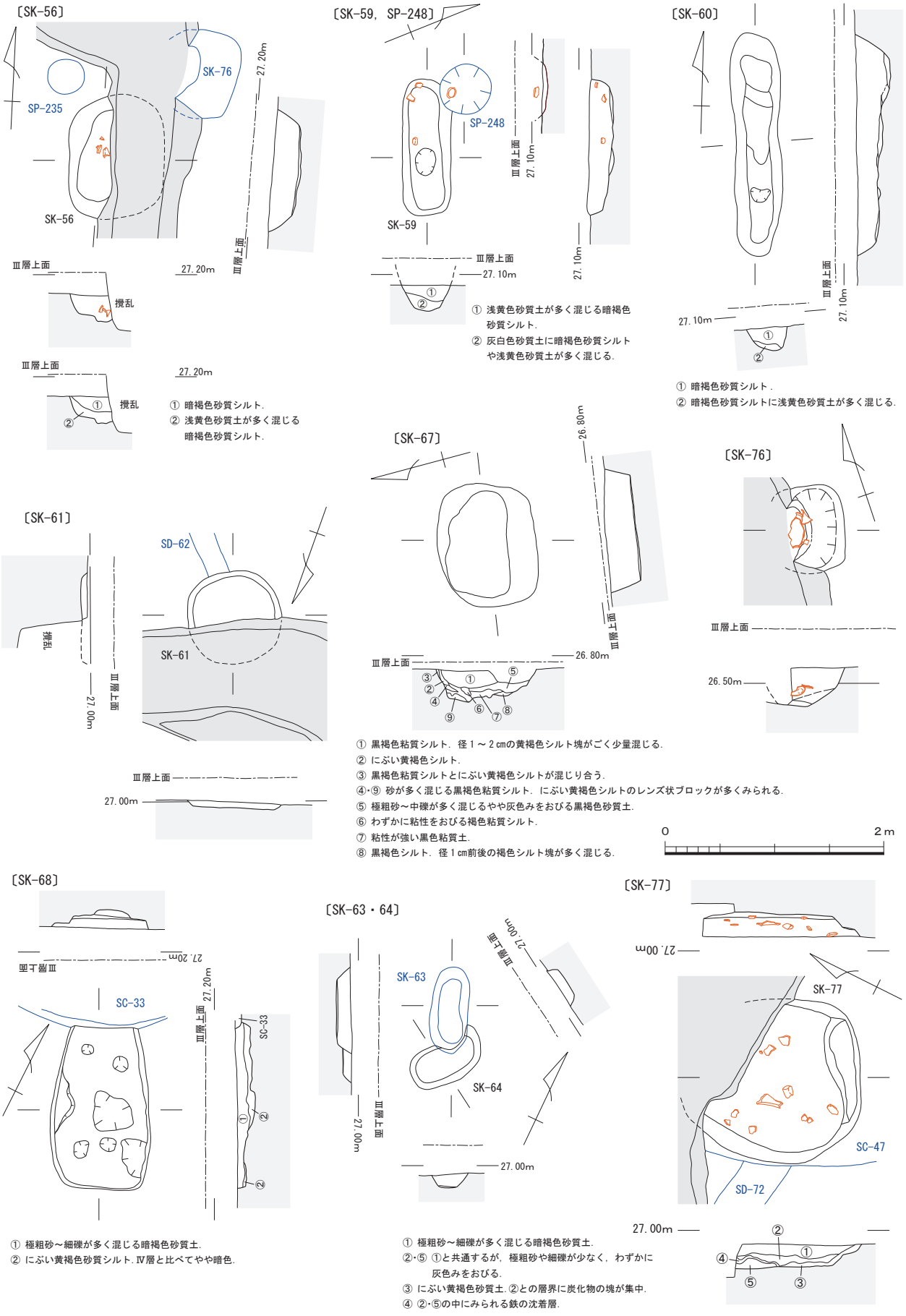


図 158　SK-56・59・60・61・63・64・67・68・76・77, SP-248 遺構実測図（縮尺 1/50）

ミガキ調整，ナデ調整を施す。11 は壺の底部破片で，外底面がわずかに膨らむ不安定な凸レンズ状となっている。

上部Ⅲ層から出土した遺物は，図示した底部破片 2 点以外は，弥生土器の胴部小片だけである（図 157-12・13）。12 は壺の凸レンズ底の破片である。13 は裾部が「ハ」字形にひろがる上げ底の底部破片で，外面には粘土の接合痕が残る。甕もしくは鉢と考えられる。

SK-59 は，出土遺物に凸レンズ状底をもつ壺や甕（図 157-11・12）が含まれているので，弥生時代後期後葉に埋没する土壙と考える。

60号土壙（SK-60，図157・158，図版38・110・113）

DX・DY-22・23 区に位置する。長さ 2.03 m，幅 38 ～ 45㎝の溝状の土壙である（図 158，図版 38-3）。底面にはかなり凹凸があり，北端部は小穴状に窪む。掘り形の輪郭を確認できたⅣ層上面からの深さは 16 ～ 31㎝を測る。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトを主体とし，底面には西側から浅黄色砂質土が多く混じる暗褐色砂質シルト②層が流れ込んでいる。

掘り形埋土①層からは多くの炭化物片，②層からは弥生土器の胴部小片 1 点が出土した。この他，甕の口縁端部の破片，壺の底部破片 1 点，胴部小片 10 点が出土している（図 157-14・15）。14 は口縁部が短く「く」字形に屈曲する甕である。端面は横ナデ調整で面取りされ若干窪む。15 は壺の平底の破片である。

図 157-16 ～ 23 は，掘り形上部のⅢ層部分から出土した弥生土器である。16（図版 113-2）は壺の口縁部破片で，粘土帯を貼り付け拡張した口縁端部に，沈線様の凹線文を 4 条，1 本ずつめぐらせる。17 ～ 23 は甕である。17・18 は「く」字形に口縁部を緩やかに屈曲させる。19（図版 113-3）は山ノ口式系土器の甕の胴部破片である。断面三角形状の低い突帯が 2 条貼り付けられる。20 は胴部上半に断面三角形の刻目突帯を 1 条めぐらす。21（図版 110-1）は低い断面三角形状の突帯を貼り付け，刻目を施す。19 ～ 21 の器体の傾きは不確実である。22 は，裾部を小さく「ハ」字形にひろげた上げ底。23（図版 113-4）は厚手の上げ底で，胴部外面には縦方向の刷毛目，内面にはケズリ調整が施される。

掘り形埋土の破片は弥生時代後期初頭～前葉に比定できる。上部Ⅲ層の遺物も中期後葉～前葉の時間幅に収まる。したがって，SK-60 は弥生時代後期前葉に埋没している可能性が高い。

61号土壙（SK-61，図157・158，図版113）

DY-23 区のⅣ層上面で掘り形の輪郭を確認できた。SD-62 を切り，掘り形の北半部は塹壕で破壊されている（図 158）。径 85㎝，深さ 5㎝ほどの浅い皿状の掘り形を持つ小型土壙である。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大～拳大の浅黄色土塊が多く混じる。浅黄色土塊はⅣ層起源のもので，SK-61 は人為的に埋め戻されているものと判断できる。

掘り形埋土中からは，小豆～小指先大の炭化物の小片が点々と出土しているが，他に出土遺物はない。上部Ⅲ層部分から少量の土器片が出土している（図 157-24，図版 113-6・7）。図 157-24（図版 113-5）は，縄文土器の深鉢と考えられる肩部破片である。口縁屈曲部には横ナデ調整，肩部内外面にはケズリ調整を施す。この他の土器はいずれも弥生土器で，内面に刷毛目調整を施した後にナデ調整を施す壺の胴部破片（図版 113-6），内外面に刷毛目調整を施す甕の胴下半部の破片（図版 113-7）がある。

出土遺物は限られ，混入品と考えられる縄文土器の深鉢（図 157-24）がある。これを除き，弥生土器の甕や壺の胴部破片で観察できる調整方法は弥生時代中期後葉～後期中葉に一般的にみられるものである。SK-61 に切られる SD-62 は弥生時代

後期前葉に埋没する溝であり，SK-61 は先行する弥生時代後期中葉に位置付けられる。

63号土壙（SK-63，図157・158，図版113）

DX-21 区に位置し，SK-64 を切る。長さ 79cm，幅 35cmの細長い長円形の掘り形をもつ小型土壙である（図 158）。底面は平坦で，掘り形の輪郭を確認できたⅣ層上面からの深さ 13 ～ 14cmを測る。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大の浅黄色細砂質土塊が多く混じる。人為的に埋め戻されていると判断できる。

掘り形埋土からは，縄文土器の深鉢（図 157-25）と，弥生土器の甕の口縁部破片（図 157-26）が出土している。25 は，緩やかにひらく口縁部をもつ。内外面ともに器表面が荒れ調整は不明であるが，胎土から縄文土器と考えた。26 は緩やかに「く」字形に口縁部が外反する。

上部Ⅲ層部分からは弥生土器が出土している（図 157-27・28，図版 113-8）。ともにⅢ層でも最下面の SK-63 の掘り形を検出できた直上から出土し，掘り形埋土に包含されていた可能性が高い。図 157-27 は，「く」字形に強く屈曲する甕の口縁端部の破片で，横ナデ調整で口縁上端を摘み上げるように仕上げる。28 は埦形の鉢の口縁端部破片である。外面の器面調整はミガキ調整か？

内面にはケズリに近い強いナデ調整を施す。図版 113-8 は，外面に刷毛目調整を施す甕の胴部破片で，内面にはナデ調整を施す。

以上の出土遺物は，SK-63 が埋め戻された際に混入したもので，縄文土器（図 157-25）を除き，弥生時代後期初頭に比定できる。SK-63 は当該期の土壙と考えておきたい。

64号土壙（SK-64，図158，図版114）

DX-21 区のⅣ層上面で掘り形の輪郭を確認できた。SK-63 に切られる。長さ 70cm，幅 37cm，深さ 7 ～ 16cmの細長い不整長円形の掘り形をもつ（図 158）。底面は凹凸が著しく，全体として北から南に向かって傾斜する。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色細砂質土塊が多く混じる。人為的に埋め戻されていると考える。

掘り形埋土からは，弥生土器の小片が数点出土しているだけである（図版 114-1・2）。1 は甕の胴部破片で，外面に刷毛目調整，内面に擦過状のナデ調整を施す。2 は内面に擦過状のナデ調整痕跡が残る壺の胴部破片である。

出土遺物は SK-64 が埋め戻された際に混入したものであるが，ともに弥生時代中期後葉～後期前葉に一般的にみられる器面調整の特徴をもつ。後期初頭に埋め戻される SK-63 に切られていることから，SK-64 の埋没時期は弥生時代中期後葉の土壙と考えておきたい。

65号土壙（SK-65，図149）

DV-23 区に位置し，SK-30 に切られる。短径 86cm，長径 90cmの隅丸方形の掘り形をもつ（図 149）。検出面であるⅣ層上面からの深さは 14 ～ 16cmで，底面はほぼ平坦である。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，径 1 ～ 3cmの浅黄色細砂質土塊が多く混じる。浅黄色細砂質土塊が多く混じることから，人為的に埋め戻されていると判断できる。遺物は出土していない。

SK-65 は，弥生時代中期後葉～前葉に比定される SK-30 に切られている。本調査区及び周辺の調査区では中期中葉の遺構が出土してないことから，SK-65 は弥生時代中期後葉～後期初頭の土壙である可能性が高い。

66号土壙（SK-66，図149，図版114）

DU-24区に位置し，SK-19とSP-203に切られ，大半を破壊されている。長さ1.3ｍ前後，幅85cmの胴が張った隅丸長方形の掘り形を推定できる（図149）。検出面のⅣ層上面からの深さは14cm前後で，底面はほぼ平坦である。

掘り形埋土は黒褐色砂質土で，径5～6cmのにぶい黄褐色シルトと褐色シルトが混じる土塊がごく少量みられる。

掘り形埋土からは，外面にミガキ調整を施した壺の胴部破片（図版114-3）と，径6cmほどの亜円礫が底面から10cmほど浮いた状態で出土した。

掘り形埋土から出土した壺（図版114-3）の器面調整は，弥生時代中期後葉～後期初頭に一般的にみられるものである。SK-66を切るSK-19が後期初頭に比定できるので，弥生時代中期後葉の土壙と考えておきたい。

67号土壙（SK-67，図158・159，図版114）

DU-20区のⅣ層上面で掘り形の輪郭を確認できた。長径2.25ｍ，短径1.8ｍの不整円形の掘り形で，深さは48～57cmを測り，底面にはかなり凹凸があるが，全体としては逆台形の断面形を呈する（図158）。掘り形上半～中位は黒褐色粘質シルト（①層）で埋まり，1～2cmの黄褐色シルト塊がごく少量混じる。下部には，にぶい黄褐色シルトの②層，黒褐色粘質シルトとにぶい黄褐色シルトが混ざる③層，1～2cmの黄褐色シルトのレンズ状ブロックがみられる黒褐色粘質シルトの④・⑨層，極粗砂～中礫が混じる灰色みが強い黒褐色砂質土の⑤層，褐色粘質シルトの⑥層，粘性が強い黒色粘質土の⑦層などが周囲から流れ込んでいる。

掘り形埋土からは遺物は出土していない。上部Ⅲ層からは，量は少ないが弥生土器が出土している（図159-1～5，図版114-6・7）。図159-1（図版114-4）は壺の口縁部破片で，口縁部を肥厚させて端部を上下に拡張し，沈線様の凹線文4条を1条ずつ施す。2･3は「く」字形口縁の甕である。2は，口縁部上端を横ナデ調整して，端面を上方に若干拡張した後に擬凹線文を2条めぐらす。器表面が荒れ，擬凹線文は部分的にしか残っていない。4は緩やかに外反する口縁部をもつ甕の肩部破片である。口縁屈曲部に小さな断面台形の突帯を貼り付けて刻目を施す。5は平底の小型壺の破片である。図版114-7は外面にミガキ調整，内面に刷毛目調整を施した後にナデ仕上げする甕の胴部破片，6は外面を刷毛目調整，内面を擦過状のナデ調整する甕の胴部破片である。

上部Ⅲ層部分から出土した遺物は弥生時代後期初頭～前葉の時間幅をもつ。SK-67は当該期の土壙と考えておきたい。

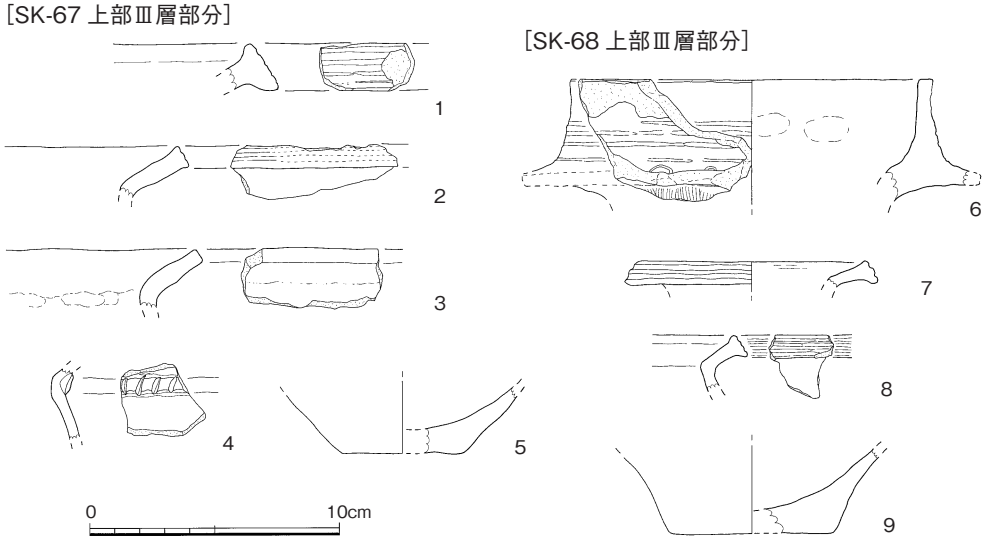


図159　SK-67・68上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺1/3）

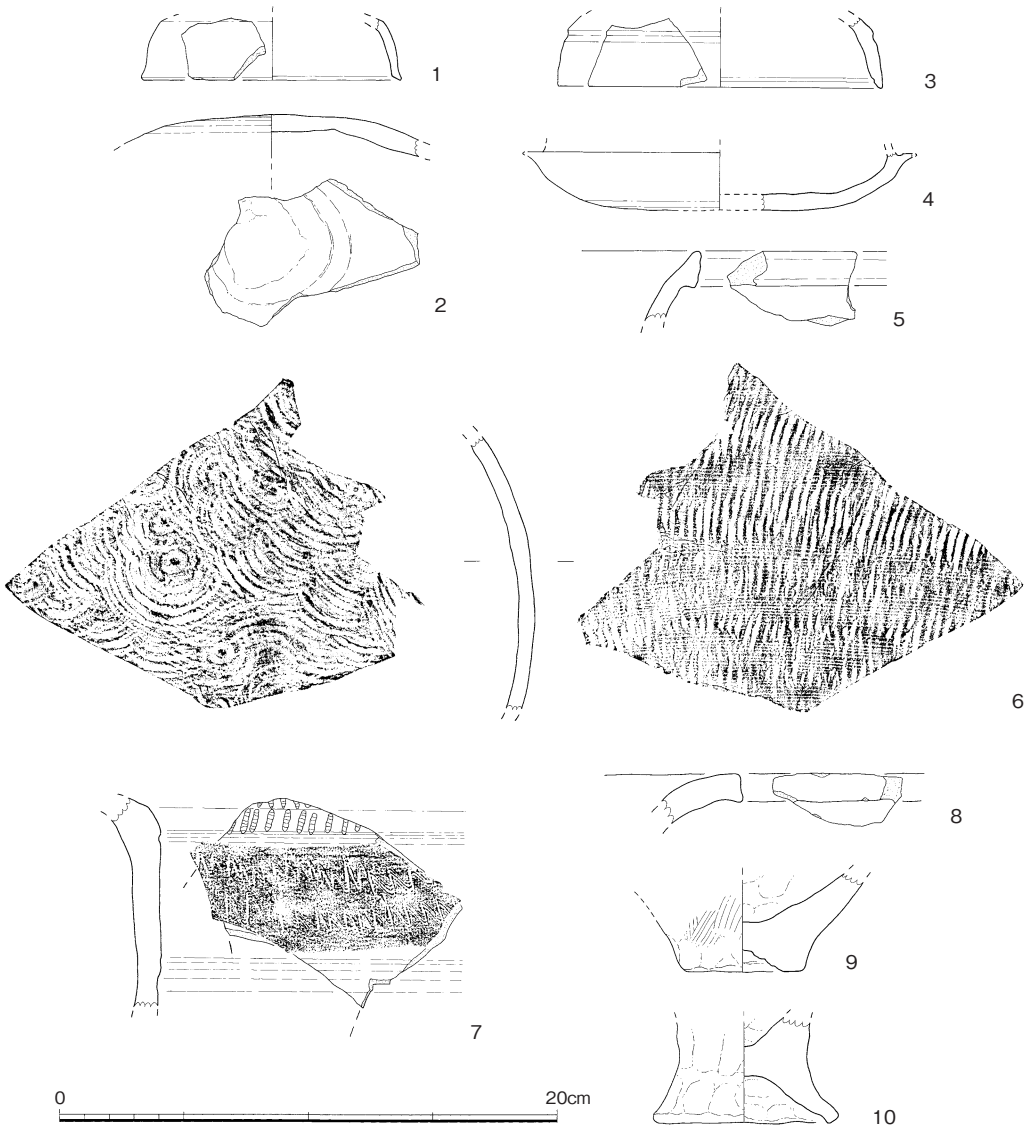


図 160　SK-70 掘り形最上部～上部出土土器実測図（縮尺 1/3）

68号土壙（SK-68，図158・159）

DV-21・22 区に位置し，SC-33 に切られる。推定長 3.1 ｍほど，幅 1.22 ～ 1.82 ｍの不整な隅丸長方形の掘り形をもつ（図 158）。底面には凹凸があり，掘り形の輪郭を検出したⅣ層上面からの深さは 10 ～ 32㎝を測る。底面はにぶい黄褐色砂質シルトで埋まる。掘り形埋土のほとんどは極粗砂～細礫が多く混じる暗褐色砂質土である。

掘り形埋土からは遺物は出土していない。上部Ⅲ層部分からは，比較的多くの弥生土器の破片が出土しているが，大半は胴部小片である。（図 159-6 ～ 9）。6 は複合口縁壺の口縁部で，器表面が荒れてはいるが，4 条の沈線文と竹管文を不鮮明ながら確認できる。7 も壺で，口縁端部を上下にわずかに拡張して凹線文を 2 条めぐらす。8 は「く」字形口縁の甕で，口縁端面を拡張して沈線文を 3 条めぐらせる。9 は壺の平底の底部破片である。

上部Ⅲ層から出土した遺物の中で，壺と甕（図 159-7・8）は弥生時代後期初頭，複合口縁壺（図 159-6）は中葉に比定できる。また，SK-68 を切る SC-33 は弥生時代後期中葉の竪穴建物であり，SK-68 は弥生時代後期初頭に比定しておく。

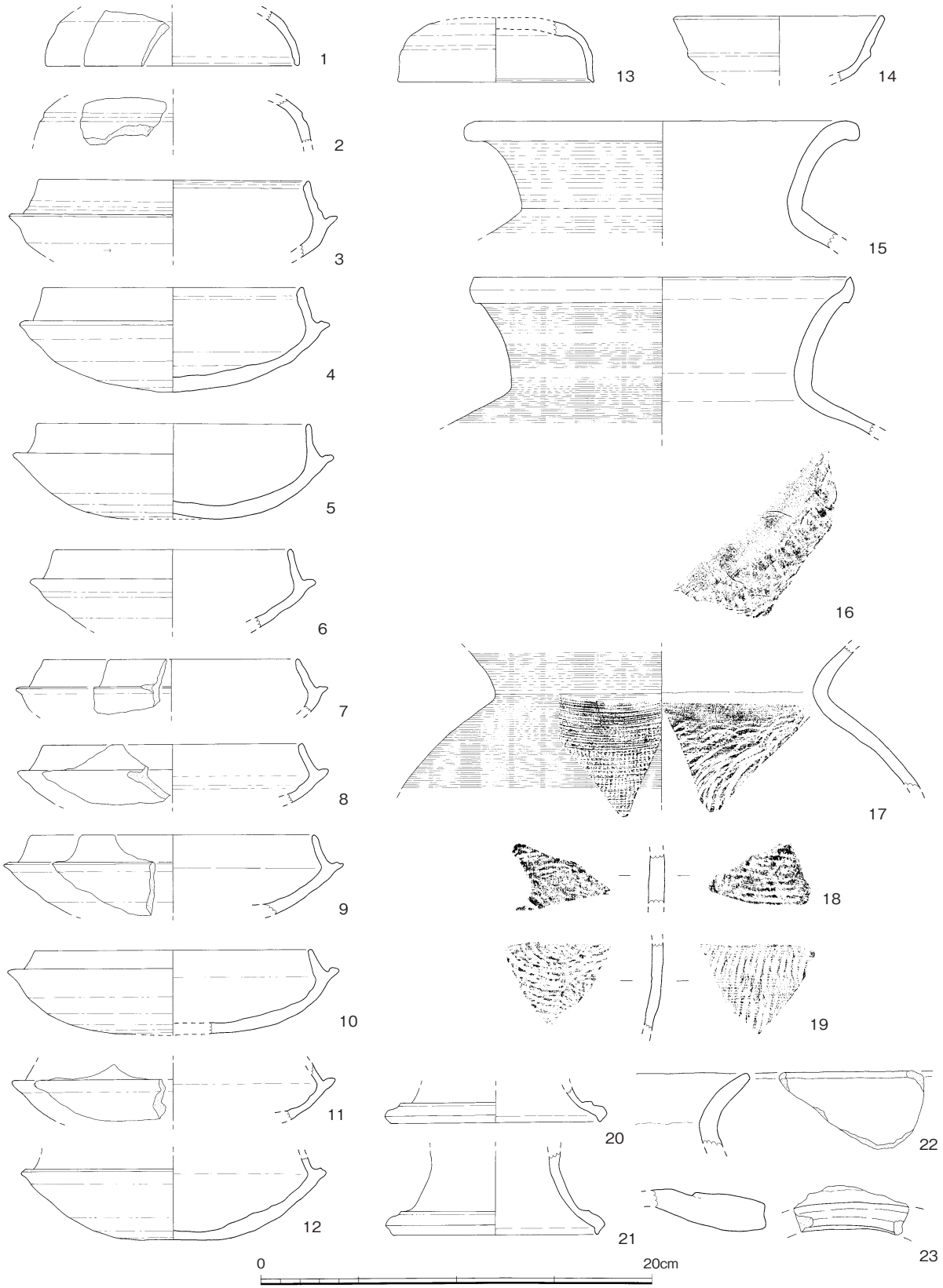


図 161　SK-70 掘り形中部出土土器実測図（縮尺 1/3）

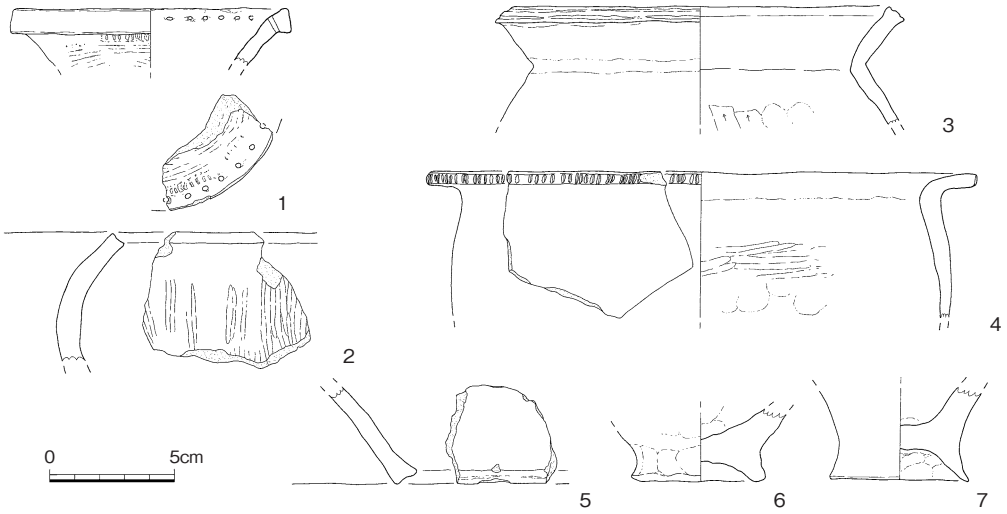


図 162　SK-70 掘り形中部及び下部出土土器実測図（縮尺 1/3）

70号土壙（SK-70，図64・160～164，図版18・114～116・146）

DY・DZ-26・27 区に位置する。SC-69･71 を切り，北東端部は攪乱で破壊されている。長径 2.9 m，短径 2.18 mの不整な長円形で，底面には著しい凹凸がみられ，全体としては擂り鉢状の掘り形をもつ（図 64，図版 18）。深さは 70cmを測る。掘り形下部には，暗褐色砂質土の③層，にぶい黄褐色砂質土の④層，暗オリーブ褐色粘質土の⑥層などがレンズ状に堆積する。周囲から流れ込んだ埋積土と考えられる。これに対して，中部から上部の埋土は，細粒や中礫が多く混じる黒褐色砂質土（①・②層）である。

掘り形埋土からは比較的多くの遺物が出土している。大半は掘り形の上部～中部で出土している。①・②層で埋積される過程で投棄された遺物である。掘り形最上部～上部，中部，土壙底，上部Ⅲ層部分に分けて報告する。

①掘り形最上部～上部出土の遺物

図 160-1 ～ 7 は須恵器である。1 は短頸壺の蓋で，体部は丸みをおび，天井部と口縁部との境は不明瞭で，口縁部内面には段がめぐる。2・3 は坏蓋。2（図版 114-10）は天井部破片である。3 の天井部と口縁部との境には幅が広い凹線文状の段がめぐる。口縁部内面には沈線が 1 条めぐる。4 は坏身で，口縁部の立ち上がり部分を欠損する。5 は壺の口縁部破片である。回転横ナデ調整で，口縁端部を上下に拡張する。6（図版 115-3）は甕の胴部破片で，外面には平行条線のタタキ調整の後，カキメ調整が施される。内面には同心円文の当て具痕が残る。7（図版 115-4）は器台の破片である。上部は内側に緩やかに屈曲する。上段に三角形透かし孔，下段に長方形の透かし孔を交互にあける。上部に凹線文を 1 条施し，下部にはややあまい突帯が 1 条めぐり，その上下に凹線文を各 1 条施して強調する。8 ～ 10 は弥生土器である。8 は壺，9 は厚手の甕の底部，10 は裾部が「ハ」字形にひろがる甕の脚台状の底部である。

②掘り形中部出土の遺物

図 161-1 ～ 21 は須恵器，22･23 は土師器である。1・2 は坏蓋。1 は体部が丸みをおび，口縁部と天井部との境は不明瞭で，口縁部内面に段をもつ。2 も体部が丸みをおび，天井部と口縁部との境には沈線が 1 条めぐる。3 ～ 12 は坏身。3 の口縁端部の内面には浅い段がめぐる。4（図版 114-8）には沈線が 1 条めぐる。5（図版 114-9）～ 9 の口縁端部は丸く収められている。10（図版 115-1）・11 は坏身である。11 は口縁部先端を欠損する。12 は坏身の底部と考える。13 は短頸壺の蓋である。天井部と口縁部との境には不明瞭で埦型を呈する。口縁端部内面に段をもつ。14 は高坏で，坏部中央に細い段状の突帯がめぐる。口縁端部を丸

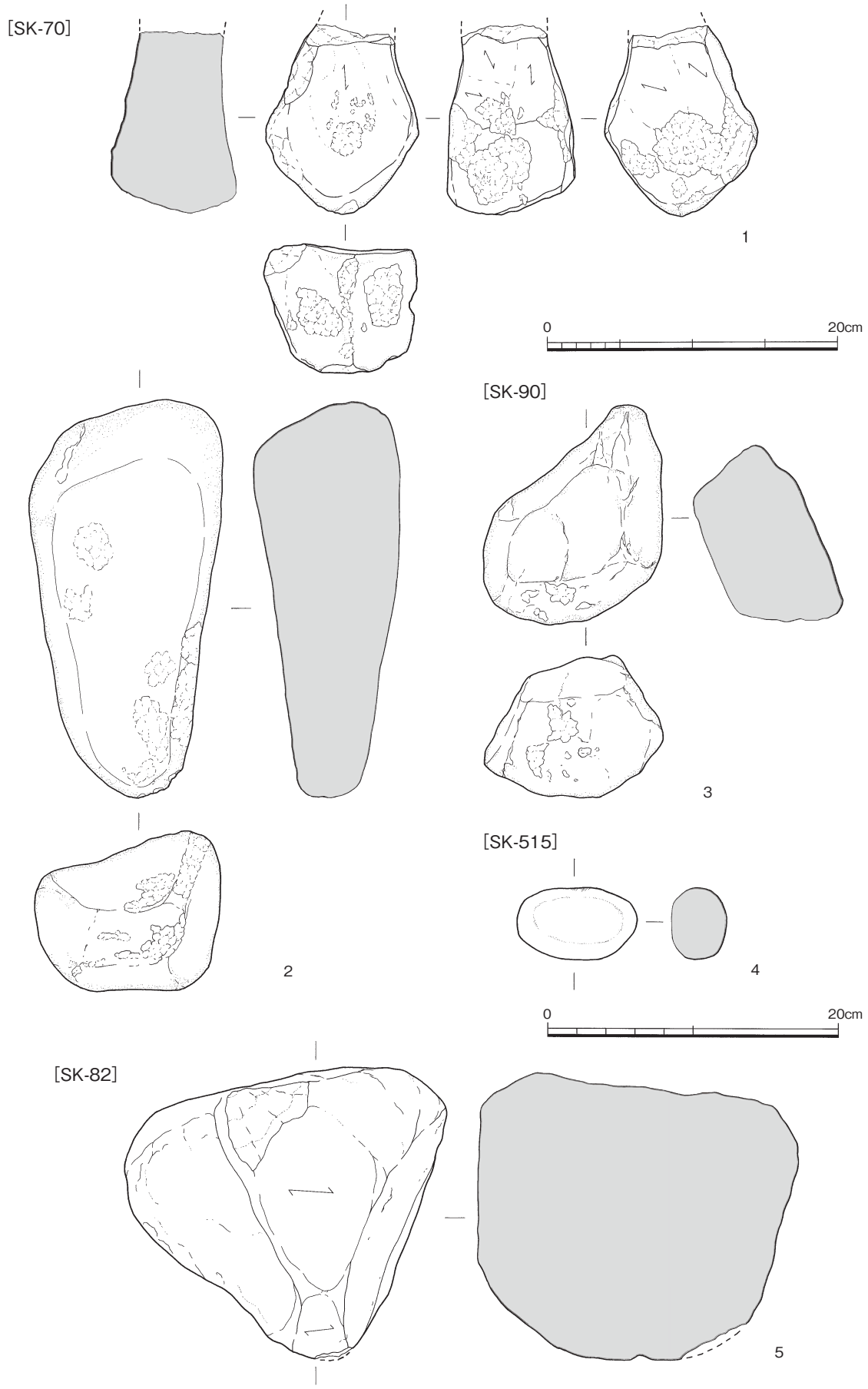


図 163　SK-70・90・82・515 出土石器実測図（縮尺 1/2，1/4）

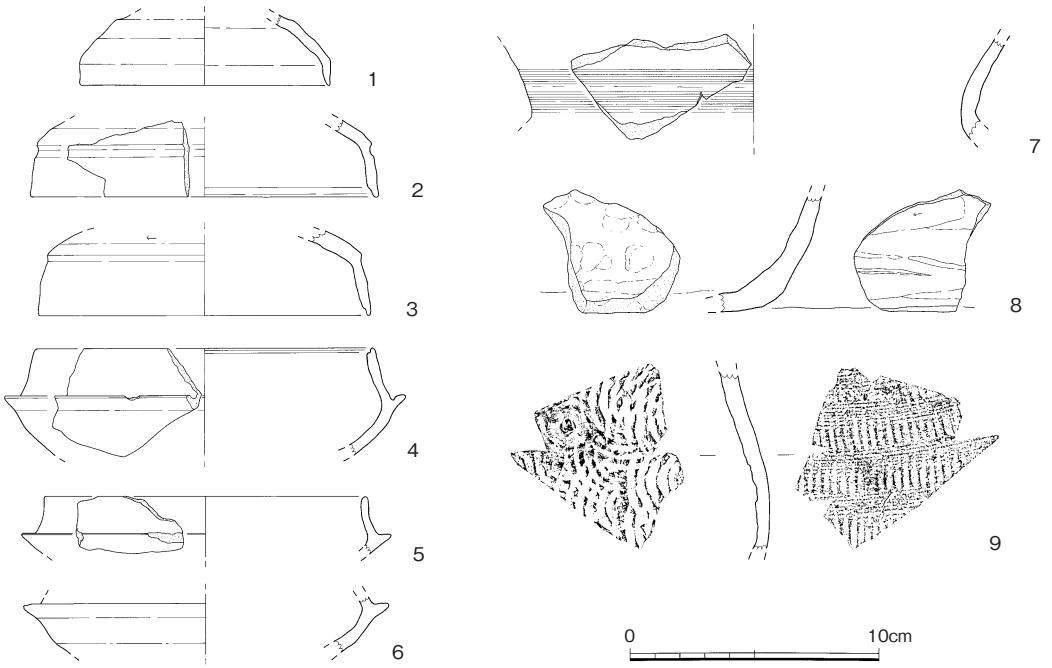


図 164　SK-70 上部Ⅲ層部分出土土器実測図（縮尺 1/3）

く収める。15 ～ 17 は壺。15（図版 116-1）は頸部がわずかに斜め外方へのび，口縁端部は玉縁状につくられる。16（図版 115-2）は肩部から頸部が直立ぎみに立ち上がり，口縁部を上方に拡張する。17（図版 116-3）・18 は胴部破片，19 は壺もしくは甕の胴部破片。20 は高坏の脚端部破片である。21（図版 116-2）は低脚の脚台部の破片で，脚端部近くは肥厚し，端部は摘み出される。

22 は緩やかに外彎しながら外反する口縁部をもつ甕である。口縁端部は丸く収められる。23(図版 115-6）は移動式竈の庇部破片と考えた。全体は弧を描き，口縁部外面に粘土を貼り付けて帯状に肥厚させている。

図 162-1 ～ 7 は須恵器とともに出土した弥生土器である。1・2 は壺。1（図版 115-5）は，ラッパ形にひろがる口縁部である。口縁端部を下方に小さく拡張する。口縁端部直下に円孔が列状に焼成前に穿孔されている。2 は逆「ハ」字形に緩やかに外反する口頸部の破片である。端面は横ナデ調整で窪む。3（図版 116-5）は甕である。「く」字形に屈折する口縁部で，端部を上下に拡張し，凹線文を２条施す。5 は高坏の脚裾部の破片。脚端部を上下に拡張する。6・7 は裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の甕の底部破片である。

この他，砂岩の亜円礫を利用した台石（図 163-1）と敲石（図 163-2）が出土している。1 は砥石にも転用している。残存する各面に擦痕が確認できる。敲打より前の段階で火熱を受けて赤変した部分を確認できる。重量は 1340 g を測る。2（図版 146-3）は，主面，下端部，側辺に敲打痕が残る。重量は 590 g を測る。

③土壙底出土の遺物

図 162-4（図版 116-4）の弥生土器の甕がある。強く外彎させる如意形口縁の破片で，口縁端面に小さな刻目を密に施す。胴部内面にはミガキ様の調整痕が残る。

④上部Ⅲ層部分出土の遺物

上部Ⅲ層部分から出土した遺物は，弥生時代～古墳時代のもので，ここでは SK-70 の掘り形の輪郭を検出できたⅣ層直上のⅢ層最下部から出土した古墳時代の遺物だけを報告する（図 164-1 ～ 9)。1 は須恵器の短頸壺，2・3 は坏の蓋である。1 の天井部は丸みをおび，口縁部近くで屈曲し，口縁端部を丸く収める。2・3 の天井部と口縁部との境には突帯がめぐり，口縁部内面には段をもつ。4 ～ 6 は須恵器の坏身である。4 の口縁端部には段がめぐり，5 の端部は丸く収められている。7 ～ 9 は須恵器の壺である。7 の肩部から頸部が緩やかに反転してひろがる。8 は底部破片，9 は壺もしくは甕の胴部破片である。

以上，SK-70 から出土した遺物の中で，弥生土器は周囲の遺構から混じり込んだものと考えられる。一方，須恵器と土師器は，古墳時代後期の 6 世紀中頃に比定できる。出土状況から，窪みとして残っていた SK-70 が埋積される時期を示している。

76号土壙（SK-76，図158・165，図版39・116・117）

DW-22 区に位置する。塹壕などで上面が削られ，掘り形の西半部も破壊されている。長径 80㎝，推定短径 68㎝を測る長円形の土壙と考えられる（図 158，図版 39-2）。底面西半部が最も深く，深さ 34㎝の擂り鉢状の掘り形である。掘り形埋土は上下層に分かれる。上層は極暗褐色砂質シルトに浅黄色やにぶい黄褐色砂質土の小塊が点々と混じる。下層は暗褐色砂質土で，浅黄色砂質土が非常に多く混じる（図版 39-1）。

掘り形下部から，完形や大形破片に接合復元できる甕が 4 個体分，折り重なるように出土した（図 165-1 ～ 4）。いずれも「く」字形口縁部をもつ。1（図版 117-1）は，長胴に「く」字形に屈折する口縁部がつく。底部は裾部が「ハ」字形にひらく脚台状である。口縁部周辺には横ナデ調整，胴部外面には縦方向のミガキ調整を施し，肩部には部分的に縦方向の刷毛目調整の痕跡が残る。胴部内面は，上半部に横方向のミガキ調整，下半部にナデ調整を施す。2 の口縁端面は，ミガキ調整によって面取りされている。3（図版 117-2）は，受け口状に口縁部内面がわずかに窪む。胴部外面には縦方向のミガキ調整が施され，内面には上半部に横方向のミガキ調整，中位にナデ調整を施す。4（図版 116-6）は，口縁端部を上方に折り曲げて，受け口状口縁とする。胴部外面には縦方向のミガキ調整，内面上半には横方向のミガキ調整，中位にはナデ調整を施す。外面には煤が付着する。

以上の甕は，いずれも弥生時代中期後葉の特徴をもつ。掘り形下部から折り重なったような状態で出土しており，SK-76 の埋没過程で一括して投棄された遺物と考えられる。以上から，SK-76 は弥生時代中期後葉の土壙と判断できる。

77号土壙（SK-77，図158・165，図版117・118）

DX-23 区に位置する。SC-47 の床面で掘り形の平面形を検出したが，攪乱溝の壁面で再度観察したところ，SK-77 が SC-47 を切ることを確認できた。長径 1.7 m，短径 1.5 m の不整円形の掘り形をもつ（図 158）。底面は緩やかな起伏がみられ，深さ 19 ～ 22㎝を測る。南東壁沿いは 14㎝ほど高いテラス状となる。

底面近くにはにぶい黄褐色砂質土や暗褐色砂質土が流れ込み，掘り形中位～上半部は淘汰の悪い極粗砂～細礫が多く混じる暗褐色砂質土で均一に埋まる。中位～上半部は一気に埋め戻された土層と考える。

掘り形埋土からは弥生土器と須恵器が出土した（図 165-5 ～ 10）。6 は床面から若干浮いた状態で出土し，他は掘り形中位から出土している。また，8 は掘り形中位から破片が散乱した状態で出土した。

図 165-5 は壺の胴部上半の破片で，頸部の付け根に断面三角形の突帯を貼り付け，篦状工具で刻目を施す。6 ～ 8 は甕である。6（図版 118-2）は肩部破片で，口縁屈曲部周辺には横ナデ調整，肩部内外面にはミガキ調整を施す。7・8 は山ノ口式系土器である。7（図版 118-1）は断面 M 字形突帯を貼り付ける。壺の胴部の可能性を考えるが，器体の傾きは不明である。8（図版 117-3）は細長い断面台形の粘土帯を貼り付けて口縁部を成形する。胴上半部には断面三角形の突帯を 3 条貼り付ける。胎土には金雲母が多く混じる。外面には煤が付着する。9・10 は須恵器の坏蓋である。ともに土層観察用畦の埋土部分から出土した。9 の口縁部と体部の境界に小さく鋭い段がめぐる。口縁端部内面には沈線状の段がめぐる。10 の口縁部

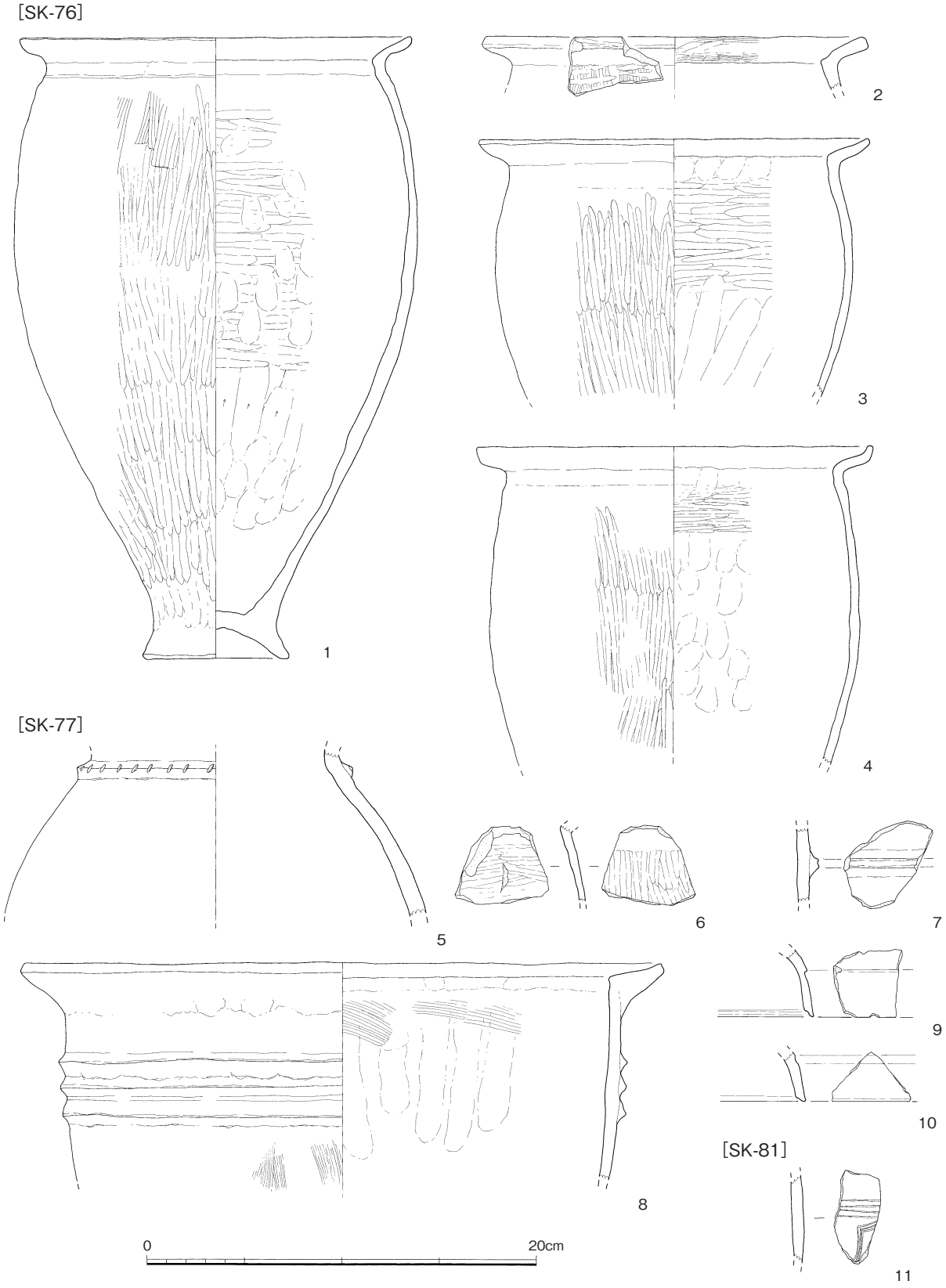


図 165　SK-76・77・81 出土土器実測図（縮尺 1/3）

と体部の境界には，幅広の凹線状の沈線がめぐる。

以上の遺物の中で，弥生土器の一部は比較的大形の破片に接合できた。しかし，いずれも床面近くや掘り形中位から出土し，図 165-8 は破片が散乱する状態で出土している。SK-77 が切る SC-47 では同時期の弥生時代中期後葉～後期初頭の土器が出土している。弥生土器は SK-77 が埋没する過程で SC-47 の遺物の一部が混じり込んだものと考える。したがって，須恵器（図 165-9・10）が SK-77 の最終的な埋没時期を示すことになる。SK-77 は古墳時代後期の土壙である。

80号土壙（SK-80，図166）

DW-24 区のⅣ層上面で掘り形の輪郭を確認できた。南半部を塹壕で破壊されているが，径 1.2 ～ 1.22 mの隅丸方形の掘り形と考えられる。底面は中央が緩やかに窪み，深さは 9 ～ 13cmほどである（図 166）。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。とくに下部には浅黄色砂質土塊が集中する。人為的に埋め戻されていると判断する。遺物は出土していないが，埋土が暗褐色砂質シルトであることから，弥生時代もしくは古墳時代後期の土壙と考えられる。

81号土壙（SK-81，図165・166，図版118）

DX-24 区に位置する。長径 1.05 m，短径 58cm，深さ 5 ～ 6cmの浅い皿状の掘り形をもつ小型土壙である（図 166）。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，下部を中心として浅黄色砂質土が多く混じる。淘汰は良い方で，周囲から流れ込んだ土層と考えられる。

掘り形埋土からは，外面に細密条線の調整痕跡を残し，内面をナデ調整する甕の胴部破片が 1 点出土しただけである（図版 118-5）。

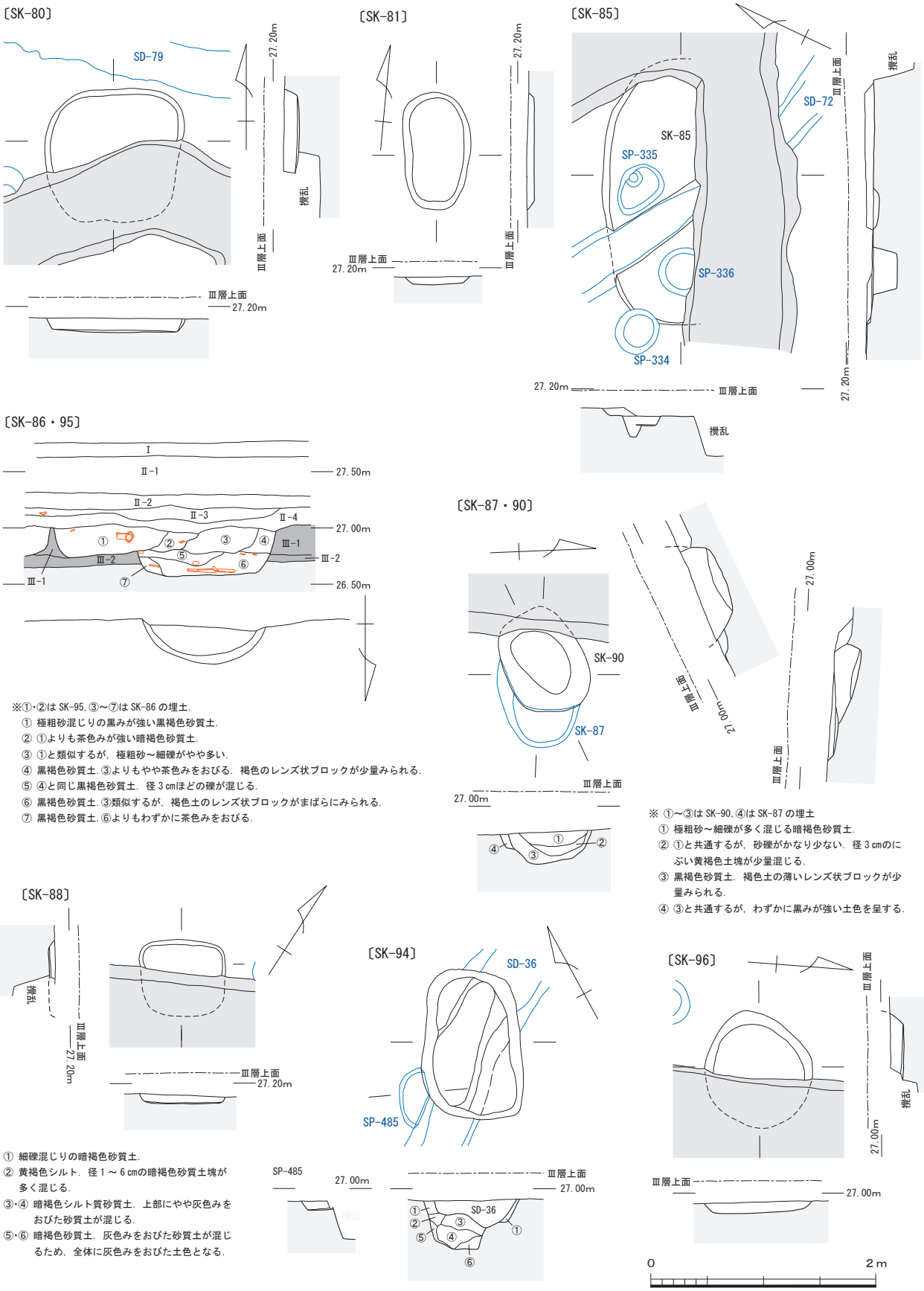
上部Ⅲ層から出土した遺物も少なく，いずれも胴部小片ばかりである（図 165-11，図版 118-4･6）。その中で，図 165-11 は壺の胴部破片と考えられ，上半部に 2 条一単位の浅く細い沈線を 4 条施し，その下方に 3 条一単位の逆Ｌ字状の文様を施文する。記号文の一部と考えられる。この他，外面をミガキ調整，内面をナデ調整する壺の胴部破片（図版 118-4），外面をミガキ調整，内面を擦過調整する甕の胴部破片（図版 118-6）が出土している。

以上，出土量は少ないが，Ⅲ層部分でも下半部から出土した図 165-11，図版 118-4 を含め，弥生時代中期後葉～後期中葉の時間幅に収まる土器だけが出土している。その時間幅で SK-81 の時期を捉えておく。

82号土壙（SK-82，図72・163・167，図版19・118・119）

DX-24 区に位置する。当初 SK-82 と SK-83 を同一の土壙として調査を進めたため，SK-82 北半部の壁を掘りすぎてしまった。SC-84 に切られる SK-83 とは，攪乱溝のため，直接の切り合い関係は把握できなかった。しかし，遺物の出土状況から言えば，SK-82 は SK-83 に切られる可能性が高い。推定南北長 1.5 m前後，1.1 ～ 1.2 mの長円形の土壙と考えられる（図 72，図版 19-2）。後述する遺物がⅣ層上面で確認した掘り形のやや外側にひろがる出土状況から，舟底状の土壙と考えられる。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，径 2 ～ 5 cmの不整形の浅黄色砂質土塊が多く混じり，人為的に埋め戻されているものと判断した。

SK-82 上部のⅢ層上面から山ノ口式系土器の甕の破片が出土し始め，検出した掘り形埋土中からも数点出土した。出土した破片はすべて同



※①・②は SK-95，③～⑦は SK-86 の埋土．
① 極粗砂混じりの黒みが強い黒褐色砂質土．
② ①よりも茶色みが強い暗褐色砂質土．
③ ①と類似するが，極粗砂～細礫がやや多い．
④ 黒褐色砂質土．③よりもやや茶色みをおびる．褐色のレンズ状ブロックが少量みられる．
⑤ ④と同じ黒褐色砂質土．径 3 cmほどの礫が混じる．
⑥ 黒褐色砂質土．③類似するが，褐色土のレンズ状ブロックがまばらにみられる．
⑦ 黒褐色砂質土．⑥よりもわずかに茶色みをおびる．

※ ①～③は SK-90，④は SK-87 の埋土
① 極粗砂～細礫が多く混じる暗褐色砂質土．
② ①と共通するが，砂礫がかなり少ない．径 3 cmのにぶい黄褐色土塊が少量混じる．
③ 黒褐色砂質土．褐色土の薄いレンズ状ブロックが少量みられる．
④ ③と共通するが，わずかに黒みが強い土色を呈する．

① 細礫混じりの暗褐色砂質土．
② 黄褐色シルト．径 1 ～ 6 cmの暗褐色砂質土塊が多く混じる．
③・④ 暗褐色シルト質砂質土．上部にやや灰色みをおびた砂質土が混じる．
⑤・⑥ 暗褐色砂質土．灰色みをおびた砂質土が混じるため，全体に灰色みをおびた土色となる．

図 166　SK-80・81・85 ～ 88・90・94 ～ 96，SP-485 遺構実測図（縮尺 1/50）

一個体に復元できた（図 167-1，図版 118-7・119-1・2）。砲弾型の胴部に，口縁端面を小さく面取りした細長い断面台形の内傾する箍状の口縁部がつく。胴部上半には 3 条の断面三角形突帯をめぐらす。胎土には金雲母が混じる。外面には煤が付着する。他に，遺構検出面で，花崗岩の亜円礫を用いた砥石が出土している（図 163-5）。主面は摩耗し，重量は 1360g を測る。

出土土器は山ノ口式系土器だけで，在地土器による時期比定は難しい。しかし，SK-82 が弥生時代後期初頭の SC-84 や SK-83 に切られていることから，SK-83 は弥生時代中期後葉に比定できる。

83号土壙（SK-83，図72・167，図版19・119・120）

DX・DY-24 区に位置し，SC-84 に切られる。また，SK-82 を切る可能性が高い。当初，竪穴建物の可能性も考えたが，床面が平坦でないため，土壙とした。長さ 2.45 m，幅 90 ～ 100cmの細長い不整隅丸長方形の掘り形を復元できる（図 72，図版 19-2）。検出面であるⅣ層上面からの深さは 14 ～ 15cmである。掘り形埋土は，暗褐色砂質土に，ごく少量の浅黄色やにぶい黄褐色砂質シルトが混じる。

掘り形埋土と上部Ⅲ層部分から弥生土器の破片が出土している（図 167-2 ～ 6）。2・3 は土壙南端近くで底面にほぼ貼り付いた状態で出土した山ノ口式系土器の甕の口縁部破片である。2（図版 120-1）は，やや窄まる胴部上端に大きめの断面台形の粘土を貼り付け，横ナデ調整を施し，

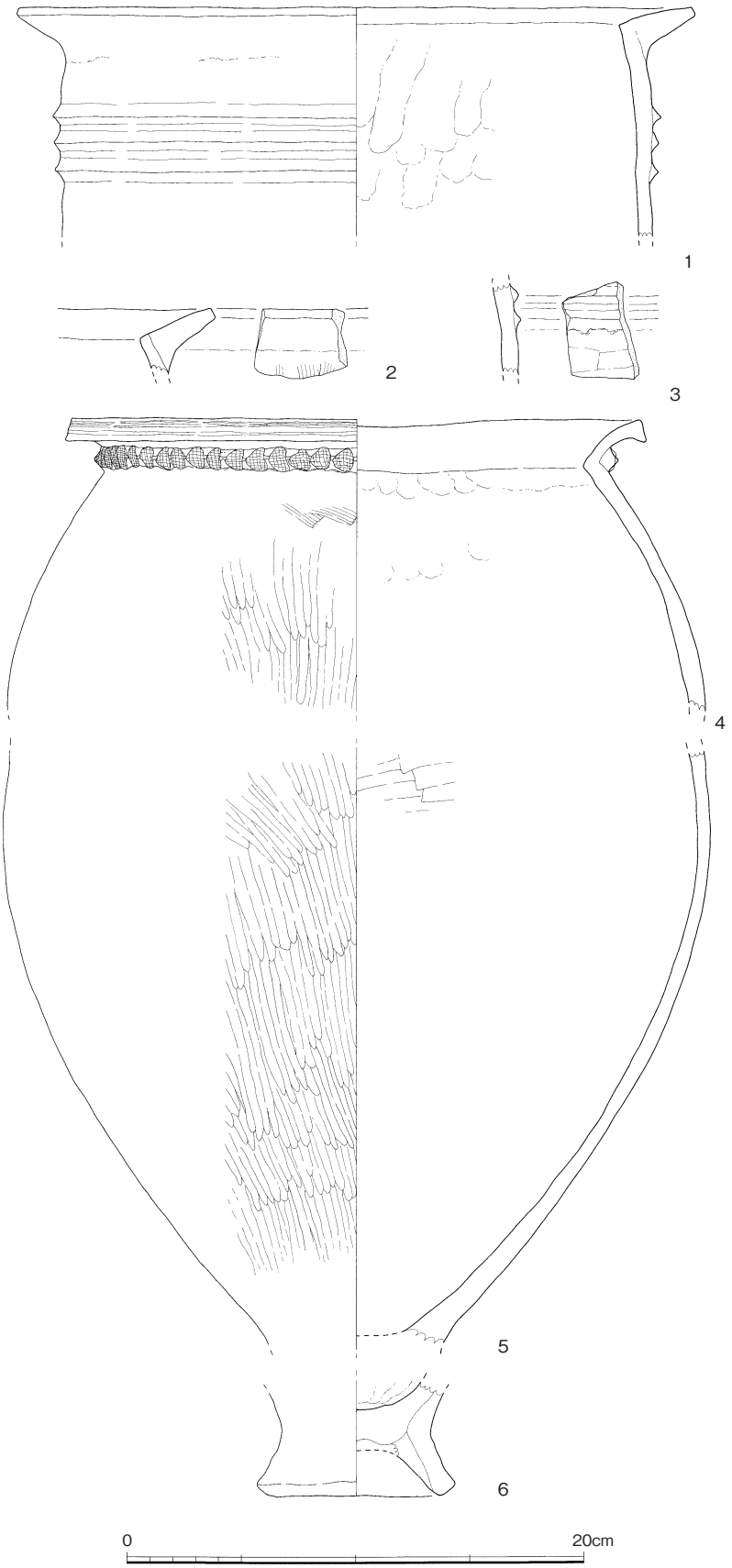


図 167　SK-82・83 出土土器実測図（1：SK-82，2 ～ 5：SK-83 掘り形埋土，6：SK-83 上部Ⅲ層部分，縮尺 1/3）

口縁端部を面取りする。にぶい赤褐色を呈し，在地の土器とは異なる焼き上がりの色調である。胎土には金雲母が含まれる。3（図版 120-2）は胴部破片で，上半に2条の断面三角形突帯を貼り付ける。4（図版 119-3）・5 の破片の多くも SK-83 の床面にほぼ貼り付いた状態で出土しているが，SC-84 北東部の床面近くから掘り形中位にかけて出土した破片と接合する。本来 SK-83 の掘り形内に埋没していた破片の一部が，SC-84 の埋没時に紛れ込んだものと考える。他に，器壁の厚さ，調整痕跡，胎土及び色調が共通することから同一個体と考えられる口縁部周辺と胴部の破片があるが，接合しない。「く」字形に屈折する口縁部をもち，口縁端部を下方に拡張して，端面に細い擬凹線文をめぐらす。口縁屈折部に粘土紐を貼り付け，平織りの布を巻いた工具を左から右に連続して押捺して刻目を施す。胴部中位の外面には煤が付着する。6 は掘り形上部のⅢ層部分から出土した甕の底部破片である。脚台状の甕の底部で，裾部が「ハ」字形にひらく。4・5 と同一個体の可能性が高い。

図 167-6 を除くと，出土土器は SK-83 の底面に貼り付いた状態で出土している。SK-83 を切る SC-84 は弥生時代後期初頭に埋没する竪穴建物であるが，出土した在地の甕（図 167-4・5）も後期初頭の特徴をもつ。弥生時代後期初頭の時間幅の中で両遺構が連続して営まれたと考える。

85号土壙（SK-85，図166・168）

DX・DY-23 区に位置し，SD-72 と SP-334 に切られる。西端部と南半部を塹壕で破壊されている。残存長径が 2.2 m，短径が 1.3 ～ 1.5 mと推定される長円形の掘り形をもつ（図 166）。底面は西に向かって緩やかに傾斜し，掘り形の輪郭を検出できたⅣ層上面からの深さは 4 ～ 9㎝である。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，小指～親指先大のにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じり，人為的に埋め戻されているものと判断した。底面で SP-335・336 を確認できたが，SK-85 に伴うものかは不明である。調査所見は遺構一覧表を参照されたい（表3）。

掘り形埋土からは，時期を確定できる遺物は出土していない。上部のⅢ層部分からも，緩やかに「く」字形に屈曲する甕の口縁部破片が 1 点出土しているだけである（図 168-1）。

SK-85 は弥生時代後期初頭の SD-72 に切られており，上部Ⅲ層部分から出土している甕（図 168-1）は弥生時代後期初頭比定できる。弥生時代後期初頭の土壙と考えておく。

86号土壙（SK-86，図166・168，図版120・121）

DW-20 区の調査区南壁沿いに位置する。大半は調査区外にのびるが，径 1.2 ～ 1.25 mの円形の掘り形をもつものと推定できる（図 166）。調査区壁面を観察した結果，SK-95 に切られること，Ⅱ層直下から掘り込まれていることを確認できた。深さは 42㎝ほどで，底面には緩やかな凹凸が観察できる。掘り形内には細礫や中礫が混じる黒褐色砂質土を主体とする土層が周囲から流れ込んでいる。

掘り形中位からは炭化物片，下部からは弥生土器や須恵器が出土している（図 168-2 ～ 4）。2 は須恵器の壺の胴部破片である。内外面ともに回転横ナデ調整を施し，外面には篦状工具による不明瞭な稜が生じている。3（図版 121-1）は，弥生土器の壺の肩部から頸部の破片であるが，器体の傾きは不確実である。外面には刷毛目調整を施した後に部分的に指頭で横ナデ調整を加える。内面には絞り痕，成形時の指頭によるナデ痕跡が残る。胎土や焼成状態から 4 と同一個体と考える。4（図版 120-3）の外面にはミガキ調整，内面には上半部を左右交互に次第に上方に向かって刷毛目調整を施し，下半部は下方から上方に向かって刷毛目調整を施す。

出土している弥生土器（図 168-3・4）は大形の破片であるが，掘り形下部から須恵器（図 168-2）

も出土している。したがって，SK-86は古墳時代後期に比定できる。

87号土壙
（SK-87，図166）

DW-20区のⅣ層上面で掘り形の輪郭を確認できた。SK-90に切られる。推定長径95㎝前後，短径70cmほどの不整長円形の掘り形をもつと考える（図166）。深さは8～9㎝で，底面中央が緩やかに窪む。掘り形埋土は，SK-90と比べて，黒みが強い黒褐色砂質土である。

SK-87の掘り形埋土からは，弥生土器の胴部破片が数点出土しただけである。小片で，時期を比定できるものはない。弥生時代中期後葉～後期の時間幅で捉えておく。

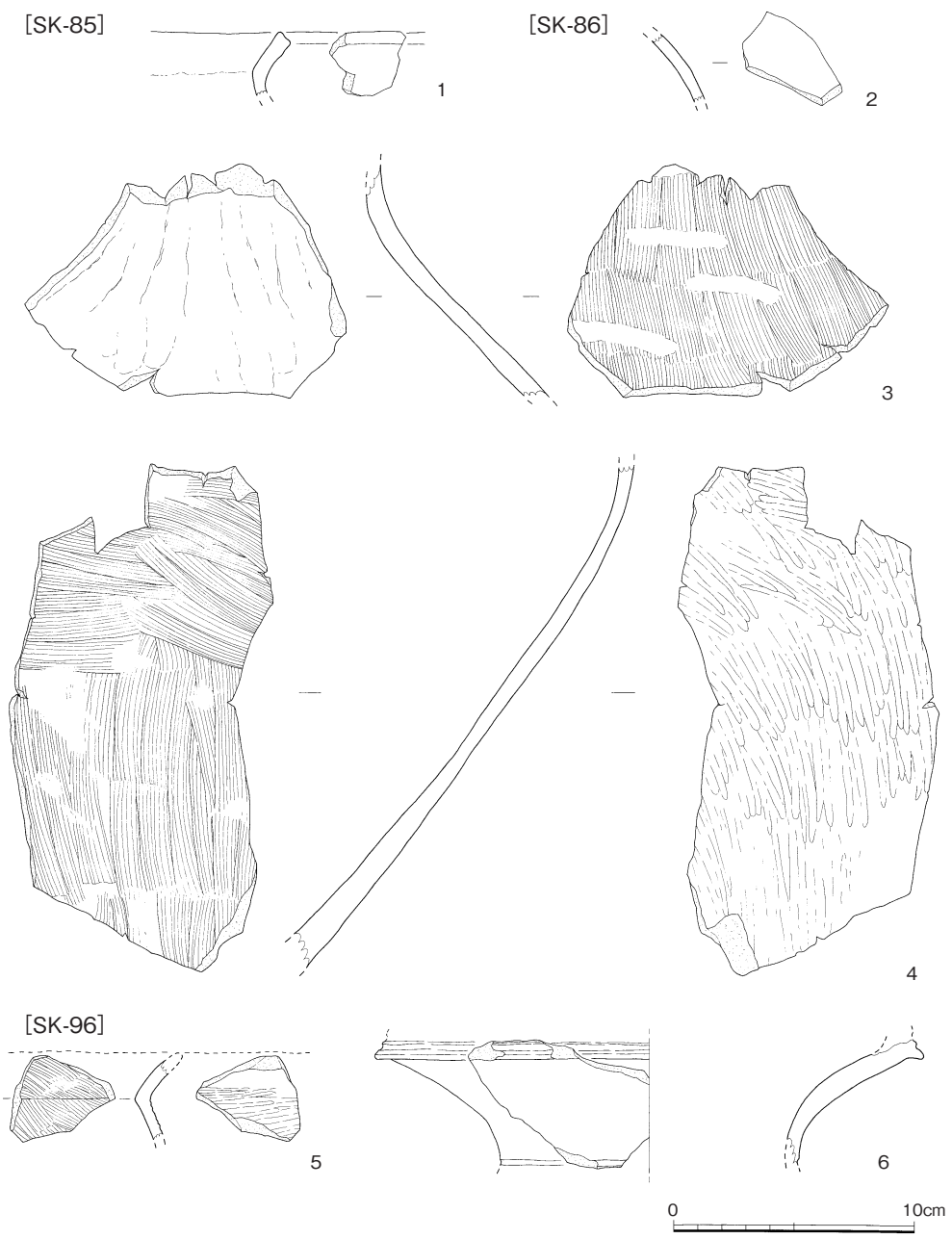


図168　SK-85・86・96出土土器実測図（縮尺1/3）

88号土壙（SK-88，図166）

DW・DX-24区に位置する。南半部を塹壕で破壊されているが，径75cm前後の隅丸方形の掘り形をもつと考えられる。底面は中央が緩やかに窪み，深さは5～8cmを測る。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，径2～3cmの浅黄色砂質土塊が下部を中心として混じり，人為的に埋め戻されている可能性が高い。

遺物は出土しておらず，詳細な時期は不明である。掘り形埋土が極暗褐色砂質シルトであり，16次調査A区で出土している他の遺構の時期から考えて，弥生時代中期後葉～後期もしくは古墳時代後期の可能性が高い。

90号土壙（SK-90，図163・166，図版145）

DW・DX-20区に位置し，SK-87を切る。Ⅳ層上面で掘り形の輪郭を検出した。長径95cm，短径72cmほどの不整な長円形の掘り形を推定できる（図166）。底面には緩やかな凹凸があり，東半部が若干深くなる。Ⅳ層上面からの深さは24～29cmを測る。掘り形埋土は褐色砂質土で，上半部には極粗砂～細礫が混じる。

SK-90の掘り形埋土からは，弥生土器の胴部破片が数点と，花崗岩の亜円礫を利用した敲石（図163-3，図版145-3）が出土しただけである。敲石は小ぶりの扁平な川原石を利用しており，下端部に敲打痕が残る。重量は224.4 gを測る。

出土土器は小片であり，時期を比定できるものはない。しかし，SK-90の時期は，黒褐色～暗褐色の砂質土を埋土とすることから，弥生時代中期後葉～後期もしくは古墳時代後期の時間幅で捉えておきたい。

93号土壙（SK-93，図72，図版19）

DY-23区のSC-84南西側に位置する。SC-84に切られる。当初，埋土がSC-84とほとんど区別できなかったため，SC-84に伴う出入り口部分の可能性を考えたが，SC-84に入った前面に屋内貯蔵穴と考えたSK-526があるので，別個の遺構とした。長さ1.14 m，残存幅48cmの隅丸長方形の掘り形をもつ（図72，図版19）。検出面のⅣ層上面からの深さは7cmほどを測る。掘り形の埋土上部には小豆大の浅黄色砂質土が点々と混じり，下部には浅黄色砂質土がやや大きな塊で多く混じる。人為的に埋め戻されていると判断した。

遺物は出土していないが，弥生時代後期初頭のSC-84に切られているので，弥生時代中期後葉の土壙と考える。

94号土壙（SK-94，図166，図版24）

DY-21区に位置し，SD-36の中央部～南西部分に切られ，SP-485を切る。長さ1.35 m，幅83～89cmの不整な隅丸長方形の掘り形をもつ。掘り形の輪郭を検出したⅣ層上面から深さ20cmほどの断面逆台形に掘り込まれ，さらに底面西半部が20cmほど窪む（図166，図版24-1）。掘り形埋土は暗褐色砂質土を主体とする。

遺物は弥生土器の胴部破片が数点出土しただけである。その中には，外面をミガキ調整，内面をケズリ調整する甕の胴部破片が含まれる。こうした調整痕跡を残す甕は，弥生時代中期後葉～後期に一般的にみられる。また，弥生時代後期前葉のSD-36中央部～南西部分に切られている。以上から，SK-94の埋没時期は，弥生時代中期後葉～後期初頭の時間幅で捉えることができる。

95号土壙（SK-95，図166・169，図版121・122）

DW-20区の調査区南壁の壁面で，SK-80の土層断面を観察中に，東側でⅢ層上面から掘り込まれた土壙状の落ち込みに気がつき，SK-95とした。SK-86を切る。SK-95の掘り込みがⅢ層内に収まっているため，Ⅳ層上面では平面を検出できていない。土層断面では深さ20～26cm，底面には緩やかな凹凸がみられる。掘り形の東側から茶色みをおびた暗褐色砂質土の②層が流れ込み，淘汰の悪い極粗砂が混じる黒みが強い黒褐色砂質土の①層で埋め戻されている。

出土している遺物は弥生土器だけである。①層から高坏（図 169-2），②層から甕の肩部破片（図 169-1）が出土している。1（図版 121-4）は，口縁部が「く」字形に強く屈折し，口縁屈折部周辺は横ナデ調整が施されるが，胴部外面は器表面が荒れ調整は不明である。内面にはケズリ調整の後にミガキ調整を施す。2（図版 122-1）は深めの椀形の坏部をもつ高坏である。外面にはミガキ調整を施す。坏部内面はミガキ調整と考えられるが，器表面が荒れて判然としない。坏底面にはケズリ調整を加える。脚部内面には絞り痕が残る。

掘り形埋土から出土している土器は，ともに弥生時代中期後葉に比定できる。しかし，古墳時代後期の SK-80 を切ることから，SK-95 は古墳時代後期以降に比定できる。

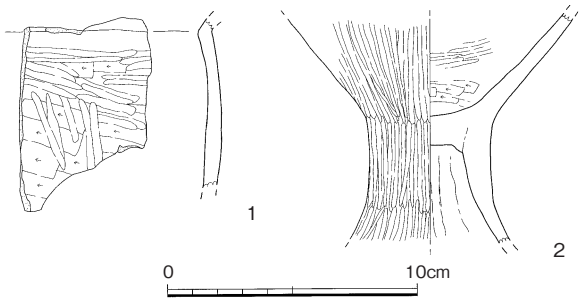


図 169　SK-95 掘り形埋土出土土器実測図
（縮尺 1/3）

96号土壙（SK-96，図166・168，図版122）

DZ-22 区に位置する。東半部を既設管の攪乱部で破壊されている。径 1.45 mほどの不整円形の掘り形をもつ（図 166）。掘り形の輪郭を検出できたⅣ層上面からの深さは 11 ～ 13㎝で，底面中央が緩やかに窪む。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，わずかに浅黄色砂質土が混じる。

掘り形埋土からは，SK-96 の時期を確定できる遺物は出土していない。掘り形南半部に当たる上部Ⅲ層部分から弥生土器が出土している（図 168-5・6）。5（図版 122-3）は「く」字形に屈折する甕の口縁部破片で，胴部には平行条線のタタキ目が残り，内面には刷毛目調整が施されている。6（図版 122-2）は壺の口頸部破片で，ラッパ形に大きくひらく頸部の上端に粘土を継ぎ足して複合口縁としている。口縁部外面には波板状の凹線文をめぐらす。頸部の付け根に沈線が 1 条めぐる。

出土遺物の中で，甕（図 168-5）はタタキ調整をもつことから弥生時代後期後葉～終末期，壺は弥生時代後期中葉～終末期に比定できる。したがって，SK-96 は弥生時代後期後葉～終末期の時間幅の中で捉えておきたい。

324号土壙（SK-324，図4）

DS・DT-20 区の調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認した。SK-409 を切る。断面での掘り形幅 3.2 mを測り，大型で柱穴の可能性もある落ち込みがみられる（図 4）。掘り形上部の埋土は重複する SK-409 と区分が難しい。灰色みをおびた黒褐色砂質土である。掘り形上部から土器の小片が数点出土しているが，SK-324 の時期を特定できるものはない。しかし，掘り形埋土が黒褐色砂質土でも灰色みをおびることから，古代以降の遺構である可能性が高い。

409号土壙（SK-409，図4）

DT-20 区の調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認した。SK-324 に切られる（図 4）。Ⅱ層下半から掘り込まれ，掘り形埋土は黒褐色砂質土である。Ⅱ層下半から掘り込まれているので，古代

～中世以降の遺構と考えられる。

410号土壙（SK-410，図4）

DT-20区の調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認した。Ⅲ層中位から掘り込まれ，断面での掘り形幅は1.75 m，深さは15cmを測る（図4）。掘り形中位～下部で弥生土器の小片が出土しており，埋土が黒褐色砂質土であり，周辺で出土している遺構の時期を考え合わせ，弥生時代中期後葉～後期もしくは古墳時代後期の遺構と捉えておく。

411号土壙（SK-411，図4・122）

DU-20区の調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認した。Ⅱ層下部から掘り込まれ，掘り形埋土は灰色みをおびた黒褐色粘質シルトである（図4）。掘り形上部から弥生土器の小片が数点出土しているが，掘り込み面がⅡ層下部であることと埋土が灰色みをおびることから，古代～中世の遺構である可能性が高い。

413号土壙（SK-413，図4・122）

DV・DW-20区の調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認した。Ⅱ層直下から掘り込まれ，断面での掘り形幅は1.5 mで，掘り形中央が窪み，深さは15～20cmを測る（図4）。周囲からやや灰色みをおびた黒褐色粘質シルトが流れ込み，さらに褐色土の小塊が混じる黒褐色粘質シルトで埋積される。掘り形埋土が灰色みをおびることから，古代～中世の遺構である可能性が高い。

414号土壙（SK-414，図4・122）

DW-20区の調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認した。Ⅱ層直下から掘り込まれ，断面での掘り形幅は1.9～2 m，深さ18～24cmを測る（図4）。底面には小さな凹凸が多くみられる。掘り形埋土は黒みが強い黒褐色粘質シルトで，径1～2cmの褐色土塊がごく少量混じる。黒みが強い黒褐色粘質シルトを埋土とする遺構は，16次調査A区や12次調査区では，いずれも弥生時代中期後葉～後期もしくは古墳時代後期に比定される。SK-414も当該期の時間幅で捉えておく。

427号土壙（SK-427，図4・122）

DW・DX-20区の調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認した。Ⅲ層上面から掘り込まれ，SK-86に切られる。掘り形埋土は極粗砂混じりの黒みが強い黒褐色砂質土である。古墳時代後期のSK-86に切られ，黒みが強い黒褐色の砂質土を埋土としており，弥生時代中期後葉～後期もしくは古墳時代後期の遺構と考えておく。

435号土壙（SK-435，図48・170）

DX-25区でSC-39の掘り形を検出した際に確認できた。SC-39を切る。短軸長32㎝，長軸長69㎝，検出面からの深さ21㎝ほどの不整形の掘り形をもつ（図48）。縦断面形は「レ」字形を呈する。掘り形埋土は，やや粘質をおびる暗褐色砂質土で，径1～4㎝の黄褐色シルトの小塊が少量混じる。炭化物が少量出土している。

掘り形埋土から，弥生時代中期後葉～中葉の壺の平底の底部破片（図170-1）が出土しているが，SK-435の時期を特定する決め手にはならない。中期後葉のSC-39を切るので，弥生時代後期初頭～中葉の土壙と考えておきたい。

439号土壙
（SK-439，図48・170，図版40・63）

DX-26区に位置する。短径43㎝，長径57㎝，深さ18～20㎝を測る長円形の掘り形をもつ（図48，図版40-1）。SC-39の床面で掘り形を検出できたが，本来はSC-39を切ると考えられる。掘り形埋土は黒褐色砂質シルトで，褐色砂質土の小塊が多く混じり，人為的に埋め戻されているものと判断した。

底面に貼り付くように，半截された甕が出土している（図170-3）。3（図版63-1）は若干肩が張る胴部から緩やかに外反する口縁部がつく。外面には縦方向のミガキ調整を施し，上部はとくに丁寧に仕上げられている。内面にはケズリ調整の後に縦方向のミガキ調整を施すが，粘土が撚れたり砂粒が動いた部分も観察できる。外面には煤が付着する。この他，掘り形埋土中から，西南四国系の壺甕の口縁部の小片が出土している（図167-2，図版63-2）。口縁部外面に粘土を貼り付けて肥厚させる。外面には成形時の指頭痕が多く残る。

底面に張りついた状態で出土した甕（図170-3）は，口縁部が緩やかに外反する特徴から，弥生時代後期前葉に比定できる。弥生時代中期後葉に埋没するSC-39を切ることからも，SK-439は弥生時代後期前葉に位置づけられる。

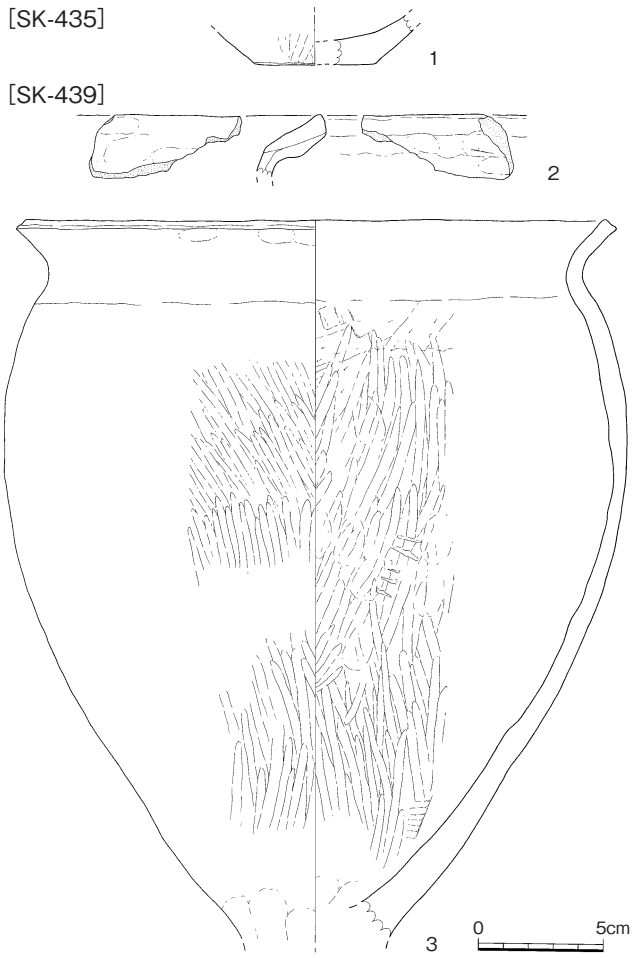


図170　SK-435・439出土土器実測図（縮尺1/3）

443号土壙（SK-443，図4・122）

DX-20区の調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認した。Ⅲ層上面から掘り込まれ，SP-407に切られる（図4・122）。断面での掘り形幅2ｍ，深さ22～23㎝を測る。掘り形埋土は極暗褐色粘質シルトである。最上面から弥生土器が出土しているが，小片のため時期は不明である。しかし，極暗褐色粘質シルトを埋土とすることから，SK-443は弥生時代中期後葉～後期もしくは古墳時代後期の土壙と考えられる。

444号土壙（SK-444，図4・122）

DY-20区の調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認した。Ⅱ層直下から掘り込まれ，SK-447を切る。掘り形底面には緩やかな起伏がみられ，深さ17～20cmを測る（図4・122）。掘り形埋土はやや灰色みをおびた暗褐色砂質シルトである。灰色みをおびた埋土をもつことから，古代～中世の遺構と考えられる。

477号土壙（SK-477，図4・122）

DY-20区の調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認した。SK-444に切られる。Ⅱ層直下のⅢ層上面から掘り込まれ，深さは18cm前後を測る（図4・122）。掘り形埋土は暗褐色粘質シルトである。暗褐色粘質シルトの埋土をもつことから，弥生時代中期後葉～後期もしくは古墳時代後期の土壙と考えておく。

494号土壙（SK-494，図48）

DX-25区に位置する。径66～69cm，Ⅳ層上面からの深さ17cmを測る円形の掘り形をもつ土壙である（図48）。SC-39を切る。掘り形下部は褐色砂質土の⑦層で埋まる。上部には径4cm前後の黄褐色シルト塊が混じる褐色砂質土の⑥層が堆積する。炭化物が少量出土している。上下層ともにほぼ水平な堆積であることや，掘り込まれたⅣ層由来の土塊が多く混じることは，柱穴の埋積状況と共通し，人為的に埋め戻されたものと判断した。

遺物は出土していないが，弥生時代中期後葉のSC-39を切ることから，弥生時代後期もしくは古墳時代後期の土壙と考えられる。

496号土壙（SK-496，図4・57・171，図版122）

DU-25区の調査区壁面で，SC-43の掘り込み面を確認中，上層に落ち込みがあることに気がついた。SC-43の掘り形埋土が斑文状に浅黄色やにぶい黄褐色の土塊が多く含まれる暗褐色シルトであるのに対して，極暗褐色砂質シルトを埋土とする。Ⅱ層直下から掘り込まれており，深さは25cmを測る。底面には細かな凹凸がみられるものの，全体としてはほぼ平坦である。竪穴建物の一部とも考えられるが，掘り形の平面形を把握できなかったため，土壙としてSK-496の遺構番号を与えた（図4）。SK-558に切られ，SC-43，SD-20を切る。

土層観察の過程で弥生土器と須恵器が出土した（図171-1～6）。1～4は壺である。1（図版122-4）は肩部破片で，頸部の付け根に刷毛目工具の木口部を押捺して二段の列点文を施文する。2（図版122-5）の肩部には刷毛目工具の木口部を押捺して短斜線文が施文されている。ただし，小片のために器体の傾きは不明である。3はやや肩が張る扁球形の胴部に平底がつく。4は不安定な平底で，外面にはミガキ調整を施す。5（図版122-6）は緩やかに屈曲する「く」字形口縁をもつ甕である。口縁部外面には刷毛目工具を連続して押捺した痕跡が残る。6（図版122-7）は須恵器の高坏で，坏部の立ち上がり部分に小さな隆起状の突帯を成形し，中位に幅広の凹線文をめぐらす。脚部の付け根には篦状工具痕が残る。以上に加えて，SC-43の上部Ⅲ層部分として取り上げた図57-2・4～7も，前述したように，上層のSK-496に伴う遺物である。

須恵器の高坏（図171-6）が出土していること

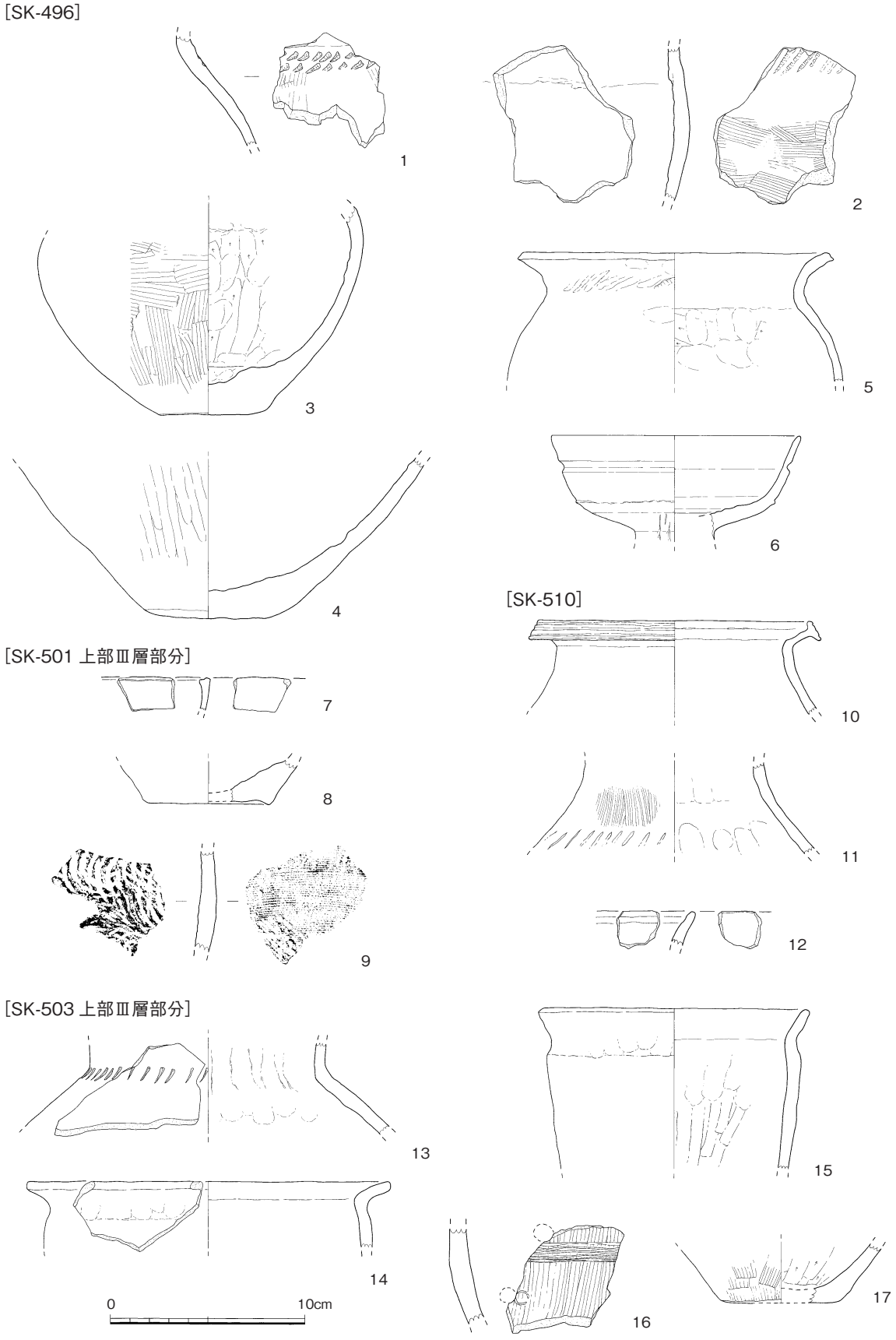


図 171　SK-496・501・503・510 出土土器実測図（縮尺 1/3）

から，SK-496 は古墳時代後期に比定できる。

501号土壙（SK-501，図84・171）

DZ-23・24 区の SC-100 の北側に位置する。SC-100 を切る。大半を既設管路の掘り形と塹壕で破壊されているが，長軸長 2.4 m，短軸長 1.9 m ほどの小判形の掘り形をもつと推定する（図 84）。掘り形内には，東側からにぶい黄褐色砂質シルト塊が混じる暗茶褐色砂質シルトが流れ込む。

SK-501 の掘り形埋土から遺物は出土しておらず，上部Ⅲ層部分から須恵器を含む遺物が数点出土しているだけである（図 171-7 ～ 9）。7・8 は弥生土器で，7 は高坏の坏部口縁の破片。口縁端面に横ナデ調整を施し，沈線をめぐらす。8 は若干上げ底の壺の底部。9 は須恵器の胴部破片で，外面には平行条線のタタキ目の上にカキメ調整を施す。内面には同心円文の当て具痕が残る。

古墳時代後期の SC-100 を切ることに加えて，上部Ⅲ層部分から出土した遺物を参考とすれば，SK-501 は古墳時代後期に比定できる。

503号土壙（SK-503，図77・171，図版122・123）

DY・DZ-21 区のⅣ層上面で検出した。SC-92 を切る。中央部を塹壕で破壊されているが，長径 1.25 m，短径 68cmの不整な長円形の掘り形をもつ（図 77）。深さ 6cm前後の非常に浅い舟底状の土壙である。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，小豆～親指先大のⅣ層由来の浅黄色やにぶい黄褐色の砂質土塊が非常に多く混じり，人為的に埋め戻されていると判断できる。

掘り形埋土からは遺物は出土していないが，上部Ⅲ層部分からは数点の弥生土器が出土している（図 171-13 ～ 17）。14 はⅢ層でも最下面，13・16・17 は下部から出土している。本来，SK-503 の掘り形埋土に包含されていた可能性が高い。13（図版 122-9）は壺の肩部～頸部の破片で，撫で肩の胴部に，ほぼ直立する頸部がつく。頸部の付け根には篦状工具で短斜線文を施文する。14 は緩やかに外反する「く」字形口縁甕の破片である。15（図版 122-8）は深鉢型の小型甕で，口縁部を指頭で緩やかに外反させる。内外面に成形時の指頭痕が残る。16（図版 123-1）は脚台部の破片。径 7㎜ほどの円形小穴を焼成前に穿孔する。外面には刷毛目調整を施した後に，1cmほどの幅で間隔が一定しない 5 条の条線がめぐらされる。篦・棒状工具とは異なり，草本の茎などで施されたものと考える。下部の円形小穴に接して，竹管状のスタンプが残されている。17 は甕の凸レンズ状底の破片で，外面には擦過状に近い刷毛目調整の痕跡が残る。ある程度器壁が乾燥した状態で刷毛目工具を強くナデ付けたものと考える。

SK-503 は，弥生時代後期前葉に比定される SC-92 を切る。上部Ⅲ層部分の遺物の中で，図 171-13・14・16・17 はⅢ層下部～最下面から出土し，後期中葉のものである。これらの遺物は本来 SK-503 の埋土に包含されていると考え，SK-503 の埋没時期は弥生時代後期中葉に求めておく。

504号土壙（SK-504，図79）

DY･DZ-22 区に位置する。Ⅳ層上面で検出した。SC-97 と SD-29 に切られ，掘り形の大部分を失っている。残存長径 100cm，短径 57cmを測り，細長い長円形の掘り形と考えられる（図 79）。底面には小さな小穴状の窪みがある。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，下部を中心として小豆～親指先

大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。人為的に埋め戻されているものと判断できる。

遺物は出土していないが，弥生時代後期初頭のSC-97とSD-29に切られることから，SK-504は中期後葉までに埋没していると考える。

507号土壙（SK-507，図4・122）

DX-20区の調査区南壁沿いに位置し，SD-91に切られる。南半部は調査区外にのびる。幅85cm，確認できた長さ90cmの隅丸長方形の掘り形をもつ（図4・122）。Ⅲ層上面から掘り込まれ，深さは29cm前後を測る。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトである。

遺物は弥生土器の胴部小片が3点出土したにすぎず，時期を特定できるものはない。また，SK-507を切るSD-91は弥生時代中期後葉～後期中葉の時間幅でしか捉えることができない。SK-507についても同様である。

510号土壙（SK-510，図171・172，図版123）

DY・DZ-24区に位置する。SP-375を切る。大半を後世の攪乱で破壊され，北壁と東壁の一部しか残存していないが，径90cm前後の隅丸方形の掘り形をもつと推定される（図172）。底面には小さな凹凸があるものの，全体としては中央に向かって緩やかに窪む。掘り形の輪郭を確認できたⅣ層上面からの深さは14～17cmを測る。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，下部に小豆大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。

掘り形埋土と上部Ⅲ層部分から，少ないながら，弥生土器が出土している（図171-10～12）。10は上部Ⅲ層部分，11・12は掘り形埋土中から出土。10は甕，11は壺である。10（図版123-3）は，口縁部を強く折り曲げ，口縁端部を拡張して3条の沈線様の凹線文をめぐらす。11は「ハ」字形に窄まる頸部破片で，頸部の付け根に短斜線文をめぐらす。12は縄文土器の深鉢の口縁部破片で，口縁部内面に沈線を1条めぐらす。小片のため，器体の傾きは不確実である。

出土遺物の中で，縄文土器は本来Ⅳ層に包含されていたものが混入したものと考えられ，甕（図171-10）は弥生時代後期初頭，壺（図171-11）は中期後葉～後期初頭の特徴をもつ。以上から，SK-510は弥生時代後期初頭に比定しておきたい。

511号土壙（SK-511，図172～176，図版40・123～125・137・145）

DZ-24・25区に位置し，SD-505を切る。東側を既設管路の掘り形で破壊されているが，長径1.7m，短径1.5mほどの不整な長円形の掘り形をもつと推定される（図172，図版40-2）。掘り形の輪郭を確認できたⅣ層上面からの深さは22～29cmで，底面中央に向かって緩やかに窪む。掘り形埋土は砂礫混じりの暗褐色砂質シルトで，極粗砂～中礫，径1～2cmの花崗岩や砂岩の亜円礫が多く混じる。

掘り形のほぼ中央を中心として弥生土器のほぼ完形品や大形破片が横倒しの状態で出土している。一括して土壙内に投棄されたものと考えられる（図173-1～12）。1～4は壺である。1（図版124-1）は扁球形の胴部から「ハ」字形に頸部が窄まり，口縁部が大きくひらく。頸部中央には突帯が貼り付けられていた痕跡が残る。口縁下端部には貝殻腹縁を押捺して刻目を施す。胴部外面には横7cm，縦4cm前後の範囲を作業単位としてミガキ調整を施す。胴部中位には2.2～2.5×3cm，3×4cmの焼成破裂痕が連続して生じ，器体に穴

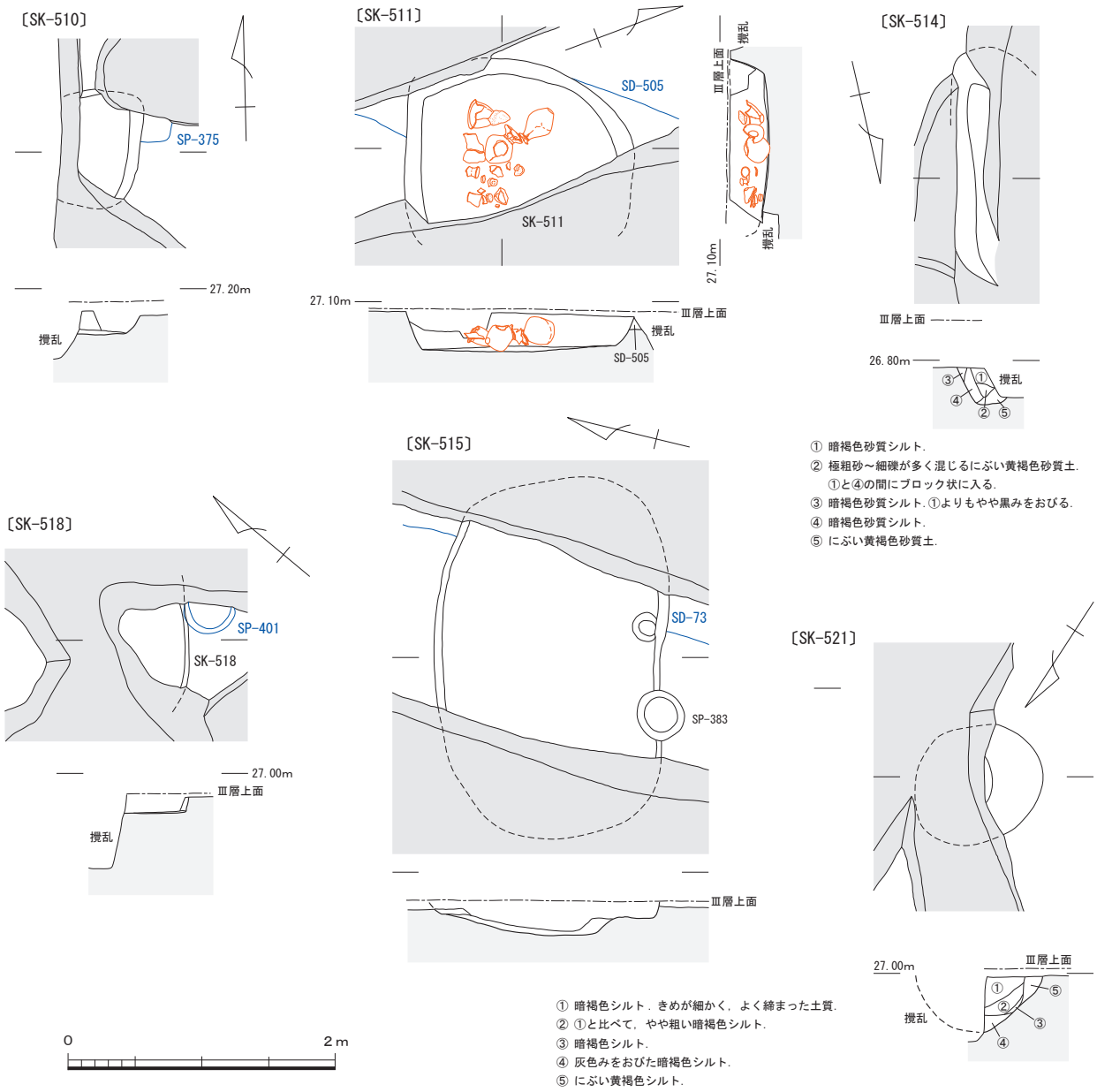


図 172　SK-510・511・514・515・518・521・529・531 遺構実測図（縮尺 1/50）

があいている。2（図版 124-2）は球形の胴部から「ハ」字形に頸部が緩やかに窄まり，短く外反する口縁部がつく。頸部上半には断面三角形突帯が貼り付けられるが，幅広の低いベルト状の粘土帯を貼り付けて横ナデ調整を施すことで，2 条の断面三角形突帯としている。3（図版 124-4）は頸部付け根付近の破片で，幅広の突帯を貼り付け，爪先を押圧して施す刻目を三段めぐらす。4 は無頸壺で，長胴から口縁部が緩やかに外反する。

5・6・8 ～ 11 は甕，7 は深鉢である。5（図版 123-4）は「く」字形に強く屈折させる口縁部をもち，膨らみがない長胴に，裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の底部がつく。胴部外面は二次的火熱を受けて，器表面が薄く剥離する。器表面が残った部分には煤が付着する。6 は胴部上半の破片で，「く」字形に屈折する口縁部がつくものと考えられる。7（図版 124-6）は刻目凸帯文土器の深鉢である。口縁部直下に断面三角形の突帯を 1 条貼り付け，口縁端面と突帯に小さな刻目をほぼ等間隔に施す。Ⅳ層からの混入品と考える。8(図

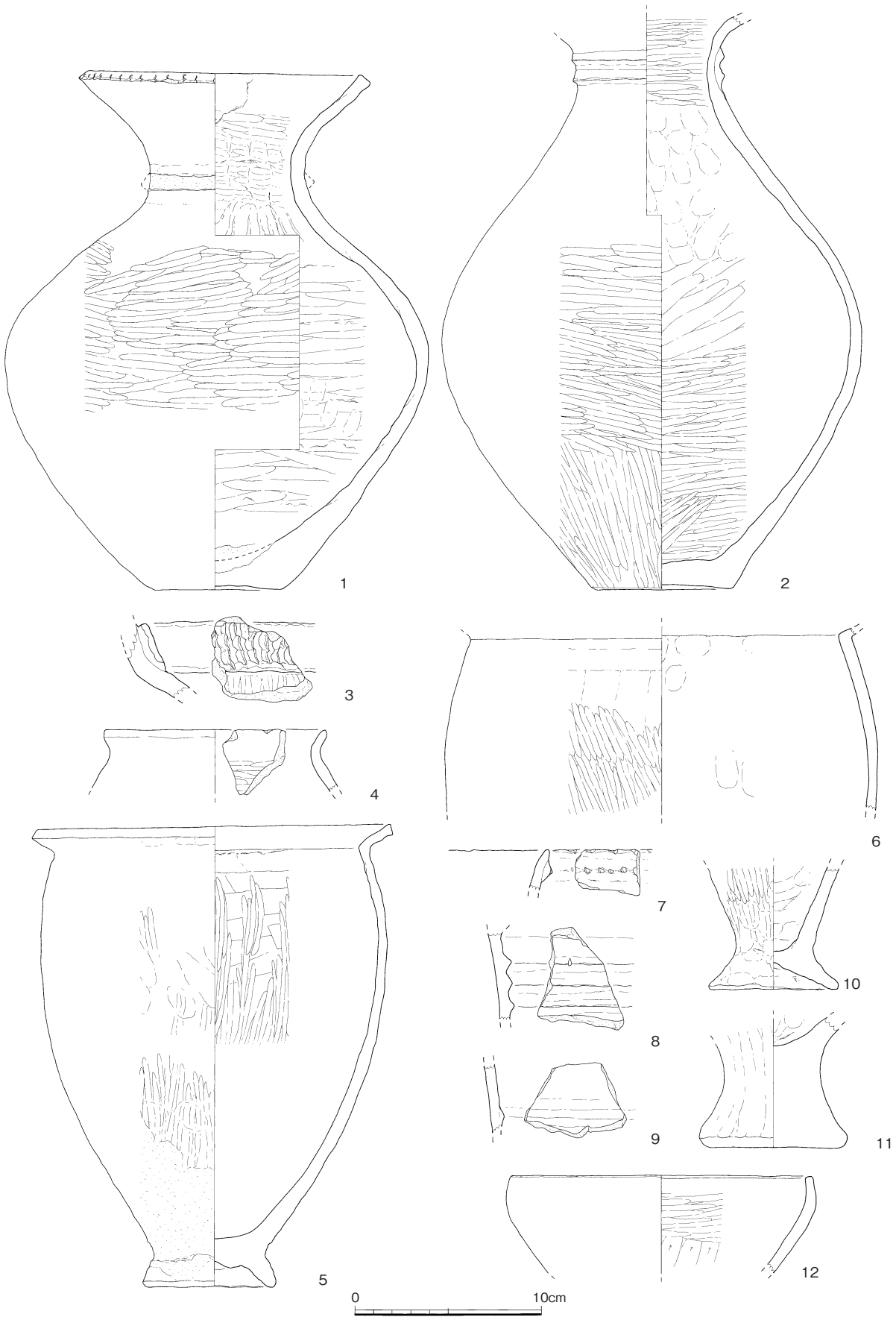


図 173　SK-511 掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）

版 124-5）・9 は山ノ口式系土器の胴部上半の破片である。断面三角形の突帯を貼り付ける。10（図版 125-2）は裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の底部破片で，内底面には爪痕が残る。11（図版 125-1）は山ノ口式系土器の甕の底部破片である。12 は埦型の坏部をもつ高坏である。口縁部付近がわずかに窄まる。

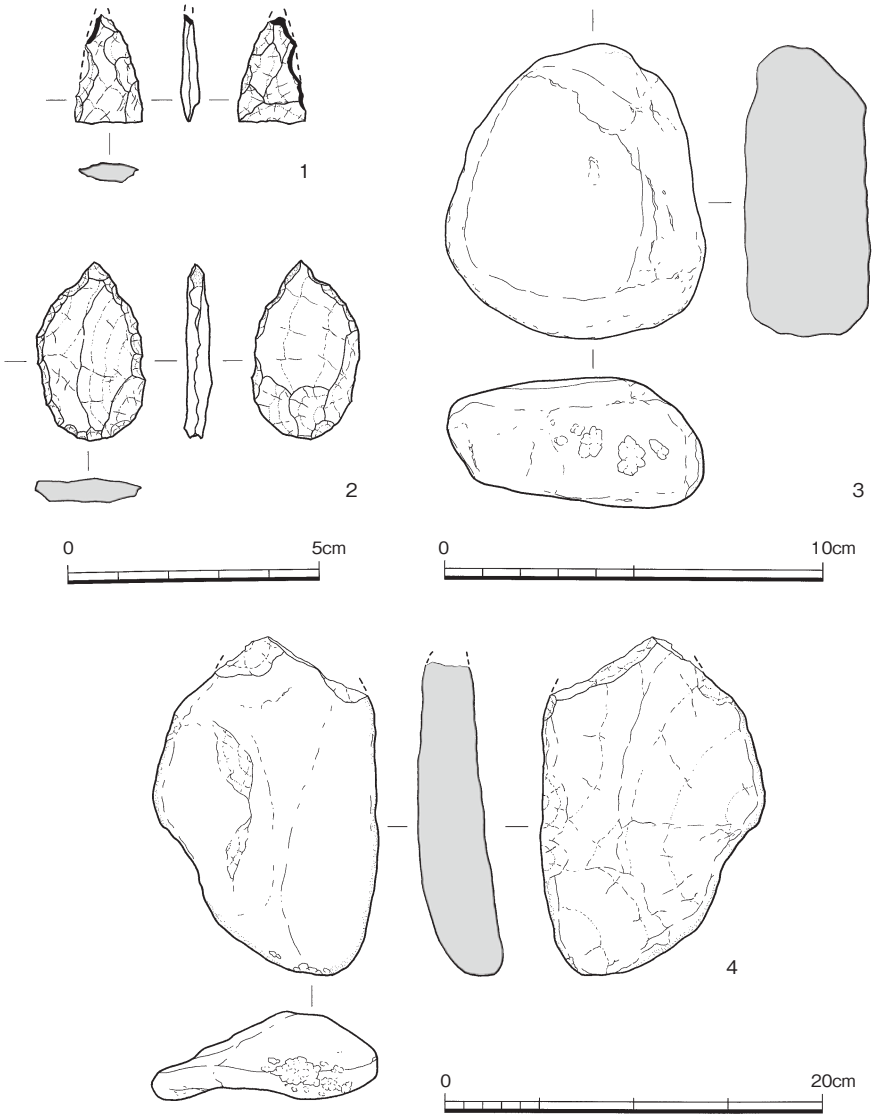


図 174　SK-511 出土石器実測図（縮尺 2/3，1/2，1/4）

この他，打製石鏃や敲石，鉄鏃が出土している（図 174-1 ～ 4）。1（図版 137-9）はサヌカイト製の平基式打製石鏃で，側辺の一部と先端は欠損する。残存重量 0.9 g。2（図版 137-11）は赤色頁岩製の打製石鏃で調整剥離段階の未成品である。先端部に一部自然風化面が残る。重量は 5.1 g を測る。3（図版 145-4）は花崗岩の扁平な亜円礫を利用した敲石である。下端部に敲打痕が残る。重量は 255.2 g。4 は礫岩の一種を用いる。下端部に敲打痕が残る。重量は 900 g を測る。図 176-1 は鉄鏃である。切先部と茎部下半部を欠く。茎部の断面では三度ほどの折り返しを行っている。矢柄の木質部が付着する。

掘り形上部のⅢ層からも，埋土で出土した壺や甕と同時期の土器が出土している。Ⅲ層でも下半部から出土した土器を報告する（図 175-1 ～ 3）。1（図版 124-3）は壺で，胴部から頸部が緩やかに反転し，大きくひろがる口縁部がつく。口縁端部は横ナデ調整で下方に若干拡張されている。頸部には布目押圧を施した突帯が 1 条貼り付けられる。2 は甕の胴部上半の破片。3 は甕の底部破片である。

SK-511 は，弥生時代後期初頭の SD-505 を切り，掘り形内に投棄された土器には後期初頭の特徴をもつ壺（図 170-1）や甕（図 170-5・6）がある。SK-511 は弥生時代後期初頭に比定できる。

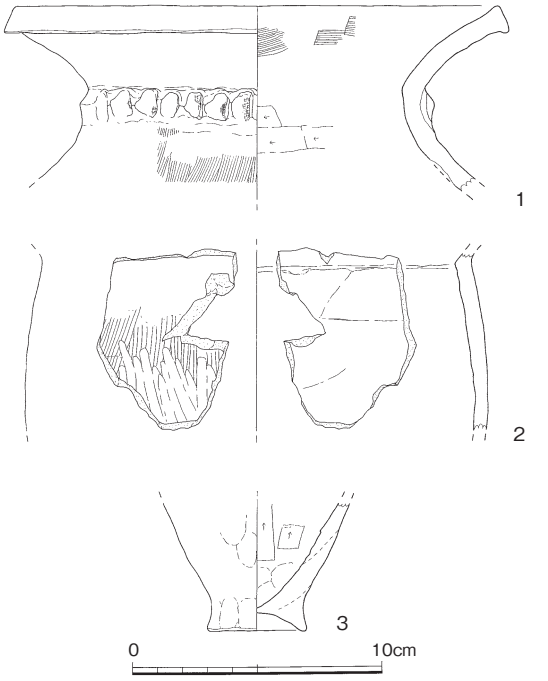


図 175　SK-511 上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）

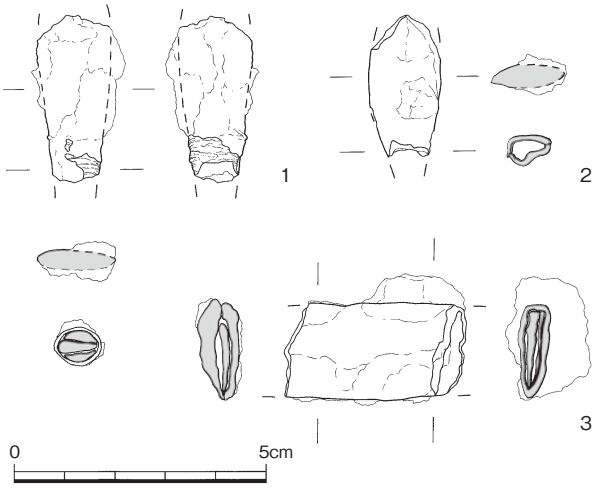


図 176　SK-511（1），Ⅲ層（2・3）出土
鉄器実測図（縮尺 2/3）

514号土壙（SK-514，図172）

DY-27・28 区に位置し，塹壕の溝で大半を破壊されている。長径 1.85 m，短径 75㎝の細長い長円形の掘り形をもつと推定される（図 172）。Ⅳ層上面からの深さは 35 ～ 50㎝で，底面南半部にはかなり凹凸があり，全体として北に向かって傾斜する。掘り形埋土は砂礫が混じる暗褐色砂質シルトで，小豆～親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じり，人為的に埋め戻されていると判断した。北側の SC-517 との重複関係は不明である。

遺構の残存状況は悪く，掘り形埋土から出土した遺物も少量しかない。いずれも弥生土器の胴部破片で，弥生時代中期後葉～後期中葉と考えられる外面をミガキ調整，内面を刷毛目調整する壺，外面を刷毛目調整，内面をナデ調整する甕がある。

出土遺物は弥生時代中期後葉～後期中葉の時間幅に収まる。当該期の土壙と捉えておく。

515号土壙（SK-515，図172・177，図版41）

DY・DZ-29 区に位置する。東西を破壊されているが，幅 1.7 m 前後の長円形もしくは隅丸方形の掘り形が考えられる（図 172，図版 41-1）。SD-520 を切り，SP-383 に切られる。掘り形の輪郭を確認できたⅣ層上面からの深さは 4 ～ 9㎝で，中央部がさらに 12㎝ほど大きく窪む。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色や灰白色粗砂の大小の塊が点々と混じる。

出土遺物は弥生土器の破片が多いが，須恵器の坏身の天井部破片が混じる（図 177-1 ～ 3）。1 は須恵器で，口縁部への折り曲げ近くに幅 4㎜の浅い凹線がめぐることから，坏身の天井部破片と考えた。2・3 は弥生土器の甕である。2 は緩やかに「く」字形に屈曲する口縁部破片。3 は厚い上げ底の底部破片で，外底面と底部側面には指頭によるナデ痕跡が残る。この他，掘り形埋土から鉄器

の破片が出土している。幅 7 ～ 10㎜，厚さ 3㎜の板状で錆で膨れあがり，器種は不明である（表 7）。

SK-515 は，弥生時代後期前葉の SD-73 を切り，掘り形埋土から出土した遺物の中に須恵器が混じることから，古墳時代後期に比定できる。

518号土壙（SK-518，図172）

DY-30 区に位置する。塹壕で掘り形のほとんどを破壊され，全形は不明であるが，径 1 m前後の小型土壙と考えられる（図 172）。SP-401 に切られている。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，小円礫が多く混じり，下部を中心として親指先大の浅黄色土塊が多くみられ，人為的に埋め戻されているものと考える。

掘り形の検出時に，外面を刷毛目調整の後にナデ調整，内面をケズリ調整する弥生土器の胴部破片，掘り形埋土中から弥生土器の胴部小片が 1 点出土した。いずれも小片で，時期を特定できるものはない。

SK-518 は弥生時代もしくは古墳時代後期の遺構と考えられるが，詳細な時期は特定できない。

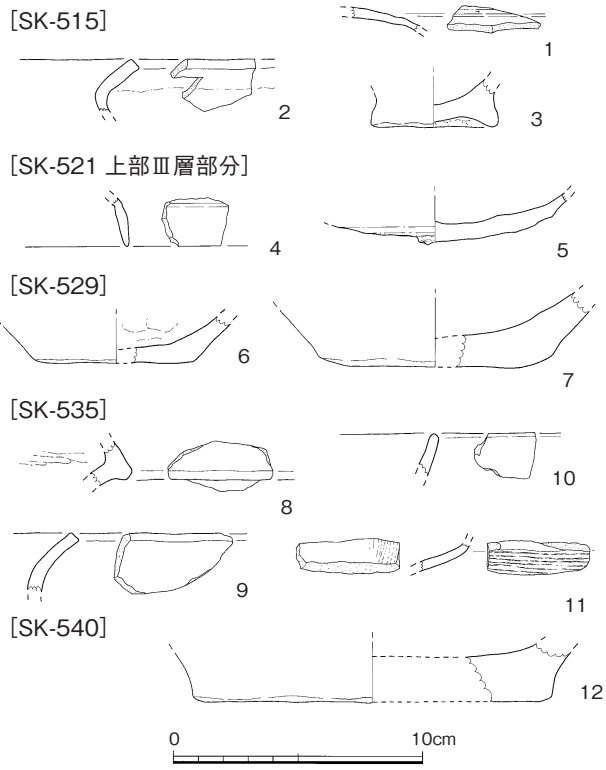


図 177　SK-515・521・529・535・540 出土土器実測図（縮尺 1/3）

521号土壙（SK-521，図172・177）

DZ-26 区のⅣ層上面で掘り形の輪郭を確認できた。東半部は塹壕で破壊されているが，径 90 cmほどの円形の小型土壙と考えられる（図 172）。深さ 41cmの擂り鉢状を呈する。掘り形埋土は暗褐色シルトを主体とする。

掘り形埋土から出土した遺物はない。上部Ⅲ層部分からは須恵器，土師器，弥生土器が出土している（図 177-4・5）。4 は須恵器の短頸壺の蓋と考えた。口縁部周辺の小片で，体部と口縁部の境界部には浅い段状の窪みがめぐる。5 は須恵器であるが，坏蓋か坏身かは不明である。外面の調整がかなり粗雑なため坏身として図化した。

出土遺物から SK-521 の時期を判断するには決め手を欠く。しかし，上部Ⅲ層部分から出土した須恵器を参考として，古墳時代後期の土壙と考えておく。

529号土壙（SK-529，図48・177）

DX・DY-25・26 区に位置する。SC-39 の西側のⅣ層上面で，掘り形の平面を確認できた。SC-39 に切られ，後世の攪乱で，大半を破壊されている。長径 2.85 m，短径 2.4 ～ 2.5 mの不整な小判形の掘り形と考えられる（図 48）。Ⅳ層上面からの深さは 7 ～ 12cmを測る。掘り形の規模は小型の竪穴建物と共通するが，柱穴が確認できなかったため，土壙として報告する。

床面に貼り付いた状態で，壺の底部破片が出土している（図 177-6・7）。ともに平底で 7 は底部の周縁部が著しく摩滅しているため，一見すると凸レンズ状底にみえる。

SC-529 からは壺の底部破片が出土しているだけで，時期比定は難しいが，平底の壺が出土していることを考えれば，弥生時代中期後葉～後期中葉の時間幅の中に収まる。

SC-529 は，弥生時代中期後葉の SC-39 に切られる。16 次調査区周辺では中期中葉に遡る遺構は知られていない。出土遺物もあわせ，弥生時代中期後葉の土壙と捉えておく。

530号土壙（SK-530，図48）

DX-26 区に位置する。SC-39 に切られ，後世の攪乱で大半が破壊されるが，長さ 1.6 ～ 1.9 m，幅 60㎝前後の細長い不整長円形の掘り形をもつと考えられる（図 48）。底面は中央に向かって緩やかに窪み，Ⅳ層上面からの深さは 9 ～ 12㎝を測る。

遺物は出土していないが，弥生時代中期後葉の SC-39 に切られている。16 次調査区周辺では中期中葉に遡る遺構はないため，弥生時代中期後葉の土壙と考える。

531号土壙（SK-531，図81，図版28）

調査区南西角付近の DZ-20 区に位置する。SC-99 と SD-36 の中央～南西部分を切り，SP-438 に切られる。掘り形北側の弧を描く壁面を部分的に確認できただけである（図 81，図版 28-1・2）。深さは 17㎝前後。掘り形埋土は粘性をおびた暗褐色砂質シルトである。

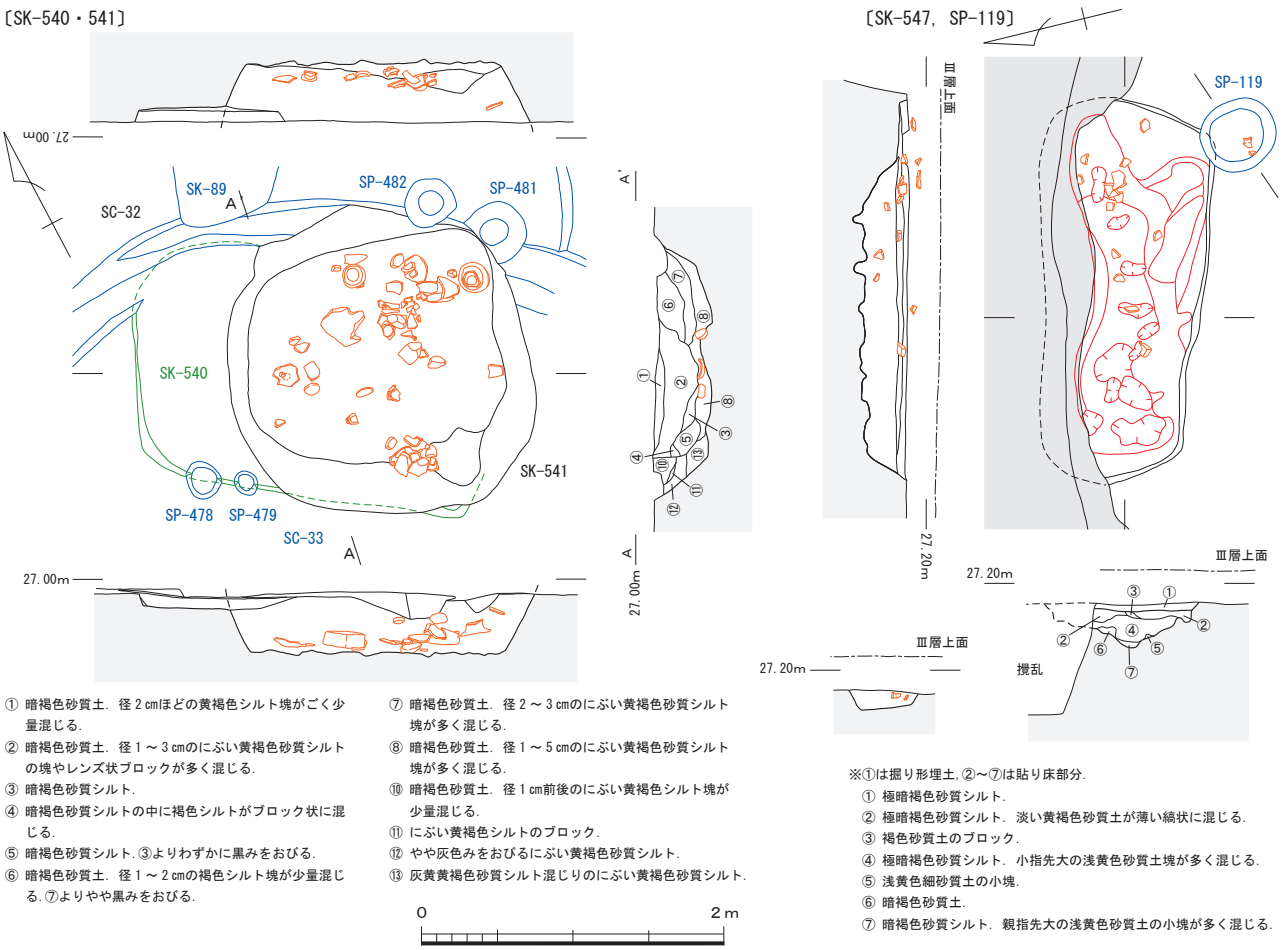
遺物は出土していないが，弥生時代後期前葉の SD-36 中央部～南西部分を切ることから，弥生時代後期中葉以降の土壙と考えておく。

535号土壙（SK-535，図58・177，図版125）

DV・DW-24・25 区に位置し，SC-536 を切る。塹壕で西側と南側を破壊されているが，残存長 1.6 m，残存幅 1.1 mほどの不整な隅丸方形の掘り形をもつと考えられる（図 58）。Ⅳ層上面からの深さは 10 ～ 12㎝で，底面はほぼ平坦である。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，少量の浅黄色砂質土の小塊が点々と混じる。底面で共通する埋土をもつ SP-470 を検出できたが，SK-535 に伴うかは不明である。SP-470 の調査所見は巻末の遺構観察表を参照されたい（表 3）。

掘り形埋土からは弥生土器の破片が出土している（図 177-8 ～ 11）。ただし，8・9 は出土地点が SC-44 との重複部分でもあり，SC-44 に帰属する可能性も残す。8・9 は壺で，8 は複合口縁壺の口縁部破片，9 は短くラッパ形にひらく口縁部破片である。10（図版 125-4）は深鉢型の鉢の口縁部破片である。11（図版 125-3）は縄文土器の浅鉢である。

出土遺物が少なく，SK-535 の時期は比定できない。しかし，弥生時代後期中葉の SC-536 を切っていることから，SK-535 は後期後葉の土壙と捉えておく。



① 暗褐色砂質土．径2cmほどの黄褐色シルト塊がごく少量混じる．
② 暗褐色砂質土．径1～3cmのにぶい黄褐色砂質シルトの塊やレンズ状ブロックが多く混じる．
③ 暗褐色砂質シルト．
④ 暗褐色砂質シルトの中に褐色シルトがブロック状に混じる．
⑤ 暗褐色砂質シルト．③よりわずかに黒みをおびる．
⑥ 暗褐色砂質土．径1～2cmの褐色シルト塊が少量混じる．⑦よりやや黒みをおびる．
⑦ 暗褐色砂質土．径2～3cmのにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる．
⑧ 暗褐色砂質土．径1～5cmのにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる．
⑩ 暗褐色砂質土．径1cm前後のにぶい黄褐色シルト塊が少量混じる．
⑪ にぶい黄褐色シルトのブロック．
⑫ やや灰色みをおびるにぶい黄褐色砂質シルト．
⑬ 灰黄褐色砂質シルト混じりのにぶい黄褐色砂質シルト．

※①は掘り形埋土，②～⑦は貼り床部分．
① 極暗褐色砂質シルト．
② 極暗褐色砂質シルト．淡い黄褐色砂質土が薄い縞状に混じる．
③ 褐色砂質土のブロック．
④ 極暗褐色砂質シルト．小指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる．
⑤ 浅黄色細砂質土の小塊．
⑥ 暗褐色砂質土．
⑦ 暗褐色砂質シルト．親指先大の浅黄色砂質土の小塊が多く混じる．

図178　SK-540・541・547遺構実測図（縮尺1/50）

540号土壙（SK-540，図177・178，図版42）

DV-22区のSC-33床面で，SK-541とともに掘り形の輪郭を確認できた。SC-32，SK-541に切られる。長さ2.3m，幅1.6～1.7mの隅丸方形の掘り形をもつ。深さは8～9cmで，底面はほぼ平坦である（図178，図版42-2）。

SK-540の掘り形埋土から出土した遺物は，10片ほどの弥生土器の破片だけである。しかも図化できた遺物は1点にとどまる（図177-12）。大型壺の平底の破片で，外底端部は摩滅している。外面にはナデ調整，内面には指頭によるナデ調整を施す。

図177-12は，弥生時代中期後葉～後期中葉の時間幅でしか捉えられないが，SK-540は中期後葉のSK-541に切られ，中期中葉に遡る遺構が周辺ではみられないので，SK-540も弥生時代中期後葉の土壙と考える。

541号土壙（SK-541，図178～182，図版41・42・125～131・142・145・146）

DV-22区のSC-33の床面で掘り形の輪郭を検出できた。SK-540とSP-481を切り，SC-33に切られる。径2～2.05mの不整円形の掘り形をもち，底面は凹凸にとみ，横断面は全体としては舟底状を呈する。土層が周囲から流れ込む（図178，図版42-1・2）。掘り形埋土は暗褐色砂質土を主体と

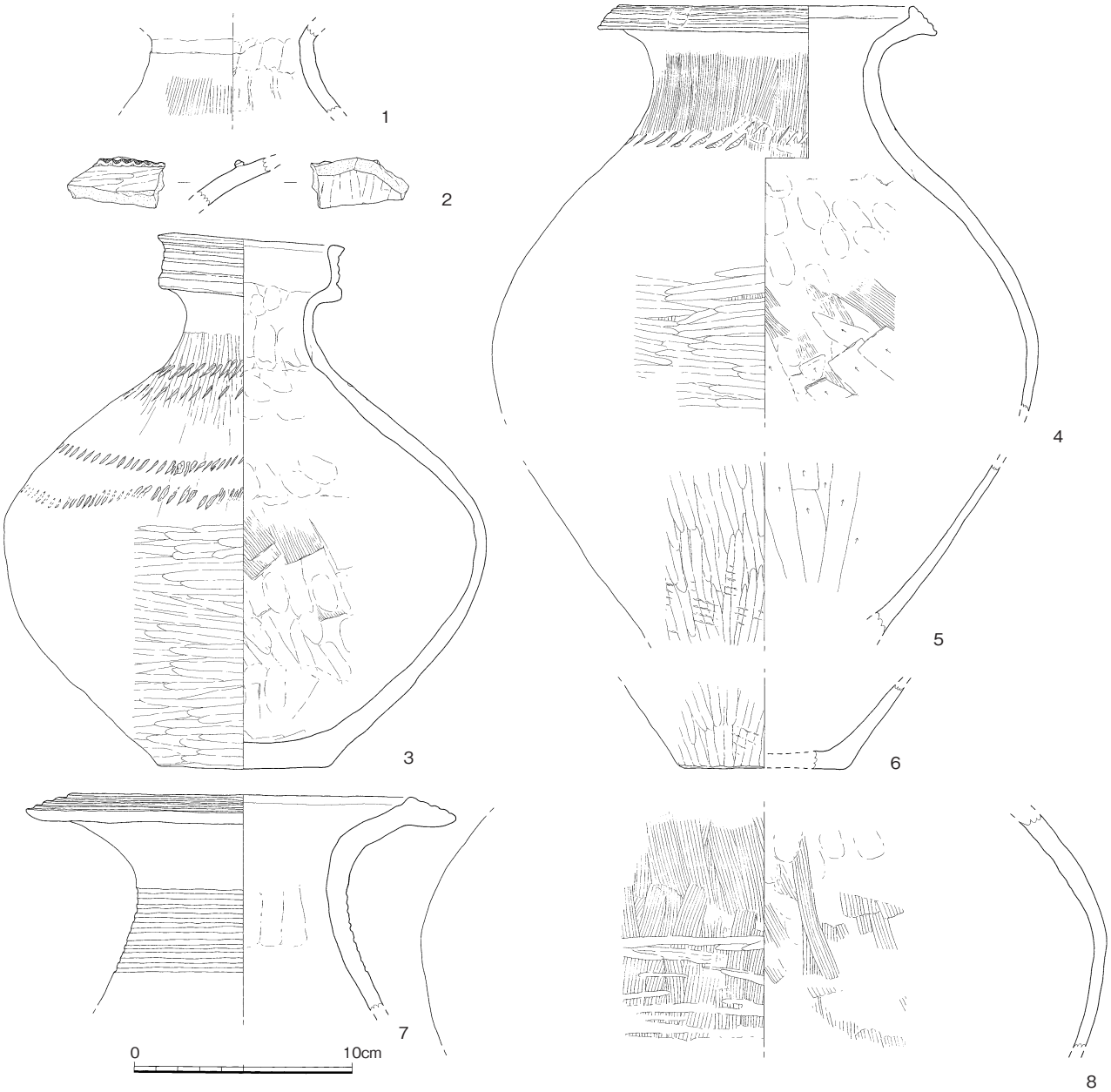


図 179　SK-541 出土土器実測図 1（縮尺 1/3）

する。

掘り形埋土の中位から下部にかけて，完形に復元できたり，大形の破片の弥生土器，敲石，台石が出土している。一括して土壙内に廃棄された遺物である（図 179 ～ 182，図 41-2）。

図 179-1 ～ 8 は壺である。1 は「ハ」字形に緩やかに窄まる頸部の破片である。口縁部との境界部には強い横ナデ調整で浅い段が生じている。2（図版 125-7）は，内面に細く丸い粘土紐を貼り付け，平織りの布を巻きつけた棒状の工具を押圧して刻目を施す。3（図版 126-1）は，扁球形の胴部から緩やかに「ハ」字形に頸部が立ち上がり，頸部上半は短い円筒形となる。頸部の上端を折り曲げ複合口縁部を立ち上げる。口縁部には凹線文が 4 条めぐる。頸部の付け根と肩部に短斜線文が二段ずつ，計四段施文される。胴部外面は，中位に刷毛目調整もしくは板ナデ調整，下半に横方向のミガキ調整を施す。4（図版 127-1）は球形の胴

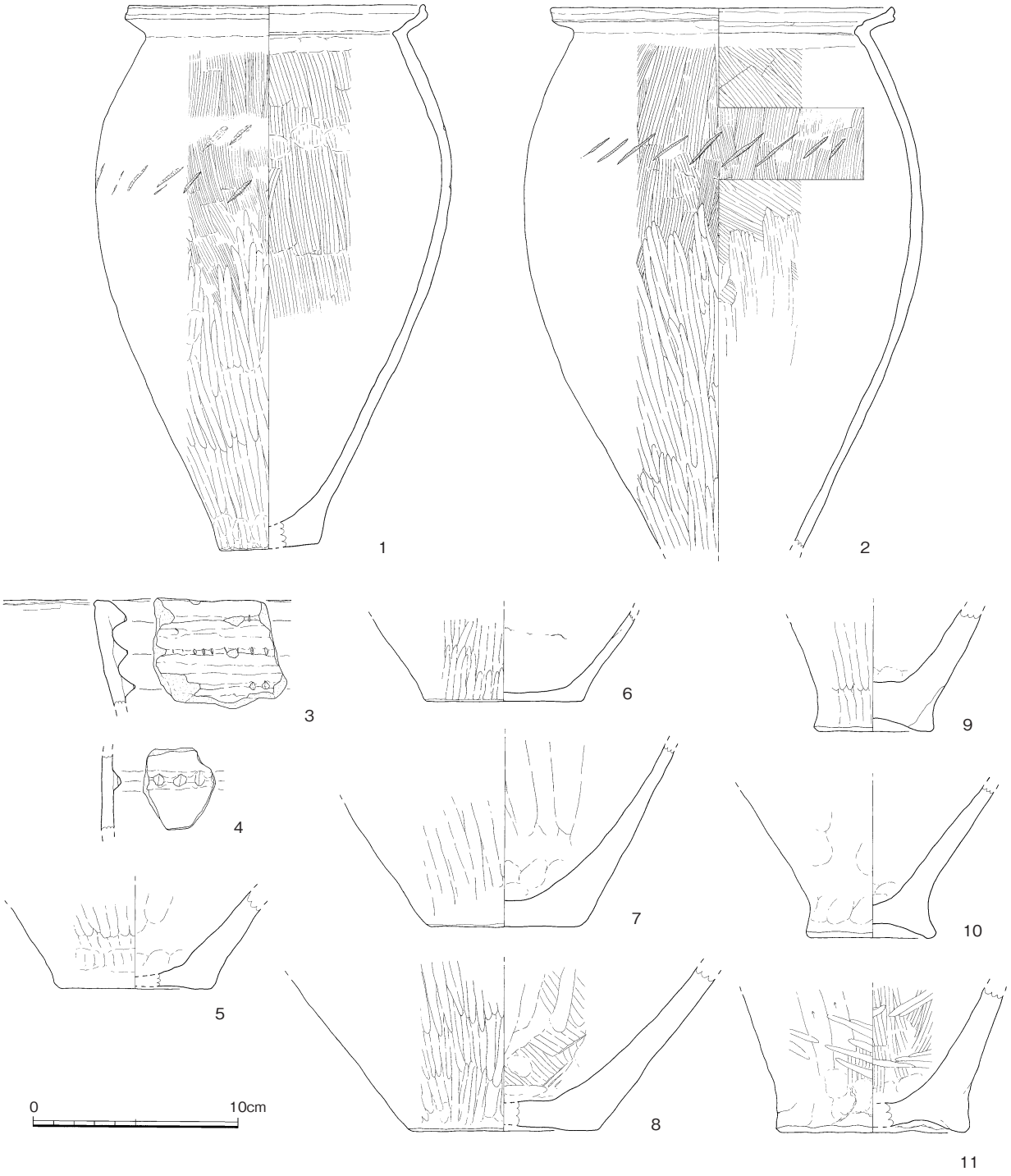


図 180　SK-541 出土土器実測図 2（縮尺 1/3）

部から頸部が「ハ」字形に窄まり，口縁部を短く外反させる。口縁端部を上方に拡張して，凹線文を 4 条施す。一部，凹線文の上に指頭が触れ，端面が部分的に窪む。頸部の付け根には刷毛目工具の木口部を押捺して「ノ」字状形の短斜線文をめぐらす。始点と終点にずれが生じており，上部にずれた部分を指頭でナデ消そうとしている。胴部外面には，中位に刷毛目調整の後に横方向のミガキ調整を施す。内面には板ナデ調整とケズリ調整を交互に施す。器壁が薄く丁寧なつくりで，胎土は精製され，非常に肌理が細かい。5（図版 128-3）・6 は接合しないが，同一個体である。外

図 181　SK-541 出土石器実測図 1（縮尺 1/2）

面には縦方向のミガキ調整を施すが，先行する平行条線のタタキ目を部分的に観察できる。内面には縦方向のケズリ調整を施す。7（図版 128-1）の頸部は「ハ」字形に窄まり，口縁部を大きく外反させる。口縁部下端を斜め下方に拡張し，沈線様の凹線文を 4 条めぐらす。また，頸部にも 9 条，沈線様の凹線文を 1 条ずつ施文する。8（図版 125-8）は扁球形の胴部破片である。外面には縦方向の刷毛目調整の後に，最大径以下に部分的に横方向のミガキ調整を施す。内面には縦方向の刷毛目調整の後にナデ調整を施し，肩部には成形時の指頭痕が残る。

図 180-1 ～ 4 は甕である。1・2 は「く」字形に口縁部を強く屈折させ，口縁端部を上方に跳ね上げる。1（図版 129-1）の胴部上半部には刷毛目工具の木口部を押捺して「ノ」字形の短斜線文が一段施される。その上段でも 2 個の短斜線文を確認できたが，全周はしない。胴部上半には縦方向の刷毛目調整が施され，下半部には縦方向のミガキ調整の後にナデ調整を加える。二次的火熱をう

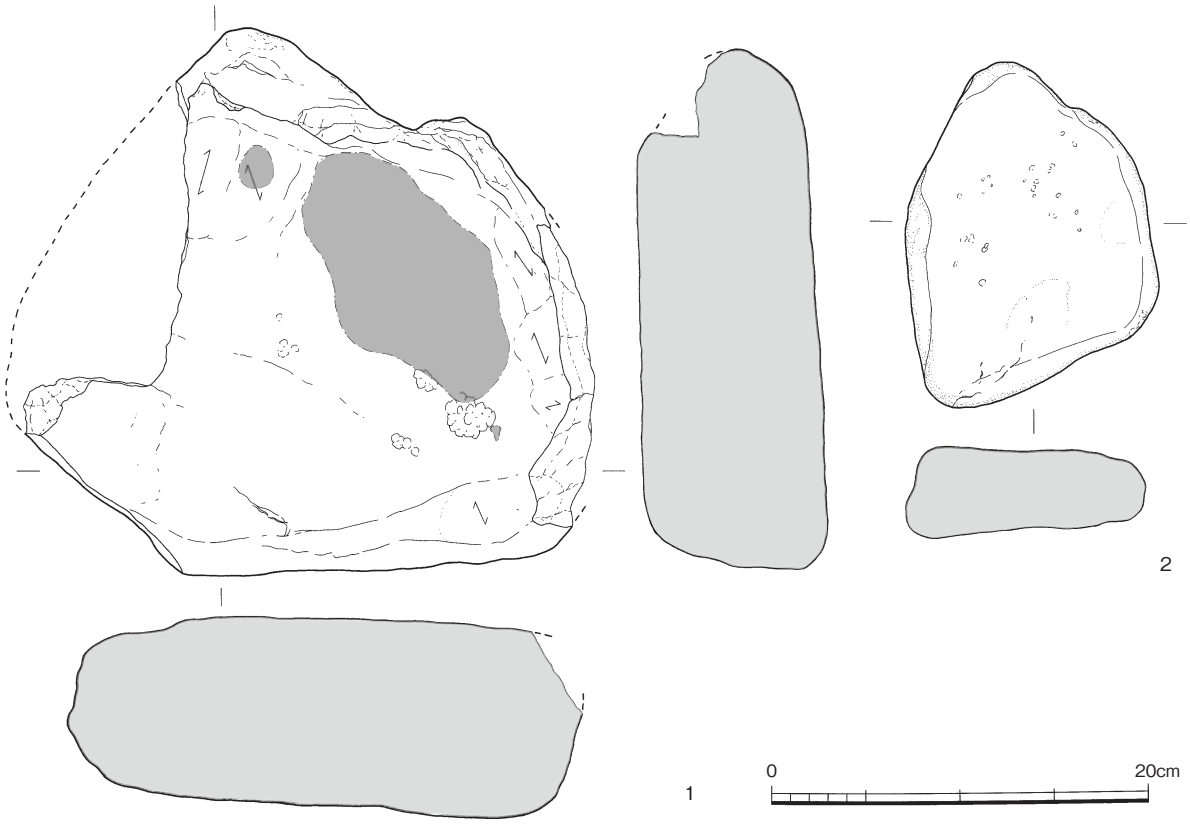


図 182　SK-541 出土石器実測図 2（縮尺 1/2）

けて，胴下半部には点々と小さな亀裂とパッチ状の剥離痕が多数生じている。外面には煤が，内底面にはコゲが付着する。2（図版 130-1）の口縁部内面には屈折部に沿って幅の広い沈線が 1 条めぐる。胴部上部に「ノ」字形の短斜線文が部分的に施される。胴部上半には縦方向の刷毛目調整，下半にはケズリ調整の後にナデ調整を施す。外面には煤が，内底面にはコゲが付着する。3（図版 131-1）は，内傾ぎみの口縁部直下に突帯を 3 条貼り付ける。突帯には刻目が施されるが，磨滅しているため，一部分しか確認できなかった。4（図版 131-2）の胴部外面には断面三角形突帯が貼り付けられ，刻目が施される。器体の傾きは不確実である。5 ～ 8 は平底，9 は厚底，10・11 は裾部が「ハ」字形にひろがる上げ底の破片である。5 ～ 8 は壺，9 ～ 11 は甕である。9 の外底面には焼成破裂が生じている。

図 181-1・3・4 は敲石，2 は磨石である。1（図版 145-2）は方形の扁平な砂岩礫の主面と下端部に敲打痕が残る。重量 290.3 g を測る。2（図版 145-6）は厚みのある花崗岩の亜円礫の主面に擦痕を確認できる。重量 402.6 g。3 は花崗岩の亜円礫の主面に敲打痕が確認できる。風化により，側部の使用痕跡は不明。重量 1250 g を測る。4（図版 146-2）は花崗岩の亜円礫の主面に敲打痕を確認できる。風化のため，側部の使用痕跡は不明瞭である。重量 488.2 g を測る。

図 182-1・2 は台石である。1 は大型の扁平な花崗岩礫を利用する。主面には敲打痕が残り，もう片面には擦痕が残り，煤が付着している。重量 12kg を測る。2 は，扁平な砂岩の川原石の主面に擦痕や敲打痕が残り，側部にも敲打痕を確認できる。重量 1585g を測る。

SK-541 から出土した遺物は一括して土壙内に投棄された状態で出土し，土器は弥生時代中期後葉の特徴をもつ。SK-541 は当該期に比定できる。

543号土壙（SK-543，図96・183，図版24・131）

調査区南西角のDZ-20区に位置する。SC-99を切り，SC-544に切られる。掘り形は，残存長1.0m，幅70cm，検出できたⅣ層上面からの深さ8cmほどを測る隅丸長方形を呈する。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトである（図96，図版24-2）。

掘り形埋土から出土した遺物は少ないが，比較的大きな破片が含まれる（図183-1～3）。1（図版131-3）は下城式系土器の甕である。破片の一部はSK-543に切られるSC-99の床面近くから出土し，SC-99から出土した甕（図82-4）と同一個体の可能性が高い。口縁端からやや下がった位置に2条の断面三角形突帯をめぐらし，正面からやや斜め上方に向けて篦状工具を押捺し，上下の突帯に同時に刻目を施す。口縁部内面には爪痕が点々と残されている。外面全面に煤が付着する。2（図版131-5）は壺の胴部破片で，器体の傾きは不明である。外面には刷毛目調整を施すが，残存状態は悪い。内面も器表面が荒れ，調整は不明である。3（図版131-4）は甕の胴部破片で，器体の傾きは不確実である。外面にはミガキ調整，内面にはケズリ調整を施す。外面には煤が付着する。

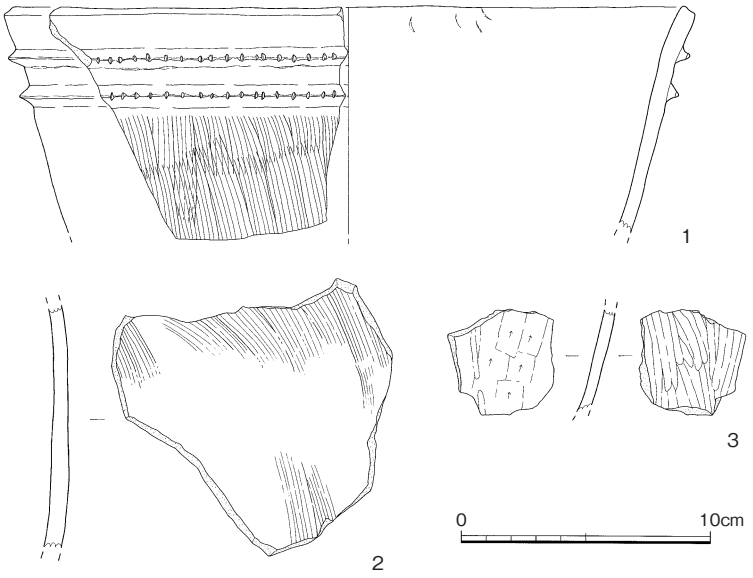


図183　SK-543掘り形埋土出土土器実測図（縮尺1/3）

この他の遺物はいずれも弥生土器の胴部破片であるが，図183-2・3と同様に，弥生時代中期後葉～後期中葉の時間幅に収まる。また，切り合うSC-99とSC-544は後期初頭に比定でき，SK-543も弥生時代後期初頭の土壙と考える。

545号土壙（SK-545，図96）

調査区南西角のDZ-20区に位置する。SC-544の床面で検出したが，調査区西壁でSK-545はSC-544下部を埋める④層上面から掘り込まれていることを確認できた（図96）。掘り形の西半部は調査区外にのびる。推定径90cm前後の円形を呈する。SC-544の床面からの深さは5cmであるが，本来のSC-544④層上面からの深さは25cmを測る。掘り形埋土は灰色みをおびた黒褐色砂質シルトで，径1～2cmのにぶい黄褐色シルト塊が多く混じり，人為的に埋め戻されているものと判断した。SC-544の埋没過程で掘り込まれ，埋め戻された土壙と考える。

掘り形埋土下部から多くの炭化物片が出土したが，他には出土遺物はない。弥生時代後期初頭のSC-544の埋没過程で掘られた土壙である。

547号土壙（SK-547，図178・184，図版35・131・132）

DT･DU-23･24区に位置する。SP-119に切られ，北半部を塹壕で破壊されている。長さ2.5m，幅1.0～1.1mの細長い不整長円形の掘り形をもつ（図178，図版35-1・2）。掘り形の輪郭を確認できたⅣ層上面から5cmほどを埋める極暗褐色砂質シルト層の下面はほぼ平坦な面となっている。極暗褐色砂質シルト層（①層）を埋土，以下を貼り床部分（②～⑦層）と考えた。貼り床を埋める土層は極暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色砂質土の薄層が縞状にみられたり，褐色砂質土，親指先大の浅黄色砂質土の小塊が混じったりする。土壙底には鋤・鍬による掘削痕跡と考えられる長さ15～20cm，幅10cm前後の凹凸が数多く残る。

遺物や炭化物片の多くは掘り形上部から出土しているが，量は少ない（図184-1，図版132-1～3）。図184-1は頸部から口縁部が大きく朝顔形にひらく壺である。図版132-1は壺の胴部破片で，外面には細密条線が残る擦過調整を施した後にミガキ調整を加える。内面には擦過調整を施す。2は大形甕の胴部破片で，外面にはナデ調整の後にミガキ調整を加える。内面には擦過調整を施し，細密条線が残る。3は甕の胴部下半の破片で，外面にはミガキ調整を施す。内面は器表面の荒れが著しく，調整は不明である。

一方，貼り床部分と考えられる土層（②～⑦層）から出土した遺物は，弥生土器の胴部破片の数点だけである。

また，上部Ⅲ層からは比較的多くの土器片が出土しているが，大半は細片で，ここでは時期を判断できる資料を報告する。（図184-2～6）。4・6はⅢ層でも下半部から出土しており，本来掘り形内に包含されていた可能性が高い。2（図版131-7）は壺の肩部破片で，横ナデ調整で肩部から頸部への移行部に幅2㎜ほどの浅い沈線状の窪みが生じている。刷毛目工具の木口部を押捺して短斜線文を施文する。3（図版131-6）は高坏で，膨らみをおびる口縁部に3条の波板状の凹線文をめぐらす。4も高坏で，坏部中位で反転してひろがる口縁部をもつ。5は甕もしくは鉢の厚手の上げ底の破片である。6は甕。裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の底部である。外面は二次的な火熱を受けて赤変している。

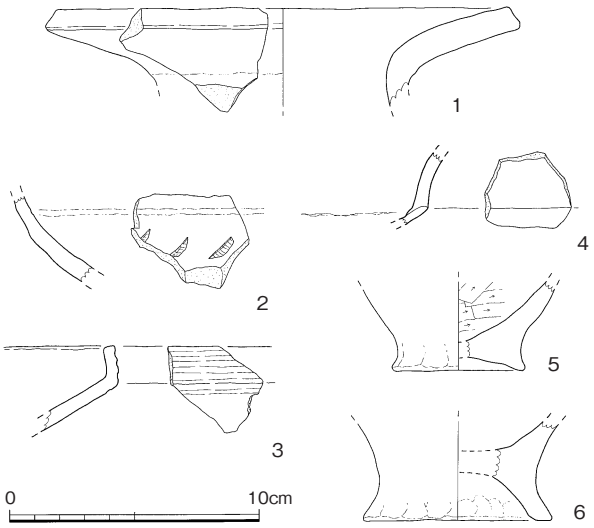


図184　SK-547出土土器実測図（1：掘り形埋土，2～6：上部Ⅲ層部分，縮尺1/3）

掘り形埋土から出土している壺（図184-1）は，弥生時代後期前葉に比定できる。上部Ⅲ層部分から出土した遺物には弥生時代後期初頭のものもみられるが，後期前葉の高坏（図184-4）が出土している。そこで，SK-547は弥生時代後期前葉の土壙と考えられる。

553号土壙（SK-553，図155・185・186，図版111・112）

DV・DW-21区に位置する。SK-50を床面まで調査し終わった時点で，下層の土壙と考えられる掘り形の輪郭を明らかにできた。SK-553である。SK-50の中央に残していた土層観察用畦で，SK-553がSK-50を切っていることを確認できた。長辺1.57m，短辺76～117cm，深さ38cmの舟底状の掘り形をもつ。掘り形内には細礫～中礫が混じる暗褐色砂質土を主体とする土層が流れ込む（図155）。

掘り形の中位～下部には，弥生土器の破片，砥

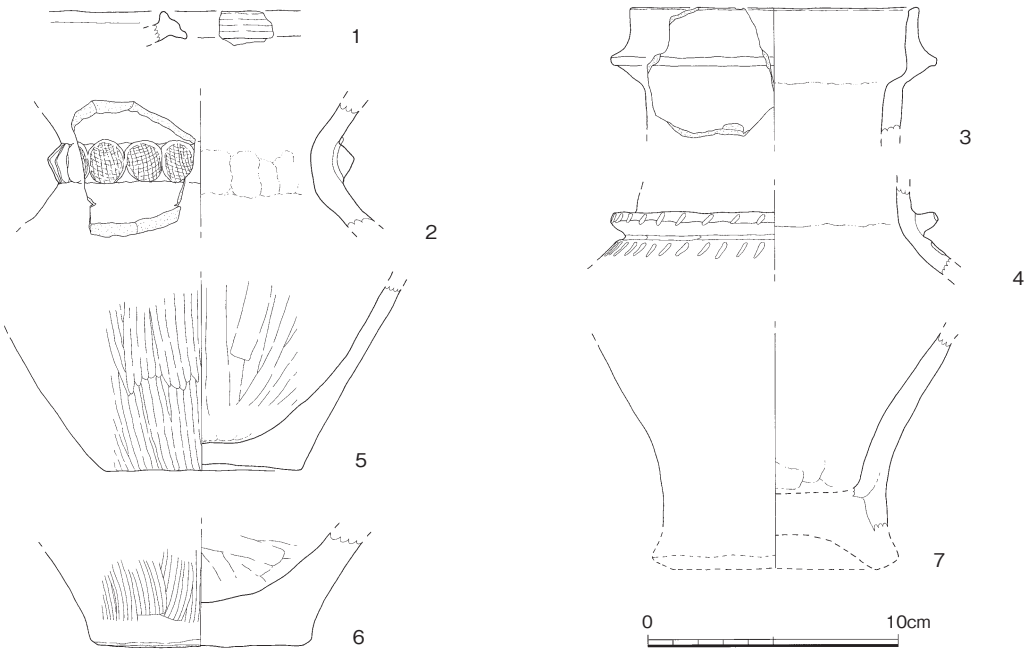


図 185　SK-553 掘り形埋土出土土器実測図（縮尺 1/3）

石・台石・石礫が投棄されていた（図 185・186）。図 185-1 ～ 4・7 は掘り形上部，図 185-5・6 と図 186-1 ～ 3 は中位～下部から出土している。

図 185-1 ～ 4 は壺である。1（図版 111-5）は口縁端部を上下に拡張して，2 条の沈線様の凹線文をめぐらす。2（図版 111-6）は頸部中位の破片で，太めの断面三角形突帯を貼り付け，平織りの布を巻いた指先で摘むように刻目を施す。3（図版 112-1）は複合口縁壺で，円筒形の頸部をもち，複合口縁部は直立する。4 と同一個体と考える。4（図版 111-4）は肩が張る胴部から，ほぼ直立する頸部が立ち上がる。頸部の付け根に断面が蒲鉾形の突帯を細い棒状工具を押しつけながら貼り付けて刻目を施す。突帯の下方には短斜線文をめぐらす。5 は壺の平底の破片である。6 は壺または鉢の平底の破片で，厚手のつくりで，外底面の

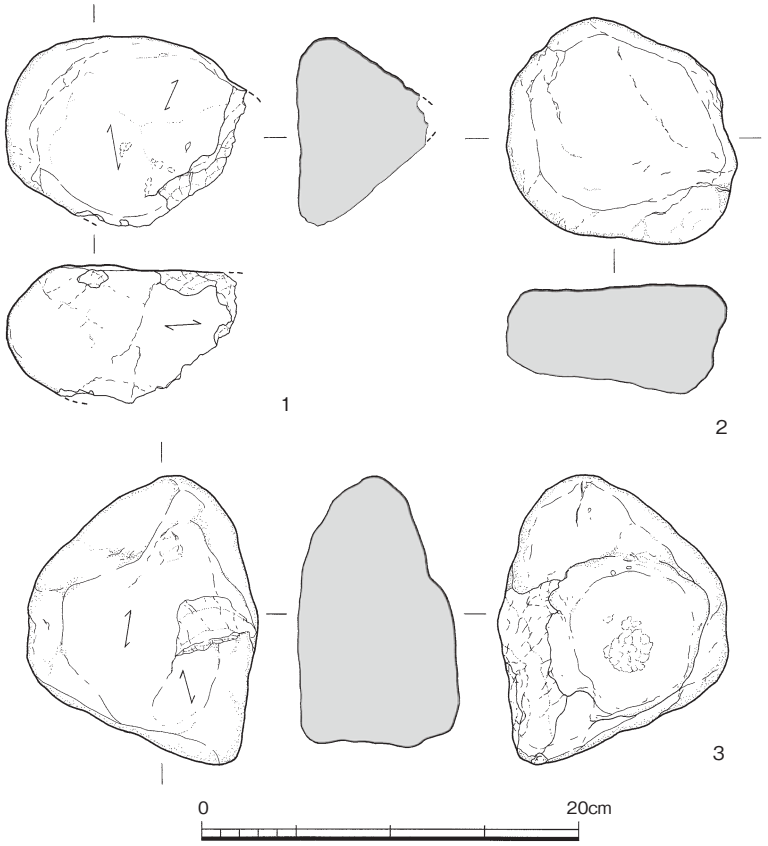


図 186　SK-553 出土石器実測図（縮尺 1/4）

端部は摩滅する。7は大型甕の脚台状の底部がつくと考えられる胴下半部の破片で，底部は粘土接合面で破損する。

図186-1は，風化の進んだ花崗岩の亜円礫で，上面と側面に擦痕を確認できる。花崗岩を砥石とする例はほとんどないが，砥石と考えておきたい。残存重量は1080 g。2は花崗岩の扁平な礫を利用する。重量は1160 g。3は砂岩の亜円礫を用いた凹石で，一面にわずかながら擦痕，他の一面に敲打痕が残る。重量2030 gを測る。

SC-553に切られるSK-50は弥生時代後期初頭に埋め戻された土壙であり，SK-553の掘り形埋土から出土した土器には，後期中葉の円筒形の頸部をもつ複合口縁壺（図185-3・4）がある。したがって，SK-553は弥生時代後期中葉に埋没する土壙と考えてよい。

558号土壙（SK-558，図4）

DU-25区の調査区壁面で土層観察中に確認した土壙である。Ⅱ層直下のⅢ層上面から掘り込まれ，断面での掘り形幅95㎝，深さ20㎝を測る（図4）。調査区壁面の観察で，SC-43，SD-29，SK-496を切ることを確認できた。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，部分的に親指先大の浅黄色砂質土塊が混じり，人為的に埋め戻されているものと考える。遺物は出土していないが，古墳時代後期のSK-496を切ることから，当該期の遺構と考えておく。

6　土器溜まり

40号土器溜まり（SX-40，図117・149・187，図版132）

DU-21-4・9区でⅢ層を中位まで掘り下げた時点で，弥生土器の大小の破片が折り重なり出土し始めた。土器が出土し始めたⅢ層中位で，周辺を精査したが，掘り形は検出できなかった。さらにⅢ層を掘り下げ，Ⅳ層上面で掘り形を確認したが，まったく遺構の痕跡はみあたらなかった。Ⅲ層の途中まで掘り込まれた遺構に伴う遺物と考えられるが，確定できなかったので，40号土器溜まりとした（図117・149）。

ほぼ同形の2個体分の壺の破片が90×40cmほどの範囲で出土している（図187-1～3）。1（図版132-5）・2（図版132-4）は頸部の破片で，低いベルト状の突帯をめぐらし，平織りの布を巻いた細い棒状工具を連続して押捺する。突帯の位置が異なるため，別個体と考えた。3は平底の破片で，接合しないが，1・2のいずれかと同一個体と考えられる。外面には篦状工具で強くナデ上げた調整痕跡が残る。

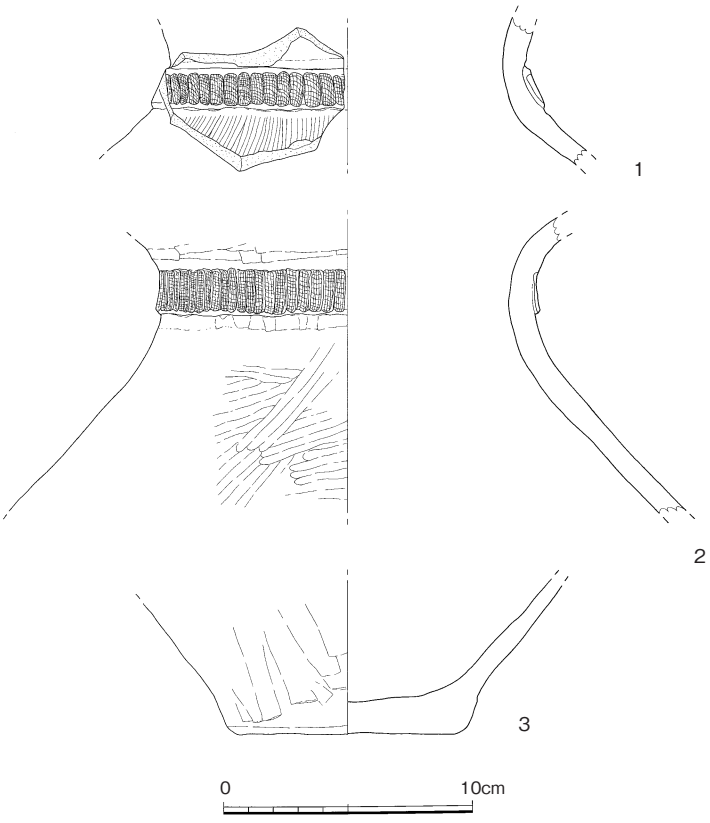


図187　SX-40出土土器実測図（縮尺1/3）

以上の出土土器の中で，図187-2は突帯が頸部中央にあり，弥生時代後期前葉の特徴をそなえる。SX-40とした土器群は弥生時代後期前葉に比定できる。

57号土器溜まり（SX-57，図153・188・189，図版148）

DS-21-5・10区，DT-21-1・6区で，Ⅲ層の中位で100×150cmほどの範囲で弥生土器の破片が点々と出土し始めた。Ⅳ層上面では遺構と考えられる掘り込みを確認できなかったので，調査終了後，土器溜まりとしてSX-57の遺構番号を付した（図188）。

SX-57とした土器群は甕や壺の胴部破片ばかりであるが，坏部中位で反転して口縁部がひろがる高坏の破片（図189-1）がある。外面には横ナデ調整が施される。内面は器表面の荒れにより調整は不明である。弥生時代後期前葉の特徴をそなえる。

弥生土器に混じり，DT-20-21区Ⅲ層下部から分銅形土製品の破片が出土した（図153-2，図版148-6）。厚さ10～11㎜を測り，周縁は緩やかに弧を描く。周縁には半截竹管による細かく小さなC字形の文様を，表面には二段，裏面には四段めぐらす。上方の破断面近くにも同様の文様をほぼ直線的に施す。側縁にもC字形の文様を施すが，表裏面と比べて不揃いで，部分的に四重となる部

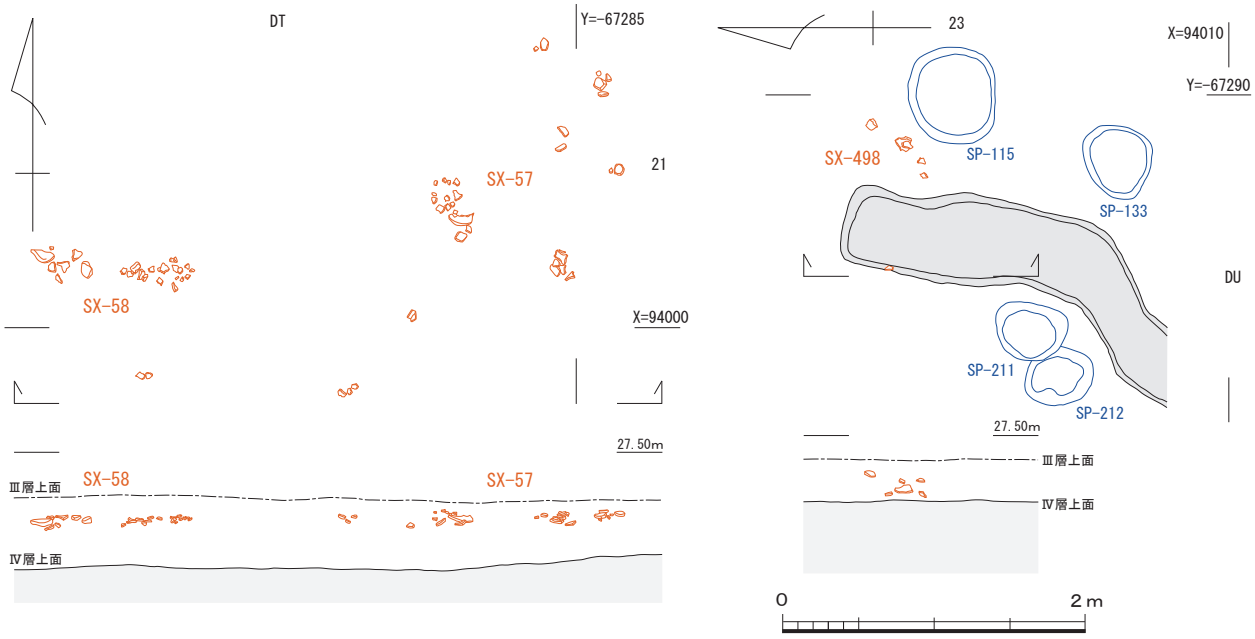


図 188　SX-57・58・498 遺構実測図（縮尺 1/50）

分もみられる。周縁には黒斑が生じている。

以上，SX-57 は弥生時代後期前葉と考えておく。

58号土器溜まり（SX-58，図188・189）

SX-57 西側の DT-21-3・4 区でも，Ⅲ層の上半部から弥生土器の甕や壺の破片が，径 1 mほどの範囲に遺物が集中して出土した（図 188）。Ⅳ層上面では遺構と考えられる掘り込みを確認できなかったので，調査終了後，土器溜まりとして SX-58 の遺構番号を付した（図 188）。

SX-58 とした土器群は，比較的大形の破片が多い（図 189-2 ～ 6）。2 は小型甕で，「く」字形に強く屈折する口縁部をもつ。屈折部内面には沈線が 1 条めぐる。3 はラッパ形に外反する壺の口縁端部である。端面には擬凹線文が 2 条めぐる。4 は薄手の壺の平底の底部，5 は上げ底の甕の底部，6 は壺の平底の破片である。

出土土器の中で，図 189-2 は弥生時代中期後葉，3・5 は後期初頭の特徴をもつ。他も弥生時代中期後葉～後期初頭の時間幅に収まる。

498号土器溜まり（SX-498，図188・189）

DU-23-11 区では，Ⅲ層下半部で弥生土器の破片が点々と出土し始めた。径 50cmほどの範囲に集中する。Ⅳ層上面では遺構と考えられる掘り込みを確認できなかったので，調査終了後に土器溜まりとして SX-498 の遺構番号を付した（図 188）。

SX-498 とした遺物は甕や壺の胴部や底部の破片ばかりである（図 189-7・8）。7 は壺の底部近くの胴部破片で，外面には縦方向のミガキ調整を施す。8 は薄手の壺の平底の破片で，外面には縦方向のミガキ調整，内面にはナデ調整が施されている。ともに弥生時代中期後葉～後期前葉の時間幅に収まる。

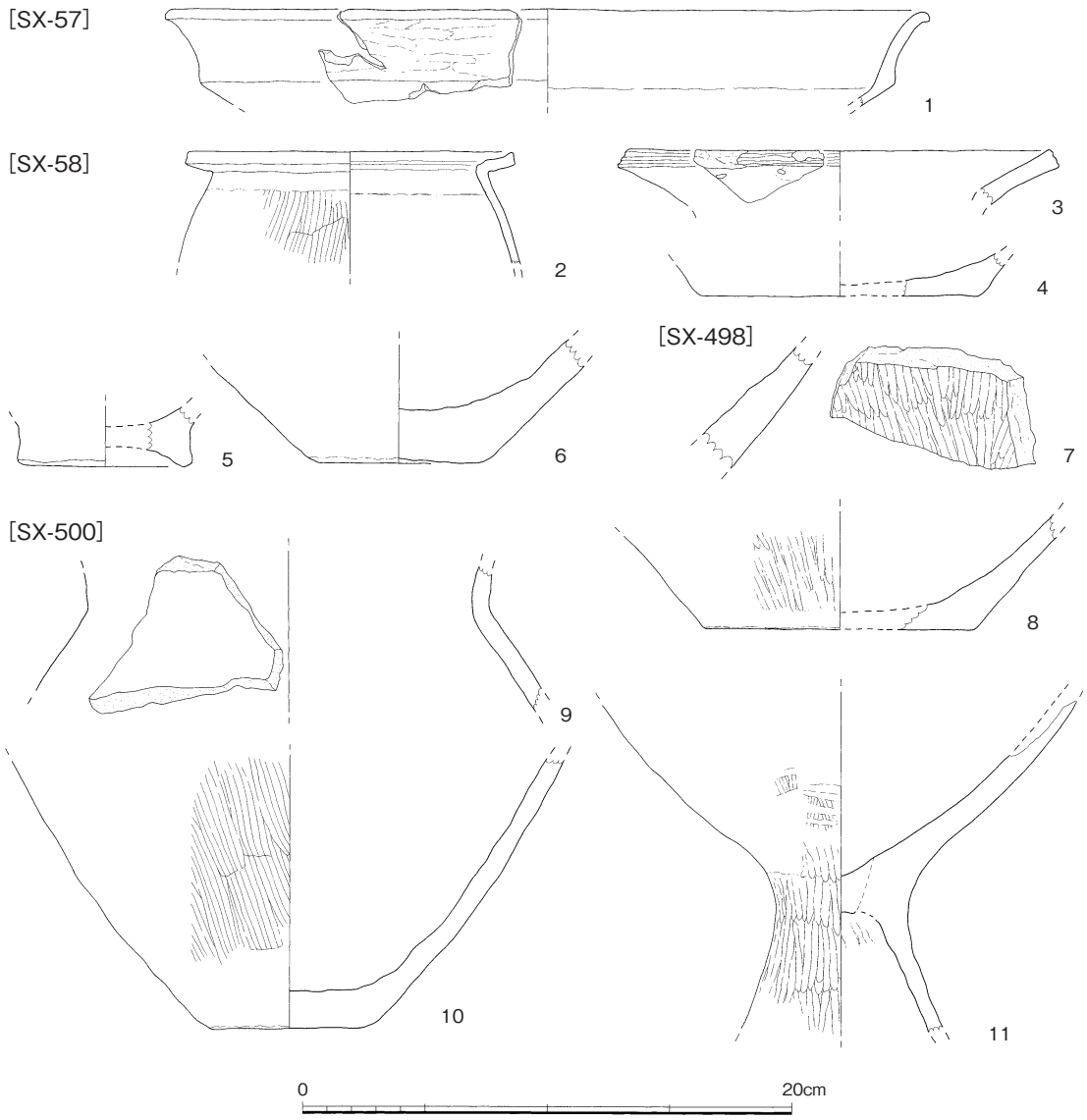


図 189　SX-57・58・498・500 出土土器実測図（縮尺 1/3）

500号土器溜まり（SX-500，図117・120・189）

SC-40 の南側，SD-62 南端の東側の DX-22-18・19・23 区では，Ⅲ層を掘り下げ始めた時点で，壺の大形破片や高坏の破片が折り重なって出土し始めた。Ⅳ層上面では遺構と考えられる掘り込みを確認できず，土器溜まりとして SX-500 の遺構番号を付した。

SX-500 とした土器群には弥生土器の壺と高坏がある（図 189-9 ～ 11）。9 は撫で肩の胴部から頸部が直立する壺である。10 は壺の胴部下半部～底部，11 は埦型の坏部をもつ高坏である。脚部は長脚と考えられ，坏部と脚部の接合は円盤充填技法による。坏部は接合面で剥離している。坏部外面には縦方向の刷毛目調整の後に横方向のミガキ調整を施す。所々に先行して施された刷毛目調整の痕跡が残る。脚部には縦方向のミガキ調整を施し，脚部には絞り痕が残る。

9 は頸部が肩部から直立する特徴から弥生時代後期前葉，10 は埦型の坏部をもつことから中期後葉～後期初頭に比定できる。SX-500 は弥生時代中期後葉～後期前葉の時間幅の中で捉えておく。

7　柱穴・小穴

SP-106（図 190）

DT-21 区に位置する。径 66 ～ 67cmの円形に深さ 2 ～ 3cmほど掘り込み，底面の中央北西寄りは径 15cm，深さ 32cmの小穴状にさらに掘り込まれている。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，径 5 cm前後の浅黄色土塊が混じる。立柱痕跡は確認できなかったが，人為的に埋め戻されていると判断でき，西側に 1.8 mほど離れた位置にある SP-135 と共通した掘り形をもつ。SP-135 と掘立柱建物を構成する可能性が高い。しかし，南北で該当する柱穴は確認できておらず，柱穴として報告しておく。遺物は出土していない。

SP-108（図 5）

DT-21・22 区に位置し，SC-4，SP-109 を切る。調査時には重複関係を誤認し，東半部を SC-4 の埋土部分として掘り下げてしまった。径 65cm前後の円形の掘り形をもち，Ⅳ層上面からの深さは 1 ～ 2cmと浅い。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が多く混じり，SC-4 や SP-109 と比べて全体に明るい土色を呈する。底面には小さな凹凸が数多くみられ，樹根の可能性を考える。

SP-109（図 5）

DT-21・22 区に位置し，SC-4 を切り，SP-108 に切られる。SP-108 と同じく，重複関係を誤認し，東半部の掘り形上部を SC-4 の埋土部分として掘り下げてしまった。掘り形は径 39 ～ 45cmの長円形で，Ⅳ層上面からの深さは 32cmを測る。埋土は暗褐色砂質シルトで，小指先大の浅黄色土の小塊が非常に多く混じり，人為的に埋め戻されているものと判断できる。出土遺物はない。

SP-116（図 190・191）

DT-23 区に位置する。径 22 ～ 24cm，深さ 22 ～ 23cmの円形の掘り形をもつ。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊が点々と混じる。掘り形埋土中から弥生土器の壺の口縁部破片が出土している（図 191-1）。口縁部を下方に折り曲げて下垂口縁とし，紐通しの小孔を焼成前に穿孔する。

SP-119（図 178・191）

DT-23 区に位置し，SK-547 を切る。長径 50cm，短径 46cmの円形の掘り形をもつ。深さは 11 ～ 12 cmを測る。掘り形埋土は極暗褐色シルト。土器片が掘り形上半部と底面近くから出土している。図 191-2･3 は底面近くから出土した弥生土器である。2 は，壺の可能性もあるが，内面を丁寧にミガキ調整することから鉢と考えた。外底面がわずかに窪む。3 は裾部が「ハ」字形にひろがる甕の脚台状の底部である。外面は二次的火熱を受けて赤変し，荒れが著しい。ともに弥生時代中期後葉～後期前葉に比定できる。

SP-120（図 190）

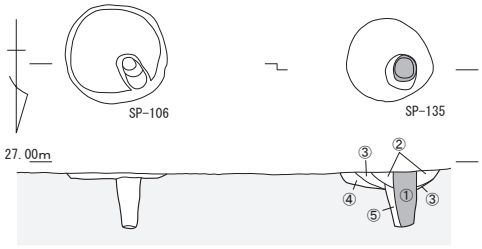
DS-22・23 区に位置する。長径 32cm，短径 25 cm，深さ 17cmの長円形の掘り形をもつ柱穴である。掘り形の中央南西寄りで径 12cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の先端はやや尖っている。しかし，周辺では，竪穴建物や掘立柱建物を構成する遺構はない。埋土は極暗褐色砂質シルトを主体とする。出土遺物はない。

SP-129（図 190・191，図版 25-8・26-1）

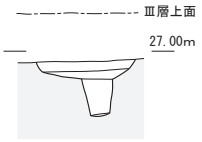
DS-24 区に位置する。径 74cm，深さ 21 ～ 23cmの円形の掘り形で，全体として擂り鉢状となっている。掘り形埋土は細礫～中礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質シルトである。

底面に貼り付いた状態や掘り形下半から弥生土器の破片が出土している（図 191-4 ～ 7）。4 は「く」字形に屈折する口縁部をもつ鉢である。口縁端面には浅い沈線が 1 条めぐる。内面には篦状工具によるナデ調整の痕跡が残る。5 は受け口状口縁の甕の破片。6 は壺の胴部破片である。外面にミガキ調整を施し，橙色の肌理の細かな粘土を化粧掛けする。内面には爪痕跡が並ぶが，意図的なものかは不明である。7 は壺の胴部破片である。撫で肩の球形の胴部から「ハ」字形に窄まる頸部がつくものと考えられる。外面にはミガキ調整，内面

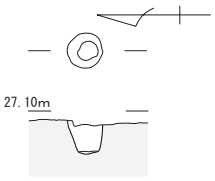
〔SP-106・135〕



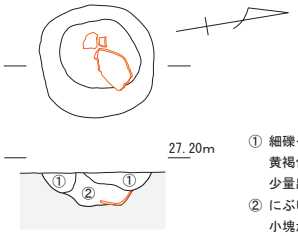
① 立柱痕跡．極暗褐色砂質シルト．小指先大のにぶい黄褐色砂質シルトが点々と混じる．炭化物片がごく少量出土．
② 砂礫が少量混じる極暗褐色砂質シルト．
③ 浅黄色の砂質土で，極暗褐色砂質シルトが少量混じる．
④ 暗褐色砂質シルトで，小指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が少量混じる．
⑤ 極暗褐色シルト．①と比べてやや粘性をおびる．



〔SP-116〕

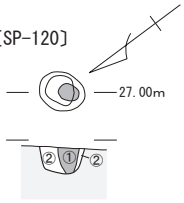


〔SP-129〕



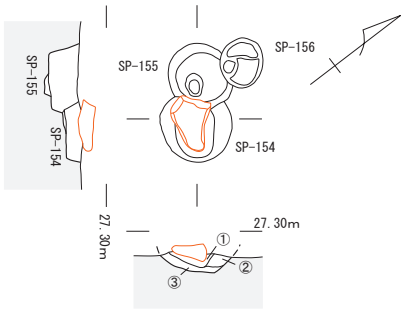
① 細礫～中礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質シルト．炭化物片が少量出土．
② にぶい黄褐色砂質シルトに①の小塊が多く混じる．

〔SP-120〕



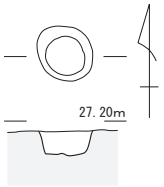
① 杭痕跡．極暗褐色砂質シルト．
② 極暗褐色砂質シルトで，小指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる．

〔SP-154・155〕

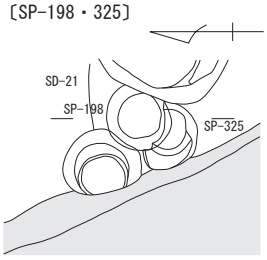


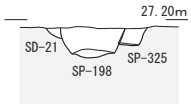
① 極暗褐色砂質シルト．
② ①に小豆大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる．
③ 極暗褐色砂質シルトに縞状に浅黄色砂質土が多く混じる．

〔SP-157〕

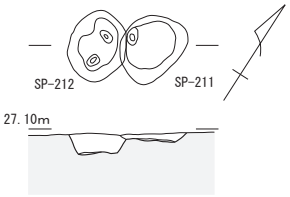


〔SP-198・325〕

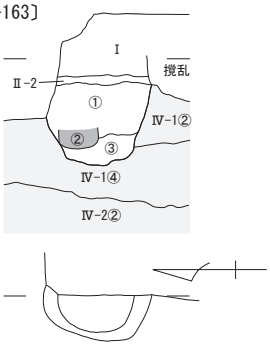




〔SP-211・212〕

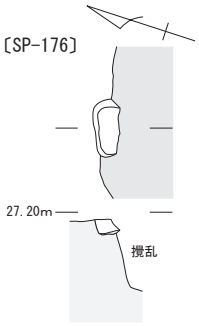


〔SP-163〕

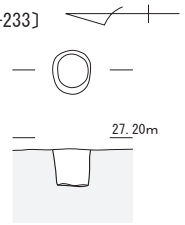


① 黒褐色砂質土．径 0.5 ～ 1 cmの褐色シルト塊が少量混じる．
② 立柱先端近く痕跡．①と比べて粘性をおびる黒褐色砂質土．．
③ 黒褐色砂質土と径 2 ～ 3 cmの褐色シルト塊が混じり合う。

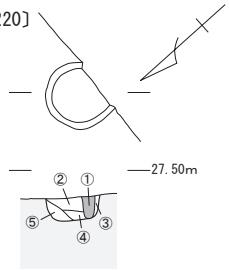
〔SP-176〕



〔SP-233〕

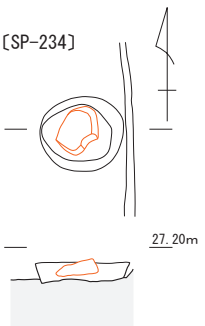


〔SP-220〕

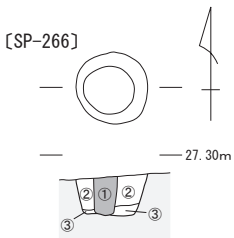


① 黒褐色粘質シルト。にぶい黄褐色シルトのレンズ状ブロックが少量まじる．炭化物片が少量出土．
②･③ 黒褐色粘質シルト．径 0.5 ～ 2 cmのにぶい黄褐色シルト塊が少量混じる．
④ 黒褐色粘質シルト．径 1 ～ 2 cmのにぶい黄褐色シルト塊が多く混じる．
⑤ 黒褐色粘質シルト。径 1 cmの褐色シルト塊が多く混じる．

〔SP-234〕

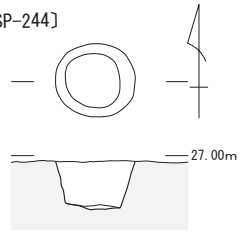


〔SP-266〕



① 立柱痕跡．暗褐色砂質シルトに，浅黄色や灰白色の砂質土が縞状に混じり，②と比べて全体に白っぽい土色．炭化物片が出土．
② 極暗褐色砂質シルトに，にぶい黄褐色や浅黄色の砂質土塊が帯状に混じる．
③ 浅黄色砂質シルト．親指先大の極暗褐色砂質シルト塊が点々と混じる．

〔SP-244〕



〔SP-235〕

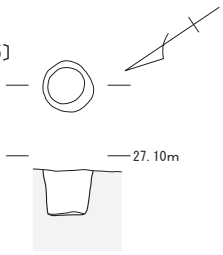


図 190　SP-106・116・120・129・135・154・155・157・163・176・198・211・212・220・233・234・235・244・266・325 遺構実測図（縮尺 1/50）

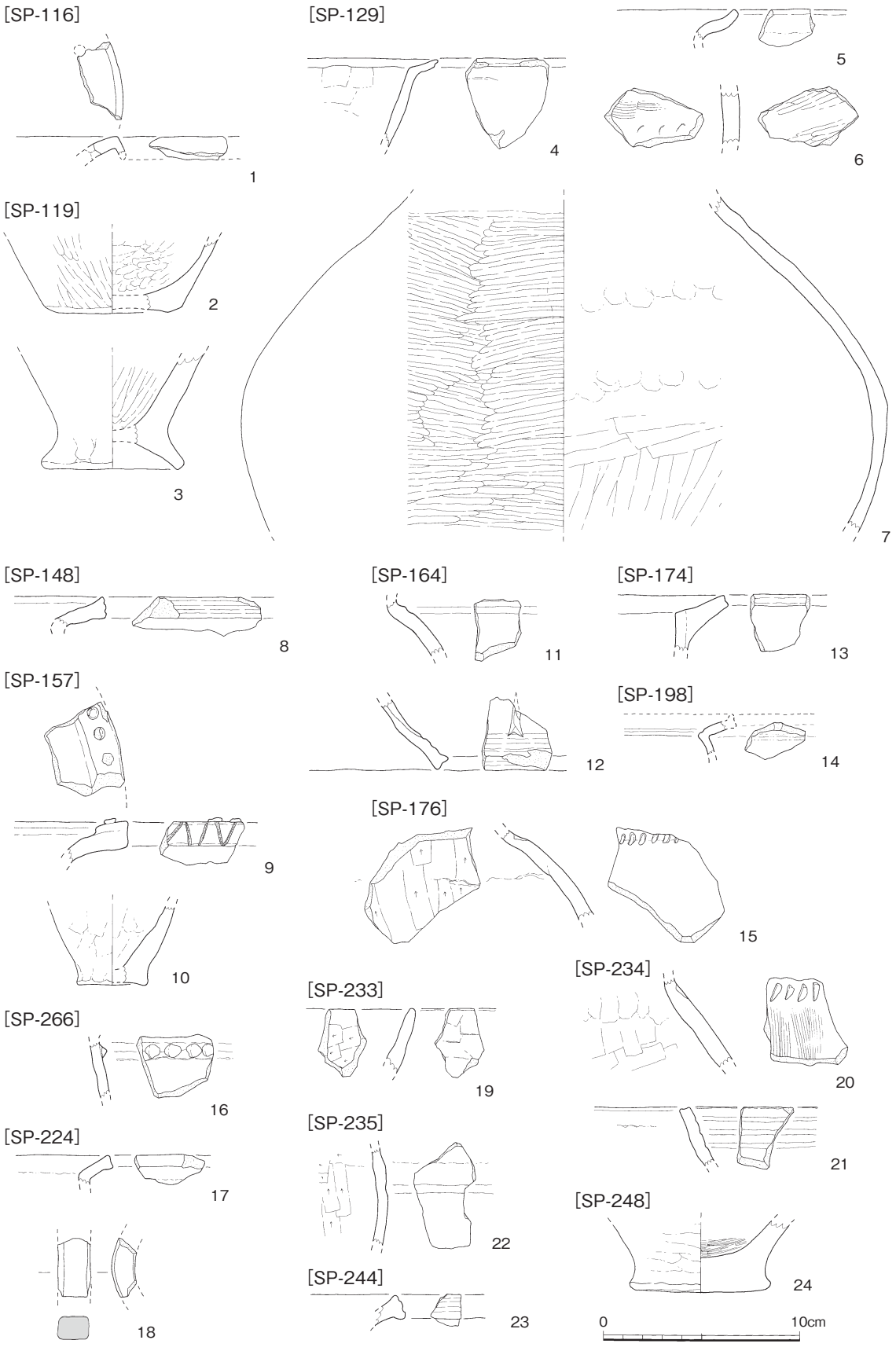


図 191　SP-116・119・129・148・157・164・174・176・198・224・233・234・235・244・248・266 出土土器実測図（縮尺 1/3）

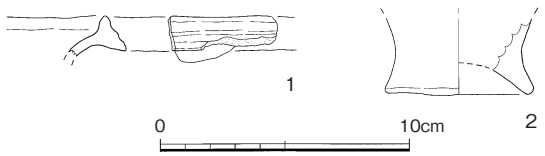


図 192　SP-135 上部Ⅲ層部分出土土器実測図
（縮尺 1/3）

下半部には篦状工具によるナデ調整を施す。胴部内面上半には指頭痕が帯状に残る。出土土器はいずれも弥生時代中期後葉～後期初頭の時間幅に収まる。

SP-130（図 144）

DS-24 区に位置し，SK-13 に切られる。径 57cm，深さ 19cmの円形の掘り形をもつ。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，径 5 ～ 10㎜のにぶい黄褐色シルト塊が全体に多く混じる。人為的に埋め戻されているものと判断でき，柱穴と考えた。径 5㎜ほどの炭化物片がごく少量出土しただけで，他に出土遺物はない。

SP-135（図 190・192，図版 132）

DT-21・22 区に位置する。径 67 ～ 70cmの円形に深さ 7 ～ 12cmほど掘り込み，底面の中央北西寄りは径 22cm，深さ 25cmの小穴状にさらに掘り込まれている。その掘り込み内で径 17cmの立柱痕跡を確認できた。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルト～暗褐色砂質シルトで，小指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が混じる。前述したように，SP-106 と掘立柱建物を構成する可能性が高い。

掘り形上部のⅢ層部分から弥生土器の破片が出土している（図 192-1・2）。1（図版 132-6）は壺の口縁部破片で，端部を上下に拡張して，幅広の波板状の凹線文を 2 条めぐらす。2 は甕の底部破片で，裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状につくる。ともに弥生時代中期後葉～初頭のものである。

SP-148（図 111・191，図版 132）

DU・DV-25 区に位置し，SD-20 を切る。長径 50cm，短径 41cm，深さ 16 ～ 18cmの長円形の掘り形をもつ。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊がごく少量混じる。掘り形埋土中から弥生土器の甕が出土している（図 191-8，図版 132-7）。「く」字形に屈折する口縁部で，端部を上方に拡張し，2 条の擬凹線文をめぐらす。

SP-151（図 108）

DV-25・26 区に位置し，SB-551 の柱穴である SP-152 を切る。径 32cmほど，深さ 13cmの不整円形の小穴で，掘り形埋土は暗褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。

SP-154（図 108・190・193，図版 26-2）

DV-25・26 区に位置し，SP-155 を切る。Ⅲ層下半部で花崗岩塊が出土し，Ⅳ層上面で掘り形の輪郭を確認することができた。花崗岩塊は礎石と考えられる。径 47cm前後の円形の掘り形をもつ。底面は北側に向かって緩やかに傾斜し，深さ 20 ～ 23cmを測る。掘り形のほぼ中央に据えられた花崗岩は扁平な亜円礫で，掘り形底面に縞状に浅黄色砂質土の薄層が混じる極暗褐色砂質シルトを詰め込み，小豆大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が混じる極暗褐色砂質シルトで花崗岩塊の傾きを調整して上面を平坦に埋置している。礎石に利用されている花崗岩塊は台石が転用されたものである（図 193）。一部に擦痕と敲打痕が確認できる。重量は 15kgを測る。

SP-155（図 190・194，図版 137）

DV-26 区に位置し，SP-154・155 に切られる。径 52cm前後の円形の掘り形をもつ。深さは 17cm前後であるが，底面南半部には径 11 × 17cm，深さ 2cmほどの円形の小穴状の窪みが残る。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じる。人為的に埋め戻されているものと判断でき，立柱痕跡は確認されていないが柱穴と考えた。掘り形埋土からサヌカイトの打製石鏃が出土している（図 194-1，図版 137-13）。平基式打製石鏃の調整剥離段階の未成品で，側辺の中央部分が膨らみを持つ。片面は主要剥離面を大きく残す。重量 1.9 g を測る。

SP-157（図 190・191，図版 133）

DV-26 区に位置する。長径 40cm，短径 35cm，深さ 15 ～ 16cmの長円形の掘り形をもつ柱穴である。底面には小さな凹凸がみられる。掘り形埋土

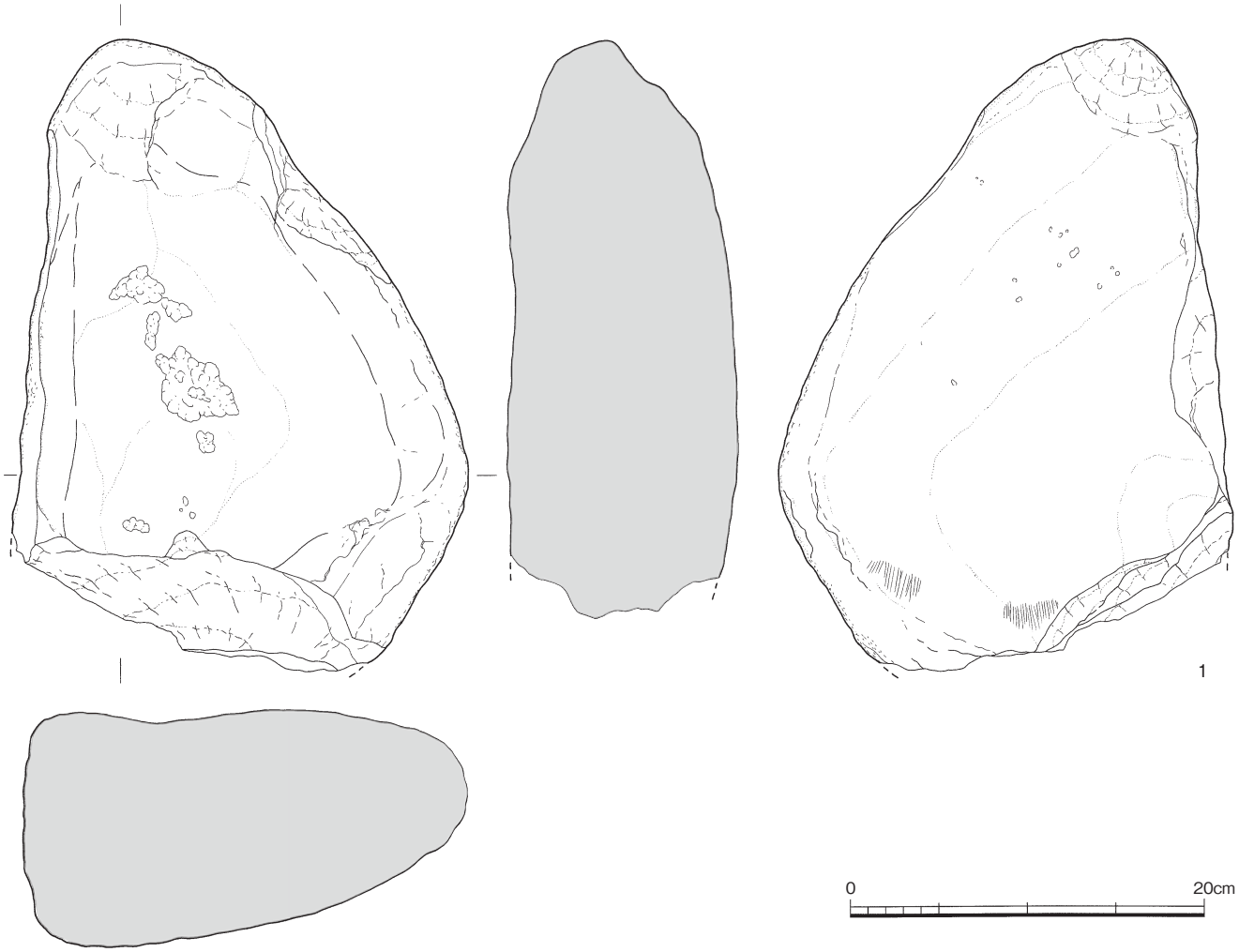


図 193　SP-154 出土石器実測図（縮尺 1/4）

は極暗褐色砂質シルトで，小指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じり，人為的に埋め戻されていると判断できる。掘り形上半から弥生土器や炭化物片が出土している（図 191-9・10）。9（図版 133-1）は壺の口縁部破片である。ラッパ形にひらく口縁部の先端に台形の粘土を貼り付けて肥厚させ，径 5㎜ほどの小さな円形浮文を貼り付ける。口縁端面には，刷毛目工具の木口部を押捺して山形文を施文する。胎土には角閃石の小片が混じる。10 は深鉢型の小型鉢で，胴部外面は篦状工具によるナデ調整を施す。成形時の指頭痕が多く残る。弥生時代後期初頭～前葉に比定できる。

SP-163（図 190）

DU-26 区に位置し，東半部は調査区外にのびる。長径 70cm前後の長円形の掘り形をもつ柱穴で，土層断面の観察時に掘り形中位で立柱痕跡を確認できた。掘り形下部を径 2 ～ 3cmの褐色シルト塊が混じる黒褐色砂質土で埋め，その上に柱を立て，周囲に径 0.5 ～ 1cmの褐色シルト塊が混じる黒褐色砂質土を詰め込む。掘り形埋土の上部からは弥生土器の小片が出土しているが，柱穴自体の時期は不明である。

SP-164（図 116・191）

DV-26 区に位置する。径 42cm前後の不整円形の掘り形をもつ柱穴で，掘り形の中央西寄りで径 20cmの立柱痕跡を確認できた。降雨のため，土層観観察用畦が崩れ，土層断面図を作成できなかった。深さ 14cmほど掘り込まれ，立柱痕跡の部分が小穴状に 13cmほど窪む。掘り形埋土（図 191-11）と立柱痕跡内（図 191-12）から弥生土

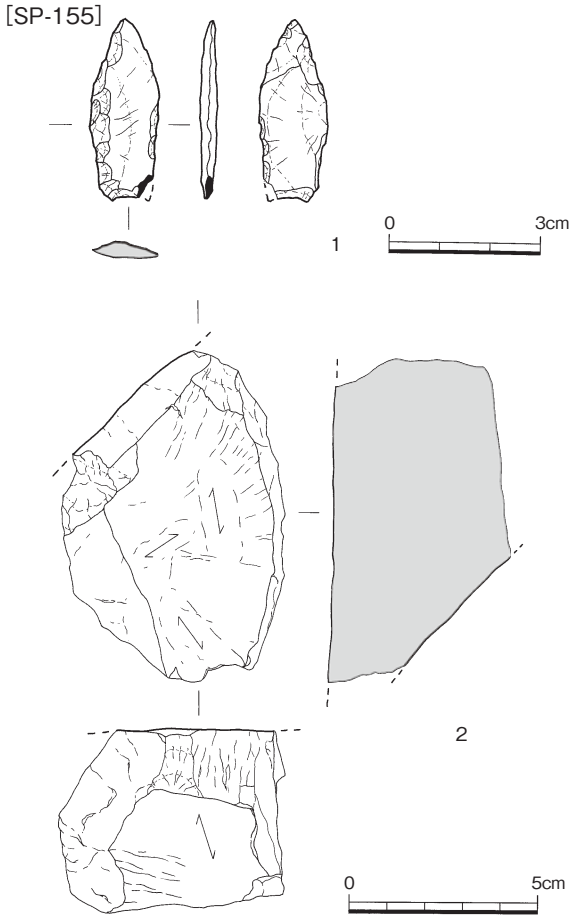


図 194　SP-155，212 出土石器実測図
（縮尺 2/3，1/2）

器の破片が出土している。11 は壺の肩部破片で，頸部の付け根に幅広の沈線をめぐらす。12 は高坏の脚裾部の破片で，3 条の凹線文と未貫通の矢羽根透かし孔を施す。

SP-166（図 116）

DV-26 区に位置し，SP-167 に切られる。長径 73cm，短径 62cmの長円形の掘り形をもち，底面には小さな凹凸があり，深さは 32cmを測る。掘り形下半には，暗褐色砂質シルトが薄い縞状にみられる浅黄色砂質土が流れ込んでいる。遺物は出土していない。

SP-167（図 116）

DV-26 区に位置し，SP-166 を切る。径 40 ～ 43cmの円形の掘り形をもつ。径 20cmの立柱痕跡を確認できた。掘り形底面に柱を据え，極暗褐色～暗褐色の砂質シルトを主体とする埋土②・③層で固定している。遺物は出土していない。

SP-169（図 116）

DV-26 区に位置する。長径 54cm，短径 45cmの不整長円形の掘り形をもつ。径 15 ～ 17cmの立柱痕跡を確認できた。底面は南半がわずかに窪む。深さ 18 ～ 20cm。掘り形上半の埋土は暗褐色砂質シルト，下半は浅黄色砂質土を主体とする。遺物は出土していない。

SP-174（図 110・191，図版 132）

DT-25 区の調査区壁沿いに位置する。径 24cm，深さ 7cmの円形の掘り形をもつ。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，極暗褐色砂質シルト塊が多く混じり，人為的に埋め戻されていると判断した。掘り形埋土中から，山ノ口式系土器の口縁部破片が出土（図 191-13，図版 132-9）。内傾する細長い台形の口縁部をもつ。

SP-176（図 190・191）

DV-26 区に位置し，南半部を塹壕で破壊されている。幅 40 ～ 45cmほどの隅丸方形の掘り形をもつと考えられる。深さは 7cm。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じり，人為的に埋め戻されていると判断でき，柱穴と考える。掘り形上半部から弥生土器が出土している（図 191-15）。壺の肩部の破片で，頸部の付け根に下方から細い棒状工具を刺突して列点文を施文する。弥生時代後期初頭～中葉の時間幅に収まる。

SP-180（図 116）

DW-26 区に位置する。径 30 ～ 32cm，深さ 8 ～ 9cmの円形の掘り形をもつ柱穴である。径 14cmの立柱痕跡を確認できた。底面に柱を立て，北側から極暗褐色やにぶい黄褐色の砂質シルトを流し込んで固定する。遺物は出土していない。

SP-181（図 116）

DW-26 区に位置する。長径 40cm，短径 36cm，深さ 6 ～ 8cmの長円形の掘り形をもつ。掘り形内には極暗褐色砂質シルトを主体とする土層が流れ

込む。出土遺物はない。

SP-198（図 190・191）

DW・DX-26 区に位置し，SP-325 を切り，SK-27 に切られる。径 45cm，深さ 20cmの擂り鉢状の円形の小穴である。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，親指～小指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が少量混じる。掘り形埋土から弥生土器の破片が出土している（図 191-14）。「く」字形に屈折させる甕の口縁部破片で，口縁端部を摘み上げるものと考えられる。口縁内面の屈折部近くには沈線を 1 条めぐらす。弥生時代中期後葉に比定できる。

SP-200（図 23）

DW-26 区に位置し，SC-26 の床面で出土した。径 35 ～ 36cm，床面からの深さ 21cmを測る円形の掘り形をもつ柱穴で，掘り形中央の南西寄りで，径 14 ～ 16cmの立柱痕跡を確認した。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色砂質シルトの塊が混じる。立柱痕跡の先端はやや丸く，柱穴底面のⅣ層に打ち込まれている。内外面を刷毛目調整する壺の胴部破片，外面を刷毛目調整した上でナデ仕上げし内面にケズリ調整を施す甕の胴部破片が出土している。

SP-201（図 23）

DW-26 区に位置し，SC-26 を切る。西端を塹壕で破壊される。推定長径 40 ～ 45cm，短径 33cm，検出面からの深さ 17cmの楕円形の掘り形をもつ小穴である。底面には凸凹があり，比較的しっかりした掘り形である。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，下部には小豆～親指先大の拉げた黄褐色砂質土の小塊が多く混じり，人為的に埋め戻されているものと考える。内外面を刷毛目調整した甕の胴部破片などが出土している。胴部の小片で図化していないが，弥生中期後葉～後期前葉の時間幅に収まる。

SP-203（図 149）

DU-24 区に位置し，SK-19 を切る。径 25 ～ 28cm，深さ 10cmの円形の掘り形をもつ。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，わずかに浅黄色砂質土が混じる。出土遺物はない。

SP-211（図 190）

DU-23 区に位置し，SP-212 を切る。長径 48cm，短径 38cm，深さ 6cmほどの浅い皿状の不整円形の掘り形をもつ。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，少量の浅黄色砂質土が混じる。土器の小片が出土している。

SP-212（図 190・194，図版 140）

DU-23 区に位置し，SP-211 に切られる。長径 43cm，短径 40cm，深さ 13cm前後の不整長円形の掘り形をもつ。SP-211 と比べて，かなりしっかりした掘り形をもつ。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトで，硬質頁岩の砥石の破片が出土した（図 194-2，図版 140-2）。二面を使用し，1 単位 1cm 程度の幅の擦痕を観察できる。残存重量 344.2 g を測る。

SP-220（図 190）

DT-20 区の調査区南壁沿いで出土した。南端は調査区外にのびる。径 44cm，深さ 15cmの円形の掘り形をもち，平面では確認できなかったが，土層断面を確認する際に先端が尖る杭痕跡を検出した。掘り形埋土は黒褐色粘質シルトを主体とする。遺物は出土していない。

SP-224（図 46・191）

DW-24 区に位置し，SC-37 を切る。長径 32cm，短径 26cm，検出面からの深さ 13cmを測る長円形の皿状の掘り形をもつ。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色シルトの小塊が多く混じり，人為的に埋め戻されているものと考える。弥生土器の破片が出土している（図 191-17・18）。17 は短く外反する甕の口縁部破片，18 は横断面形が長方形の環状把手の破片である。弥生時代後期初頭～前葉に比定できる。

SP-233（図 190・191）

DX-26 区に位置する。長径 29cm，短径 25cm，深さ 24cmの長円形の掘り形をもつ。掘り形埋土は極暗褐色砂質シルトである。弥生土器が出土している（図 191-19）。深鉢型の厚手のつくりの鉢で，

口縁端部に横ナデ調整，胴部外面に篦状工具による強いナデ調整，内面にケズリ調整を施す。

SP-234（図 16・190・191）

DV-24 区に位置する。Ⅲ層下部で花崗岩塊が出土し始め，周辺を精査した結果，径 55cmほどの円形の掘り形の輪郭を確認できた。SC-25 を切る。掘り形の輪郭を確認できたⅢ層下部からの深さは 30cm前後。掘り形埋土は SC-25 と比較して黒みが強い黒褐色シルトで，わずかに粘性をおびる。掘り形内におかれていた花崗岩塊は，長さ 32cm，幅 25cm，厚さ 8cmの扁平な亜円礫で，台石を転用している（図 21-4）。やや傾斜して埋置されているが，SP-154 と同じく礎石と考える。掘り形埋土中から弥生土器の破片が出土している（図 191-20・21）。20 は壺の肩部の破片で，頸部の付け根に右側から篦状工具で削ぎ取るようにして短斜線文を施文する。21 は脚台付きの鉢の口縁部と考えた。外面に浅い幅広の沈線を 3 条めぐらす。ともに弥生時代後期初頭～前葉に比定できる。

SP-235（図 190・191）

DW-22 区に位置する。径 23cm前後，深さ 29cmの円形の小穴である。掘り形の上半部から弥生土器の甕の破片が出土している（図 191-22）。胴部の破片で，幅 5㎜ほどの浅い沈線が 1 条施されている。

SP-236（図 119）

DW-22 区に位置する。径 27 ～ 28cm，深さ 22cmの円形の掘り形をもつ柱穴である。掘り形内で径 15cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡は西に若干傾き，先端は尖りぎみである。掘り形埋土は極暗褐色の砂質シルト～砂質土である。遺物は出土していない。

SP-244（図 190・191）

DY-22・23 区に位置する。径 48 ～ 52cmの不整円形の掘り形をもつ。深さは 27 ～ 32cmを測る。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が多く混じる。壺の口縁部破片が出土している（図 191-23）。ラッパ形にひらく口縁部で，端面を横ナデ調整で拡張して 2 条の幅広の沈線様の凹線文をめぐらす。外面には煤が付着する。弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。

SP-248（図 158・191）

DX-23 区に位置し，SK-59 を切る。径 45 ～ 47cmの円形の掘り形で，深さ 2 ～ 3cmの浅い皿状の窪みである。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，黄色砂質土が少量混じる。掘り形上部のⅢ層下部から弥生土器の破片が出土している（図 191-24）。厚底の甕の底部破片で，外底面が膨らみ不安定な平底となっている。弥生時代後期前葉～中葉に比定できる。

SP-266（図 190・191）

DW・DX-26・27 区に位置する。径 46 ～ 48cm，深さ 20 ～ 22cmの円形の掘り形をもつ柱穴である。径 15cmほどの立柱痕跡を確認できたが，位置を記録しておらず，平面には立柱痕跡の位置は表記していない。底面に極暗褐色砂質シルト塊が点々と混じる浅黄色砂質シルトを敷き，その上に柱を立て，にぶい黄褐色や浅黄色の砂質シルト塊が混じる極暗褐色砂質シルトで一気に埋めて固定している。掘り形埋土中から，弥生土器の甕の破片が出土している（図 191-16）。胴部上半の破片で，口縁屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付け，爪先で刻目を施す。

SP-270（図 70・71，図版 26-4・68）

DX-26・27 区のⅣ層上面で検出した。SC-78 を切る。長軸長 53cm，短軸長 43cm，深さ 20 ～ 36cmの隅丸長方形の掘り形をもつ柱穴である。底面は東に向かって急激に深くなる。掘り形中位で径 20cmの立柱痕跡を確認できた。立柱の先端は尖りぎみで，極暗褐色砂質土が詰まる。掘り形埋土は極暗褐色砂質土で，浅黄色砂質土が薄い縞状にみられる。埋土上部は南側から流入した細礫混じりの極暗褐色砂質土で，浅黄色砂質土の小塊が点々と混じる。弥生土器の小片と炭化物が出土している（図 71-10・11）。10 は立柱痕内から出土した壺の口縁端部の破片である。ラッパ形に外反する壺の口縁端部で，強い横ナデ調整で端面を面取りする。11（図版 68-4）は断面三角形突帯が貼り付けられた甕の胴部破片。褐色を呈する山ノ口式系

土器で，胎土には金雲母やクサリ礫が混じる。

SP-272（図 116・196）

DY-26 区に位置し，SP-273 を切る。径 38 ～ 40cm，深さ 21cmの円形の掘り形をもつ柱穴である。掘り形北半部の中位で径 20cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の先端は尖りぎみで，Ⅳ層に打ち込まれ，先端部分を残して折り取られていると考えられる。掘り形埋土は極暗褐色の砂質シルトや砂質土を主体とする。掘り形埋土中から「ハ」字形にひろがる高坏の脚部破片が出土している（図 196-1）。脚端部を横ナデ調整で面取りする。

SP-273（図 116・196，図版 132）

DY-26 区に位置し，SP-272 に切られている。長径 58cm，短径 50 ～ 55cm，深さ 38cmの不整長円形の掘り形をもつ。掘り形内には極暗褐色砂質シルトを主体とする土層が北側から流れ込む。弥生土器の壺（図 196-2,）と，刻目凸帯文土器の深鉢の破片（図 196-3）が出土している。2（図版 132-8）は肩部の破片で，4 条一単位の細い沈線帯を間隔をおいて施文し，上部の沈線帯の下端に竹管文を押捺し，沈線帯の間と下方に短斜線文をめぐらす。3 は口縁端と断面三角形突帯に浅く小さな刻目を施す。

SP-278（図 64）

DY-26 区の SC-69 の床面で出土したが，土層断面で SC-69 を切っていることを確認できた。北端を塹壕で破壊されているが，径 57cm，Ⅳ層上面からの深さ 55cmの円形の掘り形をもつ柱穴である。径 20cmほどの立柱痕跡を確認できた。柱はにぶい黄褐色砂質土や灰色みをおびるにぶい黄褐色砂質土（③・④層）で埋められているが，抜き取られた後に，褐色土の小塊が少量混じる暗褐色砂質土（①層）が流れ込む。SP-278 では立柱痕跡を確認できたが，周囲で掘立柱建物などを構成する他の柱穴は確認できなかった。遺物は出土していない。

SP-281（図 116，図版 26-5）

DX・DY-26 区に位置する。径 47 ～ 49cm，深さ 23cmの円形の掘り形をもつ。掘り形中位で立柱の先端部分だけが残された痕跡を確認できた。立柱痕跡の径は 25cm前後。底面に小豆大～親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が混じる極暗褐色砂質シルトを敷いて柱を打ち込んでいる。出土遺物はない。

SP-319（図 26）

DV-23 区の SC-32 北東部の周壁沿いに位置する。SC-32 の床面で検出した。長径 35cm，短径 31cm，SC-32 の床面からの深さ 8cmの不整長円形の掘り形をもつ柱穴である。掘り形の中央やや南西寄りで，径 12cmの先端が丸い立柱痕跡を確認できた。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，小指先大のにぶい黄褐色砂質土の小塊が多く混じる。

SP-325（図 190・196）

DW・DX-26 区に位置する。SP-198 に切られる。長径 46cm，推定短径 35cm前後，深さ 10 ～ 11cmの長円形の掘り形をもつ。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。甕の底部破片が出土している（図 196-5）。裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の底部で，側面には成形時の指頭痕が残る。胴部外面には箆状工具によるナデ調整を施す。

SP-328（図 112）

DY-26 区に位置する。長径 33cm，短径 26 ～ 27cm，深さ 14cmの長円形の掘り形をもつ柱穴である。掘り形は深さ 14cmほどの擂り鉢状で，ほぼ中央で径 13cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の先端は尖りぎみで，Ⅳ層に打ち込まれ，周囲を暗褐色砂質土を主体とする埋土で固定している。

SP-343（図 195・196，図版 133）

西半部を塹壕で破壊されているが，長径 52cm，推定短径 45 ～ 50cmほどの掘り形をもつと考えられる。掘り形の輪郭を確認できたⅣ層上面から一旦 9 ～ 10cm掘り込み，底面中央に径 22 ～ 24cmの円形の小穴状に深さ 16 ～ 17cmほどの窪みを掘っている。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土が少量混じる。

掘り形埋土から，弥生土器の小片が少量出土している（図 196-4，図版 133-4）。ラッパ形に大き

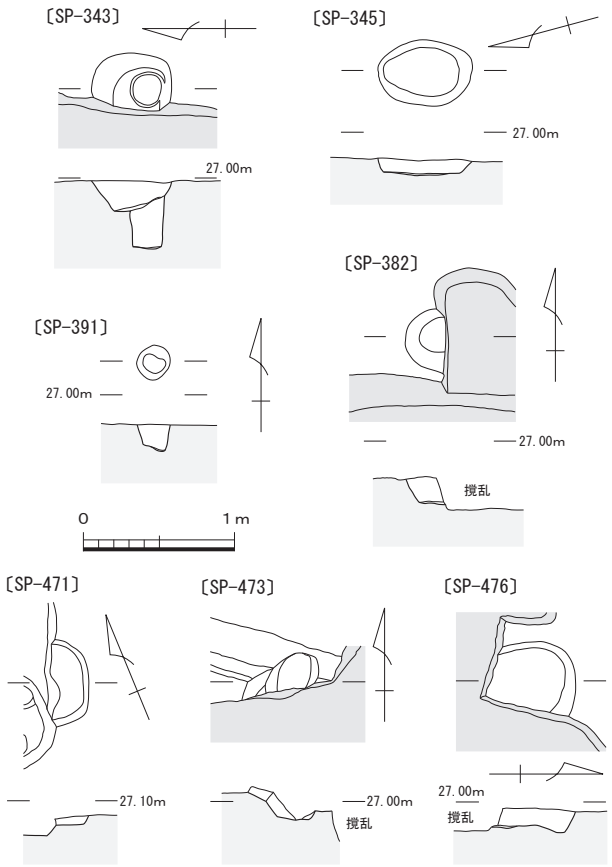


図 195　SP-328・343・345・382・391・471・473・476 遺構実測図（縮尺 1/50）

くひろがる器台の受け部の破片である。口縁部上縁に粘土を貼り付け，端面を拡張して 1 条ずつ沈線様の凹線文を計 4 条施文する。受け部上端面にも沈線様の凹線文をめぐらす。頸部内面には刷毛目調整と考えられる条線間の幅が広い調整痕跡が残る。

SP-345（図 195・196，図版 133）

DY-20 区に位置する。長径 62cm，短径 43cm，深さ 11cmの不整長円形の掘り形をもつ。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，下部には浅黄色砂質シルトの小塊が非常に多く混じり，人為的に埋め戻されているものと判断でき，柱穴と考えた。掘り形埋土中から縄文時代晩期の方形浅鉢が出土している（図 196-6，図版 133-2）。口縁部が一旦反転してひろがる波状口縁である。口縁部内面には幅広の沈線が 1 条めぐる。胴部外面にはケズリ調整，内面には擦過調整を施す。

SP-355（図 79）

DZ-22 区に位置する。SC-97・506 を切る。長径 60cm，短径 50cm，検出面のⅣ層上面からの深さ 33cmを測る長円形の掘り形をもつ。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，径 1 ～ 2cmの褐色シルト塊が少量混じる。遺物は出土していない。

SP-356（図 120・196）

DZ-24 区に位置する。長径 24cm，短径 19cmの不整な長円形の掘り形をもち，深さ 12cm前後の擂り鉢状の小穴である。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，多くの浅黄色砂質土が混じる。弥生土器の破片が出土している（図 196-7・8）。7 は口縁部が内彎する受け口状口縁の甕である。8 は 2 条の断面三角形突帯をめぐらす。暗赤褐色を呈することから，山ノ口式系土器と考える。器体の傾きは小片のため不確実である。外面には煤が付着する。

SP-363（図 112）

DY-27 区に位置する。南西端を塹壕で破壊されている。径 60 ～ 62cmの円形で擂り鉢状の掘り形をもつ柱穴である。深さ 32cm。掘り形のほぼ中央で径 14 × 20cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の先端は片側が尖り，基盤のⅣ層に打ち込み，周囲に細礫が多く混じる暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトを交互に詰め込んで固定している。遺物は出土していない。

SP-365（図 112）

DY-27 区に位置する。径 43 ～ 46cmの円形の掘り形をもつ柱穴である。径 15 × 18cmの立柱痕跡を確認できた。底面は西半部が緩やかに窪み，その窪みの上に柱を立て，暗褐色砂質シルトを主体とする埋土で固定している。遺物は出土していない。

SP-368（図 112・196）

DY-27・28 区に位置する。長径 45cm，短径 43cmの長円形の掘り方をもつ柱穴である。底面は中央が窪み，深さ 11 ～ 18cmを測る。掘り形の北半部で径 15 ～ 16cmの立柱痕跡を確認できた。掘り形南側から浅黄色砂質土と暗褐色砂質土を流し込

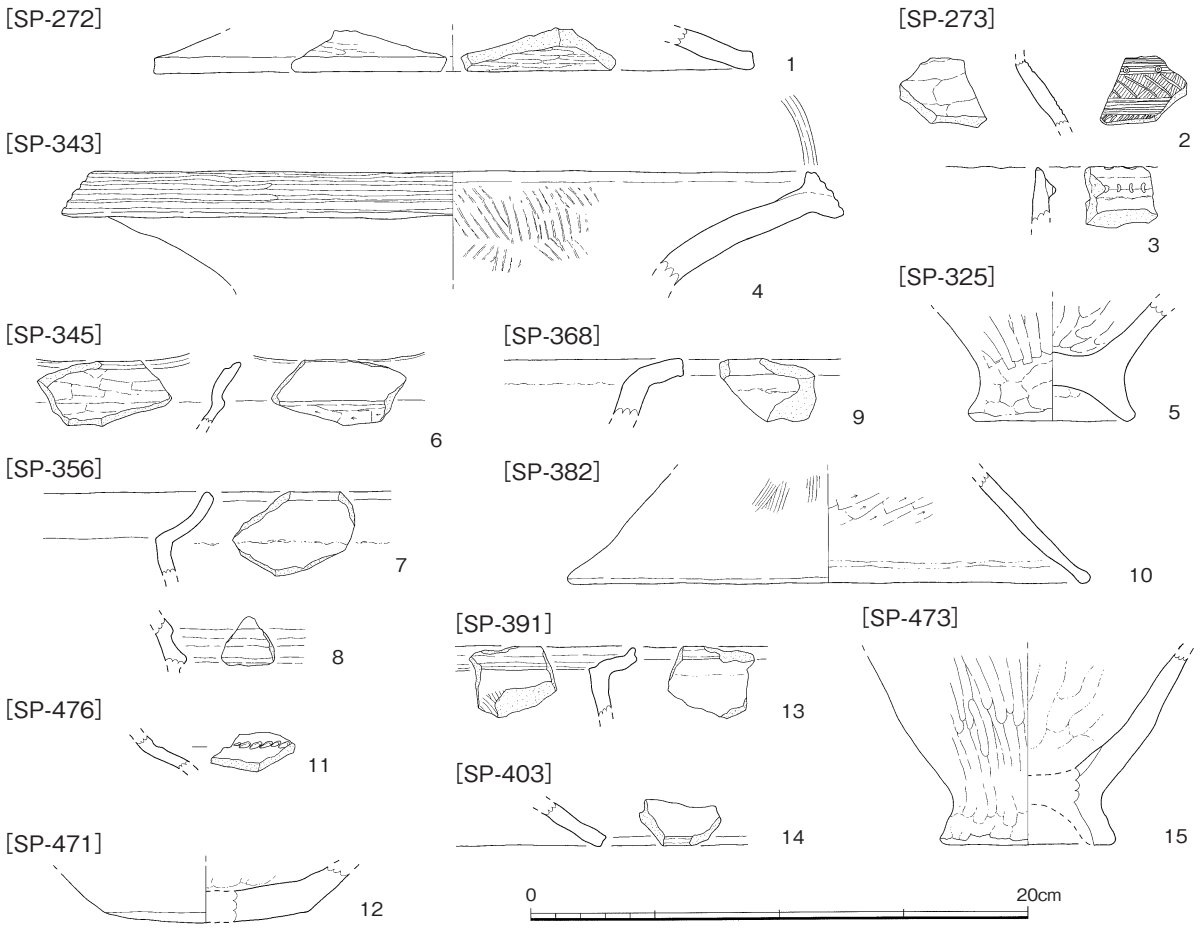


図 196　SP-272・273・305・343・345・356・368・382・391・403・471・473・476 出土土器実測図（縮尺 1/3）

み，その上に柱を立て，北側から土を入れて固定する。掘り形埋土中から弥生土器が出土している（図 196-9）。厚手のつくりの鉢で，口縁部を緩やかに折り曲げる。屈曲部には折り曲げに際して粘土の撚れが生じている。

SP-369（図 112）

DY-27 区に位置し，SP-475 を切る。長径 52cm，短径 49cmの円形の掘り形をもつ。底面は北側が一段高くテラス状となる。深さは 22 ～ 24cmを測る。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトを主体とする。

SP-373（図 66）

DZ-27 区の SC-71 の床面で検出した。東端を埋設管路の掘り形で破壊されているが，径 65 ～ 70 cm，深さ 32 ～ 33cmの円形の掘り形をもつと考えられる。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，径 2 cm前後のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じり，人為的に埋め戻されたものと判断できる。

SP-377（図 112）

DY・DZ-27 区に位置し，SC-71 に切られる。径 56 ～ 58cm，深さ 42cmほどの不整円形の掘り形をもつ。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，下部には径 1 ～ 4cmの浅黄色やにぶい黄褐色の砂質シルト塊，上部には径 3 ～ 4cmの浅黄色砂質シルト塊が多く混じる。規模や埋土の特徴は，立柱痕跡を確認できた柱穴と共通するが，立柱痕跡は確認できなかった。埋土上部の①層に，Ⅳ層起源の浅黄色砂質土塊が多く混じることから，柱が抜き取られ，埋め戻されたものと考える。

SP-382（図 195・196）

DZ-29 区に位置し，南半部を攪乱で破壊されて

いる。推定径 40 ～ 43cm，深さ 15cmほどの不整円形の擂り鉢状の掘り形をもつ。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，小指～親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じり，人為的に埋め戻されているものと考える。掘り形埋土中から弥生土器の高坏が出土している（図 196-10）。「ハ」字形にひろがる脚部破片で，脚端部は横ナデ調整で丸く収められている。外面には刷毛目調整を施すが，器表面の荒れが著しく部分的にしか残っていない。内面にはケズリ調整を施す。

SP-391（図 195・196）

DY-30 区に位置する。径 21 ～ 23cmの円形の掘り形をもつ。底面は東に向かって窪み，深さ 13 ～ 17cmを測る。掘り形埋土は砂礫が多く混じる暗褐色砂質シルトである。弥生土器の甕の破片が出土している（図 196-13）。口縁部を「く」字形に屈折させ，口縁端部を横ナデ調整で摘み上げる。口縁内面の屈折部近くには沈線を 1 条めぐらす。弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。

SP-400（図 116）

DY-31 区に位置し，SP-388 を切る。径 38 ～ 40cm，検出面であるⅣ層上面からの深さ 36cmの掘り形をもつ柱穴である。掘り形中央東よりで，9.5 × 12cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡は北東側に傾いている。遺物は出土していない。

SP-403（図 4・196）

DT-20 区の調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認した。SK-409 に切られる。断面での掘り形径は 40cm前後を測る。Ⅲ層中位から掘り込まれて，深さ 35cmである。掘り形埋土から弥生土器の破片が出土している（図 196-14）。「ハ」字形にひろがる高坏の脚端部の破片である。

SP-412（図 116）

DY-28 区の SC-517 南西側に位置し，SC-517 を切る。長径 57cm，短径 48cm，検出面のⅣ層上面からの深さ 30cmを測る長円形の掘り形をもつ柱穴である。掘り形の北半部で，径 17 ～ 19cmの立柱痕跡を確認できた。掘り形底面に厚さ 10cmほど褐色砂質シルト（③層）を敷き，その上に柱を立て，周囲を細礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土（②層）で固めている。遺物は出土していない。

SP-422（図 90・93，図版 79）

DY-28 区の SC-517 の床面で検出した。SP-423 を切る。西半部を塹壕で破壊されているが，径 60cmほどの円形の掘り形と考えられる。深さは 12cm。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトである。掘り形埋土から弥生土器の甕の肩部破片が出土している（図 93-13，図版 79-3）。「く」字形に屈折する口縁部がつくと考える。口縁屈折部は横ナデ調整。胴部外面にミガキ調整，内面には刷毛目調整の後に横ナデ仕上げを施す。弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。

SP-428（図 77）

DZ-21 区の SC-92 の床面で出土した。長径 45cm，短径 37cm，床面からの深さ 11cmほどの緩やかに窪む長形の掘り形をもつ。掘り形内には薄いレンズ状や塊状の浅黄色砂質土が混じる暗褐色砂質土が流れ込む。遺物は出土していない。

SP-445（図 32・33・41，図版 60）

DV-22 区の SC-33 の床面で検出した。短軸長さ 37cm，長軸長 60cm，床面からの深さ 11cmを測る不整楕円形の掘り形をもつ。底面は凹凸にとむ。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，径 5cm の黄灰色シルトの小塊が混じる。弥生時代後期初頭～後期前葉に比定できる脚台状の甕の底部破片（図 41-14，図版 60-3）や胴部小片が 10 点ほど出土している。

SP-446（図 32・33）

DV-22 区の SC-33 の床面で検出した。径 36cm，床面からの深さ 35cmを測る円形の掘り形をもつ。SC-33 の柱穴である SP-447 に切られる。掘り形埋土は暗オリーブ褐色砂質シルトや極暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色砂質シルトの小塊が混じる。掘り形埋土中から弥生土器の甕の胴部破片を含む 5 点が出土している。

SP-453（図 111）

DX-25 区に位置し，北半部を攪乱で破壊されて

いる。一辺 55cmほどの隅丸方形の掘り形をもつと考えられる柱穴である。掘り形の下部まで掘り下げた時点で径 16 × 17cmの立柱の先端部の痕跡を確認できた。掘り形底面南半部に深さ 10cmほどの小穴を掘り，その中に柱を埋置している。柱は先端部を残して折り取られ，その後に暗茶褐色砂質シルトを主体とする土層が流入する。遺物は出土していない。

SP-468（図 58・94）

DW-24 区の SC-536 南西隅の床面で検出した。北半部を塹壕で破壊されている。推定長径 50cm，短径 38cmの長円形の小穴。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトに，にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。掘り形埋土中から，縄文時代晩期の浅鉢の口縁部破片が出土している（図 94-8）。緩やかに内彎しながらのびる口縁部の内面に幅広の凹線文状の沈線がめぐる。

SP-471（図 195・196）

DV-24 区に位置し，西半部を SC-25 に切られている。長辺 57cm前後の隅丸方形の掘り形と考えられる。深さは 6 ～ 7cm。掘り形埋土は暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色砂質シルトが不整形の大きな塊で多く混じり，人為的に埋め戻されているものと判断した。弥生土器の破片が出土している（図 196-12）。凸レンズ状の底部破片である。

SP-473（図 195・196，図版 133）

DV-24 区に位置し，北端部を SD-10 に切られ，南半部は塹壕で破壊されている。推定長径 60cm前後，短径 42cmの長円形の掘り形をもつと考えられる。深さは 15 ～ 19cm。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，径 2 ～ 3mmの褐色シルト塊が少量混じる。上部には極粗砂～細礫が多く混じる。掘り形埋土から弥生土器の甕の破片が出土している（図 196-15，図版 133-3）。裾部が「ハ」字形にひろがる脚台状の底部で，粘土接合の方法を観察できる。外面には幅 5 ～ 6mmの先端の丸い工具による強いナデ調整を施す。外面には薄く煤が付着する。焼成不良品で，器体が小さな粘土塊となって崩れる。

SP-476（図 195・196）

DY-27・28 区に位置する。東半部と南端部を攪乱で破壊されている。推定径 80cm，短径 70cmの長円形の掘り形をもつと考えられる。底面は北半部がわずかに窪み，深さは 11 ～ 15cmを測る。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，径 1 ～ 2cmのにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じる。弥生土器の壺が出土している（図 196-11）。肩部の破片で，頸部の付け根に，細い棒状工具を斜め上方に向かって刺突して密に列点文を施文する。

SP-480（図 32・41）

DV-22 区の SC-33 の床面で検出したが，SC-33 の周溝に切られている。径 50cmほど，床面からの深さ 7cmほどの浅皿状の不整円形の掘り形をもつ。掘り形埋土は暗褐色砂質土で，径 1cmほどのにぶい黄褐色砂質土の小塊が少量混じる。薄手のつくりで胎土の肌理も細かい平底の壺の破片（図 41-16）に加えて，弥生土器の胴部小片 5 点，径 1 cmほどの炭化物の破片が出土している。

SP-485（図 166）

DY-21 区に位置し，SD-36 と SK-94 に大半を破壊されているが，長径 52cm，短径 40cm，深さ 7 cmほどの不整な長円形の掘り形をもつと考えられる。遺物は出土していない。

8　Ⅲ層出土遺物

遺構の掘り形上部のⅢ層部分から出土した遺物については，それぞれの遺構で報告した。遺構上部以外の地点においても多くの遺物が出土している。その大半は弥生土器が占め，他に縄文土器，古墳時代の須恵器，中世の土師器･磁器，土製品，石器・石製品，鉄器・鉄滓がある。以下，代表的な遺物を報告する（図 197 ～ 207，図版 134 ～ 138・140・141・144・145・147・148）。

（1）弥生土器・須恵器・土師器

図 197，図 198-1 ～ 5，図 199 は弥生土器で，弥生時代中期中葉～後期の時間幅に収まるが，中期後葉～後期前葉の土器が多い。図 197-1 ～ 11 は壺である。1・3 はラッパ形にひらく口縁部をもち，口縁端部を垂下させる。1 は大型品で口縁端面に山形文が施文される。3 には頸部に低い断面三角形の突帯が 1 条めぐる。2 は撫で肩から円筒形の頸部が立ち上がり，口縁部で短く外反する。4 ～ 6 は複合口縁壺である。4 は口縁部の立ち上がりが短く，4 条の櫛描波状文が施文される。5 は頸部に短斜線文を施す。6 は大型品で口縁部に 12 条の沈線，その直下に複合山形文を施文する。口縁端部と口縁接合部には沈線が 2 条ずつめぐる。7 ～ 8 は肩～胴部の破片である。7 は肩部の張りが強く，頸部と肩部の境に篦状工具を強くナデ付けるため明瞭な段が形成される。8 ～ 11 は胴部の破片である。8・9・11 はいずれも櫛描波状文が施される。櫛描波状文に加え，8 は羽状文，11 は直線文も組み合わされる。10（図版 134-1）は篦状工具で木葉文に類似する記号文が描かれている。いずれも小片のため，器体の傾きは不確実である。

12 ～ 15 は高坏である。12 は埦型の坏部をもち，口縁端部が内側に折り曲げられる。外面には凹線文 4 条を 1 本ずつ施文する。14 は口縁部の立ち上がりがやや内彎ぎみで短く，外面に波板状の凹線文が 3 条めぐる。15 の口縁部は坏部から直線的に立ち上がる。脚柱部の付け根には細い沈線がめぐる。13 はやや低脚で坏部が深く，接合部には粘土塊を充填する。脚部には三角形の透かしが五方向に施される。16（図版 134-3）は口縁部の長さや，胴部の張り具合から脚台付きの大型鉢と考えた。口縁部は緩やかに内彎しながら立ち上がり，外面には凹線文 5 条と刺突列点文が施文される。刺突列点文は細かく密である。

17 及び図 198-1・2・5 は器台である。17（図版 134-5）は口縁端部を上下に大きく拡張し，幅広の沈線 6 条と刺突列点文を施す。図 198-1（図版 134-4）は，大型の器台の受け部の破片で，口縁部は直線的に大きくひらく。上下に拡張した口縁端部には，7 条の沈線をめぐらせた後に，直径 2cm の円形浮文を貼り付け，直径 8㎜の竹管文を押捺する。口縁端部に赤彩の痕跡が残る。2 は円形透かし孔をあけた器台と考えるが，器体の傾きは不明である。外面に赤彩がごくわずかに残る。5 は体部が円筒形で平坦な天井面をもち，端部は外方に張り出す。台形土器に近い器形を推定できる。3 は手捏ねのミニチュア土器である。4（図版 134-6）は壺の底部で，内底面に爪痕が残る。6 は刻目凸帯文土器の波状口縁の深鉢である。口縁端部と直下に貼り付けられた突帯には刻目が密に施される。7 は方形の分銅型土製品の破片で，小さな刺突文が三段施される。

16 次調査 A 区の各遺構では東部～東南部九州の下城式系土器や山ノ口式系土器が数多く確認されている。Ⅲ層においても出土しており，図化し得るものを可能な限り取り上げた（図 199-1 ～ 12）。1・2 は下城式系土器の甕である。胴部から口縁部までの立ち上がりは直線的で，口縁端部から断面三角形の刻目突帯を 3 条貼り付ける。立ち上がりが若干異なり，1（図版 134-2）はやや内彎ぎみ，2 は垂直にのびる。3 ～ 12 は東南部九州を中心に分布する山ノ口式系土器の甕である。3 ～ 5 は口縁部の破片で，口縁部は厚手の細長い台形の粘土帯を斜め上方に向けて貼り付けて形成する。6 ～ 12 は胴部の破片で，いずれも突帯が 1 ～ 3 条貼り付いている。6 ～ 9，11・12 は断面三角形の突帯を貼り付ける。10 は突帯の形状が異なり，断面 M 字形の突帯を 1 条貼り付ける。壺の可能性もある。山ノ口式系土器はいずれも茶色

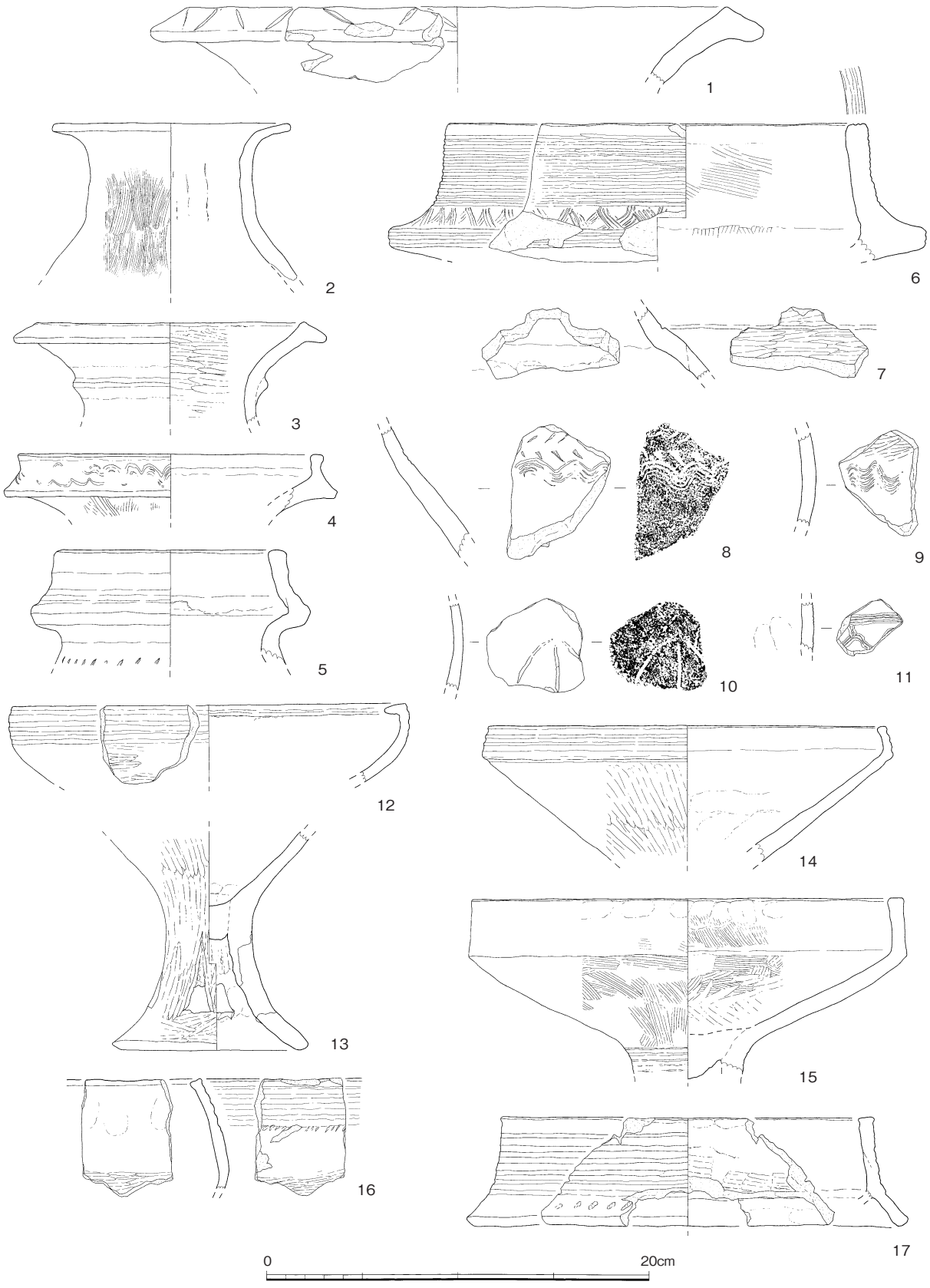


図 197　Ⅲ層出土土器実測図 1（縮尺 1/3）

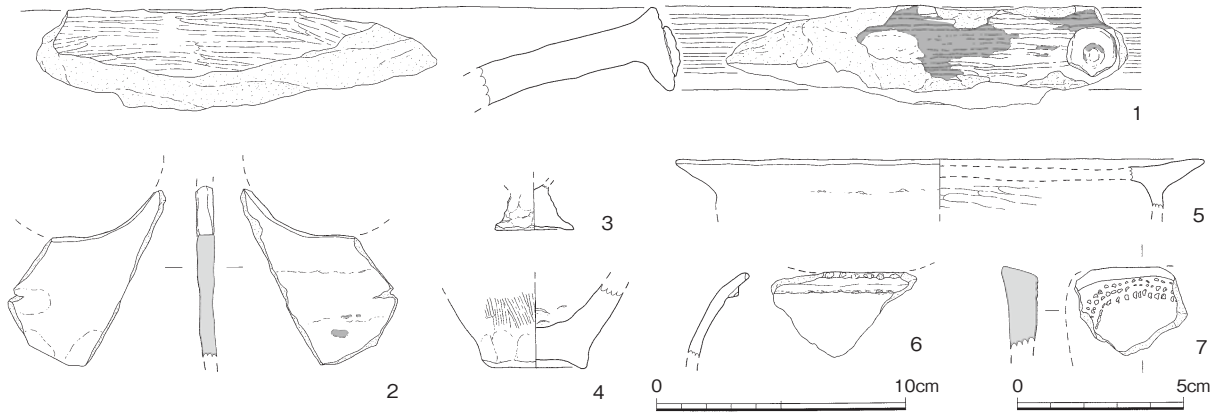


図 198　Ⅲ層出土土器実測図 2（縮尺 1/3）

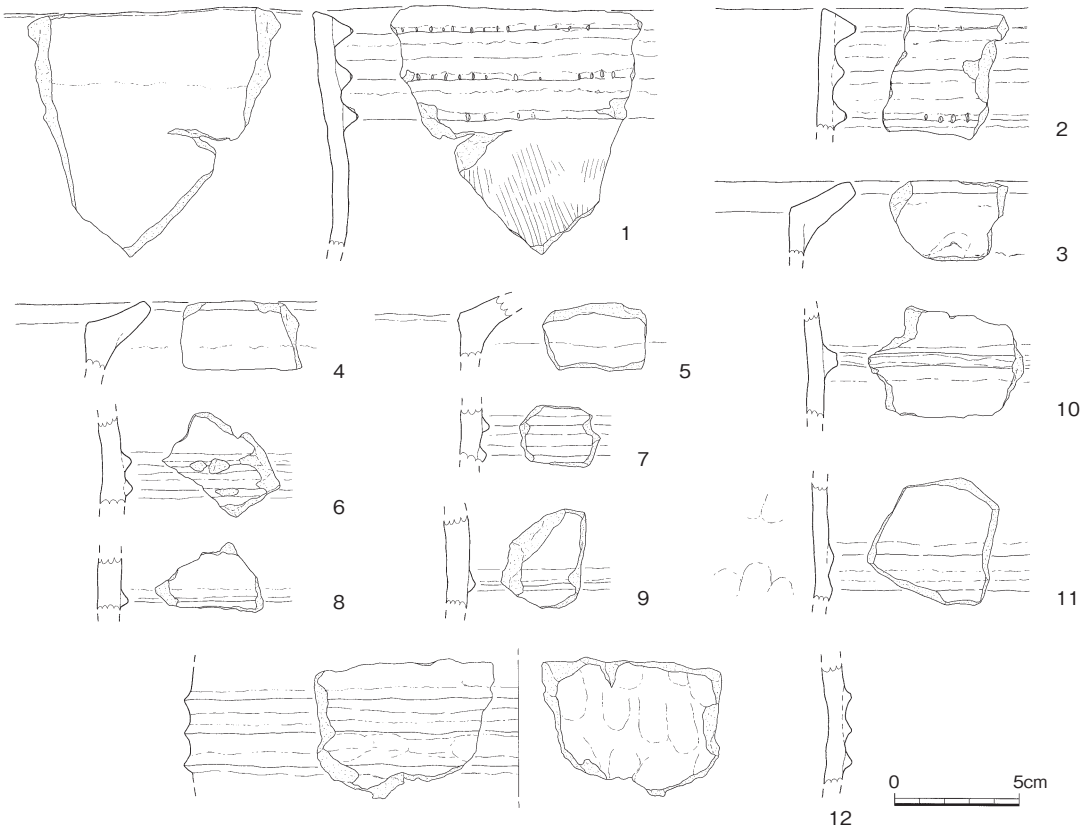


図 199　Ⅲ層出土土器実測図 3（縮尺 1/3）

みをおびる暗褐色を呈し，在地土器とは焼き上がりの色調が異なる。また，胎土に金雲母（3・4・6 ～ 9・11・12）や角閃石（5・10）が含まれるものがある。

図 200-1 は中世前期の土師器の坏である。2 は白磁碗で，胎土は青色みがかかった灰色を呈する。3 ～ 6 は須恵器である。3 は壺もしくは提瓶の口縁部で，肩部から口縁部が朝顔形に緩やかに外反し，口縁端部は丸く収められている。4 は坏身で丸みのある体部から，口縁部がやや内傾しながら立ち上がる。受け部は短く突出し，上面には回転横ナデ調整による小さな平坦面が形成される。5・6 は甕である。5 は最大径が体部のほぼ中央でカキメ調整が施される。6 は最大径が体部の上方にあり，肩が張る。胴最大径部分に沈線，短斜線文が施文される。7 は土師器の高坏で，脚部が「ハ」

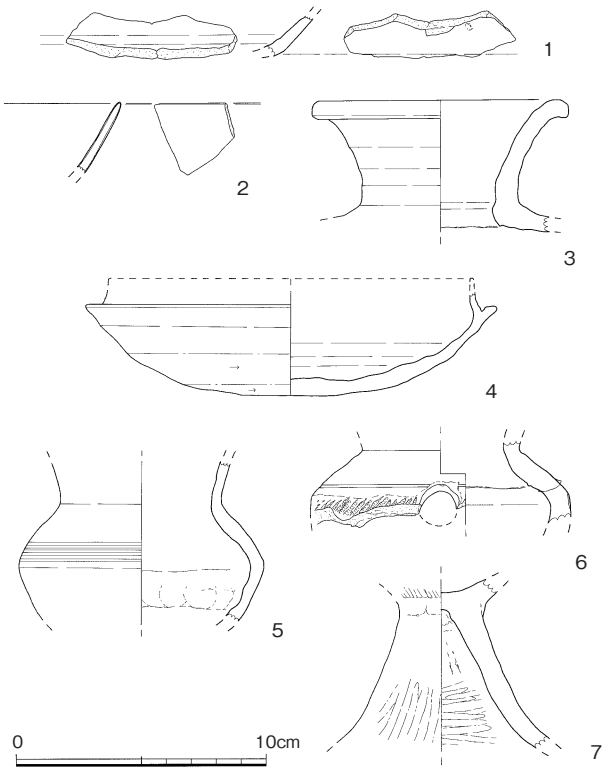


図 200　Ⅲ層出土土器実測図 4（縮尺 1/3）

字形にひらく。

（2）石器

打製石鏃・スクレイパー・石核・石庖丁・柱状片刃石斧・敲石・凹石・台石などが出土している。

図 201-1・2 はサヌカイト製の凹基式打製石鏃である。1（図版 138-1）の基辺は内側に彎曲する。調整剥離は 1 つ 1 つが大きく，不規則でやや乱雑な印象をうける。先端部が欠損し，残存重量は 2.3 g を測る。2（図版 137-12）はやや大型である。基辺は彎曲するが浅く，平基に近い。主要剥離面を残す。重量 8.4 g を測る。3・4 はスクレイパー。3（図版 138-8）は赤色頁岩製で，上下側縁に細かい押圧剥離を差し違いに施す。上方の刃部は摩耗しているため不明瞭である。重量 8.5 g を測る。4（図版 138-6）は安山岩製で，上下側縁に両面から押圧剥離を施す。残存重量は 9.7 g。5（図版 138-5）は姫島産黒曜石の石核で，風化した自然面を一面に残す。重量 9.3 g を測る。6・7 は安山岩の削片である。

図 202-1 ～ 9 は石庖丁である。1（図版 136-1）は緑色片岩製の磨製石庖丁の未成品である。両側を欠くが，直線的な背部に対して刃部が緩やかに弧を描く形状から，外彎刃半月形と考える。片刃である。研磨後に両面から穿孔を行うが，未貫通である。残存重量 39.6 g。2（図版 135-6）は，緑色片岩製の抉り入りの磨製石庖丁。両刃である。片面に自然風化面が残り，反対面は研磨を行うが，部分的に剥離面が残る。両刃で，残存重量 8.4 g を測る。3（図版 135-5）は結晶片岩製で，背部と刃部が緩やかに彎曲した杏仁形磨製石庖丁と考える。片面には自然風化面が残り，背部には研磨により狭い面を作る。片刃である。残存重量は 39.6 g。4（図版 135-4）は，緑色片岩製の抉り入り磨製石庖丁である。両面とも研磨されるが，部分的に自然風化面が残る。残存重量は 16.0 g を測る。5 ～ 9 は整形段階の石庖丁の未成品と考えた。5（図版 136-5）は，緑色片岩製で，両面とも剥離面であるが片面にはわずかに自然面が残る。残存重量は 57.8 g。6（図版 136-4）も緑色片岩製で，残存重量 51.6 g を測る。7（図版 136-9）は頁岩で，刃部を形成する直前の段階で破損している。残存重量は 43.2 g。8（図版 198-8）も緑色片岩製で，打裂時に折損したと考えられる。残存重量 72.7 g を測る。9（図版 136-2）は結晶片岩で，片面に自然風化面が残る。残存重量は 20.1 g である。

図 203-1（図版 136-3）は残存幅 3.6cm，高さ 1.9 ～ 2.3cm，厚さ 4mm の緑色片岩製の小型の石器である。上下辺に差し違いに刃部を研ぎ出す。一方の側縁は欠損するが，穿孔の痕跡が残る側縁は研磨が行われている。身の厚さと穿孔の大きさから，石庖丁の転用品と考えた。残存重量 7.4 g を測る。2（図版 136-7）は，石庖丁の破損品としては厚みがあるため，石斧の刃部周辺の可能性も考えられる。残存重量 16.5g。3 ～ 7 は緑色片岩の石器素材である。3（図版 136-10）は扁平な割石で，重量は 37.4 g を測る。4（図版 147-2）は，扁平な河原石を半截したもので，自然風化面側は表面が薄く剥離している。重量 35.2 g を測る。5（図版 136-12）は扁平な河原石で，重量 147.2 g を測る。6（図版 136-11）は扁平な河原石を半截したもので，残存重量 16.2 g を測る。1 ～ 6 は石器素材。7 は安山岩の石片で，石斧の側面が剥離した可能性も

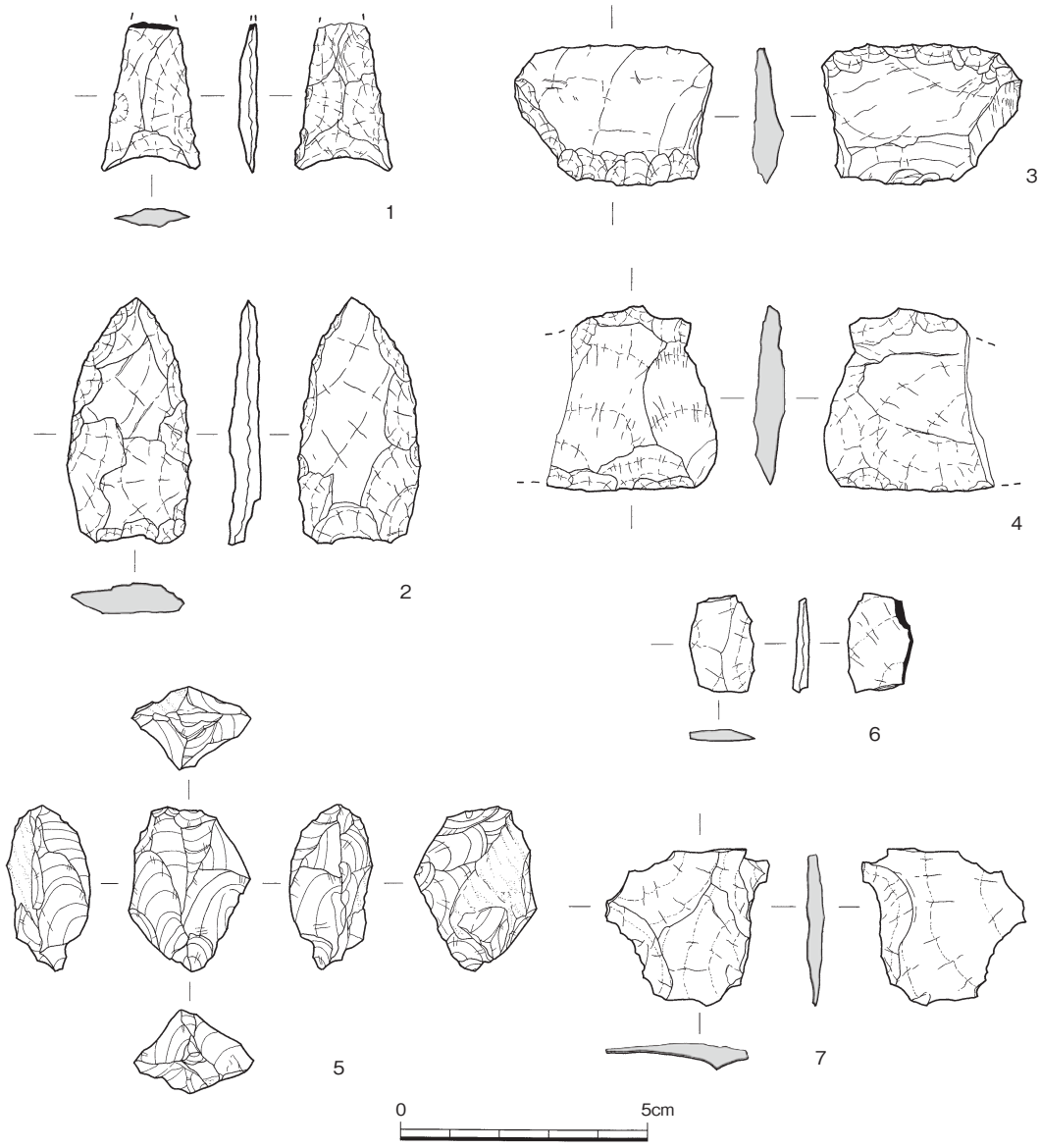


図 201　Ⅲ層出土石器実測図 1（縮尺 2/3）

あるが，確定できない。残存重量 3.4 ｇを測る。

図 203-8（図版 137-2）は緑色片岩製の柱状片刃石斧で，刃部を欠損する。断面形態は細長い蒲鉾型で，片側側面の表面は薄く剥離する。残存重量は 102.1 ｇ。9 は緑色片岩の棒状石器で，先端部には自然風化面が残るが，片面は大きく割れている。片側端部付近に幅が狭く浅い溝状の切り込みを入れている。石鑿もしくは石錘の可能性を考えておく。残存重量 12.3 ｇ。10（図版 136-13）は，各面に研磨の痕跡が確認できるので，非常に薄いが片刃石斧の破損品と判断した。緑色片岩製で，残存重量は 4.0 ｇを測る。

図 204-1 ～ 4 は敲石である。1（図版 147-3）は，砂岩の扁平な亜円礫の主面，下端部および側部に敲打痕が残る。重量は 738.9 ｇを測る。2（図版 145-1）は，砂岩の亜円礫の下端部に敲打痕が残る。一端を欠き，残存重量は 263.5 ｇ。3 は亜円礫の上下端部に敲打痕，主面には擦痕が残る。4（図版 144-2）は，砂岩の亜円礫の各面に敲打痕が残る。一部には擦痕も確認できる。重量 321.4 ｇ。

図 205-1・2 は砂岩を用いた凹石である。1 は扁平な亜円礫の主面と側部に敲打痕が残り，側部には擦痕が確認できる。残存重量 940.1 ｇ。2（図版 140-3）は，表裏両面中央に敲打による凹みが

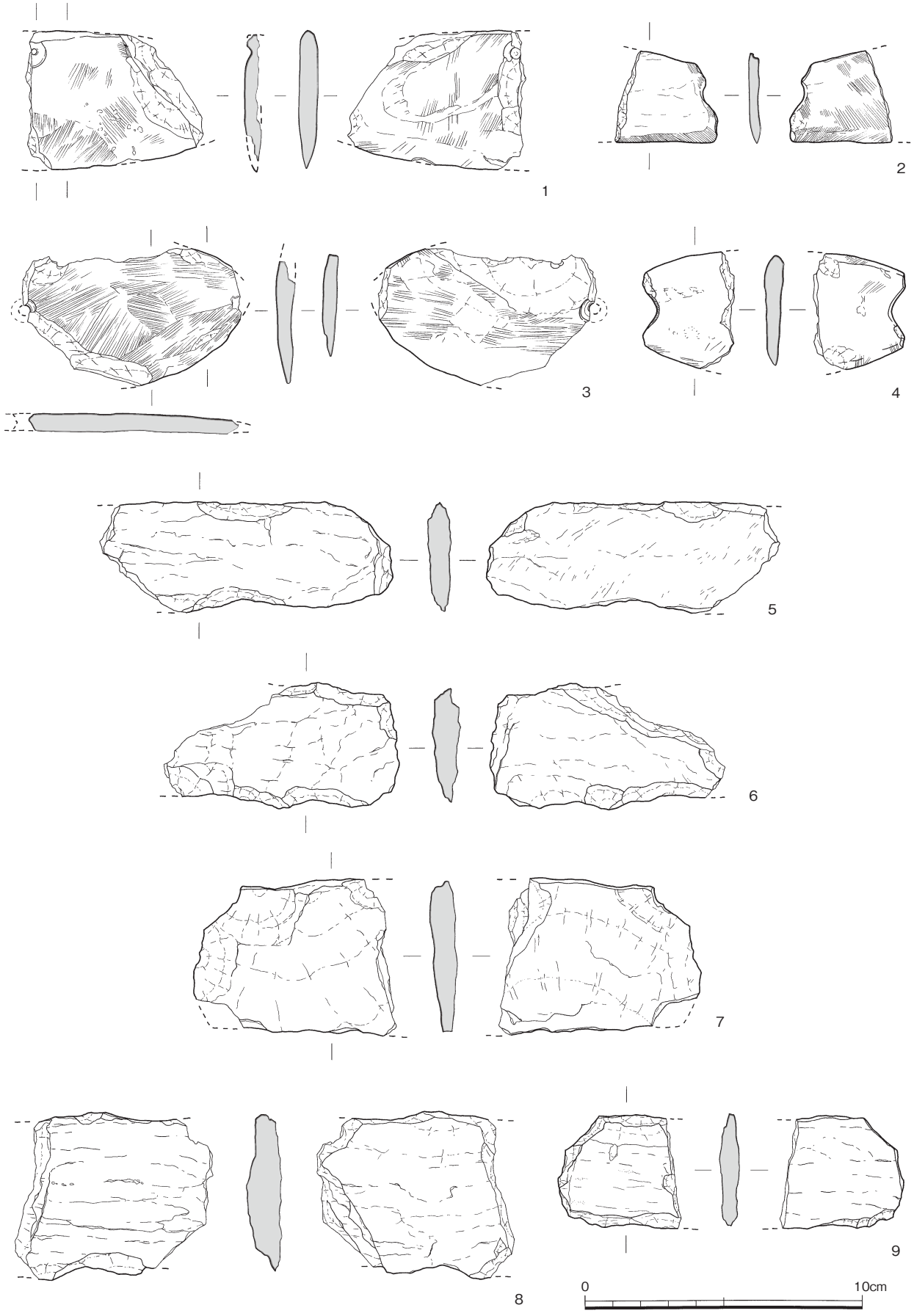


図 202　Ⅲ層出土石器実測図 2（縮尺 1/2）

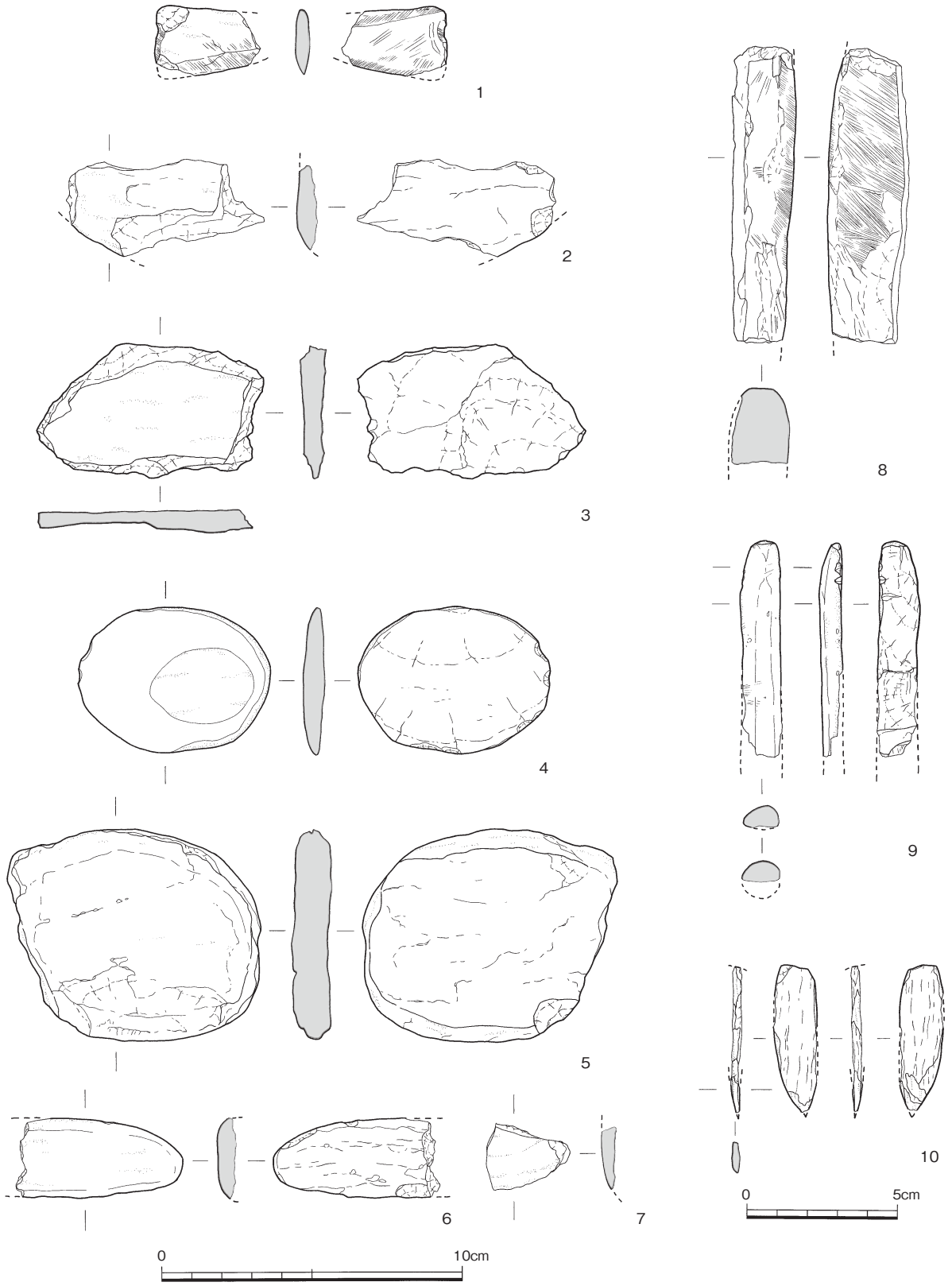


図 203　Ⅲ層出土石器実測図 3（縮尺 1/2）

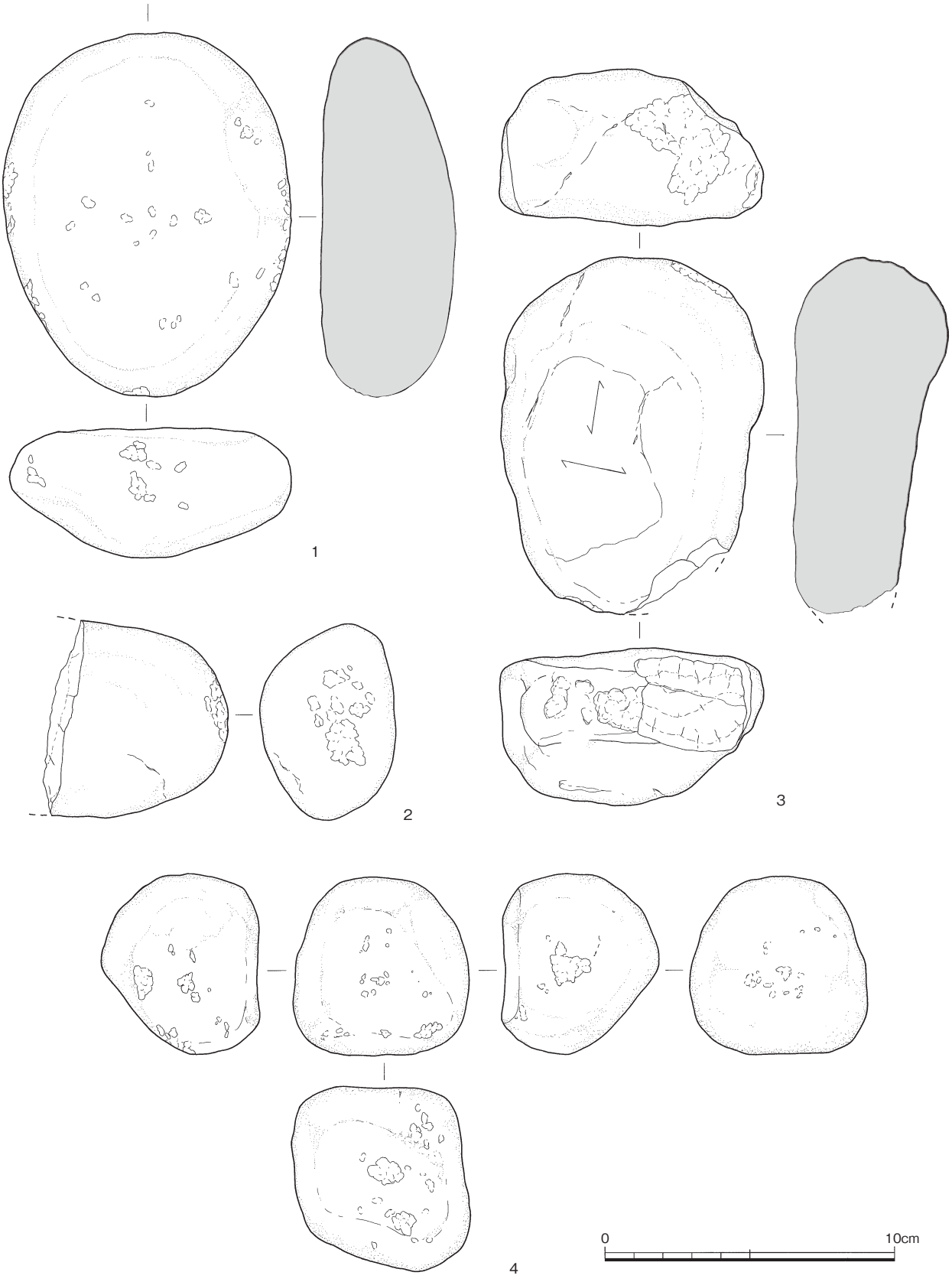


図 204　Ⅲ層出土石器実測図 4（縮尺 1/2）

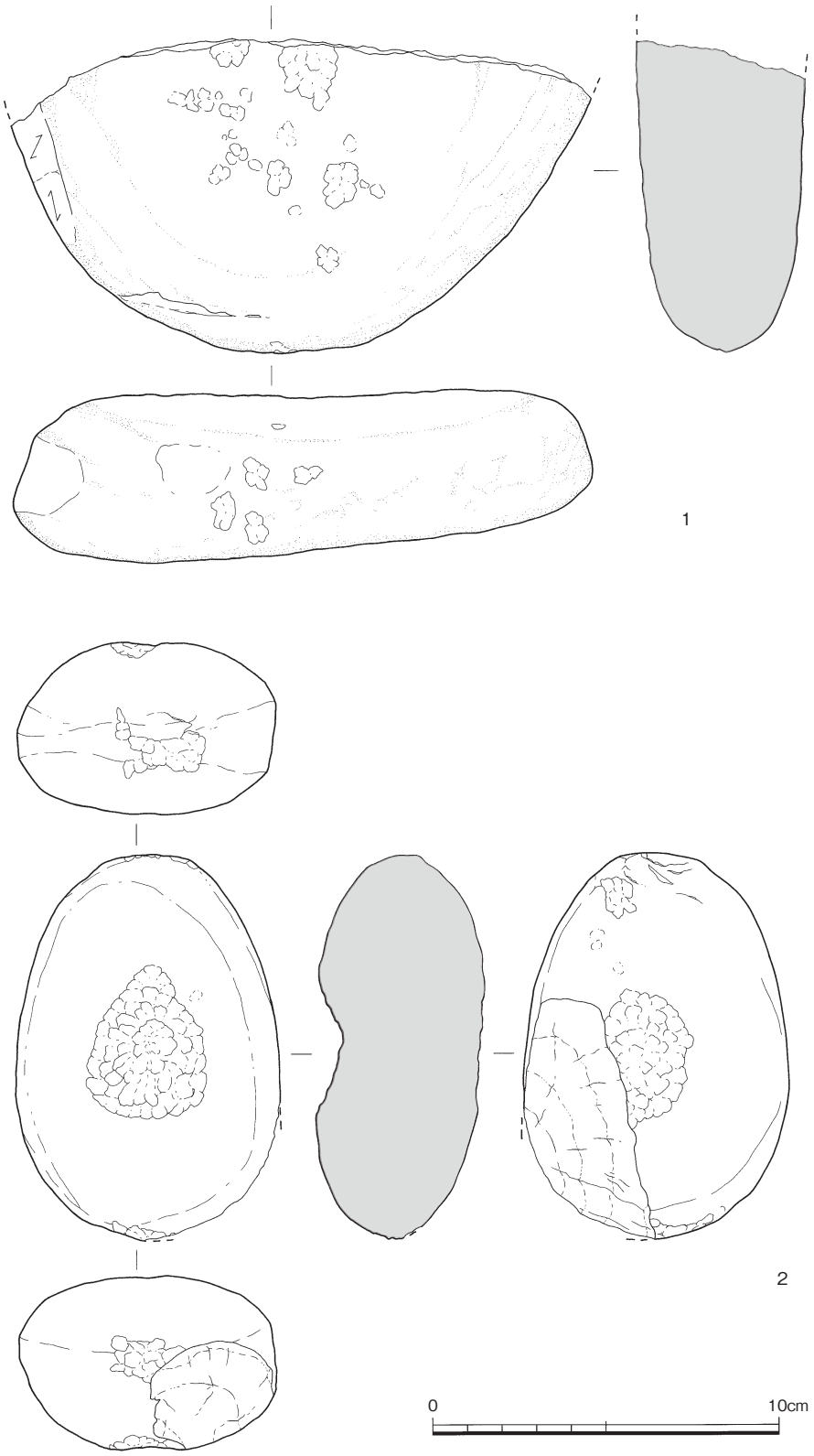


図 205　Ⅲ層出土石器実測図 5（縮尺 1/2）

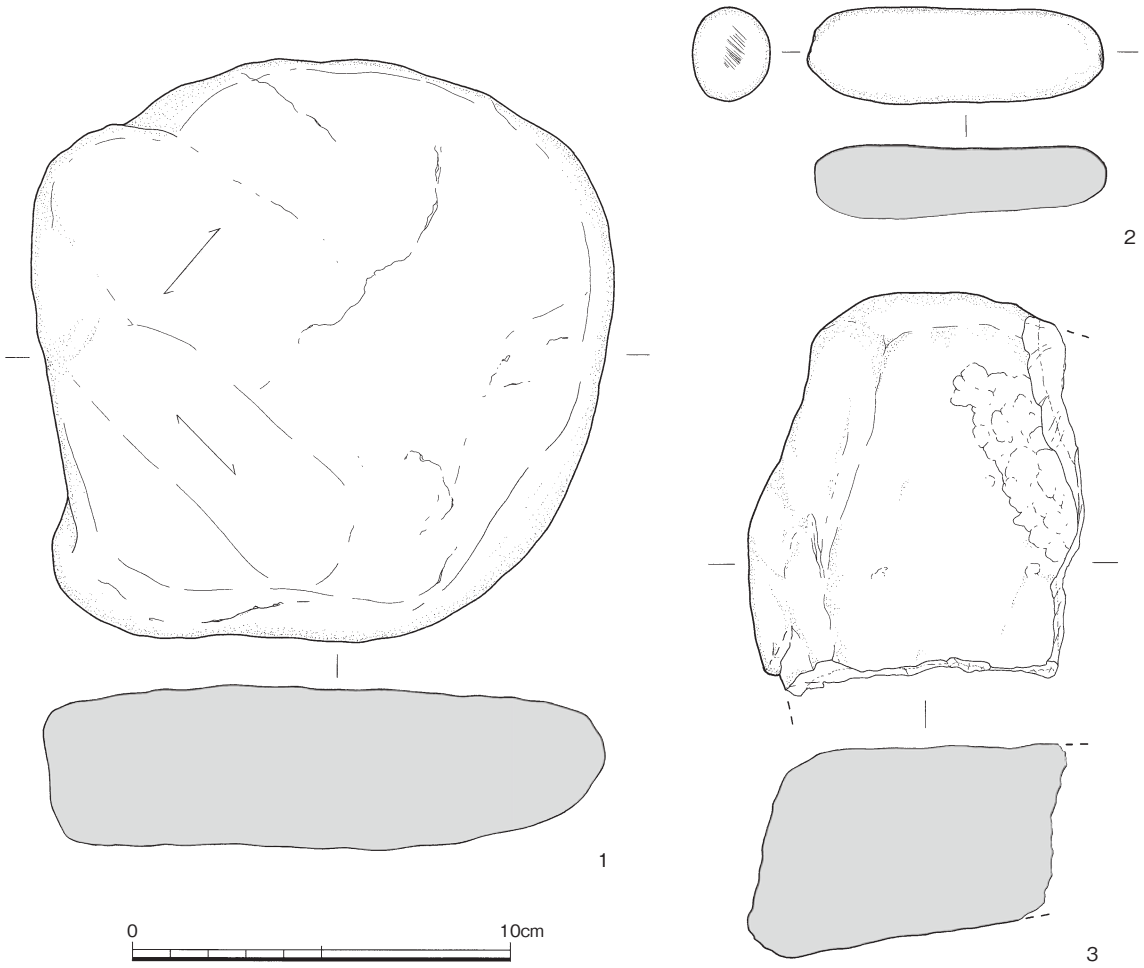


図 206　Ⅲ層出土石器実測図 6（縮尺 1/2）

生じる。擂鉢状に深く窪み，裏面の凹みは浅い。また，上下端部にも敲打痕が残る。重量 540.1 g を測る。

図 206-1・3 は砂岩の扁平な亜円礫を利用した磨石と台石である。1 は扁平な円礫の主面の一部に擦痕による凹みができている。重量 1770 g を測る。3 は主面に敲打痕が残る。残存重量 767.2 g。2（図版 141-4）は，砂岩の細長い棒状の河原石を用いた磨石である。上下端部に擦痕が確認できる。重量 58.1 g を測る。

（3）土製品

分銅形土製品と紡錘車が各 1 点出土している。

図 198-7（図版 134-7）は，DU-22-19 区Ⅲ層から出土した分銅形土製品の破片である。周縁が内側に反り，径 1㎜ほどの列点文を三重にめぐらせる。表面には部分的に暗赤褐色の肌理の細かな粘土を化粧掛けする。

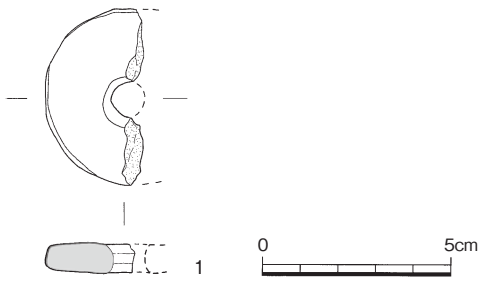


図 207　Ⅲ層出土土製紡錘車実測図（縮尺 1/2）

図 207-1（図版 148-3）は，DY-21-14 区のⅢ層下部から出土した土製紡錘車である。半分を欠損するが，復元径は 4.6㎝で，焼成前に中央にあけられた小孔は径 9㎜に復元できる。器表面が荒れ調整は不明である。残存重量は 10.9 g を測る。

（4）鉄器・ガラス滓

DT-22-25 区Ⅲ層下部から鉄鏃，DY-31-10 区Ⅲ層下部から刀子の破片と，DS-21-5 区Ⅲ層最下部と DV-25-14 区Ⅲ層から鉄滓の破片が出土している（図 176-2・3）。2 は柳葉形の鉄鏃の身部の破片で，先端部および基部を欠損。鍛造品で，錆化による膨らみで中心が空洞となる。3 は片関の鍛造品で，先端部および茎部を欠く。この他，塊状や細い棒状の鉄片が出土しているが，小片で錆化が進み器種は不明である（表 7）。

DS-23-5 区Ⅲ層からはガラス滓が出土している。ガラス滓については蛍光 X 線分析を実施しており，その結果をⅦ-5 分冊で報告する。

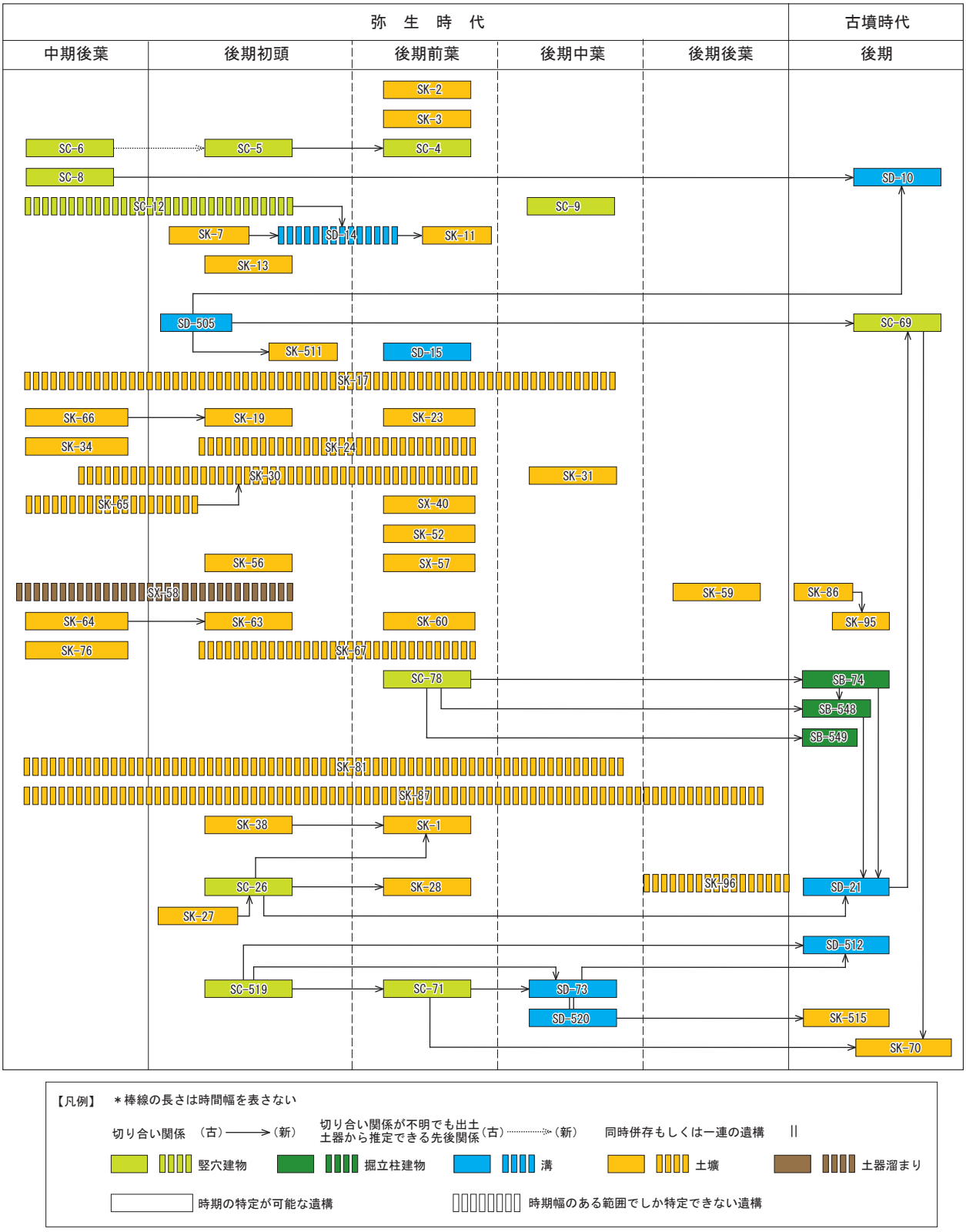
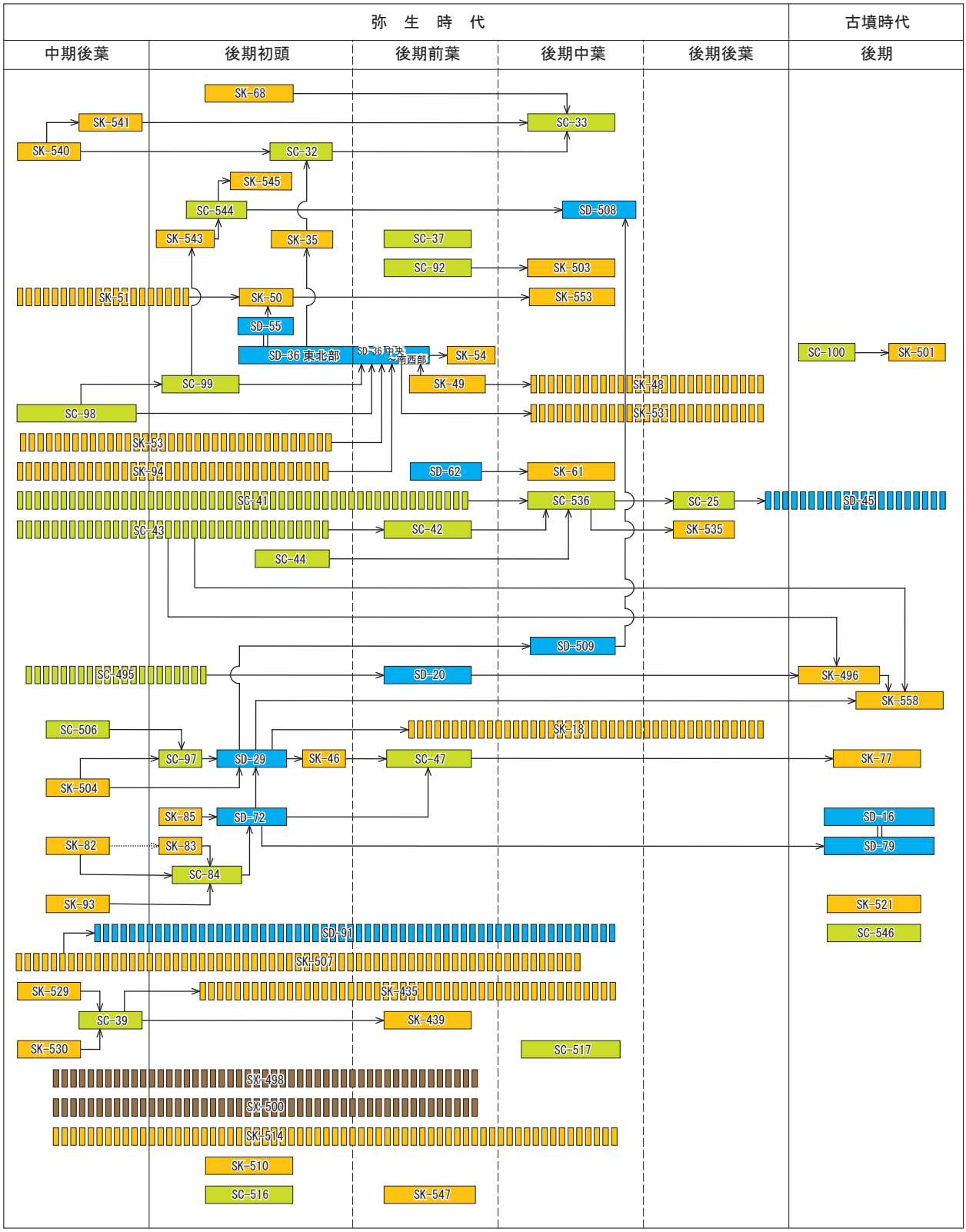


図 208　16 次調査 A 区における主要遺構重複関係 1



※この他，SB-551，SK-88・90・410・414・427・443・477・494・518 は弥生時代中期後葉～後期中葉もしくは古墳時代後期，
SA-552，SD-557，SK-80・324・409・411・413・444 は古代～中世．

図 209　16 次調査 A 区における主要遺構重複関係 2

報 告 書 抄 録

ふりがな	ぶんきょういせき　Ⅶ-3
書名	文京遺跡　Ⅶ-3
副書名	文京遺跡16次調査A区
巻次	
シリーズ名	愛媛大学埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	ＸＸⅥ-3
編著者名	田崎博之
編集機関	愛媛大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒790-8577　松山市道後樋又10番13号
発行年月日	2014年 2月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
文京遺跡（ぶんきょういせき） 16次調査A区	松山市文京町（まつやましぶんきょうまち）３番	38201	33° 50′ 57″	132° 46′ 12″	1997.4.9 ～ 7.29	627㎡	校舎（工学部校舎）新営Ⅲ基工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
文京遺跡 16次調査A区	集落	弥生	竪穴建物 溝 土壙 土器溜まり	31 16 72 5	弥生土器 石器 鉄器 装身具類 土製品	東南部九州系及び東部九州、東北部九州、備後系土器、疑朝鮮系無文土器、記号文土器 鏃、刀子 ガラス小玉、碧玉製管玉、瑪瑙製玉、滑石製指輪 土製紡錘車、分銅形土製品
		古墳後期	竪穴建物 掘立柱建物 溝 土壙	3 4 4 12	須恵器 土師器 石製品	 滑石製有孔円盤
		古代	柵列 溝 土壙	1 1 5		

表３　文京遺跡16次調査Ａ区遺構観察表（各遺構の位置は図2または調査所見記載の挿図を参照）

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SK	1	DW・DX-25区	Ⅲ層中位で土器群が出土。掘り形はⅣ層上面で検出。SK-38を切る。	長径1.81m，短径61～63cm，深さ15cmほどの細長い不整長円形の土壙。詳細は本文152頁に記載。
SK	2	DX-25区	Ⅲ層下半部で土器群が出土。掘り形はⅣ層上面で検出。SP-286に切られる。	長径1.87m，短径78cmの細長い不整長円形の掘り形をもつ土壙。詳細は本文157頁に記載。
SK	3	DT-21区	Ⅳ層上面で検出。	長径1.19m，幅67～72cmの胴張りの隅丸長方形の土壙。詳細は本文160頁に記載。
SC	4	DS・DT-21・22区	Ⅳ層の上面で掘り形を検出。SP-109に切られる。SC-5，SP-108を切る。	南北3.15～3.45m，東西2.1～2.19mの隅丸長方形の掘り形をもつ。炉跡であるSK-22，柱穴のSP-171・173から構成される住居跡。詳細は本文11頁に記載。
SC	5	DS・DT-22区	Ⅳ層上面で検出した掘り形は浅く，周壁の一部だけを確認。SC-4に切られる。	長辺4.6m，短辺2.93mの隅丸長方形の掘り形をもち，SK-104，SP-111が伴う竪穴建物。12次調査のSK-338と一連の遺構。SP-111は柱穴。詳細は本文13頁に記載。
SC	6	DS-22・23区	Ⅳ層上面で掘り形の北隅だけを確認。SC-5に切られる可能性が高い。	隅丸の方形または長方形の掘り形をもつ竪穴建物。詳細は本文15頁に記載。
SK	7	DS・DT-25区	Ⅳ層上面で検出。SD-14・SP-134に切られる。	大半は調査区外にひろがり，規模は不明。角部が隅丸となる土壙と考えた。詳細は本文160頁に記載。
SC	8	DS-23・24区	Ⅳ層上面で検出。SD-10に切られる。	南北辺2.72m，深さ17cmほどの掘り形をもつ方形または長方形の竪穴建物。床面の南半部に高さ７～８cmの瘤状の高まり。詳細は本文16頁に記載。
SC	9	DT-22・23区	Ⅳ層上面で検出。	立柱痕跡をもつSP-101を主柱穴とする一辺３mほどの隅丸方形の竪穴建物を復元。詳細は本文17頁に記載。
SD	10	DS～DY-23～25区	Ⅳ層上面で検出。SD-505･SC-8を切る。	12次調査SD-6と一連のほぼ東西にのびる溝。幅62～86cm，深さ10cm前後を測る。詳細は本文115頁に記載。
SK	11	DT-24区	Ⅳ層上面で検出。SD-14を切る。	長径195cm，短径97cmの長円形の土壙。詳細は本文161頁に記載。
SC	12	DT-24区	Ⅳ層上面で検出したが，非常に浅い掘り形しか確認できなかった。SD-14に切られる。	短辺2.1m，長辺2.9mの長方形の掘り形をもち，床面の四隅に柱穴を配置する竪穴建物を推定。SP-127は柱穴の1つ。詳細は本文19頁に記載。
SK	13	DS-24区	Ⅳ層上面で検出。SP-130を切る。	長径1.13m，短径57～61cm，深さ26cmの不整長円形の土壙。詳細は本文163頁に記載。
SD	14	DS・DT-24・25区	Ⅳ層上面で検出。SK-11に切られ，SC-12・SK-7を切る。	北東－南西の溝。幅43～72cm，深さ12cm前後を測る。詳細は本文120頁に記載。
SD	15	DT-25区	Ⅳ層上面で検出。	東側のSD-14とほぼ平行して北東－南西にのびる。幅31～35cm，深さは8cm前後。詳細は本文122頁に記載。
SD	16	DT・DU-24区	Ⅳ層上面で検出。	幅53～61cm，Ⅳ層上面からの深さ4cm前後の浅い舟底状を呈する。溝底に鋤・鍬の掘削痕跡が残る。SD-79と一連の溝である可能性が高い。詳細は本文123頁に記載。
SK	17	DT・DU-25区	Ⅳ層上面で検出。	推定長1.75m，幅98～105cmの隅丸長方形の土壙。詳細は本文164頁に記載。
SK	18	DU-25区	Ⅳ層上面で検出。SD-29の延長部分を切る。	大半は調査区外に広がり，隅丸の角部を確認できたのみ。詳細は本文164頁に記載。
SK	19	DU-24区	Ⅳ層上面で検出。SK-66を切る。	長さ145cm，幅77～92cm，深さ40cmほどの土壙。詳細は本文166頁に記載。
SD	20	DU・DV-25区	Ⅳ層上面で検出したが，本来はⅢ層上面から掘り込まれる。SK-496，SP-148に切られ，SC-495を切る。	ほぼ東－西方向にのびる溝。検出できた溝長は2.9m，幅は41～49cm。詳細は本文123頁に記載。
SD	21	DU～DY-26区	Ⅳ層上面で検出。SC-26，SB-74・548を切り，SC-69に切られる。	溝長17.5mほど，幅28～30cmを測る溝。Ⅲ層上面から30cmほど掘り込まれている。詳細は本文126頁に記載。
SK	22	DS-21区	SC-4の床面で検出。	SC-4床面のほぼ中央に位置。38×45cm，深さ６cmほどの浅い不整円形の窪み状の遺構。埋土に炭化物が多く混じり，SC-4の炉跡と判断。詳細は本文11頁に記載。
SK	23	DU-21区	Ⅳ層上面で検出。	長さ2.06m，幅83～104cmの細長い不整長円形の土壙。詳細は本文166頁に記載。
SK	24	DU-22区	Ⅳ層上面で検出。	残存長1.78m，幅83～104cmの溝状の細長い土壙。詳細は本文168頁に記載。
SC	25	DV・DW-24・25区	Ⅳ層上面で検出。SC-41・42・44・536を切り，SD-10・45，SP-234に切られる。	短辺4.95m，長辺5.08mの隅丸方形の掘り形をもつ。SP-221・222・223・430を柱穴とし，中央に炉跡と考えられるSK-527が伴う住居跡。詳細は本文20頁に記載。
SC	26	DW-25・26区	Ⅳ層上面で検出。SK-27を切り，SD-21，SK-28，SP-183・194・195・196・201に切られる。	南北長4.8m，東西幅4mほどの隅丸方形の竪穴建物。SP-287・309を北側の主柱穴とする。詳細は本文27頁に記載。
SK	27	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。SC-26に切られる。	長径94cm，短径77cm，深さ21～23cmを測る長円形の土壙。詳細は本文168頁に記載。
SK	28	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。SC-26を切る。	径78cm前後，深さ22～28cmの円形の土壙。詳細は本文169頁に記載。
SD	29	DV～DZ-21～24区	Ⅳ層上面で検出。SD-509，SK-18・46・558に切られ，SC-97，SD-72，SK-504を切る。	調査区南西部で南西から北東にのびる幅55～82cm，深さ6～8cmを測る浅い溝。総延長30mを確認。詳細は本文126頁に記載。
SK	30	DV-23区	Ⅳ層上面で検出。SK-65を切る。	長さ1.18m，幅85cmの不整の隅丸長方形の土壙。詳細は本文169頁に記載。
SK	31	DU・DV-23・24区	Ⅳ層上面で検出。SP-206に切られる。	一辺1.25mほどの隅丸方形の土壙。詳細は本文169頁に記載。
SC	32	DV-23・24区	Ⅳ層上面で検出。SC-33に切られ，SK-35・540を切る。	推定径4.25mの円形の掘り形をもち，炉跡であるSK-89，SP-317・320・322・483ほかを柱穴とする住居跡。詳細は本文28頁に記載。
SC	33	DV・DW-22・23区	SC-32，SK-68・541を切る。掘り形上部に大量の遺物を投棄。	径4.94×5.25mの不整円形の掘り形をもち，炉跡SK-513，柱穴SP-440・441・442・447，SK-539が伴う住居跡。詳細は本文33頁に記載。
SK	34	DV-21区	Ⅳ層上面で検出。	長径1.34m，短径80cm，深さ7～15cmの土壙。詳細は本文170頁に記載。
SK	35	DV-23区	Ⅳ層上面で検出。SC-32に切られ，SD-36の東北部を切る。	長径1.68m，残存短径91cmの不整な長円形の土壙。詳細は本文170頁に記載。
SD	36	DV～DZ-20～23区	Ⅳ層上面で検出。SK-35・54・531に切られる。SK-49・53・94，SP-485，SC-98・99を切る。	総延長25.5m，幅42～65cm，深さ19～25cmの溝。詳細は本文135頁に記載。
SC	37	DW-24・25区	Ⅳ層上面で検出。SP-224・227・229に切られる。	一辺2.3～2.4mの隅丸方形の掘り形をもち，SP-226を柱穴とする簡易の竪穴建物。詳細は本文51頁に記載。
SK	38	DW-25区	Ⅳ層上面で検出。SK-1に切られる。	残存長径1.08m，短径72cmを測る。浅い舟底状の土壙。詳細は本文170頁に記載。
SC	39	DX・DY-25・26区	SK-435・439・494に切られ，SK-529・530，SP-439を切る。	南北3.65m，東西3.47mの隅丸方形の掘り形をもち，炉跡SK-491，柱穴SP-489・492が伴う住居跡。詳細は本文52頁に記載。
SX	40	DU-21区	Ⅲ層中位で確認。	弥生土器の大小の破片が折り重なり出土。詳細は本文219頁に記載。

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SC	41	DV・DW-24・25区	Ⅳ層上面で検出。SC-25・536，SD-45に切られる。	一辺3～4m前後の隅丸方形の掘り形の竪穴建物。詳細は本文58頁に記載。
SC	42	DU・DV-24・25区	Ⅳ層上面で検出。SC-43を切り，SC-25·536，SD-45に切られる。	SP-306·308・457·463を柱穴とする4本柱構造の竪穴建物。2.9×3.45mの隅丸方形の掘り形をもつ。詳細は本文58頁に記載。
SC	43	DU・DV-24・25区	Ⅳ層上面で検出。SC-25・42・536，SK-496・558に切られる。	SP-300・301・459を柱穴とする竪穴建物。長軸長5m前後，短軸長2.95mの楕円形の掘り形。詳細は本文60頁に記載。
SC	44	DV・DW-24区	Ⅳ層上面で検出。SC-25・536，SK-535，SD-10に切られる。	長径4.5m，短径4.2mの長円形の竪穴建物と推定。詳細は本文62頁に記載。
SD	45	DU·DV-24·25区	Ⅳ層上面で検出。SC-25·41·42·43を切る。	溝長7.5m，幅32～50㎝，深さは20㎝ほどの溝。詳細は本文139頁に記載。
SK	46	DW-23区	Ⅳ層上面で検出。SC-47に切られ，SD-29を切る。	長辺2.86m，短辺2.25mの隅丸方形の土壙。詳細は本文172頁に記載。
SC	47	DW・DX-23・24区	Ⅳ層上面で検出。SD-72，SK-46を切り，SK-77，SP-246に切られる。	SK-75を炉跡，SP-261を柱穴とする長辺4.83m，短辺3.35mの隅丸長方形の住居跡。貼り床を施す。詳細は本文63頁に記載。
SK	48	DW・DX-21・22区	Ⅳ層上面で検出。SK-49を切る。SP-252に切られる。	長辺2.2m，短辺2.07m，深さ3～4㎝の不整な隅丸方形の土壙。詳細は本文173頁に記載。
SK	49	DW·DX-21·22区	Ⅳ層上面で検出。SD-36，SK-48に切られる。	長径3.35m，短径1.61～1.66m，深さ32～37㎝の細長い不整長円形の大形土壙。詳細は本文173頁に記載。
SK	50	DV・DW-21区	Ⅳ層上面で検出。SK-51，SD-55を切り，SK-553に切られる。	長さ3.05m，幅1.37～1.4m，深さ8～10㎝の細長い不整円形の土壙。詳細は本文176頁に記載。
SK	51	DV・DW-21区	Ⅳ層上面で検出。SK-50に切られる。	長径1.25m，短径65㎝不整長円形の掘り形をもつ。詳細は本文177頁に記載。
SK	52	DV・DW-20·21区	Ⅳ層上面で検出。	最大長径1.33m，短径1.15mの不整長円形の土壙。詳細は本文177頁に記載。
SK	53	DX-21区	Ⅳ層上面で検出。SD-36中央部～南西部分に切られる。	長径1.06m，短径78㎝，深さ3～4㎝の浅い皿状の土壙。詳細は本文177頁に記載。
SK	54	DX・DY-21区	Ⅳ層上面で検出。SD-36中央部～南西部分を切る。	推定長径1.6m，短径1.36m，深さ46㎝の土壙。詳細は本文179頁に記載。
SD	55	DV・DW-20～22区	Ⅳ層上面で検出。SK-50に切られる。SD-36北東部分と一連の溝。	緩やかに東に弧を描きながら南東－北東にのびる溝。残存長11.3m，幅1m前後，深さ38㎝を測る。詳細は本文140頁に記載。
SK	56	DW-22区	Ⅳ層上面で検出。	長径1.15m，短径86㎝ほどの長円形の土壙。詳細は本文179頁に記載。
SX	57	DS・DT-21区	Ⅲ層中位で確認。	弥生土器の甕や壺の胴部破片が出土。詳細は本文219頁に記載。
SX	58	DT-21区	Ⅲ層の上半部で確認。	小型甕，壺の口縁部破片，底部破片が出土。詳細は本文220頁に記載。
SK	59	DX-23区	Ⅳ層上面で検出。SP-248に切られる。	長さ1.24m，幅44㎝の細長い隅丸長方形の土壙。詳細は本文179頁に記載。
SK	60	DX・DY-22・23区	Ⅳ層上面で検出。	長さ2.03m，幅38～45㎝の溝状の土壙。詳細は本文181頁に記載。
SK	61	DY-23区	Ⅳ層上面で検出。SD-62を切る。	径85㎝，深さ5㎝ほどの浅い皿状の土壙。詳細は本文181頁に記載。
SD	62	DX～DZ-22～25区	Ⅳ層上面で検出。SK-61に切られる。	南東－北西方向にのびる全長14mの溝。溝幅21～26㎝，最大42㎝，深さ4～8㎝を測る。詳細は本文141頁に記載。
SK	63	DX-21区	Ⅳ層上面で検出。SK-64を切る。	長さ79㎝，幅35㎝の細長い長円形の小型土壙。詳細は本文182頁に記載。
SK	64	DX-21区	Ⅳ層上面で検出。SK-63に切られる。	長さ70㎝，幅37㎝，深さ7～16㎝の細長い不整長円形の小型土壙。詳細は本文182頁に記載。
SK	65	DV-23区	Ⅳ層上面で検出。SK-30に切られる。	86×90㎝の隅丸方形の土壙。詳細は本文182頁に記載。
SK	66	DU-24区	Ⅳ層上面で検出。SK-19とSP-203に切られる。	推定長1.3m前後，幅85㎝，深さ14㎝の胴が張った隅丸長方形の土壙。詳細は本文183頁に記載。
SK	67	DU-20区	Ⅳ層上面で検出。	長径2.25m，短径1.8mの不整円形の土壙。詳細は本文183頁に記載。
SK	68	DV-21・22区	Ⅳ層上面で検出。SC-33に切られる。	推定長3.1mほど，幅1.22～1.82mの不整な隅丸長方形の土壙。詳細は本文184頁に記載。
SC	69	DY·DZ-26・27区	Ⅳ層上面で検出。SK-70に切られ，SD-21・505を切る。	東西幅2.85m，南北の推定長3.6mほどの隅丸長方形の掘り形をもち，SP-276・279ほかの4本柱構造の竪穴建物。詳細は本文66頁に記載。
SK	70	DY・DZ-26・27区	Ⅳ層上面で検出。SC-69·71を切る。	長径2.9m，短径2.18mの不整な長円形の土壙。詳細は本文186頁に記載。
SC	71	DY・DZ-27区	Ⅳ層上面で検出。SD-73，SK-70，SA-552を構成するSP-378・379に切られる。SC-519とSP-377を切る。	長軸長4.65m，短軸長3.7mほどの不整な楕円形の掘り形をもつ竪穴建物。SP-415は柱穴。詳細は本文69頁に記載。
SD	72	DW～DY-23～25区	Ⅳ層上面で検出。SC-84，SK-85を切る。SC-47，SD-29・79に切られる。	緩やかに弧を描きながら南東－北西方向にのびる。全長16m，溝幅28～42㎝，深さ10～16㎝を測る。詳細は本文142頁に記載。
SD	73	DZ-25～27区	Ⅳ層上面で検出。SC-71・519を切る。SD-520も一連の溝。	溝幅77～80㎝，深さ36～38㎝の溝。詳細は本文143頁に記載。
SB	74	DW～DY-26・27区	Ⅳ層上面で検出。柱穴SP-258はSC-78を切る。SP-257はSD-21，SB-548に切られる。	SP-256～259・487，B区SP-595・705から構成される2×3間の掘立柱建物。詳細は本文105頁に記載。
SK	75	DX-23区	SC-47の床面で検出。	径107×111㎝，深さ4～5㎝の不整形の浅い窪み状の炉跡。SC-47の炉跡。詳細は本文63頁に記載。
SK	76	DW-22区	Ⅳ層上面で検出。	長径80㎝，推定短径68㎝を測る長円形の土壙。詳細は本文189頁に記載。
SK	77	DX-23区	SC-47の床面で検出したが，SC-47を切る。	長径1.7m，短径1.5mの不整な長円形の土壙。詳細は本文189頁に記載。
SC	78	DX-26・27区	Ⅳ層上面で検出。A区ではSC-78，B区ではSC-53の遺構番号を付したが，A区で報告。SB-74・548・549に切られる。	長軸長4.24m，短軸長3.15mほどの不整な小判形の住居跡。床面のほぼ中央に炉跡と考えられる炭化物の集積。SP-296，B区SC-53P-6とP21の4本柱構造。詳細は本文71頁に記載。
SD	79	DU～DZ-24・25区	Ⅳ層上面で検出した鋤・鍬の掘削痕跡を繋げて復元。SP-329に切られ，SD-72を切る。SD-16に連結する可能性あり。	溝幅35～48㎝，確認できた溝長22mの溝。詳細は本文144頁に記載。
SK	80	DW-24区	Ⅳ層上面で検出。	径1.2～1.22mの隅丸方形の土壙。詳細は本文191頁に記載。
SK	81	DX-24区	Ⅳ層上面で検出。	長径1.05m，短径58㎝，深さ5～6㎝の浅い皿状の土壙。詳細は本文191頁に記載。

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SK	82	DX-24区	Ⅳ層上面で検出。SC-84とSK-83に切られる。	南北長1.5m前後，1.1～1.2mの長円形の土壙。詳細は本文191頁に記載。
SK	83	DX・DY-24区	Ⅳ層上面で検出。SC-84に切られ，SK-82を切る可能性が高い。	長さ2.45m，幅90～100cmの細長い不整隅丸長方形の土壙。詳細は本文193頁に記載。
SC	84	DX・DY-23・24区	Ⅳ層上面で検出。SD-72，SP-333に切られ，SK-82・83・93を切る。	東西長4.2～4.7m，南北幅4.05mの隅丸方形の掘り形をもつ。SK-524を炉跡，SP-434を柱穴とする住居跡。SK-525・526も伴う。詳細は本文73頁に記載。
SK	85	DX・DY-23区	Ⅳ層上面で検出。SD-72，SP-334に切られる。	残存長径が2.2m，短径が1.3～1.5mと推定される長円形の土壙。詳細は本文194頁に記載。
SK	86	DW-20区	Ⅳ層上面で検出。SK-95に切られる。	径1.2～1.25mの円形の土壙。詳細は本文194頁に記載。
SK	87	DW-20区	Ⅳ層上面で検出。SK-90に切られる。	推定長径95cm前後，短径70cmほどの不整長円形の土壙。詳細は本文195頁に記載。
SK	88	DW・DX-24区	Ⅳ層上面で検出。	径75cm前後の隅丸方形の土壙。詳細は本文195頁に記載。
SK	89	DV-23区	SC-33に切られる。	SC-32の炉跡。詳細は本文29頁に記載。
SK	90	DW・DX-20区	Ⅳ層上面で検出。SK-87を切る。	長径95cm，短径72cmほどの不整な長円形の土壙。詳細は本文196頁に記載。
SD	91	DX・DY-20区	Ⅳ層上面で検出。SK-507を切る。	Ⅱ層直下から掘り込まれた幅34cm前後の溝。詳細は本文144頁に記載。
SC	92	DY・DZ-20・21区	Ⅳ層上面で検出。SK-503に切られる。	南北長3.2m，東西幅2.3mほどの竪穴建物。SP-358を柱穴とし，SK-502が伴う。詳細は本文79頁に記載。
SK	93	DY-23区	Ⅳ層上面で検出。SC-84に切られる。	長さ1.14m，残存幅48cmの隅丸長方形の土壙。詳細は本文196頁に記載。
SK	94	DY-21区	Ⅳ層上面で検出。SD-36中央部～南西部分に切られ，SP-485を切る。	長さ1.35m，幅83～89cmの不整な隅丸長方形の土壙。詳細は本文196頁に記載。
SK	95	DW-20区	調査区南壁土層でだけ確認。SK-86を切る。	Ⅱ層直下から掘り込まれた深さ20～26cmの土壙。詳細は本文196頁に記載。
SK	96	DZ-22区	Ⅳ層上面で検出。	径1.45mほどの不整円形の土壙。詳細は本文197頁に記載。
SC	97	DZ-21・22区	Ⅳ層上面で検出。SD-29，SP-355に切られ，SC-506，SK-504を切る。	長さ3.65m，幅2.8mの隅丸の矩形の掘り形をもつ竪穴建物。詳細は本文81頁に記載。
SC	98	DY・DZ-20･21区	Ⅳ層上面で検出。SC-99，SD-36に切られる。	推定南北長3.6m，東西幅2.8mの隅丸長方形の竪穴建物。SP-344･359･360を柱穴とする4本柱構造が考えられる。詳細は本文82頁に記載。
SC	99	DZ-20区	Ⅳ層上面で検出。SC-36中央部～南西部分，SK-543，SP-361・438に切られ，SC-98を切る。	一辺3.5～4mほどの隅丸方形の竪穴建物と推定。詳細は本文84頁に記載。
SC	100	DY・DZ-23区	Ⅳ層上面で検出。SK-501に切られる。	南北長3.3m，東西幅2.45mと推定される隅丸長方形の掘り形をもつ竪穴建物。詳細は本文85頁に記載。
SP	101	DT-22	SC-9の床面で検出。	SC-9の柱穴。径35cmの円形の掘り形をもち，径16×22cmの立柱痕跡を確認。詳細は本文18頁に記載。
SP	102	DT-23区	SC-9の床面で検出。	径20～22cm，深さ9cmほどの不整円形の小穴。詳細は本文18頁に記載。
SP	103	DT-23区	SC-9の床面で検出。	長さ35cm，幅2cm，深さ7cmの不整形の窪み。詳細は本文18頁に記載。
SK	104	DS-22区	SC-5床面で検出。	SC-5北壁沿いのほぼ中央に掘られた推定径80cmほどの半円形の小型土壙。出入り口に伴う掘り込みの可能性が高い。詳細は本文14頁に記載。
SP	105	DT-22区	SC-5の床面で検出。	長径60cmほどの浅い小穴。SC-5に伴うかは不明。詳細は本文15頁に記載。
SP	106	DT-21区	Ⅳ層上面で検出。	径66～67cmの円形に深さ2～3cmほど掘り込み，径15cm，深さ32cmの小穴がさらに掘り込まれる。立柱痕跡は確認できなかった。SP-135と掘立柱建物を構成する可能性がある。詳細は本文222頁に記載。
SP	107	DT-21区	Ⅳ層上面で検出。	径45～47cm，深さ3cm前後の円形の浅い皿状の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土の直径５cm前後の軟らかい小塊が混じる。底面にはかなり凹凸がみられる。樹根痕か，Ⅲ～Ⅳ層の層界部の窪みか?
SP	108	DT-21･22区	Ⅳ層上面で検出。SC-4，SP-109を切る。	径65cm，深さ1～2cmほど円形の浅い皿状の小穴。詳細は本文222頁に記載。
SP	109	DT-21･22区	Ⅳ層上面で検出。SC-4を切り，SP-108に切られる。	長径45cm，短径39cm，Ⅳ層上面からの深さ32cmの小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，小指先大の浅黄色土塊が非常に多く混じる。詳細は本文222頁に記載。
SP	110	DT-22区	Ⅳ層上面で検出。	径23～25cm，深さ15cmの不整円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルト。
SP	111	DT-22区	SC-5の床面で検出。	径40cm，深さ22cmの長円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。SC-5の柱穴と判断。詳細は本文14頁に記載。
SP	112	DT-22区	SC-9の床面で検出。	径13cm前後，深さ8cmほどの円形の小穴。SC-9に伴うかは不明。詳細は本文18頁に記載。
SP	113	DU-23区	Ⅳ層上面で検出。	径21～22cm，深さ3cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土塊が多く混じり，全体として褐色ぎみの土色。底面には小さな凸凹がみられ，樹根跡の可能性が高い。
SP	114	DT-23区	Ⅳ層上面で検出。	長さ57cm，幅51～52cmの不整な隅丸長方形の掘り形をもつ。底面にはかなり凹凸があり，北側にテラス状の段がある。Ⅳ層上面からの深さは4～12cm。埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が多く混じり，全体として褐色に近い土色を呈する。
SP	115	DT・DU-23区	Ⅳ層上面で検出。	径57cm，深さ12cmほどの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が多く混じり，全体として褐色に近い土色を呈する。
SP	116	DT-23区	Ⅳ層上面で検出。	径22～24cm，深さ22～23cmの円形の小穴。詳細は本文222頁に記載。
SP	117	DT-23区	Ⅳ層上面で検出。	径34～35cm，深さ4cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質土に浅黄色砂質土が多く混じり，全体として褐色に近い土色を呈する。
SP	118	DT-23区	Ⅳ層上面で検出。東半部を塹壕で破壊されている。	長径60cm，短径45cmほどの長円形の掘り形をもつと考えられる。深さ3～4cmで底面には凹凸がみられる。皿状を呈する。埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が多く混じる。
SP	119	DT-23区	Ⅳ層上面で検出。SK-547を切る。	長径50cm，短径46cm，深さ11～12cmの円形の小穴。詳細は本文222頁に記載。
SP	120	DS-22・23区	Ⅳ層上面で検出。	長径32cm，短径25cm，深さ17cmの長円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。詳細は本文222頁に記載。
SP	121	DS-23区	Ⅳ層上面で検出。	長径30cm，短径27cm，深さ5～6cmの浅い長円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルト。
SP	122	DS-23区	Ⅳ層上面で検出。	長さ65cm，幅37～38cm，深さ6～7cmの隅丸長方形の掘り形をもつ。断面は浅い舟底状を呈する。埋土は暗褐色砂質土で，親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。土器の小片や炭化物片が出土。
SP	123	DT-23区	Ⅳ層上面で検出。西半部を塹壕で破壊される。	推定径37cm前後，深さ11cmの円形の掘り形と考えられる。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土の小塊がいくつか混じる。

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SP	124	DT-23区	Ⅳ層上面で検出。	径44～45cmの不整円形の小穴。深さは5～7cmで，西半部がさらに4cmほど窪む。埋土は暗褐色砂質シルトと浅黄色砂質土が混ざり合う。Ⅲ層とⅣ層の層界部の窪みである可能性がある。
SP	125	DS-23区	Ⅳ層上面で検出。SD-10に切られる。	径35cm，深さ8～10cmの円形の小穴。擂り鉢状を呈する。埋土は暗褐色砂質シルト。
SP	126	DT-24区	Ⅳ層上面で検出。	長径45cm，短径38cm，深さ4～5cmの長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先～小指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。部分的に灰白色粗砂が混じる。
SP	127	DT-24区	SC-12の床面で検出。	径17×20cm，深さ5cmほどの長円形の掘り形。長方形の小型竪穴建物であるSC-12の床面の四隅に配置された柱穴の一つと考える。詳細は本文19頁に記載。
SP	128	DT-24区	Ⅳ層上面で検出。	径40～41cm，深さ8cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土の小塊が非常に多く混じる。
SP	129	DS-24区	Ⅳ層上面で検出。	径74cm，深さ21～23cmの円形の小穴。詳細は本文222頁に記載。
SP	130	DS-24区	Ⅳ層上面で検出。SK-13に切られる。	径57cm，深さ19cmの円形の小穴。詳細は本文225頁に記載。
SP	131	DS-24区	Ⅳ層上面で検出。東半部は調査区外にのびる。	長さ55cmほどの隅丸長方形の掘り形をもつ。深さは6cm。埋土は暗褐色砂質シルト。
SP	132	DS-24区	Ⅳ層上面で検出。	長径36cm，短径30cm，深さ17cmの長円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルト。
SP	133	DS-24区	Ⅳ層上面で検出。東半部は調査区外にのびる。	径36～37cm，深さ8～9cmの円形の小穴と考えられる。埋土は極暗褐色砂質シルト。
SP	134	DS-25区	Ⅳ層上面で検出。SK-7を切る。	径59～63cmの円形の掘り形。底面には凹凸があり，深さは16～18cmを測る。南半部がさらに5～7cm窪む。埋土は極暗褐色砂質シルトで，浅黄色やにぶい黄褐色の砂質土が散満に混じる。
SP	135	DT-21･22区	Ⅳ層上面で検出。	径67～70cmの円形に深さ7～12cmほど掘り込み，径22cm，深さ25cmの小穴がさらに掘り込まれる。立柱痕跡を確認。SP-106とともに掘立柱建物を構成する可能性がある。詳細は本文225頁に記載。
SP	136	DS-23区	Ⅳ層上面で検出。	径20～22cm，深さ3～4cmの浅い皿状の円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルト。
SP	137	DT-25区	Ⅳ層上面で検出。	長径41cm，短径33cm，深さ6cm前後の長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルト。
SP	138	DU-25区	Ⅳ層上面で検出。	径25cm，深さ6cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が多く混じる。
SP	139	DU-25区	Ⅳ層上面で検出。	長径24cm，短径21cm，深さ16cmの長円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土が多く混じる。また，径5～7cmの灰褐色粘土塊がみられる。
SP	140	DU-25区	Ⅳ層上面で検出。	径28～30cm，深さ15cmの不整円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，径2～4cmの浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	141	DU-24区	Ⅳ層上面で検出。	径29cm，深さ7cmの円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，小指先大の浅黄色砂質シルト塊が多く混じる。
SP	142	DU-24区	Ⅳ層上面で検出。	径41～43cm，深さ7～8cmの不整円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，小指先大の浅黄色砂質シルト塊が多く混じる。
SP	143	DT-24区	Ⅳ層上面で検出。南半部を塹壕で破壊されている。	径18cm前後，深さ3cmの円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊が少量混じる。
	144	欠番	Ⅳ層上面で検出したが，非常に浅い窪みで，人為的に掘られた遺構ではなく，Ⅲ層下面の落ち込みと考え，欠番とした。	
	145	欠番	Ⅳ層上面で検出したが，非常に浅い窪みで，人為的に掘られた遺構ではなく，Ⅲ層下面の落ち込みと考え，欠番とした。	
	146	欠番	Ⅳ層上面で検出したが，非常に浅い窪みで，人為的に掘られた遺構ではなく，Ⅲ層下面の落ち込みと考え，欠番とした。	
SP	147	DV-25区	Ⅳ層上面で検出。	径21～22cm，深さ12cmの円形の小穴。
SP	148	DU･DV-25区	Ⅳ層上面で検出。SD-20を切る。	長径50cm，短径41cm，深さ16～18cmの長円形の小穴。詳細は本文225頁に記載。
SP	149	DV-25区	Ⅳ層上面で検出。	径22～24cmの円形の掘り形をもつ。埋土は極暗褐色砂質土。深さ2～4cmの浅い皿状で，Ⅲ層とⅣ層の層界部の窪みである可能性がある。
SP	150	DV-25区	Ⅳ層上面で検出。	径21～23cm，深さ15～18cmの不整円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，小指先～親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	151	DV-25・26区	Ⅳ層上面で検出。SP-152を切る。	径32cmほど，深さ13cmの不整円形の小穴。詳細は本文225頁に記載。
SP	152	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。SP-151に切られる。	径46～48cm，深さ22cmの円形の掘り形をもつSB-551の柱穴。詳細は本文112頁に記載。
SP	153	DV-25･26区	Ⅳ層上面で検出。	径40～42cm，深さ3～7cmの円形の皿状の掘り形をもつ。底面東端には，径10×15cm，深さ2cmほどの長円形の小穴状の窪みがある。埋土は暗褐色砂質シルトで，径2～4cmの浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	154	DV-25･26区	Ⅳ層上面で検出。SP-155を切る。	径47cm前後の円形の掘り形をもち，礎石が据えられていた。詳細は本文225頁に記載。
SP	155	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。SP-154・155に切られる。	径52cm前後の円形の掘り形をもち，深さは17cm前後。詳細は本文225頁に記載。
SP	156	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径33cm，短径28cm，深さ13cmの長円形の掘り形をもつSB-551の柱穴。詳細は本文112頁に記載。
SP	157	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径40cm，短径35cm，深さ15～16cmの長円形の小穴。詳細は本文225頁に記載。
	158	欠番	Ⅳ層上面で検出したが，非常に浅い窪みで，人為的に掘られた遺構ではなく，Ⅲ層下面の落ち込みと考え，欠番とした。	
SP	159	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径66cm，短径44cm前後の不整長円形の掘り形をもつ。底面には小さな凹凸がみられ，深さは10～11cmを測る。埋土は暗褐色砂質シルトで，小指先～親指先大の浅黄色土塊が多く混じる。埋土中部から土器の破片が出土。
SP	160	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。北半部を塹壕で破壊されている。	推定径65～70cmと考えられる円形の掘り形をもつ。深さ13～14cm。
SP	161	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径65cm，短径51cm，深さ25cm～27ほどの不整な長円形の掘り形をもつSB-551の柱穴。詳細は本文112頁に記載。
SP	162	DU・DV-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径52cm，短径41cm，深さ15cmの不整な長円形の掘り形をもつSB-551の柱穴。詳細は本文112頁に記載。
SP	163	DU-26区	Ⅳ層上面で検出。東半部は調査区外にのびる。	長径70cm前後の長円形の掘り形をもち，土層断面の観察時に立柱痕跡を確認。詳細は本文226頁に記載。
SP	164	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。	径42cm前後の不整円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。詳細は本文226頁に記載。
SP	165	DV-26･27区	Ⅳ層上面で検出。北半部はB区に位置。	長径73cm，短径56cmの不整な長円形の掘り形をもつ。底面西半部が小穴状に窪み，深さは29cmを測る。

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SP	166	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。SP-167に切られる。	長径73cm，短径62cmの長円形の掘り形。詳細は本文227頁に記載。
SP	167	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。SP-166を切る	径40～43cmの円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。本文は本文227頁に記載。
SP	168	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。SP-169に切られる。	径60～62cm，深さ29cmの円形の掘り形をもつSB-551の柱穴。詳細は本文112頁に記載。
SP	169	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径54cm，短径45cmの不整長円形の掘り形をもつ。詳細は本文227頁に記載。
SP	170	DT-23区	SC-9の床面で検出。	径25cmの円形の掘り形をもつが，深さが浅いことから，SC-9床面上の不整形な窪みである可能性が強い。詳細は本文18頁に記載。
SP	171	DS-22区	SC-4の床面で検出。	径17～18cm，深さ8cmの不整円形の掘り形で，立柱痕跡を確認。SC-4の柱穴。詳細は本文12頁に記載。
SP	172	DS・DT-21区	SC-4の床面で検出。	径22cm，深さ５cmの不整円形の掘り形をもつ。SP-171・173を結ぶ線上に位置することから，SC-４に伴う小穴と考えた。詳細は本文12頁に記載。
SP	173	DT-21区	SC-4の床面で検出。	径18～19cm，深さ4cmの不整円形の掘り形で，立柱痕跡を確認。SC-4の柱穴。詳細は本文12頁に記載。
SP	174	DT-25区	北半部は調査区外にのびる。	径24cm，深さ7cmの円形の掘り形をもつ。詳細は本文227頁に記載。
SP	175	DT-24区	Ⅳ層上面で検出。	長径43cm，短径30cm，深さ7～9cmの皿状の掘り形。埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土シルトが多く混じる。
SP	176	DV-26区	Ⅳ層上面で検出。南半部を塹壕で破壊されている。	幅40～45cmほどの隅丸方形の掘り形と考えられる。詳細は本文227頁に記載。
SP	177	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。	径24～25cm，深さ19～20cmの円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。
SP	178	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径25cm，短径20cm，深さ17～18cmの不整長円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，小指先～親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。
SP	179	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。	径30cm前後，深さ18cmの不整円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトに，少量のにぶい黄褐色砂質シルトが混じる。
SP	180	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。	径30～32cm，深さ8～9cmの円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。詳細は本文227頁に記載。
SP	181	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径40cm，短径36cm，深さ6～8cmの長円形の小穴。詳細は本文227頁に記載。
SP	182	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径31cm，短径26cm，深さ12cmの小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，小豆～小指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。
SP	183	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。SC-26，SD-21を切る。	径35×39cm，検出面からの深さ14cmを測る長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じる。図23参照。
SP	184	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径34cm，短径29cmの長円形で，深さ6cmの浅い皿状の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。
	185	SP-255に二重に遺構番号を付してしまったので欠番とした。		
	186	SP-267に二重に遺構番号を付してしまったので欠番とした。		
	187	SP-266に二重に遺構番号を付してしまったので欠番とした。		
	188	欠番。		
	189	SP-256に二重に遺構番号を付してしまったので欠番とした。		
SP	190	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。	径26cm前後，深さ11cmの不整円形の小穴。図116上段参照。
SP	191	DX-26区	Ⅳ層上面で検出。攪乱で大半を破壊されている。	弧状に残る掘り形の一部を確認したにとどまる。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じる。図116上段参照。
SP	192	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。	長さ54cm，幅37cmの隅丸長方形の掘り形で，深さは5cm前後と浅く，皿状。埋土は暗灰色砂質シルトに浅黄色砂質シルトが非常に多く混じり，Ⅲ層とⅣ層の層界部の窪みである可能性が高い。
	193	欠番。		
SP	194	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。SC-26を切る。	径31×36cm，Ⅳ層上面からの深さ17～18cmの長円形の掘り形をもつ小穴。埋土は，極暗褐色砂質シルトで，小指～親指先大のにぶい黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じる。炭化物の細片が出土。図23参照。
SP	195	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。SC-26を切る。	径25×27cm，Ⅳ層上面からの深さ3cmほどの浅い皿状の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，親指先大～拳大の黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じる。図23参照。
SP	196	DW-26区	SC-26を切る。SK-28に切られる。	推定径35cm，検出面からの深さ18cmを測る小穴。埋土は極暗褐色砂質シルト，ごく少量のにぶい黄褐色砂質土が混じる。図23参照。
SP	197	DW-26区	SC-26の床面で検出。	径33×40cmの長円形の掘り形を持ち，埋土は，極暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土が部分的に混じる。炭化物片がごく少量出土。図23参照。
SP	198	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。SP-325を切り，SK-27に切られる。	径45cm，深さ20cmの円形の小穴。詳細は本文228頁に記載。図116上段を参照。
SP	199	DW-26区	SC-26の床面で検出。西端を塹壕で破壊される。	径34cm，床面からの深さ10cmの掘り形を持つ。埋土は極暗褐色砂質シルトで，SC-26の埋土とは明確に区分できた。図23参照。
SP	200	DW-26区	SC-26の床面で検出。	径35～36cmの円形の小穴。立柱痕跡を確認。詳細は本文228頁に記載。
SP	201	DW-26区	SC-26を切る。西端を塹壕で破壊される。	推定長径40～45cm，短径33cmの楕円形の小穴。詳細は本文228頁に記載。
SP	202	DW-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径54cm，短径48cm，深さ31cmほどの不整な長円形の掘り形をもつSB-549の柱穴。詳細は本文109頁に記載。
SP	203	DU-24区	Ⅳ層上面で検出。SK-19を切る。	径25～28cm，深さ10cmの円形の小穴。詳細は本文228頁に記載。
	204	欠番	Ⅳ層上面で検出したが，非常に浅い窪みで，人為的に掘られた遺構ではなく，Ⅲ層下面の落ち込みと考え，欠番とした。	
	205	欠番	Ⅳ層上面で検出したが，非常に浅い窪みで，人為的に掘られた遺構ではなく，Ⅲ層下面の落ち込みと考え，欠番とした。	
SP	206	DU・DV-23区	Ⅳ層上面で検出。SK-31を切る。	径48～49cmの円形の小穴。深さ1～2cmの浅い皿状で，埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が多く混じる。Ⅲ層とⅣ層の層界の窪みである可能性が高い。
	207	欠番	Ⅳ層上面で検出したが，非常に浅い窪みで，人為的に掘られた遺構ではなく，Ⅲ層下面の落ち込みと考え，欠番とした。	

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SP	208	DU-23区	Ⅳ層上面で検出。	長径90cm，短径70cm，深さ8cm前後の不整長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトにわずかに浅黄色砂質土が混じる。浅い皿状の小穴であり，Ⅲ層とⅣ層の層界の窪みである可能性が高い。
SP	209	DU・DV-23区	Ⅳ層上面で検出。	長径77cm，短径63cmの長円形の小穴。深さ2～3cmの浅い皿状で，暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が少量混じる。Ⅲ層とⅣ層の層界の窪みである可能性が高い。
SP	210	DU-23区	Ⅳ層上面で検出。	径53～56cmの円形の小穴。底面には凹凸があり，深さは5～8cmを測る。埋土は極暗褐色砂質土に浅黄色の砂質土が多く混じり，全体として淡い褐色に近い土色を呈する。Ⅲ層とⅣ層の層界の窪みである可能性が高い。土器の小片が1点出土。
SP	211	DU-23区	Ⅳ層上面で検出。SP-212を切る。	長径48cm，短径38cm，深さ6cmほどの浅い皿状の小穴。詳細は本文228頁に記載。
SP	212	DU-23区	Ⅳ層上面で検出。SP-211に切られる。	長径43cm，短径40cm，深さ13cm前後の不整長円形の小穴。詳細は本文228頁に記載。
SP	213	DU-23区	Ⅳ層上面で検出。	径20～22cm，深さ3cmほどの浅い円形の小穴。浅い皿状の小穴で，埋土は極暗褐色砂質土に浅黄色砂質土が多く混じるので，Ⅲ層とⅣ層の層界の窪みである可能性が高い。
SP	214	DU-22区	Ⅳ層上面で検出。	長径51cm，短径47cm，深さ4cmの長円形の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質土に浅黄色砂質土が多く混じる。
SP	215	DU-22区	Ⅳ層上面で検出。	長径40cm，短径35cmの長円形の掘り形をもち，深さは2cmほどで，東半部の底面は径18cm，深さ8cmほど円形の小穴状に窪む。埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が多く混じり，全体として褐色に近い土色を呈する。
SP	216	DU-21区	Ⅳ層上面で検出。	径26～28cm，深さ5cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，小指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。土器の小片が１点出土。
SP	217	DU-21区	Ⅳ層上面で検出。	径33cm，深さ5～8cmの円形の小穴。。埋土は極暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土が少量混じる。
SP	218	DU-21区	Ⅳ層上面で検出。	長さ70cm，幅60cm，深さ6～7cmの不整形の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先～小指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。
	219	欠番	Ⅳ層上面で検出したが，非常に浅い窪みで，人為的に掘られた遺構ではなく，Ⅲ層下面の落ち込みと考え，欠番とした。	
SP	220	DT-20区	Ⅳ層上面で検出。	径44cm，深さ15cmの円形の掘り形。詳細は本文228頁に記載。
SP	221	DV-25区	SC-25の床面で検出。	径46～49cm，深さ16cmの掘り形をもち，立柱痕跡を確認。SC-25の主柱穴。詳細は本文20頁に記載。
SP	222	DV-25区	SC-25の床面で検出。	径47～53cm，深さ11cmの長円形の掘り形をもち，立柱痕跡は未確認であるが，配置関係からSC-25の主柱穴と考える。詳細は本文20頁に記載。
SP	223	DV-24区	SC-25の床面で検出。	径54～59cm，深さ16cmの長円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。SC-25の主柱穴。詳細は本文20頁に記載。
SP	224	DW-24区	Ⅳ層上面で検出。SC-37を切る。	径26×32cm，深さ13cmを測る長円形の掘り形をもつ。詳細は本文228頁に記載。
SP	225	DW-25区	SC-37の床面で検出。	径26×31cm，深さ2cmほどの浅皿状の窪み。SC-37に伴う可能性が高い。詳細は本文51頁に記載。
SP	226	DW-25区	SC-37の床面で検出。	径36×45cm，深さ12～13cmの長円形の掘り形をもつ。立柱痕跡を確認。SC-37の柱穴。詳細は本文51頁に記載。
SP	227	DW-25区	Ⅳ層上面で検出。SC-37を切る。	径40×41cm，検出面からの深さ6.5cmを測る円形の皿状の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色シルトの小塊が多く混じる。
SP	228	DW-24区	Ⅳ層上面で検出。SD-79の掘削痕跡と切り合う。	径28～32cmの小穴。
SP	229	DW-25区	Ⅳ層上面で検出。SC-37を切る。	径34×43cm，深さ25cmを測る長円形の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大の浅黄色砂質土の小塊が多く混じる。
SP	230	DW-25区	Ⅳ層上面で検出。	長径43cm，短径39cm，深さ11cmの胴張りの隅丸方形の小穴。埋土は極暗褐色砂質土で，上部を中心として径2～3cmの浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	231	DW・DX-25区	Ⅳ層上面で検出。	径36～38cm，深さ24cm前後の円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，少量の浅黄色砂質土が混じり，全体としてやや白っぽい土色を呈する。
SP	232	DX-25･26区	Ⅳ層上面で検出。	径44～46cm，深さ17cmの円形の小穴。底面はかなり凹凸がある。埋土上半は極暗褐色砂質シルト，下半は暗茶褐色砂質シルトで，縞状に浅黄色砂質土の薄層がみられる。
SP	233	DX-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径29cm，短径25cm，深さ24cmの長円形の小穴。詳細は本文228頁に記載。
SP	234	DV-24区	Ⅲ層下部で検出。	径55cm前後，深さ30cmほどの円形の掘り形をもち，礎石を埋置している。詳細は本文229頁に記載。
SP	235	DW-22区	Ⅳ層上面で検出。	径23～24cm，深さ29cm前後の円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土が多く混じる。中位～下位では逆に暗褐色シルト塊が浅黄色砂質土の中に混じる。詳細は本文229頁に記載。
SP	236	DW-22区	Ⅳ層上面で検出。	径27～28cm，深さ22cmの円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。詳細は本文229頁に記載。
SP	237	DY-21区	Ⅳ層上面で検出。	南端部を攪乱で破壊。長径70cm，短径50～55cmの長円形の小穴。底面には凹凸がみられ，深さは4～15cm。埋土上部は暗褐色砂質シルトで，下部には浅黄色砂質土が非常に多く混じる。土器の小片が出土。
SP	238	DY-21区	Ⅳ層上面で検出。	長径67cm，短径51cmの長円形の小穴。底面は凹凸にとみ，深さは22～23cm。埋土は暗褐色砂質シルトで，拉げた浅黄色砂質土塊が帯状に多く縞状に混じる。土器の小片が出土。
SP	239	DY-21区	Ⅳ層上面で検出。	長径37cm，短径35cm，深さ8cm前後の長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土が多く混じる。土器の小片が出土。
SP	240	DY-22区	Ⅳ層上面で検出。SD-29を切る。	長径65cm，短径58cmの長円形の小穴。底面は南半部が深くなり，深さは16～23cmを測る。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土が多く混じり，全体に明るい土色を呈する。
SP	241	DY-22区	Ⅳ層上面で検出。	長径58cm，短径44cm，深さ15cmの擂り鉢状の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。土器の小片が出土。
SP	242	DY-29区	Ⅳ層上面で検出。SP-550を切る。	径30cm，深さ14cmの不整円形の小穴。
SP	243	DZ-22区	Ⅳ層上面で検出。	長径35cm，短径26cm，深さ10～13cmの長円形の小穴。
SP	244	DY-22･23区	Ⅳ層上面で検出。	径48～52cm，深さ27～32cmの不整円形の小穴。詳細は本文229頁に記載。
SP	245	DY-22区	Ⅳ層上面で検出。	長径29cm，短径27cm，深さ17cmの長円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が少量混じる。
SP	246	DX-22･23区	Ⅳ層上面で検出。SC-47を切る。	径63×74cm，深さ15cmほどの長円形の掘り形をもつ小穴。底面にはかなりの凹凸がみられる。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
	247	欠番	Ⅳ層上面で検出したが，非常に浅い窪みで，人為的に掘られた遺構ではなく，Ⅲ層下面の落ち込みと考え，欠番とした。	
SP	248	DX-23区	Ⅳ層上面で検出。SK-59を切る。	径45～47cmの円形で，深さ2～3cmの浅い皿状の小穴。詳細は本文229頁に記載。
SP	249	DY-23区	Ⅳ層上面で検出。SP-250と切り合う。	長径44cm，短径39cm，深さ10～11cmの長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，拳大の浅黄色砂質土塊が点々と混じる。土器の小片が出土。
SP	250	DY-23区	Ⅳ層上面で検出。SP-249と切り合う。	径42～43cm，深さ11cmの小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土か非常に多く混じる。皿状で，底面には凹凸があり，Ⅲ層とⅣ層の層界の窪みである可能性も残す。土器の小片が出土。
SP	251	DY-23区	Ⅳ層上面で検出。	長さ86cm，幅66～67cm，深さ3～5cmの不整な隅丸長方形の掘り形。浅い舟底条の遺構で，埋土は浅黄色砂質土中に拳大の極暗褐色砂質土塊が混じる。Ⅲ・Ⅳ層境界の凹みである可能性を残す。
SP	252	DX-22区	Ⅳ層上面で検出。SK-48を切る。	径40cm，深さ13cmの円形の小穴。底面は南側が若干深くなる。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土が多く混じる。
SP	253	DX-21区	Ⅳ層上面で検出。SP-254を切る。	径29×31cmの円形の掘り形。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色細砂質土が非常に多く混じる。掘りすぎてしまったが，本来は深さ3cmほどの浅い小穴で，Ⅲ・Ⅳ層境界の凹みである可能性を残す。
SP	254	DX-21区	Ⅳ層上面で検出。SP-253に切られる。	長径43cm，推定短径34cmほど，深さ2～3cmの皿状の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，直径3～4cmの浅黄色細砂質土塊が多く混じる。
SP	255	DW-27区	Ⅳ層上面で検出。	推定長径75cm，短径64cm，深さ42～44cmの長円形の掘り形をもつ。規模的には掘立柱建物の柱穴と共通する。図103を参照。
SP	256	DW・DX-26区	Ⅳ層上面で検出。	径86～88cm，深さ50cmの掘り形をもつSB-74の柱穴。詳細は本文105頁に記載。
SP	257	DX-26区	Ⅳ層上面で検出。SD-21に切られる。	推定径80cm前後，深さ42～48cmの円形の掘り形をもつ。SB-74・548の柱穴が重複。詳細は本文105頁に記載。
SP	258	DX-26区	Ⅳ層上面で検出。SP-258はSC-78を切る。	径76×67cm，深さ56cmの長円形の掘り形をもつSB-74の柱穴。詳細は本文105頁に記載。
SP	259	DX-26・27区	Ⅳ層上面で検出。	長径76cm，短径63cm，深さ52cmの隅丸長方形の掘り形をもつSB-74の柱穴。詳細は本文105頁に記載。
SP	260	DY-27区	Ⅳ層上面で検出。西端を塹壕で破壊されている。	径62cm前後の円形の掘り形をもつと考えられる。深さ80cmほどの擂り鉢状を呈する。図103を参照。
SP	261	DX-23区	SC-47の床面で検出。	径49×67cm，深さ8cmほどの長円形の掘り形をもつSC-47の柱穴。詳細は本文63頁に記載。
SP	262	DY-27区	Ⅳ層上面で検出。西半部を塹壕で破壊されている。SB-74の柱列上に位置する。	長径60cm，推定短径55cmほど，深さ40cm前後の長円形の小穴。
SP	263	DW・DX-23区	SC-47の床面で検出。	径26～27cm，深さ10cmの円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質土。図60を参照。
SP	264	DW-23区	SC-47の床面で検出。	径26cm前後，深さ8.5cmほどの円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルト。図60を参照。
SP	265	DW・DX-23区	SC-47の床面で検出。	径20×23cm，深さ10cmの長円形の掘り形をもつ小穴。埋土は暗褐色砂質土で，浅黄色砂質土が少量混じる。弥生土器の小片が1点，埋土中から出土。図60を参照。
SP	266	DW・DX-26・27区	Ⅳ層上面で検出。	径46～48cm，深さ20～22cmの円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。詳細は本文229頁に記載。図105を参照。
SP	267	DX-27区	Ⅳ層上面で検出。SC-78を切る。	径62～67cm，深さ36cmの不整円形の掘り形をもつSB-548の柱穴。詳細は本文107頁に記載。
SP	268	DX-26区	Ⅳ層上面で検出。SC-78を切り，SB-548の柱穴SP-267に切られる。	径38～40cm，深さ17cmの不整円形の小穴。図103を参照。
SP	269	DX-26区	Ⅳ層上面で検出。	径50～53cm，深さ29～33cmの不整円形の掘り形をもつSB-549の柱穴。詳細は本文110頁に記載。
SP	270	DX-26・27区	Ⅳ層上面で検出。SC-78を切る。	長軸長53cm，短軸長43cm，深さ20～36cmの隅丸長方形の掘り形をもつ柱穴。詳細は本文229頁に記載。図70を参照。
SP	271	DX-26区	Ⅳ層上面で検出。西端を攪乱溝で破壊されている。	径46～47cmの円形の掘り形をもち，掘り形中央で径12cmほどの立柱痕跡を確認したが，降雨のため壁面が崩れ，土層断面図を作成できなかった。図105を参照。
SP	272	DY-26区	Ⅳ層上面で検出。SP-273を切る。	径38～40cm，深さ21cmの円形の掘り形をもち，掘り形中位で立柱痕跡を確認。詳細は本文230頁に記載。図105を参照。
SP	273	DY-26区	Ⅳ層上面で検出。SP-272に切られる。	長径58cm，短径50～55cm，深さ38cmの不整長円形の小穴。詳細は本文230頁に記載。図105を参照。
SP	274	DY-26区	Ⅳ層上面で検出。SD-21を切る。	長径46cm，短径40cm，深さ9cmの長円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，小豆～親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	275	DY-26区	SC-69の床面で検出。	径35×39cm，深さ2cmほどの浅い皿状の小穴。埋土は暗褐色砂質シルト。図64を参照。
SP	276	DY-26区	SC-69の床面で検出。	径38～41cm，床面からの深さ13cmを測る円形の掘り形をもつSC-69の柱穴。詳細は本文67頁に記載。
SP	277	DY-29区	Ⅳ層上面で検出。西半部を既設管路の掘り形で破壊される。	推定径24cm，深さ10～13cmの不整円形の小穴。図116下段を参照。
SP	278	DY-26区	SC-69を切る。	径57cm，深さ55cmの円形の掘り形をもつ柱穴。詳細は本文230頁に記載。図64を参照。
SP	279	DY-26区	SC-69の床面で検出。	径46×50cm，深さ6cmほどの長円形の掘り形をもつSC-69の柱穴。詳細は本文67頁に記載。
SP	280	DY-26区	SC-69の床面で検出。	南半部を塹壕で破壊されている。推定径50cm前後，床面からの深さ25cmの円形の掘り形をもつ。埋土中位～上半部は暗褐色砂質土で，親指先大の浅黄色やにぶい黄褐色の砂質土の小塊が非常に多く混じる。下半部は浅黄色砂質土で，親指先大の暗褐色砂質土塊が点々と混じる。図64を参照。
SP	281	DX・DY-26区	Ⅳ層上面で検出。	径47～49cm，深さ23cmの円形の掘り形をもち，立柱の先端部分だけが残された痕跡を確認。詳細は本文230頁に記載。図105を参照。
SP	282	DX-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径63cm，短径53cm，深さ40cmを測る不整円形の掘り形をもつSB-548の柱穴。詳細は本文107頁に記載。
SP	283	DX-26区	Ⅳ層上面で検出。SD-21を切り，西端を攪乱で破壊されている。	長径69cm，深さ7cmの円形の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質土で，小豆～親指先大の浅黄色やにぶい黄褐色の砂質土塊が多く混じる。
SP	284	DX・DY-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径36cm，短径31cm，深さ20～21cmの長円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，小豆大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SP	285	DY-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径39cm，短径35cmの長円形の掘り形をもつ。底面西半部がやや深く，深さは19～21cmを測る。埋土は極暗褐色砂質シルトで，径3～4cmの浅黄色やにぶい黄褐色の砂質土塊が多く混じる。
SP	286	DX-25区	Ⅳ層上面で検出。SK-2を切る。	長径63cm，短径51cm，深さ7cmほどの長円形の皿状の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先～小豆大の浅黄色砂質シルト塊が下部を中心として多く混じる。
SP	287	DW-26区	SC-26の床面で検出。東側を塹壕で破壊される。	SC-26の柱穴。詳細は本文27頁に記載。
SP	288	DW-26区	SC-26の床面で検出。西半部を塹壕で破壊される。	推定径33cm，深さ14～15cmを測る円形の小穴。埋土は暗褐色砂質土で，東側からにぶい黄褐色砂質土が縞状に流れ込む。炭化物の小片がごく少量出土。図23を参照。
SP	289	DX-23･24区	SC-47の床面で検出。	南半部を塹壕で破壊。推定径50cm，深さ31cmの不整円形の掘り形をもつと考えられる。埋土は暗褐色砂質シルトで，中位に帯状に浅黄色砂質土がみられる。図60を参照。
SP	290	DX-23区	SC-47の床面で検出。	南半部を塹壕で破壊されている。推定径50cm前後，深さ3～5cmの浅い皿状の小穴。底面は凹凸にとむ。弥生土器の小片が底面直上から出土。図60を参照。
SP	291	DX-23区	SC-47の床面で検出。	北側を塹壕で破壊されるが，径45～50cmほどの円形の掘り形が推定できる。床面からの深さ3～5cmほどの浅い皿状の小穴。底面は凹凸にとむ。埋土は褐色砂質シルトで，灰白色砂質土が多く混じり，全体にやや白っぽい土色を呈する。図60を参照。
SP	292	DX-23区	SC-47の床面で検出。	北側を塹壕で破壊されている。推定径45cm，深さ10cmほどの掘り形をもつ小穴。埋土は暗渇色砂質土で，部分的に親指先大の灰白色砂質土塊が混じる。図60を参照。
SP	293	DX-23区	SC-47の床面で検出。	径41～42cm，深さ13cmの円形の掘り形をもつ小穴。埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が混じる。図60を参照。
SP	294	DX-23区	SC-47の床面で検出。	径44～45cm，深さ16cmの円形の掘り形をもつ小穴。埋土は浅黄色砂質土が多く混じりやや白みをおびた暗褐色の砂質シルト。図60を参照。
SP	295	DX-23区	SC-47の床面で検出。	径32～34cm，深さ13cmの円形の掘り形をもつ小穴。埋土は浅黄色砂質土が多く混じりやや白みをおびた暗褐色砂質シルト。図60を参照。
SP	296	DX-27区	SC-78床面で検出。SP-297に切られる。	SC-78の柱穴。詳細は本文71頁に記載。
SP	297	DX-27区	SC-78床面で検出。SP-296を切る。	径26×29cm，深さ7cmほどの長円形の小穴。埋土は浅黄色砂質土で，非常に多くの親指先大の暗褐色砂質土塊や，小豆大のにぶい黄褐色砂質土塊が混じる。図70を参照。
SP	298	DU-25区	SC-43床面で検出。	長径21cm，短径19cmの長円形の小穴。底面は北西部が窪み，深さ15cmを測る。埋土は極暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土が幅0.5～１cmの帯状にみられる。図55を参照。
SP	299	DU-25区	SC-43床面で検出。	長径25cm，短径21cm，深さ7cmの長円形の小穴。埋土は浅黄色砂質土で，非常に多くの親指先大の暗褐色砂質土塊や，小豆大のにぶい黄褐色砂質土塊が混じる。図55を参照。
SP	300	DU-25区	SC-43床面で検出。	径26～27cm，深さ11cmほどを測る円形の掘り形をもつSC-43の柱穴。詳細は本文61頁に記載。
SP	301	DU・DV-25区	SC-43床面で検出。	径24×27cm，深さ8～9cmの長円形の掘り形をもつSC-43の柱穴。詳細は本文61頁に記載。
SP	302	DV-25区	SC-43床面で検出。	径33×37cm，深さ4cmを測る浅い掘り形をもつ小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，径1～2cmの拉げた浅黄色砂質土の小塊が多く混じる。図55を参照。
SP	303	DV-25区	SC-41の床面で検出したが，古墳時代後期の小穴である可能性が高い。	長軸長65cm，短軸長35cm，深さ5cm前後の皿状に窪む小穴。詳細は本文58頁に記載。図16を参照。
SP	304	DV-25区	SC-41の床面で検出したが，須恵器が出土していることから，SC-41を切ると判断。	推定径55cmの円形の小穴。詳細は本文58頁に記載。図16を参照。
SP	305	DU-25区	SC-42の床面で検出。	長軸長36cm，短軸長28cmの楕円形の小穴。詳細は本文60頁に記載。図55を参照。
SP	306	DV-25区	SC-42の床面で検出。SD-45に切られる。	径33cmほどの不整な円形の掘り形をもつSC-42の柱穴。詳細は本文59頁に記載。
SP	307	DV-25区	SC-536の床面で検出。	径31×27cm，深さ21cmの長円形の掘り形をもつ。SC-536の柱穴。詳細は本文97頁に記載。
SP	308	DU-24区	SC-42の床面で検出。	径34～35cm，深さ11cmを測るSC-42の柱穴。詳細は本文59頁に記載。
SP	309	DW-26区	SC-26の床面で検出。南端部をSK-28に切られる。	長径50cm，短径42cmほどのSC-26の柱穴。詳細は本文27頁に記載。
SP	310	DW-24区	Ⅳ層上面で検出。南半部を塹壕で破壊されている。塹壕で破壊されている。	推定径45cm前後の円形の掘り形と考えられる。深さ21cmほどの擂り鉢状。埋土は暗褐色砂質土で，径3～5cmの浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	311	DX-24区	Ⅳ層上面で検出。	長径39cm，短径34cm，深さ14cmの長円形の小穴。埋土上部は暗褐色砂質シルト，下半部には浅黄色砂質土が非常に多く混じる。
SP	312	DX-24区	Ⅳ層上面で検出。	径41×45cm，深さ16～17cmの不整円形で擂り鉢状の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルトで，下部を中心として浅黄色砂質土が非常に多く混じる。
SP	313	DV-23区	SC-32床面で検出。	径31×39cm，深さ5cm前後の長円形の掘り形をもつ。埋土は，極暗褐色砂質シルトで，浅黄褐色砂質土が非常に多く混じる。図26を参照。
SP	314	DV-23区	SC-32床面で検出。	径25cm，深さ4～6cmの小穴。埋土は極暗褐色砂質シルト。図26を参照。
SP	315	DV-23区	SC-32床面で検出。	径30～31cm，深さ7～8cmの円形の掘り形をもつ小穴。埋土は極暗褐色砂質シルト。図26を参照。
SP	316	DV-23区	SC-32床面で検出。	長軸長27cm，短軸長35cm，深さ9～10cmの楕円形の小穴。底面は凹凸にとむ。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土の小塊が非常に多く混じる。図26を参照。
SP	317	DV-23区	SC-32床面で検出。	SC-32の柱穴。詳細は本文30頁に記載。
SP	318	DV-23区	SC-32床面で検出。北東部は塹壕で破壊されている。	長軸長47cm，深さ7.5cmの浅い皿状の小穴。底面は凹凸にとむ。埋土は極暗褐色砂質土で，親指先大の浅黄色砂質土の塊が多く混じる。図26を参照。
SP	319	DV-23区	SC-32床面で検出。	立柱痕跡をもつ。径31×35cm，SC-32の床面からの深さ8cmの不整な長円形の掘り形をもつ。詳細は本文230頁に記載。図26を参照。
SP	320	DV-23区	SC-32床面で検出。	SC-32の柱穴。詳細は本文30頁に記載。
SP	321	DV-23区	SC-32床面で検出。	径27×32cmの不整な長円形の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質シルトで，ごく少量の浅黄色砂質土がまじり，全体に，やや白っぽい土色を呈する。図26を参照。
SP	322	DV-23区	SC-32床面で検出。	SC-32の柱穴。詳細は本文30頁に記載。
SP	323	DW・DX-26区	Ⅳ層上面で検出。	推定径42cm前後，深さ27cmの円形の掘り形をもつSB-549の柱穴。詳細は本文110頁に記載。
SK	324	DS・DT-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。SK-409を切る。	断面での掘り形幅3.2mと大型土壙。詳細は本文197頁に記載。

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SP	325	DW・DX-26区	Ⅳ層上面で検出。SP-198に切られる。	径46×35cm前後，深さ10～11cmの長円形の小穴。詳細は本文230頁に記載。図105を参照。
SP	326	DY-22区	Ⅳ層上面で検出。	長径41cm，短径33cm，深さ12～14cmの長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	327	DY-26区	Ⅳ層上面で検出。	径28～29cm，深さ16cmの円形の小穴。底面中央が緩やかに窪み，深さは16cm前後。埋土は暗褐色砂質土で，褐色シルトのレンズ状や楕円形の塊が多く混じる。
SP	328	DY-26区	Ⅳ層上面で検出。	長径33cm，短径26～27cm，深さ14cmの長円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。詳細は本文230頁に記載。
SP	329	DX-24区	Ⅳ層上面で検出。SD-79と切り合う。	径34～36cm，深さ9～10cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	330	DZ-22区	Ⅳ層上面で検出。	西半部を攪乱で破壊。推定径40cm前後の円形の掘り形。深さは9cm前後。
SP	331	DZ-23区	Ⅳ層上面で検出。	長径58cm，短径45cm，深さ18cm前後の不整長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，下部に厚さ1cm前後の薄い縞状に浅黄色砂質土層が多くみられる。
	332	欠番	Ⅳ層上面で検出したが，非常に浅い窪みで，人為的に掘られた遺構ではなく，Ⅲ層下面の落ち込みと考え，欠番とした。	
SP	333	DY-23区	Ⅳ層上面で検出。SC-84を切り，SP-334に切られる。	長径41cm，短径38cm，深さ11cm前後の長円形の小穴。埋土は極暗褐色砂質シルト。下部に少量の浅黄色砂質土が混じる。
SP	334	DY-23区	Ⅳ層上面で検出。SK-85，SP-333を切る。	長径40cm，短径36cmの長円形の掘り形をもつ。埋土は極暗褐色砂質シルト。南側部分に集中して浅黄色砂質土の小塊がみられたので，立柱痕跡を想定して精査したが，検出されていない。
SP	335	DY-23区	SK-85床面で検出。	長径48cm，短径36cmの不整長円形の小穴。深さ10cmほどで，底面の北東端には径15cm，深さ9～12cmの円形の小穴状の窪みがみられる。埋土は暗褐色砂質シルトで，小指～親指先大のにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じる。図166を参照。
SP	336	DY-23区	SK-85床面で検出。南半部を塹壕で破壊されている。	径42cm前後の円形の小穴。深さは21cm。埋土は暗褐色砂質シルトで，下部に小指～親指先大のにぶい黄褐色砂質土塊が集中する。図166を参照。
SP	337	DY-23区	Ⅳ層上面で検出。	径26～28cm，深さ8cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土が非常に多く混じる。
SP	338	DY-23区	Ⅳ層上面で検出。SD-62を切る。	径25～27cm，深さ7cmの円形の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊がごく少量混じる。
SP	339	DY-21区	Ⅳ層上面で検出。	径32～34cm，深さ16～18cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先～径3cmほどの浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	340	DY-21区	Ⅳ層上面で検出。	径30～32cm，深さ24cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大の浅黄色砂質土塊が点々と混じる。
SP	341	DY・DZ-21区	Ⅳ層上面で検出。SD-29を切る。	長径53cm，短径43cmの長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトと浅黄色砂質シルトが混じり合う。深さも2cmほどと浅く，底面の凹凸が著しく，Ⅲ・Ⅳ層境界の凹み部分である可能性が高い。
SP	342	DV-21区	Ⅳ層上面で検出。	長さ45cm，幅31cmの不整な隅丸長方形の掘り形をもつ。深さは5～6cm。中央に径18cm，深さ23cmほどの円形の小穴状の窪みがさらに掘り込まれる。埋土は暗褐色砂質シルト。
SP	343	DW-21区	Ⅳ層上面で検出。	長径52cm，推定短径45～50cmほどの小穴。詳細は本文230頁に記載。
SP	344	DY-20区	Ⅳ層上面で検出。	SC-98の柱穴。径28×31cmの長円形の掘り形をもつ。詳細は本文82頁に記載。
SP	345	DY-20区	Ⅳ層上面で検出。	長径62cm，短径43cm，深さ11cmの不整長円形の小穴。詳細は本文231頁に記載。
SP	346	DZ-23区	Ⅳ層上面で検出。西半部は調査区外にのびる。	長さ65cm前後の不整な隅丸長方形の掘り形と考えられる。深さは8cm前後。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色や浅黄色の砂質土塊が多く混じる。
SP	347	DZ-23区	Ⅳ層上面で検出。西半部は調査区外にのびる。	径40～45cmの円形の掘り形と考えられる。深さは7cm前後。埋土は，SP-346と同じく暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色や浅黄色の砂質土塊が多く混じる。にぶい黄褐色砂質シルトや浅黄色土の塊は径2～3cmのものが多い。。
SP	348	DZ-23区	Ⅳ層上面で検出。	径37～38cm，深さ17cmほどの不整円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	349	DZ-23区	Ⅳ層上面で検出。	長径35cm，短径28～29cm，深さ16cm前後の不整長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質土で，下部には親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	350	DZ-23区	Ⅳ層上面で検出。	長径44cm，短径34cm，深さ11～15cmの長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトと，浅黄色砂質土が少量混じる。
SP	351	DZ-23区	Ⅳ層上面で検出。	径30～32cm，深さ11～12cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色や浅黄色の砂質シルト塊が多く混じる。
SP	352	DZ-23区	Ⅳ層上面で検出。	径28～29cm，深さ12cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，下部に小指先大の浅黄色砂質土塊が点々と混じる。
SP	353	DZ-22・23区	Ⅳ層上面で検出。	東半部は調査区外にのびる。長径70cmほどの長円形の掘り形と考えられる。深さは8～9cm。埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が多く混じる。
SP	354	DZ-22区	Ⅳ層上面で検出。	径42～44cm，深さ12～14cmの不整円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，径1～3cmの浅黄色砂質土塊が非常に多く混じる。
SP	355	DZ-22区	Ⅳ層上面で検出。SC-97・506を切る。	径50×60cm，検出面のⅣ層上面からの深さ33cmを測る長円形の掘り形の小穴。詳細は本文231頁に記載。
SP	356	DZ-24区	Ⅳ層上面で検出。	長径24cm，短径19cm，深さ12cm前後の不整な長円形の小穴。詳細は本文231頁に記載。
SP	357	DZ-21区	SC-92床面で検出。	径28～29cm，深さ17cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大の浅黄色砂質土塊がごく少量混じる。図77を参照。
SP	358	DZ-21区	SC-92床面で検出。	径25～28cm，床面からの深さ8cmほどを測る不整円形の掘り形をもつSC-92の柱穴。詳細は本文79頁に記載。
SP	359	DY-21区	SC-98床面で検出。	SC-98の柱穴。推定径30cm，深さ14cmほどの掘り形と考えられる。詳細は本文82頁に記載。
SP	360	DZ-20区	SC-98床面で検出。	SC-98の柱穴。径25～26cmの円形の掘り形をもち，径13cmの立柱痕跡を確認。詳細は本文82頁に記載。
SP	361	DZ-20区	Ⅳ層上面で検出。SC-98・99を切る。	径39×42cm，深さ4～5cmほどの皿状の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SK	362	DY-20区	SC-98の床面で検出。	長軸長95cm，推定短軸長42cm前後，深さ8～15cmの楕円形の土壙。SC-98に伴うものと考える。詳細は本文82頁に記載。

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SP	363	DY-27区	Ⅳ層上面で検出。	径60～62cm，深さ32cmの円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。詳細は本文231頁に記載。
SP	364	DY-27区	Ⅳ層上面で検出。	推定径64cm，深さ28cmの円形の掘り形のSB-548の柱穴。詳細は本文109頁に記載。
SP	365	DY-27区	Ⅳ層上面で検出。	径43～46cmの円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。詳細は本文231頁に記載。
SP	366	DY-27区	Ⅳ層上面で検出。	長径72cm，短径67cmの長円形の掘り形をもつ。底面には小さな凹凸があり，深さは20cm前後。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先～拳大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	367	DY-27区	Ⅳ層上面で検出。	径30～32cmの不整円形の掘り形をもつ。底面は東半部が窪み，深さは8～17cm。埋土は暗褐色砂質シルトで，浅黄色砂質土の大小の塊が多く混じる。
SP	368	DY-27・28区	Ⅳ層上面で検出。	長径45cm，短径43cm，深さ11～18の長円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。詳細は本文231頁に記載。
SP	369	DY-27区	Ⅳ層上面で検出。SP-475を切る。	長径52cm，短径49cmの円形の小穴。詳細は本文232頁に記載。
SP	370	DY-27区	Ⅳ層上面で検出。	長径52cm，短径44cmの不整長円形の掘り形をもつ。底面は南半部が窪み，深さは10～20cm。埋土は暗褐色砂質シルトで，下部に浅黄色砂質土の大小の塊が多く混じる。
SP	371	DY-27区	Ⅳ層上面で検出。	長径30cm，短径24cm，深さ11～15cmの長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	372	DZ-27区	SC-519の床面で検出。	中央部～東半部の大半を既設管路で破壊。径50cmほどの円形の掘り形を推定できる。深さは7cmほど。埋土は極暗褐色砂質シルトで，炭化物片が点々と出土。図66を参照。
SP	373	DZ-27区	SC-71の床面で検出。	径65～70cm，深さ32～33cmの円形の小穴。詳細は本文232頁に記載。図66を参照。
SP	374	DZ-27区	SC-519の床面で検出。	径27～29cm，深さ11cmの円形の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質土。図66を参照。
SP	375	DZ-24区	Ⅳ層上面で検出。SK-510に西半部を切られ，北半部も攪乱で破壊されている。	隅丸方形と考えられる掘り形の南西角周辺を確認できただけである。深さは11cm前後。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大の浅黄色砂質土塊が点々と混じる。
SP	376	DZ-22区	Ⅳ層上面で検出。SC-97に切られる。	推定径35cm前後の不整円形の小穴。深さは7～13cm。埋土は暗褐色砂質シルト。
SP	377	DY・DZ-27区	SC-71に切られる。	径56～58cm，深さ42cmほどの円形の柱穴。詳細は本文232頁に記載。図112を参照。
SP	378	DZ-27区	SC-71床面で検出。	推定径38cm前後の円形の掘り形をもつSA-552の小穴。詳細は本文113頁に記載。
SP	379	DZ-27区	SC-71床面で検出。	長軸長50cm，短軸長38cm，深さ12～14cmの不整な楕円形の掘り形をもつSA-552の小穴。詳細は本文113頁に記載。
SP	380	DZ-27区	SC-71床面で検出。	長径28cm，短径26cm，深さ8cmの長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，風化が著しく脆くなった花崗岩塊が混じる。攪乱溝部の一部である可能性が高い。図66を参照。
SP	381	DZ-28区	SD-73と切り合うが，先後関係は不明。	長径42cm，短径35cm，深さ14～25cmの不整な長円形の掘り形をもつSA-552の小穴。詳細は本文113頁に記載。
SP	382	DZ-29区	Ⅳ層上面で検出。南半部を攪乱で破壊されている。	推定径40～43cm，深さ15cmほどの不整円形の小穴。詳細は本文232頁に記載。
SP	383	DZ-29区	Ⅳ層上面で検出。SK-515を切る。	径35～37cm，深さ7cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色砂質シルトの小塊が非常に多く混じる。
SP	384	DY-29区	SD-73と切り合うが，先後関係は不明。	推定長径55～60cm，短径52cm，深さ33cmの不整な長円形の掘り形をもつSA-552の小穴。詳細は本文113頁に記載。
SP	385	DZ-30区	Ⅳ層上面で検出。西半部を塹壕で破壊される。	推定長径50cm前後，径38cm，深さ6～7cmの長円形の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊が点々と混じる。炭化物片がごく少量出土。
SP	386	DY-30区	Ⅳ層上面で検出。	長軸長49cm，短軸長40cm，深さ15～18cmの楕円形の掘り形をもつSA-552の小穴。詳細は本文113頁に記載。
SP	387	DY-30区	Ⅳ層上面で検出。	長径31cm，短径28cm，深さ10cm前後の長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色や浅黄色の砂質土が非常に多く混じり，全体として明るい暗黄色の土色を呈する。
SP	388	DY-31区	Ⅳ層上面で検出。SP-242に切られる。	径35cm前後，深さ5～7cmの不整円形の小穴。埋土は砂礫が多く混じる暗褐色砂質シルト。
SP	389	DY-30区	Ⅳ層上面で検出。	径27～29cm，深さ14cmの円形の小穴。埋土は，SP-387と同じく，暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色や浅黄色の砂質土が非常に多く混じり，全体として明るい暗黄色の土色を呈する。
SP	390	DY-30区	Ⅳ層上面で検出。	径21～22cm，深さ15cm前後の円形の小穴。
SP	391	DY-30区	Ⅳ層上面で検出。	径21～23cm，深さ13～17cmの円形の掘り形をもつ。詳細は本文233頁に記載。
SP	392	DY-30区	Ⅳ層上面で検出。東半部を塹壕で破壊されている。	径21cm，深さ18cm前後の円形の小穴。埋土は砂礫が多く混じる暗褐色砂質シルト。
SP	393	DY-30区	Ⅳ層上面で検出。	長径30cm，短径26cm，深さ22cmの長円形の掘り形をもつ。埋土は砂礫が多く混じる暗褐色砂質シルトで，小指先大の浅黄色砂質土塊が多くみられる。
SP	394	DY-31区	Ⅳ層上面で検出。東半部を塹壕で破壊されている。	径45cm前後，深さ25～26cmの長円形の小穴。埋土最上部は暗褐色砂質で，中位以下は亜円礫が非常に多く詰まり，その間に暗褐色砂質土が混じる。
SP	395	DY-30区	Ⅳ層上面で検出。	径45×47cm，深さ19cmの隅丸方形の掘り形をもつSA-552の小穴。詳細は本文113頁に記載。
SP	396	DZ-31区	Ⅳ層上面で検出。西半部を攪乱で破壊されている。	径29cm前後，深さ9～10cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大の浅黄色砂質土塊が多く混じる。
SP	397	DZ-31区	Ⅳ層上面で検出。西半部を攪乱で破壊されている。	径27～28cm，深さ7cmの円形の小穴。埋土は砂礫が多く混じる暗褐色砂質シルト。
SP	398	DZ-31区	Ⅳ層上面で検出。	径36～38cm，深さ6cmの円形の小穴。埋土は砂礫が多く混じる暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊がごく少量混じる。
SP	399	DY-31区	Ⅳ層上面で検出。	径48～50cm，深さ14～18cmの円形の掘り形をもつSA-552の小穴。詳細は本文113頁に記載。
SP	400	DY-31区	Ⅳ層上面で検出。SP-388を切る。	立柱痕跡を確認。詳細は本文233頁に記載。図116下段を参照。
SP	401	DY-30区	Ⅳ層上面で検出。SK-518を切る。西半部は塹壕で破壊されている。	推定径38cm，深さ18cmの円形の掘り形をもつと考えられる。埋土は砂礫が多く混じる暗褐色砂質シルトで，親指先大の浅黄色砂質土塊が多くみられる。
SP	402	DY-29区	Ⅳ層上面で検出。西半部は塹壕で破壊されている。	推定径35cm前後，深さ10cmの円形の掘り形をもつと考える。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。
SP	403	DT-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。SK-409に切られる。	断面での掘り形径40cm前後，深さ35cm。詳細は本文233頁に記載。図4を参照。
SP	404	DV-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。SD-55を切る。	断面での掘り形径70～75cm，深さ22cm。Ⅲ層上面からの掘り込みを確認。東側から極粗砂混じり黒褐色粘質シルトが流れ込み，上部は極粗砂が多く混じる黒褐色粘質シルトで埋積。褐色シルトの小塊が少量混じる。埋土上部から弥生土器の小片が出土。図4を参照。

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SP	405	DV-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。SD-557の下層に位置。	断面での掘り形径70cm前後。深さ15～20cm。埋土は黒褐色粘質シルトで，小さな褐色シルト塊がまばらに混じる。図4を参照。
SP	406	DV-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。SD-557の下層に位置。	断面での掘り形径40～45cm，深さ15cm前後。西側からやや灰色みをおびた黒褐色粘質シルトが流れ込み，その上部は褐色土塊が少量混じる黒褐色粘質シルトで埋積。図4を参照。
SP	407	DX-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。SK-443を切る。	断面での掘り形径28cm，深さ21cm。埋土は黒みが特に強い極暗褐色粘質シルト。図4を参照。
SP	408	DZ-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。SC-544，SD-508を切る。	断面での掘り形径50cm，深さ15cm。埋土は砂礫が多く混じる暗褐色砂質シルト。図4を参照。
SK	409	DT-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。SK-324に切られる。	Ⅱ層下部から掘り込まれている。詳細は本文197頁に記載。図4を参照。
SK	410	DT-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。	Ⅲ層中位からの掘り込みを確認。詳細は本文198頁に記載。図4を参照。
SK	411	DU-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。	Ⅱ層下部から掘り込まれている。詳細は本文198頁に記載。図4を参照。
SP	412	DY-28区	Ⅳ層上面で検出。SC-517を切る。	長径57cm，短径48cm，深さ30cmを測る長円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。詳細は本文233頁に記載。図116を参照。
SK	413	DV・DW-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。	Ⅲ層上面から掘り込まれている。詳細は本文198頁に記載。図4を参照。
SK	414	DW-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。	Ⅲ層上面から掘り込まれている。詳細は本文198頁に記載。図4を参照。
SP	415	DZ-27区	SC-71の床面で検出。	径35×45cm，深さ15cmほどの長円形の掘り形をもつSC-71の柱穴。詳細は本文69頁に記載。
SP	416	DZ-27区	SC-71の床面で検出。	径32×40cm，床面からの深さ3～19cmを測る長円形の掘り形をもち，底面は南半部が深くなる。埋土は暗褐色砂質シルトで，下部を中心として径2～3cmのにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。図66を参照。
SP	417	DZ-27区	SC-71の床面で検出。	西側を調査区西壁に沿って埋設された管路で破壊されている。推定径38×50cm，床面からの深さ11～12cmを測る長円形の掘り形をもつと考えられる。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大のにぶい黄褐色砂質シルトの小塊が点々と混じる。図66を参照。
SP	418	DZ-27区	SC-71の床面で検出。	大半を調査区西壁に沿って埋設された管路で破壊されている。推定径60cmほど，深さ6cmほどの円形の掘り形と考えられる。皿状の小穴である。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が少量混じる。図66を参照。
SP	419	DZ-28区	Ⅳ層上面で検出。南西端を攪乱溝で破壊されている。	径63cm，深さ10cm前後の円形の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質シルトで，上部には小豆大～小指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が点々と混じり，下部ではとくに多くなる。
SP	420	DZ-28区	Ⅳ層上面で検出。北半部を攪乱で破壊されている。	径40～42cm，深さ8cm前後の円形の小穴。埋土は，SP-421と同じく，暗褐色砂質シルトで，小豆大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。
SP	421	DZ-28区	Ⅳ層上面で検出。大半を破壊され，掘り形南西部の一部を確認したのみ。	推定径45cm前後の円形の掘り形と考えられる。深さは7cm前後。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。
SP	422	DY-28区	SC-517の床面で検出。SP-423を切る。	西半部を塹壕で破壊されているが，径60cmほどの円形の掘り形と考えられる。深さは12cm。埋土は暗褐色砂質シルト。詳細は本文233頁に記載。図90を参照。
SP	423	DY-28区	SC-517の床面で検出。SP-422に切られる。	長径56cm，短径45cm，深さ11～16cmの長円形の掘り形をもつ。埋土は暗褐色砂質シルトと灰褐色粗砂が縞状に互層堆積する。図90を参照。
SP	424	DY-28区	SC-517の床面で検出。	SC-517の柱穴。径42×45cmの長円形の掘り形をもつ。詳細は本文92頁に記載。
SP	425	DY-28区	SC-517の床面で検出。	径18cm，深さ15cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，径3～4cmの暗灰色粗砂が不整形の塊となって多く混じる。図90を参照。
SP	426	DY-28区	SC-517の床面で検出。	長径22cm，短径19cm，深さ15cmの長円形の掘り形をもつ。埋土は，SP-425と同じく，暗褐色砂質シルトで，径2～3cmの暗灰色粗砂が塊となって混じる。図90を参照。
SK	427	DW・DX-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。SK-86に切られる。	Ⅲ層上面から掘り込まれている。詳細は本文198頁に記載。図4を参照。
SP	428	DZ-21区	SC-92床面で検出。	径37×45cm，床面からの深さ11cmほども小穴をもつ。詳細は本文233頁に記載。
SP	429	DY-26･27区	Ⅳ層上面で検出。北西部を塹壕で破壊されている。	径48～49cm，深さ23～25cmの円形の掘り形をもつと考えられる。埋土上部は極粗砂～細礫が混じる黒褐色砂質シルトで，中位～下部には極粗砂～細礫はほとんど混じらず，径5mmほどの褐色シルト塊が多く混じる。
SP	430	DV-24区	SC-25の床面で検出。	径46～49cm，深さ14cmの長円形の掘り形をもち，立柱痕跡を確認。SC-25の柱穴。
SP	431	DY-23区	SC-84の床面で検出。	径21～22cm，深さ数cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質土で，浅黄色砂質土が多く混じるため全体に白っぽい褐色の土色。図72を参照。
SP	432	DY-24区	SC-84の床面で検出。	径48cmの円形の掘り形をもつ。床面から3cmほど皿状に掘り込まれている。埋土は褐色砂質土で，浅黄色砂質土が多く混じる。図72を参照。
SP	433	DY-23区	SC-84の床面で検出。SD-72に切られる。	径25～30cmの不整円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，小豆大の浅黄色砂質土塊が少量混じる。図72を参照。
SP	434	DY-24区	SC-84の床面で検出。	35×41cm，床面からの深さ11cmほどを測る長円形の掘り形をもつ。SC-84の柱穴と考えた。詳細は本文76頁に記載。
SK	435	DX-25区	Ⅳ層上面で検出。SC-39を切る。	長軸長69cm，短軸長32cm，深さ21cmほどの不整形の掘り形をもつ。詳細は本文199頁に記載。
SP	436	DZ-29区	SC-516①層下面で検出。	短径32cm，推定長径45cm，深さ12～13cmを測る不整円形の掘り形をもつ。詳細は本文90頁に記載。図88を参照。
SP	437	DZ-20区	SC-99の床面で検出。	推定径37cm，深さ2～3cmほどの浅皿状の小穴。詳細は本文84頁に記載。
SP	438	DZ-20区	SC-99，SD-36，SK-531を切る。	推定径48cm前後，深さ15cmほどの円形の掘り形をもつ小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。
SK	439	DX-26区	SC-39床面で検出したが，SC-39を切る。	径43×57cm，深さ18～20cmを測る長円形の掘り形をもつ。詳細は本文199頁に記載。
SP	440	DV-22区	SC-33床面で検出。	径33～34cm，深さ31cmの円形の掘り形をもつSC-33の柱穴。詳細は本文33頁に記載。
SP	441	DV-22区	SC-33床面で検出。	径50×54cm，深さ27cmの不整円形な掘り形をもつSC-33の柱穴。詳細は本文33頁に記載。
SP	442	DV-22区	SC-33床面で検出。	径44×45cm，床面からの深さ29cmの円形の掘り形をもつSC-33の柱穴。詳細は本文35頁に記載。

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SK	443	DX-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。SP-407に切られる。	Ⅲ層上面から掘り込まれている。詳細は本文199頁に記載。
SK	444	DY-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。SK-477を切る。	Ⅱ層直下から掘り込まれている。詳細は本文200頁に記載。
SP	445	DV-22区	SC-33の床面で検出。	短軸長37cm，長軸長60cm，深さ11cmの不整楕円形の掘り形をもつ。詳細は本文233頁に記載。図32を参照。
SP	446	DV-22区	SC-33の床面で検出。	径36cm，深さ35cmを測る円形の掘り形をもつ小穴。詳細は本文233頁に記載。図32を参照。
SP	447	DV-22区	SC-33床面で検出。SP-446を切る。	径47×53cm，深さ38cmを測る円形の掘り形をもつSC-33の柱穴。詳細は本文35頁に記載。
SP	448	DV-24区	SC-25の炉跡であるSK-527底面で確認。	長径46cm，短径40cm，深さ5～6cmの長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質土。下部より土器破片が出土。図16を参照。
SP	449	DV-24区	SC-536の床面で検出。SP-450に切られる。	径43cm，深さ27cmの円形の掘り形をもつSC-536の柱穴。詳細は本文97頁に記載。
SP	450	DV-24区	SC-25の炉跡であるSK-527底面で確認。	径25cm前後，深さ15～16cmの小穴。埋土は暗褐色砂質土。図16を参照。
SP	451	DV-24区	SC-25の炉跡であるSK-527の底面で検出。	径22cm前後の円形の小穴。埋土は暗褐色砂質土。図16を参照。
SP	452	DV-24区	SC-25の炉跡であるSK-527の底面で検出。	長径49cm，短径35cm，深さ10cmの長円形の小穴で，南端は径20cmの円形の小穴状にさらに10cmほど窪む。埋土は，やや灰色みをおびる黒褐色シルトで，わずかに粘性がある土質である。図16を参照。
SP	453	DX-25区	Ⅳ層上面で検出。北半部を攪乱で破壊されている。	一辺55cmほどの隅丸方形の掘り形をもつと考えられ，掘り形下部で立柱痕跡を確認。詳細は本文233頁に記載。
SP	454	DZ-22区	SC-506の床面で検出。	推定径45cm，深さ21cmを測る。SC-97もしくはSC-506の柱穴。詳細は本文88頁に記載。
SP	455	DY-29区	Ⅳ層上面で検出。	長径31cm，短径24cmの長円形の掘り形をもち，底面は南東に向かって傾斜し，深さ5～13cmを測る。
SP	456	DV-24区	Ⅳ層上面で検出。	径21cm前後，深さ20cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質土で，径1～2cmのにぶい黄褐色砂質シルト塊が少量混じる。炭化物片がごく少量出土。
SP	457	DV-24·25区	SC-25の床面で検出。	径31～33cm，深さ9cmを測る円形の掘り形をもつSC-42の柱穴。詳細は本文60頁に記載。
SP	458	DV-25区	SC-536の床面で検出。SP-457に切られる。	径32cm前後，深さ13cmほどの円形の掘り形をもつSC-536の柱穴。詳細は本文97頁に記載。
SP	459	DV-24区	SC-42の床面で検出。	径26×29cm，深さ16cmを測る長円形の掘り形をもつSC-43の柱穴。詳細は本文61頁に記載。
SP	460	DV-24区	SC-44の床面で検出。	長軸長48cm，短軸長35cm，深さ18cmを測る楕円形の小穴。図58を参照。
SP	461	DV-24区	SC-536の床面で検出。	径27×29cm，深さ14cmの長円形の掘り形をもつSC-536の柱穴。詳細は本文97頁に記載。
SP	462	DV-24区	SC-536の床面で検出。	径13×15cm，深さ13cmの長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，縞状に浅黄色や暗灰色の細砂がみられる。図58を参照。
SP	463	DV-24区	SC-25の床面で検出。	径31～32cm，深さ10cmほどの円形の掘り形をもつSC-42の柱穴。詳細は本文60頁に記載。
SK	464	DV-24・25区	SC-536の床面で検出。	長径45cm，短径41cm，深さ4cmほどの浅い皿状の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色や浅黄色の砂質土が多く混じる。径10×6cmほどの扁平な亜円礫が出土。図58を参照。
SP	465	DV-24区	SC-536の床面で検出。	径46～48cm，深さ2cmの浅い皿状の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，にぶい黄褐色や浅黄色砂質土が多く混じる。弥生土器の胴部小片２点が出土。図58を参照。
SP	466	DV-24区	SC-536の床面で検出。	長軸長44cm，短軸長28cm，深さ4cmで，中央部が径20cmの小穴状に10cmほど窪む。埋土は暗褐色砂質シルトに，にぶい黄褐色砂質シルトや暗灰色細砂が非常に多く混じる。図58を参照。
SP	467	DV-24区	SC-536の床面で検出。	長径28cm，短径21cm，深さ4cmほどの長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトに浅黄色砂質土が多く混じる。弥生土器の甕の胴部破片１点が出土。図58を参照。
SP	468	DW-24区	SC-536の床面で検出。	推定長径50cm，短径38cmの長円形の小穴。詳細は本文234頁に記載。図58を参照。
SP	469	DV-24区	SC-536の床面で検出。	径35cm，深さ8cmの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，不整形のにぶい黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。図58を参照。
SP	470	DW-24区	SK-535の床面で確認。	径38～41cm，深さ3～4cmの不整円形の小穴。底面には小さな凹凸がみられる。埋土は暗褐色砂質シルト。図58を参照。
SP	471	DV-24区	西半部をSC-25に切られる。	長辺57cm前後，深さは6～7cmの隅丸方形の小穴。詳細は本文234頁に記載。図58を参照。
SP	472	DW-24区	SC-536の床面と同じ高さで検出。SC-536との切り合い関係は不明。	径23～24cm，深さ14cmの小穴。埋土は暗褐色砂質シルト。図58を参照。
SP	473	DV-24区	Ⅳ層上面で検出。北端部をSD-10に切られ，南半部は塹壕で破壊されている。	推定長径60cm前後，短径42cmの長円形の掘り形をもつと考えられる。深さは15～19cm。詳細は本文234頁に記載。
SP	474	DY-27·28区	Ⅳ層上面で検出。	径30～32cm，深さ11cmの円形の小穴。埋土は細礫が多く混じる暗褐色砂質土で，径2～3cmの黒褐色砂質土塊が少量みられる。
SP	475	DY-27区	Ⅳ層上面で検出。北西端でSP-369と切り合い，南半部は攪乱で破壊されている。	推定径60～65cm，短径52cm，深さ11cmの長円形の小穴。埋土は細礫混じりの暗褐色砂質土で，径2～3cmのにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じる。
SP	476	DY-27・28区	Ⅳ層上面で検出。東半部と南端部を攪乱で破壊されている。	推定径80cm，短径70cmの長円形の小穴。詳細は本文234頁に記載。
SK	477	DY-20区	調査区南壁の土層観察時に断面のみを確認。SK-444に切られる。	Ⅱ層直下，Ⅲ層上面から掘り込まれている。詳細は本文200頁に記載。
SP	478	DV-22区	SK-540を切る。	長径25cm，短径21cm，深さ9cmほどの長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質土で，径1cmのにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じる。図178を参照。
SP	479	DV-22区	SK-540を切る。	径15cm，深さ8cmほどの円形の小穴。埋土は暗褐色砂質土で，径1～3cmの鉄分を含む赤黒色シルト塊が少量混じる。炭化物片が少量出土。図178を参照。
SP	480	DV-22区	SC-32の床面で検出。SC-33の周溝に切られる。	径50cmほど，深さ7cmほどの浅皿状の不整円形の掘り形をもつ小穴。詳細は本文234頁に記載。図32を参照。
SP	481	DV-22区	SC-32の床面で検出。SC-33，SK-541に切られる。	長径44cm，短径39cm，深さ12cmの不整な長円形の小穴。埋土は，暗褐色砂質土で，径1cmほどのにぶい黄褐色砂質土の小塊が少量混じる。弥生土器の細片が出土。図26を参照。
SP	482	DV-22区	SC-32の床面で検出。SC-33，SK-541に切られる。	径34～37cm，深さ10cmほどの円形の掘り形をもつ小穴。埋土は，暗褐色砂質土で，径1cmほどのにぶい黄褐色砂質土の小塊が少量混じる。図26を参照。

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SP	483	DV-22区	SC-33床面で検出。	SC-32の柱穴。詳細は本文30頁に記載。
SP	484	DZ-24区	Ⅳ層上面で検出。	長径26cm，短径20cm，深さ14～15cmの不整長円形の小穴。埋土は暗褐色砂質シルトで，親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。
SP	485	DY-21区	Ⅳ層上面で検出。SD-36とSK-94に切られる。	長径52cm，短径40cm，深さ7cmほどの不整な長円形の小穴。詳細は本文234頁に記載。
SP	486	DY-29区	SK-515の底面で確認できたが，本来はSK-515を切ると考えられる。	径20～22cm，深さ17cmの円形の掘り形をもつSA-552の小穴。詳細は本文113頁に記載。
SP	487	DW-26・27区	Ⅳ層上面で検出。	推定長軸長88cm，短軸長65cm，深さ48cmの不整楕円形の掘り形をもつSB-74の柱穴。詳細は本文105頁に記載。
SP	488	DX-25区	SC-39の床面で検出。	長軸長45cm，短軸長32cm，床面からの深さ6cmを測る楕円形の掘り形をもつ。埋土は，にぶい黄褐色砂質土が全体に多く混じる暗褐色砂質土で，径2～3cmの明褐色砂質土の塊が含まれる。図48を参照。
SP	489	DX-25区	SC-39の床面で検出。	径20×22cm，深さ15cmの不整円形の掘り形をもつSC-39の柱穴。詳細は本文52頁に記載。
SP	490	DX-25区	SC-39の床面で検出。	径15×20cm，床面からの深さ9cmを測る長円形の掘り形をもつ。にぶい黄褐色砂質土や灰黄褐色砂質土で埋積され，炭化物の破片が多く出土。図48を参照。
SK	491	DX-25区	SC-39の床面で検出。	径42×59cm，深さ1～2cmの非常に浅い皿状の矩形の窪み。SC-39の炉跡。詳細は本文52頁に記載。
SP	492	DX-25区	SC-39の床面で検出。	径25～26cm，深さ5cmの浅皿状の円形の掘り形をもつSC-39の柱穴。詳細は本文52頁に記載。
SP	493	DX-25区	SC-39の床面で検出。	長軸長35cm，短軸長25cm，深さ10cmの楕円形の掘り形をもつ小穴。詳細は本文52頁に記載。
SK	494	DX-25区	Ⅳ層上面で検出。SC-39を切る。	径66～69cm，Ⅳ層上面からの深さ17cmを測る円形の掘り形をもつ。詳細は本文200頁に記載。
SC	495	DV-25・26区	調査区壁面だけでの確認。SD-20・21に切られる。	径6m前後の円形の掘り形をもつ竪穴建物を推定。詳細は本文87頁に記載。
SK	496	DU-25区	調査区壁面だけでの確認。SK-558に切られ，SC-43，SD-20を切る。	Ⅱ層直下から掘り込まれた大形土壙。竪穴建物の可能性も残す。詳細は本文200頁に記載。
SP	497	DV-22区	SC-33の床面で検出。	短径29cm，長径34cm，深さ8cmを測る不整な長円形の小穴。埋土は黒褐色砂質土で，径1～2cmのにぶい黄褐色砂質土の小塊が多く混じる。弥生土器の破片が出土。図32を参照。
SX	498	DU-23-11区	Ⅲ層下半部で確認。	弥生土器の甕や壺の胴部破片が出土。詳細は本文220頁に記載。
SP	499	DY-29区	Ⅳ層上面で検出。SP-550を切る。	径27cm，深さ10cmの円形の小穴。
SX	500	DX-22区	Ⅲ層上半部で確認。	弥生土器の壺の大形破片や高坏の破片が出土。詳細は本文221頁に記載。
SK	501	DZ-23・24区	Ⅳ層上面で検出。SC-100を切る。	長軸長2.4m，短軸長1.9mほどの小判形の掘り形の土壙と推定。詳細は本文202頁に記載。
SK	502	DZ-21区	SC-92の床面で検出。	長径70cm，短径30cmの細長い隅丸方形の浅い皿状の小型土壙。SC-92に伴うものと考えられる。詳細は本文79頁に記載。
SK	503	DY・DZ-21区	Ⅳ層上面で検出。SC-92を切る。	長径1.25m，短径68cmの深さ6cm前後の非常に浅い舟底状の土壙。詳細は本文202頁に記載。
SK	504	DY・DZ-22区	Ⅳ層上面で検出。SC-97，SD-29に切られる。	残存長径100cm，短径57cmの細長い長円形の掘り形をもつ。詳細は本文202頁に記載。
SD	505	DY・DZ-24～26区	Ⅳ層上面で検出。SC-69，SD-10，SK-511に切られる。	溝幅1.04～1.44m，深さ7～14cmの溝。詳細は本文144頁に記載。
SC	506	DY・DZ-21･22区	Ⅳ層上面で検出。SC-97，SD-29，SP-355に切られ，SK-504を切る。	推定長3.1m，幅2.7mの隅丸長方形と考えられる掘り形をもつ竪穴建物。詳細は本文87頁に記載。
SK	507	DX-20区	Ⅳ層上面で検出。SD-91に切られる。	幅85cmの隅丸長方形の土壙。詳細は本文203頁に記載。
SD	508	DZ-20～22区	Ⅳ層上面で検出。SC-544，SD-509を切る。	ほぼ東西にのびる溝。溝幅35～55cm，深さ8～10cmで，舟底状の断面形をもつ。詳細は本文146頁に記載。
SD	509	DZ-20～22区	Ⅳ層上面で検出。SD-508に切られる。SD-29を切る可能性が高い。	溝幅63～85cm，深さ12～16cm，舟底状の断面形をもつ。詳細は本文146頁に記載。
SK	510	DY・DZ-24区	SP-375を切る。	大半を破壊されているが，径90cm前後の隅丸方形の掘り形をもつと推定。詳細は本文203頁に記載。
SK	511	DZ-24・25区	Ⅳ層上面で検出。SD-505を切る。	長径170cm，短径150cmほどの不整な長円形の土壙。詳細は本文203頁に記載。
SD	512	DZ-25～27区	Ⅳ層上面で検出。SD-73，SC-519を切る。	緩やかなカーブを描く7.5mほどの溝。深さは3～8cm。詳細は本文149頁に記載。
SK	513	DV-22区	SC-33の床面で検出。	長径104cm，短径96cm，深さ21cmの不整形の掘り形をもつSC-33の炉跡。詳細は本文33頁に記載。
SK	514	DY-27･28区	Ⅳ層上面で検出。	長径1.85m，短径75cmの細長い長円形の土壙。詳細は本文207頁に記載。
SK	515	DY・DZ-29区	Ⅳ層上面で検出。SD-520を切り，SP-383に切られる。	幅1.7m前後の長円形もしくは隅丸方形の掘り形が考えられる。詳細は本文207頁に記載。
SC	516	DZ-29区	Ⅳ層上面で検出。	径4～5mほどの円形の竪穴建物。貼り床を施されている。詳細は本文90頁に記載。
SC	517	DY-28区	Ⅳ層上面で検出。SP-412に切られる。	推定東西長3.8m，南北長3.4m，深さ28cmの隅丸方形の竪穴建物。SP-424を柱穴とし，SK-522が伴う。詳細は本文92頁に記載。
SK	518	DY-30区	Ⅳ層上面で検出。SP-401に切られる。	掘り形のほとんどを破壊され，全形は不明。詳細は本文208頁に記載。
SC	519	DY・DZ-27区	SC-71，SD-73・512に切られる。	長軸長4mほどの楕円形の掘り形をもつ竪穴建物。詳細は本文96頁に記載。
SD	520	DY・DZ-28～31区	Ⅳ層上面で検出。北端部は16次調査B区SD-47として調査。SD-73の延長部分。SK-515に切られる。	幅54～62cm，深さ25cmを測る溝。掘り返しが行われていることを確認。詳細は本文150頁に記載。
SK	521	DZ-26区	Ⅳ層上面で検出。	径90cmほどの円形の小型土壙。詳細は本文208頁に記載。
SK	522	DY-28区	SC-517の床面で検出。	SC-517に伴う土壙。東西長1.48m，南北長95cm，深さ14～15cmの不整な隅丸長方形の掘り形をもつ。詳細は本文92頁に記載。
SP	523	DY-29区	Ⅳ層上面で検出。	径41～42cm，深さ12～14cmの円形の小穴。
SK	524	DY-24区	SC-84の床面で検出。	長径1.15m，推定93cmほどの長円形の掘り形をもつSC-84の炉跡。詳細は本文76頁に記載。
SK	525	DY-23･24区	SC-84の床面で検出。SK-526に切られる。	残存長1.25m，幅50cm，深さ11cmを測る隅丸長方形の土壙。詳細は本文76頁に記載。
SK	526	DY-23・24区	SC-84の床面で検出。SK-525を切る。	長さ1.7m，幅1.0m，深さ8cmほどの隅丸長方形の土壙。詳細は本文76頁に記載。

遺構 種別	遺構 番号	調査区	検出状況・重複関係	調査所見
SK	527	DV-24区	SC-25の床面で検出。底面は凹凸が著しく，小穴状となるため，SP-448・449・450・451・452とした。	径2.63×2.3m，深さ8～19cmの不整形の掘り形をもつ。中央部には凹レンズ状に炭化物や焼土が集積しており，SC-25の炉跡と考える。詳細は本文20頁に記載。
SP	528	DY-30区	Ⅳ層上面で検出。	径45×50cmの隅丸方形の小穴と，推定径40×50cmの円形の小穴が重複する。SA-552を構成する小穴。詳細は本文113頁に記載。
SK	529	DX・DY-25・26区	Ⅳ層上面で検出。SC-39に切られる。	長径2.85m，短径2.4～2.5mの不整な小判形の掘り形と考えられる竪穴建物。詳細は本文208頁に記載。
SK	530	DX-26区	Ⅳ層上面で検出。SC-39に切られる。	長さ1.6～1.9m，幅60cm前後の細長い不整長円形の掘り形をもつと考えられる。詳細は本文209頁に記載。
SK	531	DZ-20区	Ⅳ層上面で検出。SD-36中央部～南西部分を切り，SP-438に切られる。	掘り形北側の壁を一部確認しただけ。詳細は本文209頁に記載。
SK	532	DV-24・25区	SC-536を切り，SK-464に切られる。	径61～63cm，深さ7cmほどの円形の掘り形をもつ。詳細は本文60頁に記載。
SK	533	DV-25区	SC-43の床面で検出。	残存長軸長約1m，推定幅60cm未満の楕円形の掘り形をもつと考えられる舟底状の土壙。詳細は本文61頁に記載。
SK	534	DU・DV-25区	SC-43の床面で検出。	長軸長92cm，短軸長74cm，床面からの深さ9cmを測る不整形の土壙。詳細は本文61頁に記載。
SK	535	DV・DW-24・25区	Ⅳ層上面で検出。SC-536を切る。	残存長1.6m，残存幅1.1mほどの不整な隅丸方形の掘り形をもつと考えられる。詳細は本文209頁に記載。
SC	536	DV・DW-24・25区	SC-25の下層で検出。SC-41・42・44を切り，SC-25，SD-10・45，SK-535に切られる。	東西長4.2～4.9m，南北幅4.75mの不整な矩形の掘り形をもつ。SP-307・449・458・461を柱穴とし，SK-538が伴う。詳細は本文97頁に記載。
SK	537	DV-24区	SC-536の床面で検出。SK-527に切られる。	長軸長63cm，短軸長46cm，深さ23cmの楕円形の掘り形をもつ。詳細は本文97頁に記載。
SK	538	DV-24区	SC-536の南壁沿いに位置。	直径59cm，短径55cmを測る。深さ3cm前後の浅い不整な隅丸長方形の土壙。SC-536の出入り口部分の施設か？　詳細は本文97頁に記載。
SK	539	DV-22区	SC-33床面で出土。	長軸長1.11m，短軸長68cmの不整楕円形の掘り形をもつ土壙。SC-33に伴う何らかの施設と考えられる。詳細は本文33頁に記載。
SK	540	DV-22区	SC-33床面で出土。SC-32，SK-541に切られる。	長さ2.3m，幅1.6～1.7mの隅丸方形の掘り形をもつ。詳細は本文210頁に記載。
SK	541	DV-22区	SC-33床面で出土。SK-540とSP-481を切り，SC-33に切られる。	径2.0～2.05mの不整円形の掘り形をもつ。詳細は本文210頁に記載。
SP	542	DY-29区	Ⅳ層上面で検出。	長径48cm，短径42cm，深さ20～22cmの長円形の小穴。
SK	543	DZ-20区	Ⅳ層上面で検出。SC-99を切り，SC-544に切られる。	残存長1.0m，幅70cm，深さ8cmほどの隅丸長方形の掘り形をもつ。詳細は本文215頁に記載。
SC	544	DZ-20・21区	SD-508，SK-545，SP-408に切られる。SK-543を切る。	一辺3.3m以上の隅丸方形の掘り形をもつ。詳細は本文98頁に記載。
SK	545	DZ-20区	SC-544を切る。	径90cm前後の円形の掘り形をもつ。詳細は本文215頁に記載。
SC	546	DZ-31区	Ⅳ層上面で検出。	部分的に確認できただけで，掘り形などは不明。詳細は本文103頁に記載。
SK	547	DT・DU-23・24区	Ⅳ層上面で検出。SP-119に切られる。	長さ2.5m，幅1.0～1.1mの細長い不整長円形の土壙。詳細は本文216頁に記載。
SB	548	DX・DY-26・27区	Ⅳ層上面で検出。SD-21に切られSC-78を切る。	SP-257･267･282･364･B区SP-439から構成される1×2間の掘立柱建物。詳細は本文107頁に記載。
SB	549	DW・DX-26・27区	Ⅳ層上面で検出。SC-78を切る。	SP-202・269・323・B区SP-443から構成される1×1間の掘立柱建物。詳細は本文109頁に記載。
SP	550	DY-29区	Ⅳ層上面で検出。SP-242・499に切られる。	径57～60cmの不整な隅丸方形の掘り形をもち，底面には小さな凹凸がみられ，深さは4～11cm。
SB	551	DU・DV-26区	Ⅳ層上面で検出。	SP-152･156・161・162・168から構成される1×2間の掘立柱建物。詳細は本文111頁に記載。
SA	552	DY・DZ-26～31区	SD-73と切り合うが，先後関係は不明。	SP-378・379・381・486・384・528・386・395・399から構成される柵列。詳細は本文113頁に記載。
SK	553	DV・DW-21区	SK-50床面で確認できたが，SK-50を切る。	長辺1.57m，短辺76～117cm，深さ38cmの舟底状の掘り形をもつ土壙。詳細は本文216頁に記載。
SP	554	DY-28区	Ⅳ層上面で検出。東半部はB区に位置。	長径50cm，短径31cmの長円形の掘り形。底面は東半部が深く，深さ13～17cmを測る。埋土は極粗砂～中礫が多く混じる暗褐色砂質シルト。
SP	555	DY-29区	Ⅳ層上面で検出。西半部を攪乱で破壊されている。	推定長径45cm，短径30cm前後の不整な長円形の掘り形をもち，底面は北西に向かって傾斜し，深さは4～11cmを測る。
SP	556	DX-24区	Ⅳ層上面で検出。	長径45cm，短径38cm，深さ6～7cmの長円形の小穴。
SD	557	DV-20区	調査区壁面の土層観察時に確認。	Ⅱ層下部から掘り込まれている。詳細は本文151頁に記載。
SK	558	DU-25区	調査区壁面の土層観察時に確認。SC-43，SD-29，SK-496を切る。	層直下のⅢ層上面から掘り込まれている。詳細は本文218頁に記載。
SP	559	DT-25区	調査区壁面の土層観察時に確認。	層直下のⅢ層上面から掘り込まれた擂り鉢状の小穴。断面での掘り形幅は50cm，深さ33cm。埋土は暗褐色砂質シルトで，掘り形上部から弥生土器の小片が出土。図4を参照。

表4　文京遺跡16次調査A区出土土器観察表

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図6	1	図版43	1	SC	4	床面から若干浮いた状態で，比較的大型の破片が2ヶ所に分かれて出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。口縁屈曲部にはわずかに指頭圧痕が残る。胴部外面は擦過状のナデ調整の後，丁寧なナデ仕上げ。胴部内面は斜め上方向の箆状工具によるケズリ調整。	にぶい橙色。	5001	1
〃	2			SC	4	床面から若干浮いた状態で，掘り形の北部中央から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	にぶい橙色。外面は二次的火熱を受けて赤変。	5003	〃
〃	3			SC	4	図6-6・7とともに，東側壁沿いに当たるⅢ層中位からかたまって出土。	弥生土器	壺	口縁端面は荒れが著しいが，内外面ともに横ナデ調整。	内外ともに器表面はにぶい赤褐色。器胎はにぶい橙色。	5005	〃
〃	4			SC	4	図6-6・7とともに，東側壁沿いに当たるⅢ層中位からかたまって出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	褐灰色。	5006	〃
〃	5	図版43	5	SC	4	住居南東部の壁際近くに当たるⅢ層上半から出土。	弥生土器	壺	外面でも上半は横ナデ調整，下半は丁寧なナデ仕上げ。内面はケズリ調整。	外面はにぶい黄橙色。内面は灰黄褐色で，淡い黒変部がみられる。器壁の芯部に黒化層が残る。	5004	〃
〃	6・7	図版43	2・3	SC	4	東側壁沿いに当たるⅢ層中位からかたまって出土。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ。胴部外面は上半は荒れが著しく調整は不明。下半は丁寧な板状工具によるナデ。胴部内面の上半は強い指頭によるナデ。下半には斜め上方に向かうケズリ痕跡が残る。	灰白色。胴部下半～底部には黒斑が生じている。	5002	〃
〃	8			SC	4	掘り形中央部に当たるDS-21-55区のⅢ層から出土。	弥生土器	甕？	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。外面には不整形の黒斑がみられる。内面は二次的な火熱を受けて赤変。	5008	〃
〃	9	図版43	4	SC	4	掘り形南西部に当たるDS-21-20区のⅢ層最下面から出土。	弥生土器	甕	外面は二次的火熱を受けて器表面が荒れる。内底面は板状工具によるナデ調整。	外面は二次的火熱を受け赤変し明赤褐色を呈する。内面はにぶい黄褐色。	5007	〃
図10	1			SC	5	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい褐色。口縁下面には薄く煤が付着。	5015	2
		図版43	6	SC	5	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は暗文風のミガキ仕上げ。内面は横ナデ調整。	明赤褐色。	242	〃
		図版43	7	SC	5	北東壁沿いの中央に位置するSK-104上面から出土。	弥生土器	甕	外面には草本類の茎を利用したと考えられる縦方向の擦過痕が残る。内面は下から上方へのケズリ調整。	明赤褐色。	2184	〃
〃	2	図版43	10	SC	5	掘り形の西角近くのDT-22-12区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。口縁端部の破面には粘土紐を貼り付けた接合線を観察できる。	橙色。	5012	〃
〃	3	図版44	1	SC	5	掘り形のほぼ中央部に当たるDT-22-6区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は縦方向の非常に丁寧なナデ仕上げ。内面はナデ仕上げで，わずかに絞り痕が残る。	明褐色。	5014	〃
〃	4			SC	5	掘り形の西角近くのDT-22-12区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	胴部の外面にはミガキ調整痕がわずかに残る。内面は丁寧なナデ仕上げ。外底面は渦巻き状にナデ調整。	外面はにぶい黄橙色。内面は橙色。器壁の芯部には一部淡い黒色の黒化層が残る。	5011	〃
〃	5			SC	5	掘り形のほぼ中央部に当たるDT-22-6区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。内底面にはわずかに指頭圧痕が残る。	にぶい黄褐色。外底面を中心として黒斑が生じている。	5013	〃
〃	6			SC	5	掘り形のほぼ中央部に当たるDT-22-6区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。脚台内面には箆状工具を回転させて押さえつけた痕跡が残る。	褐色。	5016	〃
〃	7			SC	5	掘り形のほぼ中央部に当たるDT-22-11区Ⅲ層から出土。	弥生土器	鉢	外面には箆状工具で押さえつけたような痕跡が残る。内面はナデ調整。	淡い褐色。器壁の芯部には黒褐色の黒化層が残る。	5017	〃
〃	8	図版43	8	SC	5	掘り形の西角近くのDT-22-12区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	器表面は黒褐色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層。	5018	〃
〃	9	図版43	9	SC	5	掘り形の西角部分に当たるDT-22-12区のⅢ層最下面から出土。	弥生土器	高坏	外面は暗文風のミガキ仕上げ。内面は横ナデ調整。	赤褐色。	5019	〃
		図版44	2	SC	6	掘り形埋土から出土。	弥生土器	鉢	外面は横ナデ仕上げ。内面は草本類の茎を利用したと考えられる擦過痕が残る。	橙色。	5022	2
図11	1			SC	6	掘り形北角に当たるDS-22-24区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。口縁屈曲部にはわずかに指頭圧痕が残る。	内外面とも器表面は橙色，芯部は明褐灰色。口縁下面に薄く煤が付着。	5009	2
〃	2			SC	6	掘り形北角に当たるDS-22-24区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ仕上げ。	明褐灰色。外底面に黒斑が生じている。	5010	〃
〃	3	図版44	3	SC	6	掘り形北角に当たるDS-22-24区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ仕上げ。	明赤褐色。	5020	〃
図13	1			SC	8	掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	器表面は明赤褐色。器壁の芯部には黒色の黒化層が部分的に残る。	5023	3
〃	2			SC	8	掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	外面は，口縁部周辺を横ナデ調整。胴部は器表面の荒れが進み，調整は不明。内面には幅2～3㎜のミガキ痕跡が残る。	明赤褐色。	5024	〃
〃	3			SC	8	掘り形南西部に当たるDS-23-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ仕上げ。	明赤褐色。	5027	〃
〃	4			SC	8	掘り形中央部西よりに当たるDS-23-18区Ⅲ層から出土。	弥生土器	鉢	口縁部は内外面ともに横ナデ調整。胴部内面には指頭痕が残る。	器表面は灰褐色。器壁の芯部には淡い灰色の黒化層が残る。	5029	〃
〃	5	図版44	4	SC	8	南壁沿い当たるDS-23-13区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表の荒れが進み，調整は不明。	明赤褐色。	5030	〃
〃	6			SC	8	掘り形北角に当たるDS-24-3区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺または鉢	内外面ともに器表面の荒れが著しく，調整は不明。	明黄褐色。	5025	〃
〃	7			SC	8	掘り形北角に当たるDS-24-3区から出土。	弥生土器	甕	外面には箆状工具で上方に向かって丁寧にナデ上げた痕跡を観察できる。内面はナデ調整。	赤褐色。	5026	〃
〃	8			SC	8	古墳時代後期のSD-10と重複する部分であるDS-23-18区から出土。	須恵器	坏蓋	天井部外面は反時計回りの回転箆ケズリ。内面は回転ナデ。	灰色。	5028	〃
図15	1	図版44	5	SC	9	掘り形西壁近くに当たるDT-23-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに荒れが進み，調整は不明。	外面は淡い明橙色。内面は黒変したまま。器壁の芯部には淡い灰褐色の黒化層が残る。	5037	4
〃	2			SC	9	掘り形南西角に当たると考えられるDT-22-19区Ⅲ層最下面から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ仕上げ。口縁内面の屈曲部は横方向のミガキ調整を施す。	にぶい黄色。口縁端面に赤色顔料が付着。	5038	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図15	3	図版44	6	SC	9	掘り形南半部に当たるDT-22-18区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ仕上げ。	明赤褐色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	5033	4
〃	4	図版44	7	SC	9	掘り形北西角付近に当たるDT-23-9区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は縦方向のミガキ調整。内面には絞り痕が残る。	赤褐色。	5039	〃
〃	5			SC	9	掘り形北半部に当たるDT-23-3区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ仕上げ。内面は篦状工具によるナデ調整が施される。	明黄褐色。器壁の芯部には淡い黒色の黒化層が残る。	5035	〃
〃	6	図版44	8	SC	9	掘り形北半部に当たるDT-23-2区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	明褐色。器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。	5036	〃
〃	7			SC	9	掘り形中央に当たるDT-22-22区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面の荒れが著しく，調整は不明。	明赤褐色。	5040	〃
〃	8	図版44	9	SC	9	掘り形西壁近くに当たるDT-23-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	口縁部周辺は横ナデ仕上げ。坏部外面はミガキ調整，内面はナデ調整を施す。内面には爪先と考えられる圧痕がみられる。	外面は黒斑。内面は暗褐色。	5042	〃
〃	9	図版45	1	SC	9	掘り形中央のSP-101東側に当たるDT-22-22区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	口縁部周辺は横ナデ仕上げ。坏部外面には暗文状のミガキを斜交させながら施す。内面は篦状工具で器表面を掻き取り，横方向のミガキ調整を加える。	明黄褐色。坏部外面には赤色顔料が点々と付着。ただし，全面には塗布していない。	5031	〃
〃	10			SC	9	掘り形中央のSP-101東側に当たるDT-22-22区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	器表面の荒れが進むが，部分的に横ナデ調整の痕跡を観察できる。	明黄褐色。内面に部分的に黒斑が生じている。	5032	〃
〃	11			SC	9	SP-102周辺の掘り形北半部に当たるDT-23-3区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	鉢	外面は横ナデ仕上げ。内面は篦状工具による横ナデ調整。	淡い橙色。	1806	〃
〃	12			SC	9	掘り形中央のSP-101東側に当たるDT-22-22区Ⅲ層から出土。	弥生土器	把手	表面はミガキ仕上げ。	黒褐色。	1797	〃
〃	13	図版45	2	SC	9	SP-102周辺の掘り形北半部に当たるDT-23-3区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	外面には，幅８～10㎜のナデ調整の痕跡が残る。内面はナデ調整。外底面は指頭によるナデ調整を施す。	赤褐色。外底面には黒斑が生じている。	5034	〃
〃	14			SC	9	掘り形北西角に当たるDT-23-9区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	壺もしくは鉢	二次的な火熱を受けて，赤化するとともに，器表面は荒れが著しく，調整は不明。	外面は赤褐色，内面は褐灰色。	5041	〃
		図版45	3	SC	12	住居東壁周辺に当たるDT-24-2区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺?	外面は非常に丁寧なナデ。内面は荒れが進み調整は不明。	外面は橙色。内面はにぶい黄橙色。	5043	4
図17	1			SC	25	床面に貼り付いた状態で出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整を施す。	黒褐色。	5056	5
〃	2			SC	25	掘り形南西隅の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整を施す。	黒褐色。	5055	〃
〃	3	図版45	4	SC	25	掘り形南東隅で，図17-21の南側で床面から浮いた状態で出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ仕上げ。	にぶい赤褐色。	519	〃
〃	4	図版45	6	SC	25	SK-527上面のSC-25埋土下部から出土した破片とⅢ層最下部から出土した破片が接合復元できた。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は刷毛目調整の後に横ナデ仕上げ。胴部外面は刷毛目調整。下半部は二次的な火熱を受け，器表面が荒れる。内面は上半部に刷毛目調整，その後，指頭などでナデ仕上げを施す。下半部は非常に丁寧なケズリ調整。	浅黄色。	828	〃
〃	5	図版45	8	SC	25	埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ仕上げ。	器表面は明褐色。器壁の芯部には淡い灰褐色の黒化層が残る。	5071	〃
〃	6	図版45	7	SC	25	SK-527上面のSC-25埋土最下部から出土した。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面はケズリ調整の後にナデ調整を施す。高台状の底部は指頭による成形を行い，ナデ仕上げる。	にぶい黄橙色。外面には黒斑が生じている。	816	〃
〃	7			SC	25	埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は，底部側面を一旦，刷毛目調整し，その後ナデ調整を施し，さらに若干上方から刷毛目調整を再度施す。内面は器表面の荒れが進み，調整は不明。	にぶい黄色。内面は黒変したまま。	5049	〃
〃	8			SC	25	図17-18と同じく，南壁沿いに落ち込んだような状態で出土。	弥生土器	鉢	外面は刷毛目調整。内面はケズリに近い強い篦状工具によるナデ調整。	にぶい赤褐色。	521	〃
〃	9			SC	25	埋土中から出土。	弥生土器	壺	口縁端面～内面は横ナデ調整。外面には縦方向のミガキ様のナデ調整を施す。	明黄褐色。	5052	〃
〃	10			SC	25	埋土中から出土。	弥生土器	壺	口縁端面～外面は横ナデ。内面には幅5㎜ほどの横ナデ調整の痕跡が残る。	明褐色。	5051	〃
〃	11			SC	25	埋土中から出土。	弥生土器	壺	口縁端部～外面は横ナデ仕上げ。内面は器表面の荒れが著しく，調整は不明。	橙色。	5044	〃
〃	12	図版45	5	SC	25	掘り形南西隅の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は，突帯周辺を横ナデ調整，頸部を刷毛目調整。内面は器表面が荒れ，調整は不明。	明褐色。	5050	〃
〃	13			SC	25	埋土中から出土。	弥生土器	鉢？	外面は刷毛目調整の後にナデ仕上げ。内面は刷毛目調整，脚台部内面は器表面が荒れ調整不明。	橙色。	5054	〃
〃	14	図版45	9	SC	25	埋土中から出土。	弥生土器	鉢	胴部外面は篦状工具によるナデ調整。内面はケズリ調整の後に横ナデ仕上げ。	にぶい黄橙色。	5046	〃
〃	15	図版45	10	SC	25	埋土中から出土。	弥生土器	鉢	口縁部は横ナデ仕上げ。内外に指頭痕がわずかに残る。胴部は斜め上方に向かってナデ調整。内面は横ナデ仕上げ。	にぶい黄橙色。	5045	〃
〃	16	図版46	1	SC	25	同一個体と考えられる3片の破片が埋土中及び掘り形上部のⅢ層から出土。	弥生土器	高坏	外面は横ナデ調整，内面は刷毛目調整の後にナデ仕上げ。	明赤褐色。	6347	〃
〃	17	図版46	2	SC	25	埋土中から出土。	弥生土器	鉢	外面は，刷毛目調整の後に，底部の側面をナデ調整。内面はケズリ調整。	にぶい橙色。外面には黒斑が生じている。	5048	〃
〃	18	図版46	3	SC	25	遺構検出面で図17-8と同じく南壁沿いに接する位置から出土。	弥生土器	甕	外面は荒れが著しいが，ナデ調整を施しているようにみえる。内底面には指頭痕が残り，以上は幅5㎜前後のナデ調整の痕跡が残る。	橙色。外面には黒斑が生じている。	522	〃
〃	19			SC	25	埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は一部荒れが進むが，ミガキ調整の痕跡を観察できる。内面は指頭によるかなり強いナデ上げ。	外面は褐灰色の黒斑が残る。内面はにぶい橙色。	5047	〃
〃	20			SC	25	図17-21と折り重なるように，住居南東隅で床面からやや浮いた状態で出土。	弥生土器	壺	外面は篦状工具によるナデ上げ。内面は指頭で器壁を整形した後にかなり乱雑なケズリ調整を施す。	橙色。	517	〃
〃	21			SC	25	転倒した状態で，掘り形の南東隅で出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にナデ仕上げ。内底面は篦状工具でなでつけ，胴部内面を同じ篦状工具で乱雑にケズリ調整する。	橙色。外面には黒斑が生じている。	518	〃
		図版45	11	SC	25	埋土中から出土。	弥生土器	鉢？	脚端部周辺は横ナデ。外面は刷毛目調整。内面はナデ仕上げ。	明黄褐色。	5053	〃

挿図	写真図版	出土遺構	出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
No.	No.	種別 番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図18	1		SK 527	SK-527北西部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ仕上げ。	褐色。	5078	8
〃	2		SK 527	SK-527南東部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ仕上げ。	褐色。外面には煤が付着。	5079	〃
〃	3		SK 527	SK-527に設定した先行トレンチの埋土部分から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ仕上げ。	褐色。	5077	〃
〃	4	図版47 3	SK 527	SK-527南東部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	褐色。	5080	〃
〃	5		SK 527	SK-527南東部の埋土中から出土。	弥生土器	鉢	底部側面には成形時の指頭痕跡が残る。胴部下半はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい褐色。	5075	〃
〃	6	図版47 6	SK 527	SK-527の埋土中から出土。一部の破片はSC-25埋土中からも出土。	弥生土器	甕	外面は，肩部～口縁部直下に棒状工具を擦り付けたミガキ様の横ナデ調整。胴部は斜め方向の同様のミガキ様のナデ調整。内面は，指頭によるナデ調整，下半部は器表面が荒れて調整は不明。	明赤褐色。外面には不整形の黒斑が生じている。	5074	〃
〃	7	図版47 4	SK 527	SK-527埋土中から出土	弥生土器	壺	外面は横方向のミガキ調整。内面はナデ調整。	褐色。	5076	〃
〃	8	図版47 5	SK 527	SK-527北半部の焼土ブロックの下層から出土	弥生土器	?	外面は乱雑な刷毛目調整。内面には指頭圧痕が多く残る。	褐色。	829	〃
〃	9		SP 223	SC-25の柱穴P-223の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5073	6
〃	10		SP 223	SC-25の柱穴SP-223の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は指頭で整形した後にナデ仕上げ。内底面には幅2.5㎜ほどの棒状工具によるナデ痕跡が残る。	外面は赤褐色。内面は黒変が残存したまま。	5072	〃
図22	1	図版46 9	SC 25	掘り形上部のDV-25-6区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面とも横ナデ調整が施されていると考えられるが，器表面が荒れ詳細は不明。	にぶい黄橙色。	5066	7
〃	2	図版46 5	SC 25	掘り形東半部のDV-24-20区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ仕上げ。	外面は淡い褐色。内面は二次的火熱を受け橙色に変化。	5070	〃
〃	3		SC 25	掘り形中央部のDV-24-24区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	褐灰色。	5069	〃
〃	4	図版47 1	SC 25	掘り形中央部のDV-24-17区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ仕上げ。	器表面は明赤褐色。器壁の芯部は浅黄色。	5067	〃
〃	5	図版46 6	SC 25	掘り形北西部のDV-24-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は暗文風のミガキ調整。付け根付近は横ナデ仕上げ。内面には絞り痕が残る。	橙色。	5058	〃
〃	6	図版46 7	SC 25	掘り形上部のDV-25-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後に丁寧なナデ仕上げ。先行する刷毛目調整の痕跡を部分的に観察できる。内面はナデ調整。頸部には絞り痕が残る。	にぶい黄橙色。器壁の芯部には淡い黒色の黒化層が残る。	5060	〃
〃	7	図版47 2	SC 25	掘り形北西部のDV-24-22区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	壺	外面は器表面が荒れ調整は不明。内面は刷毛目調整。刷毛目の下面に絞り痕が残る。	明赤褐色。	5068	〃
〃	8	図版46 8	SC 25	掘り形上部のDV-24-21区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	鉢	外面は刷毛目調整，内面は指頭によるナデ調整。	明褐色。	5061	〃
〃	9		SC 25	掘り形上部のDV-24-11区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ様の上方へのナデ調整。内底面には指頭痕が残る。	にぶい橙色。	4032	〃
〃	10		SC 25	掘り形西半部のDV-24-9区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外底面は指頭によるデ調整。他は内外面とも器表面が荒れ調整不明。	にぶい褐色。外底面には黒斑が生じている。内面は黒変したまま。	5064	〃
〃	11		SC 25	掘り形西半部のDV-24-9区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面ともに二次的な火熱を受け，器表面が荒れ調整不明。内面は器表面が荒れているが，ナデか？	内面は明黄褐色であるが，外面は明赤褐色に赤変している。	5065	〃
〃	12		SC 25	掘り形西半部のDV-24-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	鉢	外底面及び外面はナデ仕上げ，内面はケズリ調整。	にぶい褐色。	5057	〃
〃	13	図版46 4	SC 25	住居床面に貼り付いた状態で出土。住居北西半部のDV-24-25区Ⅲ層から出土した破片と接合する。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は刷毛目調整。	橙色。	5059	5
〃	14		SC 25	掘り形上部のDV-25-7区Ⅲ層から出土。	須恵器	坏蓋	天井部の大半を回転篦ケズリ。他は横ナデ仕上げ。	灰色。	5063	7
〃	15		SC 25	掘り形上部のDV-24-23区Ⅲ層から出土。	須恵器	坏身	底部近くは回転篦ケズリ。他は横ナデ仕上げ。	灰色。	5062	〃
図24	1		SC 26	床面から出土。	弥生土器	高坏	外面は荒れが進み調整は不明。内面は横ナデ調整。	にぶい橙色。	5112	9
〃	2	図版47 8	SC 26	掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は指頭によるナデ調整。	明黄褐色。外面には黒斑が生じている。	5113	〃
〃	3	図版48 1	SP 199	SC-26の床面で検出したSP-199の掘り形埋土の中位～上半から出土した。	弥生土器	甕	口縁部周辺と外面はナデ調整。肩部内面には成形時の指頭痕が残り，胴部上半は粗いケズリ調整を施す。	明赤褐色。胴部外面には不整形の黒斑が生じている。	5122	〃
〃	4		SC 26	掘り形北西部のDW-26-6・7区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。肩部外面は草本類の茎を利用した擦過調整の後にナデ仕上げ。内面にはナデ調整が施されているが，成形時の指頭痕を部分的に観察できる。	明赤褐色。	5120	〃
〃	5		SC 26	掘り形北西部のDW-26-6・7区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	淡い褐色。	5119	〃
〃	6		SC 26	掘り形北西角のDW-26-11区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	外面は荒れが進み調整は不明。内面には部分的にミガキ調整の痕跡が残る。	にぶい黄褐色。器壁の芯部には淡い黒色の黒化層が残る。	5114	〃
〃	7		SC 26	掘り形北西部のDW-26-9区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にナデ仕上げ，内面は指頭によるナデ調整。	外面は褐灰色。内面は黒変したまま。	5118	〃
図27	1	図版48 3	SC 32	掘り形埋土下部から出土。	弥生土器	壺	内面は刷毛目調整の後に横方向のナデ調整，他は横ナデ調整を施す。	橙色。	5312	32
〃	2	図版48 2	SC 32	掘り形埋土下部から出土。	弥生土器	壺	外面は口縁部を横ナデ調整，胴部をミガキ調整。内面は口縁部を横ナデ調整，頸部を横方向の刷毛目調整，胴部は刷毛目調整の後にナデ仕上げる。	外面はにぶい黄橙色。内面は橙色。	5308	〃
〃	3	図版48 5	SC 32	掘り形東半部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は横方向の刷毛目調整。	にぶい黄褐色。外面には煤が付着。	5315	〃
〃	4		SC 32	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい黄橙色。	5314	〃
〃	5		SC 32	掘り形東半部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は突帯周辺はナデ，以下は縦方向の刷毛目調整。内面はナデ調整。	外面は灰黄褐色。内面はにぶい黄橙色。	5316	〃
〃	6	図版49 1	SC 32	掘り形埋土下部から出土。	弥生土器	甕	口縁部内外面は横ナデ調整。胴部外面は縦方向の刷毛目調整を丁寧に施す。内面は器表面が荒れているが，縦方向のケズリ調整の痕跡が残る。	橙色。外面には煤が付着。	5309	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図27	7			SC	32	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	鉢	内外面ともに横ナデ調整。	褐色～にぶい黄褐色。外面にわずかに炭化物が付着。	5310	32
〃	8			SC	32	掘り形南東部の埋土上部から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横方向のミガキ調整。口縁内面にはナデ調整も施される。端部はナデ調整。	外面は橙色。内面はにぶい黄橙色。内外面ともに黒斑が生じる。	5311	〃
〃	9	図版48	4	SC	32	掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	高坏	内外面ナデ調整。特に内面には板状工具によるナデ調整の痕跡を観察できる。	にぶい黄橙色。	5313	〃
〃	10	図版49	2	SC	32	床面直上から出土。	弥生土器？	不明	内面はナデ調整，外面は器表面の荒れにより調整は不明。	外面は灰白色。内面は褐灰色。	5317	〃
〃	11			SC	32	掘り形東半部の埋土中から出土。	弥生土器	壺か甕	外面は底部，胴部ともにミガキ調整。内面はナデ調整が施される。	外面はにぶい橙色で，底部には黒斑が生じる。内面はにぶい黄橙色。	5319	〃
〃	12			SC	32	掘り形北西部の埋土上部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面の荒れにより，調整不明。	浅黄橙色。器壁の芯部に黒色の黒化層が残る。	5318	〃
〃	13			SC	32	掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	甕か鉢	内外面ともにナデ調整を施す。	明褐色。	5320	〃
図28	1			SK	89	SC-32の炉跡SK-89の埋土中から出土。	弥生土器	壺	底部付近には縦方向のミガキ調整を施す。底部外面はナデ調整，他は器表面の荒れにより調整不明。	にぶい黄橙色。	5321	32
図29	1	図版48	6	SC	32	掘り形上部のDV-23-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れているが，外面にはミガキ調整の痕跡を観察できる。	灰白色。内面には黒斑が生じる。	5302	32
〃	2	図版49	3	SC	32	掘り形埋土出土の破片とDV-23-10区Ⅲ層下部から出土した破片が接合。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデあるいはナデ調整。	にぶい橙色。器壁の芯部には淡い黒色の黒化層が残る。	5216	34
〃	3			SC	32	掘り形上部のDV-23-7区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は縦方向の刷毛目調整で，端部付近はその後ナデ調整される。内面は器表面の荒れにより調整不明。	明褐色。	5303	32
〃	4			SC	32	掘り形上部のDV-23-2区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面の荒れにより，調整不明。	外面は橙色。内面はにぶい黄橙色。	5306	〃
〃	5			SC	32	掘り形上部のDV-23-4区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	端部及び外面は横ナデ調整。内面は器表面の荒れにより調整不明。	橙色。外面には煤が付着。	5304	〃
〃	6			SC	32	掘り形上部のDV-23-6区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は横方向のミガキ調整，内面はナデ調整。口縁部には横方向のミガキ調整。	橙色。	5305	〃
〃	7			SC	32	掘り形上部のDV-23-2区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横方向のミガキ調整。端部直下外面には横ナデも施される。	外面は橙色。内面はにぶい橙色。	5301	〃
〃	8			SC	32	掘り形上部のDV-23-10区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕？	外面胴部は刷毛目調整の後にナデ調整。底部及び内面はナデ調整。	外面は明褐色。内面はにぶい橙色。	5307	〃
図34	1	図版51	3	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ仕上げ。	器表面は暗赤褐色，胎は橙色。	5146	15
〃	2			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺？	外面は縦方向のミガキ調整，内面は篦状工具で丁寧なナデ調整を施す。	橙色。内外に不整形の黒斑が生じている。	5148	〃
〃	3			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	口縁端部周辺は横ナデ。他はナデ仕上げ。外面には成形時の指頭痕が部分的に残る。	明赤褐色。	5143	〃
〃	4			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	外面は荒れが著しく調整は不明，内面は横ナデ調整。	明赤褐色。	5195	17
〃	5			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺?	外面はミガキ調整，内面は荒れが著しく調整は不明。	明赤褐色。	5142	15
〃	6	図版50	1	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	口頸部周辺は器表面が荒れ調整不明。胴上半の外面はナデ調整，下半は刷毛目調整。内面はナデ調整，下半には刷毛目調整痕が残る。	外面は橙色から明赤褐色。胴部内面は黒変したまま。外底面を中心に黒斑が生じている。	5233	20
〃	7			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	外面は横ナデ調整，内面は器表面の荒れが進み調整は不明。	にぶい橙色。	5230	17
〃	8			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	口縁端部周辺～外面は横ナデ調整。内面は板状工具によるナデ調整の後にナデ仕上げ。	橙色。器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。	5139	15
〃	9			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ仕上げ。口縁部内面には成形時の指頭痕が残る。	明赤褐色。	5144	〃
〃	10	図版50	2	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	口頸部外面は刷毛目調整，内面は指頭によるナデ上げの後に口縁部内面に刷毛目調整を加える。胴部上半は刷毛目調整，下半はミガキ調整。胴部内面にはケズリ調整を施す。		5235	20
〃	11	図版50	3	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はミガキ調整，内面はナデ調整で，粘土接合部に帯状に成形時の指頭痕がめぐる。	橙色。胴部中位の外面に黒斑が生じている。	5210	18
〃	12	図版51	1	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ。頸部外面は刷毛目調整。上半部と付け根部分には，横ナデ調整を加える。内面は刷毛目調整の後に横ナデ。頸部内面はナデ調整，成形時の指頭痕がわずかに残る。	明赤褐色。	5127	15
〃	13	図版51	2	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ仕上げ。	明黄褐色。	5129	〃
図35	1	図版51	4	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ仕上げ。外面は丁寧なナデ仕上げ。部分的に先行する刷毛目が残る。内面には成形時に器体を絞った粘土の撚れが残る。	橙色。	5134	15
〃	2	図版51	8	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面はケズリ調整。成形時の指頭痕が部分的に残る。		5236	19
〃	3	図版52	1	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	口頸部の内外面は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整の後に上半部を中心にしてナデ調整を加える。内面は成形時のナデ痕跡がそのまま残る。粘土接合部分に沿って指頭痕が帯状に残る。	外面はにぶい黄橙色。内面は淡い黒灰色。外面には不整形の黒斑が生じている。	5125	14
〃	4	図版51	6	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	外面は荒れが著しく調整不明。内面は口縁部付近を横ナデ調整。胴部内面を刷毛目調整。	明赤褐色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	5187	17
〃	5			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	横ナデ調整。内外面に成形時の指頭痕が残る。	にぶい橙色。	5200	〃
〃	6	図版51	7	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。頸部は刷毛目調整。内面は指頭によるナデ調整。	明赤褐色。内面には部分的に黒変部が残る。	5203	〃
〃	7	図版51	5	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5202	〃
〃	8			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	内外面ともに荒れが著しく，外面に部分的に刷毛目調整が残るのみ。	赤褐色。器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。	5229	〃
〃	9	図版52	3	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	外面は器表面の荒れが進み，調整不明。内面は篦状工具によるナデ調整。成形時の指頭痕が残る。	黄橙色。器壁の深部には灰黒色の黒化層が残る。	5151	15

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図35	10	図版52	2	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。器壁の芯部には淡い黒色の黒化層が残る。	5224	17
〃	11			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。口縁部外面には刷毛目調整の痕跡が部分的に残る。	外面は橙色。内面は淡い黒色。	5227	〃
〃	12			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整。内面は荒れが著しく調整不明。	橙色。器壁の芯部には黒灰色の黒化層が残る。	5232	〃
〃	13			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5225	〃
〃	14			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。口縁屈曲部には成形時の指頭痕が残る。	明赤褐色。	5219	〃
〃	15			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	内外面ともににぶい橙色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。	5199	〃
〃	16	図版52	4	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	口縁部周辺は器表面の荒れが進み調整不明。ただし，口縁部内面には成形時の指頭痕が残る。胴部外面は刷毛目調整，内面は乱雑なケズリ調整。外底側面は指頭で強く撫で付け。内底面は指頭によるナデ調整。	明赤褐色。胴部上半には不整形の黒斑が生じている。	5204	〃
図36	1			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	内面は荒れ調整不明。外面は横ナデ調整。	内外面ともににぶい橙色。外面に煤付着。	5197	17
〃	2			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は横方向の丁寧なナデ調整，内面はケズリ調整。	外面はにぶい橙色。内面は黒色。	5198	〃
〃	3			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	内外面ともに荒れが著しく調整は不明。	橙色	5186	〃
〃	4	図版52	5	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5213	〃
〃	5	図版52	6	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。外面には指頭痕が残る。肩部外面は刷毛目調整の後にナデ仕上げ。胴部中位以下は刷毛目調整。肩部内面は刷毛目調整，以下は縦方向のケズリ調整。底部近くは刷毛目調整の後にかるくナデ仕上げ。裾部には指頭痕が残る。	外面はにぶい黄橙色。胴部内面は淡い黒灰色。底部の裾は二次的火熱を受けて赤変。	5123	14
〃	6	図版53	1	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面は，口縁部にナデ調整，胴部に刷毛目調整の後にナデ仕上げ。内面は器表面が荒れているが，胴下半部にケズリ調整，上半部に刷毛目調整の後にナデ調整した痕跡が残る。	にぶい黄橙色。	5234	20
〃	7			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面の荒れが著しく調整は不明。	内外面ともに橙色。	5189	17
〃	8	図版53	2	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ調整。外面は刷毛目調整，内面は器表面が荒れ調整は不明。肩部内面には成形時の指頭痕が残る。	明赤褐色。胴下半部に不整形の黒斑が生じている。	5212	18
図37	1	図版53	3	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整の後にかるくナデ調整を加える。内面はケズリ調整，下半部のケズリはやや乱雑。	明赤褐色。口縁部内面と胴部中位，そして胴下半部～底部の対象的な位置に黒斑が生じている。	5124	14
〃	2	図版53	4	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ仕上げ。胴部外面は刷毛目調整を施しナデ仕上げ。上半部の半周ほどに刷毛目工具を押しつけた面ができている。内面はかなり乱雑な刷毛目調整。	橙色。胴部下半の外面と，これに対応する位置の内面に不整形の黒斑が生じている。器壁の芯部には黒化層が残る。	5131	〃
〃	3	図版54	1	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	鉢	外面は器表面の荒れが進み調整は不明。胴部には帯状に成形時の指頭痕がめぐる。内面は刷毛目調整の後にナデ調整。	明赤褐色。内面には部分的に黒変部が残る。	5196	17
〃	4			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は乱雑なミガキ調整，内面は刷毛目調整。	外面には黒斑が生じている。内面はにぶい橙色。	5220	〃
〃	5	図版54	2	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ仕上げ。胴部外面は刷毛目調整，内面は器表面の荒れが進み調整は不明。	外面は明赤褐色。内面は淡い黄褐色。内面に不整形の黒斑が生じている。	5130	15
〃	6	図版54	3	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は先端が丸い工具で一気にナデ上げ，内面は荒れてはいるが，篦状工具の痕跡が残る。外底部裾は指頭による押さえ。	明赤褐色。外底部～胴部に不整形の黒斑が生じている。	5177	16
〃	7	図版54	5	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	鉢	外面は刷毛目調整，内面は擦過に近い板状工具によるナデ調整。成形時の指頭痕があちこちに残る。	内外面ともに橙色。外面には黒斑が生じている。	5209	18
〃	8	図版54	6	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ仕上げ。坏部外面の反転部には細い棒状工具をナデ付け，沈線様もしくはミガキ調整様の調整痕跡が残る。	にぶい黄橙色。外面には橙色の粘土を化粧掛けする。	5137	15
〃	9	図版54	7	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	高坏	坏部の反転部には篦状工具によるナデつけたような調整痕が残る。	明褐色。	5138	〃
〃	10	図版54	8	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	高坏	外面は刷毛目調整後にナデ仕上げされるが，刷毛目が部分的に残る。内面も刷毛目調整であるが，荒れが進み，刷毛目の一部しか観察でない。	明赤褐色。	5128	〃
〃	11	図版54	4	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	高坏	坏部上半部は刷毛目調整の後に横ナデ仕上げ。下半外面は刷毛目調整の後にミガキ仕上げ，内面は篦状工具によるナデ調整。	橙色。内面には不整形の黒斑が生じている。	5135	〃
〃	12			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	高坏	坏部上半はナデ調整，下半は刷毛目調整。内面は荒れて調整不明。	橙色。器壁の芯部に淡い黒色の黒化層が残る。	5183	16
〃	13			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ。坏部下半はミガキ調整。	にぶい橙色。	5150	15
図38	1	図版55	1	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	高坏	外面は刷毛目調整，内面はケズリ調整。坏部内面は荒れ調整不明。脚部内面は指頭によるナデ調整，脚部近くには部分的に刷毛目が残る。	外面は明赤褐色。坏部内面と脚部内面は黒変したまま。	5184	16
〃	2	図版55	4	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	高坏	外面は刷毛目調整の後に横ナデ仕上げ。上半部にわずかに刷毛目調整の痕跡を観察できる。内面は裾部近くは刷毛目調整の後に横ナデ仕上げ。成形時の指頭痕が残る。上半部は篦状工具を回転させながらナデ調整を施す。	明黄褐色～明褐色。坏部内面は黒色。黒斑か？	5126	15
〃	3			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	高坏	脚裾部周辺は横ナデ仕上げ。外面はミガキ様のナデ調整，内面は丁寧なナデ仕上げ。成形時の指頭痕が部分的に残る。	外面は明赤褐色。内面は明黄褐色。	5140	〃
〃	4			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。裾端面には指頭によるナデ調整の痕跡が残る。内面には横ナデによる粘土の撚れが生じている。	にぶい橙色。外面には赤褐色の粘土の化粧掛け。	5147	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図38	5	図版55	5	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	脚台付土器	口縁部周辺は横ナデ仕上げ。外面は刷毛目調整の後にナデ調整。	橙色。	5155	15
〃	6	図版55	2	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面はナデ調整。	橙色。	5156	〃
〃	7	図版55	3	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	把手	丁寧なナデ仕上げ。	橙色。化粧掛けを施す。	5214	17
〃	8	図版55	6	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面はケズリ調整。内底面はナデ調整。	外面は橙色。内面は淡い灰色。外面には不整形な黒斑が生じている。	5191	〃
〃	9	図版56	1	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	外面は擦過調整，内面はケズリ調整。内底面には指頭によるナデ痕跡が残る。	外面は明褐色。外底付近に黒斑が生じている。内面は淡い黒褐色。	5192	〃
〃	10	図版57	1	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は刷毛目調整の後に指頭でナデ調整。内底部には粘土接合線が残る。	明褐色。	5231	19
〃	11			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	外面は篦状工具によるナデ調整，内面には成形時の指頭痕が残る。	明赤褐色。器壁の芯部には淡い黒色の黒化層が残る。	5165	16
〃	12	図版56	2	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	鉢	外面はナデ調整，内面には部分的に刷毛目調整の痕跡が残る。	橙色。器壁の芯部に淡い黒色の黒化層が残る。	5182	〃
図39	1	図版56	3	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	胴部外面は刷毛目調整の後に部分的にナデ調整を加える。刷毛目調整は擦過に近い乱雑なもの。底部裾には成形時の指頭痕が残る。内面は刷毛目調整。内底面は指頭によるナデ調整。	内外面ともに黄橙色。胴部外面下半に不整形の黒斑が	5207	17
〃	2			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面はナデ調整であるが，部分的に擦過痕跡が残る。底部裾には成形時の指頭痕が残る。内面はケズリ調整。	明褐色。外面には黒斑が生じている。	5172	16
〃	3			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面は荒れが著しく大半の器表面は剥落。内面は指頭によるナデ調整。	外面は橙色。内面は黒変したまま。	5173	〃
〃	4			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外底裾部は篦状工具で押さえる。他は器表面の荒れが進み調整は不明。	明赤褐色。外底面には黒斑が生じている。	5178	〃
〃	5	図版56	4	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整。底部裾は成形時の指頭痕が残る。内面は指頭によるナデ調整。	橙色。器壁の芯部には黒色の黒化層，内面には黒変部が残る。	5159	〃
〃	6			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面はナデ調整。底部裾には成形時の指頭痕が残る。内面は指頭によるナデ調整の後に刷毛目調整。	にぶい黄橙色。内面及び外面の一部には黒変部が残る。	5164	〃
〃	7			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面及び外底面はナデ調整。内面は荒れが進み調整は不明。	外面は橙色。内面はにぶい橙色。	5174	〃
〃	8			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面は二次的な火熱を受けて荒れ調整は不明。内面には指頭によるナデ調整の痕跡が残る。	外面は暗赤褐色。内面は黒色。	5194	17
〃	9			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面には成形時の指頭痕が残る。ナデ仕上げ。内面は指を回しながらナデ調整を施す。	にぶい橙色。	5206	〃
〃	10			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕あるいは鉢	外面は器表面が荒れて調整は不明，内底面は指頭によるナデ調整。	橙色。内面は黒変したまま。	5181	16
〃	11	図版56	5	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面はナデ調整。底部裾には成形時の指頭痕が残る。内面には篦状工具の痕跡が残る。	明赤褐色。	5158	〃
〃	12			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整の後に部分的にナデ調整を施す。内面は指頭によるナデ調整。	明褐色。底部裾を中心として不整形の黒斑が生じている。	5166	〃
〃	13	図版57	4	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面はナデ仕上げであるが，部分的に擦過状の調整痕跡を観察できる。内面は荒れが進み調整は不明。	橙色。	5161	〃
〃	14	図版56	6	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整であるが，器表面が荒れ，部分的にしか残っていない。内面は指頭によるナデ調整。	明赤褐色。	5201	17
〃	15			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面には幅の広いミガキ調整の痕跡が残る。ナデ調整である可能性もある。	外面は橙色。内面は明赤褐色。	5776	〃
〃	16			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	甕	外面は二次的な火熱を受け，器表面が荒れ調整不明。内面も荒れが著しく調整不明。	外面は二次的な火熱を受け赤褐色に赤変。内面は黒変部が残存。	5169	16
〃	17	図版57	3	SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	壺	外底部裾に刷毛目調整の痕跡が部分的に残る。内面は指頭によるナデ調整。	明赤褐色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	5180	〃
〃	18			SC	33	SC-33上部土器群。	弥生土器	鉢	底部裾にナデ調整の痕跡が残るが，他は二次的な火熱を受けて調整は不明。内底面には成形時の指頭圧痕がわずかに残る。	二次的な火熱を受け，内外面ともに赤褐色に赤変。底部は内外ともに淡い黒色。	5170	〃
〃	19	図版57	2	SC	33	SC-33上部土器群。埋土及びV-22-22区Ⅲ層下半から出土した破片が接合。	弥生土器	壺	外面は荒れが進み，胴下半部に部分的に擦過調整痕が残るのみ。内面は指頭によるナデ調整。	外面は明赤褐色。内面は黒変したまま。外底面を中心に不整形の黒斑が生じている。	5215	18
図40	1	図版57	9	SC	33	掘り形西半部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は荒れが進み調整は不明，内面は横ナデ調整。	橙色。	5145	15
〃	2	図版57	6	SC	33	掘り形南東部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ仕上げ。	口縁端面はにぶい黄橙色，他は橙色。	5133	〃
〃	3	図版57	7	SC	33	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ仕上げ。	にぶい黄色。口縁端面から外面にかけて不整形の黒斑が生じている。	5132	〃
〃	4	図版57	5	SC	33	掘り形南東部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は横方向のミガキ調整，内面は指頭と篦状工具によるナデ調整。	外面は明赤褐色。内面は黒色。	5218	17
〃	5	図版57	8	SC	33	北東部の掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5223	〃
〃	6			SC	33	北東部の掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	口縁部周辺はにぶい赤褐色。内面はにぶい橙色。	5221	〃
〃	7	図版57	10	SC	33	掘り形埋土中から出土	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はミガキ調整，内面はケズリ調整。	外面はにぶい褐色。内面は明黄褐色。	5153	15
〃	8			SC	33	掘り形埋土でも下層部分から出土。	弥生土器	高坏	外面は器表面が荒れ調整不明。内面は刷毛目調整の後に，裾端に横ナデ調整を加える。	橙色。	5157	〃
〃	9			SC	33	東半部の掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	甕	底部裾に成形時の指頭鮎痕が残るが，内外ともに器表面が荒れ調整は不明。	外面は明赤褐色。外底面，内面及び器壁の芯部は淡い黒色の黒変したまま。	5171	16
〃	10	図版58	1	SC	33	床面東半部から出土。	弥生土器	壺	外面は丁寧なナデ調整，内面には絞り痕が残る。	赤褐色。	5222	17

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図40	11	図版58	2	SC	33	SP-445の掘り形を検出したSC-33床面で出土。	弥生土器	高坏	口縁部周辺は横ナデ調整。坏部外面は刷毛目調整の後に丁寧なナデ仕上げ，内面は横ナデ調整。	外面は橙色。赤褐色の肌理の細かな粘土を化粧掛け。内面は明黄褐色。器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。	5136	15
〃	12			SC	33	東半部の床面直上から出土。	弥生土器	高坏	指頭で成形した後に刷毛目調整を施す。口縁部周辺はかなり強い横ナデ調整。	明赤褐色。器壁の芯部には部分的に暗赤褐色の黒化層が残る。	5149	〃
〃	13			SC	33	掘り形上部のDV-22-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横方向のミガキ調整。	橙色。	5324	30
〃	14			SC	33	掘り形上部のDW-22-16区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	壺	端部及び外面はナデ調整が施され，端部直下には横方向のナデの痕跡が確認できる。内面は器表面の荒れにより調整不明。	にぶい黄橙色。	5323	〃
〃	15	図版58	3	SC	33	掘り形上部のDV-22-11区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は縦方向のナデ調整，内面は横ナデ調整。内面には成形時の指頭痕がわずかに残る。	にぶい橙色。器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。	5190	30
〃	16			SC	33	掘り形上部のDV-22-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	外面はにぶい黄橙色。内面は橙色。	5322	〃
〃	17	図版58	4	SC	33	掘り形北西半部のDV-22-18区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	壺	外面は器表面の荒れが進み調整不明，内面はナデ調整。成形時の指頭痕が残るとともに，接合線と考えられる粘土の撚れを観察できる。	黄橙色。器壁の深部には灰黒色の黒化層が残る。	5152	15
〃	18			SC	33	掘り形上部のDV-22-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は口縁端部及び口縁はナデ調整。胴部は刷毛目調整。内面は刷毛目調整の後にナデ調整。	外面は橙色。内面はにぶい黄橙色。	5326	30
〃	19	図版58	5	SC	33	掘り形上部のDV-22-14区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	高坏	内外ともに面器表面の荒れにより調整不明。	外面は明褐色。内面はにぶい褐色。外面全体から口縁部内面にかけて黒斑が生じる。	5327	〃
〃	20			SC	33	掘り形上部のDV-22-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	外面にぶい黄橙色。内面は褐色。内面に黒斑が生じる。	5328	〃
〃	21			SC	33	掘り形上部のDV-22-18区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	鉢	内外面ともにナデ調整。	淡い黒色。	5217	〃
〃	22			SC	33	掘り形上部のDV-22-22区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	鉢	内外面ともにナデ調整。	外面はにぶい黄褐色。内面は明褐色。	5325	〃
〃	23	図版58	6	SC	33	掘り形上部のDV-22-18区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	外面は器表面が荒れ調整は不明。内面は丁寧な横ナデ調整。	橙色。口縁部を中心として明赤褐色の赤彩がみられる。	5188	〃
〃	24			SC	33	掘り形上部のDV-22-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	外面は篦状工具による丁寧なナデ調整。他は内面を含めて横ナデ調整。	橙色。外面には明橙色粘土を化粧掛け。器壁芯部には黒色の黒化層が残る。	5330	〃
〃	25			SC	33	掘り形上部のDV-22-24区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れて調整は不明。	明赤褐色。	5331	〃
〃	26			SC	33	掘り形上部のDV-22-21区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は篦状工具による強いナデ調整，内面はナデ調整。	外面は明褐色。内面は黒変したまま。外面には黒斑が生じている。	5338	〃
〃	27	図版58	8	SC	33	掘り形上部のDV-22-24区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕か鉢	外面は篦状工具によるナデ調整，内面は乱雑な刷毛目調整。	にぶい橙色。器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。外底面には不整形の黒斑が生じている。	5334	〃
〃	28			SC	33	掘り形上部のDV-22-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整。内面は指頭によるナデ調整の痕跡がわずかに残る。	赤褐色。	5179	〃
〃	29			SC	33	掘り形上部のDV-22-14区Ⅲ層から出土。	弥生土器	鉢あるいは甕	外面は荒れが著しく調整は不明，内面はナデ調整。	にぶい橙色。	5336	〃
〃	30			SC	33	掘り形上部のDV-22-22区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整。裾部には成形時の指頭痕が残る。内面は指頭によるナデ調整。	明赤褐色。	5335	〃
〃	31			SC	33	掘り形上部のDV-22-22区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	甕	外面には，縦方向の刷毛目調整に加え，指頭痕が確認できる。内面は縦方向のケズリ調整。底部付近には指頭痕が残る。	橙色。外面には一部黒斑が生じ，器壁の芯部に黒化層が残る。	5329	〃
〃	32			SC	33	掘り形上部のDV-22-23区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	甕	外面は裾部を指頭で成形した後に刷毛目調整を施し，さらにナデ仕上げる。内面は荒れ調整は不明。	明赤褐色。	5333	〃
〃	33			SC	33	掘り形上部のDV-22-14区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整の後に部分的にケズリ調整を加える。底裾部は指頭で成形した後に横ナデ調整を加える。内面は指頭によるナデ調整。	外面は明赤褐色。内面は黒色。	5337	〃
図41	1	図版58	9	SK	513	SC-33炉跡SK-513の掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ仕上げ。	にぶい橙色。器壁の芯部には灰黒色の黒化層が残る。	5141	15
〃	2	図版59	1	SK	513	SC-33炉跡SK-513の掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	壺	胴部上半の外面は刷毛目調整，下半は刷毛目調整の後にナデ調整を加える。肩部内面には成形時の指頭痕が残る。下半は乱雑な刷毛目調整。	にぶい橙色。外底面～胴下半部と，肩部に黒斑が生じている。	5211	31
〃	3	図版60	1	SK	513	SC-33炉跡SK-513の掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ仕上げ。肩部との境には成形時の指頭痕が残る。胴部外面でも上半は刷毛目調整の後にナデ仕上げ。下半はケズリに近い擦過調整。内面は指頭によるナデ調整。	橙色。	5205	〃
〃	4	図版59	2	SK	513	SC-33炉跡SK-513の掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整の後に部分的にナデ調整を加える。内面はナデ調整であるが，口縁屈曲部周辺には刷毛目調整痕が部分的に残る。	外面は橙色。内面は黒変したまま。外底部周辺には黒変部が残る。	5208	〃
〃	5	図版58	7	SK	513	SC-33炉跡SK-513の掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は指頭で成形した後，強い横ナデ調整。胴部外面は丁寧ナデ仕上げ。内面はケズリ調整の後に口縁部近くを板状の工具でナデ調整。ケズリ調整の痕跡が粘土の撚れで隠れている。	内外面ともに橙色。器壁の芯部には灰色の黒化層が厚く残る。	5185	〃
〃	6	図版59	3	SK	513	SC-33炉跡SK-513の掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに刷毛目調整。内面の口縁部屈曲部周辺には指頭圧痕が残る。	外面は橙色。内面は淡い黒色。外面には煤が付着する。	5193	〃
〃	7			SK	513	SC-33炉跡SK-513の掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	鉢	外面は指頭による成形の後に刷毛目調整。内面は篦状工具によるナデ調整。内底面には成形時の指頭痕が残る。	橙色。内底面を中心に黒変部が残る。	5168	〃
〃	8			SK	513	SC-33炉跡SK-513の掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は丁寧なナデ調整，内面には指頭痕が残る。	外面は明赤褐色。内面は黒色。外面には黒斑が生じている。	5332	30
〃	9			SK	513	SC-33炉跡SK-513の掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整。底部側面は篦状工具によるナデ付け。内面は荒れてはいるが，部分的にナデ調整の痕跡が残る。	明黄褐色。器壁の芯部には淡い黒色の黒化層，外面に黒変部が残る。	5167	31

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図41	10	図版58	10	SK	513	SC-33炉跡SK-513の掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	甕	外面のあちこちに成形時の指頭痕が残る。内面は指頭によるナデ調整。	外面は橙色。内底面は黒職。	5160	31
〃	11			SP	441	SC-33内SP-441掘り形上半部から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整。裾付近は刷毛目工具で押さえつける。内面は荒れが著しいが，篦状工具痕が残る。	明赤褐色。	5162	〃
〃	12			SP	441	SC-33内SP-441掘り形上半部から出土。	弥生土器	壺	胴下半部の外面は刷毛目調整の後にナデ調整。外底部近くは篦状工具によるナデ調整。内面は刷毛目調整。	にぶい橙色。外底面及び内底面に不整形な黒斑が生じている。	826	32
〃	13	図版60	2	SC	33	SC-33内SK-539西側の攪乱部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5226	31
〃	14	図版60	3	SP	445	SC-33内SP-445の掘り形検出面から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面は丁寧なナデ調整。不明瞭であるが，部分的に成形時の指頭痕が残る。	橙色。器壁の芯部には黒灰色の黒化層が残る。	5175	〃
〃	15			SP	447	SC-33柱穴SP-447掘り形埋土上層から出土。	弥生土器	甕	外面は荒れが進むが，底部裾近くには刷毛目調整の痕跡を観察できる。内面はケズリ調整。	橙色。底部裾近くには小さな黒斑が生じている。	5163	〃
〃	16			SP	480	掘り形内から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面には篦状工具で強くナデ上げたような調整痕跡が残る。	橙色。	5176	〃
〃	17	図版60	4	SC	33	出土位置不明。	弥生土器	片口鉢？	口縁部周辺は横ナデ調整。外面には幅広の条線を観察できる。内面は丁寧なナデ調整。	外面はにぶい黄橙色。内面はにぶい橙色。	5228	17
〃	18	図版60	5	SC	33	床面で確認できた攪乱部分から出土。	弥生土器	壺	外面は横ナデ調整，内面は篦状工具によるナデ調整。	にぶい黄橙色。	5154	15
図47	1	図版60	7	SC	37	SC-37の柱穴と考えるSP-226から出土。	弥生土器	甕	突帯の周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面はナデ調整。	外面は黒褐色，内面はにぶい褐色。外面には煤が付着。	5353	36
〃	2			SC	37	掘り形上面のDW-24-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	橙色。	5347	〃
〃	3	図版60	6	SC	37	掘り形上面のDW-25-3区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともにナデ調整。	にぶい黄橙色。外面には黒斑が生じている。	5351	〃
〃	4			SC	37	掘り形上面のDW-25-8区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	灰黄褐色。	5352	〃
〃	5	図版60	8	SC	37	掘り形上面のDW-24-24区Ⅲ層から出土。	弥生土器	ミニチュア土器	手捏ねで，内外面に指頭痕が顕著に残る。	外面はにぶい黄橙色。内面は橙色。外面には黒斑が生じている。	5350	〃
図49	1	図版60	10	SC	39	掘り形北西部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	外面はにぶい褐色。内面は明褐色。	5355	37
〃	2			SC	39	掘り形南東部の埋土下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。内面の調整は粗く，粘土が撚れた状態のままの部分もある。	橙色。	5354	〃
〃	3	図版60	9	SC	39	掘り形北東部の埋土上部から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整，内面は屈曲部下に横方向の刷毛調整，屈曲部より上部には刷毛目もしくは板ナデの工具痕を観察できる。	橙色。器壁芯部は淡黄色。	5356	〃
〃	4	図版61	1	SC	39	掘り形埋土下半部から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整。内面下半部は横方向の刷毛目調整，上半部は器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄橙色。	5357	〃
〃	5	図版61	4	SC	39	掘り形南東部の埋土②層から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整，最大径周辺にはナデ調整が追加される。内面はケズリ調整。最大径より上部には指頭痕が顕著に残る。	外面はにぶい黄橙色。内面はにぶい褐色。	5362	〃
図50	1			SC	39	掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい黄褐色。器壁の芯部に黒化層が残る。	5359	37
〃	2			SC	39	掘り形埋土下半部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	外面はにぶい橙色。内面は黄灰色。	5358	〃
〃	3	図版61	3	SC	39	掘り形東半部の埋土下部から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整。内面はケズリ調整の後にミガキ調整を施す。口縁部周辺は横ナデ調整。内面には板状工具の小口痕が残る。	橙～にぶい黄橙色。外面には煤が付着。	5339	34
〃	4	図版62	1	SC	39	掘り形東半部の埋土下部から出土。DX-25-17区Ⅲ層やSD-62から出土した破片と接合する。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整で，下半部では部分的に板ナデ調整に変化。内面はミガキ調整。口縁部は内外面ともに横ナデ調整。	橙色。底部付近は二次的火熱により赤変。煤が付着。	5340	〃
〃	5	図版62	2	SC	39	掘り形南東部の埋土下半から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整。内面はケズリや刷毛目調整の後にミガキ調整を加える。底部周辺は指頭痕が残る。	橙色。	5363	37
〃	6	図版61	2	SC	39	掘り形埋土上半部から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともにミガキ調整。外面のミガキ調整は単位が細く，内面は幅広である。	外面は明褐色。一部に黒斑が生じる。内面は橙色。	5389	38
〃	7			SC	39	掘り形北東部の埋土下部から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にミガキ調整。底面はナデ調整とミガキ調整。内面はミガキ調整。	外面はにぶい黄橙色。内面は橙色。底面に黒斑が生じる。	5365	37
〃	8			SC	39	掘り形南西部の埋土下部から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は全体に黒斑が生じ，黒褐色を呈する。内面は橙色。	5368	〃
〃	9			SC	39	掘り形埋土上半部の埋土①層から出土。	弥生土器	壺	内面はナデ調整，外面は器表面が荒れ調整不明。	外面は褐灰色。内面は浅黄色～橙色。内面及び外面の底部に黒変が残る。	5364	〃
〃	10			SC	39	掘り形北東部の埋土下部から出土。	弥生土器	甕	器表面の荒れているが，胴部と底部の境に指頭痕が残る。	橙色～にぶい黄橙色。	5366	〃
図51	1	図版62	3	SC	39	掘り形埋土下半部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。外面には一部，板ナデ調整の工具痕を確認できる。胎土は黒味がかかり，やや肌理が粗く，金雲母を多く含む。	外面は橙色。内面はにぶい黄橙色。	5385	38
〃	2	図版62	4	SC	39	掘り形埋土下半部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。外面は板状工具によるナデ調整で，工具痕が条線状に残る。	明褐色。胎土は赤みが強く，金雲母を含む。	5386	〃
〃	3			SC	39	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	にぶい黄褐色。胎土に金雲母を含む。	5361	37
〃	4	図版62	5	SC	39	掘り形埋土下半部から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整もしくは板ナデ調整。指頭が顕著に残り，調整は粗い。内面は器表面が荒れ調整不明。	橙色。外面には黒斑が生じる。	5384	38
〃	5	図版62	6	SC	39	掘り形埋土上半部の埋土①層から出土。	弥生土器	甕	外面は器表面が荒れ調整不明。内面はナデ調整。	橙色。	5507	ミュージアム展示
図52	1			SC	39	掘り形上部のDX-25-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。	外面は灰黄褐色。内面はにぶい黄橙色。器壁の芯部に黒化層が残る。	5369	37
〃	2			SC	39	掘り形上部のDX-25-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	端部及び外面はナデ調整，内面は刷毛目調整。	外面はにぶい黄橙色。内面は橙色。	5360	〃
〃	3	図版63	4	SC	39	掘り形上部のDX-26-3区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。内面には絞り痕が残る。	外面は橙色。内面にぶい黄橙色。外面及び内面の一部に赤色塗彩の痕跡を確認できる。	5376	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図52	4			SC	39	掘り形上部のDX-25-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄橙色。表面に黒斑が生じ，器壁芯部に黒化層が残る。	5370	37
〃	5	図版63	3	SC	39	掘り形上部のDX-25-12区Ⅲ層部分から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面はナデ調整。	褐色。胎土は黒味がかかり，やや肌理が粗く，金雲母を多く含むなど，他の土器と若干異なる	5387	38
〃	6			SC	39	掘り形上部のDX-25-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺甕	内外面ともにナデ調整。	明褐色。	5373	37
〃	7			SC	39	掘り形上部のDX-26-3区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺甕	内外面ともにナデ調整。外面は板状工具によるナデ調整か？	橙色。	5375	〃
〃	8			SC	39	掘り形上部のDX-25-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	鉢	外面は縦方向，内面は横方向のミガキ調整が行われる。	外面は明褐色。内面は褐色。	5372	〃
〃	9	図版63	5	SC	39	掘り形上部のDX-25-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	外面は刷毛目調整。上半部にはナデ調整を追加。脚裾部との境の屈曲部分には横方向のミガキ調整。内面はナデ調整。絞り痕が残る。	橙色。	5380	38
〃	10			SC	39	掘り形上部のDX-25-25区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	底部周辺及び内面はナデ調整，外面は縦方向の粗いミガキ調整。	外面は明褐色。内面はにぶい黄褐色。	5378	37
〃	11			SC	39	掘り形上部のDX-25-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面はミガキ調整。	外面はにぶい黄褐色。内面は褐灰色。	5381	38
〃	12			SC	39	掘り形上部のDX-25-14区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内面と底面はナデ調整。外面はミガキ調整か？	外面はにぶい黄褐色。内面は灰黄褐色。	5377	37
〃	13			SC	39	掘り形上部のDX-25-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺か鉢	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。表面は脆く，層状に剥離する。	外面は明褐色。内面はにぶい黄橙色。	5379	38
〃	14			SC	39	掘り形上部のDX-25-17区Ⅲ層から出土。	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転ナデ調整。	灰色。	5371	37
		図版64	1	SC	39	掘り形上部のDX-25-18区Ⅲ層から出土。	縄文土器		胎土に雲母を多く含む。傾き，上下不確実。器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。器壁の芯部に黒化層が残る。	5374	〃
		図版64	2	SC	39	掘り形上部のDV-25-24区Ⅲ層から出土。	縄文土器		小片のため上下および傾きは不確実。外面はケズリ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面はにぶい黄橙色。内面は褐灰色。	5462	38
図54	1			SC	41	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ仕上げ，内面はナデ調整。	暗赤褐色。	5094	10
〃	2	図版64	4	SC	41	掘り形上部のDV-25-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ仕上げ。	橙色。	5095	〃
〃	3	図版64	3	SC	41	掘り形上部のDW-25-6区Ⅲ層最下面で遺構検出直前に出土。	弥生土器	蓋？	外面は丁寧なナデ仕上げ，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面には黒斑が生じている。内面は橙色。	5096	〃
図56	1	図版64	5	SC	42	掘り形埋土中から出土。	縄文土器	深鉢	底部外側面には指頭痕が残る。	外面は淡い黒褐色。接合面及び器壁の芯部は明赤褐色。	5082	13
〃	2	図版64	6	SC	42	掘り形埋土中から出土。	縄文土器	深鉢	外面は横ナデ調整。内面は指頭による縦方向のナデ調整。	褐灰色で，外面には黒斑と考えられる黒色部分がみられ，内面は黒変したまま。。	5081	〃
〃	3	図版64	7	SP	457	SC-42の柱穴SP-457埋土中から出土。	縄文土器	深鉢	口縁部周辺は横ナデ仕上げ。外面は幅広の条痕調整，内面はナデ調整。成形時の指頭痕が残る。	淡い明赤褐色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。	5083	〃
図57	1			SC	43	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕あるいは鉢	内外面ともに横ナデ仕上げ。	暗い褐灰色。	5084	13
〃	2	図版64	8	SK	496	DU-25-9区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ仕上げ。	橙色。	5088	〃
〃	3	図版64	9	SC	43	掘り形中央北よりに当たるDU-25-9区Ⅲ層最下面から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面は篦状工具によるナデ調整。	赤褐色。	5087	〃
〃	4	図版64	10	SK	496	DV-25-11区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ仕上げ。頸部外面は刷毛目調整の後に横ナデ仕上げ。内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい赤褐色。	5090	〃
〃	5	図版64	11	SK	496	DU-25-9区Ⅲ層から出土。	弥生土器	把手付片口鉢	外面は篦状工具による乱雑なナデ調整，内面は指頭によるナデ調整。	外面のほとんどは淡い黒色，内面は橙色。	5085	〃
〃	6			SK	496	DV-25-11区Ⅲ層から出土。	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転横ナデ仕上げ。	灰色。	5089	〃
〃	7	図版64	12	SK	496	DU-25-10区Ⅲ層から出土。	埴輪	円筒埴輪	籠部周辺は指頭によるナデ調整。他は刷毛目調整。内面には指頭痕が多く残る。	橙色。	5086	〃
		図版65	1	SC	43	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面は篦状工具によるナデ調整。	外面はにぶい橙色，内面は黒変したまま。	5091	〃
		図版64	13	SP	305	SC-43北隅の床面で検出したSP-305から出土。	弥生土器	甕	外面は擦過調整。内面はミガキ調整。	にぶい赤褐色。外面には煤が付着。	2868	〃
図59	1	図版65	2	SC	44	掘り形北西部に当たるSK-535との重複部から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面はケズリ調整。	明赤褐色。外面に煤，内面に炭化物付着。	513	10
〃	2	図版65	3	SC	44	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ仕上げ。	橙色。	5093	〃
〃	3	図版65	4	SC	44	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ仕上げ。とくに外面のナデ仕上げは丁寧。	橙色。外面に薄く赤彩が施されている可能性がある。	5092	〃
図61	1	図版65	5	SC	47	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は縦方向のナデ調整を施した後に横方向のミガキ調整を加え，波状文を施文。内面はナデ調整，指頭痕が顕著に残る。	外面はにぶい黄橙色。内面は褐灰色。	5396	40
〃	2	図版65	6	SC	47	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面は刷毛目調整の後にナデ調整。	にぶい黄橙色。外面の口縁部に黒斑が生じる。	5708	〃
〃	3			SK	75	SC-47炉跡SK-75の底面に張りついた状態で出土。	弥生土器	鉢	外面は横方向のミガキ調整，内面は縦方向のナデ調整。	明褐色。	5400	〃
〃	4			SC	47	貼り床部分から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	明褐色。	5398	〃
〃	5			SC	47	貼り床部分から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は黒褐色。内面はにぶい黄橙色。外面には煤が付着。	5399	〃
〃	6	図版65	7	SP	290	SC-47内SP-290埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。金雲母を含む。	外面は灰黄褐色。内面は褐灰色。	5393	〃
図62	1	図版65	8	SC	47	掘り形上部のⅢ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明瞭。外面には刷毛目調整もしくは板ナデ調整の痕跡がわずかに残る。	浅黄橙色。外面には薄く赤色塗彩の痕跡を観察できる。	5390	40
〃	2	図版66	3	SC	47	掘り形上部のⅢ層から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整，内面は横方向のミガキ調整。	橙色。	5392	〃
〃	3	図版66	1	SC	47	掘り形上部のDX-23-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。	外面は浅黄色。内面はにぶい黄橙色。	5402	41

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図62	4			SC	47	掘り形上部のⅢ層から出土。	弥生土器	壺	外面は縦方向の刷毛目調整およびナデ調整。内面はナデ調整。屈曲部以下の内面は調整が乱雑で，粘土の撚れが生じている。	灰黄褐色。器壁の芯部に黒化層が残る。	5397	40
〃	5	図版65	10	SC	47	掘り形上部のDX-23-12区Ⅲ層最下面から出土。	弥生土器	壺	外面は横ナデ調整。特に突帯の貼り付け部分は強くナデられる。内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は浅黄色。内面はにぶい黄橙色。	5401	41
〃	6	図版66	5	SC	47	掘り形上部のDX-23-18区Ⅲ層最下面から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にナデ調整。内面は横方向の刷毛目調整の後にナデ調整を加える。	にぶい黄橙色。	5406	〃
〃	7			SC	47	掘り形上部のDW-23-6区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	外面はにぶい褐色。内面はにぶい黄橙色。	5415	〃
〃	8			SC	47	掘り形上部のDW-24-2区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	にぶい黄橙色。外面には煤が付着。	5416	〃
〃	9			SC	47	掘り形上部のDX-23-11区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	鉢	外面は器表面が荒れ調整不明。内面は口縁部は板ナデ，胴部はナデ調整。粘土の接合痕が残る。	外面はにぶい黄橙色。内面は橙色。	5408	〃
〃	10	図版65	9	SC	47	掘り形上部のⅢ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	にぶい黄褐色。	5391	40
〃	11	図版66	2	SC	47	掘り形上部のⅢ層部分から出土。	弥生土器	甕	外面は丁寧なナデ調整。突帯直下には板ナデ調整が施される。	褐色。内面は若干明るい。	5395	〃
図63	1	図版66	6	SC	47	掘り形上部のDX-23-7区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	高坏	器表面は荒れ調整不明。	明赤褐色。	5403	41
〃	2			SC	47	掘り形上部のDX-23-8区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	高坏	内面はナデ調整。	橙色。	5407	〃
〃	3	図版66	7・8	SC	47	掘り形埋土出土の破片と上部Ⅲ層出土の破片が接合。	弥生土器	高坏	坏部外面は刷毛目調整の後に縦方向のミガキ調整。脚部外面はミガキ調整。脚柱部の上部には部分的にナデ調整の痕跡がみられる。坏部内面は縦方向の刷毛目調整とナデ調整。脚部はナデ調整，上部には絞り痕が残る。	橙色。器壁の芯部には淡い黒灰色の黒化層が残る。	5394	40
〃	4	図版66	4	SC	47	掘り形上部のDW-23-11区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	器表面が荒れ調整不明。透かし孔の直下に横方向のミガキの痕跡がわずかに残る。	明赤褐色。外面には化粧掛け。器壁の芯部に黒化層が残る。	5413	41
〃	5			SC	47	掘り形上部のDX-23-18区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	橙色。	5405	〃
〃	6			SC	47	掘り形上部のDW-23-10区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面はナデ調整及び擦過調整。	外面は褐色。内面はにぶい黄橙色。	5414	〃
〃	7			SC	47	掘り形上部のDX-23-12区Ⅲ層から出土。	弥生土器	鉢	底面および内面はナデ調整，外面は縦方向のミガキ調整。	灰黄褐色。	5410	〃
〃	8			SC	47	掘り形上部のDW-23-8区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	外面はにぶい黄橙色。外面は褐灰色。	5412	〃
〃	9			SC	47	SC-47とSD-72が重複するDX-23-14区Ⅲ下部から出土。	須恵器	蓋	内外面ともに回転ナデ調整。	灰白色。	5404	〃
図65	1	図版66	9	SC	69	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	外面は褐色。内面はにぶい橙色。	5417	42
〃	2			SP	279	SC-69の柱穴SP-279の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は器表面が荒れ調整不明。内面はナデ調整，指頭痕が残る。	橙色。	5418	〃
〃	3	図版66	10	SC	69	掘り形上部のDY-26-14区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	壺	外面は縦方向の刷毛目調整の後にナデ調整。部分的に刷毛目調整の痕跡が残る。内面はナデ調整。	にぶい黄橙色。	5425	〃
〃	4	図版67	1	SC	69	掘り形上部のDY-26-12区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	明褐色。器壁の芯部に黒化層が残る。	5427	〃
〃	5			SC	69	掘り形上部のDY-26-18区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	外面は横方向のミガキ調整，内面はナデ調整。	明褐色。	5431	〃
〃	6	図版66	11	SC	69	掘り形上部のDY-26-9区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	高坏	充填円盤の破片で，指頭痕が全面に残る。	明黄褐色。	5424	〃
〃	7			SC	69	掘り形上部のDY-26-9区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。底部はナデ調整。	にぶい黄橙色。外面には黒斑が生じている。	5419	〃
〃	8			SC	69	掘り形上部のDY-26-14区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	内面はナデ調整，他は器表面が荒れ調整不明。	外面は橙色。底部から1cmほどが明赤褐色に変色。内面はにぶい橙色。	5426	〃
〃	9			SC	69	掘り形上部のDY-26-9区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	外面は器表面が荒れ調整不明。底部付近は指頭痕，胴部にかけては縦方向の篦状工具による調整痕跡が残る。他はナデ調整。	明褐色。	5423	〃
〃	10			SC	69	掘り形上部のDY-26-9区Ⅲ層部から出土。	弥生土器	甕	内面及び底部外面はナデ調整。胴部外面は器表面が荒れ調整不明。部分的に強いナデ調整で生じた小さな面が生じている。	外面は橙色。内面はにぶい黄橙色。	5420	〃
〃	11			SC	69	掘り形上部のDY-26-17区Ⅲ層最下部から出土。	土師器	甕	内外面ともにナデ調整。	にぶい黄橙色。	5429	〃
〃	12			SC	69	掘り形上部のDY-26-9区Ⅲ層から出土。	須恵器	坏蓋	天井部外面は回転篦ケズリ，天井部と口縁部の境界部は回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整。	灰白色。	5421	〃
〃	13			SC	69	掘り形上部のDY-26-18区Ⅲ層から出土。	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転ナデ調整。	灰色。	5428	〃
〃	14			SC	69	掘り形上部のDY-26-9区Ⅲ層から出土。	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転ナデ調整。	灰色。	5422	〃
〃	15			SC	69	掘り形上部のDY-26-17区Ⅲ層最下部から出土。	須恵器	壺か甕	外面には平行条線のタタキ目の上にカキメ調整。内面には同心円文の当て具痕が残る。	灰色。	5430	〃
図67	1	図版67	2	SC	71	掘り形北東部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5433	43
〃	2	図版67	3	SC	71	掘り形南西部の埋土中から出土。	弥生土器	鉢？	外面は刷毛目調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	明褐色。	5432	〃
〃	3			SC	71	掘り形北西部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	胴部外面は刷毛目調整，底部周辺はナデ調整。内面は刷毛目調整。	外面は灰黄褐色。内面は明褐色。外面には黒変部が残る。	5434	〃
〃	4			SP	415	SC-71柱穴のSP-415埋土から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺はナデ調整。胴部外面は器表面が荒れ調整不明，内面は肩部より以下を刷毛目調整。	外面は橙色。内面は明褐色。	5437	〃
図69	1			SC	71	掘り形上部のDZ-27-9区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は横ナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄橙色。	5438	43
〃	2	図版67	6	SC	71	掘り形上部のDZ-27-6区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	鉢	外面は刷毛目調整の後に，肩部以下に粗いミガキ，頸部の屈曲から端部にかけては横ナデ調整を施す。内面は刷毛目調整の後に，肩部以下にミガキ調整，屈曲部以上に横ナデを施す。	外面はにぶい黄褐色。内面は明褐色。	5441	〃
〃	3			SC	71	掘り形上部のDZ-27-8区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	にぶい黄褐色。	5444	〃
〃	4			SC	71	掘り形上部のDZ-27-6区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	外面は褐色。内面は黒色。黒斑か。	5440	〃

挿図	写真図版	出土遺構	出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
No.	No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図69	5		SC	71	掘り形上部のDZ-27-8区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	外面は明褐色。内面は灰黄褐色。	5443	43
〃	6	図版67	8	SC	71	掘り形上部のDY-27-20区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏？	外面はミガキ調整。部分的に器表面が薄く剥離。内面はナデ調整。	にぶい黄褐色。器壁の芯部に黒化層が残る。	5445	〃
〃	7		SC	71	掘り形上部のDZ-27-16区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。絞り痕が残る。	外面は橙色。内面はオリーブ黒色。	5442	〃
〃	8	図版67	7	SC	71	掘り形上部のDZ-27-6区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	脚部外面は刷毛目調整，裾部への屈曲部周辺は横ナデ調整。脚部内面は刷毛目調整の後に，裾部周辺だけに刷毛目調整。内面の調整は乱雑。	外面は橙色。内面は明褐色。	5439	〃
〃	9		SC	71	掘り形上部のDZ-27-19区Ⅲ層から出土。	須恵器	壺か甕	外面には平行条線のタタキ目，内面には同心円文の当て具痕が残る。	外面は浅黄色。内面は橙色。	5446	〃
〃	10	図版67	4	SC	519	掘り形上部のDZ-27-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	橙色。	5435	〃
〃	11	図版67	5	SC	519	掘り形上部のDZ-27-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	褐灰色。	5436	〃
図71	1		SC	78	掘り形東半部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。特に端部付近は横ナデ調整。	外面は灰黄褐色。内面は褐灰色。	5458	44
〃	2	図版68	1	SC	78	掘り形西半部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	胴部外面には部分的に刷毛目調整の痕跡を確認できる。他はナデ調整。内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄橙色。	5450	〃
〃	3		SC	78	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面の屈曲部と端部，及び内面は横ナデ調整。口縁部外面は器表面が荒れ調整不明。	橙色。	5453	〃
〃	4	図版68	3	SC	78	掘り形西半部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	外面はにぶい黄橙色。内面は黒褐色。	5448	〃
〃	5	図版67	9	SC	78	掘り形北西部の埋土下部で破片が折り重なって出土。	弥生土器	高坏	口縁部外面は4～5条1単位の目の粗い刷毛目調整。坏部との境の屈曲部付近はやや強めの横ナデ調整。坏部内面は刷毛目調整の後に，粗いミガキ調整。	橙色。内面に黒斑が生じている。	5460	〃
〃	6		SC	78	掘り形北西部の埋土下部から出土。	弥生土器	高坏	外面は刷毛目調整の後にナデ調整。ミガキ調整が行われた可能性も高いが，残存部では不明瞭。内面はミガキ調整。	外面は橙色。内面全面に黒斑が生じている。	5461	〃
〃	7		SC	78	掘り形西半部の埋土中から出土。	弥生土器	鉢	裾部には成形時の指頭痕，胴部には掻き上げたような調整痕跡が残る。内面には1.2cm幅で細密条線が集まる擦過痕が残る。	外面はにぶい橙色。内面はにぶい黄橙色。	5449	〃
〃	8		SC	78	掘り形東半部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	胴部外面はミガキ調整，内面及び底面はナデ調整。	黄灰色。	5459	〃
〃	9	図版68	2	SC	78	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ調整。口縁部下には横方向，胴部に縦方向のタタキ目が残る。内面はナデ調整。	にぶい黄橙色。外面には煤が付着。	5454	〃
〃	10		SP	270	SC-78を切るSP-270の柱痕内から出土。	弥生土器	壺	内面はナデ調整，外面は器表面が荒れ調整不明。	橙色。	5451	〃
〃	11	図版68	4	SP	270	SC-78を切るSP-270掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。突帯の上下にはやや強い横ナデ調整が追加される。	褐色。他の土器と比べて黒みをおびた色調で，胎土には金雲母やクサリ礫が含まれる。	5452	〃
〃	12		SC	78	掘り形上部のDX-27-3区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は口縁部周辺をナデ調整，胴部を刷毛目調整の後にナデ調整する。	外面はにぶい黄褐色。内面はにぶい黄橙色。	5455	〃
〃	13		SC	78	掘り形上部のDX-27-3区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整。外面は二次的火熱を受けて赤変し，器表面が薄く剥離。	外面はにぶい褐色。内面はにぶい黄橙色。外面には煤が付着。	5456	〃
図73	1	図版69	5	SC	84	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	頸部付け根の突帯周辺は横ナデ。胴部外面はミガキ調整，内面には擦過痕が残る。	内外面ともににぶい褐色。	5242	45
〃	2		SC	84	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5238	〃
〃	3	図版68	8	SC	84	掘り形北側角の床面から5cmほど浮いた状態で図73-3・4が折り重なって出土。	弥生土器	甕	口縁部外面及び内面は横ナデ調整，胴部には刷毛目調整を施す。口縁部外面には篦状工具痕が残る。	外面は明赤褐色。内面はにぶい橙色。外面には煤が付着。	5239	〃
〃	4	図版68	6	SC	84	掘り形北側角の床面から5cmほど浮いた状態で図73-3・4が折り重なって出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5240	〃
〃	5	図版69	7	SC	84	掘り形埋土中から出土。	刻目凸帯文土器	深鉢	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5237	〃
〃	6	図版68	10	SC	84	SK-524上部の埋土中から出土。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は篦状工具によるナデ上げ，内面は指頭によるナデ調整。	外面は明褐色。内面はにぶい橙色。胴部内面は一部黒色を呈する。外面には煤が付着。	604	〃
〃	7	図版68	5	SC	84	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	器表面はにぶい黄橙色。器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。器表面には明赤褐色粘土で化粧掛けを施す。	5243	〃
〃	8		SC	84	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺または鉢	外面は横ナデ調整，内面はナデ仕上げ。内底面には成形時の指頭痕が残る。	明赤褐色。外面には部分的に黒変部が残る。	5244	〃
〃	9		SC	84	埋土中から出土。	弥生土器	甕	脚台状の底部の内外面は横ナデ調整，他はナデ調整。	赤褐色。	5241	〃
〃	10		SC	84	掘り形南東部の埋土上部から出土。	弥生土器	甕	外面は器表面が荒れ調整不明。内面はナデ調整で，篦状工具の押捺痕が残る。	二次的な火熱を受けたためか，内外面ともに赤褐色を呈する。	601	〃
〃	11		SC	84	掘り形上部のDY-24-10区Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。肩部内面に部分的に指頭によるナデ調整痕が残る。	橙色。	5268	46
〃	12	図版68	9	SC	84	SC-84とSK-83の重複部分に当たるDX-24-10区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	壺	外面は横ナデ仕上げ，内面には篦状工具による擦過痕が部分的に残る。	にぶい黄褐色。	5259	〃
〃	13		SC	84	掘り形南西部の上部DY-23-24区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕または鉢	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5265	〃
〃	14		SC	84	掘り形南西部の壁沿いに当たるDY-23-22区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	明褐色。	5269	〃
〃	15	図版68	7	SC	84	掘り形南西角に当たるDY-23-18区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	口縁部外面及び内面は横ナデ調整，胴部は刷毛目調整。口縁部外面には篦状工具痕が残る。	外面は明赤褐色。内面はにぶい橙色。外面には煤が付着。	5260	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図73	16	図版68	11	SC	84	掘り形北西角近くに当たるDY-24-10 区Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	橙色。	5270	46
〃	17	図版69	2	SC	84	掘り形北西角近くに当たるDY-24-9区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ。胴部外面は器表面が薄く剥がれているが，部分的に刷毛目様の条線を観察できる。胎土には金雲母が混じる。	外面は橙色。内面は褐色。	5267	〃
〃	18	図版69	1	SC	84	掘り形北東部に当たるDY-24-11区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。口縁部の付け根外面には篦状工具による時計回りの擦過痕が残る。胎土には金雲母が混じる。	口縁部～外面は褐色。内面は明褐色。	5266	〃
〃	19			SC	84	掘り形中央部に当たるDY-24-2区Ⅲ層から出土。	弥生土器	鉢	口縁部周辺～内面は横ナデ調整。外面には篦状工具を撫で付けたような小さな面ができている。	黄橙色。外面には部分的に明赤褐色の肌理の細かな粘土を化粧掛けした痕跡が残る。	5257	〃
〃	20			SC	84	掘り形南壁沿いに当たるDY-23-22区Ⅲ層から出土。	弥生土器	鉢	口縁部周辺～内面は横ナデ調整，外面は刷毛目調整の後にナデ仕上げ。	器壁の芯部には黒灰色の黒化層が残る。	5258	〃
〃	21			SC	84	掘り形北西角近くに当たるDY-24-15区Ⅲ層から出土。	弥生土器	鉢	外面には棒状工具を擦り付けたような調整痕跡が残る。内面はナデ調整。成形時の指頭痕が不明瞭ながら残る。	にぶい黄橙色。外面には黒斑が生じている。	5263	〃
〃	22	図版69	6	SC	84	掘り形南西角近くに当たるDY-24-17区Ⅲ層下部から出土。	?	?	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5271	〃
〃	23	図版69	4	SC	84	掘り形のほぼ中央部に当たるDY-24-8区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	5256	〃
〃	24			SC	84	掘り形東半部に当たるDY-24-17区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	外面は黄褐色。内面は黒色。	5261	〃
〃	25	図版69	3	SC	84	掘り形南西部に当たるDY-23-23区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	把手付片口鉢	器表面は荒れてはいるが，部分的に横ナデ調整痕が残る。	橙色。	5272	〃
〃	26			SC	84	掘り形東半部に当たるDY-24-17区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表が荒れ調整不明。ただし，内底面には成形時の指頭痕が部分的に残る。	にぶい黄褐色。外底面には黒斑が生じている。	5262	〃
〃	27			SC	84	掘り形南西部に当たるDY-23-23区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	鉢	外面は器表が荒れ調整不明。内底面には指頭を時計回りに撫で付けた痕跡が残る。	橙色。	5264	〃
〃	28			SC	84	掘り形のほぼ中央部に当たるDY-24-8区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外底面及び底部側面は横ナデ調整，他は器表面が荒れ調整不明。	二次的な火熱を受けて明赤褐色に変色。	5255	〃
図74	1			SK	524	SC-84の炉跡SK-524の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5245	45
〃	2	図版69	8	SK	524	SC-84の炉跡SK-524の埋土中から出土。	弥生土器	壺	手捏ねのミニチュア土器。頸部付け根は横ナデ調整。胴部外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	外面はにぶい赤褐色，内面は明赤褐色。	5246	〃
〃	3	図版69	9	SK	525	SK-525中央部～北半部の埋土中から出土。SC-84掘り形埋土から出土した破片と接合。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。口縁屈折部の外面には横ナデ調整で生じた粘土の撚れが残る。	二次的火熱を受けて，明赤褐色に赤変。	5247	〃
図78	1			SC	92	掘り形のほぼ中央部に当たるDZ-21-7区Ⅲ層最下面から出土。	弥生土器	壺	外面は，口縁部周辺に横ナデ調整，他は器表面が荒れ調整不明。内面は，口縁部～肩部に刷毛目調整，胴部にケズリ調整。	橙色。器壁の芯部には灰黒色の黒化層が残る。	5280	48
〃	2	図版70	2	SC	92	掘り形南半部に当たるDZ-21-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。他は器表面が荒れ調整不明。ただし，内面には成形時の指頭痕がわずかに残る。	明赤褐色。器壁の芯部には灰黒色の黒化層が残る。	5276	〃
〃	3			SC	92	掘り形南半部に当たるDZ-21-2区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	口縁先端付近は横ナデ調整。口縁屈曲部外面は刷毛目調整の後にナデ仕上げ。内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄橙色。外面には煤付着。	5275	〃
〃	4	図版70	1	SC	92	掘り形南半部に当たるDZ-21-2区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	明褐色。器壁の芯部には灰黒色の黒化層が残る。	5279	〃
〃	5			SC	92	掘り形南半部に当たるDZ-21-2区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	鉢	外面は横ナデ調整，内面は刷毛目調整。	橙色。	5278	〃
〃	6			SC	92	掘り形南半部に当たるDZ-21-2区Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	甕	外面は器表面が荒れ調整不明。内面は指頭によるナデ調整。	にぶい橙色。器壁の芯部には灰黒色の黒化層が残る。	5277	〃
〃	7	図版70	3	SC	92	掘り形北東部に当たるDZ-21-6区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	高坏	外面は器表面が荒れ調整不明。内面には横ナデ調整。	明褐色。器壁の芯部には黒灰色の黒化層が残る。内面には不整形の黒斑が生じている。	5273	〃
〃	8			SC	92	掘り形南半部に当たるDZ-21-2区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	5274	〃
		図版70	4	SC	92	掘り形の中央部北よりのⅢ層下部から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面はケズリ調整の後にミガキ調整。	外面はにぶい橙色。内面は橙色。	622	〃
		図版70	5	SC	92	掘り形南半部に当たるDZ-21-2区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	胴部外面はケズリ調整。内面はナデ調整。	外面は明赤褐色。内面は黒変したまま。	5281	〃
図80	1	図版70	6	SC	97	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい黄橙色。	5522	50
〃	2			SC	97	掘り形東半部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5520	〃
〃	3	図版70	8	SC	97	掘り形西隅付近でSC-97の床面と考えられる深さから出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺はナデ調整。胴部外面はナデ調整。部分的に細密条線の調整痕が残る。内面はナデ調整。	突帯以下には煤が付着する。	5521	〃
〃	4			SC	97	掘り形西半部の埋土中から出土。	弥生土器	鉢	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。部分的に刷毛目調整痕が残る。	褐色。	5519	〃
〃	5			SC	97	掘り形南西隅付近に当たるDZ-22-4区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ，器表面が剥落している。調整不明。	橙色。	5534	〃
〃	6			SC	97	掘り形北西隅に当たる22-5区Ⅲ層下部から出土。位置的にはSD-509に伴う可能性も残す。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ仕上げ。口縁部を成形時に折り曲げた際に付いた指頭痕が残る。	器表面は橙色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。	5531	〃
〃	7	図版70	7	SC	97	掘り形上部のDZ-22-14区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。口縁端面の一部に黒斑が生じている。	5529	〃
〃	8	図版71	1	SC	97	掘り形東北壁沿いに当たるDZ-22-6区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はミガキに近い擦過調整，内面はナデ調整。	にぶい黄橙色。	5526	〃
〃	9			SC	97	掘り形北西隅付近に当たるDZ-22-5区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ仕上げ。指頭痕や粘土の撚れを観察できる。胴部外面はナデ調整，内面はケズリ調整。	明黄褐色。	5532	〃

挿図	No.	写真図版	No.	出土遺構 種別	出土遺構 番号	出土状況	遺物の観察 種別	器種	器面調整等	色調・付着物等	遺物登録番号	収納コンテナ
図80	10	図版71	2	SC	97	掘り形北西隅付近に当たるDZ-22-5区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	口縁端面～内面は横ナデ調整。口頸部の外面には指頭によるナデ痕跡が残る。胴部外面はナデ調整，内面はケズリ調整。	にぶい黄橙色。	5528	50
〃	11			SC	97	掘り形北西部に当たるDZ-22-9区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺もしくは鉢	外面はナデ調整，内面はナデ調整。内底面には工具痕が多く残る。	外面は橙色。内面はにぶい橙色。	5530	〃
〃	12			SC	97	掘り形南西隅付近に当たるDZ-22-4区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	鉢もしくは壺	内外面ともに横ナデ調整。	器表面は淡い黒色。胎はにぶい黄橙色。	5533	〃
〃	13			SC	97	掘り形北西隅付近に当たるDZ-22-5区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	内外の器表面は荒れ調整不明。	二次的火熱を受けて，橙色～明赤褐色に変色。	5527	〃
〃	14			SC	97	掘り形北西隅付近に当たるDZ-22-5区Ⅲ層下部から出土。	土師器	高坏	外面は丁寧なナデ仕上げ，内面には絞り痕が残る。	明赤褐色。	5535	〃
		図版70	9	SC	97	掘り形東半部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	暗赤褐色。	5524	〃
		図版70	10	SC	97	掘り形北西隅付近でSC-97の床面と考えられる深さから出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，口縁屈曲部近くには横ナデ調整。内面は指頭によるナデ調整。	明赤褐色。	5523	〃
図82	1			SP	344	SC-98の柱穴SP-344埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は二次的な火熱を受けて器表面が剥がれ調整不明。内面はナデ調整。	外面は褐色。内面は黒色。	5287	49
〃	2	図版71	4	SC	98	掘り形北壁沿いに当たるⅢ層から出土。	弥生土器	壺	外面は篦状工具によるナデ調整，内面には成形時の指頭痕や粘土接合線が残る。	外面は橙色。内面はにぶい橙色。	5288	〃
〃	3	図版71	3	SC	99	掘り形埋土中から出土。	？	鉢？	内外面ともに荒れてはいるが，横ナデ調整か？	明黄褐色。	5290	〃
〃	4	図版71	5	SC	99	掘り形埋土中から出土。SC-99を切るSK-543の床面近くから同一個体と考えられる破片が出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面には横ナデで生じた細密条線が残る。胎土には金雲母が混じる。	内外面ともににぶい橙色。外面胴部には煤が付着。	5289	〃
		図版71	6	SC	99	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	外面は橙色。内面は黒褐色。	5291	〃
		図版71	7	SC	99	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	にぶい黄橙色。	5292	〃
図85	1	図版72	3	SC	100	掘り形埋土中から出土。	縄文土器	深鉢	刻目凸帯文土器。内外面ともに横ナデ調整。	器表面はにぶい黄橙色。器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。	5502	49
〃	2	図版71	8	SC	100	掘り形埋土と床面直上から出土した破片が接合。	縄文土器	深鉢	外面はケズリ調整，内面はナデ調整。	外面は褐色。内面はにぶい黄褐色。	5504	〃
〃	3			SC	100	掘り形の南隅に当たるDZ-23-7区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	内外面ともに褐色。	5294	〃
〃	4	図版72	1	SC	100	掘り形南角部に当たるDZ-23-11区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にミガキ調整，内面はナデ調整。	器壁の芯部には厚く黒褐色の黒化層が残る。	5297	〃
〃	5	図版72	2	SC	100	掘り形南角部に当たるDZ-23-6区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	突帯周辺は横ナデ。他は刷毛目調整の後に横ナデ調整。内面はナデ調整。	内外面ともににぶい橙色。	5296	〃
〃	6			SC	100	掘り形南角部に当たるDZ-23-2区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	鉢	外面は篦状工具によるミガキに近いナデ調整。口縁部周辺と内面は横ナデ調整。	内外面ともに赤褐色。	5501	〃
〃	7			SC	100	掘り形南角部に当たるDZ-23-6区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	外面は器表面が荒れ，部分的にしか刷毛目調整の痕跡が残るのみ。口縁部周辺は横ナデ調整。内面は指頭によるナデ調整。	内外面ともににぶい橙色。	5295	〃
〃	8			SC	100	掘り形南角部に当たるDZ-23-6区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	高坏	外面は丁寧なミガキ状のナデ調整，内面は横ナデ調整。	内外面ともににぶい橙色。器壁の芯部には黒褐色の黒化層が残る。	5293	〃
〃	9			SC	100	掘り形南角部に当たるDZ-23-11区Ⅲ層下部から出土。	須恵器	坏蓋	口縁部周辺及び内面は回転横ナデ調整。天井部外面は回転篦ケズリ。	明褐灰色。	5300	〃
〃	10			SC	100	掘り形南角部に当たるDZ-23-11区Ⅲ層下部から出土。	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転横ナデ調整。	内外面ともに褐灰色。	5298	〃
〃	11			SC	100	掘り形北壁沿いに当たるDZ-23-16区Ⅲ層下部から出土。	須恵器	蓋	内外面ともに回転横ナデ調整。	内外面ともに褐灰色。	5299	〃
		図版72	5	SC	100	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	内外面ともに暗褐色。	5503	〃
図86	1	図版73	1	SC	506	掘り形南東部近くの埋土中で押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。成形時に生じた粘土の撚れが残る。胴部外面は擦過調整，内面は擦過に近いケズリ調整。肩部内面には工具の小口部痕跡が残る。	赤褐色。胴部上半～口縁部には煤が付着。	5513	51
〃	2	図版74	1	SC	506	掘り形北西部の埋土中で押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はミガキ調整，内面は下半部をケズリ調整し，上半部にはナデ調整を施した後に部分的にミガキ調整を施す。	橙色。胴部中位，口縁端部に黒斑が生じている。胴部内面の大部分に黒斑が生じている。	5536	50
〃	3	図版75	1	SC	506	掘り形南壁沿い，北西隅近くの埋土中，及びⅢ層から出土した破片が接合。4と同一個体。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面は篦状工具によるケズリに近い強いナデ調整。	器表面は明褐色～灰褐色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。胴部中位～肩部近くまで煤が付着。	5511	51
〃	4	図版75	1	SC	506	掘り形北西隅周辺，南東部の埋土中，SP-455，上層の遺構であるSC-97の埋土中から出土した破片が接合。3と同一個体。	弥生土器	甕	胴部外面は擦過状のナデ調整。底部近くにはケズリ調整痕が残る。内面は条痕の調整痕が残る。外底面の周縁は手持ちケズリ調整を施す。	器表面は明褐色～灰褐色で，器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。胴部中位には煤が付着。	5512	〃
〃	5			SC	506	掘り形南東部の攪乱溝壁面の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい黄橙色。	5515	52
〃	6	図版72	4	SC	506	掘り形北西隅付近の埋土中から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整を施すが，坏部下半の外面には縦方向のミガキ調整を加える。	赤褐色。	5514	〃
〃	7	図版72	8	SC	506	SP-454上面に当たる位置から出土。	弥生土器	壺？	外面は刷毛目調整，内面には一部ナデ調整痕が残るが，ほとんどは器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。	5516	〃
〃	8	図版76	1	SC	506	掘り形北西隅付近から出土。	弥生土器	鉢	外面は指頭で成形し，脚台部の先端は指で摘むように成形。内面は指頭を回転させて横ナデ調整する。	赤褐色。	5525	〃
		図版72	6	SC	506	SP-355周辺に当たる位置から出土。	弥生土器	壺あるいは鉢	外面は斜め方向のナデ調整，内面上半はナデ調整，下半はケズリ調整。	外面は橙色。内面は黒変したままで，淡い黒褐色を呈する。	5517	〃
		図版72	7	SC	506	掘り形北西部の攪乱溝壁面の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	明褐色。外面には黒斑が生じている。	5518	〃
図89	1	図版76	5	SC	516	掘り形北半部の床面直上から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	明褐色。	5464	53
〃	2			SC	516	掘り形埋土中部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	暗褐色。	5465	〃
〃	3			SC	516	掘り形南半部の壁際から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は屈曲部直上に刷毛目調整の痕跡が残るが，他はナデ調整。	明褐色。	5463	〃
〃	4			SC	516	掘り形埋土中部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい褐色。外面に煤が付着。	5466	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図89	5			SC	516	掘り形埋土中部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい褐色。	5467	53
〃	6	図版77	1	SC	516	貼り床部分から出土。	弥生土器	甕	外面は，口縁～肩部にかけて横ナデ調整，以下は箆工具による縦方向のミガキ調整。内面はケズリ調整の後に横方向のミガキ調整。一部，ケズリ痕が残存。	外面はにぶい黄褐色。内面は橙色。外面には煤が付着。	5471	〃
〃	7			SC	516	掘り形埋土中部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	外面は明褐色。内面はにぶい黄褐色。	5468	〃
〃	8			SC	516	掘り形埋土中部から出土。	弥生土器	高坏	外面は器表面が荒れ調整不明，内面には絞り痕が残る。	にぶい黄橙色。	5470	〃
〃	9	図版76	7	SC	516		弥生土器	高坏	外面は横方向のミガキ調整，内面は端部から坏部への湾曲部にかけて横ナデ調整，坏部は横方向のケズリ調整の後に横方向のミガキ調整。	外面はにぶい褐色。内面は明褐色～黒褐色。	5474	〃
〃	10	図版76	4	SC	516	掘り形埋土中部から出土。	弥生土器	鉢	外面は縦方向の刷毛目調整の後に粗いナデ調整。内面は指押さえの痕跡が残り，粘土の撚れも観察できる。	にぶい黄褐色。	5469	〃
〃	11	図版76	2	SC	516	掘り形上部のDZ-29-18区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	外面に一部ミガキ調整の痕跡が残るが，他は器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄橙色。	5479	〃
〃	12			SC	516	埋土最上部	弥生土器	甕	外面は縦方向の刷毛目調整後，屈曲部の直下のみ横方向のナデ調整が施される。	外面は明褐色。内面は褐色。外面には煤が付着。	5476	〃
〃	13	図版76	3	SC	516	掘り形上部のDZ-29-13区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	外面及び口縁内面は横ナデ調整，他はナデ調整。	橙色。	5477	〃
〃	14			SC	516	掘り形上部のDZ-29-13区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	外面は褐色。内面は明褐色。	5478	〃
〃	15	図版76	6	SC	516	掘り形上部のDZ-29-13区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄橙色。	5481	〃
〃	16			SC	516	掘り形上部のDZ-29-18区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。内面には先行してケズリ調整が施される。	外面には黒斑が生じ，内面はにぶい黄橙色。	5480	〃
〃	17			SC	516	掘り形埋土の最上部から出土。	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転ナデ調整が施される。	灰色。	5475	〃
図91	1	図版77	2	SC	517	掘り形西半部の埋土最下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	灰褐色。	5559	54
〃	2	図版77	4	SC	517	掘り形東半部の埋土中位から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい赤褐色。外面には赤色顔料を塗布。	5557	〃
〃	3	図版77	8	SC	517	掘り形西半部の埋土最下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにミガキ調整。	橙色。	5556	〃
〃	4	図版77	5	SC	517	掘り形東半部の埋土中位から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	外面は橙色。内面は黒斑で淡い黒色を呈する。	5558	〃
〃	5	図版77	3	SC	517	掘り形東半部の埋土中位から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。口縁部下面には黒斑が生じている。	5564	〃
〃	6	図版77	7	SC	517	掘り形西半部の埋土最下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5565	〃
〃	7			SC	517	掘り形西半部の埋土最下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。外面には煤付着。	5560	〃
〃	8	図版77	9	SC	517	掘り形東半部の埋土最下部から出土。	弥生土器	甕	指頭で口縁部を屈折させた後に，横ナデ調整。胴部外面は箆状工具によるナデ調整，内面は指頭によるナデ調整。	明赤褐色。	5563	〃
〃	9			SC	517	掘り形西半部の埋土最下部から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面には指頭によるナデ調整。	橙色。外底面に黒斑が生じている。	5554	〃
〃	10			SC	517	掘り形西半部の埋土最下部から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面には箆状工具で時計回りにナデ調整した痕跡が残る。	橙色。外面には黒斑が生じている。	5553	〃
〃	11			SC	517	掘り形西半部の埋土最下部から出土。	弥生土器	壺	外面は丁寧なナデ調整，内面は指頭による横ナデ調整。	器表面は黒褐色で，芯部は明赤褐色。	5555	〃
〃	12			SC	517	掘り形西半部の埋土中位から出土。	弥生土器	壺	外面は箆状工具によるナデ調整，内面は指頭による縦方向のナデ調整。	褐灰色。	5562	〃
〃	13			SC	517	掘り形西半部の埋土中から出土。	須恵器	坏身	内外面ともに回転横ナデ調整。	明褐灰色。	5566	〃
〃	14	図版77	6	SC	517	掘り形西半部に当たるDY-28-12区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5570	55
〃	15			SC	517	掘り形東半部に当たるDY-28-14区Ⅲ層下部から出土。	須恵器	坏身	内外面ともに回転横ナデ調整。	明褐灰色。	5571	〃
〃	16			SC	517	掘り形南壁沿いに当たるDY-28-3区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整と考えるが，器表面が荒れ判然としない。内面は指頭による縦方向のナデ調整。	明赤褐色。	5569	〃
〃	17			SC	517	掘り形東半部に当たるDY-28-14区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	橙色。外底面に黒斑が生じている。	5568	〃
〃	18	図版77	11	SC	517	掘り形のほぼ中央部に当たるDY-28-13区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	鉢	外面には指頭による成形痕跡が残される。内面はナデ調整。	橙色。	5567	〃
		図版77	10	SC	517	掘り形西半部の埋土最下部から出土。	弥生土器	甕	外面は擦過状の調整痕跡，内面には刷毛目様の調整痕跡が残る。	内外面ともに橙色。器壁の芯部に部分的に黒色の黒化層が残る。	5561	54
図93	1	図版80	7	SK	522	掘り形西半部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。頸部外面はミガキ調整，内面は刷毛目調整。	にぶい黄橙色。	5543	56
〃	2	図版78	1	SK	522	床面からやや浮いた状態で，図92-2・3・6・8・9，図版80-10が折り重なるようにして出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にナデ仕上げ。内面は指頭で成形した後に，中位に強くやや乱雑な刷毛目調整を施す。	赤褐色。胴部中の外面に帯状に煤が付着する。下半は二次的な火熱を受けて器表面が荒れる。器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。	5538	〃
〃	3	図版78	2	SK	522	床面からやや浮いた状態で，図92-2・3・6・8・9，図版80-10が折り重なるようにして出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整，下半は擦過状の調整痕となる。内面は刷毛目調整の後にナデ調整。	明赤褐色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。	5552	54
〃	4	図版80	1	SK	522	掘り形東半部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は横ナデ調整，内面は上半をミガキ調整，下半を横ナデ調整。	にぶい黄橙色。	5541	56
〃	5	図版80	2	SK	522	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	横ナデ調整。	にぶい黄褐色。器壁の芯部には灰褐色の黒化層が残る。	5545	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図93	6	図版80	5	SK	522	床面からやや浮いた状態で，図92-2・3・6・8・9，図版80-10が折り重なるようにして出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。	橙色。口縁端部に薄く煤が付着。	5539	56
〃	7			SK	522	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。外面は器表面が荒れ調整不明。内面にはミガキ調整様の横方向の幅狭の調整痕跡が残る。	にぶい黄橙色。器壁の芯部には灰褐色の黒化層が残る。	5544	〃
〃	8	図版79	2	SK	522	床面からやや浮いた状態で，図92-2・3・6・8・9，図版80-10が折り重なるようにして出土。	弥生土器	甕	口縁部～胴部上半の外面は器表面が荒れ調整不明。胴部中位には刷毛目調整。口縁部内面は刷毛目調整の後に横ナデ調整。胴部内面には成形時の指頭痕が残され，器表面にはかなり凹凸がある。	明黄褐色～橙色。胴部中位の外面に煤が付着。内面には黒斑が生じている。	5546	〃
〃	9	図版79	1	SK	522	床面からやや浮いた状態で，図92-2・3・6・8・9，図版80-10が折り重なるようにして出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面はケズリ調整。底部側面には指頭痕が残る。	橙色。胴部外面の下半は二次的な火熱を受けて，部分的に器表面が荒れる。薄く煤が付着。内面には黒斑が生じている。	5537	〃
〃	10	図版80	6	SK	522	掘り形西半部の埋土中位から出土。	弥生土器	甕	底部側面は指頭による成形痕跡が残り，胴部下半にはケズリ調整。内面は乱雑なナデ調整。	外面は明赤褐色，内面は橙色。	5542	〃
〃	11	図版80	3	SK	522	掘り形東半部の埋土中から出土。	弥生土器	高坏	口縁部周辺は横ナデ調整。	褐灰色。外面には薄く煤が付着。	5540	〃
〃	12	図版80	4	SK	522	SC-517床面で出土したSK-522東半部の埋土中から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5547	〃
〃	13	図版79	3	SP	422	SC-517床面で確認できたSP-422の埋土中から出土。	弥生土器	甕	口縁屈折部は横ナデ調整。胴部外面はミガキ調整，内面は刷毛目調整の後に横ナデ仕上げ。	橙色。	5551	〃
		図版80	8	SK	522	掘り形東半部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面はナデ調整か？	橙色。外面に煤付着。	5548	〃
		図版80	9	SK	522	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整。内面はナデ調整。	外面には黒斑が生じている。内面は明赤褐色。	5550	〃
		図版80	10	SK	522	床面からやや浮いた状態で，図92-2・3・6・8・9，図版80-10が折り重なるようにして出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面はナデ調整。	明赤褐色。器壁の芯部には黒褐色の黒化層が残る。	5549	〃
図94	1	図版80	11	SC	536	掘り形北東部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後に横ナデ仕上げ，内面は指頭によるナデ調整。頸部の付け根は篦状工具による横方向のナデ調整。口縁内面には整形時の粘土の撚れが部分的に残る。	器表面は橙色。器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。	5098	12
〃	2	図版80	12	SC	536	掘り形北西部の床面直上から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ仕上げ。	器表面は橙色。器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。	5097	〃
〃	3			SC	536	掘り形北西部の埋土中から出土。	弥生土器	鉢	内外面ともに横ナデ仕上げ。口縁部周辺には成形時の指頭圧痕がわずかに残る。	橙色。	5099	〃
〃	4	図版81	1	SC	536	掘り形北壁沿いの周溝内から出土。	弥生土器	鉢	鉢型のミニチュア土器。外面は篦状工具で削ぎ取るように調整。内面はナデ調整。外底面はナデ調整。	外面は褐色。内面は淡い黒色。	5100	〃
〃	5			SC	536	掘り形北西部の床面直上から出土。	弥生土器	甕	外底側面はナデ調整。	器表面は明赤褐色。	5101	〃
〃	6	図版47	7	SP	307	掘り形埋土下部で破片が折り重なるように出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。口縁部外面には横ナデ調整で生じた粘土の撚れが残る。胴部外面は刷毛目調整の後に肩部と胴部下半をナデ調整，内面はやや乱雑なケズリ調整。肩部内面には成形時の指頭圧痕が残る。	外面は橙色。内面は明赤褐色。	2757	6
〃	7	図版81	2	SP	449	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ仕上げ。	橙色。	5102	12
〃	8			SP	468	掘り形埋土中から出土。	縄文土器	浅鉢	内外面ともにミガキ仕上げ。	淡い黒色。	5103	〃
〃	9			SC	536	掘り形南西角に当たるⅢ層から出土。	弥生土器	鉢もしくは壺	内外面ともにナデ調整。底部側面には成形時の指頭圧痕が残る。	明赤褐色。	529	〃
図95	1			SK	537	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ仕上げ。	明赤褐色。	5110	11
〃	2	図版125	6	SK	537	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は横ナデ調整，内面は指頭によるナデ調整。	橙色。	5109	〃
〃	3	図版125	5	SK	537	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	鉢	内外面ともに横ナデ仕上げ。内面には成形時の指頭圧痕が残る。	外面は明赤褐色。内面は黒変したまま。	5108	〃
〃	4			SK	537	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ仕上げ，内面はケズリ調整。	にぶい黄褐色。底部近くは二次的火熱を受けて赤変する。	5111	〃
図97	1	図版81	3	SC	544	掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整，内面は刷毛目調整の後にナデ調整。	にぶい黄橙色。器壁の芯部に黒化層が残る。	5493	68
〃	2			SC	544	DZ-20-25区掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい褐色。	5485	〃
〃	3			SC	544	掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。端部付近は粘土帯貼り付けのため，外面には板状工具痕，内面には指押さえの痕跡が残る。	外面はにぶい橙色。内面は橙色。	5490	〃
〃	4	図版81	7	SC	544	掘り形最上部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。	橙色。	5704	69
〃	5			SC	544	掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整，施文部上方にはナデ調整を追加。内面は刷毛目調整。	明褐色。	5489	68
〃	6	図版81	9	SC	544	DZ-20-25区掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は口縁部から屈曲部直下にかけてナデ調整，胴部は刷毛調整の後にナデ調整。内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄橙色。	5486	〃
〃	7	図版81	8	SC	544	掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。	明褐色。	5488	〃
〃	8	図版81	6	SC	544	掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整の後にナデ調整。部分的に工具痕が残る。内面は上半をナデ調整，下半を刷毛目調整する。	外面は明褐色。内面はにぶい黄橙色。内面下部に黒斑が生じる。	5500	〃
〃	9	図版81	4	SC	544	掘り形最上部の埋土中から出土。	弥生土器	高坏	外面はナデ調整，内面はケズリ調整の後にナデ仕上げ。	橙色。	5701	69
〃	10	図版81	5	SC	544	掘り形最上部の埋土中から出土。	？	鉢？	内外面ともにナデ調整。	にぶい黄褐色。	5705	〃
〃	11			SC	544	掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。粘土の撚れが残り，調整は粗い。	外面は明褐色。内面は褐灰色。	5494	68
〃	12			SC	544	掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	外面はにぶい橙色。内面は黒色。	5498	〃
〃	13			SC	544	掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は縦方向の刷毛目調整の後にナデ調整。内面はナデ調整。	褐色。	5495	〃
図98	1			SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5709	69

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図98	2			SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5703	69
〃	3	図版82	1	SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は口縁部～肩部は器表面が荒れ調整不明。以下は縦方向のミガキ調整。内面は口縁部をナデ調整，肩部周辺を刷毛目調整。胴部は幅広のミガキに近いナデ調整が施されるが，肩部に近いところでは縦方向のケズリ調整の痕跡が残る。	内外面とも上部は赤みが強くなる。外面は明赤褐色～にぶい黄橙色。内面は明赤褐色。外面に黒斑が生じる。	5712	67
〃	4	図版83	4	SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄橙色。	5713	〃
〃	5	図版84	1	SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。調整は粗く指頭による凹凸が目立つ。内面には粘土紐の接合痕が残る。	にぶい黄橙色。外面には黒斑が生じる。	5710	69
図99	1	図版83	1	SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は灰黄褐色。内面はにぶい黄橙色。外面には煤が付着。	5491	68
〃	2	図版83	3	SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面には粗い刷毛目調整。突帯周辺から口縁端部までは横ナデ調整。内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄褐色。外面には煤が付着。	5706	69
〃	3	図版83	2	SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整。突帯周辺から口縁端部までは横ナデ調整。内面は刷毛目調整の後にナデ調整仕上げ。	褐色。外面には煤が付着。	5707	〃
〃	4	図版84	3	SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は突帯周辺を横ナデ調整，以下は刷毛目調整。内面は上半をナデ調整，下半を刷毛目調整の後にナデ仕上げ。外面に煤が付着する。	にぶい黄橙色。内面は外面より淡い色調。外面には黒斑が生じる。外面に煤が付着。	5497	68
〃	5			SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面はケズリ調整の後にミガキ調整。	外面はにぶい黄橙色。内面は橙色。外面底部付近に黒斑が生じる。	5499	〃
〃	6	図版84	2	SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面はナデ調整。	外面は明褐色。内面はにぶい黄褐色。	5711	69
〃	7			SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	外面は褐色。内面は全面が黒斑により黒色を呈す。	5496	68
〃	8			SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	鉢	内外面ともにナデ調整。内面には絞り痕が残る。	褐灰色。	5702	69
		図版84	4	SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面はナデ調整。	外面は明褐色。内面は灰褐色。内面には炭化物が付着。	5714	67
図102	1			SC	546	DZ-31-18区掘り形上部のⅢ層最下面から出土。	土師器	甕	外面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄橙色。	5482	53
		図版84	5	SC	546	DZ-31-8区掘り形上部のⅢ層最下面から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は明褐色。内面は橙色。外面には煤が付着。	5483	〃
図106	1			SB	548	柱穴SP-267柱痕跡部分から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。	6355	117
〃	2			SB	548	柱穴SP-364埋土中から出土。	弥生土器	高坏	外面はミガキ調整，内面はかなり強いナデ調整。	明赤褐色	6353	〃
〃	3			SB	548	柱穴SP-364の掘り形埋土中から出土。	須恵器	甕	外面には平行条線のタタキ目，内面には同心円文の当て具痕が残る。	灰色。外面には厚く自然釉がかかる。	6354	〃
〃	4			SB	548	柱穴B区SP-439埋土中から出土。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ調整。外面は擦過調整の後に刷毛目調整。内面はケズリ調整。	外面は明赤褐色，内面は橙色。	6352	〃
〃	5	図版84	6	SB	549	柱穴B区SP-443から出土。	弥生土器	高坏	外面は器表面が荒れ調整不明。内面はケズリ調整。	暗オリーブ褐色。	6349	115
〃	7			SB	549	柱穴SP-269の流入土①層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	橙色。	6351	〃
〃	8			SB	549	柱穴SP-323の掘り形埋土中から出土。	弥生土器	高坏	脚端部周辺は横ナデ調整。外面には擦過状の調整痕跡が残り，内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。	6350	〃
〃	9			SA	552	柱穴SP-399の掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	6358	118
〃	10			SA	552	柱穴SP-497の掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	6357	〃
〃	11			SA	552	柱穴SP-497の掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，底裾を摘み出した指頭痕が残る。内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。	6356	〃
図113	1	図版85	1	SD	10	東端近くのDS・DT-23区の埋土中から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は篦状工具によるナデ調整，内面は指頭によるナデ調整。	にぶい黄褐色。口縁部下面には煤が付着。	6010	153
〃	2			SD	10	埋土中から出土。	弥生土器	鉢	口縁部外面はナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面はケズリ調整。	外面はオリーブ黒色，内面はにぶい橙色。	6017	〃
〃	3			SD	10	西端近くのDY-25-24区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	横ナデ調整。	外面は浅黄色。内面は暗灰黄色。	6015	〃
〃	4	図版85	3	SD	10	東端近くのDY-25-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。胎土には金雲母が混じる。	褐灰色～にぶい黄橙色。	6089	〃
〃	5			SD	10	東端近くのDS-23-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	口縁屈折部周辺は横ナデ調整。胴部外面は篦状工具による擦過調整，内面はナデ調整。	外面は橙色，内面はにぶい橙色～黄灰色。	6016	〃
〃	6			SD	10	東端付近のDY-25-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	外面はにぶい黄褐色～浅黄色。内面はにぶい黄橙色。	6011	〃
〃	7	図版85	2	SD	10	東端のDS-23区の埋土中から出土。	弥生土器	支脚	全面に指頭痕が残り，タタキ調整痕も見られる。	橙色。	6019	〃
〃	8			SD	10	中央部のDV・DW-24区の埋土中から出土。	土師器	高坏	外面は器表面が荒れ調整不明，内面には絞り痕と粘土接合線が残る。	橙色。	6018	〃
〃	9			SD	10	中央部のDW-24-25区Ⅲ層から出土。	須恵器	坏蓋	天井部は回転篦ケズリ調整。他は回転横ナデ調整。篦記号を施す。	灰色。	6014	〃
〃	10			SD	10	中央部のDX-25-3区Ⅲ層から出土。	須恵器	坏身	内外面ともに回転横ナデ調整。	灰白色。	6012	〃
図114	1	図版85	4	SD	14	ほぼ中央部で西側から投棄されたような状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は篦状工具でナデ上げ，内面は先端が丸い工具による強いナデ調整。	橙色。胴部外面には煤が付着。	502	96
〃	2			SD	14	北半部の埋土中から出土。	弥生土器	甕または鉢	口縁屈曲部に成形時の指頭痕が残る。	にぶい橙色。器壁の芯部には灰褐色の黒化層が残る。	6259	〃
〃	3	図版86	1	SD	14	ほぼ中央部で西側から投棄されたような状態で出土。	弥生土器	高坏	口縁部周辺は横ナデ調整。坏部の内外面はミガキ調整。	明赤褐色。	6261	〃
〃	4			SD	14	北半部の埋土中から出土。	弥生土器	高坏	坏部の内外面はナデ調整。脚部外面はミガキ調整，内面には指頭によるナデ調整により粘土の撚れが生じている。	にぶい橙色。	6260	〃
〃	5			SD	14	北半部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は篦状工具によるナデ調整，内面は指頭によるナデ調整。	外面は浅黄色で，外底面を中心として黒斑が生じている。内面は明赤褐色。	225	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図114	6			SD	14	ほぼ中央部で西側から投棄されたような状態で出土。	弥生土器	甕	内面及び外底面は指頭によるナデ調整。底部側面は横ナデ調整。	にぶい黄橙色。外底面には黒斑が生じている。	6262	96
〃	7			SD	14	北半部に当たるDT-25-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	6268	〃
〃	8	図版86	2	SD	14	北端に当たるDS-25-10区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	突帯周辺は横ナデ調整。肩部外面は刷毛目調整の後に部分的に篦状工具で横ナデ調整を加える。内面は横ナデ調整。	橙色。	6267	〃
〃	9			SD	14	北半部に当たるDT-25-1区Ⅲ層最下面から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	赤褐色。	6265	〃
〃	10			SD	14	北半部に当たるDT-25-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整。外底面及び内面は指頭によるナデ調整。	外面は橙色。内面及び外底面は黒色。	6263	〃
〃	11			SD	14	北半部に当たるDT-25-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	二次的火熱を受けて器表面が荒れ調整不明。	明赤褐色。	6266	〃
〃	12			SD	14	北半部に当たるDT-25-6区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整。成形時の指頭痕がわずかに残る。内面はナデ調整。	赤褐色。外底面と内面の器表面は淡い黒色。	6264	〃
〃	13	図版86	3	SD	15	上部のDT-25-7区Ⅲ層から出土。	弥生土器	把手	指頭によるナデ調整。	橙色。	6258	〃
〃	14			SD	15	上部のDT-25-7区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに篦状工具によるナデ調整。	橙色。外底面を中心として胴部下半までに及ぶ黒斑が生じている。	6257	〃
〃	15			SD	16	上部のDT-24-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は篦状工具によるケズリに近い強いナデ調整，内面は指頭によるナデ調整。	赤褐色。	6269	〃
〃	16	図版86	4	SD	20	埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	6275	〃
〃	17			SD	20	埋土中から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整の後に横ナデ調整，内面には成形時の指頭痕が残る。	外面はにぶい橙色。内面及び器壁の芯部は黒変したまま。	6274	〃
〃	18	図版86	6	SD	20	埋土中から出土。	弥生土器	高坏	口縁部及び坏部内面は横ナデ調整。坏部外面はミガキ調整。	にぶい橙色。	6272	〃
〃	19			SD	20	埋土中から出土。	弥生土器	高坏	坏部外面には擦過状の調整痕。内面及び脚部内外面はナデ調整。	外面は橙色。器壁の芯部には黒褐色の黒化層が残り，坏部内面は黒変したまま。	6271	〃
〃	20	図版86	7	SD	20	埋土中から出土。	弥生土器	高坏もしくは脚台付き鉢	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	6273	〃
〃	21			SD	20	埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面及び外底面は指頭によるナデ調整。	橙色。胴部下半の外面には黒斑が生じている。	6270	〃
〃	22	図版86	5	SD	20	ほぼ中央部のDV-25-16区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	6277	〃
〃	23	図版87	1	SD	20	ほぼ中央部のDV-25-16区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	6276	〃
〃	24			SD	21	掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5970	91
〃	25	図版87	2	SD	21	掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整の後に横ナデ調整，内面は刷毛目調整の後にナデ調整。	橙色。	5971	〃
		図版88	2	SD	29	南半部のDY・DZ-21区埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面は器表面が荒れ，調整不明。	にぶい橙色。外面には煤付着。	6097	94
		図版88	4	SD	29	南半部のDY・DZ-21区埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後に横ナデ調整。内面は横ナデ調整。	赤褐色。	6095	〃
		図版88	5	SD	29	南半部のDY-21区溝底から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	外面には黒斑が生じている。内面は橙色。器壁の芯部には灰褐色の黒化層が残る。	6096	〃
図121	1	図版87	5	SD	29	北半部のDW-23-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	口縁周辺は横ナデ調整。口縁部～頸部の境界に刷毛目調整が残る。	器表面は橙色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	5999	94
〃	2	図版87	6	SD	29	北端部のDV-24-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整，内面は肩部をケズリ調整。頸部には指頭によるナデ調整。	赤褐色。	6094	〃
〃	3			SD	29	北端部のDV-24-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	明褐色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	5997	〃
〃	4			SD	29	北端部のDV-24-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は擦過調整，内面はケズリ調整。	内外面ともに褐色。	5995	〃
〃	5			SD	29	北端部のDV-24-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。不明瞭ながら成形時の指頭圧痕を観察できる。内底面には粘土の撚れが生じている。	内外面ともににぶい黄橙色。外面には黒斑が生じている。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。	5990	〃
〃	6	図版88	3	SD	29	中央部のDW-23-5区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整。底部近くにはナデ調整を加える。内面はケズリに近い強いナデ調整。	明赤褐色。	6093	〃
〃	7	図版87	4	SD	29	中央部のDX-22-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	把手	指頭によるナデ調整。	にぶい橙色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	6091	〃
〃	8	図版87	3	SD	29	南端付近のDW-21-5区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	5989	〃
〃	9	図版87	8	SD	29	南半部のDY-22-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。頸部外面は刷毛目調整。	橙色。内面には黒斑が生じている。	5996	〃
〃	10			SD	29	南端部のDY-21-25区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5994	〃
〃	11	図版87	7	SD	29	南端付近のDY-21-25区Ⅲ層から出土。	無文土器？	鉢	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。口縁部の粘土帯の芯部には淡い黒色の黒化層が残る。	5988	〃
〃	12	図版87	9	SD	29	南半部のDY-22-3区Ⅲ層から出土。	弥生土器	不明	外面の中位～上部は刷毛目調整の後にナデ調整，内面は成形時の指頭痕が残る。	外面は橙色。内面は灰褐色。外面には黒斑が生じている。	6092	〃
〃	13			SD	29	南半部のDY-22-11区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	脚上部は篦状工具によるナデ調整，下部は横ナデ調整。内面は指頭によるナデ調整。	脚部内外面は橙色。坏部内面はにぶい橙色。	5991	〃
〃	14	図版88	1	SD	29	南半部のDY-22-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	6000	〃
〃	15			SD	29	南端のDY-21-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	明褐色。内面は黒変したまま。	5993	〃
〃	16			SD	29	南半部のDY-22-11区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は指頭によるナデ調整。	外面は橙色，内面は黒変したまま。外底面を中心として黒斑が生じている。	5992	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図123	1	図版91・92	1	SD	36	南西部の落ち込み部分に投棄された状態で出土。	弥生土器	壺	口縁部外面は横ナデ調整，胴上半は刷毛目調整の後にナデ調整，中位は横方向のミガキ調整。胴下半はミガキ調整。口縁部内面は横方向のミガキ調整，屈曲部下には絞り痕が残る。胴上半はナデ調整，胴下半は刷毛目調整。外面には焼成剥離痕が残る。	外面は褐色。内面は褐色。外面の底部から胴中部にかけて黒斑が生じる。	5758	149
〃	2	図版89	1	SD	36	南西部の落ち込み部分に投棄された状態で出土。	弥生土器	壺	口縁部と胴部中位の外面は器表面が荒れ調整不明。部分的に縦方向の板状工具の痕跡を確認できる。肩部は刷毛目調整，胴下半は縦方向のミガキ調整。口縁部内面は刷毛目調整，端部付近は横ナデ調整。肩部はナデ調整，胴部上半はミガキ調整，下半は刷毛目調整，ナデ調整。	外面は橙色。内面は褐灰色。	5759	151
〃	3			SD	36	南西部の落ち込み部分に投棄された状態で出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	褐色。外面～口縁端部に黒斑が生じる。	5770	149
〃	4			SD	36	南西部の落ち込み部分に投棄された状態で出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	橙色。	5771	〃
〃	5			SD	36	南西部の落ち込み部分に投棄された状態で出土。	弥生土器	甕	外面は口縁部は横ナデ調整が施されるが，胴部は器表面の荒れにより調整は不明。内面はナデ調整が施される。	外面は明赤褐色。内面は明褐色。口縁部外面には煤が付着。	5769	〃
〃	6	図版90	1	SD	36	南西部の落ち込み部分に投棄された状態で出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整。胴上半はナデ調整，以下は縦方向のミガキ調整。また，胴部下半は二次的火熱を受け器表面が薄く剥落。	橙色。内面に黒斑が生じる。胴部外面には煤が付着。	5777	150
〃	7	図版88	7	SD	36	南西部の落ち込み部分に投棄された状態で出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	外面は褐色。内面は黄褐色。胴部外面には煤が付着。	5767	149
〃	8	図版92	2	SD	36	南西部の落ち込み部分に投棄された状態で出土。	弥生土器	鉢	胴部上半の外面は横方向のミガキ調整，下半は縦方向のミガキ調整。	外面はにぶい橙色～明赤褐色。内面はにぶい黄橙色。外面に黒斑が生じる。	5757	〃
〃	9			SD	36	南西部の落ち込み部分に投棄された状態で出土。	弥生土器	鉢	ミニチュア土器。内外面ともにナデ調整。あちこちに指頭痕が残る。	明褐色。	5779	148
〃	10			SD	36	南西部の落ち込み部分に投棄された状態で出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整。内面には幅9㎜，3㎜間隔の条痕状の調整痕跡が残る。	明褐色。	5774	149
〃	11			SD	36	南西部の落ち込み部分に投棄された状態で出土。	弥生土器	壺	外面は器表面が荒れ調整不明。底部付近には成形時の指頭痕が残る。内面は乱雑なナデ調整。	外面は褐色。内面は黒褐色。	5773	〃
図124	1	図版92	4	SD	36	中央部～南西部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	外面は明赤褐色。内面はにぶい黄橙色。	5761	149
〃	2	図版93	3	SD	36	中央部～南西部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。	明赤褐色。	5775	150
〃	3	図版88	6	SD	36	中央部～南西部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は縦方向の刷毛目調整。突帯直下は横方向のミガキ調整，肩部は横方向のミガキ調整。内面は屈曲部直下に横方向のミガキ調整，肩部にはナデ調整を施す。	外面は褐色。内面は橙色。	5760	149
〃	4			SD	36	中央部～南西部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は横方向のミガキ調整。	橙色。端部周辺に黒斑が生じる。	5762	〃
〃	5	図版90	2	SD	36	中央部～南西部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は縦方向の刷毛目調整。屈曲部には板状工具の木口部が接触した痕跡が残る。内面は横ナデ調整。	外面は橙色。内面は明褐色。外面下部には黒斑が生じる。	5768	〃
〃	6	図版90	3	SD	36	北東部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	口縁部は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，胴中部には縦方向のミガキ調整を一部追加。内面は横ナデ調整。	明褐色。胴部外面には煤が付着。	5765	〃
〃	7	図版88	8	SD	36	北東部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	口縁部は横ナデ調整。胴部外面は器表面が荒れ調整不明，内面は刷毛目調整の後に横方向のミガキ調整を追加。	外面は橙色。内面は明赤褐色。	5766	〃
〃	8	図版93	4	SD	36	中央部～南西部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	褐色。	5764	〃
〃	9	図版92	5	SD	36	北東部の埋土上半から出土。	弥生土器	甕	外面は器表面が荒れ調整不明，内面はナデ調整。胎土には金雲母が混じる。	外面は暗褐色。内面は褐色。	5763	〃
〃	10			SD	36	北東部の溝底から出土。	弥生土器	甕	外面は縦方向のミガキ調整，内面はナデ調整。	明褐色。底部外面に黒斑が生じる。	5772	〃
図125	1			SD	36	上部Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整を施す。	明褐色。	5778	148
〃	2			SD	36	DZ-20-17区上部Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整を施す。内面は器表面の荒れにより調整は不明。	外面は灰黄褐色。内面はにぶい黄橙色。	5786	〃
〃	3	図版93	2	SD	36	DZ-20-21区上部Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	把手	指頭痕が顕著に残る。色調，焼成から，弥生土器である可能性が高い。	にぶい黄橙色。	5795	〃
〃	4			SD	36	DZ-20-16区上部Ⅲ層下半から出土。	土師器	坏	外面は器表面の荒れにより調整は不明。内面は回転ナデを施す。	橙色。	5793	〃
〃	5			SD	36	DZ-20-22区上部Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともにナデ調整が施される。	明褐色。	5783	〃
〃	6			SD	36	DX-21-17区上部Ⅲ層下半から出土。	土師器	壺	外面は横方向のナデ調整を施す。内面はナデ調整を施す。	橙色。	5792	〃
〃	7	図版92	3	SD	36	DY-21-5区上部Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は口縁部は縦方向の刷毛目調整の後にナデ調整であるが，口縁端部および直下は特に丁寧に横ナデを行う。内面は横方向のナデ調整を施す。	明褐色。	5780	〃
〃	8			SD	36	DY-21-2区上部Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整が施される。	明褐色。	5784	〃
〃	9	図版93	1	SD	36	DY-21-8区上部Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともにナデ調整が施される。	にぶい黄橙色。	5781	〃
〃	10			SD	36	DY-21-8区上部Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横方向のナデ調整が施される。	明褐色。	5782	〃
〃	11			SD	36	DY-21-8区上部Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	壺	外面は器表面の荒れにより調整は不明。内面はナデ調整を施す。	外面は明褐色。内面は黒褐色。底部には黒斑が生じる。	5787	〃
〃	12			SD	36	DY-21-11区上部Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	壺もしくは鉢	外面は縦方向のミガキ調整が施される。底部および内面はナデ調整が施される。	橙色。	5788	〃
〃	13			SD	36	DX-21-12区上部Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整を施す。	橙色。外面に黒斑が生じる。	5791	〃
〃	14			SD	36	DY-21-8区上部Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整を施す。外面は二次的火熱を受け，赤変する。	褐色。器壁の芯部に淡い黒化層が残る。	5790	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図125	15			SD	36	DW-23-6区上部Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横方向のナデ調整が施される。	にぶい黄橙色。	5785	148
〃	16			SD	36	DW-23-7区上部Ⅲ層下半から出土。	備前焼	鉢	内外面ともに回転ナデ調整を施す。	にぶい赤褐色。	5794	〃
図126	1	図版93	5	SD	45	埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	浅黄色。	6001	157
		図版93	6	SD	45	埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整。内面には成形時の指頭圧痕が残る。	橙色。外面には煤付着。	526	〃
図127	1			SD	55	南半部のDV-20-18区とDV-20-23区の上部Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	6313	110
〃	2	図版93	7	SD	55	南半部のDV-20-18区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後に横ナデ調整，他は横ナデ調整。	橙色。	6310	〃
〃	3	図版93	9	SD	55	南半部のDV-20-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。頸部外面は刷毛目調整の後にナデ調整，内面はナデ調整。	にぶい赤褐色。	6309	〃
〃	4	図版93	8	SD	55	南半部のDV-20-22区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに刷毛目調整。胴上半内面には篦状工具で粘土を削ぎ取った痕跡が残る。	橙色。	6320	〃
〃	5	図版94	2	SD	55	南半部のDV-20-22区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は器表面が荒れ調整不明，内面はナデ調整。	にぶい黄橙色。	6319	〃
〃	6	図版94	1	SD	55	南半部のDV-20-18区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	6308	〃
〃	7			SD	55	南半部のDV-20-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	6316	〃
〃	8			SD	55	南半部のDV-20-18区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	外面はにぶい橙色，内面は淡い黒色。	6314	〃
〃	9			SD	55	中央部のDV-21-8区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	赤褐色。	6315	〃
〃	10	図版93	10	SD	55	中央部のDV-21-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕？	内外面ともに横ナデ調整。	外面は橙色，内面は褐灰色。	6317	〃
〃	11			SD	55	中央部のDV-21-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。外面には煤が付着する。	6318	〃
〃	12			SD	55	南半部のDV-20-22区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	高坏	坏部下半部はミガキ調整，他はナデ調整。	にぶい黄橙色。坏部上半～口縁部にかけて黒斑が生じている。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	6307	〃
〃	13			SD	55	中央部のDV-21-9区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	外面は篦状工具による擦過調整。内面は指頭によるナデ調整。	にぶい黄色。器壁の芯部には厚く暗黄灰色の黒化層が残る。	6305	〃
〃	14			SD	55	南半部のDV-20-18区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は篦状工具，内面は指頭によるナデ調整。	外面はにぶい橙色，内面は橙色。外面には黒斑が生じている。	6301	〃
〃	15			SD	55	中央部のDV-21-8区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	底部側縁は篦状工具でナデ調整。内面には成形時の指頭圧痕が残る。	内外面ともに淡い黒色。器壁の芯部は明赤褐色。	6306	〃
〃	16			SD	55	南半部のDV-20-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	赤褐色。	6312	〃
〃	17			SD	55	中央部のDV-21-8区Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	甕もしくは鉢	外面は刷毛目調整，内面はケズリ調整。内底面には指頭を押さえつけたようなナデ調整。	外面は明赤褐色，内面は黒色。	6302	〃
〃	18			SD	55	中央部のDV-21-8区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は器表面が荒れ調整不明。底部側縁には成形時の指頭痕が残る。内面はナデ調整。	にぶい橙色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。	6311	〃
〃	19			SD	55	中央部のDV-21-3区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は器表面が荒れ調整不明，内面及び外底面はナデ調整。	浅黄色。器壁の芯部には黄灰色の黒化層が残る。	6304	〃
〃	20			SD	55	北端部のDW-22-7区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	胴部下半部近くは篦状工具で上方に向かってナデ調整。底部の脚台部外面には成形時の指頭圧痕が残る。	にぶい橙色。脚台部の内面に黒斑が生じている。	6303	〃
図128	1			SD	62	北半部（DY-24区）の掘り形埋土中から出土。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部には擦過状の調整痕が残る。	外面は赤褐色，内面は淡い黒色。	6327	111
〃	2	図版94	4	SD	62	南端部のDY-22-16区Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。胎土には金雲母が混じる。	褐色～赤褐色。	6331	〃
〃	3	図版94	3	SD	62	北半部のDZ-24-1・6区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面には成形時の指頭圧痕が残る。	橙色。	6329	〃
〃	4			SD	62	北半部のDZ-24-6区Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	褐色。	6330	〃
〃	5			SD	62	南半部のDY-23-2区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	6328	〃
〃	6			SD	62	南半部のDY-23-20区Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	壺	外面は器表面が荒れ調整不明，内面はナデ調整。	外面は二次的火熱を受けて赤褐色に変色，内面は橙色。	6333	〃
〃	7			SD	62	北半部のDY-23-25区Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。底部側面には成形時の指頭痕が多く残る。	外面は二次的火熱を受けて赤褐色に変色，内面は橙色。	6332	〃
〃	8			SD	62	南半部のDY-23-2区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	内外面とも器表面が荒れ調整不明。	明緑灰色。	6334	〃
図129	1			SD	72	南半部のDX-23-15区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	壺	外面は調整不明，内面は下半をケズリ調整した後に，肩部を中心として指頭によるナデ調整を加える。	橙色。底部側面に黒斑が生じている。	6326	111
〃	2	図版94	5	SD	72	中央部のDY-23-17区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	深鉢	刻目凸帯文土器。内外面ともに横ナデ調整。	外面は赤褐色，内面及び器壁の芯部は黒変したまま。	6323	〃
〃	3	図版95	1	SD	72	南半部のDX-23-15区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面はケズリ調整。	橙色。胴部下半外面には煤が付着。	6325	〃
〃	4			SD	72	南半部のDX-23-15区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	赤褐色。	6322	〃
〃	5			SD	72	北半部のDY-24-20区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は篦状工具によるナデ調整，内面はナデ調整。	明赤褐色。	6321	〃
〃	6	図版94	6	SD	72	中央部のDX-23-15区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	赤褐色の赤彩を施す。器壁の芯部はにぶい橙色。	6324	〃
〃	7	図版94	7	SD	72	DY-24-14区のSC-84との重複部分から出土。本来SC-84埋土に埋没していたものが混入したと判断。	弥生土器	甕	内外面は横ナデ調整。	外面は橙色，内面は淡く黒変したまま。	613	〃
図130	1	図版94	8	SD	73	南端部（DZ-26区）の埋土中から出土。	弥生土器	壺	肩部外面には指頭圧痕が残る。胴部外面は刷毛目調整，内面でも下半は刷毛目調整，上半には指頭痕が残る。外面は黒斑あり。	外面はにぶい黄橙色。黒斑が生じている。内面はオリーブ黒色。	6008	156

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図130	2			SD	73	南半部（DZ-28区）の埋土中から出土。	弥生土器	甕	横ナデ調整を施す。	外面は灰黄褐色，内面はにぶい橙色。	6005	156
〃	3			SD	73	南端（DZ-27区）の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデあるいナデ調整。内面は横ナデ調整。	にぶい橙色～橙色。	6003	〃
〃	4	図版94	9	SD	73	南端部（DZ-26区）の埋土中から出土。	弥生土器	器台	刷毛目調整が施される。	にぶい橙色～橙色。	6007	〃
〃	5			SD	73	南端部（DZ-26区）の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は指ナデ調整。内面はナデ調整を施す。	外面は灰黄褐色からにぶい黄褐色，内面は暗灰色。	6006	〃
〃	6	図版94	10	SD	520	北端に当たるB区SD-47東半部の埋土中から出土。	弥生土器	高坏	外面及び坏部内面はミガキ調整を施した後に坏部だけに篦状工具によるナデ調整を加える。脚部内面には絞り痕が残る。	外面は明赤褐色，脚部内面は黒変したまま。	6348	〃
〃	7			SD	520	北端部（DY-31区）の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整。内面は器表面の荒れにより調整不明。内面は黒斑。	外面は橙色，内面は灰色～オリーブ黒色。	6004	〃
		図版121	2	SD	91	西半部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにミガキ調整。	外面は赤褐色，内面は橙色。	5938	83
		図版121	3	SD	91	西半部の埋土中から出土。	縄文土器	深鉢	外面はケズリ調整，内面は丁寧な横ナデ調整。	にぶい赤褐色。	5939	〃
図131	1			SD	505	DZ-24・25区の掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	褐灰色。	5975	92
〃	2	図版123	2	SD	505	SC-69との重複部分の埋土中から出土。	縄文土器	深鉢	刻目凸帯文土器。内外面ともに横ナデ調整。	暗赤褐色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	5973	〃
〃	3			SD	505	DY-26区の掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	外面には成形時の指頭圧痕が残る。内面は指頭によるナデ調整。	橙色。	5972	〃
〃	4	図版96	1	SD	505	DZ-25区の掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整の後にナデ調整。内面はケズリ調整。	にぶい橙色。	5978	〃
〃	5	図版94	11	SD	505	DY-26区の掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整の後にナデ調整。内面は指頭による強いナデ調整。	明赤褐色。	5976	〃
〃	6	図版94	12	SD	505	DY-26区の掘り形埋土から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整。内面はケズリ調整の後にナデ調整。	明赤褐色。	5977	〃
〃	7			SD	505	DY-26区の掘り形埋土から出土。	弥生土器	壺	外面は器表面が荒れて調整は不明。内面はナデ調整。	橙色。	5974	〃
〃	8	図版96	2	SD	508	DZ-20区の溝底から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺と外面は横ナデ調整。内面は刷毛目調整。	赤褐色。	5981	93
〃	9			SD	508	DZ-22区の掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5985	〃
〃	10			SD	508	DZ-21-10区部分から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面はにぶい黄褐色。内面は橙色。	6398	〃
〃	11	図版96	3	SD	508	DZ-21区北半部の溝底から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	橙色。	5983	〃
〃	12	図版96	4	SD	508	DZ-21区中央部の掘り形埋土から出土。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ調整。体部の内外面は条痕様の幅広の粗い刷毛目調整。	明赤褐色。	5984	〃
〃	13			SD	508	DZ-21区南半部の掘り形埋土から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5982	〃
〃	14			SD	508	DZ-21区南半部の掘り形埋土から出土。	弥生土器	高坏	外面及び坏部内面はナデ調整，脚部内面には絞り痕跡が残る。	橙色。	5987	〃
〃	15			SD	508	DZ-21区南半部とDZ-21区中央部の掘り形埋土から同一個体と考えられる破片が出土。	弥生土器	甕	外面は強いナデ調整，内面はケズリ調整。	外面は赤褐色。内面及び外底面は黒変したまま。	5986	〃
〃	16			SD	508	DZ-21区南半部の掘り形埋土から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに丁寧な横ナデ調整。	橙色。	5980	〃
〃	17			SD	508	DZ-21区南半部の掘り形埋土から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに丁寧な横ナデ調整。	赤褐色。	5979	〃
図132	1			SD	509	中央部（DZ-21区）の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	6300	98
〃	2			SD	509	中央部（DZ-21区）の埋土中から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺～頸部内面は横ナデ調整，頸部外面は刷毛目調整の後に横ナデ調整。	赤褐色。	6292	〃
〃	3	図版96	8	SD	509	北半部（DZ-21区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整，頸部の内外面は刷毛目調整。	明赤褐色。	6290	〃
〃	4	図版96	5	SD	509	中央部（DZ-21区）の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整を施した後に横ナデ調整。内面は横ナデ調整。成形時の指頭圧痕が残る。	明赤褐色。	6294	〃
〃	5	図版97	1	SD	509	DZ-20-24区の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は成形時の指頭圧痕が多く残る。	橙色。胴部上半部には煤が付着。	6297	〃
〃	6	図版97	3	SD	509	南半部（DZ-20区）の溝底から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	6293	〃
〃	7			SD	509	中央部（DZ-21区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整。突帯周辺は横ナデ調整。肩部内面には成形時の指頭圧痕が残る。頸部内面には部分的に細密条線の擦過痕が残る。	明赤褐色。	6291	〃
〃	8	図版96	7	SD	509	中央部（DZ-21区）の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にミガキ調整，内面は刷毛目調整。成形時の指頭圧痕が残る。	明赤褐色。外面には黒斑が生じている。	6295	〃
〃	9	図版97	4	SD	509	南半部（DZ-20区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	甕？	外面は横ナデ調整，内面は横方向の篦状工具によるナデ調整。	茶色みをおびたにぶい赤褐色。	6298	〃
〃	10			SD	509	DZ-20区の溝底から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	6286	〃
〃	11	図版96	6	SD	509	図133-1・3・11とともに，SD-509南半部（DZ-21区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面は成形時の指頭圧痕の上に刷毛目調整が残る。	にぶい赤褐色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。	6289	〃
〃	12	図版96	9	SD	509	中央部（DZ-21区）の埋土中から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面は乱雑な擦過に近い刷毛目調整。指頭痕が残る。	外面はにぶい黄褐色，内面は黒色。	6299	〃
〃	13			SD	509	南半部（DZ-20区）の溝底と上部Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	高坏	坏外面は刷毛目調整の後にナデ調整。以外は横ナデ調整。	橙色。内面に黒斑が生じている。	6296	〃
〃	14	図版97	2	SD	509	中央部（DZ-21区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	鉢	外面はケズリ調整の後にナデ仕上げ，内面はミガキ調整。	にぶい橙色。口縁端面～外面には黒斑が生じている。	6287	〃
〃	15			SD	509	北半部（DZ-21区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	鉢	外面はナデ調整，内面は指頭によるナデ調整。	内外面ともに黒褐色。	801	〃
図133	1			SD	509	図133-1・3・11とともに，SD-509南半部（DZ-21区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	壺もしくは鉢	外面はミガキ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は赤褐色，内面は明褐灰色。	6282	98

挿図	No.	写真図版	No.	出土遺構 種別	番号	出土状況	遺物の観察 種別	器種	器面調整等	色調・付着物等	遺物登録番号	収納コンテナ
図133	2			SD	509	北半部（DZ-21区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	壺もしくは鉢	外面はナデ調整，内面は篦状工具によるナデ調整。	外面はにぶい橙色，内面は褐灰色。外底面～底部側縁には黒斑が生じている。	6283	98
〃	3			SD	509	図133-1・3・11とともに，SD-509南半部（DZ-21区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	甕もしくは鉢	外面及び外底面は刷毛目調整，内面は指頭によるナデ調整。	橙色。器壁の芯部には灰褐色の黒化層が残る。	6279	〃
〃	4			SD	509	北半部（DZ-21区）の東へ分岐した地点の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。成形時の指頭圧痕が残る。	外面は橙色。内面は黒変したまま。	6284	〃
〃	5			SD	509	北端の東に向かって分岐した地点（DZ-21区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	壺	外面には太めの棒状工具を押つけた痕跡が残る。内面はナデ調整。	明赤褐色。	6288	〃
〃	6			SD	509	南半部（DZ-20区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	壺	外面には刷毛目調整の痕跡が部分的に残る。内面には草本類の茎と考えられる幅3～4㎜の細密条線が観察できる。	にぶい赤褐色。	6278	〃
〃	7			SD	509	南半部（DZ-20区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	甕	底部側面は篦状工具によるナデ調整，胴部外面は二次的火熱を受け，器表面が荒れ調整不明。内底面は指頭によるナデ調整，胴部内面はケズリ調整。	外面は赤褐色。外底面には黒斑が生じている。内面はにぶい褐色。	6280	〃
〃	8			SD	509	南半部（DZ-21区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。	790	〃
〃	9			SD	509	南半部（DZ-21区）の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	甕	外面は篦状工具による擦過調整，内面はケズリ調整。	にぶい赤褐色。外底面～底部側縁にかけて黒斑が生じている。	797	〃
〃	10			SD	509	北半部（DZ-21区）の東へ分岐した地点の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	甕	外面は篦状工具によるナデ調整，内面は指頭によるナデ調整。	外面は明赤褐色，内面は橙色。	6281	〃
〃	11			SD	509	北半部（DZ-21区）の東へ分岐した地点の埋土上半部の粗砂層内から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面はケズリ調整。	外底面周辺が赤褐色以外，他は黒褐色。	6285	〃
図135	1			SD	512	南半部（DZ-26区）の埋土中から出土。	須恵器	坏蓋	外面は回転篦ケズリ調整，内面はナデ調整。	灰色。	6254	95
〃	2			SD	512	南半部（DZ-26区）の埋土中から出土。	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転横ナデ調整。	灰色。	6253	〃
〃	3	図版97	6	SD	512	南半部（DZ-26-8区）の埋土中から出土。	土師器	高坏	内外面ともに器表面が荒れ，調整は不明。	赤褐色。	2562	〃
〃	4			SD	512	南半部（DZ-26区）の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。器壁の芯部には灰褐色の黒化層が残る。	6251	〃
〃	5			SD	512	南端（DZ-25区）の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は篦状工具でナデ調整，内面は指頭によるナデ調整。	橙色。底面には黒斑が生じている。	6252	〃
〃	6	図版97	7	SD	512	北半部のDZ-26-24区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部上半は器表面が荒れているが，頸部～肩部は刷毛目調整。頸部内面は幅が狭い擦過状の調整痕が残り，胴部内面は篦状工具によるナデ調整。	橙色。	6256	〃
〃	7	図版97	5	SD	512	中央部のDZ-26-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	外面はミガキ調整。坏部内面はミガキ調整。	外面は赤褐色。脚部内面から器壁の芯部まで黒変したまま。	6255	〃
図137	1	図版103	3	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。頸部下半～胴部は刷毛目調整の後に横ナデ調整。	赤褐色。	5581	60
〃	2	図版97	8	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。頸部外面は篦状工具でナデ上げ，内面は指頭によるナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面には成形時の指頭痕跡が残る。	橙色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残り，口頸部の一部には器表面に黒化層が浮き出ている。	5590	57
〃	3	図版102	2	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。口縁部外面を篦状工具で撫で上げ。胴部外面は，器表面が荒れ，部分的に刷毛目調整の痕跡が残るのみ。内面はナデ調整。肩部内面には刷毛目調整の痕跡が残る。成形時の指頭痕を点々と観察できる。	明赤褐色。底部付近の器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	5574	59
〃	4	図版101	1	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整。口縁屈曲部の内面は刷毛目調整の後にナデ調整。胴部内面はケズリ調整。成形時の指頭圧痕が残る。	橙色。	5587	58
〃	5	図版98	1	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。口縁部の屈曲部内面には指頭痕が残る。胴部外面は刷毛目調整，内面はケズリ調整。内底面には指頭圧痕がは残る。	橙色。胴部上半には煤が付着。	5579	〃
〃	6			SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	外面は二次的火熱を受け，器表面が荒れ調整不明。	外面は橙色，内面は黒変したまま。	5584	60
〃	7	図版102	5	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整。底部裾には篦状工具でナデ上げた痕跡が残る。内面はケズリ調整。	外面は橙色，内面は黒変したまま。外面には薄く煤が付着する。	5588	〃
〃	8	図版102	4	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整。底部近くは二次的火熱を受け，器表面が荒れ調整不明。底部側面には成形時の指頭痕が残る。内面は器表面が薄く剥落し調整不明。	褐色。胴部外面は赤変し，中位付近には煤が薄く付着。	5573	59
図138	1			SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。口縁部内面は先行して刷毛目調整。胴部外面は刷毛目調整，内面は指頭によるナデ調整。	橙色。	5577	60
〃	2	図版101	3	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面は指頭によるナデ調整。胴部中位にはケズリ調整。	外面は橙色，内面は褐灰色。	5582	〃
〃	3	図版101	2	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整。中位にはナデ調整を追加。肩部内面には幅広の条痕様の調整痕跡が残る。一部はケズリに近い調整痕跡。中位は刷毛目調整。	にぶい橙色。	5576	〃
〃	4	図版102	1	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整の後にナデ調整，内面は器表面が荒れ，わずかに成形時の指頭痕が残るのみ。	橙色。	5580	〃
〃	5			SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	外面は器表面の一部が剥離。口縁部を屈曲させる際に生じた指頭痕が残る。胴部内面は刷毛目調整の後にナデ調整。	橙色。	5583	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図138	6	図版100	2	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面上半は指頭によるナデ調整，中位は刷毛目調整。	橙色。外面には煤が付着する。	5586	60
〃	7	図版100	1	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部上半は刷毛目調整，中位以下は二次的火熱を受けて器表面が荒れ調整不明。胴部内面は刷毛目調整。かなり強い刷毛目調整で，器表面に小さな凹凸が生じている。内底近くの横方向の刷毛目調整はケズリに近い。	褐色。胴部外面の中位以下は赤変。口縁部内面と胴部内面下半には黒斑が生じている。	5572	59
〃	8	図版99	1	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面は下半はケズリ調整，上半は細密条線が残るナデ調整に変化。底部側面には指頭痕が残る。	橙色。胴部上半と中位に黒斑文が生じている。内面の大部分は黒変したまま。胴部中位に薄く煤が付着。	5578	〃
図139	1	図版102	3	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	鉢	内外面ともに篦状工具によるナデ調整。	にぶい橙色～橙色。外面には黒斑が生じている。	5589	60
〃	2	図版104	1	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	鉢	外面はナデ調整。底面は強い横ナデ調整のため，内側に粘土の撚れが生じている。	内外面ともに黒変したまま。	5585	〃
〃	3	図版103	2	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	高坏	脚柱部はナデ調整，脚裾近くは刷毛目調整の後に横ナデ調整。脚端部は横ナデ調整。脚部内面には絞り痕とともに，刷毛目調整の痕跡が部分的に残る。	橙色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。	5575	58
〃	4	図版103	1	SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で折り重なり押し潰された状態で出土。	弥生土器	高坏	口縁部周辺は横ナデ調整。坏部外面はナデ調整，内面には擦過状の細密条線の調整痕が残る。坏底面には先端の丸い棒状工具によるナデ調整。脚柱部は刷毛目調整の後にナデ仕上げ。脚裾は横ナデ調整。内面は刷毛目調整の後にナデ仕上げ。	明赤褐色。坏内面の大部分と脚裾，脚内面には黒斑が生じている。	5591	57
図143	1	図版104	2	SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。図142-1・2は同一個体である可能性をもつ。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整の後にナデ調整，内面には成形時に生じた粘土の撚れの痕跡が残る。	橙色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残り，肩部～口縁部に黒斑が生じている。	5620	64
〃	2	図版104	5	SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。図142-1・2は同一個体である可能性をもつ。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整の後にナデ調整。部分的に板状工具を押しつけたような面ができている。肩部内面には成形時に生じた粘土の撚れが残り，指頭圧痕があちこちにみられる。	橙色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残り，肩部～口縁部に黒斑が生じている。	5618	〃
〃	3	図版105	2	SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	外面は擦過調整，内面は篦状工具によるかなり強く乱雑なナデ調整。	灰褐色。外面には黒斑が生じている。	5625	〃
〃	4			SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	5628	〃
〃	5			SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	明褐灰色。	5624	〃
〃	6			SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面には指頭痕跡が残る。	明赤褐色。	5623	〃
〃	7	図版105	1	SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整の後にナデ調整，内面は刷毛目調整の後に先端が二又に分かれた丸い工具を強くナデつける。	明赤褐色。	5621	〃
〃	8	図版104	7	SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	口縁部は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整の後にナデ調整を加える。内面は器表面が荒れ調整不明。成形時の指頭圧痕がわずかに残る。	外面はにぶい橙色，内面は明赤褐色。	5615	〃
〃	9			SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	明赤褐色～橙色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。	5617	〃
〃	10	図版104	4	SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はナデ調整，内面は刷毛目調整の後に丁寧なナデ調整。	明褐灰色。口縁部周辺には淡い黒色の黒斑が生じている。	5627	〃
〃	11	図版103	4	SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。口縁屈曲部の内面には棒状工具をナデつけた痕跡が残る。	明赤褐色。	5622	〃
〃	12	図版103	5	SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	口縁部外面は横ナデ調整，内面は刷毛目調整の後に横ナデ調整。肩部内面には指頭圧痕が残る。	にぶい橙色。口縁部下面には煤が付着。	5616	〃
〃	13			SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後に部分的に幅の狭いナデ調整を加える。内面は乱雑な刷毛目調整。	外面は明褐色，内面は黒変したまま。外面には黒斑が生じている。	5626	〃
〃	14			SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	底部側面には指頭で押さえながら横ナデ調整を施した痕跡が残る。胴部外面は刷毛目調整，内面はケズリ調整。	外面は橙色。外底面を中心として黒斑が生じている。内面は黒褐色。	5614	〃
〃	15			SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	胴部外面は刷毛目調整の後にナデ調整，内面は擦過に近い強く乱雑なナデ調整。外底側面には成形時の指頭圧痕が残る。	橙色。	5631	〃
〃	16			SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整の後に一部ナデ調整を加える。底裾の側面は指頭による成形後に横ナデ調整を施す。内面はケズリ調整。	外面はにぶい橙色，内面及び外底面には黒斑が生じている。	5612	〃
〃	17			SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	甕	胴部外面は刷毛目調整。底部側面には成形時の指頭圧跡が残る。内面はケズリ調整。	外面はにぶい橙色，内面は褐灰色。	5613	〃
〃	18	図版104	8	SK	2	Ⅲ層下部～掘り形上半で折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	弥生土器	ミニチュア土器	体部外面は篦状工具をナデつけているため，小さな面ができている。内面は指頭によるナデ調整。脚台部には指頭痕が多く残る。	橙色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。外底面を中心として黒斑が生じている。	5619	〃
〃	19	図版104	3	SK	2	掘り形下底部から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にナデ調整，内面には成形時の指頭圧痕が残るとともに，肩部内面には絞り痕が残る。	明褐色。	5630	〃
〃	20	図版105	3	SK	2	掘り形下底部から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともにミガキ調整。	外面は橙色，内面は黒色。外面には赤彩が施され，内面のごく一部にも赤彩の痕跡が残る。	5629	〃
図145	1	図版105	4	SK	3	掘り形北半部に当たるDT-21-23区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	外面は明赤褐色，内面は橙色。	5606	63

挿図	写真図版	出土遺構	出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.	No.	種別 番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図145	2		SK 3	掘り形南半部に当たるDT-21-18区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	壺	外面は擦過に近い刷毛目調整，内面はナデ調整。頸部内面には篦状工具でナデ上げた痕跡が残る。	外面は橙色，内面は黒変したまま。	5608	63
〃	3	図版105	5 SK 3	掘り形南半部に当たるDT-21-18区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は器表面が荒れ，部分的に刷毛目調整の痕跡が残るのみ。内面はナデ調整。指頭圧痕が残る。	橙色。	5607	〃
〃	4	図版105	6 SK 3	掘り形南半部に当たるDT-21-18区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	5610	〃
〃	5		SK 3	掘り形南半部に当たるDT-21-18区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。	5611	〃
〃	6		SK 3	掘り形東半部に当たるDT-21-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	外面は二次的な火熱を受けて赤褐色に赤変している。内面は黒色。	5609	〃
〃	7		SK 7	掘り形上部に当たるDS-25-5区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5605	62
〃	8		SK 7	掘り形上部に当たるDS-25-5区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5604	〃
〃	9	図版105	7 SK 7	掘り形上部に当たるDS-25-5区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整の後に丁寧なナデ調整，内面は篦状工具によるナデ調整。	橙色。	5603	〃
図146	1	図版106	1 SK 11	掘り形上半部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5642	70
〃	2	図版105	10 SK 11	土壙底面の窪み近くから出土。	弥生土器	壺	外面上半部は丁寧なナデ調整，下半はミガキ調整。内面はミガキ調整。	外面はにぶい橙色，内面は橙色。外面には不整形の黒斑が生じている。	5645	〃
〃	3	図版105	8 SK 11	掘り形上半部から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はナデ調整の後に擦過に近いミガキ調整，内面はナデ調整。	赤褐色。全体に二次的火熱を受けて赤変。煤が付着。	5644	〃
〃	4		SK 11	掘り形上半部から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面は刷毛目調整の後に口縁屈折部付近を中心として横ナデ調整を部分的に施す。	橙色。	5641	〃
〃	5		SK 11	掘り形上半部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにミガキ調整。ただし，外面は器表面が荒れ，ミガキ調整の痕跡は部分的にしか残っていない。	橙色。	5637	〃
〃	6	図版105	9 SK 11	掘り形上半部から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整の後に強い横ナデ調整，内面は篦状工具によるナデ調整。	橙色。	5638	〃
〃	7	図版106	2 SK 11	掘り形上半部から出土。	弥生土器	高坏	脚部外面はミガキ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。坏部底は丁寧なナデ調整。	橙色～明赤褐色。	5640	〃
〃	8		SK 11	掘り形上半部から出土。	弥生土器	壺	外面は横ナデ調整，内面は擦過状のナデ調整。	外面は橙色，内面は褐灰色。外面には黒斑が生じている。。	5639	〃
〃	9		SK 11	掘り形上半部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	内外面ともに橙色。外底面に黒斑が生じている。	5643	〃
〃	10		SK 11	掘り形上半部から出土。	弥生土器	甕	外面はケズリ調整，内面はナデ調整。	外面は橙色，内面は褐灰色。	5634	〃
〃	11		SK 11	掘り形上半部から出土。	弥生土器	甕	底部側面には指頭圧痕が残る。内面はナデ調整。	外面は明赤褐色，内面は灰褐色。	5633	〃
〃	12		SK 11	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	二次的火熱を受け器表面は荒れ調整不明。	外面は明赤褐色に変色。器壁の芯部には灰褐色の黒化層が残る。	5632	〃
〃	13		SK 11	掘り形上半部から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。外底面は横ナデ調整。	外面は赤褐色，内面は橙色。	5635	〃
図148	1		SK 13	掘り形埋土上部から出土。	弥生土器	高坏	外面は刷毛目調整の後に横ナデ調整，内面は横ナデ調整。	外面は橙色。内面は黒変したまま。	5599	62
〃	2	図版106	3 SK 13	掘り形埋土上部から出土。	弥生土器	瓢形土器？	内外面ともに成形時の指頭圧痕が残る。	明赤褐色。	5600	〃
〃	3		SK 13	掘り形東半部に当たるDS-24-19区Ⅲ層最下面から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。口縁端部周辺に煤がこびりつき，黒色に変色。器壁の芯部には淡い黒色の黒化層が残る。	5595	〃
〃	4	図版106	4 SK 13	掘り形西半部に当たるDS-24-20区Ⅲ層から出土。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はミガキ調整，内面には擦過状の調整痕跡が残る。	内外面ともに黒褐色。器壁の芯部は橙色。焼成不良品で，胴部に亀裂が入り，小さな土塊となって剥離する。	5597	〃
〃	5		SK 13	掘り形西半部に当たるDS-24-20区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面は粘土接合面で剥離。	明赤褐色。	5596	〃
〃	6		SK 13	掘り形西半部に当たるDS-24-20区Ⅲ層から出土。	土師器	土鍋	内外面ともに指頭によるナデ調整。	橙色。	5598	〃
	図版106	5 SK 13	掘り形埋土から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整，内面はミガキ調整。	外面は橙色，内面は黒変したまま。	5601	〃
	図版106	6 SK 13	掘り形埋土上半から出土。	弥生土器	壺？	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	明赤褐色。	5602	〃
	図版106	7 SK 17	掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は刷毛目調整。	橙色。外面には薄く煤が付着。	5646	71
図150	1		SK 19	掘り形の上半部でかたまって出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色	5650	71
〃	2		SK 19	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5649	〃
〃	3	図版106	8 SK 19	掘り形の上半部でかたまって出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整。内面はナデ調整。	外面は灰褐色，内面は橙色。	5651	〃
〃	4	図版106	9 SK 19	掘り形の上半部でかたまって出土。	弥生土器	甕	外面は篦状工具による擦過調整，内面は横ナデ調整。内底面には成形時の指頭圧痕が残る。	外面は黒褐色。内面は橙色。	5648	〃
〃	5		SK 19	掘り形の上半部でかたまって出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は器表面が荒れて調整は不明であるが，成形時の指頭圧痕を観察できる。	外面は橙色で，外底面を中心として黒斑が生じている。内面は黒変したまま。	5647	〃
〃	6	図版107	1 SK 19	掘り形の上半部でかたまって出土。	弥生土器	高坏	坏部内外面はミガキ調整。脚部外面はナデ調整，内面には成形時の絞り痕が残る。	明赤褐色。	5914	〃
〃	7	図版107	4 SK 23	掘り形埋土上半から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整。内面は棒状工具によるミガキ調整。	外面はにぶい橙色。内面は黒変したまま。	5667	72
〃	8	図版107	3 SK 23	掘り形北半部に当たるDU-21-12区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。口縁端面に部分的に黒斑が生じている。	5661	〃
〃	9	図版107	2 SK 23	掘り形北半部に当たるDU-21-12区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	5662	〃
〃	10	図版107	5 SK 23	掘り形南半部に当たるDU-21-7区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺？	外面は横ナデ調整，内面はナデ調整。	赤褐色。	5665	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図150	11			SK	23	掘り形南半部に当たるDU-21-7区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5658	72
〃	12	図版107	8	SK	23	掘り形北半部に当たるDU-21-12区Ⅲ層から出土。	弥生土器	ミニチュア土器	内外面には成形時の指頭圧痕が残る。	橙色であるが，黒斑が部分的に生じている。	5660	〃
〃	13			SK	23	SK-23南端からやや離れた位置でⅢ層から出土。	弥生土器	鉢	内外面ともにナデ調整。底部側面には成形時に横方向に指頭でナデつけた痕跡が残る。	にぶい橙色。外底面と内面は黒変したまま。	5654	〃
〃	14	図版107	6	SK	23	SK-23南端からやや南に離れたDU-21-2区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。器壁の芯部には黒化層が残る。	5659	〃
〃	15	図版107	7	SK	23	SK-23南端からやや南に離れたDU-21-2区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	脚部外面は刷毛目調整の後にナデ調整，内面はナデ調整。坏部底面は丁寧なナデ調整。	脚部は内外面ともに赤褐色。坏部底面は黒色。	5664	〃
		図版107	9	SK	23	掘り形埋土上半から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面はケズリ調整。	にぶい橙色。	5668	〃
〃	16			SK	24	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整	にぶい橙色。	5652	71
		図版108	1	SK	24	掘り形埋土下半から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	外面は橙色，内面はにぶい褐色。	5653	〃
〃	17			SK	30	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は篦状工具でナデ上げる。内面は指頭によるナデ調整。	明赤褐色。	5688	76
〃	18	図版108	4	SK	27	掘り形埋土の中位～上半から出土。	弥生土器	壺もしくは甕	外面は丁寧なナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。	5116	9
〃	19	図版108	2	SK	27	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面はケズリ調整。	にぶい褐色。	5117	〃
〃	20	図版108	3	SK	27	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺？	内面には成形時の指頭圧痕が残る。	にぶい橙色。外面には赤褐色の赤彩が施されている。	5115	〃
		図版108	5	SK	28	掘り形埋土の上半から出土。	弥生土器	甕もしくは壺	外面はナデ調整，内面はケズリ調整。		5121	〃
〃	21	図版108	7	SK	31	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5689	76
〃	22			SK	31	掘り形上部のDU-23-25区Ⅲ層最下面から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5691	〃
〃	23	図版108	6	SK	31	掘り形上部のDU-23-25区Ⅲ層最下面から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	赤褐色。	5690	〃
〃	24			SK	31	掘り形上部のDU-23-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺または甕	外面は篦状工具でナデ上げ調整，内面は指頭による強いナデ調整。	にぶい赤褐色。	5692	〃
〃	25			SK	34	掘り形上面のDV-21-12区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は器表面が荒れ調整不明，内面はナデ調整。	にぶい黄橙色。外面下半は二次的被熱により赤変する。	5346	36
〃	26	図版108	9	SK	34	掘り形南西部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面とも横ナデ調整。	にぶい橙色。	5349	〃
〃	27	図版108	8	SK	34	掘り形南西部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は横方向のミガキ調整，内面はナデ調整。	明褐色。	5348	〃
図152	1	図版109	2	SK	35	掘り形中位～下部で図152-1～3が押し潰された状態で出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。内面には屈曲部周辺に絞り痕が残る。	橙色。	5755	86
〃	2	図版109	3	SK	35	掘り形中位～下部で図152-1～3が押し潰された状態で出土。	弥生土器	鉢	胴部外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	外面はにぶい黄褐色。内面は褐灰色。内外面全体に黒斑が生じている。	5756	〃
〃	3	図版109	1	SK	35	掘り形中位～下部で図152-1～3が押し潰された状態で出土。	弥生土器	甕	外面は，口縁部と底部周辺を横ナデ調整，胴部には縦方向のミガキ調整，下半には指頭痕が残る。内面はナデ調整。	外面はにぶい黄橙色。内面は褐灰色。	5754	〃
〃	4			SK	38	掘り形南西角に当たるDW-25-10区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	5593	62
〃	5	図版109	5	SK	38	掘り形南西角に当たるDW-25-10区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	明褐色。	5594	〃
		図版109	6	SK	38	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整した後にミガキ調整。内面は器表面が荒れ調整不明。	橙色。	5592	〃
〃	6	図版110	5	SK	48	掘り形南半部に当たるDW-22-5区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	5699	77
〃	7	図版110	4	SK	48	掘り形南半部に当たるDW-22-5区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5700	〃
〃	8			SK	48	掘り形南半部に当たるDW-22-5区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，外底面は擦過状のナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。底部側面を中心として黒斑が生じている。	5698	〃
〃	9	図版110	3	SK	46	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整。	にぶい橙色。	5694	76
		図版110	2	SK	46	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面はナデ調整。	にぶい赤褐色。外面には煤が付着。	5695	〃
図154	1	図版111	2	SK	49	掘り形北端部で底面から若干浮いた状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はナデ調整，内面はミガキ様の丁寧なナデ調整。	内外面ともに明赤褐色。外面には煤が付着。	479	77
〃	2	図版111	1	SK	49	土層観察用畦の埋土部分から出土。	弥生土器	甕	胴部外面は擦過状のナデ調整，内面はミガキ調整。	外面はにぶい赤褐色。内面は黒変したまま。	5697	〃
〃	3	図版110	6	SK	49	掘り形北端部で底面から若干浮いた状態で出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整の後にミガキ調整，内面は擦過状のナデ調整。	赤褐色。外面には煤付着。	480	〃
〃	4	図版110	7	SK	49	掘り形北半部で底面から若干浮き，北西側から投げ込まれたような状態で出土。	弥生土器	甕	胴部外面は中位に刷毛目調整，下半に擦過調整。胴部内面は擦過状のナデ調整。	外面は強い二次的火熱を受けて赤褐色に変化。内面は黒変したまま。外面には煤付着。	5696	〃
〃	5			SK	49	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	鉢または壺	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	内外面ともに黒色。胎は灰褐色。	481	〃
〃	6	図版111	3	SK	49	掘り形南端部で底面に貼り付いた状態で出土。	弥生土器	高坏	外面は刷毛目調整の後にナデ仕上げ。刷毛目調整痕はほとんど消えている。脚端部周辺は横ナデ調整。脚内面には成形時の絞り痕が残る。	橙色。	485	〃
図156	1	図版112	3	SK	50	掘り形北西端に当たるDW-21-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。	白っぽい明褐灰色。	5685	73
〃	2			SK	50	掘り形北東部に当たるDV-21-14区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。器壁の芯部には淡い黒褐色の黒化層が残る。	5684	〃
〃	3			SK	50	掘り形北西端に当たるDW-21-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は器表面が荒れ調整不明。内面も器表面が荒れるが，ナデ調整が施された可能性が高い。	外面は橙色，内面は灰褐色。外底面を中心として黒斑が生じている。	5680	〃
〃	4			SK	50	掘り形のほぼ中央部に当たるDV-21-10区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	甕	底部側面には成形時の指頭圧痕，内面にはミガキ様の丁寧なナデ調整の痕跡が残る。	外面は明赤褐色，内面は黒色。	5677	〃
〃	5			SK	50	掘り形北端に当たるDW-21-21区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にナデ調整。内面はナデ調整。部分的に指頭によるナデ痕跡が残る。	内外面ともに橙色。器壁の芯部には淡い黒色の黒化層が残る。	5678	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図156	6			SK	50	掘り形北西端に当たるDW-21-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。内底面には指頭圧痕が残る。	外面はにぶい橙色，内面は黒変したまま。	5679	73
		図版112	2	SK	50	掘り形北端に当たるDW-21-21区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整の後にナデ調整，内面は刷毛目調整とナデ調整を併用。	外面は明赤褐色，内面は橙色。	5683	〃
図157	1			SK	51	掘り形埋土から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。内底面には削ぎ取ったような強いナデ調整の痕跡が残る。	明赤褐色。	5669	72
〃	2	図版112	4	SK	52	掘り形南半部に当たるDW-20-21区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	高坏	外面はミガキ調整，内面は丁寧なナデ調整。	外面は黒褐色，内面はにぶい橙色。	5901	79
〃	3	図版112	5	SK	52	掘り形北西端部に当たるDW-21-2区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	把手	成形時の指頭痕が残る。	橙色。一部は黒変したまま。	5902	〃
〃	4	図版112	6	SK	53	掘り形埋土から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。	5693	76
〃	5			SK	54	掘り形中位の埋土⑤層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5905	79
〃	6	図版112	7	SK	54	掘り形中位の埋土④層から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整，内面はナデ調整。	明赤褐色。	5903	〃
〃	7			SK	54	掘り形中位の埋土④層から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にミガキ調整，内面は指頭による丁寧なナデ調整。	にぶい橙色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。外面には黒斑が生じている。	5904	〃
		図版112	8	SK	54	掘り形上半の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面は擦過状のナデ調整。	赤褐色。	5906	〃
		図版112	9	SK	54	掘り形上半の埋土②層から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	明赤褐色。	5907	〃
〃	8	図版112	10	SK	56	掘り形下半の埋土中から出土。	弥生土器	鉢	外面は口縁部はナデ調整。胴部は縦方向のケズリ調整の後にミガキ調整を乱雑に施す。内面はナデ調整。	外面はにぶい黄橙色，大部分に黒斑が生じている。内面は橙色。	6232	100
〃	9	図版113	1	SK	56	掘り形下半の埋土中から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はナデ調整の後に縦方向のミガキ調整，内面は横方向のミガキ調整。	明赤褐色。外面には煤が付着。	6233	〃
〃	10			SK	59	掘り形中位の埋土①・②層の境界部分から出土。	弥生土器	壺	外面は上半を横方向のミガキ調整，下半を刷毛目調整の後に横方向のミガキ調整。内面は横方向のミガキ調整とナデ調整が施される。	褐色。	6214	99
〃	11			SK	59	掘り形中位の埋土①・②層の境界部分から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整，内面は器表面が剥離し調整不明。	にぶい黄褐色。	6215	〃
〃	12			SK	59	掘り形上部に当たるDX-23-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	外面は明褐色。内面はにぶい黄褐色。外面には黒斑が生じている。	6216	〃
〃	13			SK	59	掘り形上部に当たるDX-23-4区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕か鉢	外面は器表面が荒れ調整不明。内面はナデ調整。	褐色。	6217	〃
〃	14			SK	60	掘り形下部に当たる埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は器表面が荒れ調整不明。内面は横ナデ調整。	橙色。	6218	〃
〃	15			SK	60	掘り形下半の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整であるが，板状工具の木口痕が残る。	にぶい黄橙色。外面には黒斑が生じている。	6219	〃
〃	16	図版113	2	SK	60	掘り形上部に当たるDY-23-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。	外面は橙色。内面は黒変したまま。	6221	〃
〃	17			SK	60	掘り形上部に当たるDY-23-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は内外面ともに横ナデ調整。胴部外面は縦方向，内面は斜め方向の刷毛目調整。	褐色。内面は黒変したまま。	6223	〃
〃	18			SK	60	掘り形上部に当たるDY-23-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は板状工具によるナデ調整。内面は横ナデ調整。	外面は灰黄褐色。内面は黒褐色。	6222	〃
〃	19	図版113	3	SK	60	掘り形上部に当たるDY-22-21区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄褐色。	6220	〃
〃	20			SK	60	掘り形上部に当たるDY-23-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。突帯の上下は横ナデ調整。	橙色。	6225	〃
〃	21	図版110	1	SK	60	掘り形上部に当たるDY-23-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	橙色。	6224	〃
〃	22			SK	60	掘り形上部に当たるDY-23-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	外面はにぶい黄橙色。内面は褐灰色。底部には黒斑が生じている。	6227	〃
〃	23	図版113	4	SK	60	掘り形上部に当たるDY-23-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面は縦方向のケズリ調整。内底付近はナデ調整。	外面は明褐色。内面は黒色。内底面には黒斑が生じている。	6226	〃
〃	24	図版113	5	SK	61	掘り形東半部に当たるDY-23-8区Ⅲ層下半から出土。	縄文土器？	深鉢	内外面ともにケズリ調整。	外面は橙色，内面は黒変したまま。	5925	82
		図版113	6	SK	61	掘り形西半部に当たるDY-23-9区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は刷毛目調整の後にナデ調整。	外面は橙色，内面は灰褐色。器壁の芯部には淡い黒色の黒化層が残る。	5926	〃
		図版113	7	SK	61	掘り形東半部に当たるDY-23-8区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに刷毛目調整。	内外面ともに赤褐色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	5924	〃
〃	25			SK	63	掘り形埋土中から出土。	縄文土器？	深鉢	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	灰色。	5928	〃
〃	26			SK	63	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい赤褐色。	5927	〃
〃	27			SK	63	掘り形北半部に当たるDX-21-8区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい黄燈色。	5929	〃
〃	28			SK	63	掘り形北半部に当たるDX-21-8区Ⅲ層最下面から出土。	弥生土器	鉢	外面はミガキ調整か？，内面はケズリに近い強いナデ調整。	にぶい橙色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	5930	〃
		図版113	8	SK	63	掘り形北半部に当たるDX-21-8区Ⅲ層最下面から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面はナデ調整。	外面は黒色，内面は明赤褐色。	5931	〃
		図版114	1	SK	64	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面は擦過状のナデ調整。	外面は淡い黒色，内面はにぶい橙色。	5932	〃
		図版114	2	SK	64	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は器表面が荒れ調整不明，内面は擦過状のナデ調整。	浅黄色。	5933	〃
		図版114	3	SK	66	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	にぶい赤褐色。	5913	80
図159	1	図版114	4	SK	67	掘り形南東部に当たるDU-20-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5916	80
〃	2			SK	67	掘り形南東部に当たるDU-20-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	赤褐色。	5908	〃
〃	3			SK	67	掘り形南東半部に当たるDU-20-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。破片の大部分には黒斑が生じている。	5915	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図159	4	図版114	5	SK	67	掘り形南西部に当たるDU-20-18区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。一部，黒変。	5910	80
〃	5			SK	67	掘り形南西半部に当たるDU-20-18区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。	5909	〃
		図版114	6	SK	67	掘り形南東部に当たるDU-20-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目調整，内面は擦過状のナデ調整。	にぶい橙色。	5912	〃
		図版114	7	SK	67	掘り形南西部に当たるDU-20-18区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面は刷毛目調整を施した後にナデ仕上げ。	にぶい橙色。	5911	〃
〃	6			SK	68	掘り形上部に当たるDV-21-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	頸部は縦方向の刷毛目調整，複合口縁部との接合部には指頭痕が残るが，器表面が荒れ調整不明。内面はナデ調整。	橙色。	6230	100
〃	7			SK	68	掘り形上部に当たるDV-21-18区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。口縁端部内面には一部工具痕が残る。	橙色。	6229	〃
〃	8			SK	68	掘り形上部に当たるDV-21-18区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい黄橙色。器壁の芯部に黒化層が残る。	6228	〃
〃	9			SK	68	掘り形上部に当たるDV-21-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は器表面が荒れ調整不明，内面はナデ調整。	外面はにぶい黄橙色。内面は褐灰色。底部には黒斑が生じている。	6231	〃
図160	1			SK	70	掘り形上部の埋土中から出土。	須恵器	短頸壺蓋	天井部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。	内外面は青灰色，断面は紫灰色。	6081	155
〃	2	図版114	10	SK	70	掘り形上部の埋土中から出土。	須恵器	坏蓋	天井部外面は回転篦ケズリ調整，内面は回転横ナデ調整。中央部のみナデ調整。ロクロの方向は反時計回り。	灰色。	6082	〃
〃	3			SK	70	掘り形上部の埋土中から出土。	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転横ナデ調整。	灰色。	6069	〃
〃	4			SK	70	掘り形上部の埋土中から出土。	須恵器	坏身	底部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。ロクロは反時計回り。	灰白色。	6070	〃
〃	5			SK	70	掘り形東半部の埋土最上部から出土。	須恵器	壺	内外面ともに回転横ナデ調整。	内外面は灰色，断面は灰褐色。	6058	〃
〃	6	図版115	3	SK	70	掘り形東半部の最上部から出土。	須恵器	甕	外面は格子目タタキの上にカキメ調整，内面には同心円文当て具痕が残る。	外面は灰色，内面はにぶい赤褐色。	6062	〃
〃	7	図版115	4	SK	70	掘り形検出時に出土。	須恵器	器台	全面に回転横ナデ調整。上部には板状工具の小口部を用いた刺突文が二段めぐる。外面中央部には波状文が二段めぐる。	灰白色。	6087	〃
〃	8			SK	70	掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。	橙色。	6083	〃
〃	9			SK	70	掘り形西半部の最上部から出土。	弥生土器	甕	外面には縦方向の刷毛目調整，指オサエ痕が残る。内面はナデ調整。	外面は灰黄褐色，内面は黒色。	6049	〃
〃	10			SK	70	掘り形検出時に出土。	弥生土器	甕	外面には指オサエ痕が残る。	橙色。	6050	〃
図161	1			SK	70	掘り形埋土中から出土。	須恵器	坏蓋	天井部外面には回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。ロクロの方向は時計回り。	灰色。	6076	155
〃	2			SK	70	掘り形埋土中から出土。	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転横ナデ調整。	灰色。	6073	〃
〃	3			SK	70	掘り形埋土中から出土。	須恵器	坏身	底部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。ロクロの方向は反時計回り。	灰白色。	6077	〃
〃	4	図版114	8	SK	70	掘り形中央部の中部から出土。	須恵器	坏身	底部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。内底面中央はナデ調整。ロクロは時計回り。	青灰色。	6045	〃
〃	5	図版114	9	SK	70	掘り形中央部の中部から出土。	須恵器	坏身	底部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。ロクロは時計回り。	灰白色。焼成不良。	6072	〃
〃	6			SK	70	掘り形西半部の埋土中から出土。	須恵器	坏身	底部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。ロクロの方向は反時計回り。	灰白色。	6067	〃
〃	7			SK	70	掘り形埋土中から出土。	須恵器	坏身	内外面ともに回転横ナデ調整。	灰白色。底部外面はオリーブ灰色。	6071	〃
〃	8			SK	70	掘り形埋土中から出土。	須恵器	坏身	内外面ともに回転横ナデ調整。	内外面は青灰色，断面は赤灰色。	6078	〃
〃	9			SK	70	掘り形埋土中から出土。	須恵器	坏身	底部は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。ロクロの方向は時計回り。	灰色。	6079	〃
〃	10	図版115	1	SK	70	掘り形西半部の埋土中から出土。	須恵器	坏身	底部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。内底中央には同心円文当て具痕が残る。	灰白色。	6068	〃
〃	11			SK	70	掘り形中央部の中部から出土。	須恵器	坏身	回転横ナデ調整。	内外面は青灰色，断面は紫灰色。	6043	〃
〃	12			SK	70	掘り形中央部の中部から出土。	須恵器	坏身	底部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。ロクロの方向は時計回り。	内外面は青灰色，断面は紫灰色。	6046	〃
〃	13			SK	70	掘り形西半部の埋土中から出土。	須恵器	短頸壺の蓋	天井部外面には回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。	灰色。	6064	〃
〃	14			SK	70	掘り形中央部の中部から出土。	須恵器	高坏	天井部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。	外面は明オリーブ灰色～オリーブ灰色，内面は灰色。焼成不良。	6059	〃
〃	15	図版116	1	SK	70	掘り形埋土中から出土。	須恵器	壺	外面はカキメ調整，内面は回転横ナデ調整。	灰色。	6057	〃
〃	16	図版115	2	SK	70	掘り形西半部の中部から出土。	須恵器	壺	頸部～胴部外面はカキメ調整，口縁部外面は回転横ナデ調整。口縁部～頸部内面は回転横ナデ調整，胴部内面には同心円文の当て具痕が残る。	灰白色～灰色。	6074	〃
〃	17	図版116	3	SK	70	掘り形西半部の中部から出土。	須恵器	壺	胴部外面は格子タタキ調整，外面全体はカキメ目調整。頸部内面は回転横ナデ調整，胴部内面には同心円文の当て具痕が残る。	外面は灰色～オリーブ灰色，内面は灰色。	6061	〃
〃	18			SK	70	掘り形西半部の埋土中から出土。	須恵器	甕	外面は平行タタキ調整，内面には同心円文の当て具痕が残る。	内外面は葉黄色，断面は橙色。	6066	〃
〃	19			SK	70	掘り形埋土中から出土。	須恵器	壺・甕	外面は平行タタキ調整の後にカキメ調整。内面には同心円文の当て具痕が残る。	外面は灰色，内面はにぶい橙色。	6075	〃
〃	20			SK	70	掘り形西半部の埋土中から出土。	須恵器	高坏	内外面ともに回転横ナデ調整。	外面は灰白色，内面は灰色。	6065	〃
〃	21	図版116	2	SK	70	掘り形東半部の中部から出土。	須恵器	高坏	回転横ナデ調整。	灰色。	6055	〃
〃	22			SK	70	掘り形中央部の埋土中から出土。	土師器	甕	器表面が荒れ調整不明。	外面は橙色，内面はにぶい黄橙色。	6063	〃
〃	23	図版115	6	SK	70	掘り形中央部の中部から出土。	土師器	竈	内面は刷毛目調整，他は器表面が荒れ調整不明。	橙色。	6086	〃
図162	1	図版115	5	SK	70	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに刷毛目調整。外面には擦過痕も見られる。円孔の下には刺突列点文が１条施される。外面には指オサエ痕が残る。	灰白色。	6090	155
〃	2			SK	70	掘り形西半部の中部から出土。	弥生土器	壺	外面は縦方向にミガキ調整，内面は横ナデ調整。	明赤褐色～明褐色。	6085	〃
〃	3	図版116	5	SK	70	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。胴部内面には指オサエ痕が残る。	灰黄褐色。	6056	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図162	4	図版116	4	SK	70	中央部の土壙底近くから出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は縦方向のナデ調整，内面にはミガキ様の調整痕が残る。成形時の指頭痕が残る。	外面は橙色～褐灰色，内面は橙色。	6060	155
〃	5			SK	70	掘り形中央部の中部から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともにナデ調整。	明褐色。黒斑あり。	6084	〃
〃	6			SK	70	掘り形中央部の中部から出土。	弥生土器	甕	外面には指オサエ痕が残る。内面は器表面が荒れ調整不明。	外面はにぶい黄色，内面は橙色。	6048	〃
〃	7			SK	70	掘り形中央部の中部から出土。	弥生土器	甕	器表面が荒れ調整不明。	橙色。	6044	〃
図164	1			SK	70	掘り形上部のDZ-26-21区Ⅲ層最下部から出土。	須恵器	短頸壺蓋	天井部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。	外面は灰色，内面は灰白色。断面は赤灰色。	6020	155
〃	2			SK	70	掘り形上部のDY-27区Ⅲ層最下部から出土。	須恵器	坏蓋	天井部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。	外面は灰色，内面は灰白色。	6025	〃
〃	3			SK	70	掘り形上部のDY-26-5区Ⅲ層最下部から出土。	須恵器	坏蓋	天井部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。ロクロの方向は時計回り。	灰色～灰白色。	6022	〃
〃	4			SK	70	掘り形上部のDY-26-25区Ⅲ層最下部から出土。	須恵器	坏身	底部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。	内外面は灰白色。器壁の芯部は赤灰色。	6021	〃
〃	5			SK	70	掘り形上部のDY-27-5区Ⅲ層最下面から出土。	須恵器	坏身	器表面全体が荒れ調整不明。	灰黄色。	6026	〃
〃	6			SK	70	掘り形上部のDY-26-24区Ⅲ層最下部から出土。	須恵器	坏身	底部外面は回転篦ケズリ調整，他は回転横ナデ調整。	灰白色。	6024	〃
〃	7			SK	70	掘り形上部のDY-27-5区Ⅲ層最下部から出土。	須恵器	壺	外面はカキメ調整，内面は回転横ナデ調整。	外面はオリーブ灰色，内面は青灰色。	6027	〃
〃	8			SK	70	掘り形上部のDZ-26-21区・DY-27-5区Ⅲ層下部から出土。	須恵器	壺	外面は横方向のケズリ調整，内面には指オサエ痕が残る。	灰白色。	6033	〃
〃	9			SK	70	掘り形上部のDY-26-25区Ⅲ層最下部から出土。	須恵器	壺・甕	外面は格子タタキの上にカキメ調整。内面には同心円文の当て具痕が残る。	外面は灰色，内面は灰白色。	6029	〃
図165	1	図版117	1	SK	76	掘り形下部で図165-1～4が折り重なった状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はミガキ，肩部には部分的に刷毛目調整の痕跡を確認。外底面は横ナデ調整。胴部内面は上半をミガキ調整，下半をナデ調整。	外面は橙色。内面はにぶい黄橙色。	5749	86
〃	2			SK	76	掘り形下部で図165-1～4が折り重なった状態で出土。	弥生土器	甕	口縁端部は横ナデ調整，口縁部内面は横方向の刷毛目調整の後に横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整，内面はナデ調整。	明褐色。	5753	〃
〃	3	図版117	2	SK	76	掘り形下部で図165-1～4が折り重なった状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はミガキ調整，内面は肩部に横方向のミガキ調整，胴にはナデ調整を施す。	明褐色。	5752	〃
〃	4	図版116	6	SK	76	掘り形下部で図165-1～4が折り重なった状態で出土。	弥生土器	甕	外面は口縁部は横方向のナデ調整，胴部は縦方向のミガキ調整を施す。内面は口縁部は横方向のナデ調整，肩部は横方向のミガキ調整，以下はナデ調整を施す。	外面はにぶい黄橙色で，下部は赤みが強くなる。内面はにぶい黄橙色。外面には煤が付着。	5750	〃
〃	5			SK	77	掘り形中位から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	外面は橙色，内面は褐灰色。	5922	81
〃	6	図版118	2	SK	77	床面から若干浮いた状態で出土。	弥生土器	甕	口縁屈曲部周辺は横ナデ調整。肩部内外面はミガキ調整。	にぶい褐色。外面には黒斑が生じている。	5921	〃
〃	7	図版118	1	SK	77	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	外面はにぶい橙色，内面は黄橙色。	5918	〃
〃	8	図版117	3	SK	77	掘り形中位で，破片が散乱した状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面には擦過状の細密状線の調整痕が残る。内面は刷毛目調整の後にナデ調整。成形時の指頭圧痕が残る。	外面は暗赤褐色，内面は明赤褐色。外面には煤が付着。	5917	〃
〃	9			SK	77	土層観察用畦の埋土部分から出土。	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転横ナデ調整。	褐灰色。	5919	〃
〃	10			SK	77	土層観察用畦の埋土部分から出土。	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転横ナデ調整。	褐灰色。	5920	〃
〃	11	図版118	3	SK	81	掘り形北半部に当たるDX-24-8区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	壺？	内外面ともにナデ調整。	外面は暗赤褐色，内面は橙色。	5934	82
		図版118	4	SK	81	掘り形北半部に当たるDX-24-8区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	外面は淡い黒色，内面は明赤褐色。	5935	〃
		図版118	5	SK	81	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は細密条線の調整痕跡，内面はナデ調整。	にぶい橙色。	5937	〃
		図版118	6	SK	81	掘り形北半部に当たるDX-24-8区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面は擦過調整。	赤褐色。	5936	〃
図167	1	図版118 図版119	7 2	SK	82	掘り形上部のDX-24-9区Ⅲ層と掘り形内の破片が接合。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面には成形時の指頭圧痕が残り，仕上げは不定方向のナデ調整。	外面は褐色。内面は橙色。外面には煤が付着。	5505	ミュージアム展示
〃	2	図版120	1	SK	83	土壙南端近くで底面にほぼ貼り付いた状態で出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい赤褐色。胎土には金雲母が含まれる。	5249	47
〃	3	図版120	2	SK	83	土壙南端近くで底面にほぼ貼り付いた状態で出土。	弥生土器	甕	外面の突帯周辺は横ナデ調整，突帯以下は篦状工具による横ナデ調整。内面はナデ調整。	外面は明赤褐色，内面はにぶい赤褐色。胎土には金雲母が含まれる。	5250	〃
〃	4・5	図版119	3	SK	83	破片の多くはSK-83の床面にほぼ貼り付いた状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はミガキ調整，内面はナデ調整か？　胴部上部には篦状工具によるナデ痕跡が部分的に残る。	明赤褐色～にぶい橙色。胴部上部には不整形の黒斑が生じている。胴部外面には煤が付着。	5248	〃
〃	6			SK	83	SK-83上部のⅢ層部分から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内底面には指頭によるナデ調整。	赤褐色。	5251	〃
図168	1			SK	85	掘り形東端部に当たるDX-23-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	橙色。	5969	90
〃	2			SK	86	掘り形東壁際の埋土⑦層から出土。	須恵器	壺	内外面ともに回転横ナデ調整。	灰色。	5942	87
〃	3	図版121	1	SK	86	掘り形東壁際の埋土⑦層から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整を施した後に部分的に指頭で横ナデ調整，内面には絞り痕，指頭によるナデ痕跡が残る。	器表面は淡い黒褐色，器壁の芯部はにぶい黄燈色。	5940	〃
〃	4	図版120	3	SK	86	掘り形埋土⑥層の下半部，土壙底面近くから出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は刷毛目調整。	内外面ともに灰褐色。外面には黒斑が生じている。	5941	〃
〃	5	図版122	3	SK	96	掘り形南半部のDZ-22-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	口縁部外面は横ナデ調整。胴部外面には平行条線のタタキ目が残る。内面は刷毛目調整。	橙色。	5964	89
〃	6	図版122	2	SK	96	掘り形南半部のDZ-22-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺～頸部内面は横ナデ調整，頸部外面は丁寧なナデ調整。	器表面は橙色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。	5963	〃
図169	1	図版121	4	SK	95	調査区南壁面の埋土②層から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ。胴部外面は器表面が荒れ調整不明，内面はケズリ調整の後にミガキ調整。	明赤褐色。	596	83

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図169	2	図版122	1	SK	95	調査区南壁面の埋土①層から出土。	弥生土器	高坏	外面はミガキ調整。坏部内面はミガキ調整か？坏底面にははケズリ調整。脚部内面には絞り痕が残る。	にぶい橙色。外面には黒斑が生じている。	590	83
図170	1			SK	435	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	胴部外面はミガキ調整，内面及び底部はナデ調整。	黒褐色。	5341	35
〃	2	図版63	2	SK	439	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5342	〃
〃	3	図版63	1	SK	439	底面に貼り付いた状態で出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面はケズリの後にミガキ調整。	外面は明褐色。内面は黄褐色。外面には黒斑が生じてる。煤が付着。	5345	〃
図171	1	図版122	4	SK	496	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にナデ調整，内面には成形時の指頭痕が残る。	橙色。	6335	114
〃	2	図版122	5	SK	496	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にナデ調整，内面は器表面が剥離し調整不明。	外面は橙色，内面は灰黄褐色。	6343	〃
〃	3			SK	496	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整。底部付近はナデ調整。内面には成形時の指頭痕が多く残る。	外面は明褐色，内面は褐灰色。	6346	〃
〃	4			SK	496	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は灰黄褐色，内面は黄橙色。	6345	〃
〃	5	図版122	6	SK	496	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面に成形時の指頭圧痕が残る。	外面は橙色，内面はにぶい黄橙色。	6342	〃
〃	6	図版122	7	SK	496	掘り形埋土中から出土。	須恵器	高坏	内外面ともに回転横ナデ調整。	外面は暗赤灰色，内面は灰色。	6344	〃
〃	7			SK	501	掘り形上部のDZ-23-16区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	外面は橙色，内面はにぶい黄橙色。	6336	113
〃	8			SK	501	掘り形上部のDZ-23-21区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに調整不明。	外面は明黄褐色で，黒斑が生じている。内面は黄灰色。	6337	〃
〃	9			SK	501	掘り形上部のDZ-23-16区Ⅲ層から出土。	須恵器	甕	外面は平行条線のタタキ目の上にカキメ調整を施す。内面には同心円文の当て具痕が残る。	灰色。	6338	〃
〃	10	図版123	3	SK	510	掘り形上部のDZ-24-10区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	外面は暗褐色，内面は褐色。	6341	〃
〃	11			SK	510	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後に横ナデ調整，内面には指頭痕が残る。	外面は橙色，内面は浅黄橙色。	6339	〃
〃	12			SK	510	掘り形埋土中から出土。	縄文土器	深鉢	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	外面はにぶい黄橙色，内面は褐灰色。	6340	〃
〃	13	図版122	9	SK	503	掘り形上部のDZ-21-11区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整か？　器表面が荒れ不確実。胴部内面には成形時の指頭痕，頸部には絞り痕が残る。	明褐色。器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。	5285	48
〃	14			SK	503	掘り形上部のDY-21-15区Ⅲ層最下面から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	橙色。	5284	〃
〃	15	図版122	8	SK	503	掘り形上部のDY-21-15区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	器表面が荒れ調整はほとんどわからないが，成形時の指頭痕が残る。胴部内面には工具を強く押しつけナデ上げた痕跡が残る。	内外面ともに橙色。器壁の芯部には黒灰色の黒化層が残る。	5283	〃
〃	16	図版123	1	SK	503	掘り形上部のDY-21-15区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	？	外面は刷毛目調整，内面上半をナデ調整，下半を横ナデ調整。	外面は明赤褐色。内面は橙色。	5286	〃
〃	17			SK	503	掘り形上部のDZ-21-11区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	外面は刷毛目が擦過状に残る。内面はケズリ調整。	暗赤褐色。	5282	〃
図173	1	図版124	1	SK	511	掘り形中央部の下半で横倒しの状態で出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はミガキ調整。下半は器表面が荒れ調整不明。頸部はミガキ調整を施すが，下半には絞り痕が残る。内面は幅広のミガキに近いナデ調整。	外面は明褐色。内面は赤褐色。外面に黒斑が生じる。	5735	84
〃	2	図版124	2	SK	511	掘り形中央部の下半で横倒しの状態で出土。	弥生土器	壺	外面は頸部から胴上部に板ナデ調整。胴部中位以下はミガキ調整。内面は頸部にミガキ調整，胴部上半にナデ調整，下半にミガキ調整。	外面は橙色。内面はにぶい黄橙色。外面底部付近に黒斑が生じる。	5734	〃
〃	3	図版124	4	SK	511	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は縦方向のミガキ調整，内面はナデ調整。	橙色。	5737	85
〃	4			SK	511	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整，内面は口縁部にナデ調整，胴部にミガキ調整。	外面はにぶい黄橙色。内面は灰黄褐色。	5738	〃
〃	5	図版123	4	SK	511	掘り形中央部の下半で横倒しの状態で出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面はミガキ調整，底部付近は横ナデ調整。胴部内面はミガキ調整，下範囲はナデ調整。。	明褐色。外面は二次的火熱を受け器表面が薄く剥離。煤が付着。	5736	84
〃	6			SK	511	掘り形中央部の下半で一括してで出土。	弥生土器	甕	外面は口縁屈曲部直下に横ナデ調整，胴部上半に板ナデ調整，中位以下にはミガキ調整。内面はナデ調整。	にぶい黄橙色。外面には黒斑が生じている。	5745	85
〃	7	図版124	6	SK	511		弥生土器	深鉢	外面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄橙色。	5741	〃
〃	8	図版124	5	SK	511	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。	にぶい黄褐色。外面には黒斑が生じている。	5740	〃
〃	9			SK	511	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整。突帯上部は特に丁寧に横ナデする。	外面は褐色。内面はにぶい褐色。	5739	〃
〃	10	図版125	2	SK	511	掘り形中央部でかたまって出土。	弥生土器	甕	胴部外面下半はミガキ調整，脚台状の底部周辺はナデ調整。内面はナデ調整。	外面はにぶい褐色。内面は明赤褐色。外面に黒斑が生じる。	5743	〃
〃	11	図版125	1	SK	511	掘り形中央部で一括して出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	外面は橙色。内面は黒褐色を呈すが黒斑による。	5747	〃
〃	12			SK	511	掘り形中央部で一括して出土。	弥生土器	高坏	口縁部周辺は横ナデ調整。坏部外面は器表面が荒れ調整不明，内面は口縁部付近をミガキ調整，以下はケズリ調整。	橙色。器壁の芯部に淡い黒色の層が残る。	5742	〃
図175	1	図版124	3	SK	511	掘り形北西部に当たるDZ-22-9区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は乱雑な横ナデ調整，胴部は細かい刷毛目調整。内面は口縁部に横方向の刷毛目調整，頸部以下はケズリ調整。	橙色。	5744	85
〃	2			SK	511	掘り形北西部に当たるDZ-24-21区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	甕	屈曲部直下はナデ調整，以下は刷毛目調整の後にミガキ調整。内面は横ナデ調整。	灰黄褐色。	5746	〃
〃	3			SK	511	掘り形北西部に当たるDZ-24-21区Ⅲ層下半から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面はケズリ調整。内底面には指頭痕が残る。	外面はにぶい黄橙色。内面は褐灰色。外面底部付近と内面に黒斑が生じている。	5748	〃
図177	1			SK	515	掘り形埋土上部から出土。	須恵器	坏蓋	天井部外面は回転篦ケズリ，口縁部及び内面は回転横ナデ調整。	褐灰色。	5962	89
〃	2			SK	515	掘り形埋土上部から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい赤褐色。	5961	〃
〃	3			SK	515	掘り形埋土下部から出土。	弥生土器	甕	外面及び外底面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい赤褐色。	5960	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図177	4			SK	521	掘り形上部のDZ-26-14区Ⅲ層から出土。	須恵器	短頸壺蓋	内外面ともに横ナデ調整。	灰色。	5948	89
〃	5			SK	521	掘り形上部のDZ-26-14区Ⅲ層から出土。	須恵器	坏	外底面は回転篦ケズリ，内面は回転横ナデ調整。	灰色。	5949	〃
〃	6			S K	529	床面に貼り付いた状態で出土。	弥生土器	壺	内面及び底部はナデ調整，胴部外面は器表面が荒れ調整不明。	外面はにぶい黄橙色。内面は黒褐色。外面の一部には黒斑が生じ，内面全体は黒変したまま。	5344	35
〃	7			S K	529	床面に貼り付いた状態で出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面の荒れにより，調整は不明。	外面は橙色。内面は黄灰色。器壁の芯部には黒化層が残る。	5343	〃
〃	8			SK	535	SC-44との重複部分から出土しており，SC-44に帰属する可能性もある。	弥生土器	壺	横ナデ調整。屈曲部の内面には棒状工具で粘土を接合・成形した痕跡が残る。	淡い明赤褐色。	5105	11
〃	9			SK	535	SC-44との重複部分から出土しており，SC-44に帰属する可能性もある。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	器表面は淡い明赤褐色。器壁の芯部には褐灰色の黒化層が残る。	5104	〃
〃	10	図版125	4	SK	535	掘り形北半部の埋土中から出土。	弥生土器	鉢	内外面ともに丁寧なナデ仕上げ。	器表面は淡い黒褐色であるが，器壁の芯部は明黄褐色。	5107	〃
〃	11	図版125	3	SK	535	掘り形南半部の埋土中から出土。	縄文土器	浅鉢	外面は条痕調整の後にナデ仕上げ。内面はミガキ調整と考えられるが，不確実。	にぶい赤褐色。	5106	〃
〃	12			SK	540	掘り形西半部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ，内面は指頭によるナデ調整。	橙色	5968	90
図179	1			SK	541	掘り形中部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	頸部外面は刷毛目調整，下半には横ナデ調整を追加。内面はナデ調整。絞り痕が残る。	黒褐色。	5730	75
〃	2	図版125	7	SK	541	掘り形中部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面はミガキ調整。	明褐色。	5729	〃
〃	3	図版126	1	SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整，頸部下部～胴部中位は刷毛目調整もしくは板ナデ。胴部下半はミガキ調整。内面は口縁部～胴上部をナデ調整，胴部中位を細密条線の工具痕が残る調整，下半を板ナデ調整の後に指頭によるナデ調整。	外面は明黄褐色。内面はにぶい黄褐色。外面には黒斑が生じている。	5715	74
〃	4	図版127	1	SK	541	掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。頸部外面は刷毛目調整，肩部は刷毛目調整の後にナデ調整。胴部中位は刷毛目調整の後にミガキ調整。内面は口縁部～胴部上半をナデ調整，胴部中位には板ナデ調整とケズリ調整が混在。	外面は浅黄橙色。内面は灰白色。	5716	〃
〃	5	図版128	3	SK	541	掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ仕上げ。わずかに平行条線のタタキ目が残る。内面はケズリ調整。底部付近はナデ調整。	外面は浅黄橙色。内面はにぶい黄橙色。器壁の芯部に灰色の黒化層が残る。	5717	75
〃	6			SC	33	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ仕上げ。わずかに平行条線のタタキ目が残る。内面はケズリ調整。底部付近はナデ調整。	外面は浅黄橙色。内面はにぶい黄橙色。外面には黒斑が生じる。器壁の芯部に灰色の黒化層が残る。	5718	〃
〃	7	図版128	1	SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。	にぶい黄橙色。内面下部に黒斑が生じる。口縁端部に煤が付着する。	5719	〃
〃	8	図版125	8	SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後に最大径以下に部分的にミガキ調整を加える。内面は刷毛目調整で，一部ナデ調整を追加。	明褐色。	5720	〃
図180	1	図版129	1	SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部上半は刷毛目調整，下半はミガキ調整。内面は胴部上半に刷毛目調整，下半にナデ調整を施す。二次的火熱を受け，胴下半部には点々と小さな剥離痕が見られる。	外面はにぶい黄橙色。内面は明褐色。	5721	74
〃	2	図版130	1	SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。外面は胴部上半に刷毛目調整，下半にナデ調整。内面は胴部上半に刷毛目調整，中位に刷毛目調整の後にナデ調整もしくはミガキ調整を加える。下半はケズリ調整の後にナデ調整。	外面はにぶい黄褐色。内面は橙色。外面には煤，内底部分にはコゲが付着。	5722	〃
〃	3	図版131	1	SK	541	土層観察用畦で掘り形中部～下部の埋土から出土。	弥生土器	甕	内外面ともにナデ調整を施す。胎土には金雲母やクサリ礫を含む。	橙色。外面には煤が付着する。	5732	75
〃	4	図版131	2	SK	541	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は器表面の荒れにより，調整は不明。内面はナデ調整。	外面は浅黄橙色。内面は橙色。	5731	〃
〃	5			SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整。内面はナデ調整を施す。	外面は橙色。内面は黒斑が全面に生じ，褐灰色。	5726	〃
〃	6			SK	541	掘り形上部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整。最終的に，底部付近からミガキを行っている。底面および内面はナデ調整。胎土は精製されており肌理細かい。	外面は橙色。内面はにぶい黄橙色。	5723	〃
〃	7	図版128	2	SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は器表面が荒れ調整不明。部分的に縦方向の工具痕が残る。内面はナデ調整。かなり強いナデのため粘土に撚れが生じている。	橙色。	5725	〃
〃	8			SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は間隔の広い刷毛目調整の後にナデ調整を部分的に施す。	にぶい橙色。	5724	〃
〃	9			SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面及び底部はナデ調整。	外面は明黄褐色。内面はにぶい黄褐色。	5727	〃
〃	10			SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。内底面には指頭痕が残る。	外面はにぶい黄橙色。内面は灰黄褐色。	5733	〃
〃	11			SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はケズリ調整の後に部分的にミガキ調整。内面は乱雑な刷毛目調整の後に部分的にミガキ調整を追加。底部付近はナデ調整。	外面は明褐色。内面は黒色。外面の底部付近，および内面は黒斑が生じる。	5728	〃
図183	1	図版131	3	SK	543	掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整。内面は器表面が荒れて，調整は不明。口縁内面には爪痕が点々と残されている。	橙色。外面全面に煤が付着。	5965	90
〃	2	図版131	5	SK	543	掘り形埋土から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整，内面も器表面が荒れ調整は不明。	橙色。	5967	〃
〃	3	図版131	4	SK	543	掘り形埋土から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面はケズリ調整。	にぶい赤褐色。外面には煤が付着。	5966	〃
図184	1			SK	547	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	口縁部周辺は横ナデ調整。頸部外面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	橙色。	5950	88

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図184	2	図版131	7	SK	547	掘り形東半部に当たるDT-23-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は横ナデ調整，内面は器表面が剥離し調整不明。	明赤褐色。	5954	88
〃	3	図版131	6	SK	547	掘り形西半部に当たるDU-23-21区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	外面は丁寧なナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	にぶい橙色。	5956	〃
〃	4			SK	547	掘り形東半部に当たるDT-23-25区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5957	〃
〃	5			SK	547	掘り形東半部に当たるDT-23-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕あるいは鉢	外面は器表面が荒れ，部分的に成形時の指頭圧痕が残るのみ。内面はケズリ調整。	明赤褐色。	5955	〃
〃	6			SK	547	掘り形東半部に当たるDT-23-25区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，脚台状の底部の内外には成形時の指頭痕跡が残る。	明赤褐色。外面は二次的火熱を受け赤変。	5959	〃
		図版132	1	SK	547	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は細密条線が残る擦過調整の後にミガキ調整。内面は擦過調整。	明赤褐色。	5951	〃
		図版132	2	SK	547	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整の後にミガキ調整，内面は擦過調整。	明赤褐色。	5952	〃
		図版132	3	SK	547	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面はミガキ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は黒色，内面は橙色。	5953	〃
図185	1	図版111	5	SK	553	掘り形最上部の埋土①・⑥層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5674	73
〃	2	図版111	6	SK	553	掘り形最上部の埋土①・⑥層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。頸部内面には成形時の指頭圧痕が残る。	外面は二次的な火熱を受け，明位赤褐色に変色。内面は橙色。	5673	〃
〃	3	図版112	1	SK	553	掘り形最上部の埋土①・⑥層から出土。	弥生土器	壺	口縁部内面は横ナデ調整。他は器表面が荒れ調整不明。	内外面ともに橙色。	5681	〃
〃	4	図版111	4	SK	553	掘り形最上部の埋土①・⑥層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	外面は橙色，内面は黒変したまま。	5682	〃
〃	5			SK	553	掘り形下部の埋土②・③層から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は篦状工具による擦過に近い強いナデ調整。内底面には成形時の指頭圧痕が残る。	橙色。外面には黒斑が生じている。	5670	〃
〃	6			SK	553	掘り形下部の埋土②・③層から出土。	弥生土器	壺または鉢	外面は刷毛目調整の後にナデ調整，内面はナデ調整。	内外面ともに明赤褐色。外底面には黒斑が生じている。	5676	〃
〃	7			SK	553	掘り形最上部の埋土①・⑥層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	5671	〃
図187	1	図版132	5	SX	40	DU-21-4区Ⅲ層中位で破片がかたまって出土。	弥生土器	壺	肩部外面は刷毛目調整の後にナデ調整。突帯の周辺は篦状工具で押引きしたようなナデ調整。内面はナデ調整。	外面は橙色。内面はにぶい橙色。	5657	72
〃	2	図版132	4	SX	40	DU-21-4区Ⅲ層中位で破片がかたまって出土。	弥生土器	壺	肩部外面はミガキ調整。突帯の周辺は篦状工具で押引きしたようなナデ調整。内面は，ナデ調整と考えられるが，器表面が荒れ判然としない。	外面はにぶい赤褐色，内面はにぶい橙色。	5666	〃
〃	3			SX	40	DU-21-4区Ⅲ層中位で破片がかたまって出土。	弥生土器	壺	外面は篦状工具で強くナデ上げた調整，内面はナデ調整。	外面はにぶい橙色，内面は橙色。	5656	〃
図189	1			SX	57	Ⅲ層中位から出土。	弥生土器	高坏	外面は横ナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は橙色，内面は浅黄橙色。	6440	159
〃	2			SX	58	Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は刷毛目調整の後にナデ調整。内面はナデ調整。	外面は橙色，内面は浅黄橙色。	6441	〃
〃	3			SX	58	Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	6442	〃
〃	4			SX	58	Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	外面は橙色。内面はにぶい黄橙色。器壁の芯部に黒化層が残る。	6443	〃
〃	5			SX	58	Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面はにぶい黄褐色。内面は褐灰色。	6444	〃
〃	6			SX	58	Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	浅黄橙色。内面は赤みが強い。器壁の芯部に黒化層が残る。	6445	〃
〃	7			SX	498	Ⅲ層下部で出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は褐色。内面は明褐色。	6446	〃
〃	8			SX	498	Ⅲ層下部で出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面はナデ調整。	外面は褐色。内面は橙色。	6447	〃
〃	9			SX	500	Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	外面は橙色。内面は褐灰色。	6449	〃
〃	10			SX	500	Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は橙色。内面は褐灰色。	6450	〃
〃	11			SX	500	Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	高坏	坏部外面は刷毛目調整の後にミガキ調整。脚部外面はミガキ調整。坏部内面は丁寧なナデ調整。脚部内面には絞り痕が残る。	明褐色。坏部外面に黒斑が生じている。	6448	〃
図191	1			SP	116	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	器表面はにぶい黄色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	6359	120
〃	2			SP	119	底面近くの埋土中から出土。	弥生土器	鉢？	内外面ともにミガキ調整。	明黄褐色。外面には黒斑が生じている。	6361	〃
〃	3			SP	119	底面近くの埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は，二次的火熱を受けて，器表面が荒れ調整不明。	外面は明赤褐色，内面は橙色。	6360	〃
〃	4			SP	129	土層観察用畦の掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	鉢	口縁部周辺は横ナデ調整。胴部外面は器表面が荒れ調整不明。内面には篦状工具によるナデ調整の痕跡が残る。	褐灰色。	6393	〃
〃	5			SP	129	土層観察用畦の掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	6394	〃
〃	6			SP	129	掘り形下部の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は刷毛目調整の後にナデ調整。	外面には橙色の化粧掛けを行う。胎はにぶい橙色。	6395	〃
〃	7			SP	129	底面に貼り付いた状態で出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面下半部には篦状工具によるナデ調整。	外面は橙色，内面は淡い灰褐色。	162	〃
〃	8	図版132	7	SP	148	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	6362	〃
〃	9	図版133	1	SP	157	掘り形上半の埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面を刷毛目調整した後に，口縁部周辺を横ナデ仕上げ。胎土には角閃石が混じる。	明赤褐色。	6364	〃
〃	10			SP	157	掘り形上半の埋土中から出土。	弥生土器	鉢	外面は篦状工具によるナデ調整。成形時の指頭痕が多く残る。	にぶい黄橙色。	6363	〃
〃	11			SP	164	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	6366	〃
〃	12			SP	164	立柱痕跡内から出土。	弥生土器	高坏	横ナデ調整で仕上げるが，脚内面に残された絞り痕の上に篦状工具のナデ調整の痕跡を観察できる。	橙色。脚端部周辺に黒斑が生じている。	6365	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図191	13	図版132	9	SP	174	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	暗褐色。	6367	120
〃	14			SP	198	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	外面は橙色，内面は灰褐色。	6380	〃
〃	15			SP	176	掘り形上半の埋土①層から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整，内面はナデ調整の後に強いケズリ調整。	にぶい黄橙色。	6368	〃
〃	16			SP	266	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい黄橙色。	6369	〃
〃	17			SP	224	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。	6392	〃
〃	18			SP	224	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	把手	内外面ともにナデ調整。	器表面は橙色。器壁の芯部には淡い黒褐色の黒変層が残る。	6391	〃
〃	19			SP	233	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	鉢	口縁端部は横ナデ調整。胴部外面は篦状工具による強いナデ調整，内面にケズリ調整。	黒褐色。	6378	〃
〃	20			SP	234	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整の後にナデ調整，内面は篦状工具による強いナデ調整。	橙色。	6388	〃
〃	21			SP	234	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	鉢	内外面ともに横ナデ調整。	明褐色。内面には黒斑が生じている。	6387	〃
〃	22			SP	235	掘り形上半の埋土中から出土。	弥生土器	不明	外面はナデ調整，内面はケズリ調整。	外面は橙色，内面は黒変したまま。	6379	〃
〃	23			SP	244	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。外面には煤付着。	6374	〃
〃	24			SP	248	掘り形上部のⅢ層下部から出土。	弥生土器	甕	外面はナデ調整，内底面には擦過調整の痕跡が残る。	橙色。	223	〃
図192	1	図版132	6	SP	135	掘り形上部のDT-21-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ調整。	にぶい橙色。	5686	76
〃	2			SP	135	掘り形上部のDT-21-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに荒れ，調整は不明。	明赤褐色。	5687	〃
図196	1			SP	272	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともにミガキ調整。脚端部は横ナデ調整。	橙色。	6384	120
〃	2	図版132	8	SP	273	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整，内面は篦状工具によるナデ調整。	器表面はにぶい褐色。器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。	6390	〃
〃	3			SP	273	掘り形埋土中から出土。	縄文土器	深鉢	刻目凸帯文土器。内外面ともナデ調整。	褐色	6389	〃
〃	4	図版133	4	SP	343	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	器台	受け部周辺は横ナデ調整。体部外面はナデ調整，内面には条線間の幅が広い刷毛目調整と考えられる調整痕が残る。	赤褐色。	6375	〃
〃	5			SP	325	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	胴部外面は篦状工具によるナデ調整，内面は指頭によるナデ調整。底部側面には成形時の指頭痕が残る。	橙色。	6376	〃
〃	6	図版133	2	SP	345	掘り形埋土中から出土。	縄文土器	浅鉢	口縁部外面は横ナデ調整，胴部外面はケズリ調整。内面は擦過調整。	褐灰色。	6373	〃
〃	7			SP	356	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	橙色。外面には煤付着。	6371	〃
〃	8			SP	356	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	不明	内外面ともナデ調整。	暗赤褐色。	6372	〃
〃	9			SP	368	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	鉢	内外面ともに横ナデ調整。	明赤褐色。	6382	〃
〃	10			SP	382	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	高坏	外面は刷毛目調整であるが，器表面が荒れ部分的にしか残っていない。内面はケズリ調整。脚端部周辺は横ナデ調整。	にぶい橙色。	6383	〃
〃	11			SP	476	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面は横ナデ調整，内面はナデ調整。	赤褐色。	6385	〃
〃	12			SP	471	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整。内底面には成形時の指頭痕跡が残る。	灰褐色。	6386	〃
〃	13			SP	391	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ調整，胴部上半は刷毛目調整痕。	橙色。	6377	〃
〃	14			SP	403	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	高坏	内外面ともにナデ調整。	赤褐色。	6381	〃
〃	15	図版133	3	SP	473	掘り形埋土中から出土。	弥生土器	甕	外面は幅5～6㎜の先端の丸い工具による強いナデ調整，内面は指頭によるナデ調整。	赤褐色。外面には煤付着。	6370	〃
図197	1					DT-22-3区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面はにぶい褐色。内面は浅黄橙色。	6411	160
〃	2					DY-21-5区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面には縦方向にナデ上げた細密条線状が残る。内面には頸部に絞り痕が残るが，大部分は器表面が荒れ調整不明。	にぶい黄橙色。	6419	〃
〃	3					DS-24-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は横ナデ調整，内面はミガキ調整。	外面は橙色。内面はにぶい褐色。	6416	〃
〃	4					DY-21-22区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	複合口縁部付近は横ナデ調整，頸部外面は刷毛目調整，内面は横ナデ調整。	橙色。	6412	〃
〃	5					DV-20-9区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに横方向のナデ調整。	橙色。	6415	〃
〃	6					Ⅲ層上部から出土。	弥生土器	壺	外面は横ナデ調整，内面は口縁部を横方向，以下は縦方向の刷毛目調整。	外面は橙色。内面はにぶい黄橙色。器壁の芯部に黒化層が残る。	6413	〃
〃	7					DX-21-16区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は横ナデ調整。	褐色。	6410	〃
〃	8					DY-21-10区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともに器表面が荒れ，外面の一部にミガキ調整の痕跡が残るのみ。	明褐色。	6418	〃
〃	9					DW-22-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面はミガキ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は浅黄橙色。内面はにぶい黄橙色。	6421	〃
〃	10	図版134	1			DW-20-23区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面はナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は褐色。内面は褐灰色。	6420	〃
〃	11					DT-21区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	内外面ともにナデ調整。特に外面は丁寧。	にぶい褐色。	6422	〃
〃	12					DS-20-25区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	高坏	外面は横方向のミガキ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面はにぶい黄橙色。内面は浅黄橙色。	6428	〃
〃	13					DZ-24-14区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	外面は縦方向，脚裾部周辺だけを横方向のミガキ調整。内面はナデ調整。脚部上半には絞り痕が残る。	明褐色。器壁の芯部に黒化層が残る。	6429	〃
〃	14					DU-21-17区及びDU-23-17区Ⅲ層から出土。	弥生土器	高坏	外面はミガキ調整，内面は横ナデ調整。	外面は橙色。内面はにぶい黄橙色。	6430	〃
〃	15					DU-22-10区及びDZ-22-15区Ⅲ層下部から出土。	弥生土器	高坏	口縁端部付近は刷毛目調整の後にナデ調整。坏部外面は刷毛目調整の後に部分的にナデ調整。内面は端部周辺を刷毛目調整後，部分的にナデ調整。坏部内面は刷毛目調整の後にミガキ調整。	暗褐色。	6431	〃
〃	16	図版134	3			DU-21-1区Ⅲ層から出土。	弥生土器	台付鉢	内外面ともにナデ調整。	褐色。	6423	〃
〃	17	図版134	5			DU-21-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	器台	外面は横ナデ調整，内面は幅広の条痕状の刷毛目調整の後にナデ調整。	外面は橙色。内面は浅黄橙色。	6417	〃

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整等	色調・付着物等		
図198	1	図版134	4			DV-20-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	器台	内外面ともにミガキ調整。	明褐色。端部には赤色顔料が部分的に残る。器壁の芯部に黒化層が残る。	6414	160
〃	2					DX-21-10区Ⅲ層から出土。	弥生土器	器台	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。ナデ調整か？	外面は黄橙色。内面は灰黄褐色。外面にごくわずかに赤彩の痕跡が残る。	6424	〃
〃	3					DT-20-20区Ⅲ層最下部から出土。	弥生土器	高坏？	指頭痕が残る。	にぶい黄褐色。	6425	〃
〃	4	図版134	6			DY-23-6区Ⅲ層から出土。	弥生土器	壺	外面は刷毛目調整，内面はナデ調整。	外面は灰黄褐色。内面はにぶい黄橙色。	6433	〃
〃	5					DV-20-14区及びDV-20-25区Ⅲ層から出土。	弥生土器	器台	外面は器表面が荒れ調整不明。内面はミガキ調整。	にぶい黄橙色。器壁の芯部に黒化層が残る。	6432	〃
〃	6					DX-21-24区Ⅲ層から出土。	縄文土器	深鉢	内外面ともにナデ調整。	外面は灰黄褐色。内面はにぶい黄橙色。	6408	〃
図199	1	図版134	2			DW-27-2区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は縦方向の刷毛目調整が施される。内面はナデ調整。	橙色。外面には煤が付着。	6399	〃
〃	2					DU-23-6区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに器表面が荒れ調整不明。	橙色。	6397	〃
〃	3					DX-21-10区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	外面は褐色。内面は明褐色。外面には煤が付着。	6400	〃
〃	4					DV-21-24区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	外面は灰褐色。内面は明褐色。	6402	〃
〃	5					DX-22-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	外面は灰褐色。内面は褐色。	6401	〃
〃	6					DX-20-20区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面は器表面が荒れ調整不明。	褐色。	6404	〃
〃	7					DW-22-24区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面はナデ調整。	褐色。	6406	〃
〃	8					DX-21-16区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整。	褐色。	6409	〃
〃	9					DV-21-21区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面はナデ調整。	褐色。	6405	〃
〃	10					DX-24-6区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面はナデ調整。	外面はにぶい褐色。内面は橙色。	6396	〃
〃	11					DV-20-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は器表面が荒れ調整不明。内面はナデ調整。	外面は褐色。内面はにぶい黄褐色。	6403	〃
〃	12					DZ-23-19区Ⅲ層から出土。	弥生土器	甕	外面は横ナデ調整，内面はナデ調整。	にぶい黄褐色。	6407	〃
図200	1					DY-26-7区Ⅲ層最下部から出土。	土師器	坏	外面は器表面が荒れ調整不明，内面は回転ナデ調整。	外面は灰白色。内面は橙色。	6439	〃
〃	2					Ⅲ層上面から出土。	白磁	碗	全面施釉される。	暗オリーブ灰色。胎は明青灰色。	6438	〃
〃	3					Ⅲ層上部から出土。	須恵器	壺	内外面ともに回転ナデ調整，内面胴部には同心円文の当て具痕が残る。	灰色。	6435	〃
〃	4					Ⅲ層上部から出土。	須恵器	坏身	外底面は回転篦ケズリ，他は回転ナデ調整。	灰色。	6434	〃
〃	5					DY-27-14区Ⅲ層下部から出土。	須恵器	甕	内外面ともに回転ナデ調整。外面の最大径部にはカキメ調整を追加。	灰色。	6436	〃
〃	6					DY-27-14区Ⅲ層下部から出土。	須恵器	甕	内外面ともに回転ナデ調整。	灰色。	6437	〃
〃	7					DW-21-4区Ⅲ層から出土。	土師器	高坏	外面は坏部を刷毛目調整，脚部を刷毛目調整の後にミガキ調整。内面は坏部をナデ調整，脚部下半をミガキ調整，上半には絞り痕が残る。	にぶい黄橙色。	6427	〃

表5　文京遺跡16次調査A区出土石器・石製品観察表

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	使用痕跡・重量ほか	利用岩種		
図7	1	図版137	10	SC	4	SP-171とSK-22の間の床面から若干浮いた位置で出土。	石器	打製石鏃	片面に自然面を残す。調整剥離はやや粗い。重量1.5g。	赤色頁岩。	6099	101
〃	2	図版141	3	SC	4	掘り形中央西よりで床面から若干浮いた状態で出土。	石器	磨石	上端部に擦痕が残る。重量104.5g。	砂岩。	6129	102
図14	1	図版137	3	SC	8	掘り形埋土から出土。	石器	石鏨	全面を磨く。折損しているため全体の形状は不明。残存重量7.6g。	黒色の塩基性岩。	6130	102
図21	1	図版135	3	SK	527	SC-25南西部の埋土中から出土。	石器	石庖丁	杏仁形磨製石庖丁。片刃。片面は自然面を利用。研磨は粗く，一部に剥離面を残す。重さ22.1g	緑色片岩。	6104	101
〃	2			SP	223	SC-25の柱穴SP-223の埋土中から出土。	石器	砥石	板状の亜円礫の三面を使用。主面は両面ともわずかに凹む。301.1g。	砂岩。	6135	102
〃	3	図版146	1	SC	25	東壁沿いに落ち込んだような状態で出土。	石器	敲石	方柱状の亜円礫の上下端部に敲打痕が残る。主面と上端部には不鮮明ながら擦痕が残る。重量526.9g。	砂岩。	6136	〃
〃	4			SP	234	SC-25を切るSP-234の礎石に転用。	石器	台石	重量11.9kg。	砂岩。	6137	〃
図25	1	図版140	1	SC	26	掘り形埋土から出土。	石器	砥石	四面を使用する。主面は両面とも中央がわずかに凹む。重量306.9g。	砂岩。	6138	102
図31	1	図版137	6	SC	32	掘り形埋土中から出土。	石器	打製石鏃	凹基式打製石鏃。先端部は欠損する。重量0.3g。	サヌカイト。	6105	101
〃	2	図版135	2	SC	32	掘り形東半部に当たるDV-23-2区Ⅲ層下半から出土。	石器	石庖丁	磨製石庖丁。重量30.3g。	緑色片岩。	1256	ミュージアム展示
〃	3	図版143	3	SC	32	掘り形の最上面から出土。	石器	敲石	扁平な礫の下端部に敲打痕が集中。重量121.7g。	砂岩。	6141	102
〃	4	図版143	4	SP	322	SC-32柱穴SP-322の埋土中から出土。	石器	敲石	円礫の下端と片側の側部に敲打痕が残る。重量159.9g。	砂岩。	6142	〃
図42	1	図版135	1	SC	33	SC-33上部土器群。	石器	石庖丁	穿孔途中の未成品。表面の研磨，刃部の研ぎ出しは終了している。重さ44.4g。	緑色片岩。	351	ミュージアム展示
〃	2	図版141	2	SC	33	床面から出土。	石器	磨石・敲石	円礫に擦痕・敲打痕が残る。重量130g。	砂岩。	6151	212
〃	3	図版147	1	SC	33	SC-33上部土器群。	石器	敲石	下端部に敲打痕，主面には擦痕が残る。重量167.7g。	砂岩。	6144	210
〃	4	図版143	5	SC	33	SC-33上部土器群。	石器	敲石	下端部に敲打痕が残る。重量121.3g。	砂岩。	6147	211
〃	5	図版146	4	SC	33	SC-33上部土器群。	石器	敲石	主面と下端部に敲打痕が残る。重量668.3g。	花崗岩。	6143	210
〃	6			SC	33	SC-33上部土器群。	石器	砥石	重量1028.6g。	砂岩。	6148	211
〃	7	図版138	2	SC	33	SC-33中央南よりに当たるDV-22-13区Ⅲ層中位から出土。	石器	打製石鏃	凸基式打製石鏃。重量2.1g。	サヌカイト。	1270	ミュージアム展示
図43	1	図版139	2	SC	33	SC-33上部土器群。	石器	砥石	礫の全面を使用。重量371.2g。	泥岩の一種か。	6146	103
〃	2			SC	33	SC-33上部土器群。	石器	敲石	側部に敲打痕が残る。重量2200g。	砂岩。	6145	〃
図44	1			SK	513	SC-33炉跡SK-513の埋土中から出土。	石器	台石	敲打痕が数か所に集中。重量4385g。		6149	103
図53	1	図版138	4	SC	39	掘り形下部の埋土②層から出土。	石器	磨製石鏃	凹基式磨製石鏃。刃部は鋭く研磨され，基部は面を持つ。重量2.0ｇ。	頁岩か。	246	ミュージアム展示
〃	2	図版139	5	SC	39	掘り形埋土上半部から出土。	石器	砥石	幅1～2㎜の溝状の短い擦痕が連続する。重量44.9g。	砂岩。	6154	103
〃	3	図版139	1	SC	39	掘り形下部の埋土②層から出土。	石器	砥石	四面を利用する。二面に幅3～4mmの溝状の筋が入る。重量166.6g。	砂岩。	6115	101
〃	4	図版139	4	SC	39	掘り形下部の埋土②層から出土。	石器	砥石	三面を使用する。いずれも中央が凹む。重量125.9g。	砂岩。	6103	〃
〃	5	図版144	4	SC	39	掘り形埋土上半部の埋土①層から出土。	石器	敲石	下端部に敲打痕が集中する。重量405.5g。	砂岩。	6155	103
〃	6			SC	39	掘り形下部の埋土②層から出土。	石器	砥石	三面を使用する。重量756.5g。	砂岩。	6153	〃
図75	1	図版147	4	SC	84	掘り形中央西よりのSP-434東端上部の埋土中位から出土。	石製品	指輪	外径20～21㎜，内径14～15㎜の環状。中央部が隆起し，その両側を擦り切って溝をつける。縁部はわずかに隆起する。内側はわずかに膨らむ。	滑石。	580	ミュージアム展示
図76	1			SC	84	掘り形北半部の埋土上半から出土。	石器	磨石	扁平な礫の端部に擦痕と敲打痕が残る。重量282g。	礫岩。	6167	104
〃	2			SC	84	埋土中ベルト中から出土。	石器	敲石	重量64.9g。	砂岩。	6168	〃
〃	3			SK	524	SC-84の炉跡SK-524の埋土中から出土。	石器	敲石	上下端部に敲打痕を確認。重量616.4g。	花崗岩。	6169	〃
〃	4			SC	84	掘り形南半部の埋土上半から出土。	石器	砥石	丸みを帯びた礫の側面部に幅約2cm単位で擦痕が残る。礫の中央部には敲打痕。側部には打ち欠き痕。重量1405g。	砂岩。	6166	〃
〃	5	図版138	3	SC	84	掘り形北西角近くに当たるDY-24-10区Ⅲ層下部から出土。	石器	磨製石鏃	凹基式磨製石鏃。先端部を欠損。重量1.7g。	珪質泥岩か。	1271	ミュージアム展示
図83	1			SC	98		石器	砥石	擦痕を確認。重量450.9g。	砂岩。	6171	104
〃	2			SC	99	掘り形の床面直上から出土。	石器	敲石	扁平な円礫の両主面，下端部に敲打痕が残る。重量1119.5g	花崗岩。	6172	〃
図87	1	図版141	1	SC	506	掘り形埋土から出土。	石器	砥石？	残存部でごくわずかに擦痕が残る。重量81.5g。	砂岩。	6173	105
〃	2	図版142	7	SC	506	掘り形埋土から出土。	石器	磨石	扁平な円礫の上下端部にわずかに擦痕が残る。重量182.2g。	花崗岩。	6174	〃
図92	1	図版137	7	SC	517	掘り形東半部の壁際から出土。	石器	打製石鏃	平基式打製石鏃の未成品。調整剥離段階。重量0.9g。	サヌカイト。	6108	101
〃	2	図版142	1	SK	522	掘り形埋土から出土。	石器	磨石	扁平な川原石に部分的に擦痕が残る。重量13.0g。	砂岩。	6182	105
〃	3			SK	522	掘り形埋土から出土。	石器	台石	重量3175g。	不明。	6183	〃
図100	1	図版142	5	SC	544	掘り形上部の埋土中から出土。	石器	磨石	一面に擦痕が残る。重量372g。	花崗岩。	6194	106
〃	2	図版144	1	SC	544	掘り形上部の埋土中から出土。	石器	敲石	直方体に近い礫の2面に敲打痕が残る。重量214.4g。	礫岩。	6190	〃
〃	3			SC	544	掘り形上部の埋土中から出土。	石器	敲石	扁平な円礫の下端部に敲打痕が残る。重量2155g。	礫岩。	6191	〃
〃	4			SC	544	掘り形下部の埋土中から出土。	石器	台石	重量2940g。	花崗岩。	6193	〃
〃	5			SC	544	掘り形上部の埋土中から出土。	石器	台石	扁平な方形の礫の主面に敲打による浅い凹みを確認。重量1066.9g。	砂岩。	6192	〃
図106	6	図版148	4	SB	549	SB-549の柱穴であるB区SP-443から出土。	石製品	有孔円盤	径3.5～3.65cm，厚さ4.5㎜。重量10.7ｇ。中央に径2㎜の小孔を片側から穿孔。	緑灰色滑石。	6100	115
図115	1	図版137	5	SD	16	溝底付近から出土。	石器	打製石鏃	凹基式打製石鏃。先端部を欠損。重量0.4g。	サヌカイト。	106	ミュージアム展示
〃	2	図版144	3	SD	29	溝底（SP-240付近）	石器	敲石	円礫の下端および側部に敲打痕が残る。また，上端部には敲打痕，擦痕が残る。重量189.9g。	砂岩。	6139	102
〃	3	図版137	1	SD	36	DY-21-8区掘り形埋土中から出土。	石器	柱状片刃石斧	断面形態が縦長の長方形となる。重量140.4g。	緑色片岩。	6107	101
〃	4			SD	36	中央部～南西部の埋土中から出土。	石器	敲石	扁平な礫の側縁に敲打痕が残る。重量598.3g。	砂岩。	6152	103
〃	5			SD	79		石器	凹石	重量298.2g。	砂岩。	6164	104
図134	1			SD	509		石器	砥石	重量261.9g。	砂岩。	6176	105

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	使用痕跡・重量ほか	利用岩種		
図134	2			SD	509		石器	砥石	厚みのある円礫の一部に擦痕が残る。重量1645g。	砂岩。	6175	105
〃	3	139	3	SD	512	DZ-26区北側　撹乱溝より南側	石器	砥石	二面を使用。重量19.1g。浅黄橙色を呈する。	砂岩。	6179	〃
〃	4			SD	512	埋土中から出土。	石器	敲石	主面には擦痕，側部に敲打痕が残る。重量357.2g。	砂岩。	6180	〃
図140	1			SK	1	Ⅲ層下部～掘り形上面で土器群とともに出土。	石器	凹石	風化が激しいが，敲打痕を確認。重量1496g。	花崗岩。	6128	102
図142	1	図版137	8	SK	2	Ⅲ層下部～埋土上半で土器と折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	石器	打製石鏃	凹基式打製石鏃。細部調整は雑で，未成品の可能性も残す。1.9g。	サヌカイト。	6102	101
〃	2	図版136	8	SK	2	Ⅲ層下部～埋土上半で土器と折り重なるように出土。北西側から一気に投げ込まれた状態。	石器	石庖丁か石斧？	両面ともに剥離しているが，研磨面が残る。重量8.7g。	緑色片岩。	6101	〃
図147	1	図版142	4	SK	11	掘り形上半部から出土。	石器	磨石	敲打痕や擦痕が確認できる。重量44.0ｇ。	砂岩。	6131	102
〃	2	図版145	5	SK	11	掘り形上半部から出土。	石器	敲石	主面と側部に敲打痕が残る。重量439.9g。	砂岩。	6132	〃
〃	3	図版142	2	SK	19	掘り形上半部から出土。	石器	磨石	扁平な円礫の両面と側縁に擦痕が残る。重量20.1g。	硬質砂岩。	6134	〃
〃	4			SK	19	掘り形の上半部で土器とかたまって出土。	石器	磨石	主面と片側の側部に擦痕が残る。重量129g。		6133	〃
〃	5	図版138	10	SK	30	掘り形埋土中から出土。	石器	磨石	上端部に摩耗痕が残る。重量23.1g。	礫岩。	6140	〃
〃	6	図版143	1	SK	49	掘り形上部のⅢ層下部から出土。	石器	磨石	一面にわずかに擦痕が確認できる。側縁に敲打痕と考えられる凹部が観察できる。重量108.9g。	花崗岩。	6156	103
〃	7	図版143	2	SK	49	掘り形上部のⅢ層下部から出土。	石器	磨石	断面三角形の礫の二面に擦痕が確認できる。重量92g。	花崗岩。	6157	〃
〃	8			SK	52	掘り形上部のⅢ層最下部から出土。	石器	敲石	二面に敲打痕が集中する。重量706.4g。	花崗岩。	6161	104
図163	1			SK	70	掘り形中位の埋土中から出土。	石器	台石？	砥石からの転用。残存する各面に擦痕が確認できる。重量1340g。	砂岩。	6163	104
〃	2	図版146	3	SK	70	掘り形中位の埋土中から出土。	石器	敲石	主面，下端部，側辺に敲打痕が残る。重量590g。	砂岩。	6162	〃
〃	3	図版145	3	SK	90	掘り形埋土上部から出土。	石器	敲石	下端部に敲打痕が残る。重量224.4g。	花崗岩。	6170	〃
〃	4	図版142	3	SK	515	掘り形埋土下部から出土。	石器	磨石	全面を丁寧に研磨。重量30.5g。	砂岩。	6181	105
〃	5	図版139	6	SK	82	掘り形検出面で出土。	石器	砥石	主面は摩耗。重量1360g。	花崗岩。	6165	104
図174	1	図版137	9	SK	511		石器	打製石鏃	平基式打製石鏃。重量0.9g。	サヌカイト。	6106	101
〃	2	図版137	11	SK	511	埋土中から出土。	石器	打製石鏃	打製石鏃の調整剥離段階の未成品。重量5.1g。	赤色頁岩。	6109	〃
〃	3	図版145	4	SK	511		石器	敲石	下端部に敲打痕が残る。重量255.2g。	花崗岩。	6177	105
〃	4			SK	511		石器	石器素材	下端部に敲打痕が残る。重量900g。	礫岩の一種。	6178	〃
図181	1	図版145	2	SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	石器	敲石	扁平な礫の主面と下端部に敲打痕が残る。重量290.3g。	砂岩。	6188	106
〃	2	図版142	6	SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	石器	磨石	円礫の主面に擦痕を確認。重量402.6g。	花崗岩。	6187	〃
〃	3			SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	石器	敲石	円礫の主面に敲打痕を確認。重量1250g。	花崗岩。	6186	〃
〃	4	図版146	2	SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	石器	敲石	円礫の主面に敲打痕を確認重量488.2g。	花崗岩。	6185	〃
図182	1			SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	石器	台石	扁平な礫の主面に敲打痕，反対面には擦痕が残り，煤も付着。重量12kg。	花崗岩。	6189	107
〃	2			SK	541	掘り形中部～下部の埋土中から出土。	石器	台石	主面に擦痕や敲打痕，側部にも敲打痕が残る。重量1585g。	砂岩。	6184	106
図186	1			SK	553	掘り形下部の埋土②・③層から出土。	石器	砥石？	上面と側面に擦痕を確認できたので，砥石と考えた。重量1080g。	花崗岩。	6160	104
〃	2			SK	553	掘り形下部の埋土②・③層から出土。	石器	台石？	花崗岩の扁平な礫を用いる。重量1160g。	花崗岩。	6158	〃
〃	3			SK	553	掘り形下部の埋土②・③層から出土。	石器	凹石	主面には片面に擦痕，反対面には敲打痕が残る。重量2030g。	砂岩。	6159	〃
図193	1			SP	154	掘り形上部のⅢ層下半から出土。	石器	台石	擦痕と敲打痕が確認できる。重量15kg。礎石に転用。	花崗岩。	6195	107
図194	1	図版137	13	SP	155	掘り形埋土中から出土。	石器	打製石鏃	平基式打製石鏃の調整剥離段階の未成品。重量1.9g。	サヌカイト。	6110	101
〃	2	図版140	2	SP	212	掘り形埋土中から出土。	石器	砥石	二面を使用。重量344.2g。	硬質頁岩。	6196	108
図201	1	図版138	1			DU-21-4区Ⅲ層下部から出土。	石器	打製石鏃	凹基式打製石鏃。基辺は丸く湾曲して凹む。重量2.3g。	サヌカイト。	1268	ミュージアム展示
〃	2	図版137	12			DV-20-8区Ⅲ層から出土。	石器	打製石鏃	凹基式打製石鏃。基辺は丸く湾曲するが浅く，平基に近い。重量8.4g。	サヌカイト。	1269	〃
〃	3	図版138	8			DT-21-1区Ⅲ層から出土。	石器	スクレイパー	上下側縁に細かい調整を施すが，いずれも片面ずつ。重量8.5g。	赤色頁岩。	6200	101
〃	4	図版138	6			DX-26区Ⅲ層最下部から出土。	石器	スクレイパー	上下側縁は両面から打裂を行う。重量9.7g。	安山岩。	6211	〃
〃	5	図版138	5			DX-22-17区Ⅲ層下部から出土。	石器	石核	重量9.3g。姫島産黒曜石。	黒曜石。	6111	〃
〃	6	図版138	9			DY-29-20区Ⅲ層下部から出土。	石器	削片	重量0.8g。	サヌカイト。	6113	〃
〃	7	図版138	7			DZ-20-22区Ⅲ層下部から出土。	石器	削片	重量3.5g。	サヌカイト。	6114	〃
図202	1	図版136	1			DW-21-22区Ⅲ層下部から出土。	石器	石庖丁	磨製石庖丁未成品。外湾刃半月形？　片刃。研磨後に穿孔を行うが，未貫通。重量39.6g。	緑色片岩。	6122	101
〃	2	図版135	6			DU-20-13区Ⅲ層から出土。	石器	石庖丁	抉入りの磨製石庖丁。両刃。重量8.4g。	緑色片岩。	6119	〃
〃	3	図版135	5			DX-25-18区Ⅲ層から出土。	石器	石庖丁	杏仁形磨製石庖丁。片刃。重量39.6g。	結晶片岩か。	6123	〃
〃	4	図版135	4			DT-21-10区Ⅲ層から出土。	石器	石庖丁	抉り入り磨製石庖丁。片刃。重量16.0g。	緑色片岩。	6117	〃
〃	5	図版136	5			DV-24-10区Ⅲ層から出土。	石器	石庖丁	整形段階の未成品。両面ともに剥離を行うが，片面にはわずかに自然面が残る。重量57.8g。	緑色片岩。	6204	〃
〃	6	図版136	4			DS-20-9区Ⅲ層から出土。	石器	石庖丁	整形段階の未成品。重量51.6g。	緑色片岩。	6198	〃
〃	7	図版136	9			DY-21-16区Ⅲ層下部から出土。	石器	石庖丁	整形段階の未成品。刃部の形成をする前の段階。重量43.2g。	頁岩。	6210	〃
〃	8	図版136	6			DU-23-2区Ⅲ層から出土。	石器	石庖丁	整形段階の未成品。打裂時に折損か？　重量72.7g。	緑色片岩。	6203	〃
〃	9	図版136	2			DY-21-5区Ⅲ層から出土。	石器	石庖丁	整形段階の未成品。重量20.1g。	結晶片岩。	6212	〃
図203	1	図版136	3			DT-22-4区Ⅲ層から出土。	石器	不明石器	石庖丁転用品か。端部に抉りがあるが，穿孔周辺の折損部分を研磨したと考えられる。背部側にも刃部の研ぎ出しがある。重量7.4g。	緑色片岩。	6118	101

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	使用痕跡・重量ほか	利用岩種		
図203	2	図版136	7			DZ-29-20区Ⅲ層下部から出土。	石器	石庖丁か石斧？	片面は自然面を残す。重量16.5g。		6125	101
〃	3	図版136	10			DZ-29-19区Ⅲ層下部から出土。	石器	石器素材	扁平な割石の石器素材。重量37.4g。	緑色片岩。	6124	〃
〃	4	図版147	2			DU-21-9区Ⅲ層下部から出土。	石器	石器素材	扁平な河原石を半截。重量35.2g。	緑色片岩。	6120	〃
〃	5	図版136	12			DZ-27-19区Ⅲ層下部から出土。	石器	石器素材	扁平な河原石。重量147.2g。	緑色片岩。	6126	〃
〃	6	図版136	11			DV-25-8区Ⅲ層最下部から出土。	石器	石器素材	扁平な河原石が半截された素材。重量16.2g。	緑色片岩。	6121	〃
〃	7					DT-20-12区Ⅲ層下部から出土。	石器	石片	安山岩の石片。石斧等の側面が剥離した可能性もあるが，確定できない。重量3.4g。	安山岩	6199	108
〃	8	図版137	2			DS-23-13区Ⅲ層から出土。	石器	柱状片刃石斧	片側の側面の表面が薄く剥離。重量102.1g。	緑色片岩。	6112	101
〃	9	図版137	4			DX-20-17区Ⅲ層下部から出土。	石器	石錘？	両面に自然面を残すものの，片面はほぼ剥離している。片側端部付近に細い溝状の切り込みを入れている。重量12.3g。	緑色片岩。	6116	〃
〃	10	図版136	13			DV-25-10区Ⅲ層下部から出土。	石器	片刃石斧の破損品か。	非常に薄いが，片刃石斧の破損品か。各面に研磨の痕跡が確認できる。重量4.0g。	緑色片岩。	6209	〃
図204	1	図版147	3			DT-20区調査区南壁Ⅲ層から出土。	石器	敲石	円礫の主面，下端部および側部に敲打痕。重量738.9g。	砂岩。	6201	108
〃	2	図版145	1			DV-24-22区Ⅲ層最下部から出土。	石器	敲石	下端部に敲打痕。重量263.5g。	砂岩。	6206	〃
〃	3					DU-19-15区Ⅲ層から出土。	石器	敲石	上下端部に敲打痕。主面には擦痕が残る。		6202	〃
〃	4	図版144	2			DX-22-2区Ⅲ層下半から出土。	石器	敲石	各面に敲打痕が残る。一面では擦痕も確認。重量321.4g。	砂岩。	6213	〃
図205	1					DT-21-4区Ⅲ層下部から出土。	石器	凹石	円礫の主面と側部に敲打痕。側部には擦痕が確認できる。重量940.1g。	砂岩。	6197	〃
〃	2	図版140	3			DW-22-14区区Ⅲ層から出土。	石器	凹石	表裏両面中央に敲打による凹み。上下端部にも敲打痕。重量540.1ｇ。	砂岩。	5510	ミュージアム展示
図206	1					DU-20-16区Ⅲ層から出土。	石器	磨石	主面の一部に擦痕による凹みができる。重量1770g。	砂岩。	6205	108
〃	2	図版141	4			DV-25-10区Ⅲ層から出土。	石器	磨石	上下端部に擦痕。重量58.1g。	砂岩。	6208	〃
〃	3					DV-25-11区Ⅲ層から出土。	石器	台石	主面に敲打痕。重量767.2g。	砂岩。	6207	〃

表6　文京遺跡16次調査Ａ区出土土製品観察表

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	器面調整・焼成等	色調		
図8	1	図版148	1	SC	4	掘り形南壁中央の壁沿いで転落したような状態で出土。	土製品	紡錘車	径4.9～5.05cm，最大厚１cm。全面をナデ仕上げする。	明赤褐色。	117	ミュージアム展示
図68	1	図版148	2	SC	71	掘り形南壁沿い近くに当たるDZ-27-8区のⅢ層下部から出土。	土製品	紡錘車	半欠品。径3.4cm，最大厚7.5mm。周縁は幅2.5mmほど面取りされる。全面をナデ仕上げする。	黒褐色。	5506	〃
図153	1	図版148	5	SK	49	土層観察用ベルトの掘り形埋土から出土。	土製品	分銅形土製品	分銅形の土板に眉と鼻梁，弧状の目を表現する。側面から焼成前に小穴を穿孔する。上面の周縁部には半截竹管の「Ｃ」字形の文様をめぐらす。残存重量36.2ｇ。内外面ともに丁寧なナデ仕上げ。	胎はにぶい黄橙色。表面は赤みをおびた橙色。赤彩の痕跡を確認。	5508	〃
図153	2	図版148	6	SX	57	DT-20-21区Ⅲ層下部から出土。	土製品	分銅形土製品	周縁は緩やかな弧状を呈する。両面と側面に細く小さな半截竹管状の文様を施す。丁寧なナデ仕上げ。	明黄褐色。周縁には黒斑が生じ黒色を呈する。	5509	〃
図198	7	図版134	7			DU-22-19区Ⅲ層から出土。	土製品	分銅形土製品	周縁が内側に反り，径1mmほどの列点文を三重にめぐらせる。周縁面には「ハ」字形文を施文。	浅黄橙色。表面には部分的に暗赤褐色の肌理の細かな粘土を化粧掛け。	6426	160
図207	1	図版148	3			DY-21-14区Ⅲ層下部から出土。	土製品	紡錘車	半分を欠く。復元径は4.6cm。器表面が荒れ調整は不明である。	にぶい黄橙色。	6127	101

表7　文京遺跡16次調査Ａ区出土鉄器観察表

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	遺物の観察				遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	形状的特徴ほか	重量		
図20	1			SC	25	掘り形埋土中から出土。	鉄器	鏃	有茎の柳葉形の鉄鏃。茎の横断面は矩形。鍛造品。重量9.3g。	9.3g。	1285	101
図176	1			SK	511	掘り形埋土中から出土。	鉄器	鏃	有茎の柳葉形の鉄鏃と考えられる。鍛造品。茎に巻きつけた樹皮が残る。	9.3g。	1326	〃
				SK	515	掘り形埋土下部から出土。	鉄器	鉄片	幅7～10mm，厚さ3mmの板状で，錆で膨れあがり塊状となっている。	8.3g。	2346	〃
図176	2					DT-22-25区Ⅲ層下部から出土。	鉄器	鏃	柳葉形の鉄鏃。先端部および基部を欠損。錆化による膨らみで中心が空洞となる。	3.1g。	3434	〃
〃	3					DY-31-10区Ⅲ層下部から出土。	鉄器	刀子	片関である。鍛造品。先端部および茎部を欠く。	16.5g。	4472	〃
						DZ-29-8区Ⅲ層下部から出土。	鉄器	鉄片	径4.5mm，長さ22mmの棒状の破片。	3.1g。	4439	〃
						DY-23-5区Ⅲ層下部から出土。	鉄器	鉄片	径4.5mm，長さ33mmの棒状の破片。	3.0g。	4304	〃
						DY-23-13区Ⅲ層から出土。	鉄器	鉄片	幅9～10mm，厚さ3mmの板状の鉄片。錆のため塊状となっている。	3.0g。	4302	〃
						DT-23-20区Ⅲ層から出土。	鉄器	鉄片	幅1.6～１．７cm，厚さ4～5mmの板状の破片。	19.7g。	4474	〃
						DY-21-5区Ⅲ層から出土。	鉄器	鉄片	径6mm，一端は6mm×3.5mmに成形された長さ4cmの棒状の破片。鉄鏃の可能性を残す。	5.4g。	1717	〃
						DS-21-5区Ⅲ層最下部から出土。	鉄滓		径1cmや径2.5cmの鉄滓塊。	7.1g。	4473	〃
						DV-25-14区Ⅲ層から出土。	鉄滓		1.5cm×3.0cmの鉄滓塊。	12.2g。	2861	〃
						DS-23-5区Ⅲ層から出土。	鉄滓		2cm×3cmの鉄滓塊。	2.3g。	4471	〃
						DS-27-5区Ⅲ層から出土。	鉄器					〃

表８　文京遺跡16次調査Ａ区出土装身具ほか観察表

挿図		写真図版		出土遺構		出土状況	観察所見（単位：㎜）						遺物登録番号	収納コンテナ
	No.		No.	種別	番号		種別	器種	直径	孔径	厚さ	色調		
図19	1	図版149	1	SK	527	SC-25の炉跡SK-527の埋土中から出土。	ガラス製品	小玉	2.9	1.1	2.3	紺	1289	ミュージアム展示
〃	2	〃	4	〃	〃	〃	〃	小玉	3.5	1.2	2.2	スカイブルー	1292	〃
〃	3	〃	2	〃	〃	SC-25の炉跡SK-527の埋土を水洗選別中に出土。	〃	小玉	2.8	1.0	1.9	紺	4483	〃
〃	4	〃	3	〃	〃	〃	〃	小玉	2.3	0.7	1.1	紺	4484	〃
〃	5	〃	5	〃	〃	〃	〃	小玉破片	−	−	−	スカイブルー	4508	101
〃	6	〃	6	〃	〃	〃	〃	小玉	2.7	1.07	1.2	紺	6128	〃
〃	7	〃	7	〃	〃	〃	〃	小玉	2.9	0.96	2.2	スカイブルー	6129	〃
〃	8	〃	8	〃	〃	〃	〃	小玉	3.6	0.76～1.2	2.23	スカイブルー	6130	〃
図45	1	図版149	11	SC	33	上部土器群の調査中に出土。	ガラス製品	小玉	5.4	1.6	3.0	紺	1297	ミュージアム展示
〃	2	〃	12	〃	〃	〃	〃	小玉	4.6	1.6	2.2	紺	1293	〃
〃	3	〃	13	〃	〃	〃	〃	小玉	4.7	1.4	1.8	紺	1294	〃
〃	4	〃	14	〃	〃	〃	〃	小玉	4.4	1.8	2.3	紺	1286	〃
〃	5	〃	15	〃	〃	〃	〃	小玉	4.2	1.4	2.4	紺	1312	〃
〃	6	〃	16	〃	〃	〃	〃	小玉	3.5	1.1	3.0	紺	1309	〃
〃	7	〃	17	〃	〃	上部土器群として採取した土壌の水洗選別中に出土。	〃	小玉	2.9	1.0	2.6	紺	4481	〃
〃	8	〃	18	〃	〃	〃	〃	小玉	(3.4)	−	2.25	紺	4488	101
〃	9	〃	19	〃	〃	〃	〃	小玉	2.6	0.9	1.8	紺	4507	〃
〃	10	〃	20	〃	〃	〃	〃	小玉	3.3	0.7～0.9	1.9	紺	1295	ミュージアム展示
〃	11	〃	21	〃	〃	上部土器群の調査中に出土。	〃	小玉	3.0	1.2	1.4	紺	4478	〃
〃	12	〃	22	〃	〃	上部土器群として採取した土壌の水洗選別中に出土。	〃	小玉	3.3	1.2	1.3	紺	4479	〃
〃	13	〃	23	〃	〃	〃	〃	小玉	3.1	1.5	1.3	紺	4482	〃
〃	14	〃	24	〃	〃	〃	〃	小玉	2.2	1.0	1.5	紺	4480	〃
〃	15	〃	25	〃	〃	〃	〃	小玉	1.8	0.8	1.3	紺	4506	101
〃	16	〃	26	〃	〃	〃	〃	小玉	1.6	0.5～0.7	1.0	紺	4502	〃
〃	17	〃	27	〃	〃	〃	〃	小玉	1.6	0.7	0.9	紺	4506	〃
〃	18	〃	28	〃	〃	〃	〃	小玉	(4.5)	−	2.6	紺	4489	〃
〃	19	〃	29	〃	〃	〃	〃	小玉	−	−	−	紺	4510	〃
〃	20	〃	30	〃	〃	〃	〃	小玉	−	−	−	紺	4503	〃
〃	21	〃	31	〃	〃	〃	〃	小玉	3.2	1.1	1.9	緑	4486	〃
〃	22	〃	32	〃	〃	上部土器群の調査中に出土。	〃	小玉	2.8	1.2	2.0	緑	1301	ミュージアム展示
〃	23	〃	33	〃	〃	〃	〃	小玉	3.6	1.35	2.7	スカイブルー	1296	〃
〃	24	〃	34	〃	〃	〃	〃	小玉	3.8	2.1	3.5	スカイブルー	1298	〃
〃	25	〃	35	〃	〃	〃	〃	小玉	4.1	1.1	3.8	スカイブルー	1290	101
〃	26	〃	36	〃	〃	上部土器群として採取した土壌の水洗選別中に出土。	〃	小玉	(3.0)	−	2.2	スカイブルー	4485	〃
〃	27	〃	37	〃	〃	〃	〃	小玉	2.5	1.0	4.0	スカイブルー	4501	〃
〃	28	図版150	1	〃	〃	上部土器群の調査中に出土。	〃	小玉	2.9	1.8	2.1	スカイブルー	1313	ミュージアム展示
〃	29	〃	2	〃	〃	〃	〃	小玉	3.1	1.4～1.8	2.3	スカイブルー	1311	〃
〃	30	〃	3	〃	〃	上部土器群として採取した土壌の水洗選別中に出土。	〃	小玉	2.9	1.2	1.8	スカイブルー	4475	〃
〃	31	〃	4	〃	〃	〃	〃	小玉	2.9	1.5	2.0	スカイブルー	4476	〃
〃	32	〃	5	〃	〃	上部土器群の調査中に出土。	〃	小玉	3.1	1.3	1.8	スカイブルー	1306	〃
〃	33	〃	6	〃	〃	〃	〃	小玉	2.9	1.3	2.1	スカイブルー	1310	〃
〃	34	〃	7	〃	〃	上部土器群として採取した土壌の水洗選別中に出土。	〃	小玉	2.6	1.4	1.5	スカイブルー	4477	〃
〃	35	〃	8	〃	〃	上部土器群の調査中に出土。	〃	小玉	2.9	1.6	2.3	スカイブルー	1299	〃
〃	36	〃	9	〃	〃	〃	〃	小玉	2.8	1.2	1.8	スカイブルー	1308	〃
〃	37	〃	10	〃	〃	〃	〃	小玉	2.8	1.3	2.4	スカイブルー	1302	〃
〃	38	〃	11	〃	〃	〃	〃	小玉	2.7	1.4	2.2	スカイブルー	1303	〃
〃	39	〃	12	〃	〃	〃	〃	小玉	2.8	1.0	1.8	スカイブルー	1304	〃
〃	40	〃	13	〃	〃	〃	〃	小玉	2.7	1.0	1.7	スカイブルー	1305	〃
〃	41	〃	14	〃	〃	〃	〃	小玉	2.5	1.0	1.9	スカイブルー	1300	〃
〃	42	〃	15	〃	〃	〃	〃	小玉	2.5	0.7	2.0	緑？	1307	〃
〃	43	〃	16	〃	〃	上部土器群として採取した土壌の水洗選別中に出土。	〃	小玉	2.3	0.7	1.6	スカイブルー	4511	101
〃	44	〃	17	〃	〃	〃	〃	小玉破片	(2.6)	−	−	スカイブルー	4494	〃
〃	45	〃	18	〃	〃	〃	〃	小玉破片	−	−	−	スカイブルー	4500	〃
〃	46	〃	19	〃	〃	〃	〃	小玉破片	−	−	−	スカイブルー	1288	〃
〃	47	〃	20	〃	〃	〃	〃	小玉破片	(2.3)	−	−	スカイブルー	4487	〃
〃	48	〃	21	〃	〃	〃	〃	小玉破片	(3.0)	−	−	スカイブルー	4491	〃
〃	49	〃	22	〃	〃	〃	〃	小玉破片	(3.0)	−	−	スカイブルー	4496	〃
〃	50	〃	23	〃	〃	〃	〃	小玉破片	−	−	−	スカイブルー	4499	〃
〃	51	〃	24	〃	〃	〃	〃	小玉破片	(2.3)	−	−	スカイブルー	4504	〃
〃	52	〃	25	〃	〃	〃	〃	小玉破片	−	−	−	スカイブルー	4493	〃
〃	53	〃	26	〃	〃	〃	〃	小玉破片	−	−	−	スカイブルー	4495	〃
		〃	27	〃	〃	〃	ガラス破片		−	−	−	緑	4497	〃
図45	54	〃	28	〃	〃	〃	ガラス破片		−	−	−	透明	4490	〃
〃	55	〃	29	〃	〃	〃	瑪瑙製品	玉	(7.7)	−	−	オレンジ	1287	ミュージアム展示
〃	56	〃	30	〃	〃	〃	緑色凝灰岩製品	管玉	3.4	1.5	8.4	薄緑	637	〃
〃	57	〃	31	〃	〃	〃	〃	管玉	3.4	1.5	8.3	薄緑	1314	〃
		〃	32	〃	〃	〃	ガラス滓？		−	−	−		4492	101
				〃	〃		ガラス製品	小玉破片			2.2	スカイブルー	4498	〃
図141	1	図版149	9	SK	1	土器群を調査中に出土。	ガラス製品	小玉	3.4	2.0	2.4	スカイブルー	1291	〃
図141	2	〃	10	〃	〃	土器群を含む土壌を採取し水洗選別中に出土。	〃	小玉	−	−	−	スカイブルー	4509	〃
						DS-23-5区Ⅲ層から出土。	ガラス滓						4471	101